KAIZO

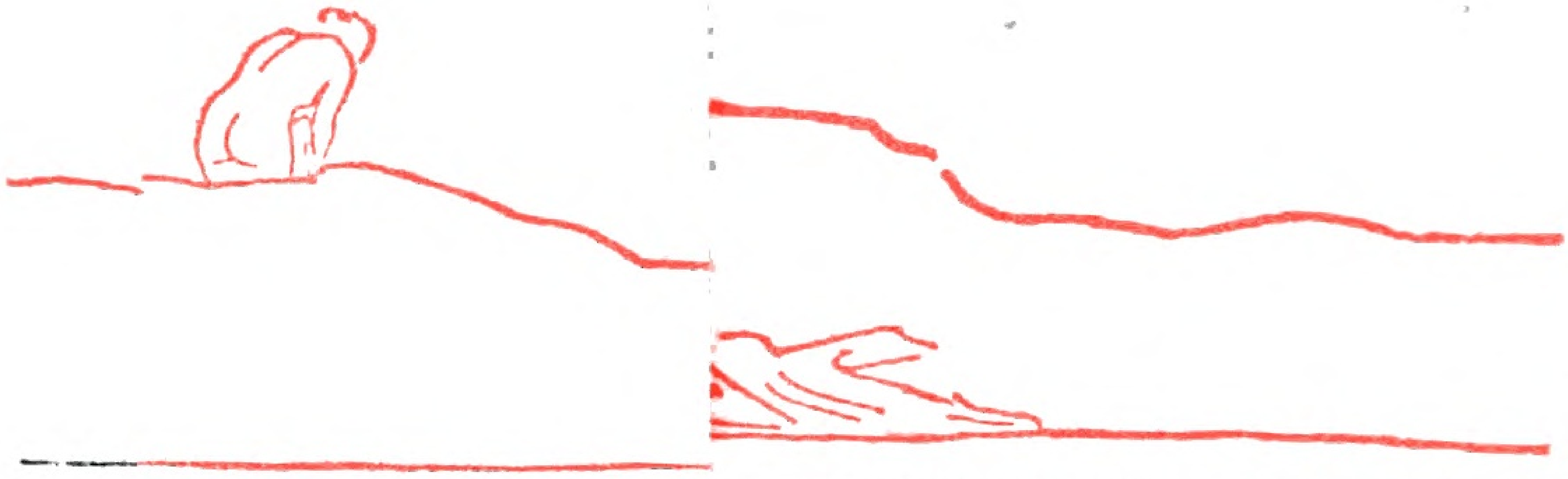
改造

五月號

1929



改造 五月號 目次



◯學生社會科學運動の最近相

創作



本社創立滿十周年記念會に於ける山本社長の挨拶

東洋の解放

對米、對支關係のすべての問題が今後に於ても——、否將來引きつづき我國に重要性あるは玆に論ずるまでもないことだが、と同時に印度、海峽植民地、マニラ等々の解放運動の齎らす結果についても十分の考慮を拂ふの必要がある。その結果をただ單に俟つと云ふばかりでなく東洋唯一の先覺としていかにその解放運動に對すればよいか、尙進んでいかに指標すべきかを考ふべきである。これ等の弱小民族がただいま如何なる地位におかれて、いかなる艱難と鬪つているかをきはめてそれに對應策を與へ、場合によりては彼等の爲めに一肌脫ぐこそ我々に與へられたる大任務ではあるまいか、それを剴切に指導し、助成し得るものは我國を措いて他にないのである。我々は勿論我國が當面しつつある內外政局の多難は知つている。我國のすべての解放運動の緒についていないことも知つている。しかし先覺者としての任務としてここに一つの大きな課題の加重さるることは榮擧ある當然とせねばならぬ。正義と仁俠を傳統として誇る我民族が世界人類のために喜んで考へねばならぬ事實だ。彼等が人間としての光りを見ることのできないことは自分一代だけでとどまらず、その子の時代も、孫の時代も民族的に、經濟的に、政治的に二重三重の鐵鎖でつながれ、苛斂誅求のかず〱を課せられる。眞に國に獨立なき人々ほど惻隱なものはない。こうした人々が我々と等しく文明や、文化の光りにひたり得る日を我々は思はねばならぬ。これ等の國の現存する個々の生活の悲慘や、樣相やは今後本誌の上で研究を積んで行きたいのであるが、我々はこれと同時にこうしたいくつもの國の壓迫された多數民族が社會的に、經濟的に、完全なる解放を期すべく努力したい。我々は今からこの大目標に向つて徐々と歩いて行くことの人類の至高の任務であると信ずるから。

左翼戰線は如何に再進出しつつあるか？



大山郁夫

一

三月三十一日の夜、大阪市中之島の中央公會堂で、全大阪無產團體協議會の主催の下に、故山本宣治追悼演說會が開かれた。豫てからその通知に接してゐた私は、それに參列するために前夜東京を立ち、途中京都で同志河上、奥村等の一行と落ち合つて、共々に大阪に赴いた。

その日は、生憎にも、午後になつてから雨がしと〳〵と降りだした。それに、大阪の同志たちから聞くと、演說會の宣傳も充分に行はれてゐなかつた事情があつたといふので、聽衆の集まりが思はしく行かないのではなからうかとの不安が、言はず語らずの間に我々の胸裡を往來した。ところが、それは單に一片の杞憂に過ぎなかつたことが

間もなく證明された。既に午後三時といふ頃からそろ〳〵、入場者が三々五々と來集し始めた。定刻の七時には、會場の隅々までも、略ぼ空席が眼につかなくなつた。それからも尙ほ入場者が陸續として詰めかけて來て、八時頃には最早、滿場立錐の餘地なき有様となつた。かくて聽衆の總數は約四千と註せられた。そして、會場係りの人たちが我々に確めたところに據れば、その大半は工場勞働者たちだ、といふことであつた。この最後の一事は、その日の演壇に立つ機會を與へられた我々にとつては、何にもまして本懷のことであつた。

だが、何といふすばらしい光景が、その夜の會場に展開したか！演壇の上から視線の屆く限り、階上階下、たゞ見る人の顔の海が一面に擴がつて、刻々律動的に浪打つてゐる。その一人々々の顔が、はち切れるやうに緊張して、異常の熱心に輝いてさへ見える。壇上の熱辯の進行中に、屢ゝ拍手の音が怒濤のやうに、凄まじきうなりを擧げて迫つて來る。時としては、悲痛極まる嗚咽の聲が漏れて來る。演說の間を縫ふやうにして、『注意！』『中止！』の蠻聲が臨監によつて發せられる毎に、『、、々々！』の絶叫が聽衆の間から爆發して、一トしきり鳴りを鎭めない。すべてが眞劍そのものだ。その間から、身を以て階級的忠誠に殉した故人に對する無限の感謝と追慕、彼に兇刃を加へた白色テラーに對する抑へ難き憤激と憎惡、階級的、、を誓ふ固き決心——かうした様々の強烈たる感情が一つに凝り固まつて、紅蓮の焔を擧げてあたり一面に烈々と燃えあがるかと疑はれるばかりであつた。

かうした印象的な場面を、我々は再び神戸でも見た。即ちその翌日同地のキリスト敎靑年會館に於て、神戸地方無産團體協議會の主催の下に同じく山本宣治追悼演說會が開かれて、私は再び同志河上、奥村等と共に、そこに出演したのであつた。たゞ殘念なことには、神戸での會場は比較的狹小で、約一千人の收容力をしか持たなかつたから、そこに雪崩を打つて集まつて來た大衆のうちで、入場が出來なかつたものが多數あつた。そして、それらの大衆の一部分は、暫らくの間は會場を護るかのやうにその周圍を徘徊して容易に立ち去らうとしなかつたので、私は二階の窓から首を突き出して、夜の街頭に向つて一場の挨拶を述べなければならなかつた。

大阪および神戸に於ける山本宣治追悼會に於て見られたかゝる光景は、私に様々のことを考へさせた。まづ第一に私は、我々の親愛なる同志山宣の死が、如何にわが國の無産階級の共通の關心事となつてゐるかを決定的に確めることが出來たことを、沁々と痛感した。しかも彼の死がわが國の無産階級の共通の關心事となつてゐるといふとは、同時にまた、それが全世界の無産階級の共通の關心事ともなつてゐる

といふことを意味するものであらねばならぬ。無產階級解放運動の潮が最早充分に、、、に鼓動を合はせつゝ進行してゐる今日、わが國の無產階級に向つてかくの如き一大衝撃を與へた事件は、直ちに、、、の無產階級の間にも同樣の反響を喚び起したことは明かだ。我々はやがて、その便りを聞く日を持つであらう。

第二に私は、大衆が現在、、、、、、、反動政治の支配下に於て、如何に心からの期待と敬愛と信賴とを、階級的戰士――更らに適切に言へば階級的英雄――の上に懸けてゐるかを、まざ〳〵と見ることが出來たやうに感じた。

大衆が死んだ山宣に對して示す追慕は、同時にまた、幾多の同樣に勇敢であつた彼の先行者たち――殊に『山宣』の名が呼ばれる時には昨秋、、で壯烈なる最後を遂げた『、、』の名が、大衆によつて最も切實に聯想されるに違ひないのだ――に對する追慕をも意味するものであり、更らに又それは、彼等の如き階級的英雄が、現在大衆によつて如何に、、、、、されてゐるかを如實に反映するものであらねばならぬ。否、それだけではない。山宣はじめ我々の陣營に於けるすべての犠牲者たちが流した血の――或ひは、、で受けた苦しみの――絶大なる無產階級的意義が大衆の前に語られるとき、大衆の一人々々が、如何に心の底から奮ひ起ち、如何にそれらの犠牲者たちが殘した巨大なる足跡を見て蹶起し、如何にそれらの犠牲者たちに、、、、、、、たるにふさはしく、、しようと、、するに至るかゞ、、、、、、、、、、、、、、、、、、取れるではないか！――

かういふ風に考への筋道を辿つてゐた私は、私の演說（大阪での）の順番が來て壇上に立つたとき、その進行中に於て一ト際聲を勵まして『一人の山宣が倒れて幾千幾萬の山宣が起るのだ』と叫ばざるを得なかつた。そして私は更らに、それに續けて次の言葉を附け足した。『私は今諸君に向つて、その活きた實例を一つ示すことが出來る。今しがたこの壇上から諸君に呼びかけた同志河上――彼が從來或ひは講壇の上から、或ひは著書論文を通じて、解放運動に測るべからざる貢獻をして來たことは、改めて言ふまでもないことだが、今や彼は山宣の死に直面して斷然最後の決心を固め、書齋から街頭に躍り出て、大衆と腕を組んで、、に至つたのである。』――聽衆は一齊に嵐の如き拍手を送つた。

まことに、犠牲者の血は解放運動の土壤を肥やす。我々はかつて、カール・リープクネヒトやローザ・ルクゼンブルグの壯烈なる死が、如何にドイツの無產階級運動の波を高めたかを見た。今や我々は、我等の山宣およびその多くの勇敢なる先行者たちを見舞つた同樣の悲劇が如何にわが國の、、、勞働者農民大衆の血を沸き立たしめてゐるかを

我々の眼前に見てゐる。聞け！『、、、したる白色テラーと戰つて、山宣ゝゝの如く生き、山宣ゝゝの如く死ね！』といふ悲痛なる絶叫は、わが國の無産階級の陣營から陣營へと反響されつゝあるではないか！

かくて、これらの犧牲者たちの貴き血汐は、その一滴も決して無益には流されなかつたのだ。それは今や、全國に亙つて無數の勞働者農民大衆の戰闘精神を、徐ゝ鋼鐵の如く堅く鍛ひあげつゝあるのだ。

二

大阪神戸に於ける山宣追悼演説會に關聯して我々が以上に述べた諸點は、既にそれに先き立つて、東京に於ける三月八日の山宣告別式および三月十五日の山宣・・勞農葬を通じて、我々が充分に觀察し認識したところと、完全に符合したものであつた。だが、さうしたことの外に、我々が特に大阪神戸に於ける山宣追悼演説會を通じて明瞭に看取した或る重要點が別にある。それは第一には、昨年末に於ける新新黨準備會の解散と共に全然地下に押し込められてしまつたやうに見えた左翼戰線が、一般世人には意外と見える程度に堅實に存續してゐて、しかも矢張り一般世人には意外と見える程度に急速に堂々と前面に躍進したことである。第二には、一切の右翼運動の根柢に横はつてゐる社會民主主義の本質が、我々にも意外に思はれた程度に、大衆によつて峻嚴に批判され正當に評價されてゐたことである。

これらの二つの要點の間に緊密なる一脈の相互的聯關が存してゐることは、別に改めて指摘するまでもないことではあり、且つまた本論文の進行中にも自然と明かになつて行くことでもあらうから、玆では特にそれに觸れないことにする。だが、それとは別に、玆では次の問題が提出されなければならぬ。それはかうだ。——何故に、これらの二つの要點が、特に大阪神戸に於ける山宣追悼演説會を通じて、しかく明瞭に看取されたのであらうか？

答。——それは、大阪神戸に於ける山宣追悼演説會が、當該各地方の無産團體協議會主催の名の下に開かれ、殊に少くとも大阪に於けるそれは名實共に左翼および右翼の勞農諸團體によつて構成（臨時的にではあるが）された全大阪無産團體協議會の主催の下に開かれたのであり、從つて事實上左右兩翼の共同參加の下に行はれたものだからである。

この説明は一見恰かも逆説的のやうであるが、しかしそれは事實をあるがまゝに語つたものに外ならないのだ。で、私は以下しばらく、大阪での山宣追悼演説會を中心にして、この問題に對して今少し立ち入つた解説を試みようと思ふ。

三

私はまづ、舊新黨準備會の解散の當時から最近に於ける大阪での山宣追悼演說會に至るまでの期間に於ける左翼戰線の動きを中心としての一般狀勢の槪觀から說き起さう。

おもふに、舊新黨準備會への解散の强行は、全左翼戰線の公然の活動を徹底的に禁遏しようとする支配階級の、、の表明であつた。もとより支配階級は、戰鬪的左翼の全陣營を一擧に根こそぎ絕滅したいのが山々であるには違ひないが、しかしさうしたことが、、、、、の下に於て、、、、、、になつて來てゐることは、彼等といへども十二分に知り拔いてゐることであり、從つて彼等は不承不精にもそれには最早見切りをつけてゐるのである。そこで彼等は、彼等の立場からの次善の方策として、まづ第一着に舊新黨準備會の解散および勞働者農民黨の結黨禁止を手始めに、全左翼戰線を嚴重に地下に追ひ込んで手も足も出ないやうにし、公然の場面へは何時かな一步も踏み出させまいとするやうな虫のいゝことを目論んだのである。

そして、支配階級のこの目的が、一時は或る程度の成功を以て達成されたかの觀があつたことも事實である。我々はもとより、衷心の確信に基き、舊新黨準備會の解散に際して、左翼戰線に於ける鬪爭實證の確立の事實を揚言し、更らにそれに附け加へて、勞働者農民黨創立大會に於て採決された十五項の行動綱領に卽する政治的自由獲得への新鬪爭がその鬪爭實證によつて一層强力に展開されて行くであらうことを、――從つてまた今後の或る時點に於て全運動の波が一層凄さましき勢を以て高まるであらうことを、――豫言的に宣言しておいたのであつた。と同時に我々は、全國の同志たちに向つては、『工場へ！農村へ！』の激勵的スローガンを叫ぶことをも忘れなかつた。だが、當時にあつては、我等のさうした一切の發言は、絕望を粉飾する一種の虛勢としてしか、各方面に於て受け取られなかつた。それは單にブルジョアジーの側からさう見做されただけではなくて、左・中・右の一聯の社會民主主義者たちの側からも矢張り同樣に觀測されたのであつた。それらの社會民主主義者たちは、彼等の合法主義の立場から、相も變らず左翼の小兒病を兎や角と言ひ立て、そのために左翼は現段階の認識を誤まつて遂に自己のために墓穴を掘るに至つたのだ、等々のことを公言することを憚らなかつた。

一體何故に、それらの社會民主主義者たちは、舊新黨準備會の解散後に、戰鬪的左翼の上に冷罵の鞭を加へることに於て、しかく勇敢（ー）であつたか？　それは無論、當時にあつては、戰鬪的左翼の精銳

に對する總沒らへ的な、、、、、、、、、、、、、等々が不斷に續行され、そのために左翼の全陣營が一時は荒涼落寞たる冬枯の景色に見舞はれてゐたからであつた。かゝる狀勢に直面しても、彼等は支配階級に向つては、一言も抗議がましきことをしなかつた。さうした抗議は、彼等の社會民主主義の立場からでも當然のことゝしてなし得られることであるにも拘らず、彼等は支配階級の鼻息の荒さに辟易して、夢にもそれには手を觸れまいとした。彼等の代議士團は、昨年の舊勞農黨解散の場合に於てと同樣に、今度もこの問題に關しては、議會に於て石の如き沈默を守つた。彼等は支配階級から放逐される『、、、、の幽靈』の百物語に顫るへあがつて、社會民主主義者としても當然なすべきことをすら、遂になし得なかつたのだ。その代りに彼等は、戰闘的左翼の陣營に向つては、彼等が享受してゐる言論の自由に任かせて、安價なる罵詈雜言を無制限に發射した。

だが、左翼戰線は、さうした合法主義者たちの豫想を見事に裏切つて、最早如何なる狀態の下に於ても決して、、するものではないことを自ら證明した。舊新黨準備會解散の直後に左翼戰線の上を襲うた多枯れの慘ましき景色も、さう永くは續かなかつた。やがてその轉換期が暗々裡に到來したことを告げ知らせる諸徵候が、そこかしこから次第に見え始めた。全國に散布して依然舊陣地を固守してゐる舊新黨準備會の勞農大衆は、昨年末の大打擊から案外に早く恢復して、政治的自由獲得勞農同盟の新しき旗の下に一層固く結束して、着々來るべき鬪爭への準備を整へ始めた。地方によつては、解散後一個月が經つたか經たなかつたかのうちに、既に早くも現實の日常鬪爭に突入したところが少なからずあつた。そしてさうした報告が到達する每に、我々の自信は益々强められて行つた。

四

そのうちに、大彈壓の中心地であつた東京にも、市會議員選擧期が廻ぐつて來て、戰闘的左翼に對して一の合法的活動の舞臺を提供した。かつての新黨準備會の——そして現在の政治的自由獲得勞農同盟の——陣營に於ては、人は選擧鬪爭同盟を臨時的に組織して、そこから八名の候補者を立て、そして大膽の鬪爭方針としては工場に於ける、、、を主位に、街頭におけるそれを從位に置くことに決定し、この方針の下に懸命の努力を以て戰ひ抜いた。かくて、そこでも左翼戰線は、この選擧戰の潮に乘つて堂々と表面に浮びあがり、その全幅の輪廓を、暫くぶりで再び大衆の歡呼聲裡に現はしたのであつた。

この市議戰に於ては、社會民衆黨が五名の、そして日本大衆黨が一名の當選者を出したのに對して、選擧鬪爭同盟からは唯一名の當選者

も出なかつた。だが、かゝる結果は、戰鬪的左翼が現在その下に置かれてゐるあらゆる不利な狀勢、殊に選擧に際してのあらゆる不利な狀勢——選擧法規および選擧上の慣行に於ける各種の障碍、左翼の候補者および運動員に向けられた例によつて例の如き彈壓、左翼支持の大衆への威嚇、等々その他無數——を考慮のうちに置くときには、當初から豫期し得られないことではなかつた。それにも拘らず、八名の候補者たちのうち、現在、、、、の一人として、、、の唐澤淸八君が、殆んど無準備の狀態で、しかも非常に遲駈けに深川區から立候補し、たゞ僅かに二回の演說會(その第一回は開會後數分間で開會の辭の進行中に中止解散、その第二回は開會後二三十分間で本文の筆者の演說中に中止解散)を擧げただけで、蓋を開けてみると二百五十の票數を獲得してゐたことの如きは、おそらく何人にも意外な好成績だつたといへよう。

だが、本來當選第一主義の上に立つてゐなかつた選擧鬪爭同盟の立場から見れば、今回の市議戰に於けるその選擧鬪爭は、際立つて優秀な成功を收めたものといへるのであつた。何よりも殊に、選擧鬪爭同盟が今回の市議戰を通じて行つた工場および街頭に於ける、、、、の眞劍な努力は、當落の問題を離れて、極めて豐富な收穫を以て酬ひられた。——尤も工場に於ける、、、は、まだ工場の內部に充分に根を張るに至つてゐなかつた舊勞農黨時代以來の一大缺陷が今日に至るまで尙ほ全然揚棄されたといへる狀態になつてゐないところから、今回も決して充分滿足といへる程度・範圍には遂行され得なかつたが、しかしそれが行はれた限りに於ては、非常に良好な効果を擧げた。——更らに選擧鬪爭同盟の指導下に持たれた各演說會は、殆んど例外なく拔群の成績を擧げ、その動員された聽衆の數に於て、その燃ゆるが如き會場內の氣勢に於て、ブル諸政黨の演說會は言ふに及はず、社民黨や大衆黨の演說會の如きも、斷然その足許に及びもつかなかつた。

かうしたあらゆる場面での言論を通じて、さきに勞働者農民黨の創立大會に於て採決された歷史的な十五項の行動綱領に卽する樣々の鬪爭スローガンが投げ與へられ、それによつて、現在の金融寡頭政治の反動的支配への抗爭を代表する政治的自由獲得鬪爭の意義が餘すところなく闡明された。もとより、かうしたことのすべては、小市民層の多數に對しては、或ひは演說會場での興奮以外には別に大して永續的な効果を與へ得なかつたかも知れないが、その代りにそれは、來聽の勞働者大衆の腦裡には、社會民主主義者たちの合法主義を一蹴して起つた戰鬪的左翼のみが眞に、、、、の、、に、して、、に、ひ得る、、の、、でもあり、また現實に、つてゐる、、の、、でもあることを、、、に、、し、そしてかくすることによつて、彼等の熱烈なる鬪

心、および支持をして毅然として戰鬪的左翼の陣營に向はしめた。しかも、かゝる影響の下に來つたものは、他黨の大衆の中にも相當の多數に上るものがあつたであらうことが、有理に推測される。今回の東京の市議戰を通じて左翼戰線が一擧に堂々とその實體を著るしく前面に押し出すことに成功したのは、さうした一切の大衆の關心および支持の急激なる昂進に負うたことも、決して少くはなかつたであらう。

本文執筆の當時には、市町村會議選擧が、殆んど全國的に開始されようとしてゐる。地方によつては、既に開始されてゐるところもある。全國各地方の勞農同盟の陣營に據る戰鬪的勞農大衆は、東京の市議戰に臨んだ選擧鬪爭同盟と根本的に同じき組織形態と活動方針とを提げて、打つて出ようとしてゐる。既に打つて出てゐるところもある。一二の地方からは、捷報が既に我々の手元に送られてさへゐる。だが、大體上に於ては、當落の如何に拘はらず、東京に於けるそれと略ゝ同樣の効果が、各地方の勞農同盟の陣營に於ても收められるであらう。即ち、この全國的に行はれる市町村議員選擧を通じて、左翼戰線は一擧に眼ざましき新躍進を遂げることになるであらうし、更らにそれを機として、嘗つてありし日の勞農黨時代以來の潑溂たる日常鬪爭の分野が再開されるばかりでなく、層一層擴大されて行くことにもなるであらう。

かうした諸般の事實に附け加へて、我々はまた、三月初旬に於て大阪で開催された全國農民組合大會の狀況をも一顧しなければならぬ。この大會に於て全農組合内の意識の最も尖鋭化してゐる左翼戰鬪的分子が斷然指導權を獲得し行使したことは、よし或る意味に於て別個の方面に起つた事象だと言へるにもせよ、それも根本に於ては矢張り、左翼戰線の堂々たる再進出といふ大きな趨勢との聯關に於て觀されなければならないことである。

それに直ぐ引續いて、同志山本宣治の暗殺事件が起つた。それは單に全左翼線戰に向つてのみならず、全勞農大衆に向つて、絕大なるショックを與へた。驚愕は忽ち憤激に變はり、追慕感情は自然的に鬪爭精神に高潮して行つた。『白色テラー』に對する絕體絕命の、、によつて山宣を活かせ！』かうした叫びが、全左翼戰線を潑溂と生動させる新たな根本的契機となつた。かくてその反響が、全勞農大衆の間に普遍的に喚び起された。東京に於ける告別式および勞農葬、京都に於ける同じく勞農葬、次いで大阪神戸に於ける追悼演說會。かうした一聯の記念的場面に於て、ありし日の山本宣治を同志とし戰友として互に腕を組んで鬪爭してゐた戰鬪的左翼大衆は、全勞農大衆の各陣營の大衆からの熱誠をこめた支持・聲援・激勵を受けつゝ、無限の悲痛裡に、、、、、、、階級的、、を、、せしめたのだ。かくして物凄くも表明

された闘争精神は、今後の左翼運動を一層强力に促進する一大拍車となるであらうし、又さうならしめねばならぬ。それは、山宣はじめ幾多の犠牲者たちの死を無意義に終らしめないためにも、絶對に必要である。だが私は玆では差し當つて特に、過去數個月間に亘つて左翼戰線の上に掩ひ冠ぶさつてゐた雲霧がこの機會に一擧に拂ひ退けられ、牢乎として屹立してゐた闘争實體がその下から、如何にその堂々たる輪廓を再び大衆の歡呼聲裡に露はしたかの一點を强調しようと企圖したのである。――大阪での山宣追悼演說會に臨んで、私が特に强き印象を受けたのはその一事であつた。

五

上に述べたことゝ關聯して、今一つ、大阪での山宣追悼演說會に參列したすべての人々の注意を異常に强く牽いたことは、そこで社會民主主義の本質が大衆によつて驚くべき聰明さを以て批判され、驚くべき率直さを以て評價されたことであつた。そこでは社會民主主義排擊の言論に對する潮の如き共鳴の聲と、社會民主主義的の言論に對する鼎を沸かす如き批難の聲とが、あまりにも顯著な對照を示した。その夜の演壇に立つた社會民主主義グループの人々の名を玆で一々擧げる必要はないが、彼等を全體として見て、滿場の聽衆の彼等の演說に對する態度から、さういふ結論が無條件的に導き出されたのだ。少くとも私自身が觀察し得た限り、社會民主主義政黨の、或ひは改良主義組合の、幹部諸君の登壇は、如何に贔負眼に見ても、大衆によつて極度の冷淡さを以て迎へられ、そして彼等の演說は、或ひは無氣味の沈默を以て聞き流され、或ひは反感の罵聲を以て酬ひられ、囂々喧々の彌次聲裡に完全に葬り去られた。かくて、嚴肅悲壯を極めたこの記念的場面に於て、殊に大衆の闘争精神がまさに最高潮に昇りつめてゐたこの階級的集會に於て、社會民主主義的指導者たちの面目失墜の狀況は、轉た慘憺たるものがあつた。だが私は、今その詳細なる記述を避けよう。

前にも一言した通りに、この追悼演說會は、全大阪無產團體協議會の主催の下に、名實共に左右兩翼所屬の諸團體――おそらく中間派乃至中立の諸團體も加へられて――の共同參加の基礎の上に開かれたものであつた。從つてそこには、社會民主主義政黨および改良主義組合の幹部諸君の指導下の大衆も非常な多勢に於て聽衆席を占めてゐた譯であつた。それにも拘らず、そこに出演した限りのそれらの幹部諸君は、あゝした慘じめな姿をあの晴れの壇上に晒らさなければならなかつたのだ。それは何故であつたか? それは、それらの社會民主主義的幹部諸君が、少くともあの場面では、彼等自身が率ゐてゐる――縱

し形式上にもせよ――大衆の支持應援からさへも引き離されてゐたためではなかつたか？

この意義深き事實は、實際さまぐ\の重要な示唆を我々に與へた。殊に我々はその中から、社會民主主義に鋭く對立する戰鬪的左翼の勢力と、社會民主主義的政黨・組合幹部の指導下にある右翼および中間派の諸勢力との間の交渉もしくは離合集散關係の將來の可能的な移動の方向に關して、非常に示唆に富む實物教訓を學び取つたことを感じた。別言すれば、我々は右の事實を通じて、過去二個年以上にも亘つて極めてジグザグな發展の徑路を辿つて來た所謂戰鬪的階級戰線統一問題に對する解決の鍵を現實的に見出したやうに感じた。とにかく私は、さうした前提を考慮の基底に置いて、以下の論述を進めよう。

私は今しがた、大阪での山宣追悼演説會が左から右までの諸團體を包含した無產團體協議會の主催の下に開かれたにも拘らず、そこに出演した限りの社會民主主義的幹部諸君が大味噌をつけた趣旨を言つた。それは一面から見れば、まさにその通りであつた。だが、他の一面から見れば、その追悼演説會がさうした無產團體協議會の主催の下に開かれたのだからこそ、彼等がさうした窮地に陥らねばならなかつたのだ、とのやうに言ふこともまた、我々から見れば同樣に正しいのだ。考へても見よ！　あの追悼演説會がさういふ意味での共同主催の演説會であつたればこそ、それに共同に參加した左右兩翼のそれぐ\の立場からなされた主張が、共通の主題に關し、同時に同一の場面で、しかも無產階級の各陣營から動員されて來た數千の大衆の審判の前に於て、兩々火花を散らして鬪はされることが出來た譯ではないか！　そして、さうした場合には、戰鬪的左翼の立場から正直になされた主張こそが、鬪爭精神の昂揚狀態に見出される勞農大衆から必ず無條件的に共鳴されることを誤らないといふことは、我々にとつては餘りにも自明の事になつて來てゐることなのだ。殊に今日、眼前に切迫してゐる、、、、、の、、が、、、、、、を激化しつゝある狀勢の下に於て、我々のその確信は、日々我々の實踐を通じて益々強められて行くばかりなのである。

この意味に於て、我々が年來の宿題である例の戰鬪的階級戰線統一の問題の解決への努力に於て、我々が社會民主主義に鋭く對立する我我の左翼的立場――それは現狀勢下に於ては眞の無產階級的立場である――を緩和したり、ごまかしたり、讓步したりする必要は毛頭ないと斷言し得られるのだ。現在に於て大衆は、四圍の形勢から來る壓迫の下に、益々階級意識を尖銳化し、益々鬪爭的になる必然的傾向の下におかれてゐる。さうした大衆を最近著るしく進轉した戰鬪的階級戰線統一の渦中に驅り立てるためには、一切の社會民主主義者たちのこ

の問題に對する指導的發言權を粉碎しつくしてしまふことが、何よりの喫緊の急務だ。かつて無産階級の陣營に於て勞農政黨合同問題が紛糾した際に當つて、我々は『社會民主主義に對する批判の自由』をその問題に對する我々の態度の基準として規定した。當時、左・中・右の一聯の社會民主主義者たちは、そのことを柄に取つて一齊にいきり立ち、我々の陣營の上に『階級戰線の攪亂者』のレッテルを貼り附けたものだ。そんなことも、だが、今は一切昔話となつた。僅かの間に、あらゆる方面の情勢が、驚くべきテンポを以て進轉した。そして今や、誰れが果たして階級戰線の眞の攪亂者であるかは、殆んど何人にも問題にならないほど明かになつて來た。それに、大衆をしてその點に向つて明かに眼を見開かしめる契機となる顯著なる事件が、あとからあとからと起つて來るといつたやうな險惡な趨勢が出現するやうにさへなつた。我等の同志山本宣治の暗殺の如きも、さうした事件のうち、近頃に見られた最大なものであつた。從つて、あの追悼演說會に於て、戰鬪的左翼の立場と社會民主主義の立場とが、大衆の面前に於て、あゝした鋭き對立を見せたのも、決して偶然でなかつたのだ。そして我々は、そこで大衆が如何なる審判を下したかをも見た。

六

更らに溯つて考へると、あの追悼演說會があゝした左右兩翼諸團體の共同參加の下に持たれたといふことが既に、全勞農大衆一般が、少くとも當面の山宣暗殺事件の關する限りに於て、戰鬪的左翼の立場の、、、を極めて明確に把握した事實を反映してゐるものであらねばならぬ。從來、左翼の陣營から右翼或ひは中間派の陣營に向つて始終なされて來た例の共同鬪爭の提議に對しては、それらの陣營の指導者たちは常に斷乎たる拒絕的態度を取つて來たものだ。ところが今回の左翼および右翼の共同追悼演說會の計畫は、少くとも表面上は、何等さうした支障にも出會はず、極めて自然なことのやうに順調に進められ、そしてあゝした大成功を以て遂行されたのだ。それといふのも畢竟は、右翼や中間派の陣營の指導者たちが、今度といふ今度は何時になく素直に讓步的もしくは調和的態度を取つたからであるに違ひない。だが、それにすると、彼等のさうした讓步的もしくは調和的態度は、一體どこから出て來たのであるか？　それは結局、彼等自身が率ゐてゐる大衆からの不可抗的な壓力によつて促進されたものでなくて何であるか！

だが、右翼および中間派諸團體の大衆が、さういふ風に、下からの壓力を彼等の指導部に置かれてある幹部に反應せしめたのは、それはまた一體如何なる原因から來たものであるか？　この問ひに對してま

づ第一著に與へられる答へは、『それは、一個の左翼闘士山本宣治の死が、深刻にも全勞働者農民大衆の共通の關心事となつたといふ眼前の嚴事實に關聯してゐたのだ』といふことであらねばならぬ。

ところで、一個の左翼闘士山本宣治の死がそれほども深刻に、全勞働者農民大衆の共通の關心事となつたといふことは、突き詰めていへば、それらの勞働者農民大衆が、彼の死を通じて、戰闘的左翼の立場の、、、に印象づけられた、といふことを意味するものでなくて何であるか！　彼れ山本宣治は、生前どこまでも忠實に、その戰闘的左翼の立場を固守し遂に最後の瞬間に、そのために白色テラーの兇刄に斃れたのだ。で、その訃報が一朝全國に傳へられるや否や、それらの勞働者農民大衆——平常は社會民主主義的指導幹部の欺瞞の魔酔にかゝつてゐたものまでを含めて——は一齊に、遽然として彼の死の無産階級的意義に眼ざめ、そこから更らに彼をその無産階級的意義ある死に導いた戰闘的左翼の立場こそ、無産階級的に、、、、立場——換言すれば眞の意味に於ける無産階級的立場——であることに眼ざめたのであるのだ。

無論、それらの勞働者農民大衆の少くとも或る部分にとつては、彼等が明確な意識的推理によつてさういふ結論に到達したといふよりは、寧ろ、言はゞ彼等の『無産階級的本能』によつて朧氣ながらもさう感ぜしめられたといふ方が、より妥當であるかも知れない。が、いづれにしても結果は一つである。

戰闘的左翼の立場が無産階級的に、、、、立場——眞の意味に於ける無産階級的立場——であるといふことが一旦理解もしくは感得されるとき、それに鋭く對立する社會民主主義の立場が眞の意味に於ける無産階級的立場でないといふこともまた、同時に同程度に理解もしくは感得されるに至ることは、必然の理路である。（その効果が瞬間的であるか、永續的であるかは、よし別問題とするにしても。）

正確にさうした結果が、一個の左翼闘士山本宣治の死を通じて見られた。彼の暗殺の報は、青天の霹靂の如く、全勞働農民大衆の耳朶を打つた。しかもその事件は、あまりにも公然たる舞臺の上で起つた。かくして、彼の死の無産階級的意義は、右翼および中間派の陣營に於ける大衆の眼からも掩はれるに遑がなかつた。

七

『社會民主主義の主要なる役割は、今日では、帝國主義に對する闘爭において必要なるプロレタリアートの統一を破壊する點にある。資本に對するプロレタリアートの闘爭の統一戰線を分裂粉碎せしめることにより、社會民主主義は、勞働階級における帝國主義の主要

なる支持物となる。あらゆる種類の國際的社會民主主義——第二インターナショナルおよびその勞働組合支部たるアムステルダム國際勞働組合同盟——は、かくして、ブルジョア社會の豫備軍となり、勞働者階級の內部におけるその最も確實なる支持物となつてゐる。』

（第六回世界大會で決定されたコミンターンの綱領から。）

社會民主主義の本質は、國際的無產階級の公論壇上から、かく批判されてゐる。そして、その批判の言葉が、そのまゝ日本の社會民主主義の本質にも適用できることは、特に說明を必要としないことであらう。あらゆる場面でブルジョアジーと協商し取引することを恥とせず、公然と、、、、、を高唱し、支那國民政府支持を宣言し、『議會の神聖』の維持のためにブルジョア政黨と所謂普選擁護同盟に於て提携同行することをすら疾ましとしない、等々、までに成り下がつてゐる右翼社會民主主義者のグループはいふに及ばず、口に、、、言辭を唱へて戰鬪的勞働農民大衆にまで誘惑を持ち掛けながら、その實際行動に於ては、かの舊新黨準備會打ち壞し運動の陰謀の上に見られたやうな戰鬪的階級戰線統一の事實上の攪亂を企てることをすら憚らなかつた左翼社會民主主義者のグループに至るまで、『勞働者階級の內部に於けるブルジョアジーの諸利益の侍女』としての卑屈な役割を意識的に無意識的に演じてゐるものであることは、共に一つなのである。否、日本に於ては、左翼社會民主主義者のグループこそが、寧ろ右翼社會民主主義幹部以上に、その內面の醜狀を包み切れないやうな慘澹たる窮狀にあるのだ。たとへば、日本大衆黨の成立過程およびその後に於ける、、、、、、の指導者たちの醜態を見よ。

更らに第五十六議會に於ける社會民主主義議員たちが、ブルジョア諸政黨に對して取つた阿諛迎合とまでに見えた協調的態度は、それをブルジョア新聞を讀んで知つただけでも、まさに嘔吐を催すに足りる例の、、、氏の登壇中は春風駘蕩和氣靄々の情趣が滿場に漂つて、政友會の議員連さへ感に堪へない面持で傾聽してゐた、とのやうな記事さへ何新聞かで見當つた。かの舊新黨準備會の解散に怯え、我々の陣營から匆々逃げ出したことによつて、最も大切な瞬間に戰鬪的勞働者農民を裏切つた、、、の泰斗、、、、君の治安維持法改惡案に對する反對(?)の發言の如きは、無產階級の立場から見て沙汰の限りと評するより外に途のないものであつた。かうしたことを一々拾ひ立ててゐては切りがないが、彼等社會民主主義議員團中で最も大膽さうに見えた言動をした、、、君までが、田中外交を評して、帝國主義外交侵略主義外交と疑はれる虞れがあるといつたやうなごまかしを述べ立てゝ、田中外交の實質がさうしたものでないかのやうな、知れ切つた嘘を捏ッち上げたことだけを擧げれば、爾餘のことは推して知るべき

のみである。

我等の同志山宣の堂々たる階級的戰士としての態度は、それに對して、如何に鮮やかな對照を示してゐたか！　彼はまづ、『第五十六議會に際して』の一文（二月九日の『勞働農民新聞』に發表）に於て、自己の對議會態度を宣言した。その中に於て彼は、議會一般の本質を『勞農大衆の、、と、、と、、を合理化し合法化する支配階級の機關』として規定し、特に第五十六議會に關しては、それを『荒れ狂ふ白色テロルの合法化と、特に、、を、、んとする、、準備のための議會』として性質づけ、またその議會を運轉する技師であるところの政府員および代議士群に關しては、『田中大將から水谷君に至るまでの代議士諸君は、、、、の彈壓に賛成であり、、、の（資本家の）利益のために一致しようといふのだ』と喝破し、次に『勞働者農民無產市民諸君！』の呼びかけの下に、『私は如何なる場合にも勞働者農民の立場を離れることなく、、とは斷じて妥協すまい』との固き決心を語り、『また私に諸君が議會内の行動について要求する所があれば喜んでそれに服する』と誓ひ、更らに治安維持法律承諾案に關して、『本議會に於て治安維持法の改正案が上程される。これこそは勞農大衆の運動を根こそぎ締めつけようとする白色テラーの合法化だ。社會民主主義の諸君は、この法案に一應反對してゐる。だが、この法案の精神には全く贊成なのだ。たゞ××黨を社會民主主義者の手で成立させ叩き壞せと言ふのである』と述べ、最後に『今こそ工場農村に議會解散の一一、、、を組織し、諸君の利益を一厘たりとも伸長しないブルジョアの議會を解散し、ブルジョアの政府の打倒と勞働者農民の、、、のための大衆的鬪爭に全鬪爭を集中して戰つてこそ、治安維持法を粉碎し、、、、、、、の、、を撃破して、勞働者農民の利益を擁護することが出來るのだ』と高らかに絕叫した。社會民主主義議員たちが、これに一寸でも眼を觸れたら、いやしくも彼等が不具に近い鈍漢でない限りは、まさに氣死する騒ぎとなるであらう。

八

さうした堂々たる戰鬪的左翼の態度を提げて第五十六議會に臨んだ同志山宣は、だが、一二の小さな場合を除いての外は、とう〳〵本會議に於て發言さる機會を持つことができなかつた。彼は屢々私との二人の間の會話に於て、如何に社會民主主義議員たちとブル政黨の議員たちとの陰險なる共謀によつて、本會議に於ける發言の途が彼に全く阻止されたかを語つて、憤慨の感情を漏らした。その度毎に私は、より多くの氣魄を彼に期待しつゝ、樣々の要求を持ち出した。それにしても彼は、豫算分科會に於ては、あらゆる機會を摑んで、奮戰の限りを

つくした。殊に二月八日の豫算分科會に於ける彼の質問は、最もよく彼の沈勇を裏書したものであつた。それは、速記錄によれば、階級的闘士たちへの、、、、、、、、、、、、への酷烈なる、、、等々の諸問題を主題としたものであつた。その日の彼の質問は、外形は極めて溫和な措辭を以て組み立てられたものであるが、その內容は峻烈骨を刺し、敵の心膽を寒からしめるに充分なものであつた。不幸、或ひは當然、それはブル新聞によつて、完全に默殺された。

だが彼は或る時、治安維持法事後承諾案上程の日こそは、一場の反對演說のために、是が非でも本會議の演壇を戰ひ取らうとしてゐる決心を私に告げた。それは二月二十四日の夜のことであつた。私は彼と共に、本所區の或る小學校で、お互ひの同志の一市議候補者のために應援演說を終へ、歸途彼と一つの圓タクに乘つて、上野ステーションまで同行した。その別れ際に臨んで、彼は右の決心を私に語つた後、低聲であつたが調子に一般と力を籠めて、『咽喉を締められて聲か出なくなるまでやります』と言ひ放つた。『私が咽喉を締められずに演說を終へたら、それこそ私の慘膽たる失敗です。』から附け加へて彼は晴れやかに笑つた。私はたゞしッかと彼の手を握つて、二三の短い激勵の言葉を涙ながらに言ふより外に術を知らなかつた。

彼がかくの如く死を賭して戰ひ取らうと努力した發言の機會も、又々彼から奪はれて行つた。即ち治安維持法事後承諾案が上程された三月五日、前日大阪の全國農民組合大會に臨んだ彼は、長驅して東京に急ぎ歸つて登院した甲斐もなく、彼が豫て通告しておいた質問の順番が廻つて來ないうちちに質問打切りの動議が成立せしめられて、彼は遂にこの度も、この最惡の前衞、、法に對して、勞働者農民の深刻なる、、と、、とをブルジョア議會に爆發させることが出來なかつた。しかもその夜彼は、彼の悲壯な最期を遂げた。彼は第五十六議會に於て、眞の無產階級的立場から行動した唯一の代議士として最後まで勇敢に戰つたがために、遂に背後の大きな魔の手に操られた一兇漢の揮ふ毒刃の下に鮮血を流したのであつた。

我々の同志山宣の立場は、社會民主主義議員たちの立場に對しては、實質上かくの如き鋭き對立をなしてゐた。この意味に於て、第五十六議會に於ける彼の地位は完全に孤立化されてゐたものであつた。彼はそれを極めて明白に意識してゐたが、しかしそれがために毫も臆することがなかつた。彼れの死の直前、大阪で開かれた全國農民組合大會の第二日（三月四日）に於ける彼の祝辭演說中の次の一節は、その點を最も有力に證明する。曰く、『尖銳化する階級鬪爭の裡にあつて、合法主義の人々は、色々の口實を設けて退却する。、、君もその一人である。私は「卑怯もの、去らば去れ！　我等は、、、、！」と

言ひたい。また議會では八名の無産黨代議士が送られてゐるが、この議會では無産民衆を欺瞞してゐるにすぎぬ。……私は政獲同盟〔=政治的自由獲得勞農同盟〕選出の唯一の議員である。私は淋しくない。山本宣治は唯一人孤壘を守る。私は一人でも淋しくない。自分の背後には多數の同志が支持してゐてくれてゐるから。』

さうだ！　山本宣治は議會内で唯一人淋しく孤壘を守つてゐた。だが、『この議會では無産民衆を欺瞞して』ゐた社會民主主義者たちは、事實にしかく彼を孤獨の地位に立たせておきながらも、外見上は彼を『無産黨議員團』の一員として取扱ひ、自分等も彼と同一陣營内に居るやうに見せかけて、世間體を取繕つてゐた。だが、やがてその欺瞞が破れる最後の日は來た。彼等の面皮は剝がれた。彼等は幾ら山宣の死に對して萬斛の涙を流してみせても、最早追ッ附かなかつた。

我々が同志山宣の死からカール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルグの壯烈な最期を聯想しながら、靜に間近かの社會民主主義の陣營を眺めやる時、そのほとりにあの二人のドイツの階級的英雄を殺した張本人、エーベルト=シャイデマン=ノスケの黑き影が動いてゐるのを見ることが出來る樣に感じられる。否、それらの三位一體のドイツ社會民主主義者の影は、或ひはそこに差してゐないかも知れない。だがその代り、そこには、つい先き頃、我國の戰鬪的勞働者農民の意志を踏み附けにして、名乘る國際的裏切者、帝國主義の使役、ジユネーヴの國際勞働局のお目附役、アルベール・トーマを隨喜渴仰の涙を以て歡迎して權門から權門へと引ッ張り廻はした我國の『、、、、の、、、、』が、ブルジヨアジーの、、で、、したやうなその、、を傲然と構へ込んでゐるのが、遙に望見し得られるのだ。

やがて第二の、、、、、、、が、、、、を中心舞臺として勃發し、、、、、、、、、となつて浪立つであらう時、おゝ！　日本の社會民主主義者たちよ！　君たちはどの階級の陣營へ行かうとしてゐるのであるか？

九

上來の論旨を述べつくしてしまつた後でも、我々は尚ほ、社會民主主義諸黨および改良主義諸組合が、現在その日の出の勢ひを誇りがに示して立つてゐる事實を見失はうとしてゐるものではない。のみならず、我々は更らに、彼等の盛時は、これから先きも當分續くであらうとさへ、豫想してゐるのだ。或ひはまた、一般社會狀勢の進展の模樣によつては、彼等の勢力は今後しばらくは、一層著るしく伸張しないにも限らない。少くとも近き將來に期待し得られる左翼戰線の猛然たる盛り上がりは、それと共に益ゝ急速に進行する社會民主主義幹部の

指導下の諸勢力の増大といふ並行的現象を想定することなくしては考へられないことであらう。

今日、國家政治の上に於ては、一方、戰鬪的左翼の最尖端に地位を占めてゐるプロレタリアートの黨が支配階級によつて非合法的存在を强制され、全然地下に姿を沒入してゐる傍らに、他方、今こそとばかり時を得顏に囁いてゐる社會民主主義諸黨のうち、社會民主黨は四名の代議士を、日本大衆黨は二名の、勞農大衆黨は一名の代議士を、各各持つてゐる。これに反して、公然の舞臺の上に活躍するところの左翼戰線上の一鬪爭體である政治的自由獲得勞農同盟は、山本宣治の死によつて唯一名の代議士をすら失つてしまつた。

また、地方政治の方面では、――茲では唯單に最も新しいホヤホヤの事實だけを擧げることにするが――去る三月中東京で行はれた市議戰に於て、社民黨は五名の、大衆黨は一名の當選者を出したのに反し、政獲同盟は唯一名の當選者をも出さなかつた。但し他の地方からは、既に本文執筆中にも、政獲同盟の捷報や好望の通知が二三、私の手許に達してゐる。

更らにまた、社民黨の勢力下にあつて、チヤキチヤキの改良主義幹部に指導されてゐる多くの勞働組合は、最近數的に確かに増大してゐる。日本勞働同盟、海員組合などは、その最も典型的な多くの實例を提供する。この點に關聯して、さき程左翼の一論客は、次の如く述べてゐる。

『…顯著な一例は、總同盟の製鋼勞働組合である。即ち、所謂「產業民主主義」の機關としての團體交涉權、またそれに似寄りの制度によつて、一工場、一會社、または一產業全體に亘つて、勞働者が團結の自由を資本家から貰ひ、(自由に得るといふよりも、)「本工場は日本勞働總同盟製鋼組合員を從業員とする」といふが如く、資本家が强制的に勞働者を組合に入れるのだ、組合の幹部が、會社の月給で人事係となることである。これは即ち勞働組合が、本來の性質たる反資本家的性質を捨て、資本家的企業の一機關となることを意味する。それにしても、かゝることは、資本家にとつて相當に負擔のかかることとなるが故に、比較的資本力が强大にして、企業經營組織が比較的に完備し、資本家の剩餘利潤が比較的豐富な工場產業に於て可能なことであり、現に、事實その通りだ。』等々。

だとすると、社會民主主義政黨幹部の――從つて改良主義組合幹部の――指導下の諸團體の勢力増進の現象は、一體如何なる社會的根據から來てゐるものであるか？　この問ひに完全に答へるためには、別に獨立の一研究論文が必要であらう。だが、私は今それを企てないで、唯單にそれに關聯する一二の要點だけを極めて簡單に説明するだけに

止めよう。

我々が社會民主主義政黨の政治的イデオロギーを檢討するとき、我々はまづ第一に、そこには樣々の社會主義的言辭を以て粉飾されたる饒舌の基底に於て、實は小ブルジョアジー的イデオロギーが中心的地位を占めてゐることを見出す。それは帝國主義以前の時代から、現在の帝國主義時代にまで持ち越されて來たものである。マルクスが第十九世紀半ばのフランスの社會民主黨について述べてゐる諸點（ブリュメール十八日第三章）を今日の社會民主主義者流の政論に適用してみるとき、我々は殊にこの感を深くする。今日の社會民主主義政黨の實力の基礎——それは今日の基礎であるが、明日の基礎であるか否かの保證のついてゐないものではあるが——が、この點から來てゐることは、決して輕微な程度には止まらないのだ。殊に現在の日本に於ては、小市民層や未組織勞農大衆が、一方に於ては段々と政治的關心を高めつゝある傾向があり、他方に於てはブル新聞を通じてさへブル政黨に嫌氣がさし、頻りに何かの『新味』のある政治——殊に幾分かの社會主義的な匂ひがあつて、しかも『あまりに過激に渉らないもの』——を求めつゝある。議會主義の遵奉者であり、當選第一主義の渴仰者である社民黨や大衆黨などは必定そこへ付け込んで、殊に選擧季節になると猛烈に『言論戰』を展開する。社民黨は『勤勞階級本位』のラッパを吹き立てる。大衆黨は、安全なる、、字句を拾ひあつめて、根本に於て矢張り同一性質の宣傳演説の雨を降らす。それが屢々奇功を奏することもある。だが、今日彼等に追隨する大衆が、明日彼等を置き去りにして一足お先きに失踪しないとは、誰にも保證が出來ないのである。

だが、帝國主義の時代——特に帝國主義の現段階——に於ては、社會民主主義は、その實力の基礎を、それ自身の新機能から、遙かにより多く得つゝある。その所謂それ自身の新機能とは何を指してゐるものであるか？　それは、『勞働者階級の内部におけるブルジョアジーの諸利益の侍女』として奉仕する役割であり、更らにより多く、『帝國主義に對する闘爭於いて必要なるプロレタリアートの統一を破壞する』役割である。日本の社會民主主義諸黨も、既に早くも、これらの新機能を果たすことにより、換言すれば『資本に對するプロレタリアートの闘爭の統一戰線を分裂粉碎せしめることにより、』『勞働者階級における帝國主義の主要なる支持物となる』に至つた。そして彼等のさうした努力は、ブルジョアジーによつて、手厚く酬ひられてゐる。見よ！　戰闘的左翼に對して白色テラーが荒れ狂ふたゞ中にも、彼等の陣營は如何に安全に保護されてゐるかを。戰闘的組織の破壞や、精鋭闘士の、、や、犧牲者の流血やは、たゞ左翼戰線の上にのみ見られる現象で

あつて、社會民主主義の陣營には斷じて起る虞れはない。のみならず、更らに一歩を進めて、日本のエーベルトや、シャイデマンや、ノスケやが、他日彼等の陣營から輩出するに至らないとは、誰れにも請け合へないのだ。

次に、改良主義幹部の指導下にある若干の勞働組合が、少くとも大資本による經營の下に於ては、ブルジョアジーの剩餘利潤の餘瀝の幾分を享めさせられてゐるやうな特殊地位にあることは、前に略叙しておいた。これはもとより、究極に於て日本の產業の向上發展性に負ふものであり、特に、、、に對する強力的收奪、並に產業上の技術および設備の優越による生產の高級段階的地位から來るブルジョアジーの特殊利潤の小さなお裾分けから生ずるものである。だが、——否、だとすれば、——少くとも日本に於ては、この原因から來る改良主義幹部指導下の諸組合がブルジョアジーの手から享受し得る有利な特殊地位といつたところで、それは大凡底の知れたものであらねばならぬ。といふのは、日本の產業の向上發展性は、根本に於てその資源の貧弱さによつて嚴重に制約されてゐるものだからである。また、、、、搾取による富といつても決して無盡藏といつた譯のものでもなし、更らに產業上の技術および設備の優越となると、さういふことが日本に關しては如何なる意味で言へるかさへが、極めて疑はしい問題である。で、さういふ泉源から特殊の勞働大衆に與へられる利益は、その分量からいつても、その受益者の範圍からいつても、その永續の可能性からいつても、大した問題にならないものと思はれる。だから、さういふ麻藥が勞働大衆を甘美な陶醉境に導き得る力は、日本の產業の發展性の實現のための必須條件もしくは必然の附隨物である產業合理化、、、、、の接近、等々から來る勞働大衆の生活の脅威が彼等を、、、、、に、り、てる、に、遙かに壓倒されるであらう。否、かゝる、、は、今日既に相當の、、に、、、てゐる。改良主義幹部指導下の組合大衆中の段々と擴大しゆく部分が、左翼運動への接觸の急速なる增大。彼等が餘りにも屢々擧げる幹部反對——社會民主主義的指導もしくは改良主義的指導に對する反對——の聲。少からざる場合に於て、彼等によつて左翼運動に對して示される熱烈なる共鳴同情、等々。この最後の一項目こそは、我々が從來經驗した限りに於て、同志山宣の死を契機として最高頂に達したものである。

一〇

我々はかゝる諸事實のうちに、右翼大衆中の段々と擴大し行く部分の意識の急激なる左翼化の傾向を明かに看取することが出來るのだが、この傾向を促進する眼前の社會情勢こそは、同時にまた、左翼戰

線そのものが如何なる大打擊を受けても決して絶滅しないばかりでなく、ここここここここここここ常とするといふ本質の根本原因である。舊勞農黨から舊新黨準備會へ。——舊新黨準備會から現在の政治的自由獲得勞農同盟へ。——からして我々の陣營は、起つては倒れ、倒れてはまた起つて進みつゝ、如何なる戰火の試錬にも決して屈服することなくて、今日に及んだのだ。のみならず、我々の陣營は從來、一たび倒れた時には、、、、、、、、、、、、、、、再び起きあがることを誤まつたことはない。若し舊新黨準備會が舊勞農黨に比して幾倍もの行動力を以てその廢墟の上に崛起したものとするならば、現在の政獲同盟はたしかに舊新黨準備會に比して幾十倍もの、、、を以て大衆の面前にその姿を現はした。それは、現情勢の下に於て公然の舞臺に活躍し得る戰鬪的左翼の鬪爭體としては、おそらくその最高水準を示してゐるものである。このことは、何よりも殊に、第一にはこの政獲同盟が現情勢に最もよく適合した階級的行動綱領を眼前に見据ゑてゐることから來てゐるものであり、第二には該同盟の組織形態が、その骨組みの堅實性と、その運轉の柔軟撓屈性とを兩つながら兼ね備へてゐるためでなければならぬ。

顧みれば、昨年末、世界の無產階級解放運動の波が一ト際高まつて來たと共に、わが國の無產階級の陣營がそれに伴れて俄かに活況を呈して來たとき、全國の戰鬪的勞農大衆は、その頃新たに獲得されたる合法主義に對する嚴正なる批判と、無產階級の獲得唯一つしかあり得ないといふ科學的認識とに即して、舊新黨準備會に向つて、それが尙ほ僅かばかりは保留してゐた社會民主主義の殘滓を最終的に一掃することを要求した。舊新黨準備會は直にそれに應じ、十五項の階級的スローガン——『（一）勞働者農民に言論集會・出版・結社の自由を與へよ』から『（十五）資本家地主の政府を倒せ、勞働農民の政府を樹立せよ、戰鬪的勞働者農民の陣營、、』までの——から成り立つところの、勞農大衆の日常利害の要求と政治的自由獲得鬪爭との結び附きを規定したる行動綱領を決定し、それを提げて、玉碎を期してまつしぐらに勞働者農民黨の結黨大會に臨んだ。その結黨大會は三月日に解散された。全國から參列した數百の代議員たちは、口々に『農村へ！　工場へ！』のスローガンを叫びかはしながら、暫し袂を別つて、各自にその部署に引き揚げた。その間に我々の陣營を見舞つた大彈壓については、前に既にこれを述べた。

沈默の日が一個月ばかり續いた。だがそれは、決して舊新黨準備會の陣地が崩壞したがためではなくて、それが着々形態轉換期を潜り拔けつゝあつたがためだつた。やがてその期間が經過すると、それは現在の政治的自由獲得同盟の新しき姿を以て、猛然として起き上がつ

た。全國のそこかしこに於て、活潑なる日常闘爭が再開されだした。地方自治體の選擧が再び戰はれ始めた。左翼戰線は、かくして再進出の巨歩を堂々と踏み出したのだ。

そこへ同志山宣の暗殺事件が突發した。彼は、戰鬪的左翼の立場を飽くまで忠實に固守して、最後の瞬間までそのために戰つたがために遂に荒れ狂ふ白色テラーの餌食となつた。この事實によつて、彼が據つてゐた我々の陣營の本質が、滿天下に宣明された。戰鬪的勞農大衆は、、、、階級的、、と、、、とに、、、、、、、つた。彼の暗殺を通して企てられたに違ひないところの左翼戰線への威嚇の計略は、全然反對の効果を産んだ。左翼鬪士たちの鬪爭精神は、それを契機として層一層旺盛となつた。左翼戰線は俄かに、、にも、、、した。

と同時に、全國の勞働者農民大衆は、彼の訃報に接するや否や、忽ち彼の死の無産階級的意義を讀み取つた。そして、リーブクネヒトにも對比された我々の同志山宣は、それらの勞農大衆の心のうちに不朽の記念塔を築きあげた。彼の死は、全勞農大衆の共通の關心事とされるに至つた。そして彼の死を通じて、彼が生前一方に於て輝やかしくも代表してゐた戰鬪的左翼の立場の階級的、、、が、全勞農大衆によつて正當に感得され理解された。かくて彼等は、彼の死の追悼に於て、戰鬪的左翼と完全に協力するに至つた。彼の告別式、勞農葬、および追悼演說會は全勞農大衆の支持應援の下に異常の成功を以て擧行され、階級的に萬丈の氣焔を擧ぐる機緣となつた。そして事件のかゝる進行は、大阪での追悼演說會に於て、その最高頂點に達した。殊にそこでは、戰鬪的左翼の立場に鋭く對立する社會民主主義の立場が、左翼的鬪士として死んだ彼への追悼の趣旨に關聯して、大衆によつて徹底的に批判され、正當に評價された。

かくて左翼戰線の眼ざましき再進出は、完全に決定的のものとなつた。

戰鬪的勞働者農民の陣營、、——一九二九年四月——

印度の民族運動

矢内原忠雄

一　貧困と無智

人類社會に於ける壓迫の中最も主要なるもの〻一つは一國民若くは一民族による他國民他民族の支配である。それが最も顯著に現はる〻は植民地（屬領）である。彼の印度は第十七世紀初め東印度會社の創設以來英國の經濟的及び政治的支配を受けて今日に及んで居る。その屬領としての歴史の長きことに於て、その英國を富强ならしむるに最も力ありし寶庫たる點に於て、その面積人口共に頗る廣大なる點に於て、印度こそは屬領中の屬領、植民地中の植民地である。ロシアを除ける歐洲全體よりも尙廣く、現在三億萬人以上の人口を有する國土が三百年の長きに亘りて他國に征服支配せらる〻事實は、人類近世史の一大事件と言はねばならない。英國の印度統治、その統治下に於ける印度人の狀態は、人類的關心事たる重要性を有すると言はねばならない。

印度全人口の約九割は村落に居住し、都市居住者は一割である。又職業別に見れば狹義の農業に依る者は全人口の七割一分、工業は一割を占む。しかも工業者の大部分は村落居住の手工業者にして近代的組織の工業人口は全人口の百分の一に過ぎない。卽ち印度は八大工業國の一に數へられては居るが、人口の大部分は農民である。之等印度農民の貧困は有名なる語り草であるが、工業勞働者の狀態も亦甚しく窮乏である。

印度人口の一人當り所得は一年百ルピー、卽ち一日四ペンス半（約十八錢）、その中五分の二は基礎的食物たる米麥に費さる〻が故に、殘り三ペンスを以て他の一切の生活費に充當すべきものであるといふ。而かも之れ貧富すべての階級の平均數字であるから、國民の大多數を占むる農民勞働者の生活狀態は之よりも遙かに劣惡たるは明かであるマドラスの一農民居住地域の調査によれば一人當り一日の所得は二ペンス四分一にして、米代を除けば餘す處僅かに半ペンス（二錢）に過ぎない。又パンジャブ地方の調査によれば農民は負債の中に生れ落ち、負債の中に生き、負債の中で死んでゆく。何れの村落に就て見るも、負債を有せざる者は三分の一に充たず、或は一割以下なる處もある。

全體に於て住民の八割三分は負債を有し、負債總額は土地收入總額の十二倍に當る。一九一九年に於てパンジヤブ農民の負債總額は三千萬磅に上つた。英領印度全體にては農民負債は四億磅と推算せられる。之等負債の金利は一割五分乃至五割の複利である。且つ政府及び地主に對する地税地代は頗る高い。農耕の方法は幼稚にして、反當り收穫はあらゆる文明國中最低であると言はれる。デッカン地方の村落調査の結果によれば、住民の八割五分は破産狀態にあり、彼等の所得は普通の生活費に必要とする額の五割一分五厘にしか當らない。農民貧困は全印度的事實である。從つて飢饉の慘害極めて甚しく、一八七六年乃至一九〇〇年間に於ける飢饉回數十八回、死者二千六百萬人に達した。貧困甚しきが故に飢饉甚しく、飢饉甚しきが故に貧困と負債と愈ゝ甚しい。印度三億民衆の最大必要は「食物、より多くの食物、更により多くの食物」であるとは、パンジヤブ農民研究の權威ダーリング氏の結論である。

工業及び農業勞働者の勞働條件生活狀態も亦不良である。紡績職工の平均賃銀(一九二一年五月)は一日(十一時間)男子二志(一圓)、女子一志(五十錢)、幼年工半日四ペンス乃至六ペンス(十六錢乃至二十五錢)。黄麻工場の利潤率は九割にも上つたが、その職工の賃銀は一週三志乃至十二志である。石炭坑夫の一週賃銀は七志である。又ゴム、コーヒー、木棉、其他農園勞働者の平均賃銀は男子一日三志乃至四志、女子一志半乃至三志。アッサムの茶園にては男子一日八ペンス、女子六ペンス、幼年三ペンス、茶工場にては九ペンスの賃銀である。これ等農園の組織は、何人もその勞働者に接近するを不可能ならしむる樣に出來て居る。從つて農園勞働者の勞働組合は未だ全く存在しない。こゝには搾取は隔離室の內部に於て行はれて居る樣なものだ。「アンクル・トムス・キヤビンの著者は多くの農園に於て世界の憤激を刺戟すべき他の物語を書くべき材料をいくらも見出すであらう」(ルザーフォード)。

ボムベイ勞働局の報告によればその地方の勞働者階級の家族は大抵五人より成り、一家の平均所得は一週十七志五片、その消費する穀物量は飢饉救助法に規定せられるゝ最大給與額に相當するも、ボムベイ監獄規則に規定せらるゝ食事量より少額である。勞働者家族(卽ち大略五人)の九割七分はたゞ一室內に居住する。彼等のうち四割七分は負債を有し、その利子は通常年七割五分である。彼等の乳兒死亡率は一千に付屢々六百以上に上り、一九二一年には八百二十八に達した。小兒の九割は阿片を吸飮する、等々。

以上の如く印度人の貧困は周知の事實である。その敎育程度も亦甚だ下等である。印度には十五の大學がある。之に對して普通敎育の普及せざることは著しき對照を爲す。一九二一年の調査に於て英領印度人口中文字を解する者は僅かに八分二厘に過ぎず、九割一分八厘の人口は文字無きの徒である。之を男女別にすれば、男子人口中文字を解する者は一割三分九厘、女子に於ては僅かに二分一厘である。而して

全印度に於て英語を讀み書きし得るものは二百五十萬人に過ぎず（即**ち人口の百分の一に充たない）しかも多數は極めて不完全に之を知る**のみ。

醫療、社會衛生の設備も極めて普及して居ない。一九二一年國勢調査によるに英領印度の死亡率は人口千に付三〇・六人にして、世界各國中稀有の高率である。殊に農村に於て高く、パンジャブ地方の農村にては人口千に付五十一人の死亡率である。印度の乳兒死亡率は特に高い。

貧困と無學と多死、之れ印度大衆の歷史的運命であり、又現狀である。

二　英國の統治

上述の如き貧困無學多死の原因は何であるか。英國の統治は之等を緩和改良し、印度人の經濟的社會的地位を向上せしめたりしや、或は英國の統治そのものがこの貧困と無智とに對して責任を有するものなりや。

或は言ふ、印度農民貧困の原因は飢饉の頻發にあり、飢饉の原因は貿易風の不順にありと。即ち貧困の原因を以て自然にありと爲すものである。成る程貿易風が順調ならず、從つて降雨量少きときは旱魃飢饉となる。之に對して英國統治の下に灌漑水路及び鐵道の布設を爲したることは飢饉の慘害を防止するに與つて力ありしと稱せられる。而かも一八八二—八九年間に政府が鐵道に投じたる費用は灌漑工事費に**七倍し、一八九八年より今日に至る迄の期間は更に灌漑工事の相對的減少を見た。**然るに交通機關なるものは物資の供給を容易にすると共に物資の搬出をも容易にする。之によりて資本主義の支配は農村に侵入し、印度農村は貨幣經濟化せられ、その生產物は商品化せられ、村落共同團體の制度は破壞せられ、從つて在來の備荒貯穀の制度はすたれ、生產物は直に鐵道によりて搬出せらるゝこととなつた。而して不作に際して穀物輸送の便宜は多くなつたとは雖も、貧困なる印度農民にして如何で之に對する購買力があらうか。ディグビー氏は、過去に於ては二年の旱魃續けば飢饉となりしに比し、近年に於ては一年の旱魃の結果は直ちに飢饉狀態を呈すとなし、その原因は村落備荒貯穀制度の破壞にありといふて居る。即ち英國統治下に於て却つて飢饉は頻發性を有するに至つたと爲すものである。

又或は言ふ、印度農民の貧困は人口過剩土地細分に原因すると。或る地方にては五十二エーカーの土地は百三十六筆に區分せられて五十人の所有者に分屬し、又ある村落にては百五十六人の土地所有者中十六人はその土地を十筆以上に細分し、甚しきは一エーカーの十三分の一に過ぎざる分割地をさへ見るといふ。斯くの如き農村人口過剩土地細分は往々にして出生率の高きことに原因を歸せられる。十九世紀初中のアイルランドに於ても然りであつた。併しこれと併行して都會の不發達、工業不振の現象を看過するを得ない。印度人口中農業に依存

する割合は一八九一年六一%、一九〇一年六六%、一九一一年七二%、一九二一年七三%と、國勢調査の度毎に遞增して居る。凡ての文明國が資本主義化するに從ひ人口の都市集中、農業人口割合の漸減あるに對し正反對の現象である。之れ英國商品の輸入によりて印度在來の手工業が衰微したるが爲めに外ならない。英國が印度より原料品食料品を輸入して工業化するに從ひ、印度は英國より工業品を輸入して原料品食料品の生産に專心せざるを得なかつた。英國に於て夥しき人口の都市集中ありしと同時期に印度に於ては農村への分散があつた。英國に於て産業革命の進行せるに際し印度は産業的退歩の途を歩んだ。而して印度手工業の衰微農村人口過剩は英國工業發達の必要なる基礎であり條件であつた。それ故にこそ英國統治の政策は久しく印度工業の阻害に存したのである。英國は始め印度綿布絲の輸入に對して禁止的關税を課し、之に反し英國品の印度輸入は無税と爲し、又印度への機械輸入には高率の課税を爲さしめた。印度政府が十九世紀末に至り財政的理由により綿絲布の輸入税を課するの止むなきに至るや、印度國內産の製品に對して同率の國內消費税を賦課せしめた。要するに英國はランカシヤーの利益の爲に印度を統治したりと稱せらるゝことは、當らずと雖も遠からずである。

工業阻害は斯くの如し。然らば印度の農業は英國統治の下に如何ほど改良せられしや。その農耕方法の幼稚にして農民の貧窮なることは既述の處である。政府の農業的施設費を比較するに、人口一千人に付北米合衆國（一九一九―二〇年）は一、〇二〇ルピー、英本國（一九二一年）は九六〇ルピー、印度パンジヤブ地方（一九二一―二二年）は僅かに七九ルピーであり、又耕地一千エーカーにつき比較するに合衆國二一〇ルピー、英本國一、三八〇ルピーに對し、パンジヤブは五六ルピーに過ぎない。

印度の農産は增加したが、生産增加の指數は輸出增加の指數に及ばない。食糧品の生産增加指數は原料品のそれに及ばない。印度の生産物の極めて多くの部分が輸出に充てらるゝは疑ひない。サー・ジヨン・ストラツチエーが印度政府の大藏大臣在任當時爲したる聲明中に曰く「印度が英國と有する連結、及びこの連結の財政的結果は、印度をして年々歐洲に向け二千萬磅の價値ある生産物をば、何等直接の商業的對價を受くることなくして、輸出せざるを得ざらしめる」と。即ちこの輸出超過額は主として英國に對する財政的支拂（官吏の恩給年金、投資利子等）に充當せられるものである。之等は印度人口に對する第一要請の勘定書である。之を支拂ふが爲めに彼等は營々として勞働し、その食糧消費を節約して居るのである。英國繁榮の裏面は印度人搾取と貧窮とである。

印度人の教育に關しても、固有の村落制度破壞せらるゝと共に在來の村落的教育機關も一掃せられ、しかも之に代るべき近代的なる普通教育機關の整備は甚だ等閑視せられて居る。印度人の教育普及の程度は英國統治下に於て却つて退歩したるやの疑がある。英國の保護下に

ある印度土人王國の二三は或は義務教育の制度を有し、然らずとも見於就學率頗る高くして、却つて英國直轄の區域は其の足下にも及ばない。一九二四―二五年豫算一億五千四百萬磅中、教育費七百萬磅、保健費三百萬磅、農業に一百萬磅、工業に五十萬磅を充つるに對して、軍隊及警察費は五千七百萬磅を占む。印度内に於ける叛亂の鎭壓、國境の防備及擴張、印度國外エジプト、メソポタミヤ、支那等への出兵等英國帝國主義の直接の支持費の大に對して、印度民衆の教育、保健產業的施設費の如何に微少なる。印度政府の財政は一言すれば印度民衆の犧牲の上に英國帝國主義を支持する主義の上に立てられて居る。

英國は勿論印度に對して何等の社會的經濟的施設を爲さゞりしものではない。飢饉救濟の爲めには特に意を注ぎし點がある。併しそれにしても英人の誇稱する Pax Britannica（ブリテンの平和）の長き支配の下に、印度民衆の社會的經濟的地位の向上の行はれたること極めて少きは怪しむべき事實である。否、或る學者は印度農民の生活程度はモグル王朝の頃に比して進歩して居らぬとさへいつて居る。英國の統治が積極的に印度人を貧困無智ならしめしや否やの論議は別として、英國が印度統治に於て印度民衆の爲め爲すべきを爲さゞりし不作爲の事實は何人も之を認めざるを得ない。果して然らば印度人現在の貧困無智に對して英國の統治は重大なる責任あるもの と言はねばならないであらう。

三　世界大戰の影響

世界大戰は印度の局面に一大展開の機會を與へた。そは經濟的には印度内に於ける資本家的企業の勃興であり、政治的には印度民族運動の興起及び印度統治法の改革である。

大戰開始と共に印度内に於ける工業的生產の增加は經濟的及び軍事的に、印度自身に對し又英帝國に對し絕對的必要となり、かくて二十世紀初頭以來徐々に發達しつゝありて而かも伸ぶるを得ざりし工業は俄かに政府の積極的保護奬勵を受くるに至つた。即ち一九一六年に印度產業委員會が政府によりて任命せられ、一九一八年に報告書を提出して、工業の發達に對する政府の補助、農業方法の近代化、及び初等教育の普及、を進言した。一九一七年には印度軍需局が設立せられ、大規模生產を實行し又は保護した。保護政策は採用せられ、綿絲布其他の輸入稅は引上げられ、一九二五年には綿製品の國内消費稅は廢止せられた。かくて戰前には印度に對する綿絲布供給高の七割が英本國より、二割八分が印度内の產出によりたるに對し、戰後には英國よりの供給は三割五分、印度の自給生產六割一分となつた。重工業部門に於ても有力なるタータ鐵鋼所が興起し、印度政府の厚き直接間接の保護補助を受けた。從來發達の極めて遲れたりし資本家的金融機關も、印度帝國銀行の創立を始めとして、急に普及整頓せらるゝ機運に至つた。而して印度の產業政策は印度自身の消費者及製造業者の利益によ

りて決せらるべく、英本國は之に對する干渉をなるべく避くべしとする處の、所謂印度産業政策自主權の原則は一九二一年英本國政府によりて公に認められたのである

斯くの如く勃興し、莫大なる戰時利得を擧げ、政府の保護を受くるに至れる印度の資本家的企業の大部分は實に英國の資本そのものに外ならない。一九〇八―一三年の平均に於て英國資本總輸出額中印度及びセイロンは一割三分を占めしに對し、一九二〇―二七年の平均に於ては一割九分を占む。就中一九二一年及び二二年には頗る大なる資本が印度及びセイロンに投ぜられ、一九二二年の如きは全資本輸出高の五割を占めた。印度に於ける會社資本の八割五分は英國人の所有にして、その經營も亦大部分英國人の手に屬する。印度人の資本も增加しつゝあるが、資本集中の原則通りに、その多くは英國人の資本的勢力に或は吸收せられ或は從屬する。而して印度に事業を有する英國會社は印度の登錄に移り印度に本籍を移して以て、印度政府が「自主的」に「印度産業」に對して與ふる財政的保護の利益を享有せんとしつゝある。かくて印度政府の新政策によりて英國資本の印度への輸入、英國資本と印度人資本との鞏固なる結合、が行はれた。印度政府の新政策によりて最も利益を受くるは言ふ迄もなく英國資本である。之れが印度産業自主化の資本家的意義である。

世界大戰開始に際して英國の恐れたる後顧の憂ひは印度の叛亂であつた。然るに印度は軍費及び兵員に於て最も忠實に英國を支持した。併し乍ら英國自ら大戰の旗印しとせる民族自決主義は印度の民族運動をも刺戟し、殊に對トルコ宣戰は印度の回教徒を憤激せしめ、一九一六年の暮にヒンヅー國民會議と回教徒同盟とは共にラックナウに大會を開き、自治要求の共同綱領を宣言した。ヒンヅーと回教徒とは始めて民族運動の共同戰線を張つたのである。この事態に驚愕したる英國政府は一九一七年に、印度統治制度の目標は責任政府の樹立にありと宣言し、直ちに統治制度改革の委員を任命し、その結果として成立したるものが一九一九年の印度政府法、即ち現行の制度にして、通常モンテーギュ・チエルムスフォードの改革と呼ばるゝものである。而して英帝國會議其他對外的關係に於て印度は帝國の重要なる構成分子として、ドミニオンと同格の地位を認められた。

モンテーギュ・チエルムスフォード改革の主要點は選擧制度の擴張と、州政府に於ける二部政治制度（Diarchy）である。州政府の事務は留保事項及び委任事項に二分し、前者は行政評議會（Executive Council）、後者は行政長官（Ministers）が主管し、共に知事の統轄する處である。行政長官は州立法議會の被選擧議員中より任命せらるゝが故に、その限りに於て責任內閣の趣旨を包含する。留保事項は司法、財政、警察、監獄、勞働、水利・森林等であり、委任事項は教育、地方行政、保健、農業、漁業、協同組合等である。然るにかくの如き事務分割の結果、行政長官はその處管事項をすら有効に處理するを得ない。マドラス州の産業長官が言へる如く（一九二三年）、彼は開拓の長官な

れども森林はその權限に屬せず、工業の長官なれども工場及び電氣はその權限に屬せず、農業の長官なれども水利はその權限に屬せず、之等は皆留保事項に屬する。況んや財政が留保事項に屬する以上、立法議會に責任を有する行政長官の政務は、全然議會に對して責任無き行政評議會の爲め骨拔きとせられ得るものである。

州立法議會は一院にして、被選擧議員及任命議員より成り前者が多數なる如く組織せらる。その權限は著しく制限せられ、例へば中央政府への貢納、法律による既定額の支出、公債の利子及減債基金、本國政府任命の官吏の俸給年金等は之を論議することさへ許されない。知事は委任事項に關する法案を拒否し、一般に留保事項に關する行政評議會の決定に反對の處置を取るを得、又緊急の場合には留保たると委任たるとを問はず如何なる事項に關しても支出を命じ得る權限を有する。要するに知事の權限は專制的であり、立法議會の權限は諮問的であり、行政長官の責任政治は假裝的たるものである。

州立法議會の選擧區は人種宗教職業等各種利害關係によりて區分せられたる團體別であり、選擧權は制限的であるが、マドラス、ボムベイ、及びユナイテッド・プロヴィンセスに於ては婦人にも與へられて居る。全體に於て選擧權を有するものは全人口の約百分の三に過ぎない。

中央政府の立法議會は二院より成り、選擧區の組織は州立法議會と同樣であり、選擧權の制限は更に之より高い。議員は民選官選の兩種より成り、前者の方が多數なる如く組織せられて居る。その權限は豫算及法律の評議であるけれども、軍隊、外交、國稅及び本國政府任命の官吏の俸給年金に關する豫算には手を觸れるを得ず、且つ公債は全然本國政府の權限に屬し從つて印度議會は之にあづかる處は無い。印度議會が否決若くは修正したる豫算と雖も、總督は之を強行するを得、その實例も亦起つた。要するに印度議會の權限は諮問機關に過ぎず、その範圍に於ても性質に於ても頗る限られたるものである。

印度はかくて今日尙本質に於て總督の專制政治の下にある。而して印度總督はドミニオン（自治領土）の總督と異り、完全に英本國政府の指揮下にある。即ち總督以下印度の官吏の多くは本國印度事務大臣の任命する處であり、印度政府の收入支出は本國印度事務大臣の所管する處である。故に印度は英本國政府の專制に服する。

以上が現在に於ける印度統治制度の大要である。之れが世界大戰に際して印度の民族運動に應ずるため、印度の將來は責任內閣制にありとの宣明の下に、爲されたる改革の現狀である。印度人の政治的自主權に加へたる處果して幾何であるか。殆ど無きに等しいではないか。

四　印度の民族運動

植民地民族運動に對して若干の政治的改革を讓歩すると同時に、運動の急激なる進出を彈壓する目的を以て峻嚴なる治安維持法を制定するは、英國がアイルランド問題の處理に於て反覆したりし常套手段で

あつた。印度に對しても右手を以て一九一九年の統治制度改革を爲すと同時に、左手を以て苛酷嚴重なる治安維持の特別法（ローラット法と稱せらる）を制定した。之に對する民衆の抗議に關連してパンジャブ地方アムリツアーに於て軍隊による、、なる群衆、、事件が起つたローラット法及びアムリツアー事件は大戰中英國政府及軍隊の爲めに盡す處大なりしガンヂーを憤慨せしめ、こゝに印度民族運動に大なる火が投ぜられた。ガンヂーによりて民族運動は始めて大衆のものとなつた。彼の戰術は非協同による政府の屈服强制であつた。政府の官職より退けよ、裁判所より退けよ、政府の學校より兒童を退かしめよ、議會の選擧に參加する勿れ、英國品をボイコットせよ、更に進んでは租稅を支拂ふ勿れ、等々。これ等の非協同を貫徹せば英國は止むを得ず印度の統治より撤退するであらうと。このガンヂーの主義に從ひ、一九二一年冬、、、、の印度訪問に對する歡迎をばボムベイ及びカルカツタの民衆は完全にボイコットした。非協力大衆運動は全印度を風靡した。而して一九二二年二月一二の地方に於て警官と群衆との衝突突發し、暴動化せる群集は警官を虐殺し警察署を燒打するに至つた。ガンヂー及び國民大會はかくの如き暴力行爲を非難し、將に開始するに決し居たりし租稅不納運動の停止を決議し、且つ地主に對する小作料不納運動を排斥した。ガンヂーは同年三月捕縛せられ禁錮六年の刑に處せられて入獄したが、翌年二月釋放せられた。ガンヂーに代りて國民大會の指導者となりしはC・R・ダスにして、彼の下にスワラジ黨は非協力政策を廢して議會入りを決議し、一九二三年冬の選擧を爭つた。ダスの新政策は妨害及反對の方法によりて內部より議會の活動力を奪ひ統治法の改革を餘儀なくせしめんとするにあつた。一九二五年六月ダスの死去によりスワラジ黨の首領はパンデイト・モチラル・ネールとなり、黨の政策は更に穩和化し、現在制度の基礎の上に立つ單純なる反對黨化し、或は官職就任を承認する等、漸次政府との協同を是認するに至つた。

スワラジとは自治を意味する。スワラジ黨は國民會議の主體であり印度民族運動の最も活潑なる擔當者である。國民會議に屬せず、その右翼よりも更に右傾なるブルジョア政黨としては自由黨及び獨立黨がある。此外全印度回教徒同盟がある。各派の政黨及び政治團體は一九二三年以來聯合して國民大會を開き、一九二五年四月サー・テジ・バハヅール・サプルーを議長とする大會に於て印度共同國家法案を議決し、自治領土の地位を基礎とする憲法草案を制定した。之は印度の民族運動團體に對して英國政府が積極的改革案の提示を拒みたる結果と見るべきである。同年九月の印度中央議會に於てスワラジ黨、獨立黨、自由黨及び回教徒の合同により同樣の趣旨による印度統治法改正案が七十二票對四十五票を以て可決せられた。併し乍ら印度總督はこの決議を問題としなかつた。彼は憲法上立法議會の決議によりて拘束せらるゝ處はないのである。

現行印度統治法は制定後十ケ年即ち一九二九年に至れば、更に改正

を要するや否や、如何に改正すべきや、等を調査するものと定められて居た。英本國議會は右期限の到來を待たず、一九二七年にサー・ジョン・サイモン一行の委員を任命して調査の爲め印度に派遣した。此の調査委員が專ら英本國議會の議員より成り、印度人を加へざることに對して、印度に於て不滿激發し、一九二七年十二月マドラスに於ける國民議會は始めて完全なる印度獨立の綱領を採用し（從來は英帝國内に於ける自治國家の地位を要求したりしに對し、始めて英帝國より分離せる獨立の印度國家を要求したのである）、且つ將來の戰爭に於て英國帝國主義を援助せざること、帝國主義反對の國際運動を支援すべきこと等「半革命的」なる趣旨の決議を爲した。而してスワラジ黨員は中央及地方の立法議會に於てサイモン委員會の調査に協力するを拒絶するに決した。然るに時日の經過に從ひかくの如き非協力の空氣は緩和し一九二八年十月迄に於て九つの州議會中一つ（中央州）を除きて他は悉くサイモン委員會の調査に協力すべき委員の任命を可決し、中央議會の上院は協力に賛成し下院は辛うじて之に反對する議決を爲した。妥協の空氣は更に濃厚になりつゝありといふ。

昨年（一九二八年）夏スワラジ黨、自由黨、獨立黨等各政黨合同の大會開催せられ、ネールー、サプルー兩氏を主班とする委員の起草に成る決議を採用した。その主眼は「英本國議會が印度に對し、英帝國内に於ける自治領土の地位を許容すべきこと」を請願するにあつた。而して此要求を基礎とする憲法草案をサイモン委員會に提示することゝ爲した。即ち完全なる獨立分離要求の拋棄である。英政府に對する非協力政策の拋棄である。更にこの大會の採用したる憲法草案には「印度共同國成立の當時享有せらるゝ一切の私有及個人的財産上の權利を保障する」旨の特別決議が附帶されてある。即ち印度に於ける英人及印度人ブルジョアジーの利益保障を明瞭に宣言したのである。

然るにこの右傾化に對し同じくスワラジ黨内部に於ても之を不滿とし、自治領土の地位より更に進みて英帝國よりの分離獨立を主張する一派は印度獨立要求同盟をつくり、一九二八年十一月に至り全印度的に之を組織した。その主腦者はイエンガー、ボーズ、及びモチラール・ネールーの子ヤワハル・ネールーである。この同盟は政治經濟社會の三綱領を定め、政治的には完全なる國家的獨立、經濟的綱領には經濟的不平等の撤廢、富の衡平なる分配、重要産業及交通機關の國有、八時間勞働失業救濟等勞働立法、土地制度改革農民負債の解除等を含み、要するに改良社會民主々義的にして大體の趣旨は孫逸仙の三民主義を摸範とせるものと見られる。とにかく今日迄印度ブルジョア的民族運動に採用せられし綱領中最も進歩せるものである。

勞働者及び農民の政黨は未だ組織せられて居ない。勞働組合も未だ發達十分ならず、組合は約一百、組合員總數は二、三十萬人である。（工業勞働者總數は二千萬人と稱せらる）。英國勞働組合及び勞働黨は印度の勞働者をば英國風に、即ち反革命、フエビアン協會的に指導せんと努めつゝある。

英國は印度の民族運動に對して何を考へんとするや。現行統治法の具體的改正案は目下進行中のサイモン委員會の調査の報告を待たねばわからない。たゞ確定的たるは分離獨立要求の斷乎たる拒絕である。一九二二年八月二日英國下院に於てロイド・ジョージは有名なる「鐵枠」演說を爲した。曰く、英國は如何なる事情の下に於ても印度に於ける其責任を抛棄しない。英國の統治は印度に對する鋼鐵製の枠であると。英國が印度に對して振出せる最高の手形は英帝國內に於ける自治領土の地位である。英帝國勞働會議(一九二五年)は「自治の即時(Immediate)許容に關する印度の要求を支持」する旨決議した。併乍ら英國勞働黨內閣の印度事務大臣たりしオリヴイアー卿はこの「即時」といふことを解釋して曰く、「直接即時」の行動又は讓步は印度に「即時」の自治を與ふる所以にあらず、漸次なる政治的進化のみ之を可能ならしむる、と稱して印度國民運動に對してその非協力政策乃至革命的直接行動を叱責し警告し訓諭して居る。終局に於て自治領土の地位を許容するであらう、併し乍ら徐々に、極めて徐々に、平和に、極めて平和に。英國の印度に對し、及び印度に於て有する利權、即ち資本、官僚、及び軍隊の利益を著しく害せざる程度及び方法に於てのみ印度統治法の改革に同意するであらう、如何なる場合に於ても斷じて英帝國の埒內より出づるを許さないであらうと。之れが印度民族運動に對する保守黨自由黨のみならず勞働黨をも含む英國各政黨一致の輿論である。之れが資本輸出的帝國主義時代に於ける英國の印度保持策である。

最近の印度國民會議(スワラジ黨)はガンヂーの指導の下に、本年(一九二九年)十二月末日を期限として完全なる自治領土の地位許容を英國政府に要求し、若し容れられずんば再び非協力戰術を實行すべし、と決議したりと傳へらる。英國は果して之を許容すべきか。許容せざるべきは殆ど確實である。然らば其際印度民衆は如何なる程度に迄非協力を實行するであらうか。恐らく民衆の運動が暴動化するに及ぶ時は指導者等は直ちに非協力政策を停止するであらう。かくて或程度の統治法改正は英國政府によつて讓步せらるゝであらうが、印度民族運動は少くとも自治領土地位の獲得に到る迄は止むことなく、しかも大なる爭鬪の反覆の後にあらざれば英國は之をすら承認しないであらう。殷鑑遠からずアイルランドにある。

印度民族運動に於て自由黨獨立黨等右翼政黨は元來印度に於ける英國資本と妥協性を有するブルジョア政黨である。スワラジ黨は非協力より議會妨害へ、更に反對黨としての協力へ、と漸次政策の右傾的變遷を見た而して最近その右翼は益々自由黨等に接近し、左翼は改良社會民主主義的傾向に發展しつゝある如きも、未だ公然の分裂には到らない。元來スワラジ黨の中心勢力は中產階級的にして、革命若くは暴動を排斥する。「ダス氏は印度と革命との中間に立つて居た」。今日に至る迄スワラジ黨は「印度と革命との中間」に立つた。何故「革命」との中間であるか。印度の農民勞働者の間に革命的暴動的要素が存するが故に外ならない。昨年(一九二八年)秋の中央議會に於て政府は治安維持

（退去）法案を提出し、印度人以外の共産主義者をば印度より退去せしむる權限を要求した。勞働爭議取締の法案をも提出した。其他之に類する政府の取締政策、スワラジ黨の左右兩翼分化の形勢、及び英國政府による印度統治法改正必要の認識等、要するに印度民族運動の發展の眞實の社會的基礎、根本的なる推進力は農民勞働者の呻吟、覺醒、要求、行動に存する。印度民衆の貧困と無智とこそ印度民族運動の中心問題である。政治的解放は社會的解放の前提たり條件たるものである。印度の自由は印度人の自由のためである。外國政府支配よりの自由獲得は印度民衆社會的解放の必要條件としてのみ眞實の社會的意義を有する。かくて始めて印度民族運動はたゞに印度及び英國のみならず、廣く世界に於て正義を愛する人士の關心事たるものである。（四月八日）

英國文壇の現在

本間久雄

三月の末にヨオロッパの旅から歸つて來たばかりで、まだ旅裝をも解かない私は、本誌編輯部から、英國現文壇の諸傾向についてものせよといふ好意ある勸誘を受けながら、遺憾なことには、今は纏つて文章を書く暇も準備をも持つてゐない。で、こゝにはたゞ、イギリス文壇について見たり聞いたりしたことの一端を、アト・ランドムに、そこはかとなく書き記すことゝする。

私が昨年の五月、イギリスに渡つて間もなく、私の心を傷ましめたことは批評家、エドモンド・ゴスの訃を聞いたことであつた。

ゴスは、私が滯英中、一度はその謦咳に接したいと思つてゐた文學者の一人であつた。ゴスは、自國以外のことには、餘り多くの興味を持たないのを常とするイギリスの文學者の中では、稀れに見る世界的な心持の人であつた。彼れの鑑賞の世界は、自國の文學の範圍をこえて、或ひはフランスの文學に、デンマルクの文學に、或ひはスエーデンやノオルエーの文學など、さまゞゝの國の、又、さまゞゝの傾向の文學に亘つてゐた。殊にイブセンを始めて、イギリスに紹介したり、又先年亡くなつたヰリアム・アーチヤーと共にイブセンを飜譯したりしたのは、彼れの最も大きな功績であつた。私たちも亦彼れのこの紹介や飜譯によつて始めてイブセンを知つたと云つてよい。少くも英文を通してイブセンを學んだ私たちはさうであつた。ゴスは七十九の高齢で亡くなつた。その四月前に八十八で亡くなつたトマス・ハアデーと共に、イギリス文學の老大家の双璧であつた。而も彼れは、この高齢にもかゝはらず、週刊新聞『サンデー・タイムス』の讀書欄に毎號新刊書の批評其他文壇時事を論じて文壇を啓發することが多かつた。同じ高齢な文學者としては、他に詩人のロバート・ブリッヂや小説家のキプリングやジョルジ・ムーアなどがあるが、彼等が多く筆を收めて居るにかゝはらず、ゴスは、上に一言したやうに、毎週の新聞に健筆をふるつてゐた。で、ゴスの亡くなつたときには、イギリスの諸新聞が何れも一樣に、『さきには、ハアデーを失ひ、今またゴスを失ふ。英文壇うたゝ寂寞を加ふ』といふやうな意味のことを書いてゐた。私は、日頃からゴスの著書を讀んでゐたゞけ、ゴスを失つて、愛惜を感じ寂寞

を感じたことは云ふまでもない。

しかし、英文壇は、見様によつては決して寂寞ではない。それどころかなか〳〵多士濟々である。バアナード・ショウは、例の尨大な『知識階級婦人への社會主義手引』を公けにして批評壇を賑はし、ゴオルスウージーは、その浩瀚な小說『サガ』を完成し、その他エチ・ヂー・エルスにしても、アアノルド・ベネットにしても或ひは評論、或ひは小說或ひは紀行文等讀書界の注目を引く夫々の著述を公けにしてゐる。とりわけショウの人氣は素晴らしいものがある。彼れの警句が商品廣告に應用され、彼れについての漫畫やゴシップが日毎の新聞を賑はすなど、彼れの人氣は全く想像以上である。それだけ彼れは popular の嫌ひがないでもない。現に私が無產派作家の大立物であるマイルス・モリソンといふ人と語つたときも、氏は、ショウが、餘りに人氣があり過ぎるために、知らず〳〵通俗に墮することを、ショウのために惜んでゐた。さういふ遺憾事をショウに對して抱いてゐる人は相當にあるらしい。それからショウは、崇拜者も一方に持つてゐる代りに、例の皮肉が累して他方には敵も持つてゐる。少くもショウに對して反感を持つてゐるものも相當にあるらしい。私は、二つばかりこの反感の現れといふべきものを雜誌と新聞とで讀んだ。一つはショウがある素人芝居の團體からの脚本借用の申込を、その團體が到底支拂ふ事の出來ないほどの上演料を要求することによつて、間接に斷つたことに對して、その團體の機關雜誌がショウを攻撃したものであつた。今一つはスコットランドのある地方の文學研究會から講演を依賴されて、『時間がない』といふ理由で、一時はすげなく斷つた——その實は講演料が少ないといふことであつたとも云はれる——折りかへしこの依賴を又々、こんどは例の皮肉交りで、而もスコットランドの方言を用ゐて、相手を馬鹿にしたやうな調子で斷つた。それがひどくこの文學會の幹事を憤慨せしめ、彼れをしてデーリー・メール紙上でショウに宛てゝ公開狀を書かしめた。お前は時間はないと云ふが、時間はあり過ぎるほどあるではないか。で、なければ、お前のやうに眞裸になつて岩の上に寢轉んだり——これはショウが昨夏、地中海のある海岸に避暑した折、眞裸で岩の上に



（左より）エルスとショウとベネット

寢て居る寫眞が、麗々しくこのデーリー・メール紙上に載つたのを利用したのだ——ヤンキーのお機嫌を取つたりしてゐる——これもその折、ショウを訪ねたあるアメリカの學生（?）との談話の新聞に載つたのを利用したのだ——暇がない筈だ。——この公開狀はこんな書き出しで、ショウの冷酷と不親切とを批難したものであつた。しかし、よかれあしかれ、いつも問題の中心となり人氣の中心となつてゐるのがわがバアナアド・ショウなのは事實である。彼れの著書、例へば『知識階級婦人への社會主義手引』の如きも、一方に、彼れはこれによつて社會主義を知らずと罵られるかと思ふと、他方には、この書を讀まずしては現代思想はこれを解すべからずと推賞され、毀譽相半ばするにかゝはらず、異常な賣行を示してゐるのが、この書である。私は昨秋ショウの講演を一度、ホルボルンのキングスエー・ホールといふ講堂で聞いた。これはフエビアン協會の主催の『西洋文明は何處に行くか』といふ六回の連續講演の一つで——序でながらこの連續講演には哲學者のベルトランド・ラッセルや科學者のハルデーンや女流作家のレベッカ・エスト其他も出講した——ショウのはその最終の一日であつた。人氣者のショウのことゝて、廣い場內が立錐の地もないほどの大入であつた。ショウは巧みな諧謔で時々聽衆の頤を解きながら、『文明』といふ言葉のいかに曖昧であるかを說いた。そして、その白髮と白髭とを振り立てゝ微笑を含みながら熱心に說いてゐる彼れの姿は、一幅の好畫として、私の腦裏に殘つてゐる。



レベッカ・エスト

つひ、餘談に亙つて了つたが、イギリスの文壇には、ショウを始め、上に擧げた諸大家があつて、夫々一世の重望を荷つてゐる。しかし、これらの諸大家にもあきたりず、新しい文學を要望する聲も聞かれないことはない。中堅文壇の人氣作家の隨一であるヒュー・ワルポールが昨夏、『デーリー・エキスプレス』紙に公けにした『彼等の位置を誰れが取つて代るか』と題する論文などは、このことを最も露骨に又、最も大きく叫んだ要望の聲であつた。

謂へらく、ショウやゴオルスワージーやエルスや其他今日の英文壇

の元老連は、何れも五十歳以上の人で、彼等の將來に多くを期待することが出來ない。**英文學の將來は彼等よりも若い、そして新しい現代の作家に期待すべきである。**が、さて、いかやうな途を辿つて、現代の新しい作家は、上記の元老連に取つて代るべきであるか。ワルポールは、かやうに自ら問ひそして大體次のやうに自ら答へてゐる。

　彼れの考へによると、現代の文學は、――中堅以下の文學はこのまゝにして置いては、到底上記の大家たちの創造した文學に及ばない。といふのは、彼等中堅作家その他ヨリ新しい作家だちは、徒らに少數の智識階級者にのみ訴へようと腐心し、その結果、作が徒らに神經過敏的となり、脆弱なものとなり、餘りに斷片的なるものとなつたからである。『今日の文學の必要とするところのものは、勇氣と諧謔と構想とである。文學が少數の知識階級者に了解されるとき始めて偉大であるといふ觀念は過ぎ去つて了つた。吾々は、若い小說家が、かういふ舊觀念を脫し去つて、センチメンタルだといふ非難を意に介せずに、少くも二十人の生きた人物を、この中に描き込むやうな大きな作品をつくることを要求する。』彼れは又云ふ。今日ほど文學に取つて、大きな、新しい公衆のある時はない。一體、これまで英國の藝術は、その最も旺んであつた時には、決して一般公衆から遠ざかつたことはなかつた。チヨオサアも、沙翁も、ミルトンも、スコツトもサツカレーも、ヂツケンスも何れもさうであつた。今日の吾々が、この一般大衆を味方とすることに思ひを及ぼさないのは大きな誤りである。彼れは大體上のやうに云つてゐる。

　つまり今日の新しい作家が、シヨウ其他の大家連に取つて代るには、第一に、少數知識階級を目あてにするのではなく、一般大衆を目あてにすべきこと、それから勇氣を以て大膽な構想の雄大な長篇大作をものすべきであると彼れは說かうとしたのである。



ワ　ル　ポ　ー　ル

　ワルポールの論旨は論旨てふものとしては別に取り立てゝいふ程のことはない。しかし、日本の文壇の昨今の論議に眼を通してゐる聰明な讀者に取つては、彼れの所論は、いかにも低調に、常識的に響くであらう。例へば、彼れが一般大衆といふことを目標として取出して來たのは、たしかに正しい。しかし一般大衆といふことを取出す以上、その大衆の情趣或ひは意識すなはちプロレタリヤ意識といふことを同時に問題として必ず取出さな

くては何にもならない。これを取出すことなしに一般大衆を說くことは、日本では、明かにプロレタリヤ文學前派である。この點から云ふと、イギリスの文壇は——少くもワルポールの論旨を通して見たところでは正にこの前派だとも云へる。

尤も、イギリスの現文壇にプロレタリヤ文學がないといふのではない。新聞では勞働黨の機關紙のやうになつてゐるデーリー・ヘラルドや同じく勞働黨の週刊雜誌のニユー・リーダーなどに寄稿する文學者には、特にプロレタリヤ派に屬する人が多い。とは云へ、この派がその論議に於ても作物に於ても、日本のそれのやうに、ジャーナリズムの核心をなしてゐないことだけは事實である。だが、個々の作家の中にはこの派の立場から見てなか〳〵に優れた作家のないことはない。前にもその名を擧げた戲曲家マイルス・モリソンの如き、又、女流作家のレベッカ・エストの如きその尤なるもの〻第一である。

私は、イギリスに永く居つて經濟學を專攻してゐる茂木惣兵衞氏と一しよに、昨秋この二人の文學者を訪ねた。モリソン氏は四十位の年輩の人。もと俳優として令名があり、殊に沙翁物を得意としたといふことだが、大戰後から時代意識に眼ざめて戲曲に筆を染め、『爭鬪』『狂信者』等の力作を始め十數種の作物を公けにしてゐる。エストは一九一八年に小說『兵士の歸宅』を公けにし、つゞいて一九二二年に『裁判官』を發表した。前者では戰爭と人道の問題、後者では父と子の問題、戀愛と道德の問題、とりわけ母性の問題を取扱つてゐる。彼女は又、小說家としてのヘンリー・ゼームスの自然主義的手法を學んで、心理描寫に細緻の筆を弄してゐる。彼女は昨夏、又、その獨創的な藝術論『不可思議な必要』を發表して評壇の注目を惹いた。彼女は一八九二年の生れだから今年は三十七歲。逢つた感じは、明るい、快活な中に、どこかにどつしりした重味を感じさせる婦人であつた。私はこの二人の著書や二人についての參考資料を多少持ち歸つた。この二人は、こゝで簡單に紹介するには餘りに複雜であるから、いづれ稿を改めて、紹介する。が、こゝでは序でに、今一人の作家——昨冬突如として文名をなした全くの新しい戲曲家パアシー・ロビンソンのことを少しばかり紹介して置かう。

ロビンソンは、ゴオルスワージーの系統を追うた問題劇の作家で、昨冬その二年前に書いた『焦熱地獄』といふ作がキンダム座で上演されて、デーリー・ヘラルド紙をして『驚くべき眞摯と情熱とを以て作者が全世界に呼びかけた作』と云はしめ、オブザーバー紙をして『最も輝かしき悲劇』と云はしめ、モオニング・ポスト紙をして『作の中心は正義感であり、人道的精神であり、そしてこれは大膽に、眞摯に强烈に巧妙に演ぜられた』と評せしめ、あらゆる新聞をして、殆んど最大級の讚辭をこの新人に捧げしめたほどであつた。私自身にも、この作の上演は滯英中、私の最も感動を受けた芝居の一つであつた。

作は、『二家族の悲劇』と銘を打つたもので、ある病的發作からある女を殺した青年の心の苦悶とこの青年を取卷く一家の人々の心配と、

他方、この女を殺したといふ嫌疑を受けて、無實の罪に泣くこの女の情人と及びその老いたる母の悲嘆——この二家族の悲劇を取扱つて、その中に死刑のいかに恐るべきものであるかを提供してゐる。丁度ゴオルスワージーが、その『正義』の中で、牢獄の獨房生活のいかに恐るべきものであるかを取扱つたと似てゐる。そして、この『焦熱地獄』は、この死刑の問題を、單に問題を問題として、露骨に取扱つてはゐない。どこまでも藝術の衣を着せて、それを取扱つてゐること亦、ゴオルスワージーの『正義』と似てゐる。

私はある日、所用があつて、兼て知合ひになつてゐるキンダム座の支配人をその樂屋裏の事務所に訪ねた。と、そこに丁度この『焦熱地獄』の作者が來合せてゐたので、それからこの作者とちかづきとなり、彼れから晩餐に招かれたり、私も亦彼れを、ロンドンのある日本料理店に招いたりする間柄となつた。彼から直接に彼れの來歴をきいたところでは、彼れは一八八七年の生れださうだから今年は四十二歳。もとアイルランドの人で、十六歳の時ロンドンに來て、丁度兄が辯護士をしてゐたので、その事務所に這入つてその見習ひのやうなことをやつてゐたが、少年時代から耽讀して得た文學趣味と、天性の芝居好きとは、つひに彼れをしてその事務所を去らしめ、ある新劇團の俳優の群に投ぜしめた。それは一九〇八年のことであつた。その後の彼れは、一方に新劇俳優として研究の功をつむと共に或ひは舞臺監督の仕事をしたり或ひは作者の下仕事をしたりしたこともあつた。彼れがこの作を書いたのは一九二六年で、これがある新劇團で試演的に演ぜられたときには、彼れは、この作の中のある一つの大役を自ら買つて出てすこぶる好評であつたといふことである。思ふに、俳優として、又、作者の下働きとしての可なりながい間の經驗や、苦勞やらは、おのづから、彼れをして、机上戲曲とは異つた舞臺戲曲の眞諦を會得せしめたのでもあらうか。蓋しこのことは、俳優から戲曲家となつた前記のモリソンにも云ひ得ることであらう。


パシアー・ロビンソン

さて、次に轉じて、最近ジャーナリズムの問題になつた二つの事件について語らう。一つは詩人ロセッテイ傳に關するものであり、他の一つは女流作家ラデクリフ・ホールが性的倒錯、同性愛に取材した『淋

しさの泉』と題する大作の發賣を禁止されたことについての問題である。

昨年はラファエル前派の詩人畫家ダンテ・ガブリエル・ロセッテイの百年祭に當つたので、日本の文壇でも、この詩人についての記事を滿載した雜誌が刊行されたり講演會なども開かれた筈だが、イギリスの本國でも、無論、この詩人についての新しい興味の喚起されたのは云ふまでもない。その結果、これについての研究書や追懷記や、又、未だ發表されない手紙などが新しく編纂されて上梓されたものなど、この詩人に興味を持つてゐる者に取つて見落してはならないかずくの文獻が現はれた。その中でとりわけイギリスの讀書界に一つのセンセーションを起したのは、小說家ホール・ケーンの『ロセッテイの追憶』であつた。

『ロセッテイの追憶』は、從來のロセッテイ傳に見られなかつた一つの新しい資料を提供してゐる。ロセッテイが、モデルとして雇ひ入れたシダルと戀に陷ち、ながい婚約の後に結婚したこと、結婚後シダルが死兒を分娩し、その後憂鬱症にかゝつて間もなく亡くなつたこと、ロセッテイが妻を悼む餘りに、日頃書きためたかずくの詩稿を妻の遺骸と共に埋めたこと、後年友人のすゝめでその詩稿を墓を發いて取出して出版したこと、而もその出版した詩稿が、時の詩人で批評家であつたロバアト・ブカナンのために『肉派の詩』といふ題の下に手痛き批難を受けたこと、そしてそれが基で、前々から憂鬱症に惱まされてゐたロセッテイが、つひにその死を早めるほど一層深い憂鬱に沈むやうになつたこと等は、ロセッテイに興味を寄せる人の誰しも知つてゐるところである。ロセッテイの生涯は、戀人で戀妻のシダルと始終してゐる。彼れの喜びも悲しみも、望みも思ひ出もすべては彼女を中心にめぐり渦卷いてゐる。彼女は彼れに取つて戀の殿堂であると共に生命の殿堂である。

ホール・ケーンは、ロセッテイについての從來のさういふ見解とは異つて、ロセッテイと其妻とを三角關係の悲劇に惱む主人公及び女主人公として取扱つてゐる。そしてロセッテイの妻シダルの死を、その悲劇に惱んだ果の自殺だとしてゐる。この『ロセッテイの追憶』が讀書界の問題となつたのも無理ではない。

この書は、その頃──一八七〇年代──まだ一地方の無名の文學青年に過ぎなかつた著者のホール・ケーンが、どういふ經路を取つて、時の文壇の大家ロセッテイと親交を結ぶやうになつたかといふことから書き出して、妻を失つて憂鬱症に惱んでゐるロセッテイの家の書生として住み込むことから、唯一の看護人としてロセッテイの晩年を看護(みと)ることから、ロセッテイの健康を氣づかひ、誘つて北英のカンバアランドに相共に旅行したことから、更にその結果が、却つてロセッテイの健康を損じ、更に憂鬱になつてロンドンにかへる汽車の中で、ロセッテイが、これまで深くその胸の中に秘めて誰人にも語らなかつた『秘密』を彼れホール・ケーンに打ち明けたこと其他ロセッテイをめぐつた

文壇人の生活、ロセッテイの臨終等十七章に亙つた追憶である。そしてこゝで最も興深いのはこの『秘密』で、これが即ち上記の三角關係に關したものなのである。

ロセッテイ夫人のシダルは、もと、新オクスフオード街のある店につとめてゐた職業婦人であつた。ロセッテイの友で、同じくラファエル前派運動の加盟者の一人であるドブエレルといふ青年畫家が、そのシダルの紅い縮れた頭髮とその顏の官能的な中に、どこか靈的な高貴な面影のあるのを見て、乞うてモデルとして雇ひ入れたのが緣となつて後にはロセッテイの專屬モデルとなつた。彼女は無教育ではあつたが、次第にロセッテイの感化で、繪をよくし、詩を鑑賞し得るやうになつた。序でながら、私は彼女の畫いた小品をロンドンのテート畫廊のロセッテイの特別室に見て、それがロセッテイの繪さながらであるのに驚いたことがあつた。實際落款を見るまでは、私はそれをロセッテイの筆だとばかり思つてゐた。それほど彼女はロセッテイの感化を受けることが多かつた。ロセッテイも亦、彼女以外を描かなかつた。ロセッテイの初期の作の女が何れも一樣で、所謂ロセッテイ式であるのはこのためであつた。しかし、このロセッテイ式の女から直ちに想像し得る通り、シダルは人一倍蒲柳の質であつた。彼女は婚約中すでに健康を害したので、ロセッテイの先輩のラスキンの世話で暫くの間、田舍に保養に出かけた。彼女のこの留守の間に、いたましくもロセッテイに第二の戀が芽ばえたのであつた。そして『ロセッテイ追憶』の著者は、この第二の戀及びそこから生じたもろ／＼の悲劇こそは、ロセッテイが、著者に語るまでは深く秘して居つた秘密だと云ふのである。

ロセッテイの第二の戀の對象も亦モデルであつた。ロセッテイが廿八歲の時のこと、彼れは友人のバアン・ジョーンスやヰリアム・モリス等と共にオクスフオードのユニオン・ホールのステーンド・グラスを描いたことがあつた。その時モデルとして雇ひ入れた女が即ちそれであつた。しかし彼れはすでにシダルと婚約の身であつた。そればかりでなく、モリスも亦この女に戀し、間もなく彼女と結婚した。ロセッテイも亦、戀の痛みを胸に抱きながら、それから間もなく田舍から歸つて來たシダルと結婚した。

しかし敏感なシダルは、やがて夫の胸の中を見すかさずには居なかつた。病ひがちな彼女は、そのために一層健康を害し、憂鬱病となり不眠に惱まされた。彼女は夜毎々々に阿片劑を用ゐた。阿片劑の分量は次第に多くなつた。ある夕彼等夫婦はレエスタア・スケヤに住む一友人から晩餐の招待を受けた。彼等はブラックフライアー橋の彼等の住ひから途の中程のストランドのあたりまで來たが、シダルはその日は、殊に氣分が優れなかつたので、並んで歩いてゐたロセッテイも、それに連れて不快な氣分が萌じて來た。彼れは、シダルを途中から獨りで家にかへしてやり、自分だけ友人の家にやつて來た。遲く歸つた彼れは妻の部屋が阿片の匂ひでむせかへるばかりになつて居り、その

上妻が、殆んど意識を失つて倒れてゐるのを見て仰天した。彼れは直ちに醫師を呼んだが、それはすでに遲かつた。彼女は阿片劑を多量に飲んで自ら殺さうとしたのであつた。而も彼女は彼女の傍に、夫に宛てゝ、夫を怨む一片の手紙を殘しながら。ロセッテイのその後――シダルの死は一八六二年――の憂欝はすべてこゝに芽してゐる。彼れは眞心こめて愛すべき筈の妻を愛さなかつたことの悔恨に常にさいなまれてゐた。彼れがその詩稿を妻の棺(ひつぎ)と共に埋めたのも、つまりはこの悔恨の氣持をいくらかでも輕くしようとするためであつた。

『ロセッテイの追憶』の著者は、大體、上のやうに書いてゐる。そしてこれは今より四十六年前、上に述べたやうに、カンバアランドから相携へてロンドンへかへる汽車の中で、ロセッテイ自身の口から聞いたのだと斷つてゐる。

以上の三角關係の悲劇は――果して本當だとすると確かにロセッテイ傳の新しい材料に相違ない。が、私は今、こゝで他の文獻を漁つて更にその眞僞を確かめるための暇を持つてゐない。たゞこれについて私が直接に得た一二の人の意見を紹介するにとゞめて置かう。

一つは詩人アーサア・シモンスの意見である。私はこの春この詩人を訪ねて、さま〴〵の話をきいたり、したりした折りに、談が偶々このことに及んだ。と、シモンスは苦もなくそれを打ち消した。ロセッテイはモリス夫人をモデルにして繪を畫くには畫いたが、夫人と戀仲であつたといふやうなことは曾つてない。シモンスは、更に轉じていふ。しかし、ロセッテイはすぐれた詩人が誰しもさうであるやうに、多くの女を愛し、多くの女を漁つたと。

今一つはかの浩瀚な『ロセッテイ傳』の著者として英國に於けるロセッテイ研究の權威であるマリー・エルの意見である。序ながらこの人の『ロセッテイ傳』は一八九九年の出版にかゝり、主として畫家としてのロセッテイを編年史的に取扱つたもので、材料の豐富なのと正確な點で最も重きをなしてゐる。この人は、又、ロセッテイばかりでなく一面に、ヰリアム・モリスの研究家で、且つその事業の重大な一面であるモリス商會――モリスの意匠になる手巾、絨緞、窓掛、壁紙等の製作販賣を主とするもの――の繼承者で、現にその監理者となつてゐる人であつて、モリスについてのかず〴〵の著書もある。私は實はモリスについて特別に質したいことがあつたので、あの人をその商會に訪ねたのであつたが、やはり談、たま〳〵ロセッテイの三角關係のことに及ぶと、マリ・エル氏は、一種の憤りをさへ含んだ調子で全然それを否定した。そして、更に附け加へて、ホール・ケーンは、今日でこそ著名な文人ではあるが、ロセッテイ在世中は、ほんの驅け出しの作家に過ぎず、且つロセッテイの家に同居して居つたとは云ふものゝほんの玄關番程度のものであつて、ロセッテイの心の秘密などを窺ひ知るわけもなく、ロセッテイも亦、語るわけもない。ロセッテイのモリス夫人との三角關係云々のやうなことは、彼れが小説を書くと同じやうな心持ちでつくり上げた小説的ロオマンスに外ならないと云つた。

それから、私は轉じて、ロセッテイは、果してシモンスの云ふやうに、多くの女を愛し、多くの女を漁つたかといふことをたづねた。マリ・エルは言下にそれをも否定して、さて云ふやうには、ロセッテイは妻の死後、暫くしてからやはりモデルのフアンニー・コオンフオースを愛し、それと內縁の關係を結んだ。しかしロセッテイのその後の女は、たゞこのフアンニーだけであつたと。さうなると、三人が三人とも異つた意見であつて、何れを信ずべきかゞわからなくなる。尤もこの中でシモンスの言葉は多少のハンデキヤップを置いて受け取らなければならない。といふのは、彼れは、暫く瘋狂院の人となつて、最近出て來たとはいふものゝ、まだ十分によくなつてゐないといふことだからだ。が、この點ではホール・ケーンの云ふことにも、私たちは或る程度の警戒を要するかも知れない。それは、彼がこの『ロセッテイの追憶』を昨年九月末に公刊してから間もない、十月の初めに、健忘症と神經衰弱とにかゝつて南英の海岸に轉地保養をする身となつたからだ。するとこの書は、健忘症にかゝる少し前、而も四十六年前の記憶を辿つたものであるから、果してそれが正しい記憶であるかどうかといふことも考へて見なければならなくなる。とは云ふものゝマリ・エルのやうに、絕對にホール・ケーンの云ふことを否定して了ふことは出來ない。たとひ玄關番ではあつても、主人からその心の秘密を打ち明けられるといふことは有り得べきことだからだ。そればかりではなく、人間は心に深く秘してゐる大切なことを、自分とは餘り利害關係のない、異つた階級の者に打ち明けるといふことが、却つて有り得ることだからだ。



ラデクリフ

ロセッテイの三角關係の悲劇は、結局、彼れの傳記に秘められたいたましい一個の謎である。

追記『淋しさの泉』は同性愛といふ題材の特異である點からも、發賣禁止と檢閲問題の上からも興味ある事件であるが、思はず與へられた紙數を超過した上に、編輯のメ切にも間に合はなくなつたので、他の機會に讓つてこゝには割愛した。(四月九日記)

吉會線上を走る

嘉治隆一

一　序言

支那革命の問題は三民主義の立場からは一段落を告げたものと見られないこともない。然し、階級的運動の視角よりすれば寧ろ今後の進展が重要なのである。如何に勞農兵を原動力としてゐたとはいへ、それが一種の民族運動であつた以上、當然そこには越え難き限度がなければならなかつた。從來行はれた一切の革命運動が窮極に於て何れも勞農兵に據つて立ち乍ら、而も必ずしも總てが、社會主義革命たり得なかつたことは歴史の示す通りである。過去に於ける支那革命運動もこの例に洩れず、到底、中途半端のものたるを免れなかつた。勿論それは明かに一の歴史的意義を有つてゐたのではあるが、それにしても、運動の國民的色彩が階級的色彩を稀薄にしたことは疑なき所である。この點についてはロシア始め各國の共產黨の多くが認識の上に多少の錯誤を犯してゐたのではないかと思ふ。鹿を追ふ者が山ばかりを見てゐてはならないが、然し、社會運動は闘爭行動であるから、中には山を見ながら鹿を追ふ者もあつて差支ない筈である。人間の認識に錯誤は必ず伴ふものではあるが、それにしても、之は出來る限り避けたいものである。犯した錯誤を潔く清算するのは勇敢である。それと共に錯誤を犯さぬ様に努めるのは、聰明である。ともあれ今日に於ては過去に於ける支那革命運動の不徹底が一般に知られるに至つた。

たゞこの運動が徹底的であつても不徹底であつても、どうしても重大な影響を及ぼさずにはおかないのは滿洲である。而して滿洲の問題が如何に解決せられるかといふことが、直接に支那革命運動の前途を支配するのみならず、間接ながらも世界の社會運動に強激なる反響を及ぼさゞるを得ないのである。更に滿洲問題が日本の社會進化に如何に深大なる波紋を投ずるかといふことに至つては改めて絮說する迄もない。隨つて滿洲の問題は支那の問題であり、日本の問題であると共にロシアの問題であり、そして又、世界の問題でなければならぬ。今や天下の視聽は滿洲に集るといふも過言ではない。

二　吉會鐵路問題

昨今、日本の滿蒙に於ける懸案の隨一に擧げられてゐるのは、土地商租權と鐵道敷設權との確保に關する問題である。但し、何れかといへば前者は個人的立場を本位とする場合が多く、後者は國家乃至之に代る特殊機關が當面する場合が多い。尤も、商租權が賦與せられるとしても、その獲得者の多くは自らその土地を利用して生産に從ふといふよりは、寧ろ單にその權利の貸借又は賣買によつて射利の目的を達せんとする利權屋の活躍を刺戟するに止る場合が多いことは他の先例に徵しても明である。多年日支間の懸案となつて來た商租權の問題が容易に落着しない有力なる原因は確にこの點にある。然し、商租權の問題は茲には取扱はないことゝし專ら鐵道敷設權について考へて見たい。

さて滿蒙に於いて日本の有つと信ぜられてゐる鐵道敷設權は四五にして止らないが、其中に於て特に重要視せられ、近來殆ど唯一の問題たるかの觀を呈し、昨今に至つては之が解決そのものが直ちに滿蒙問題の解決たるかの如くさへ見られてゐるものは吉會鐵路敷設權である。怪死前の張作霖との交渉、その後に於ける楊宇霆、張學良の對立を挾んでの日本政府の焦躁狂奔、そして最近に至つての張學良の責任轉嫁、國民政府の反對、張作相の肘鐵砲等、一切の紛爭は之を中心としてゐる。何故にかくの如き現象を現出したのであるか。この疑問を解くがためには一通り從來の行掛り並に關連の現狀を知つておく必要がある。そしてそれがためには、先づ第一に滿蒙の地圖を開いて見る必要がある。

北滿を西から東に向つて東支鐵道が走り、その中心點たる哈爾賓より東支南線が長春に至り、之に續いて南滿洲鐵道が大連まで南下して殆ど完全に近い丁字形をなしてゐることは人も知る通りである。嘗てはこの丁字形が滿蒙に於ける物資の集散を司る幹線となつてゐた。而して北滿に棲息するロシア人と南滿に盤踞する日本人との數何れも二十萬、ひたすら所謂一富源の開發一に盡瘁しつゝあつたが、この獨占的地位はいつまでも續く譯には行かなくなつた。即ち、東支南線及び南滿洲線に並行する競爭線として齊々哈爾より洮南、鄭家屯、通遼を經て京奉線打虎山に至る洮昂、四洮、打通の諸線は一方には連山灣及葫蘆島を開き、他方には溝帮子、河北間に支線を設けて營口を自由にして大連に對抗しやうとして居り、その背後には英米の手が動いてゐると噂されてゐる。次に、東支本線に並行するものとして企てられてゐるのが、問題の吉會線であつて、長春より會寧に出で、清津を海港として浦潮に對抗せんとするものである。勿論その他に西滿洲と內蒙古とのことも勿論重要視せられてゐるけれども、現在までは、經濟的といふよりは寧ろ軍事的政治的意義が力說せられて來た傾向があるのであつて、經濟的重要性は何といつても、森林に鑛山に農業に無盡藏の寶庫をなすと見られてゐる東滿洲並に之を橫斷して朝鮮と連絡し

やうと企てる吉會線の上に置かれてゐるのである。東部滿洲を左右するものが何れの國であるかといふことは小さな問題な樣に見えて決してさうではない。されば日本政府の如きも、最近に至つて南支、中支方面に於ては嫌々乍らもかなりの讓歩を行ひつつ、この吉會線の一點に就ては常住努力を怠らず、手を變へ、品を代へて所志の貫徹を企てゐる譯である。

長春より吉林、敦化、龍井、會寧を經て淸津港に至る距離は三九六哩と測量せられて居り、長春より奉天を過ぎて大連港に至る四三八哩に比べてはかなり短い。勿論、坦々たる南滿の平原を走る場合と山河、森林、隧道に多くの抵抗を見出す東行線とでは單なる距離の相違以外の要素も考慮に入れなければならないが、その代りに物資が線路の眞近い所から出るといふ便宜も忘れてはならない。加之、大連より門司までは海路六二〇浬であるに反して、淸津より門司へは五〇〇浬、敦賀へは四七五浬に過ぎないといふ事情も注目に値する。況んや、東部滿洲には八十萬の朝鮮人が事實上定住してゐるに於ておや。

さて吉會線に關する日支の交渉の沿革であるが、之については順序として先づ吉長線のことに溯り、兩者を聯關せしめて觀察する必要があるやうに思はれる。吉長鐵路は延長七九哩、中國交通部の直轄になつてゐるが、その敷設に關しては元來、遠く一九〇二年(明治三十五年)ロシヤの東支鐵道と支那政府との間に將來、吉林支線の敷設を引受けるといふ豫備契約があつたのを、その後、日露戰爭によつて形勢に變化を生じ、一九〇七年(明治四十年)の日淸條約により、吉長鐵路が敷設されることがあれば、その資金の半額は滿鐵より貸與することに協定し、翌一九〇八年、續約を結んで吉長線敷設のことを契約し、更に一九〇九年(明治四十二年)に愈々建設の協定を遂げた末、敷設費の半額二一五萬圓を支那側に交附して建設を行つたのである。淸朝が亡び、民國政府が之に代つたが、一九一五年(大正四年、民國四年)に至つて日本の出資額は追加せられること〻なり、總額六五〇萬圓に増加して三十年間の借款と改められ、經營と會計とを滿鐵側の派遣員によつて引受けて現在に至つてゐる。同鐵道は右の六五〇萬圓を日本政府より借入れてゐる外に、尙、支那の銀行からも八五萬圓位の借款があるといふ話であるが、支那の國有鐵路の中では運輸狀態その他を通じて比較的良好なものである樣に見受けられる

吉會線の方は、吉長線が建設に着手せられた一九〇九年(明治四十二年)の日淸條約の際に、將來その敷設を日本が助く可きこと、その手續は總て吉長線の場合に準ず可きことが契約せられたのが最初である。所が一九一八年(大正七年)に至つて時の寺内內閣により有名な西原借款の一部としてこの鐵道建設のために一〇〇〇萬圓が民國政府に前渡せられ、六ケ月以內に着手を許可する旨を約束しておき乍ら、結局不履行に終つてゐたのである。かくて數年間は問題は全く停頓してゐたが、東三省に於ける張作霖の覇權が確立すると共に交渉も漸次進捗し、一九二五年(大正十四年)に至つて、新なる契約が成立し滿鐵の

手で以て工事の請負を約束して吉林、敦化間の線路を建設することに決定した。それがために費された請負工費は一八〇〇萬圓、後に隧道鐵橋等の工事に豫想以上の經費がかさんだといふので總計二四〇〇萬圓に增加せられて、一九二六年(大正十五年)夏から、一九二八年(昭和三年)秋までかゝつて竣工した。この哩數一三一、吉會線の豫定距離二六二哩の約半分に當る。但し、會寧より鮮滿國境までは圖們鐵道滿洲側に入つてからは圖們江岸より間島の老頭溝に至るまで天圖鐵路が、同一資本系統を以て建設せられてゐるのであるから、事實に於て餘す所は、敦化、老頭溝間の六〇哩に過ぎないのである。

昨年の春、未だ張作霖が北京に餘命を繋いでゐた頃、日本側は最後の努力を試みた結果、今年五月中旬までに鐵道敷設に關する一切の手續を完成すべきことを約した鐵道敷設協約が成立したと傳へられてゐる。そのために、日本人間に糾紛あり、脫け馳けの功名を狙ふあり、隨分見苦しい場面もあつたのみならず、少からぬ犧牲も忍ばれたもの〻如くである。聞く所によれば、その契約書に張作霖は署名捺印せずして單に「閱」とのみ筆書したに止るともいはれてゐるが、眞相は今のところ明ではない。何れにしても大切なことは契約書の形式ではなくして、張作霖の死後、東三省に據つて立つた後繼者の頭中がこの問題を進捗せしめ度くないと考へてゐるといふ事實である。一時は楊宇霆を動かしてこの問題を解決しやうとした事もあり、結局、彼の死歿した今では張學良を交涉の相手とするの外なくなつてゐるが、彼は明に問題の解決を阻止しやうとしてゐると見て差支ない。それが彼自身の意志に基くか、或は他からの使嗾乃至強要に因るかは問ふ所ではない。或時は南京政府に一切の交涉を移管したといひ、又、或時は地元の吉林省督軍の張作相が日本の資本によつて建設を遂げることを喜ばないといふも、詮ずる所、彼は何等か、日本の投資を喜ばず、而もその責任を他に轉嫁しやうとするものであること疑を容れない。

然らば何故に東三省當局は日本の勢力の扶殖を喜ばないか。要するに東部滿洲の開發が專ら日本の手によつて營まれ、物資は朝鮮に出で而も、現在甚しく壓迫しても尙且、妨止することの出來ない、朝鮮人の入滿は益々激增することになれば、事實上、同地方が分裂するやうなものと見てゐるのである。之は東三省當局の苦痛であり、南方政府の喜ばない所であり、そして又、日本を除く列國の殊に警しめんとする事柄である。そこに問題の難點が潛んでゐる。この難點は如何に解かるべきであらうか。强力に訴へて是が非でも斷行すべしといふ强硬論も日本の一部に行はれてゐる。反對に、滿蒙不干涉の立場から向ふの欲しない事はやつても仕方がないから一切を引けといふ說もなり立ち得る。之はいはゞ、私有財產は止むを得ないから何でも彼でもとり込めといふ立場と、私有財產は不合理であるから、即時無條件に之を放擲すべしといふ立場との對立に類似してゐる。然し、現實の問題は今少し複雜である。兵士を繰出して事件が解決すれば事は簡單である。それから又、手を引くといふだけで一切が終れば事態は更に一層

簡單である。然し、現實の問題は今少し複雜である。

たゞ傾向として見れば、近來、事の眞相を知る者ほど強力說に耳を藉さなくなりつゝあるといふことはいへると思ふ。現にこの問題に對して最も密接なる關係を有つ滿鐵側の意見として公にせられた所を見ても、政府部內の一角に實力を背景に積極的强硬政策に訴へろといふ議論が起つたのに對して、絕對反對の意を表し、政府內の一部穩和論者と共に支那問題は常に合理的解決を必要とし、無理押しは大禁物の旨を明かにしてゐる程である。(四月一日「東京朝日」朝刊參照)

私は幸に最近、同地方を旅行する機會を得たゝめに、この問題の解決に資すべき一個の腹案を暗示せられて來たのであるが、之について述べる前に、先づ、彼の沿線の見聞を簡單に紹介しておき度いと思ふ。

三 長春より敦化まで

三月一日の午後五時半に長春を發つたが、精確に三時間で吉林についた。吉長線の由來については既に之を述べたから略するが、所要時間が非常に短縮されたのには驚かざるを得なかつた。勿論、從前と雖も精確さには變りはなかつたが、然し、嘗てはこの間に四時間半位を要したころもあつた樣に記憶してゐる。七九哩を三時間で行くのだから、支那の汽車としては立派なものである。それに乘客も仲々多くなつた樣であり、日本人も大分乘つてゐた。殊に珍しく思つたのは吉林在留の日本人の一隊が娘達を長春女學校の入學試驗に連れて來た歸途、同じ車に乘り合せてゐたことである。彼等は列車の車掌(支那人)と親し氣に話し合つてゐたが、吉林に着くや二組位宛、迎への馬車に分乘して城內の方へ歸つて行つた。何となく、寒い、冬の夜、北國の城下町に降りた樣な氣持さへさせられた。

翌朝は早起、午前七時の敦化行混合車に乘る。之は數十臺の貨車の間にたつた一つの三等車をつないだ列車である。列車は毎日二回あり晝過に出發する方は純然たる客車のみであつて各等車が聯結されてゐるが、この朝の列車には客車は一個しかない。而もそれが出稼の苦力でぎつしりすし詰になつてゐて宛も震災當時に東京を出る列車の樣である。それに車體は滿鐵の三等車が廻されてゐるのであるから、相當のもので天井も高いが、たゞ二重窓の外の硝子は雪と氷とで凍りつき內側の硝子は煤と埃とで眞黑くなつてゐるので全く外部が見えず、辛うじて薄日の影がさすといふ有樣である。その中に苦力が文字通り立錐の余地もなく乘込んでゐるのだから想像に余る。苦力共は蓬髮垢顏襤褸を幾重にも纏つた上に、頭には毛裏の帽子を頂いてゐるが、中には一尺もあるやうな深い毛皮をつけたものを冠り、垂れを上に折り返してゐる奴もある。安煙草の煙が濛々と車內を立ち籠めて居り、ヤニの臭、ニラの臭、誠に叫喚地獄を此世にして見るやうである。

私は窓際に席をとり、隣りには北京滿鐵公所のT・M君が坐り、私の前には、私と同じ時代に學校を出て今では單身吉林に行つて木材業

をやつてゐる快男兒S・M君が坐り、その隣席には同君の下に働いて木材の買出しに終始山へ入つてゐるＫ君が坐ることゝなつた。座席が之でいゝとして、今度は窓である。長い間かゝつて私は窓硝子を拭ひ窓枠の氷雪と煤垢とを小刀でけづり落してやつと四五寸ばかりあくやうにした。三月に入つても未だ仲々寒く、四圍の山野には雪が積つて居るし、松花江にはまだ厚氷が張りつめてゐるといふ有様である。窓外の風は身を切るやうに冷かであるが、車内はスチームと人いきれとで蒸されるやうに温い。私共は時々、四五寸あけた窓から鼻先だけを出して外の空氣を吸ひ乍ら行つた。さうすると苦力連中も時々おし合ひ乍ら私達の所の窓から外を覗きに來ては何か話したさうにこちらの顏を見る。例の一尺もある毛皮の帽子を逆立てた男が來たから、何の毛だときいて見ると、狗子と答へる。仲々いゝねといふと、一向よくないですと笑ひ乍ら答へる。誠に以て天下泰平、排日の本場で日支親善の形である。

所が困つた事には汽車が恐ろしく愚圖々々する。先づ出發驛で遲發二時間、途中でも思切つて漫走である。元來、殊更に午後の客車に乘らずして早朝の混合車を擇んだ譯は、敦化の手前二時間許の所にある威虎嶺の原生林を明るいうちに通つて車窓から充分に觀察したい爲であつたが、結局途中で午後の汽車に追拔かれるまでに遲着したゝめ、折角の早起が徒勞に歸した。吉林、敦化間は一三一哩で今のところ早ければ八時間、遲くも十時間かゝれば着く筈であるのに、私共の汽車は十時間以上も延着した譯である。然し、乘務員が說明に來るでもなければ、次の停車場で辯疏があるでもなく、又、乘客も誰一人苦情をもち出す者もない。驚くべき事はそれのみには止らない。吉林、敦化間の三等乘車賃は三元八角(三圓八十錢)なのであるが、各人頭割に一角五分(十五錢宛の教育稅が附加せられてゐる。之は吉林省に於ける教育費を旅客が分擔するものであるが、いふまでもない苦力共は大體山東、山西あたりからの出稼人であつて目に一丁字もなり連中である。その無教育な彼等が他鄕の他人の子の教育の費用分擔させられて平然としてゐるとは愈々皮肉である。兎に角、支那の下層者は大國民である。

吉敦沿線は全體としては森林地帶であるが、所々、相當に高峻な山岳がある。吉林、額穆二縣を限る老爺嶺、額穆、敦化二縣を劃する威虎嶺等がそれであつて、それを中心に樹木の多い所があり、それを離れると盆地が開け、河が流れてゐて、蛟河、敦化等の町を培つてゐる。樹種は專ら白松、紅松等のハードウッドであるが、概ね長さ十二尺又は二十四尺、直經三尺乃至四尺、樹齡約百五十年位を閱したものであつて、殆ど無節の逸物が、極めて廉價に買へると聞いた。鐵道開通前には、一筋の往還が吉林から東方に通じてゐたのみであつて、交通は至つて不便であり、馬賊は横行してゐたゝめに此方面に木材が出されることは寧ろ珍しい方であり、多くは南の方、松花江の上流に落して河を下すか、又は北の方、牡丹江に落して東支沿線の方面に運搬

したものであつたといふ事をきいた。然るに、今日では殆ど引つ切りなしに林場が開かれて材木はどんどん各驛に持ち出されてゐる有樣でどこもかしこも職場の樣である。殊に額赫穆、六道河、老爺嶺、拉法等に多いやうに見受けた。

森林は總てその持主又は林場權の所有者が、一定の山份(租稅)を徵收し、取締を行ひ乍ら、之を把頭(苦力頭)の自由伐採に委ね、後者は伐りて自ら材木業者又はその現場廻りに賣るか、さもなければ、始より一定の財東(出資者)を見出して之と連絡をとり乍ら、伐採を行ふ仕組になつてゐる。そして日本人は自ら森林又は林場權の持主となることは出來ないものであるから、合辦を申入れるか、入山證又は材木賣買契約の形式を以て處分權を買收し、自ら把頭と結んで苦力(木工)を使用するか、或は、財東となつて把頭を助けてその切り出す材木を獲得するか、さもなければ把頭又は財東(この場合は支那人)から伐木を買入れるのである。吉林の町だけにでも、木材等を營む日本商人の數は四十數軒に及んでゐる。而して、丁度、生糸商人が信州邊へ繭の買出しに出かけると同じやうに、彼等の下廻りの日本人が常住、この沿線の林場や材木搬場を巡回して堀出物を探してゐる。

把頭は林場主又は財東から作業準備金を現金又は物資の形で受け、苦力の一隊を率ゐて、十月頃山に入る。伐採は二月頃までに終り、氷雪の上を溪川の岸にまで運び出して置き、三四月の頃、桃花水と呼ばれる春の水が決河の勢で流れ落ちる時に材木を流して下流に送る。彼等は稍、水量の多い所に出れば之を集めて筏に組み、吉林へ出てゐたのである。そして多くは九月頃に完全に賣拂つて資金を回收してゐたのであるが、吉敦線開通後は河水の溶解を俟たずして、直ちに氷雪の上を馬橇で鐵道沿線へ搬出すれば換價出來る樣になつたから、續々伐採して運搬してゐる。この運搬夫には附近に定住して農業を營んでゐる馬持の百姓が臨時に傭はれる。財東より渡される賃銀は把頭が日本金に換算して一日七八十錢、下働の苦力が四五十錢、臨時傭の運搬夫が一日二十錢位となつてゐるが、把頭が隨意に頭をはねることはいふ迄もない。次にはそんなにして伐採される材木の値段であるが、直徑三尺位の紅松の十二尺物が山では五六十錢、それが、敦化で七八圓、吉林で十二三圓、大連では二十圓位になるといふ話である。之には勿論吉林省の租稅が含まれて居り、その額は民國三年の國稅徵收處の決定では賣價の一割となつてゐたが、現在では著しく加重せられ、吉敦沿線では賣價の三割二分、東支沿線では二割位となつてゐるが、之は餘りに高いといふ不滿が高まりつゝあるやうであつた。然し、現在の如く、濫に伐採が繼續せられゝば、この沿線で一日往復行程の範圍內の森林は五六年で盡きるといふ有樣であるから、吉林省當局も氣が氣でなくて制限を加へやうとするのかも知れない。現に持主の不明な所は全部、吉林省官銀號のものと布告して、一切伐採を禁止し、その森林を擔保として紙幣の暴落を防がうとする企もあるときいた。(この採木と勞働との狀態については別に五月の『我等』に稍詳細に紹介するつも

りであるから、茲には省略する）

森林は未だ車窓から認められる程度に殘つてゐる所も少くないが、線路近くまで原生林が迫つてゐる所は、今日では威虎嶺の停車場附近のみに限られてゐる。その外の所は、山や谷や平原や沮洳地であつて、中にはかなり開墾せられてゐる農業地もあつた。作物は大豆、包米、麥、粟、黍の類が多く、一般的に云へば、林業の次が鑛業であつて、その次が農業といふ順序の樣である。但し、鑛業は石炭の外、諸金屬も相當に埋藏せられてゐるにも拘はらず、吉林省令として民國十四年（大正十四年）以來、總て始掘を禁止せられてゐたが、最近に至つて十五萬元の保證金を提出すれば、支那人に限つて發掘を許すことになつた。之は無論、同省當局の金儲政策であらうが、然しそれによつて今後鑛業が盛にならないとも限らない。

夜の八時四十分に至つて始めて敦化驛につき、馬橇に乘り廣々とした雪原を滑走して十數町を距てる敦化城北門內の宿舍に着いた。そして疲勞と寒氣と空腹とでかなり弱つてゐる身體を炕の上に横へた。

四　敦化より會寧へ

敦化には三月二日に着いて七日までゐた。尤もその間に牡丹江上流の森林帶を見に行つて來たりしたから滯在は中斷せられたが、それでも町の容子だけは充分に知ることが出來た。この町は昨年秋の鐵道以後著しく發展しつゝあるものゝ如く、曾ては吉林から陸路十日、冬期に馬橇を利用しても七日を要し、大連からの手紙が二週間かゝつたものが、今日では長春を朝立てばその日の夜には着くといふ有樣である。現に私の滯在中、二月廿八日附の大阪朝日新聞が既に三月四日には配達せられて來た。そんな譯で人口も漸次增加し、支那人は鐵道開通前一萬四千であつたものが四五ヶ月の間に二千人增加し、朝鮮人は附近を含めて一千七百より二千五百人に、日本人は滿鐵公所のM・K君一人であつたものが、今日では五十人に達してゐるといふ。隨つて地價の如きも暴騰し、大正十三四年頃に比べて十四五倍になつたさうである。

敦化の町は奇麗とはいへないが、それでも東西南北に城門を有ち、全部平屋建が並んで居て、中央十字の大通には人道、車馬道が截然と別たれてゐる。人道には鹿や猪の臓腑を脫いだ毛皮の儘の屍體が盛に轉がされて賣られてゐた。全身が凍り切つてゐるので何の臭氣もなく誠にさつぱりしたものである。郊外に出て見ると山の方から材木をのせた馬橇が陸續と出て來て停車場からの引込線の附近に之を積み上げて取引をしてゐるのが盛に見うけられた。又、市外を流れる牡丹江は無論まだ堅く結氷してゐたが、その岸には昔の敦東城趾が空しく土壁のみを止めてゐた。この町の欠點は馬賊の多かつたこと、惡水より來る風土病の多いことである。少し大きな邸宅には必ず四隅に物見がついてゐるのは、馬賊防衛の爲であるが、其方の心配は今日では殆どなくなつた相である。たゞ水の惡い爲に關節炎、脊椎炎が多く、子供が

育ち難いときいたが、成程、子供は少かつた。尚、敦化で驚いたことは内地のラヂオの良く聞える事であつた。私共は久し振に東京のニユースを其日の中に聞いて身が敦化にあることを忘れた。違ふ所は東京で九時といつてゐるのを八時に時間を合せばいゝ點だけである。滿鐵公所のK君はその中、ラヂオ新聞を出さうと思ふといつてゐた。

　敦化盆地の周圍には低い山脈が連つてゐる。その東南の一角を突き拔けて三月七日の朝、朝鮮に向ふことゝなつた。吉會線といつても唯漠然と兩地間を結ぶ鐵道といふのみで、その經由地については未だ確たる成文はなく、茲に二六二哩といつたのは、要するに敦化、老頭溝、龍井、和龍、會寧を結びつけた最短距離に過ぎないのであつて、地勢からいへば寧ろ山を避けて龍井、圖們江岸、上三峰を經て會寧に出た方が容易であらうと稱せられてゐる。さうすれば距離は多少遠くなるが、既設の天圖鐵路及び圖們鐵道(後者は今年四月一日より國有に編入)を利用することが出來るから、却つて簡單であらう。何れにしても問題は敦化から天圖鐵路の終點、老頭溝に至る六〇哩の間に横つてゐる。

　この間は馬でも二日行程であり、冬期に馬橇を利用しても三日は必要であるが、唯、嚴冬のみは道路が雪氷に蔽はれて居るのみならず、途中の河川が全部凍結して其儘、交通路となるから、昨年末から多期だけ自動車が通ふやうになつた。たゞ雪が餘り深かい時には車が落込んで動けなくなり、反對に氷が薄くなつて底の方が解けるやうになると車がめり込んで沈んで了ふ。そこで氣候と天候との工合を考へるのが何より大切である。殊に十五六人も載せる乘合自働車にでも乘合せたらばそれこそ危險が多い。然し、小型の車に乘つても油斷の出來ないことは云ふ迄もない。現に四五尺もある雪の中に落込んで上れないので、近所の村の百姓に馬をもつて來て引上げて呉れろと頼んでも仲々承諾せず、現金を前渡してやつと願を容れて貰つたといふ樣な話や、氷の中で車が足踏ばかりして結局、途中で下ろされて附近の百姓家に泊まらせられたといふやうな話は決して珍しくない。

　もう一つ脅かされるのは、途中に所々山地があつて馬賊が出たことがあるといふ噂である。就中、哈爾巴嶺(六五二米)等、昔は馬賊の巣窟であつたといふやうな話をきくと確に氣持はよくはない。殊にハルパレイといふ名前の語呂がいかにも馬の蹄と鐵砲との音を想像させるやうな氣持さへする。然し、近頃はずつと引續いて平安であるといふ話に少からぬ信頼を置いて小型自働車に乘つて出發した。自働車は敦化に移住してゐる朝鮮人企業家の經營する所であつて、運轉手も朝鮮人であつて支、鮮、日語を巧みに操つたので非常に便利であつた。小さな峠を四つ越えてから、漸く哈爾巴嶺に來た。この間に要する時間約一時間五十分。道中すべて山には雪、平地にも雪と氷とで土地の模樣は判明し難ねたが、大體に於て平地は開墾して農作をやつてゐるやうに見えた。兵營が二個所あり、極めて稀に民家があつたに止まる。たゞ時々、物資を滿載した驢馬の一群が支那人に引率せられて街道の

方へ動きまず歩いてゐたのは奇觀であつた。之は正しく關稅の關係であつて、朝鮮からの輸入稅が非常に高いために、こんな勞力を費して運搬して行つても充分採算が出來るのである。石油箱が澤山運搬されてゐたので運轉手に聞いて見たところが、その話によれば、自働車用のガソリンが敦化では一鑵入圓五十錢のものが間島へ入れば十一圓五十錢もするといふ事であつた。

哈爾巴嶺は相當に深山らしく、兩側の谿もかなり深く、一寸天嶮を越えて南伊豆へ出るといつた感じを懷かせられる。雪は仲々深く、峠に小さな廟だけが一つ淋しく南面してゐるのも、何となくふさはしい氣持がした。それは單に嶺といふよりは、一脈の山帶であつたが、之を越えると愈々間島で土地が急に平坦になり、村屋や宿屋なども見え出した。たゞ玆まで來ると朝鮮人が非常に多くなり、道行く人を見ても宿屋の名前を見ても一つとして朝鮮臭味の籠らざるはない。中には遙々南の方から一家眷族引具し何臺も車を聯ねて大仕掛に移住して來る鮮人の一隊に會ふこともあつた。道一面に河氷が溢れて氷滑場のやうになつてゐる上で先發の乘合自働車の車輪が車體の目方で氷を削つて空廻りをしてゐるのに、お客の支那人達が悠々泰然と坐つてゐて運轉手達が力を協せて車を安全地帶へ引き出さうとしてゐるのを面白さうに眺めてゐた大國民振りには、又もや吃驚を喫せずにはゐられなかつた。動けない車、壞れた車等道端におきつ放しにせられてゐるのを尻目にかけて、私の乘つてゐた車は、平地をひた走しりに走つて耕地や水田を後に殘し途中唯一の大部落たる[illegible]磖子（ウンセラーズ）に入る。支那人四百餘、朝鮮人七百餘の相當の村、街道を挾んで東西に長い軒並が延び、物資が盛んに動く市場として、將來有望と見られた。之より、老頭溝に至る間は大部分、哈爾巴嶺河の氷上を走るのであるが、流石に所々、氷の薄くなつりつゝある所もあつた。かくして四時間五十分にして河の左岸に發達した泥海の町、老頭溝について車を棄てた。こゝは天圖鐵路の終點であつて、附近に炭鑛を藏し、近に天寶山の銀銅鑛をも控えてゐるが、支那人三百、朝鮮人九百、未だ決して盛といふまでにはなつてゐない。

それより天圖鐵路に乘つて前半に平原を去り、後半に丘陵の裾を縫つて運ん進龍井村（日本人一千、支那人三千、朝鮮人一萬二千位）に一泊、更に同じ鐵路により國境圖們江岸地方に至つた。天圖沿線は大部分開墾せられて居り、吉林省の東部といふよりは寧ろ、朝鮮の一部といふ感じを與へた。天圖鐵路が日支合辦であるため、從業員は殆ど全部支那人である所から、停車場附近には若干の支那人の姿も見られるが、全體としては汽車の内外を問はず、居るものは朝鮮人ばかりである。さればこの汽車に乘つて受ける感想は支那人が如何にも出稼人的に見えることである。實際、哈爾巴嶺を越えて東はどうしても支那といふ氣がしない。間島はやはり、その名の如く、緩衝地帶たる可きものであらう。

江岸から圖們江の鐵橋を渡つて朝鮮の上三峯に入れば圖們鐵道が北

方から來てゐる。そこで此線を利用して、吉會線開通の曉は北の方、雄基又は羅津を海港とすべきか、或は南の方、淸津に出づ可きかといふ問題が夫々の利害關係者によつて主張せられて居り、中には見苦しい運動をしてゐるものもあるやうに聞いた。

上三峯から會寧までの間は殆ど圖們江の岸を走るのであるが、江は未だ結氷してゐる所もあれば、所々、氷が割れてゐる所もある。然し何れにしても、對岸へ渡ることは極めて容易である。國境とか、關稅とかいふ障壁も、こんなに自然的環境が密接である場合には實に如何とも仕方がない。會寧で暫く休み、夕方立つたが、以南は總督府の廣軌鐵道で久し振にゆつたり坐席を占めることが出來たが、汽車よりも嬉しかつたことは、朝鮮の東海岸の美しいことであつた。地圖だけで想像してゐたのでは定めし暗黑の空の下に激浪斷崖を嚙む海岸線が續いてゐるのでもあるやうな氣がしてゐたが、事實は全く反對で、海邊が廣々としてゐて水は淸く、文字通りの白砂靑松がどこまでも續いて居る。物資は豐であると見えて村の家も立派な瓦葺が多く、南及西の朝鮮に見るやうな藁葺の陋屋は却つて見出せない。寒い北の山奧から急に南の海邊に出たせいもあらうが、それを割引して考へても、北東朝鮮の海岸はいかにも明るい。そしてその狀態が殆ど元山近くまで續いてゐる。

北滿、東滿及び北東鮮は速に連結せらる可きものである。然し、現實の問題は餘りに私の空想と懸け距つてゐる。如何にして之を結びつく可きであるか。或はそれは到底、不可能事であり、隨つて又、この問題は遂に斷念すべき性質のものなのであらうか。私は今、之の問題につき一個の思付を披瀝して、結語に代へたいと思ふ。

五　結語

吉會鐵路に關する懸案は之を如何に解決せしむ可きであるか。總ての植民地は解放すべく、他國の領土に投資することを止めよと叫ぶのも一つの方法であるのみならず、若しそれが單に國內的政策の立場から叫ばれるものならば、即ち、植民地の即時解放を叫ぶことによつて、國內の搾取階級を微力ならしめんとするものならば、明にそれは一の方便とさへもなることが出來る。然し、若しそれが不干涉的態度を採れば若き支那は自ら、自己の問題を巧妙に解決すべしと確信した結果、叫ばれるものならば、それは空疎な人道主義に墮せざるを得ないであらう。現在のロシアの東支鐵路回收問題に對する態度は、この問題に多くの暗示を與へて呉れてゐる。

私は實際的便宜の立場から、兎にも角にも敦化と老頭溝との間の鐵道の敷設を必要であると考へる。それによつて日本は利益を受ける樣になるであらうが、同時に、それによつて支那は決して損害はうけないであらう。とはいへ、事態が昨今の如く惡化しては、問題の解決は定めし、容易ではないであらう

然し、之を促進する方法は必ずしも絕無ではない。曰く、地元の人

の欲する所に從ふあるのみ、地元といつても張作相一派をさすのではなく、土地の住民のことをいふのである。即ち、敦化の人々も、間島の人々も、國民政府や東三省當局とは異つて、速に東方に門戸を開かんと欲してゐるに相違ない。この點に論理的基礎をおいて誠意を以て、事柄の促進に努めるならば、解決は案外早い樣に思はれる。私は何國の手によつて之がなされやうと、そんな事は意に介してゐない。唯、何よりも早く六十哩の交通路に鐵道が出來ればいゝのである。そして靜に考へて見たときに、目下の狀勢では日本がその建設の衝に當ることが何といつても最も合理的であり、好都合ではないかと思ふ。

さてその次には方法であるが、從來の借款鐵道の形式だけでは、もう濟まされなくなつてゐる。そこで今、推稱したい方法は、やはりロシアが各國に許してゐる利權契約の形式である。何年かの期限の間、建設者の權利（監理或は收益）と義務（監督或は經營訓練等）とを認めることにするとしても、一定の期間（比較的短くす）を經た後には、即時無條件に相手方に返してやり、之に附隨する一切の債權の關係を棒引きにするのである。

その期限の間に建設者は利益を收めたければ收めるがいゝ。たゞ兎も角も、その間に土地の人々の生活を開發して、滿期の時に手を引いても相手方が自立出來るやうにしてやる覺悟は必ず有つてゐなければ、相手が承諾を肯ないことは明である。子供を敎育して行くやうな氣持、早く獨立自活出來るやうにしてやらうとする心掛、それがなければ此交渉は片づかない。

然し、そんなことが兩國の政府だけに任せておいて出來るものであらうか。その點に又、一つの大問題が橫つてゐるのである。

（四・一〇）

失業問題解決の原則

安部磯雄

失業問題を如何に解決すべきかといふことに就ては種々なる意見が發表されて居るけれども、結局其等は一の原則に歸着するように思はれる。經濟界の景氣と不景氣とが失業者の數に大なる影響を及ぼすことは言ふまでもないが、如何に經濟界が好況であつても決して失業を完全に防止し得るものではない。米國の如きは世界第一の成金國で、國民一般の生活程度は一頭地を拔いて居るといふ有樣であるに拘はらず、尙ほ幾分の失業者があり、一朝經濟界に變動が來れば失業者數が著しく增加するといふ危險がある。斯の如く考へ來れば失業は現在の資本主義と不可分の關係を有して居ることが看取される。換言すれば資本主義經濟組織の存續する限り失業を根本的に絕滅することは不可能だと諦めなければならぬ。尙ほ失業問題の根本的解決法に就ては後に述べることにする。

當面の問題として私共は先づ現在の失業を如何に取扱ふべきかといふことを研究しなければならぬ。數日前時事新報によりて報道された所に據るとロイド・ジョージも來る總選擧に於ては失業救濟といふことを主たる政策として掲ぶらしい。彼の言ふ所によれば英國に於ける失業者の數は約百萬に達して居るそうだ。我國に於ける失業の統計はまだ精確なるものはないけれども、職業紹介所の調査に據れば約三十萬人位はあるものと考へられる。然しこれは職業紹介所に申込んだ者を標準として概算したものであるから、最少限度と見て差支はあるまいと思ふ。言ふまでもなく失業には全部的のものと一部的のものとがある。一部的失業は單に半日とか或は隔日とかに職業を得るのであるから、これをも計算の中に加へることになれば、失業者數は著しく增加するに相違ない。數字はどんなになるとしても現在我國に於ける失業の狀態は實に悲慘を極めて居る。諸種の犯罪が行はれて居るのを見ても、世相が何となく險惡になりつゝあることを考へても、これは確に失業が產み出した結果であると言ひ得る。さて失業に對する解決は何であるか。私はこれに對して次の如く考へて居る。

失業問題の解決には當然考へねばならぬことが三つある。これは殆んど自明の眞理であつて、私はこれを失業問題解決の原則であると斷

言しても差支がないと思ふ。其原則は極めて簡單明瞭であつて、今更[redacted]單なることすら未だ實行が出來ないのであるから、私は卒直にこれを説明して社會の注意を惹きたいと思ふ。

第一は失業者に對して國家が直に職業を與へることである。第二は國家がこれに必要なる資金を調達することである。第三は十萬圓乃至二十萬圓以上の財産所有者から所得税附加税、相續税附加税の形式に於て必要なる資金を提供せしむることである。第一の問題は如何なる失業者に對しても職業を與へるといふことであるが、これは決して困難なることではない。失業と言へば直に職業がないといふことを意味するように考へられるが、それは言ふまでもなく大なる誤りである。現在の雇主は何れも營利を目的として居るのであるから、營利事業以外に手を出すことは決してしないのであるけれども、私共の周圍には營利的でない事業が山の如くに澤山あることを考へなければならぬ。然も此等の事業は國民生活に必要なるものであつて、若しこれに要する相當の資金さへあれば、政府は當然自ら損得の打算を離れて經營すべきものである。都會の道路を鋪裝してコンクリート道とすることは全く營利を離れた事業であるから、政府自ら經營の仕事に當るべきは勿論であるが、これは單に都會のみの問題ではなく、漸次農村にも及ぼすべきではないかと思ふ。全國に於ける國道及び縣道を悉くコンクリート道に改造するとすれば、これによりて數百萬の人々に職業を與へることが出來ると共に、國家は完全なる交通路を有することにより[redacted]へることとなる。更に轉じて植林事業を考へて見れば、其處にも失業者を救濟すべき大事業の存して居ることが判る。我國には至る所禿山が多く、其のために國民は大なる損害を招いて居る。一朝大雨來れば河水は氾濫して堤防を破壞し田畑を荒廢せしむるに至る。これは全く山林を伐採して其後の植林を怠つたからである。山岳は我國土の大部分を占めて居るのであるから、これを利用すると否とは國家經濟の上に大なる影響を及ぼすことになる。然し長期を要する植林事業を營利本位の企業家に經營せしむることは無理であるから、國家自ら進んでこれに當らなければならぬ。其結果四五十年後には木材の自給自足が行はれるのみでなく、進んでは支那方面に向つて年々多額の輸出をも爲すことが出來る。此植林事業だけでも數百萬乃至數千萬の失業者に充分なる仕事を與へ得ることになる。

道路の鋪裝事業と植林事業とは單に實例として引用したのに過ぎないのであるが、私は更に幾多の事業を擧げることが出來ると思ふ。我國土の面積は狹小であるけれども、豐富なる資金さへあれば、尚ほ開墾すべき荒蕪地が少なくない。政府は今や開墾助成法の下に土地開墾の實蹟を擧げて居るのであるが、此方面の事業を更に擴張さへすれば、失業者のために多くの仕事を提供することが出來る。其外に埋立事業、堤防工事、築港事業等がある。

米國大統領フーヴアーの考へて居る失業對策も確に私共の參考とす

べきことである。それは全米國に於て計畫中の公共造營物にして多少延期することの出來得るものは半年若くは一年後まで其建築を見合はせるといふのである。此提案により各公共團體が其建築を延期した造營物の價格は約三十億弗に達して居るといふことだ。一朝經濟界の變動が起り失業者が簇出することになれば、公共團體は一時に土木建築事業を起して此等失業者に仕事を提供せんといふのである。

要するに失業救濟といふことは失業者に仕事を提供することを意味する。貧窮者に衣食を給することは單に慈善であるけれども、失業者に職業を提供することは決して慈善ではない。何となれば消費された金錢に對しては相當の報酬が得られるからである。失業救濟のために消費された數億圓乃至數十億圓の結果として國家はコンクリートの鋪道、立派なる山林、埋立地、港灣、公共建築物等を所有することが出來る。

然し此の如き大規模で失業者に職業を提供するのには巨額の金を要することは言ふまでもない。既に述べた如く失業は職業のないことを意味するのでなくて失業者を雇ふ金がないといふことに歸着する。職業は實際無盡藏であつて、人口が增加するに從ひ次から次へと新しき職業が起つて來る筈である。唯資金が不充分であるために道路も山林も其まゝに放棄されて居る。故に必要の資金さへ調達さるれば失業問題は容易に解決されることになる。私は我國が失業救濟のために毎年幾何の資金を要するかに就ては、失業者の實數に關する精確なる統計のない限り明瞭なる返答を與へることは出來ないけれども、假に失業者が百萬人あつて、一人一日の勞銀が平均二圓とすれば、失業救濟だけに毎年七億三千萬圓を要する。若し失業者の實數が五十萬人であるとすれば、救濟費は三億六千五百萬圓となる。兎に角現社會に於て徹底的に失業問題を解決せんとするには毎年五六億圓の資金を調達することを前提としなければならぬ。これが私の所謂第二の原則である。然し失業救濟は必ずしも徹底的に行はねばならぬといふ譯でもないから、資金の都合で部分的に行ふような場合があつても相當の効果は擧げられることを信ずる。

第三の原則は失業對策費の全部を富者が喜んで負擔せねばならぬといふことである。貧富の懸隔が甚しいのは如何なる原因から來るものであるかは暫らく論じないとしても、兎に角貧富の對立といふことは決して愉快な社會現象とは思はれない。同じ日本國民の間に生活上甚しき懸隔を來したことは貧富孰れの階級から見ても決して喜ばしきことではない。富者の中には何とかして此問題を解決したいと熱心に考へて居る人が少くないであらうと信ずるけれども、不幸にして彼等はまだ適當なる方法に想到して居ないのではないかと思はれる。彼等の中には教育や社會事業の方面に多大の援助を與へて居る人も少なくないが、彼等は未だ富に對する階級的責任といふことを自覺して居ないのではないかと思ふ。彼等が巨萬の財産を築き上げたのも決して彼等一人の力ではなく、廣く社會全體の援助に因るものであることを考へ

るならば、彼等は其富の一部を公共のために寄附する場合にも、單なる慈善ではなく、社會全體に對する報恩であるといふ觀念から出發すべきである。

殊に現在の富者は多く資本主義支配の下に於て幸にも巨萬の富を得たのであるに反し、失業者は同じ資本主義の犠牲となつて悲慘なる生活に陷つて居るのであるから、富者は失業者のために最善の努力を爲す必要がある。假に工場に於て業務に從事して居る勞働者が機械のために負傷したならば、これは公務上の傷害であるから、雇主はこれに對して規定の責任を負はなければならぬ。これと同じく資本主義の經濟組織に於て當然生ずべき失業は正に公務上の傷害に等しきものである。資本主義によりて利益を得た富者は必然的に失業救濟の責任を負はなければならぬ。

然し上記の理論を拔きにしても富者は社會聯帶責任といふ立場から失業者に對し職業を與へる必要がある。勿論營利主義の上に立てる現在の富者が、損失を招いてまでも必要のない勞働者を雇入れることは不可能であるけれども、自ら得た利益の一部を割いて之を國家に提供すれば、國家はこれによりて非營利的事業を起して失業者を使用することが出來る。これは確に富者の義務である。慈善事業に投ずる資金は何等の記念をも遺さずして消費されるかも知れぬ。然し失業救濟のために使用される資金は立派なる道路、森林、埋立地、開墾地として永久に殘るのである。

國家は一大家族であるといふ立場から考へても富者は進んで生活難に陷れる同胞兄弟を救濟するといふ考へがなくてはならぬ筈だ。現在の如く失業者が益々增加し、國家がこれに對して何等的確なる救濟策を取り得ないとすれば、當然の結果として思想は惡化することになる。よし悲むべき社會的變動が起らぬとしても、勤勞無產階級の勢力は急速に發展し、議會の多數を占めて合法的に富者の權力を抑へるようになることは火を視るよりも明である。失業救濟のために每年五六億圓の資金を要することは既に述べた通りであるが、此資金を得るためには現在の相續法を改正するより外はない。富者は自ら進んで任意的に此必要なる資金を負擔するか、或は相續法の根本的改正によりて強制的に其資金を提供するか、二者其一を擇ばねばならぬことになる。私は富者が寧ろ自發的に何等かの方法により、失業救濟の任に當ることが彼等自らを安全にする途ではないかと思ふ。今日でも一部の富者は共存共榮の原則によつて失業者救濟の必要位は考へて居るのであると私は信じて居るけれども、彼等にはこれを公表するだけの勇氣が缺乏して居るようである。

本年三月號の『實業之世界』に於て野依秀一氏は興味ある企圖を發表して居る。それは『我輩が大臣だつたら』といふ課題を與へて各方面の實業家から答辯を求めたといふことである。澁澤榮一氏の『我輩が總理大臣だつたら』を筆頭として、東京電燈常務本間利雄氏の內務大臣、北海水力社長美濃部俊吉氏の大藏大臣といふ風に種々面白い意

見が發表されて居る。然し私の注意を最も多く惹いたのは商工大臣の役割を振り當てられた森永製菓會社專務取締役松崎半三郎氏の意見であつた。私は松崎氏が資産家であるか否かは知らないけれども、兎に角資本家側に居る人の意見としては何人も傾聽せねばならぬと考へるから、左に其一部分を轉載する。

『も一つ社會政策中、百萬を數ふる失業者の問題は商相としても大に考慮すべきことゝ思ふ。之は國家的にやらねば徹底的の解決はつくまい。そこで我輩の理想を云へば、資本家階級には所得の八割位を寄附行爲を爲さしめ、それを以て資金と爲すのである。世間では口を開けば「資本家々々々」といふけれど、元々彼等の儲けたのは大部分人の力を利用したのだから、それ位の事は當り前だ。此の點に於てイギリスの金持階級の奉仕的態度は取つて以て範とするに足るものがある。

假りに八割の寄附が出來ないとしても、先づ六大都市各地に百萬圓位の資本を以て、手工業の授産、或は道路改修等の事業を創めることは何でもあるまい。かくして多くの失業者の生活も安心し、而も一面に於て出資者は相當の儲けを見ることが出來るではないか。

況んや今日の金持が一大決心をすれば、二億や三億の金は忽ちにして集まつてしまふ。富豪に共存共榮の精神さへあれば、如何なる社會政策でも實現出來るといふものだ。

以上松崎氏の意見は私共の立場から見て何等新らしき點はないけれども、兎に角資本家側の陣營中に在ると思はれる人の口から此の如きことを聽くことは實に珍しいことであると言はなければならぬ。其意見中私共の考へと一致して居る點は第一失業問題を重要視すること、第二失業問題の解決は結局國家の手によりて行はれねばならぬこと、第三これがためには富豪が必要なる資金を供給せねばならぬこと。第四富豪の所有せる財産は決して自分の獨力で儲けたものにあらざること、第五共存共榮の精神さへあれば富豪が失業救濟の資金を提供することは極めて容易なりといふことである。

收入の八割を寄附するといふことが毎年のことであるか、或は一度限りのことであるか。『一面に於て出資者は相當の儲けを見ることが出來るではないか』といふことは如何なる意味であるか。私が既に述べたように百萬人の失業者に職を與へて毎日平均二圓を拂ふとしても、一年に約七億三千萬圓を要するのであるが、これに關する對策は何であるかといふような疑點があるにはあるけれども、私は大體に於て松崎氏の卓見に敬意を表せざるを得ない

然し松崎氏や私の意見は現時の社會組織の下に於ける失業問題の解決として最も徹底した最善の對策ではあるが、私は今一歩突き込んで此問題を考へて置く必要があると信ずる。上記の如き方法を以てすれば徹底的に失業者を救濟することが出來ると信ずるけれども、これによりて失業者を根絶することは出來ない。失業者の數に多少の增減はあるとしても、國家は毎年六七億圓の經費を豫算に計上してこれが救

濟費に當てなければならぬ。現在の社會組織が繼續する限り失業經濟は永久に存續することであらうと思はれる。これは恰も源泉を清めずして下流の淸きを望むと同じく決して賢明なる方法ではない。よし國家は毎年六七億圓の資金を集め得るとしても、これは實質上富豪の金をもつて失業者を救濟するのである。私共の立場から言へば、各人は勤勞する權利を有して居るのだから、如何なる形式に於ても救濟といふことには反對する。換言すれば勤勞は私共の義務であると同時に權利であるから、頭を下げて職業を求めるといふような制度を理想的だとは考へて居ない。若し國家が團體として各人に職業を割當て、各人は國家の雇人ではなく、單に一員として勤勞するといふことであれば、雇主とか雇人とかいふ關係がなくなるのであるから、これによりて各人は完全に獨立の人格を維持することが出來る。故に私は失業問題の對策として更に社會主義の主張をも説明しなければならぬ。

最近に至り私共は屢産業の合理化といふことを聽くのであるが、私共は二三十年の昔から此問題に就て相當の考慮を拂つて居たのである。資本主義の社會組織が如何に不合理なものであるかゞ一部の人々に認められるようになつた時社會主義は初めて有識者の間に唱へられるようになつた。爾來社會主義は實際運動となり、時に極端なる手段を取る者も起つたゝめ、資本主義擁護者側からは一種の危險思想であるが如く思はれたけれども、これがため社會主義の特長を沒却することは社會進歩のため大なる損失である。私は全般的に社會主義の主張を論ずる暇を有しないけれども、失業問題と社會主義の關係につき其大要を述べることにする。

産業の合理化といふことは種々なる意味に解せられて居るけれども、其中最も重要なるものは需要供給の關係を合理化することであらねばならぬ。現代の經濟組織が恰も元龜天正の戰國時代の如く極端なる自由競爭を原則として居ることは何人もこれを否認することは出來まい。これから生ずる最大弊害は需給の調和が何時も破壞せられて居るといふことである。經濟界が好況を呈すれば生産者は需要が如何なる程度にあるかを研究する暇もなく、競うて供給を増加せんとする。斯くて需給の關係が破壞せられ、經濟界は反動的に不景氣に陷る。其結果資本家は其事業を縮少し、勞働者の一部は失業することになる。需給の關係さへ完全に整理さるれば失業といふ不自然な現象の生すべき筈がない。故に産業の合理化は先づ此點から始まらなければならぬ。如何にして需給の關係を合理化するかといへば、それは先づ産業界の統一といふことを起點としなければならぬ。分烈競爭主義は政治に於ても經濟に於ても禁物である。我國は戰國時代から織田豐臣徳川時代の武家統一となり、遂に維新の皇室統一となり、最早政治に於ては完全なる統一が行はれるに至つた。社會主義の主張は政治界に於ける此過程を一日も早く經濟界に適用せんとするにある。我國の現狀を見れば經濟界にも統一の趨勢は充分認めることが出來るようであるけれども、私共は三井三菱の經濟界統一といふが如き迂路を迴るよりも

一層に國家の力を以て統一を謀ることが、國民全體のため有利であると信じて居る。

經濟界の統一が出來れば需給の調和が完全に行はれることになる。國民の需要は毎年の統計に據りて比較的完全にこれを知ることが出來る。其の結果其需要に應じて國家は國民全體を生産に當らしむることが出來るから、需要以上に生産するやうな心配もない。歐洲戰爭に於て獨逸は少くも千萬人以上の軍隊を動かしたのであるが、完全なる統一が行はれたゝめ、一人の兵卒も失業する者はなく、又生活のため心配する必要はなかつた。勿論軍隊に行はれて居るが如き規律を私共の社會に適用することには私も斷然反對であるけれども、統一によりて失業者がなくなり、從つて生活の不安がなくなることを例證するためには軍隊が最も便利ではないかと思はれる。

社會主義の主張する如く國家が經濟界を統一した曉には種々なる問題が必ず起つて來るに相違ない。各人が職業を撰擇するには飽くまで自由なるべきか。殊に筋肉勞働と頭腦勞働との撰擇は如何にすべきか。各人に對する報酬は現在の如き差等を設くべきか、或は全部これを平等にすべきかといふが如き問題に對しても社會主義は可なり明瞭なる意見を有して居る。然し私の目的は失業問題を根本的に解決する方法として社會主義の主張を説明するに在るのだから、上記の諸問題に對しては更に他の機會に於て卑見を述べることにする。

第一書房の二大學術雜誌創刊！

學術雜誌が年と共に萎靡して行くことは悲しい事であります。過去の哲學雜誌を惟ふにつけ、過去の論文を考へるにつけ、色々な學術雜誌を顧るにつけ、その活氣、いつの間にか銷沈しつゝある事を私は寂しく感ずぜには居られないのであります。

今度創刊する『獨逸文學研究』並に『美學研究』の二大雜誌は偏に萎靡銷沈しようとする學術雜誌界に一の活氣を齎らしたいと希ふ微意に依るのであります。幸ひに此の二大雜誌は委員諸氏の燃えるやうな熱情と精魂とに依つて編輯されるのでありますから、必ずそこには大きなセンセエションを起すを期待されるのであります。何卒大方の御聲援と御支持とを仰ぐ次第であります。

第一書房長谷川巳之吉　敬白

獨逸文學研究

五月創刊

シュトルム・ウント・ドラングの宗教觀……成瀬無極
ヘルデルとゲーテの『ファウスト』……相良守峯
傳記の研究に就いて……高橋健二
ヘルデルリーン詩抄……吹田順助
鐵中の人間其他紹介……芳賀檀
獨逸最近文壇消息……

帝國大學獨逸文學會　編輯
年四回刊行
定價未定

美學研究

六月創刊

オーブレヒト「カントの美學批判」……寄稿
コヘンの美學批判……石幡五郎
ギリシヤ哲學以前に於ける美的概念……渡邊吉治
構圖論……村田良策
音樂の様式に就いて……遠藤宏
カントの美と崇高に就いて……金田廉

帝國大學美學談話會　編輯
年四回刊行
定價未定

初夏に映ゆる三越

……流行品や實用品を豊富に取揃へて陳列

新緑の候となりました。三越では初夏の御用意として、斬新輕快な洋服類を初め帽子、ネクタイ、靴等を各種潤澤に取揃へ陳列致して居ります。何卒御用命の程偏に願上げます

◆三越本店　五月の催物◆

◆（主催 東北振興會）東北名産品陳列會（一日より十五日まで）四階西館

◆東京時好會展覧會（十八日より廿二日まで）四階西館

◆澤田宗山氏作陶展覧會（十九日より廿三日まで）七階東館

◆時計寶飾品展覧會（廿五日より廿九日まで）四階西館



三越

◆東京日本橋◆



第二貧乏物語

河上肇

第三回

今日は辯證法的唯物論の話を完結せねばならぬ。だがその前に私は一言せざるを得ないことがある。

前回の話をおへてから間もなく、同志山本宣治は兇刃に倒れた。三月八日の早朝、東京驛におりた私は、その日の午後、本郷佛教青年會館における彼れの告別式に臨んだ。その告別式の有様は、同志大山郁夫の筆により、つぎの如く書き誌されてゐる。『三月八日、吾々は遺族の懇望を容れて、彼れの遺骸を階級的勇士の死にふさはしく、眞紅の色に燃ゆる舊勞農黨旗——それは彼れが生前熱愛したものだ——につつんで柩に收め、同志の手によつて本郷佛教會館の壇上に運んだ。嚴肅なる告別式が、在京の遺族と滿堂の會衆とによつて、その前で執り行はれた。式の進行のまに〳〵一種の悲壯痛烈なる氣分が赫々と燃えあがるかと思はれるばかりに式場に漲つた。それは一面において、彼れの死が如何に、生前彼れに無限の敬愛と信頼とを寄せてゐた日本の戰鬪的勞農大衆を感奮せしめたかを、表象したものであつたと同時

に、他の一面においては、それらの大衆が如何に資本家地主の政府の反動政治と、白色テラアの橫行と、社會民主主義者の裏切りとに對して、抑へ難き憤激と憎惡と××とを懷いてゐるかを、如實に反映したものであつた』。それは、まことに、その通りであつた。最後に行はれた五分間の默禱では、滿堂の會衆が聲をのんで泣いた。私の前には、同志細迫が立つてゐた。彼れもまた、耐えざるものの如く泣きつゝあることを、私は見た。かゝる勇敢決死の士の・かゝる場合における・かゝる眞實の涙をこそ、私はこの上もなく有り難く感じた。私は過去五十年の生涯において、此の如く滿堂の會衆が默禱のうちに心から泣いた告別式を、曾て見たことがない。だが吾々の流した涙のなかには、一滴たりとも女々しき涙はない。それは同志大山の言へる如く、吾々の運動のため勇敢にも貴き犧牲となつてくれた同志に對する・限りなき敬愛と心からなる感謝との表象であり、また同時に、吾々の一切の×に對する『抑へ難き憤激と憎惡と××と』の如實の反映である。私は彼れの遺骸の前に立つて、最後の別れを述べんとするにあたり、口を開いて一二分、『君の流された貴き血潮は、全國の同志に向つて一層深刻なる××を促し、斷乎たる××の』と言ひえたきりで、臨監の警官により發言を中止された。當時もし更に發言の自由をえてゐたならば、私は『斷乎たる××の・・・××を××にし××にした』と言はんと欲したのである。私はこのことが、私の單なる主觀的希望の表白ではなく、厳乎として存在する客觀的事實の表現でありえたことを、今なほ確信してゐる。吾々の陣營は、×の如何なる襲擊にも、曾て落膽し沮喪することなき、決死の同志によつて構成されてゐる。吾々は一難を經る每に、勇氣を百倍にし千倍にして奮ひ立つであらう。

同志大山は更に言つてゐる『昨年末の勞働者農民黨の結黨大會に際し、私は私の議長就任の辭の進行中に、「我等の行くところは戰場であり、墓場である」と喝破した。その瞬間、私は、それがもはや單に私一己の個人的感情を述べたものではなくして、全國に散布する幾萬幾十萬の同志たちの胸に潛む共通感情を表白したものだとの、確信を懷いてゐたのだ。そして、その日の議場に居並んでゐた千餘の代議員および傍聽者たちが、一齊に、私の聲に應じて怒濤の如き拍手を送ることによつて、熱烈なる共鳴と聲援とを示してくれたとき、その確信は私において決定的となつた』。同志山宣も、當時その怒濤の如き拍手を送つた一人であつた。同志大山の言つてゐるやうに『吾々は、全國の戰鬪的勞農大衆と共に、一人々々がいつ白色テラアの犧牲となつて倒れても——との固き覺悟を、日頃から各自の心の奧底に秘めてゐる』。『山宣を死なしたのは、吾々の許されない落ち度には違ひないが』、しかし吾々の陣營は、彼れの橫死によつて、こゝに劃期的の刺戟を受け

た。吾々は一歩たりともたじろきはしない。長谷川如是閑氏もつぎの如く言つてゐる。「暗殺の如き手段が、無産階級運動を畏縮せしめるものでなく、却て大に昂奮させる效果をもつものであることは、解り切つた話であるが、山本宣治君の場合も、果然運動の大刺戟になるべき形勢である』。たゞに暗殺には限らない。如何なる手段による××も、やがては皆な運動の健實なる發展を必然的ならしめるための刺戟となる。何故か？ それは×の陣營が必然的沒落の軌道にあるに反し、吾々の陣營は×××××の陣地を占めてゐるからだ。

およそ如何なる制度組織も、すでにその歴史的役割を終へ、その存續の社會的必然性を失つた後は、如何に自己の防衛のため狂暴なる跋扈を敢てしようとも、それらは盡く、却てその末期を早めるためのものとなる。すでにその存續の社會的必要を失つた制度を、無理やりに維持しようとするならば、そのこと自身が、必然的に各方面にわたつて、益々その制度の存續のための××を增大せざるをえない。一方においては、現存制度への輕侮と××とのあらゆる發現をば、——それは現存制度の社會的根據の失墜につれて益々頻繁となる、——一切の××を動員して嚴重に苛酷に取締らざるをえなくなると同時に、他方においては、かゝる取締のために必要とされる費用はおそろしく莫大なものとなり、從つてまた、それらの費用を支辨せんがための大衆に對する××と××との重壓は、年を追うて急速に增大せざるをえなくなる。しかもそれら一切のことは、愈ゝ大衆の不平不滿を高め、益ゝ現存事態の××のための××××を煽る。社會的に無用となり××となつた××は、×××がそれを××ねばならぬ。さもなければ、××××が××るであらう。將に死滅せんとする××の×××における×××××が、つねに社會的機構の必然的作用により、その主動者の意志からは獨立に、むしろその意圖に反して、却てそれ自らの死期を早めるための一動力に轉化せざるをえなくなつてゐるのは、そのためである。それは末期に近づくに從ひ、あらゆる××を動員して自らを防衛するの必要に迫まられるがゆゑに、現象的にこそ表面では極度の強さを示すが、しかしそれは取りも直さず、その制度の物質的基礎が本質的には正に極めて弱くなつてゐることの證據である。明治革命の直前における封建諸侯は、その×××××に、××××××××××、×××××××××××。それは、その昔における彼等の×××の簡易さと、とても比較にならぬものであつた。だが、彼等がかくも未曾有に×××を示した時こそは、すなはち彼等が顛覆の運命を免れえざりし明治革命の前夜であつた。

總じて此の如く、必然的沒落の運命にあるものは、自らを防衛せん

がために悶躁けば悶躁くほど、益ゝその沒落の運命を早め、自己の墓掘人を急速に育てる。これに反し、×××××の陣地を占めつゝあるものは、如何なる出來事によつても決して挫折しはしない。吾々は同志山宣の死をこの上もなく惜む。彼れを奪はれたことは、吾々の陣營にとつての一大損失である。だがこの損失は、長谷川君の言葉を借れば、決して『無産階級運動を畏縮せしめるうるものでなく』、逆に『運動の大刺戟』となつた。×××の陣營にあつては、如何なる損失も直ちにその反對物に轉化する。かくてその×は、一個のディレンマに陥る。放任しておけば、運動は益ゝ盛んになる一方であるが、それかと言つて、××すればするほど、そのこと自身が直ちに運動の刺戟になる。×××××××××××のためには、××××××××しうるに反し、×××××××××××のためには、××××××××せざるをえない。かくして歴史はその『自己運動』によつて、その不可避的なる必然の軌道を進むのである。

　しかも一切の世界の進行を、此の如くその『自己運動』において・自發的發展において・把握するための、認識の條件は、たゞ辯證法的唯物論のみが吾々に提供するところのものである。吾々はかゝる見地からのみ、『社會主義は鐵の如き必然さをもつて資本家的な社會秩序から生まれ出るといふこと、また吾々の理想と目的とは資本家的社會の客觀的發展のうちに深く根ざしてゐるといふこと』を、確信することができる。レーニンは最惡の事態に際しても、『落膽したまふな同志、吾々は必ず勝つ』といふ言葉をもつて、常に彼れの同志を激勵した。しかも斯かる確信を宿せる彼れの頭腦にこそは、世界の運動の理論的反映たる辯證法が横たはつてゐたのである。――私は話の本筋に立ち戻り、辯證法的唯物論の説明を纏めよう。

四、辯證法的唯物論（細論の2）

　前回において、私は辯證法を、主として事物の狀態につき、言はゞ靜的に説明した。私は更に進んで、これを事物の運動につき、言はゞ動的に説明せねばならぬ。

　事物をその運動（變化、發展）において見るとき、吾々はこゝでもまた、常に對立的傾向の存在を發見する。

　私はその一實例として、多くの俗流經濟學の教科書中に説明されてゐる・效用遞減の法則を擧げよう。吾々は、人間の何等かの種類の欲望を充たす物の屬性を、その物の有用性または效用と名づける。ところで此の如き物の效用は、決して一定不變のものではない。例へば飢ゑたる時の一椀の飯は、何人にとつても大なる效用を有する。だが既に一椀の飯を食ひ終りたる後、更に二椀、三椀、四椀と食ひ續けてゆ

けば、その效用は次第に減少する。そして已に飽滿し了つた後、更に同じ食物を食ひ續けることであつたならば、何人も害を感ぜざるをえない。すなはち飽滿點に達したところを境として、食物の効用はその反對物たる非効用に轉化するのである。これが辯證法にいふところの『跳躍』であり、『連續における斷絶』であり、『反對物への轉化』である。私は今一つの例を擧げよう。吾々が病氣の時に用ゐる藥は、その分量上の規定が、非常に嚴密なものであるといふことは、誰でもが知つてゐる。殊に謂はゆる劇藥についてさうである。それは何故か？　すべての藥物は、殊に劇藥は、その分量がある程度を越すと、全く正反對の毒物に轉化するからである。單なる分量上の變化のために、起死回生の藥が、忽ちその品質が變化して、人を殺すための毒となるからである。この場合、藥から毒への轉化は、同じく一つの『跳躍』であり、一物のその『反對物への轉化』である。それはまた、謂はゆる『量から質への轉化』、委しくいへば、ヘーゲルがその論理學で發見した有名なる法則、すなはち單なる分量上の變化が、ある點に達すると、品質上の差異に變はるといふことの、一實例である。言ふまでもなく、量と質とは對立的なものである。しかるにこれらの對立物は、一定の條件のもとでは同一となる。これを前に掲げた食物や藥劑やの例について見るも、同じである。すなはち或る物は有用物であり他の物は有害物であるといふやうに、あるひはまた、或る物は藥であり他の物は毒であるといふやうに、そこに動かし難き絶對的の對立が存するのではない。かゝる區別はすべて相對的であり、條件づきであり、一定の條件のもとにそれらの對立物は轉化して同一となるのである。合法的活動と非合法的活動、武裝的平和と武力的戰爭、これらの對立物もまた一定の條件のもとにおいて互に轉化し合ふ。これが辯證法に固有なる最も重要な契機とされるところの、『對立物の同一性』なるものである。レーニンが辯證法を定義して、『辯證法とは、如何にして對立物が同一でありうるし且つあるか、如何なる條件のもとに對立物は互に轉化して同一となるか、何故に人間の悟性はこれらの對立物を死んだ凝固的なものとしてでなしに、むしろそれらを生きた・條件づけられた・運動的な・相互に轉化し合ふものとして觀察するか、といふことの學理である』と言つてゐるのも、そのためである。

今以上の如き對立物の相互的轉化は如何にして生ずるかといふに、それは、自然および社會の總ての出來事それ自身のうちに、相對立した・相互に排斥し合ふ・矛盾に滿ちた・諸傾向が含まれてゐるからである。例へば、私は食物を食ふことにより、あるひは煙草を喫することにより、一定の快感を感じる。だが、一層立ち入つてこれを考察すれば、私はこれらの場合に、純粹に快感のみを享受するのではない。

例へば、煙草をのむために、眼に煙がはいつたり、舌に苦味を覺えたり、齒が脂で染まつたり、机の上に灰が落ちたりすることなどは、すべて私が不快とするところである。だが私が喫煙の分量を適度に調節するかぎり、私はニコチンの魔睡的作用のために多くの快味を感じるがゆゑに、それに伴うて同時に起る種々の不快はこれを相殺することができ、總體の效果としては確に一定の快感を覺えるのである。けれども、もし私が引續き過度の分量の喫煙をなすならば、ニコチンの魔睡的作用のために感じる快感が次第に減退するがゆゑに、喫煙によつて襲る不快の方が強く表面に現はれ、その總體の效果として私はたゞ不快のみを感じることになる。かくして、嗜好された物が嫌惡される物に轉化するのであるが、しかし實際には、煙草そのものの中に、嗜好される屬性と嫌惡される屬性とが、すなはち『矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向』が、最初から含まれてゐるのである。かくて一切の事物は、自己の否定を齎らすべき要素を、それ自身のうちに包含してゐるのであり、そのために、それはその運動過程において、結局はそれ自身を否定するのである。かくて肯定はその反對物たる否定に轉化する。しかるに、かゝる否定により新たに定立されたる肯定は、やがてまたそれ自身を否定する。辯證法に謂ふところの『否定の否定』は、かくして生じるのである。

屢〻引用されるエンゲルスの麥粒の例を、私もこゝに引用しよう。

エンゲルスはいふ、『一つの麥粒を例にとらう。かゝる麥粒の無數のものは、粉に挽かれ、炊がれたり釀造されたりして、消費される。だが、一つのかゝる麥粒がそれにとつて正常的な諸條件を見出し、それが適當な土壤の上に落ちたならば、熱度と濕氣とのために、その上に特有な一變化が起る。それは發芽する。麥粒は麥粒としては消滅する、それは否定される。それから發生した植物が――麥粒の否定が――取つて代はる。しからばこの植物の正常な生涯はどうであるか？それは成長し、開花し、結實し、最後には再び澤山の麥粒を生産する、そしてこれらの麥粒が熟するや否や、莖は枯死し、その方は否定される。かゝる否定の否定の結果として、吾々は再び最初の麥粒を得る、だが單一のものではなく、十倍、二十倍、三十倍の數を得る。穀物の種類は非常に緩漫に變化する、だから今日の麥粒は百年前のそれと依然として殆んど同じである。だが、もし吾々が變形し易き觀賞植物、例へばダリヤまたは蘭をとつて見るならば、吾々はかゝる否定の否定の結果として、たゞにより多くの種子を得るばかりでなく、より美しき花を開くべき改良されたる種子を得るのであり、かゝる過程の反覆毎に、新たなる否定の否定毎に、かゝる完成は高まるのである』。（『反デューリング論』、ドイツ本、一三八頁。）

この場合、もし麥粒が粉に挽かれて、パンやビイルに變化し、人間によつて飲食されるならば、麥粒そのものの發展過程は妨げられる。それは適當な土壤の上に落ち、適度な溫度と濕氣とのもとに置かれる場合にのみ、それ自身のうちに含んでゐる自己否定の機能を發揮することができ、自分自身で發芽する。かゝる仕方によつてのみ、麥粒の『自己運動』は行はれる。

かゝる否定の仕方、ならびにその否定の結果（または否定の否定の結果）として生ずる產物は、各種の事物に應じて各〻獨特である。それが如何なるものであるかは、ただ現實の事實のみがこれを指定する。『微分においては、負の根から正の自乘を作る場合とは、異なつた仕方で否定される。すべての他の場合におけると同じく、そのことは事實について學ばねばならぬ。麥の莖も微分も否定の否定に屬するといふだけの、單なる知識をもつてしては、私は麥の栽培に成功することもできねば、微分も積分もできはしない』。（エンゲルス、同上書、一四五頁）。また麥粒の場合には、否定の否定の結果として、再び最初の麥粒が得られるが、しかしこの場合にでも、後に得られたものは最初のものと全く品質を同じくするのではない。場合によつては、否定の否定の結果として、最初のものとは著しく異なる產物が生ずることもある。例へば、單なる商品は自己を否定して貨幣となり、更に單なる貨幣は自己を否定して資本となる。この場合、資本はもとより單なる商品に復歸するのではない。また例へば、次第に溫度の高まる狀態のもとでは、氷は否定されて水となり、水は更に否定されて蒸氣となるのであるが、この場合にも、否定の否定の產物たる蒸氣は、最初の出發點たる氷と甚しくその品質を異にするのである。私は先きに、『辯證法的論理における對立物は、形式論理的な對立物と、一致することもあり、一致しないこともある、すべては問題とされた具體的な對象の客觀的な性質がこれを決定する』と述べたが、そのことが玆に思ひ起さるべきである。

要するに、反對物への轉化や、量から質への轉化や、否定の否定やが行はれるゆゑんは、自然の（狹義の自然、社會、および思惟の）すべての現象と進行とのうちに、矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向が含まれてゐるからであり、一切の事物の發展はそれ自身のうちに自己の發展を否定するに至るべき傾向を包含してゐるからである。形而上學的な見地からは、かゝる對立的な諸傾向が見えない。それは、これらの諸傾向のうち或る一つのもののみを摘出して、それに固執する。だから、かゝる見地からは、現象は飽くまでもその反對物へ轉化しえざるものとして現はれ、發展はたゞ同質なる現象の

あるひは擴大されたる・あるひは縮少されたる・規模における繼續として現はれる。かゝる見地からする發展には、跳躍も反對物への轉化もありえない。そのことをプレハーノフは次ぎの如く言つてゐる。『形而上學者は、自然においても、歴史においても、飛躍は存在しないと斷言する。彼等は或る現象または社會制度の發生を論ずる場合には、この現象または制度が、嘗ては極めて微小なものであり、全く眼につかぬものであるが、後になつて徐々に成長するものであるかの如く考へる。そしてこの現象および制度の消滅を問題とする場合には、彼等はこれと反對に、顯微鏡的な大さとなつて全く認知の不可能になるまで、現象および制度の漸次的減少が繼續することを假定する。かく理解せられた進化なるものは、全く何物をも説明しない。それは、現象の中に行はれる量的變化しか考慮に入れてゐない』。（プレハーノフ『史的一元論』川内氏譯本、一一一―一一二頁）。またレーニンは、發展に關する形而上學的見地と辯證法的見地とを、次ぎの如く對立させてゐる。『發展（進化）に關しては、二つの基本的な（または可能的な、あるひは歴史に現はれた）見解がある。縮少および擴大としての・反覆としての・發展、および對立物の統一としての發展（統一的なるものの互に排斥し合ふ對立物への分裂とそれらの相互關係）。第一の見解は、死んだ・つまらない・ひからびた・ものであり、後者は生きてゐる。たゞ後者のみが、すべての實在せるものの「自己運動」の理解に對する鍵を提供する。それのみが「跳躍」の「連續における斷絶」の「反對物への轉化」の・古きものの廢滅と新たなるものの成立との・理解に對する鍵を提供する』。（河上譯『レーニンの辯證法』、八九頁）。

教授土方成美氏はいふ、『何故辯證法にして始めて物を流動變化の過程において把握しえて、辯證法によらずしては之を把握しえないであらうか。經濟學の歴史をかへり見るに、正統學派の經濟學は、たしかに資本主義經濟の組織内における諸現象間の關係を論ずることに重點を置いたに違ひない。また墺太利學派は、特に價値の成立、價格の決定を中心として論じ、從つて經濟組織の變革などといふ問題に大した關心を持たなかつたことは、事實であらう。併しそれにしても、何等歴史的變遷を顧みなかつたといふことは出來まい。それは何れにしても、從來から存在した經濟史は、多く辯證的發展として歴史を見てゐないのであらうが、しかもそれがために、從來の經濟史が全然歴史的變化發展を捕捉しなかつたと稱することは出來ないであらう』。（本年四月發行『中央公論』所載『經濟學と辯證法』）。吾々は、正統學派や墺太利學派や乃至土方氏らの謂はゆる實證學派やが『何等歴史的變遷を顧みない』といふのでもなく、また『從來の經濟史が全然歴史的變化を捕捉しなかつた』といふのでもない。レーニンの言つてゐる通り、

『發展（進化）に關しては、二つの基本的な見解がある』。社會の發展を小供が段々大人になるもののやうにしか理解しえない見解、すなはち『縮少および擴大としての・反覆としての・發展』の見解は、その一つであるが、——そして土方氏らは斯かる發展をしか認識しえないのだが、——これは『死んだ・つまらない・ひからびた』ものだと、吾々は言ふのである。問題は發展過程における『跳躍』を・『連續における斷絶』を・『反對物への轉化』を・『古きものの廢滅と新たなるものの成立』を・認識しうるか否かに存する。

すでに前回に述べたやうに、辯證法的に思惟する者は、如何なる肯定的結論にも滿足しはしない。彼れは、思惟の對象のうちに、最初一瞥したときに此の對象によつて表示されたるところのものと矛盾する質と力とがありはしないかを探求する。だからこそ辯證法的な觀察のみが、『各〻の現象は、自己の存在を制約する力そのものの作用によつて、遲かれ早かれ、しかし必然的に、自分自身の對立物へ轉化する』ことを、明かにする。それゆゑにエンゲルスはいふ、『辯證法的哲學の前には、究極的なもの、絶對的なもの、神聖なものは、何一つ存立しない。それは一切のものにつき、また一切のものの上に、消滅性を呈示する。かくてその前に存立するものは、生成と滅亡との・低きより高きに向ふ限りなき向上の・絶ゆることなき過程の外の何物でもなく、またかゝる過程の・思惟せる頭腦への・單なる反映こそは、すなはち辯證法的哲學そのものである』。（『フオイエルバツハ論』、ドイツ本、四頁）。

辯證法は、一切萬物の前に、たゞ一つの例外をも許すことなく、その消滅性を宣告する。その前には、究極的なもの、絶對的なもの、××なものは、何一つとして存立しない。事實において世界の萬物は此の如くであり、そして辯證法はかく與へられたる事實の・人間の頭腦への・單なる反映に外ならぬけれども、しかもそれは、萬世不變なるものとして如何なる例外をも許さざるがゆゑに、世界各國のブルヂョアジーおよびその代辯者たちにとつて、正に一の苦悶であり××であり、また日本において××××的社會主義を形成しつゝある一連の人々にとつても、等しくまた一の苦悶たり××たらざるをえないのである。

『資本論』第二版跋文におけるマルクスの有名なる次ぎの言葉は、かくて完全に吾々の理解しうるところのものとなる。——『辯證法は、その合理的な姿においては、ブルヂョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の苦悶であり××である。何故なれば、辯證法は、現存事物の肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の・その必然的沒落の・理解を含め、あらゆる生成した形態を、運動の流れにおい

て・それゆゑにまたその暫時的な方面から・把握し、何物によつても畏伏せしめられず・その本質上、批判的であり、××的であるから』。

こゝに『現存事物の肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の・その必然的没落の・理解を含める』とは、たゞにその事物のなかに存する自己肯定の傾向を認識するに止まらず、それと同時に、またその反對物を・自己否定の傾向を・認識し、かくしてその事物を對立物の統一として・その發展をかゝる對立物の鬪爭過程として・把握し、從つてまたその事物が、それ自身のうちに含める矛盾のため、遲かれ早かれ必然的に、自分自身の對立物へ轉化することを、理解するの意である。だからそれは、あらゆる事物を『運動の流れ』において把握する。その前には、常住不壞のものは、何一つとして存立しえない。だから辯證法的に思惟せんためには、ヘーゲルの言へる如く、『如何なる歸結の前にも尻込みしない』だけの覺悟が必要である。だからまたマルクスは、その著『政治經濟學批判』の結語として、ダンテ神曲地獄篇中の一句――『こゝに一切の疑惧を棄てねばならぬ。一切の怯懦がこゝに死なねばならぬ』――を引き、『科學への入口には、地獄への入口と同じやうに、かゝる要求が揭げられねばならぬ』としてゐるのである。かくて日和見主義的な卑怯者は、科學への入口まで來て、そこで永久に足踏みせねばならぬ。だが、かゝる卑怯者は去らば去れ。辯證法的唯物論者はたゞ獨り地獄の門をくゞる。

辯證法は事物を根本的に把握せんとするものであるから、それは此の如くにラディカールである。それは、ヘーゲルの手によつて神秘化された形態で蔽はれてゐたかぎり、現存事物を聖化するものなるかに思へたがため、一時ドイツの流行となつたが、しかしその本質は、その核心は、此の如く批判的であり、此の如く××的である。ブルヂョア的諸教授がその前に尻込みせざるをえざるは勿論のこと、一切の社會民主主義者もまた、彼等が何物かによつて畏伏せしめられてゐるかぎり、到底眞實には、辯證法に近づきえない。如何なる歸結の前にも尻込みすることを許さざる辯證法の前では、たとひたゞの一つたりとも苟くも××××の或る物を認めんとする××××的社會主義は、到底存立しえないからである。

さて萬物は流轉して已まざるものであり、如何なる現象も遂には自己を否定せざるをえないものであり、如何に有益なる制度も最後にはその反對物に・有害物に・轉化せざるをえないものであるとするならば、吾々が頭の中で、あらゆる時代あらゆる民族にとつて理想的な社會組織となるべきものを、考案しようとすることは、如何に不可能なことであり無益なことであるかが分かる。辯證法は、一切のものが、一

定の時代一定の場所においては、その存立の必然性を有することを認識する。そこに、その保守的な方面がある。だが、それと同時に、辯證法は、一切のものがやがて必然的に沒落することを認識する。そこに、保守的な方面と對立するところの、その革命的な方面がある。かくて辯證法は、一切のユートピアを排除する。そして社會主義的教義の成効は、――レーニンの言へる如く、――吾々が人間的本性（利己心、無限の欲望、等々）に適合せる社會的條件に關する發明的考案を放棄し、現實の社會的諸關係の辯證法的分析に・すなはち現代の搾取制度の必然性と同時にその必然的沒落の洞察に・從事する場合にのみ、はじめて存在するのである。マルクスの主要著作たる『資本論』が、資本家的社會の必然性の證明と、この資本家的社會のなかに含まれてゐるところの・しかもこの資本家的社會の必然的沒落を齎らさずしては已まないところの・諸要素の發見とに、その主力を注ぎつゝ、未來社會の展望については極めて一般的な示唆に止めてゐるのも、そのためである。もちろん吾々は、マルクスが『資本論』を書いた時代とは、遙に進んだ時代に生活しつゝある。現に無産者の××は、――パリ・コンミューンの外にはマルクスがその生時において曾て見ることをえざりし此の新たなる國家の形態は、――世界六分の一の地域を占むる領域のうちに、すでに存立し發展しつゝある。そして『一國民は、他國民から學ばねばならぬし、また學びうる』（マルクス）。だから今日の吾々は、資本家的社會から××××社會への過渡期の諸樣式について、曾てマルクスが『資本論』において與へた一般的な示唆よりも、或る部分については遙により具體的な結論を得ることができる。だがそれは現實の社會が進歩したがために外ならぬ。未來社會を生むべき諸要素を現實の社會それ自體のうちに求めるといふ吾々の態度に至つては、少しも動搖してはゐないのであり、動搖してはならぬのである。

五、辯證法的唯物論（細論の3）

以上私は主として辯證法について話をして來たが、すでに以上述べたところだけによつて見ても、辯證法は本質的には唯物論の基礎の上に生み立つたものだといふことが分かる。

私は前回において、辯證法的認識が如何にして必然的なものであるかを説明するために、足立博士の軟部人類學を引用した。そのとき詳細に説明したやうに、博士が期せずして辯證法的結論に到達されてゐるのは、博士が實際の材料につき實に數十年にわたる忍耐強き觀察を繼續された結果である。博士の研究の一部は最近に公刊されたが、（それは前に引用した講演の速記では、僅に二行分に纒められてゐる部分

に對する・實際的資料の提供から成る）、それを見ると、圖書館でも別置きにしなければならぬ大きな型の圖書で、紙數は約八百頁、重量は一貫何百匁である。これは博士が蒐集された材料のほんの一部分にすぎぬのだから、もし博士の累積された總證の材料が同じやうな體裁で印刷に附せられたならば、それは實に尨大なものになるであらうが、このことは取りも直さず博士の結論が、机の上で單に頭の中から割り出されたものではなく、客觀世界の中で發見されたものであり、外的現象の忠實なる反映であることの、何よりもの證據である。

辯證法は、自然そのものの中で、無數の變化の錯綜を通じて自らを貫徹してをり、また人間の歴史においても、外見上偶然に見ゆる一切の出來事を支配してゐる。そして、此の如く自然そのもの又は社會そのものの中に客觀的に存在してゐる事物の性質が、人間の思惟の發展史の中で――ヘラクリット、プラトー、アリストテレス等々を經て、ヘーゲルに至るまで、一貫した絲條(いとすぢ)を形成しながら――次第々々に思惟する人間の意識に到達したものが、取りも直さず思惟における辯證法である。かゝる辯證法の一般的運動形態は、人間の思惟の發展の結果、遂にヘーゲルの手によつて『包括的な且つ意識的な仕方で叙述される』に至つた。自然および社會の辯證法的性質は、必然的に人間の頭腦に反映することにより、すでに久しい以前より、斷片的に且つ無意識的に、辯證法的思惟の形成を促してゐたのであるが、それらのものを意識的に一定の形態に包括したのは、實にヘーゲルの功績である。だから、マルクスは彼れをもつて『偉大なる思想家』となし、『公然彼れの門人たることを承認』してゐる。だが、こゝに吾々の注意せねばならぬことは、かゝる辯證法の一般的運動形態は、ヘーゲルが單に彼れの頭腦のみで發明したものではなく、むしろ彼れが外界の事物について發見したものに外ならぬ、といふことである。それは彼れの發明したものでなく發見したものであるがゆゑに、またその限りにおいてのみ、正しいのでありそしてまた彼れが斯かる發見を正しく爲しうるためには、現に彼れは百科辭典(じてん)的な知識の豐富さを有する天才たることを必要としたのである。たゞヘーゲルの根本缺陷は、彼れが外界から得來つたところのものを、何等か天來的のものであるかに思ひ込んだ點にある。彼れは、自然および歴史のなかに現はれる辯證法的發展をもつて、『何處か知らぬが永久の昔から・しかも思考する有らゆる人間の頭腦とはいつでも獨立に・ひとりでに行はれる概念の自己運動の寫しであると考へた。かくて彼れにあつては、主客が顛倒されてゐた。實在的なものから觀念的なものへの進路が、顛倒されて、觀念的なものから實在的なものへの進路とすり替へられた。實在的なものが觀念的なものを生むのではなく、逆に觀念的なものが實在的なものを生むのだと

された。カメラの映像は外物の反映であるにも拘らず、カメラの映像から外物が生まれるのだとされた。だからこそそれは極めて神秘的なものとなつた。辯證法は、ヘーゲルの手によつて『始めて包括的に且つ意識的に叙述された』にも拘らず、同時にまた、全く神祕的な雲霧に覆はれるものとなつた。だが『結局のところヘーゲルの體系は、方法からも内容からも、觀念論的に顚倒された一の唯物論』に外ならなかつたのである。(エンゲルス『フオイエルバツハ論』、ドイツ本、一七頁)。

　マルクスおよびエンゲルスの偉大なる業績は、かゝる觀念論的な辯證法を顚倒することによつて、これをその反對物へ――辯證法的唯物論へ――轉化せしめたことである。だからマルクスは言つてゐる。『私の辯證的方法は、根本において、ヘーゲルのそれとたゞに異なるのみならず、むしろその正反對のものである。ヘーゲルにとつては、彼れが觀念の名のもとに一の獨立せる主體にまで轉化したところの・かの思惟過程は、現實的なるものの創造主であり、現實的なるものは、たゞこの思惟過程の外的現象をなすにすぎない。余にあつては、これに反し、觀念的なるものは、人間の頭腦のなかで移置され轉置されてゐる物質的なものに外ならぬ』。(『資本論』第二版跋文)。すなはちマルクスにあつては、ヘーゲルと逆に、世界の發展は物質の自己運動である。彼れは、『頭のなかの概念を、唯物論的に、實在の事物の模像と見た』。何處か知らぬが永久の昔から自己運動をなしてゐるといふやうな、ヘーゲルの手で全く神祕化されてしまつた『概念』は、マルクスにあつては、人間の頭腦の外に存在する『物質』の自己運動が、人間の頭腦に反映することによつて生まれたものに外ならぬ。思惟過程によつて現實的なものが創造されるのではない。それと逆に、物的なものが人間の頭腦のなかで移置され轉置されて、――例へばキャメラにうつる物の映像のやうに、場合によつては、右と左とが置き換へられたり、上と下とが倒さになつたりして、――それが人間の觀念となるのである。地球といふ觀念から地球といふ物質が生まれるのではなく、その反對に、先づ地球といふ物質が存在し、それが人間の頭腦へ反映して地球といふ觀念が生まれるのである。マルクスはかく見た。だから彼れは、『ヘーゲルにあつては、辯證法が逆立してゐる。吾々は、神祕的な外皮のうちに合理的な核心を發見するため、これをひつくり返へさねばならぬ』と言つてゐるのである。しかもヘーゲルの辯證法からその神祕的な外皮を取り去つた後に、辯證法の合理的な核心が發見されたゆゑんは、本來ヘーゲルの辯證法が、その觀念論的な外皮にも拘らず、その本質において、實に百科辭彙的な豐富さを有する(すなはち材料の詳細にわたる占有のもとに行はれたところの)唯物論的觀察に基づいてゐたからである。私はしば〳〵足立博士の軟部人

類學に關する研究を引用し、その結論が期せずして辯證法的な命題となつてゐることを利用して來たが、この一例によつても或る程度までは誰でもが納得しうるやうに、吾々の思惟以前に與へられてゐる客觀世界——外的現象——そのものが辯證法的であるがゆゑに、その思惟における忠實なる反映もまた辯證法的たらざるをえないのである。此の如く辯證法は忠實なる客觀世界の反映であるがゆゑに正しいのであり、それゆゑにまた吾々の實踐に役立つのである。すなはち『唯物論は本質的には辯證法的なのである』。(エンゲルス『反デューリング論』、ドイツ本、一一頁)。『吾々の辯證法の根柢には、唯物論的自然觀が存在する。前者は後者によつて支へられ、後者が倒れるならば前者も倒れるであらう』。(プレハーノフ『マルクス主義の根本問題』、恒藤恭氏譯本、六〇頁)。ヘーゲルの觀念論的辯證法は、それ自身のうちに矛盾を含んでゐた。それは、それ自身がまた辯證法的な運動をなすことにより、その反對物へ——マルクスの唯物論的辯證法へ——轉化すべき契機を、それ自身のうちに內包してゐたのである。

しからば觀念論と唯物論との對立は如何なる點に存するか？　それは、エンゲルスの言葉によれば、『思惟の存在に對する・精神の自然に對する・關係についての問題、全哲學のこの最高の問題』が、如何に答へられるかによつて分かれる。『自然(または物質)に對する精神(または思惟)の本源性を主張し、從つて結局において何等かの種類の世界創造を認容する人々は、——この創造は、哲學者にあつては、例へばヘーゲルにおける如く、往々にしてクリスト教におけるよりも遙に荒唐無稽なものであるが、——觀念論の陣營を形成した。自然を本源的なものと見る他の人々は、唯物論の種々なる流派に屬してゐる。觀念論および唯物論なる二個の表現は、本來これ以外の何物をも意味しない』。(『フォイエルバッハ論』、ドイツ本、一四頁)。

レーニンはこれをもつて『異常に正しく且つ深刻なる考察』となし、その著『唯物論と經驗批判論』の全卷を通じて、つねにこの見地に立つてゐる。例へば彼れは次ぎの如く言つてゐる。

『ルードヰヒ・フォイエルバッハは、周知の通り、唯物論者であつた。そして彼れの諸著作を通じて、マルクスとエンゲルスとは、これまた周知の通り、ヘーゲルの觀念論から彼等自身の唯物論的哲學に移つたのである。R・ハイムへの反駁のうちに、フォイエルバッハは書く、——

「人間乃至意識の對象とならない自然は、いかにも思辨哲學にとつて、乃至は少くとも觀念論にとつて、カント的物それ自體であり、現實性なき抽象であらうが、しかしこの自然が取りも直さず

觀念論の破綻を齎らすものである。自然科學は、少くともその現在の見地からは、必然的に吾々を導いて、次ぎの點にまで——すなはち人間存在の諸條件がまだ備はらなかつた當時、自然すなはち地球がまだ人間の眼や人間の意識やの題目でなかつた當時、自然はまさしく絶對に非人間的な存在であつた、といふ點にまで——到達させるのである。……』

『見よ、フォイエルバッハは、唯物論と觀念論とに關して、人間以前の自然の視點から、かくの如く考察してゐる』。（『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、六八、六九頁）。

フォイエルバッハによれば、この地球が人間の未だ發生するに至らざりし以前に存在してゐたことは、疑ふべからざる事實であり、從つてまた、この地球が人間乃至人間の意識から獨立して存在することも、疑ふべからざる事實である。そしてそれは、存在が思惟から生まれるものでないことの、何よりもの證據である。だから彼れは言ふ、『思惟の存在に對する眞正の關係は、存在は主語であり、思惟は客語である、といふにある。思惟は存在から出るが、存在は思惟から出ない』。（『全集』、一八四六年版、三二六頁。恒藤氏譯『マルクス主義の根本問題』、附錄三七頁）。

人間の頭の中から地球や日月星辰やが生まれ出るのではない。人間はもちろんのこと、一切の生物がまだこの地球上に發生しない以前から、地球そのものは存在してゐる。それからずつと後になつて、この地球の上に始めて人間が發生し、そしてその人間の頭腦へ地球や日月星辰やが反映して、それが人間の意識となり觀念となるのである。これは極めて理解し易いことだ。なほ地球や日月星辰やその他一切の外物は、皆な辯證法的に構成され辯證法的な運動をなしてゐるがゆゑに、かゝる外的現象の人間的頭腦への忠實なる反映としての思惟もまた、必然的に辯證法的たらざるをえない。これもまた極めて理解し易いことだ。

だから、例へば『否定の否定』について、エンゲルスは言つてゐる。それは『甚だ簡單な・到るところ日々行はれてゐる・進行であり、もし吾々がそれを被ひ隱くしてゐる秘密箱を取り去るならば、それに如何なる子供でも理解しうるものである』。（『反デューリング論』、ドイツ本、一三七—八頁）。實に吾々が一たび觀念論の泥沼から拔け出て、唯物論の見地に立脚するならば、『一切の深奧なる哲學的諸問題は、極めて簡單に一個の經驗的事實のうちに解消する』のである。（マルクス、エンゲルス『ドイッチェ・イデオロギー』、二四二頁）。そこで、ブルジョア哲學の極端なる煩瑣と難解とに慣らされて、哲學とは總じて斯かるものだとのみ思ひ込んでゐる人々は、マルクス主義哲學の平易明快なる

を見て、却て狐につまされた感を抱くのである。だが眞理はむしろ理解し易きものであり、理解されうるものである。プロレタリアートの哲學は、プロレタリアートによつて理解されうる。逆にブルジョア哲學は、恐ろしく難解なものとならざるをえぬ。何故なれば、ブルジョア哲學は――個々の哲學者自身の主觀的意圖は如何なるものであらうとも、客觀的には――ブルジョアジーの階級的利益を危險ならしめざることを思惟の限界となし、從つていくつかの事物を絶對化し神聖化することに強制されてをり、それゆゑにまた辯證法の前に戰慄し、唯物論の前に戰慄しつゝ、結局のところ、あるひは意識的に、あるひは無意識的に、章魚の墨汁を吐くが如くにして事物の正體を被ひ隱さざるをえないのであるから。かくてそれは、忠實なる科學的認識の代りに、信仰・宗教・坊主主義の卵を産みつける虱の巣となる。吾々は決して斯かるものにだまされてはならない。だからレーニンは言つてゐる、『特殊領域――化學、物理學――において極めて價値ある業績を擧げうる教授連の何人に對しても、問題が哲學に關することであつたなら、吾々はたゞの一語だも信じてはならぬ。何故か？　それは特殊的な事實的研究の領域においては極めて價値ある業績を提供しうる經濟學の教授たちのうちの誰一人をも、彼れが一たび經濟學の一般理論に論及するや、たゞの一語だも信じてはならぬのと、同じ理由からである。けだし經濟學もまた、近代社會の内部にあつては、認識論に劣らず黨派的な一科學である。大體において、經濟學の教授連は、資本家階級の學識ある番頭以外の何物でもなく、そして哲學の教授連は神官僧侶達の學識ある番頭以外の何物でもないのである』。（河上譯『事項別レーニン選集』、第一分册、七六、七七頁）。

六、辯證法的唯物論の批判の批判

『東京帝國大學教授土方成美氏は、日本の經濟學界における第一の勇者である。氏はしばしば極めて不用意なる準備のもとに、マルクス主義の排撃に突進され、その度毎に、至極の勇者でなければできない藝當を、吾々の眼前で演出される』。本誌前號において私は斯様に述べた。そしてその證據の一つとして、氏の近業『經濟學總論』中の唯物辯證法に關する氏の批判に對し、私は若干の評言を加へておいた。しかるに氏は、かゝる證據を更に追加せんと欲するものなるかの如く、本誌の前號と同時に發行された『中央公論』の卷頭に、『經濟學と辯證法』と題する論文を公けにされた。レーニンの言ふところによれば、特殊的な事實の研究に關しては如何に價値ある業績を擧げうる經濟學の教授でも、彼れが一たび經濟學の一般理論に論及するならば、吾々はたゞの一語だも信じてはならぬ。また特殊の領域においては如何に

價値ある業績を提供しうる自然科學の教授連でも、もし問題が哲學に關することであつたなら、吾々は彼等の言ふことをたゞの一語だも信じてはならぬ。ところで土方成美氏は、ともかく經濟學の教授であるに相違なく、そして今ともかく哲學について語つてゐるのである。だから、もしレーニンの言ふところが正しければ、それは如何なる方面から見ても、たゞの一語だに信じてはならない筈のものである。現に氏自身も、『要するに辯證法そのものについては、始めに斷つた如く、これを根本的に批判するつもりもなければ、能力もないことを、率直に告白しなければならない』ことを、繰り返し述べられてゐるのであり、あるひはそのことを證明するために斯かる論文を發表されたものかとも思はれるが、事の序ゆゑ、少しくそれに觸れておかう。

ブルジョア學者たちが——永年哲學を專攻せる者でも——眞に辯證法を把握することができないのは、彼等が觀念論の立場に立つてゐるからである。これが彼等の根本的な病源である。

土方氏は先づその論文の冒頭に次ぎの如く言つてゐられる。『辯證法の特色は、その綜合性、絶對否定性、實在性、等々であると言はれてゐる。以下において、これらの特色が果して辯證法のみに固有なるものであるかが、よしこれらが辯證法のみに固有なるものであるとしても、これを具體的なる經濟現象へ適用することによつて、どれだけ吾吾の經濟の理解を深めるであらうか。特にこの後者の問題を以下において考へて見よう』。これが氏の自分に課した問題である。そして此の如き問題の提出の仕方それ自身によつて、氏は先づ辯證法に對する自己の無智を表白してゐられる。私はデューリングを批評したエンゲルスの言葉を引かう。

『彼れにあつては、外界からでなく・思惟から・導かれた形式的な諸原理が問題なのであり、それらの諸原理は自然および人間の領域に適用さるべきものであり、從つて自然および人間はそれらの諸原理に從ふべきものである。だが思惟は何處からこれらの諸原理を取り來たるか？ それ自身からか？ 否な……こゝでは存在の・外界の・諸形態が問題なのだが、思惟はこれらの諸形態を、決してそれ自身からではなく、全く外界からのみ、汲み取り導き出しうるのである。だが、さうだとすると、全關係は「デューリングが考へてゐるのと」逆になる。諸原理は研究の出發點ではなく、その終局的産物である。それらは自然および人類史の上に適用されるのではなく、むしろ自然および人類史から抽出されるのである。自然や人類世界が諸原理に從ふのではなく、むしろ諸原理は、それらが自然および歴史と一致するかぎりにおいてのみ、正しいのである』。(エンゲルス『反デューリング論』ドイツ本、二

一頁)。

土方氏は、辯證法を『經濟現象へ適用することによつて、どれだけ吾々の理解を深めるであらうか』を、その問題とされてゐる。だが辯證法は、元來、土方氏の理解されるが如き意味において現象の上に適用されるものではなく、むしろ現象から抽出されるものなのである。氏は、辯證法的把握の高唱が『やゝもすれば人々をして徒なる混迷に陥らしめる虞なしとしない』と言つてゐられるが、實際のところ氏は、立論の最初から『徒なる混迷』に陥つてゐるのである。

分かり易くするために、私は前に掲げた軟部人類學の問題を、重ねて茲に引用しよう。例へば吾々が、長掌筋に關して日本人は西洋人に劣つてゐるといふ命題に對し、長蹠筋に關しては日本人は西洋人に優れてゐるといふところの・前の命題と矛盾する・他の一命題を對立せしめうるのは、數多き屍體について吾々が實際の研究をなし終へた結果にすぎない。だから假に、長掌筋に關して日本人は西洋人に劣つてゐるといふことが、先づ既知の知識であるとしても、その場合吾々は、矛盾の論理を『適用』することにより、既知の命題に矛盾する命題もまた正しからうといふ風に、たゞ頭の中での推理をもつて、長蹠筋に關しては日本人の方が優れてゐるといふ第二の命題を、案出し得るのではない。辯證法は客觀世界の論理である。それは客觀世界からのみ『汲み取り』『導き出し』『抽象し』うるものであつて、逆に客觀世界へ『適用』さるべきものではない。土方氏にしてこの事を理解されざるかぎり、氏はいつまでも際限なく『素朴なる疑問を開陳』(氏自身の言葉を借用)することに沒頭されざるをえないであらう。だが私は、氏の提供された素朴なる二三の疑問について、順次に數言を費さう。

氏はその論文の第一節で次ぎの如く言はれてゐる。

『綜合性といふことが論理の本質に基くものであるとすれば、甲は甲であつて、非甲ではない。AはAである、Aは非Aではないといふ自同律、矛盾律といふが如きものも、同一の平面に於て廢棄されるのではなくして、たゞ一層高き平面に於て、低次の平面における矛盾對立が反對定立に代るのであるといふ、田邊博士の所說が正しいやうに私には思はれる。或物が夜白く見へ、晝は黃色に見へるとき、同時に此物は白い、黃色いといへば矛盾である。即ち同じ夜なら夜に於て同時に此二つの述語を主語について定立すればそれはたしかに矛盾であるが、夜と晝とを含む立場に立つて見れば、此者は夜は白く見え晝は黃色いといふことは何等矛盾でないやうである』。(以上氏の文章をすべてそのまゝに引用す。——河上)。

氏がこゝに提供せんとしてゐられる『素朴なる疑問』が何であるかは、ちよと分かりにくい。しかしそれは恐らくこういふのであらう。『甲は非甲である』といふことは、同一の平面では、矛盾であつて成立しえない。だが、より高き平面に立つて見れば、『甲は非甲である』といふことも、矛盾にあらざるものとして成立しうる。例へば、或る物は白くて同時に黄色いといへば矛盾であるが、その物は夜は白く晝は黄色いといへば矛盾でない。すなはち矛盾の論理における二個の立言は、『その行はれる平面が異なると思へば、それで困難がないやうに思はれる』。自分は辯證法における矛盾を斯様に解する。此の如きが氏のこゝに主張せんとするところであらう。

氏はしきりに矛盾を恐れてゐる。だが、すでに述べたやうに、一切の事物は矛盾に滿ちたる構成分から成り立つてゐる。言ひ換へれば、對立物の統一は、自然・社會・および思惟・の一切を通じての、極度に一般的な法則である。それは客觀世界そのものの法則であり、自然および社會それ自身がすべて對立物によつて構成されてゐるがゆゑに、それはまた、かゝる客觀世界の吾々の頭腦における反映としての、思惟の法則となつてゐるのである。だから、より精密に考察すれば、『辯證法一般は人間の認識に固有なもの』であり、吾々は『あらゆる任意の定言のうちに、辯證法の一切の要素の胚種を發見しうる』。『例へば、木の葉は青いとか、ヨハンは人であるとか、スピッツは犬であるとかいふ如き、任意の定言をもつて始めたとする。さうしたならば、すでにこゝに（ヘーゲルが天才的に認識した如く）、吾々は、個別的なものは普遍的なものであるといふ・一つの辯證法をもつ』。（レーニン）。この場合、ヨハンは一人の人にすぎない、彼れ以外には多くの人がゐる。またスピッツはポメラニアン種の犬にすぎない、それ以外になほ多くの種類の犬がゐる。だからヨハンは個別であり、人は普遍である。スピッツもまた個別であり、犬は普遍である。從つてヨハンは人であるといひ、スピッツは犬であるといふのは、個別的なるものが普遍的なるもの（それは個別的なるものの反對物）であるといふことであり、それは取りも直さず、甲は非甲であるといふのである。かくて如何なる任意の定言のうちにも、（もしそれが無内容なる同義反覆でなければ）、土方氏の最も恐れられる矛盾が常に含まれてゐるのである。土方氏によれば、或る物が白くて同時に黄色いといへば矛盾だが、たゞ或る物は白いとか、また或る物は黄色いとかいふやうな、一つ一つの命題には、少しも矛盾が含まれてゐない、といふのである。だが、より立ち入つて考察すれば、紙は白いといふやうな簡單な立言でも、實は矛盾に充ちてゐるのである。何故といふに、白い物は紙以外に澤山あるのだから、紙＝白い物 ではない。しかも吾々は、

紙は白いといひ、紙は白い物であるといふ。この場合吾々は、紙と白い物とを同一視すると同時に、またこの兩者を區別し對立せしめてゐるのであり、そこに對立物の統一または同一性を表現してゐるのである。土方氏が如何に頑強に抵抗されても、何等かの內容をもつた立言をなさんとする場合、自分自身がかゝる對立物の統一をなさざるをえないであらう。問題はたゞそれを意識すると否とに存する。

次ぎには土方氏がその論文の第二節以下第五節にわたつて取扱つてゐられる發展の法則、否定の否定、等について一言しておから。

氏はこゝで、京都帝國大學教授田邊元氏が『哲學研究』（昭和二年三月號以下）に連載された『辯證法の論理』を、唯一の力杖にしてゐられる。氏は田邊氏の論文の一節を引用したのち、『かくして博士（田邊元氏）は、辯證法の妥當する領域を、精神生活・意志生活の領域に限定せられる』と言つてゐる。土方氏によれば、これは哲學專攻者の言ふところであるから間違はない。そこで、此の如く『精神生活の領域に限定』された辯證法は、果して經濟の領域にまで『適用』されうるかが、氏のために大いで起る問題となる。そしてこの問題には、經濟學の專攻者たる土方氏自身が答へよう、といふのである。

だが、たとひ一般に信用の厚き哲學の專攻者であつても、また個人的にはよくその人柄を知つてゐるにしても、私は先づ田邊氏を哲學者としては無條件的に信用することができない。一切のブルヂョア的哲學教授と同じやうに、氏にして飽くまでも觀念論の城壁內に閉ぢこもつてゐられるかぎり、氏もまた到底、ヘーゲルの辯證法に附き纏つてゐる觀念的な外皮を突き破つて、そのなかに含まれてゐる合理的な核心を把握することに、成功されはしないであらう。土方氏の引用文の一部を引用すれば、田邊氏は次ぎの如く言つてゐられる。

『今平面上に原點Oをとり、これを判斷の起點乃至立場と想像する。このOから一點Aに至る距離OAを＋Aで表はし、これが一の定立を代表するとする。この定立肯定においては、＋Aの意味は完全に限定せられ、何等の不定を殘さないと考へて置から。さてこれだけの豫想の下に、もし否定すなはち反定立が必然に－Aを意味するならば、否定は肯定と同じく完全に規定されたものとなるであらう。何となれば、－Aすなはち○Aと反對の方向に○Aの長さに等しい距離を計つた－○Aは、如何なる意味においてもその規定が＋Aすなはち○Aに劣るところはないからである。私はこのやうな完全に相對應しつゝたゞその方向の反對なる如き一對のものの對立を、假に雙關的對立性と呼ばうと思ふ。辯證法は否定を肯定に對し斯かる雙關的對立に立つものと考へ、それによつて反定立の定立に

少しも劣るところなき積極的規定を有することを主張しようとするものである。‥‥

『それでは斯かる雙關的對立性の範圍は如何なるものであらうか。私はこれが意識であると思ふ。‥‥意志の形相を外にしては雙關的對立性の成立する地盤はないと思はれる。』

かくて氏は、『概念は「現實の生ける魂」と呼ばれるのであるが、その謂はゆる現實とは、精神生活の直接なる體驗内容を指すことは、疑ひない』といひ、あるひは『かくて私は、辯證法が單に純粹論理の立場で成立するものでなくして、具體的なる意志の體驗に基づく精神生活の論理に外ならざることを、一般的に結論しうると思ふ』といつてゐられる。(『哲學研究』一三六號、二五、二六頁)。

此の如く辯證法をもつて『精神生活の論理』となすこと、そこに觀念論的な根本誤謬が横たはる。辯證法は精神生活の論理ではない、それは客觀世界の論理である、たゞ客觀世界が辯證法的に構成されてゐるがゆゑに、その客觀世界の人間的頭腦への反映としての、人間の精神生活もまた、辯證法的に構成されてゐるのである。辯證法の地盤は人間の精神そのものに在るのではない。辯證法の地盤は物質そのものに存するのである。

例へば商品を取つて見よう。商品の形態は二重である。商品は先づ使用價値としての形態を有する。商品といふ以上、何等かの種類の人間の欲望を充足するものでなければならず、從つて種々なる種類の商品は、種々なる種類の欲望を充足するために、互にその使用價値としての形態を異にする。米、酒、煙草、織物、机、紙、等々、あらゆる種類の商品は、一として全くその形態を同じくするものはない。なほ商品は、かゝる使用價値としての形態の外に、商品價値としての形態——交換價値——を有する。例へば、米一石の交換價値は金何圓であり、また煙草一箱の交換價値は金何圓であるといふやうに、如何なる商品もみな一定の代價を有する。ところで諸商品の交換價値は、それらのものの使用價値が互にその品質を異にするのと正反對に、完全にその品質を同じくする。ブルヂョアの細君の指に光つてゐるダイヤモンドも金何萬圓であり、プロレタリアが足にはいてゐる靴も金何圓である。かくて一個のダイヤモンドの交換價値も、一足の靴の交換價値も、たゞその分量を異にするだけで、品質においては全く同じである。かゝる意味において、諸商品の使用價値と交換價値とは互に對立してゐる。言ひ換へれば、商品なる統一物は、使用價値および商品價値(その現象形態は交換價値)なる對立物によつて構成されてゐるのである。この場合吾々は、現實における商品を分析するがゆゑに、使用價値の對立物として商品價値(または簡單に價値)を發見するので

ある。かゝる『對立性の成立する地盤』は、『意志の形相』でも何んでもなく、外的現象としての商品である。

更に商品の交換について見るに、これをその純粹な姿において觀察するかぎり、その販賣者と購買者とは、『自由なる・法律上對等なる・人格者として契約を結び』、相互に等價物を交換するといふ平等關係に立つてゐる。だが一たび勞働力が商品として賣買されることになれば、その販賣者は購賣者によつて剩餘勞働を搾取される關係に立つことになる。かくて平等關係は搾取關係に轉化し、簡單なる商品生產は資本家的商品生產に轉化する。すなはちこの場合、簡單なる商品生產の否定として生まれるものは、資本家的生產である。ところで、この簡單なる商品生產と資本家的生產との『對立性の成立する地盤』も、やはり『意志の形相』でも何んでもなく、現實における商品生產の發展の歷史そのものである。それは恰も、麥粒の否定として植物としての麥が生まれることが、全く人間の意志から獨立した外的世界の屬性に基づくのと、何の變りもない。辯證法が『現實の生ける魂』を形成してゐるとは、現實そのものが辯證法的に構成されてゐるといふことである。現實とは現實である、それは一切の現實を含む。『謂はゆる現實とは精神生活の直接なる體驗內容を指す』といふが如きは、一の觀念論的な幻想である。

翻つて哲學者田邊氏を典據とせる經濟學者土方氏を見よう。『田邊博士の所說に從つて』辯證法の『經濟への適用の價値』を決定しようとする氏は、例へば次ぎの如きことを言つてゐるに止まる。

『なるほど意志の世界において、或事の否定は、一の積極的內容を持つといへるであらう。「蜜柑を欲しない」といふことは、「蜜柑を欲する」といふことと同じく積極的內容を持ち、玆に田邊博士の謂はゆる雙關的對立が可能になるやうである。然るに、「蜜柑を欲しない」といふことは、「蜜柑を欲する」といふことと、完全に正反對な對立をなすとも考へられるであらうか。……具體的な事實について見れば、「蜜柑を欲する」といふことほど規定された內容を持つてゐないやうでもある。……蜜柑を欲するといふことの正反對なる內容を有することは、もし蜜柑に對して正反對と考へられることを欲するといふ場合に始めて言ひうるのではなからうか。正反對なる概念といへば、例へば右と左、上と下、裏と表、南と北といふが如きものであらう。しかしこれとても、左を欲しないことは、時として右も左も欲しないことであり、時として右を欲することでもありうる。とにかく具體的な存在の世界において、或る事物を欲しないといふことが、直ちに正反對の特定の事物に對する欲求を思はせる場

合、或る物とそれに正反對なる特定の事物が對立してゐる場合は、極めて稀であらう。資本主義を欲せざるものには、社會主義、無政府主義、ギルドソシアリズム、たゞ少し變形されたにすぎない資本主義、等々を欲するもの、無數のものが考へられる。しからば資本主義を否定するといふことが、資本主義に對して積極的なる或る特定の組織を提唱することを意味しないのである。云々』。

さて斯かる祖述者の現はれたことを、田邊氏が滿足とされるか否かは別として、ともかく田邊氏が『辯證法は意志の體驗に基づく精神生活の論理に外ならぬ』と言はれたものだから、土方氏は後生大事に辯證法を人間の意思・意欲に依存せしめつゝ、蜜柑を欲するとか欲しないとか、左を欲するとか右を欲するとか、資本主義を欲するとか社會主義を欲するとか、いろ／＼な形態で氏の謂はゆる『素朴なる疑問の開陳』を企てゝゐられるが、この場合氏の理解せねばならぬことは、人間の意志・意欲が先づ問題なのではなく、かゝる意志・意欲を規定するものとしての彼等の社會的存在が問題なのだ、といふことである。

資本主義の否定は何であるか特定されてゐないと氏は言ふが、それは現實の客觀世界において不可避的に規定されてゐるのであり、資本主義的社會は自己を否定して必然的に社會主義的社會に轉化すべきものなのである。そしてこのことが吾々の意志・意欲に反映することによつて、現代における主要なる思想的對立は、ブルヂョア的なものか、しからずばプロレタリア的なものか、この二つの何れかに不可避的に分属してゐる。だから、プロレタリアートの××××××××に參加することを欲しないものは、不可避的に、ブルヂョアジーへの×××を欲するものとならざるをえない。×××××は──『意志の形相』は──客觀世界によつて明瞭に特定されてゐるのである。

更に一例を取らう。現在の日本における政黨としては、政友會、民政黨、社會民衆黨、日本大衆黨等の合法政黨の外に、非合法政黨としての×××××がある。そこで吾々が何れかの政黨を支持せんとするかぎり、非合法政黨を支持することを欲しないならば、合法政黨を支持することを欲するの外ない。また吾々がブルヂョア的大政黨を支持せんとするかぎり、政友會を欲しないならば、民政黨を欲するの外ない。更に吾々が社會民主主義者の黨を支持せんとするかぎり、若干の地方政黨を除いた以外では、右翼的社會民主主義の黨たる社會民衆黨を欲するか、しからずは左翼的社會民主主義の黨たる日本大衆黨を欲するの外ない。土方氏自身も、例へば選擧の際などには、何黨を欲しないことが何黨を欲することを意味するかを、それこそ『具體的なる意志の體驗に基づく精神生活の論理』によつて、明白に理解されるに

とができよう。土方氏は更に机の否定として何が生まれるかといふやうなことまで問題にしてゐられるが、これも例へば日本現在の商品世界について見れば、机と競爭の地位に立つてゐるものはテーブルであるから、もし机が完全に否定されたならば、何人の書齋にもその代りにテーブルが生まれるといふことが、發見されうるであらう。

さて以上の簡單なる批判によつても、辯證法を『根本的に批判する能力のないことを』土方氏自らが『率直に告白しなければならない』ことが、よく分かるであらう。氏の意識しつゝある『覆ふべくもなき科學的無力』の感じは、その論文の各行毎にあらはとなつてゐる。しかも氏は、敢てブルジ アジーの『空論的代辯者』たる地位を辱しめざらんがために、勇敢にも引續き斯かる論文を公けにされつゝある。一般的理論の領域を避けて、特殊的な領域における事實的研究に籠城せざるかぎり、ブルジョア經濟學者は、氣の毒ながら今や斯かる難事業を擔當することを、餘儀なくされつゝあるのである。

* * *

吾々は『マルクスおよびエンゲルスの辯證法的唯物論を擁護し××し、現實の認識の××的方法として之を現實の××的××のために應用し、ブルジョア的世界觀の・ならびに理論上および實踐上の日和見主義の・あらゆる種類に對し積極的に鬪爭する』ことを、[illegible]の任務とされてゐる。それゆゑに私は、かゝる仕事のため比較的多くの頁を費すことを、必ずしも意としなかつたのである。だが以上をもつて辯證法的唯物論の話は、もはや終りとしよう。――調子に乘つて一人でしやべつたために、あなたが側にゐられることも殆ど忘れてゐた。さぞ退屈されただらう。次回には少し變はつた話をしましようから、また引續き聽きに來て下さい。

主なる誤植の訂正

三月號	四頁	下段	末行	「提得」は「捉得」の誤
〃	八頁	上段	末行	「ところである」は「ところがある」の誤
〃	八頁	下段	七行目	「彼等」は「彼れ」の誤
〃	二〇頁	下段	十二行目	「經濟學諸關係」は「經濟的諸關係」の誤
〃	〃	〃	十三行目	「經濟學構造」は「經濟的構造」の誤
〃	〃	〃	十四行目	「の礎」は「の基礎」の誤
四月號	七〇頁	下段	十二行目	「法則である」は「法則であり」の誤
〃	七一頁	下段	十二行目	「必要」は「必然」の誤

東北帝大教授
法學博士 勝本正晃著

（四六判上製 四七四頁）

定價貳圓八拾錢
送料廿四錢

文藝と法律

最新刊

本書は文藝と法律との關係如何といふ如き固苦しき問題を取扱つて居るのではない。法學者たるの著者が洋の東西、土地の古今を問はず文藝上に現はれたる法律問題を現行法に照して解釋を試みしもの。本朝棠蔭比事、ハムレット、ベニスの商人、赤き法衣等々の事件を鋭きメスは完膚なきまでに解剖する。兼ねて著作法に關する著者の意見を披瀝す。興味深き消閑の好著。

法學博士 末弘嚴太郎著

法窓閑話

定價貳圓五拾錢
送料二十二錢

帝大教授 田中耕太郎著

法と宗教と社會生活

定價貳圓五拾錢
送料二十二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

全六卷豫約募集◇一册壹圓

厨川白村全集

第三回配本（五月）

第三卷 文學論（下） 文藝思潮論、苦悶の象徴、最近英詩概論

第一卷 文學論（上） 近代文學十講

第四卷 文學評論及印象記 小泉先生そのほか、印象記

第六卷 英詩選釋 英詩選擇、現代抒情詩選、『附錄』略年譜

配本濟

（第三卷）文學評論 象牙の塔を出て、十字街頭を往く

（第五卷）戀愛觀及雜纂 近代の戀愛觀、雜纂

豫約規定

□體裁 本文四六判九ポイント、一册紙數平均約四百頁乃至五百頁、裝幀淸麗無比。

□頒布方法 全六卷、豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込み下さい。

□刊行期日 昭和四年二月第一回を刊行し爾後毎月一册づゝを刊行し昭和四年七月を以て完結す。

□申込方法 先づ御申込みの際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのであります から、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戾し致しません。

□會費 （一）毎月拂壹册に付壹圓。
（二）一時拂（全六卷）五圓八十錢。
（前金一時拂の方は申込金を要しません。）

□送本料 會費の外に、送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尙書留送付を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御增し下さい。東京市内六錢。書留六錢增。

□拂込方法 振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するやう御拂込み下さい。但切手代用は一割增に願ひます。

□御注意 特に遠隔の地に限り書店に申込まれたる方はその書店から運賃實費を御請求する事がありませうから宜しく願ひます。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

政局は何處へ？

現代的獨裁と田中式獨裁

長谷川如是閑

議會主義が機能を失つて、獨裁的の個人又は政黨による、、主義が現代の政治的傾向となるに至つた事情の、我國にも現はれたのが即ち田中式獨裁政治であるが、然し、近代政治を獨裁的ならしめた事情そのものは、必ずしも一樣ではなくその動因と性質とに種々あることを知らねばならぬ。

今日の獨裁的傾向の發生は、今より三四十年前に所謂識者の注意を惹いたのであつた。當時既に、『アメリカン・コンモンウエルス』の著者ブライスは、民主々義的傾向から獨裁的傾向への轉化をアメリカの政治的傾向に於て認めたのであつた。ブライスは特にアメリカに於てその傾向を示唆する、顯著な三つの事情を擧げたが、その一つは、例のボス政治である。ボス政治の極端な、、的方法は、ロシヤのザアのそれの外ヨーロツパに於てそれに匹敵するものを見ないといふのである。第二は、勞働組合のそれで、そこでも少數のリーダーがその組織その運動に於て全くの獨裁者である。第三にはトラストその他の商業團體で、近代の商業は戰爭と同じく、少數人の手に無制限の權限を賦與するものである。

ブライスが、今日の獨裁主義の徵候をアメリカに見出したのは、當違ひではなかつたが、然し彼れはそれの社會的動因を求めやうとしないで、これを個人心理の本質——英國の政治學者の通語でヒューマン・ネチユアーと呼ばれるもの——に求め、元來、政治的服從の根據は、不精（インドゥレンス）、尊崇、同情、恐怖、理性の五つの人間的心理に依るものであるといふ根本の事情に變化のない限り、政治に於て、昔起つたことは今も起り得る譯で、、、政治への逆轉は人間性の已むを得ぬ所である、といふやうに理解したに止つてゐた。

然し、人間心理は、心理自體で社會の歷史を變化せしめて行くものではなく、その逆に、歷史によつて心理が轉化して行くのであるから、民主々義から獨裁主義への逆轉の動因は、これを人間心理の本質の不變といふことに求むべきものではなく、即ち人間には强者、優越者に對して盲從する本能的傾向があるからであるといふやうな理由に求むべきものではなく、統制の方法にさういふ轉化を與へた社會的變化そのものゝ動因に求めねばならないのである。ブライスの指摘した三つの事情は、外觀上は、何づれも同樣に今日の獨裁主義の前驅的現象たるが如くであるが、然し、これらの三つの事情は、それ〴〵その獨裁的傾向の動因を異にするものであり、從つて、その異る動因による獨裁主義は、それ〴〵其の性質を異にするものであることを認めねばならぬ。

所謂ボス政治は、政治的機構そのものが、本來、人間的心理の弱點を組織的に發展せしめる方法を內藏してゐるといふ事情に因つたもので、それこそ最も所謂ヒユーマン・ネチユアーに動機してゐるものといひ得るのである。近代政治の組織は、因習による家長政治的、、や、、による、、政治的、、やを制壓する機構をもつたものであるが、然し、社會的利害集團の、、的競爭から生ずる優越者の、、に對してこれを制壓する機構はもつてゐないのである。それは元來近代政治といふものが、社會的利害集團の、、的競爭を禁壓した家長的獨占や軍閥的掠奪やを排除する運動だからで、近代政治自體は、社會的利害集團の自由競爭に於ける優越たる、、主義を目的としたものであつたともいひ得るのである。ボス政治は、この利害集團の競爭のための政黨組織を、個人的利益の機構たらしめたもので、近代政治の意識的に豫期した所ではないが、然し、その無意識的企圖には一致するものである。蓋し近代政治は、氏族的封建國家や、、的帝國々家に於て充分發達し得なかつた個人主義的經濟組織を極度に發達せしめたものであるから、この時代に於ては、社會的利害に於て一致した集團の利益といつても、結局は個人的利益に歸着することゝなるのである。されぱそこでは集團的利害を代表すといふ政黨も、個人的利益の機構に墮落する可能性は充分に持つてゐるのである。故に近代政治の自由主義が、個人心理の制約に於て、言ひかへれば人間的本能の統制に於て不充分であるといふ弱點に乘じて、個人的慾望の、、的跋扈を生じた事が、ボス政治の動因を爲してゐるのである。それは甚だ個人心理的な動因に依つた現象である。

反之、商業的社會に於ける獨裁的傾向は、全く資本主義がその自由競爭時代を卒へて獨占時代に進み、自由主義の、、的混亂から脫れるために、その正反對の中央集權的統制に入り込んだことを動因とするもので、その獨裁主義は、所謂『金融資本家』時代に入つてその極度に達した譯である。從つてそれは、資本主義過程の甚だ機械的な進化作用に基いたもので、ヒユーマン・ネチユアトといふやうな人間的作用によつたものではないのである。されぱこの資本家的獨裁の動

因は支配欲とか所有欲といふ心理は動機に歸すべきものではなく、資本主義自體の機構の機械的進化に歸すべきものであつて、資本家的食慾はその結果として亢進したものに過ぎない。それは豐太閤をして朝鮮征伐といふやうな大食慾を起さしめたものが、彼れの心理的弱點——又は強點——ではなく、彼れ自身の征服事業の進轉の歷史的結果であつたやうなものである。

勞働組合に於ける獨裁主義の發達は、アメリカのそれに於ては、多少ボスの勢力に似た心理的動因を含んでゐるにしても、然し、本來は、無産階級的運動の性質に因るものと認めねばならぬのである。無産階級運動は二つの理由から獨裁主義に入り込むのである。一つは、大衆運動は、先づ自然發生的衝動的發動をとる所から、それを統率する者は、戰爭に於ける將軍のそれの如く、又は宗教運動に於ける聖者のそれの如く、一方に不合理的の、人格的の統制力をもたねばならぬと共に他方に於て、その運動に於て、實際的の意味に於ける科學的意識をもつものであらねばならぬのである。その點は有力な將軍が戰爭科學の大家であると同時に一個の偶像であらねばならぬのと似てゐるのである。これは資本主義の獨裁者が、資本主義經濟の科學者であるよりは一大『所有者』であらねばならぬといふのや、、、國家の獨裁者が、、、、、、、、であれば足りるといふのとは全く性質を異にするのである。これは無産階級運動が、、ボス政治のやうに個人的利益の運動でなく、資本主義のそれのやうな『所有』の運動ではなく、生産組織の最も社會的な方法に進む科學的の意識目的を把握することによつて組織的に進展した、所謂『社會運動』だからである。

かくて、同じやうに獨裁の外觀をもつた此等の近代的、、主義が、異る動因、異る性質をもつものである如く、それの延長たる今日の各國に於ける獨裁主義的傾向も、すべて近代國家の組織を第一條件とするといふ共通性はありながら、それぞれ異る動因と性質とをもつものであることが認められるのである。

田中式獨裁も、その意味に於て、イタリーの獨裁やロシヤの獨裁と一列に、それを最も現代的な『獨裁』として記載される光榮をもつものであるか何うかは、嚴重に吟味する必要があるやうでもあり又ないやうでもある。それは嚴重な吟味を待つまでもなく、餘りに現代的獨裁の軌道を外づれてゐるのである。

田中の獨裁は、他方で、、主義の機能の減退といふ風潮に乘じたものであるが、然し、元來、、、、、は今日まで、決して、、主義の機能を充分に——恐らく不充分にも——發揮したことなどはないのである。、、、、、制度は、ある意味で、あの短命だつた、ロシヤのデューマほども『、、的』であり得たことはなかつたといひ得る。蓋しデューマはそれ自身水陸兩棲的の組織ではあつたが、それでも結局ケレンスキー政府の發生について、多少の責任をもち得たもので、從つてソヴイエツト革命の前史的存在ではあつたのである。、、、、、は、いまだに立憲政治の前史的存在たる以上に一歩を出ないのであるか

ら、田中の獨裁は、その、、的機能の淘選から發生したものではなく、もと〳〵、、的機能のない所から發生する諸相の一つである。言ひ換へれば、封建時代にも充分發生し得るやうな現象なのである。アメリカのボスの獨裁やトラストの獨裁は、封建政治の世界に發生することの斷じて不可能な現象であるが、田中の獨裁は、その反對に、全く封建主義の空氣中から採取された室素の結晶である。しかもその採取方法そのものも封建的で、ボス政治でさへ、ヒューマン・ネチユアーの弱點を摑む方法は可なり科學的であるといはれてゐるのに比べても赤面せねばならぬ程の舊式である。

然し、今少しく吟味すれば、この封建的獨裁も亦封建時代に於ては起り得ないものであることが知られるのである。田中の獨裁は、ムッソリニの獨裁のやうに、小中地主や小市民階級を道具に使つて作り出した資本主義的寡頭政治の統一的形態といふやうなたいしたものではないが、資本主義的寡頭政治の内部鬪爭の政治的表現の一に屬するものであるといふ意味で、やはり現代的產物には相違ないのである。

同一資本家階級を背景とする政黨の分裂は、資本主義的寡頭政治に於ける內部的競合を表現してゐるものに外ならないのであるが、ムッソリニが、その內部的分裂を全階級的構成に不利益であるとして一大統一形態に纒めたのとは反對に、田中は、その內部鬪爭を利用して、近幾者の個人的、、、、、、、を行つてゐるのである。それはフーヴアー大統領の大臣の選任に似てそれ以上であるといふ點で、やはりアメリカのボス政治の近代的性質を幾分は內藏してゐるのである。從つてアメリカの、、がボス政治の手足でこそあれ、それに對して何の制裁力をも持つものでないと同樣以上に、日本の無機能的、、は、一個の田中を如何ともすることは出來ないのである。

して貰うために何々大公を引張り出したやうに、田中を何うにかして貰うために、樞密院の老人を引張り出すといふ近緣者の、、、、、、、、、を行つてゐるのである。それはフーヴアー大統領の大臣の選任に似てそれ以上であるだけ、やはりアメリカのボス政治の近代的性質を幾分內藏してゐるわけである。從つてアメリカの、、がボス政治に對して無力であるのみならず、全くその手足であるやうに、本來無機能の、、、、、も、一個の田中の、やゝ不器用な手足なのである。

かゝる低級の獨裁は、流石不景氣な世界にも類例を見ない。從つて此獨裁者の最大の强敵は、、な貴族院の老人や樞密院の隱居であるといふ。そんな不景氣な政治鬪爭も何處にもあるまい。

因は支配欲とか所有欲といふ心理は動機に歸すべきものではなく、資本主義自體の機構の機械的進化に歸すべきものであつて、資本家的貪慾はその結果として亢進したものに過ぎない。それは豐太閤をして朝鮮征伐といふやうな大貪慾を起さしめたものが、彼れの心理的弱點――又は强點――ではなく、彼れ自身の征服事業の進轉の歷史的結果であつたやうなものである。

勞働組合に於ける獨裁主義の發達は、アメリカのそれに於ては、多少ボスの勢力に似た心理的動因を含んでゐるにしても、然し、本來は、無産階級的運動の性質に因るものと認めねばならぬのである。無産階級運動は二つの理由から獨裁主義に入り込むのである。一つは、大衆運動は、先づ自然發生的衝動的發動をとる所から、それを統率する者は、戰爭に於ける將軍のそれの如く、又は宗教運動に於ける聖者のそれの如く、一方に不合理的の、人格的の統制力をもたねばならぬと共に他方に於て、その運動に於て、實際的の意味に於ける科學的意識をもつものであらねばならぬのである。その點は有力な將軍が戰爭科學の大家であると同時に一個の偶像であらねばならぬのと似てゐるのである。これは資本主義の獨裁者が、資本主義經濟の科學者であるよりは一大『所有者』であらねばならぬといふのや、、、國家の獨裁者が、、、、、、、、であれば足りるといふのとは全く性質を異にするのである。これは無産階級運動が、「ボス政治のやうに個人的利益の運動でなく、資本主義のそれのやうな『所有』の運動ではなく、生産組織の最も社會的な方法に進む科學的の意識目的を把握することによつて組織的に進展した、所謂『社會運動』だからである。

かくて、同じやうに獨裁の外觀をもつた此等の近代的、、主義が、異る動因、異る性質をもつものである如く、それの延長たる今日の各國に於ける獨裁主義的傾向も、すべて近代國家の組織を第一條件とするといふ共通性はありながら、それ／″＼異る動因と性質とをもつものであることが認められるのである。

田中式獨裁も、その意味に於て、イタリーの獨裁やロシヤの獨裁と一列に、それを最も現代的な『獨裁』として記載される光榮をもつものであるか何うかは、嚴重に吟味する必要があるやうでもあり又ないやうでもある。それは嚴重な吟味を待つまでもなく、餘りに現代的獨裁の軌道を外づれてゐるのである。

田中の獨裁は、他方で、、主義の機能の減退といふ風潮に乘じたものであるが、然し、元來、、、、、は今日まで、決して、、主義の機能を充分に――恐らく不充分にも――發揮したことなどはないのである。、、、、、制度は、ある意味で、あの短命だつた、ロシヤのデューマほども『、、的』であり得たことはなかつたといひ得る。蓋しデューマはそれ自身水陸兩棲的の組織ではあつたが、それでも結局ケレンスキー政府の發生について、多少の責任をもち得たもので、從つてソヴイエット革命の前史的存在ではあつたのである。、、、、、は、いまだに立憲政治の前史的存在たる以上に一歩を出ないのであるか

ら、田中の獨裁は、その、、的機能の減退から發生したものではなく、もと〳〵、、的機能のない所から發生する諸相の一つである。言ひ換へれば、封建時代にも充分發生し得るやうな現象なのである。アメリカのボスの獨裁やトラストの獨裁は、封建政治の世界に發生することの斷じて不可能な現象であるが、田中の獨裁は、その反對に、全く封建主義の空氣中から採取された室素の結晶である。しかもその採取方法そのものも封建的で、ボス政治でさへ、ヒューマン・ネチュアーの弱點を摑む方法は可なり科學的であるといはれてゐるのに比べても赤面せねばならぬ程の舊式である。

然し、今少しく吟味すれば、この封建的獨裁も亦封建時代に於ては起り得ないものであることが知られるのである。田中の獨裁は、ムッソリニの獨裁のやうに、小中地主や小市民階級を道具に使つて作り出した資本主義的寡頭政治の統一的形態といふやうなたいしたものではないが、資本主義的寡頭政治の內部闘爭の政治的表現の一に屬するものであるといふ意味で、やはり現代的産物には相違ないのである。

同一資本家階級を背景とする政黨の分裂は、資本主義的寡頭政治に於ける內部的競合を表現してゐるものに外ならないのであるが、ムッソリニが、その內部的分裂を全階級的構成に不利益であるとして一大統一形態に纏めたのとは反對に、田中は、その內部闘爭を利用して、近緣者の個人的、、、、、、、を行つてゐるのである。それはフーヴアー大統領の大臣の選任に似てそれ以上であるといふ點で、やはりアメリカのボス政治の近代的性質を幾分は內藏してゐるのである。從つてアメリカの、、がボス政治の手足でこそあれ、それに對して何の制裁力をも持つものでないと同樣以上に、日本の無機能的、、は、一個の田中を如何ともすることは出來ないのである。

して貰うために何々大公を引張り出したやうに、田中を何うにかして貰うために、樞密院の老人を引張り出すといふ近緣者の、、、、、、、、、、を行つてゐるのである。それはフーヴアー大統領の大臣の選任に似てそれ以上であるだけ、やはりアメリカのボス政治の近代的性質を幾分內藏してゐるわけである。從つてアメリカの、、がボス政治に對して無力であるのみならず、全くその手足であるやうに、本來無機能の、、、、、も、一個の田中の、やゝ不器用な手足なのである。

かゝる低級の獨裁は、流石不景氣な世界にも類例を見ない。從つて此獨裁者の最大の強敵は、、な貴族院の老人や樞密院の隱居であるといふ。そんな不景氣な政治闘爭も何處にもあるまい。

資本家的政黨の神經弛緩

高 橋 龜 吉

一

最近に於ける政局の特徴の一つは、政府と貴族院乃至樞密院との頻々たる衝突である。あれだけ、貴族院や樞密院に手厳しく小づき廻はされ乍ら、田中内閣の依然存續する所以は一體何處に在るのか。資本家勢力が強く政友内閣と結び付いてゐるからだ、と斯様に觀る見方が一部にはある。だが、事實は、資本家勢力が、いま、左程積極的に政友内閣を支持してゐるとは考へられぬ。否、組閣以來の財政經濟の實績からは、田中内閣は寧ろ、資本家の多數から倦かれてゐると見る方が妥當である。にも拘らず、田中内閣が、貴族院や樞密院の御小ヅキ廻しに平然たるわけは、これ等の制度に代表せられてゐる舊封建勢力が、著しく無力化して來て、最早その睨みが利かなくなつたからだ。何しろ、元老の勢力凋落して、貴族院の向背は直ちに元老勢力の發動たることを意味せず、いまや、貴族院の貧乏子爵議員がセキセイインコ扱ひされて、しかも、そのセキセイインコが貴族院の多數少數を決定すると云ふ現狀である。これでは、貴族院の權威も何もあつたものではない。「貴族院政黨化」の正體は要するに之れである。即ち、貴族院議員の政黨内閣への身賣りに外ならぬ。

されば、今度の貴族院に於ける「問題の決議」そのものも、要するに輿論の影にかくれて、體よく、敵は本能寺にある攻撃を示したに外ならぬ。少くとも、斯様に甘く解されてゐればこそ、田中内閣は、御忠告、難有く拜聽」でノホホンをきめ得るのだ。即ち、貴族院や樞密院あたりの、表面、手强さうな攻撃にも拘らず、田中内閣が之にビクともせざる所以の一は、田中内閣に資本家的鞏固の支持があるからではなくて、舊封建勢力が已に空洞化してゐるからだ。

二

資本家の多くが田中内閣に倦いてゐるとせば、資本家は民政黨内閣を謳歌するに至るべき筈だ。然るに、そんな氣振りは一向に起つて來ない。あれだけ反田中内閣熱が國民大多數の間には漲つてゐるにも拘らず、資本家階級は積極的には、田中内閣に反對もせず、又民政黨をも謳歌してゐない。かくて、民政黨は、切りに田中内閣打倒の聲のみ

大にしながら、その具體的實行手段を有せず、徒らに、「棚からボタ餅」を夢みてゐる。否、民政黨は、倒閣に必死になりながら、その力無きために、手段を選ばざるに至り、遂に議會政治の權威までも賣つて、貴族院や樞密院の助力を請ふに至つてゐる。「優諚問題」や、「不戰條約問題」の如き、問題にすべからざる問題までも持ち出して、衆議院で騷ぎ立てた所以は、これ等の問題を持ち出すことが、貴族院や樞府に倒閣的援助を請ふに、最も効果的である、と云ふ見解からであつたと云ふではないか。

右を以て、然らば、資本家階級は、民政黨よりも尙ほ田中内閣を支持してゐると解すべきか。否。一體、資本家階級は、「政變」を何よりも嫌ふ。財界の動揺を恐れるからだ。故に、田中内閣に對し積極的支持は有せざるも、それの倒閣の結果起る財界の動揺を償ふに余りある收穫の見込つかざる限り、彼等は、既存の田中内閣を倒して、民政黨内閣を謳歌すると云ふ積極的行動には出でない。然るに、民政黨の政策であるが、いま、政友、民政、何れを率閣に置くも、その實行し得る政策には大差はない。元來、政友、民政、兩政黨の代表するものは、等しく資本家階級の各層であつて、これ等の資本家政黨が二つに對立せねばならないと云ふ政策的差異は殆んど無い。にも拘らず、現在の如く、それが、二分してゐるわけは、要するに、その指導者乃至背後の大資本家達の私的勢力爭ひに外ならない。

斯様のわけで、資本家勢力全體としては、政友内閣を戴くも、民政黨内閣を迎ふるも、細かな點は兎に角、重大問題と見るべき點に於ては、兩者何れを戴くも大差はない。之れ、資本家階級の多くが、政黨政治に對して、一見、極めて無關心の如くに見える所以であり、又、田中内閣が周知の如き滿身瘡痍を負ひながら、尙ほ消極的に存續し得る所以の第二である。

三

我が資本家階級が、その政黨政治に對し、少からず無關心を示す所以、換言せば、資本家政黨の如何が、我が資本家階級の重大なる關心事と未だならざる理由は、更にいま一つある。それは、それの對立物たる無産政黨の力が尙ほ極めて微々たることだ。

一體、資本主義末期の今日に於ては、資本家政黨の存在意義は、最早、積極的な資本主義發展政策の遂行者としてゞはなく、單に無産階級の進出に對し、資本家階級の利益を擁護すると云ふ消極的機關としてゞある。蓋し、今日に於ては、資本家的利害に立脚する限り、産業發展のための積極的政策を押し立て、進む餘地は殆んどなく、勢ひ、資本家政黨は、無産階級の進出に應じて、之に對立する政策を樹て、進むと云ふ消極的動きしか出來ない事情に在る。然るに、いま我國に於ける無産政黨の勢力は已に關説せし如く、極めて微弱である。されば、我が資本家階級は、議會壇上に於て、精巧なる政策に由つて無産階級と戰ふ必要に未だ迫られてゐない。即ち現狀に於て我が資本家階

級がその利益擁護のために資本家政黨に期待するところは、主としてその、、、と、、、その他の直接の甘味とであつて、未だ、精巧なる政策そのものではないわけだ。之れ、田中內閣の彼れの如きヘマの續出と國民大多數の不人氣とにも拘らず、我が資本家階級が泰然として之をその位地にそのまゝ放置してゐる所以だ。いま、我が資本家階級が、直接的に期待してゐる當面の用件は、田中內閣でも優に役立つからである。

さり乍ら、若し一度び無產政黨勢力にして擡頭せんか、資本家階級の存立を脅かすことゝなる。資本家政黨の人氣の如何は直ちに資本家階級の運命を支配するに至る。かうなれば、我が資本家階級と雖も、今日の如く、資本家政黨の行狀に無關心たることを得なくなる。この時に至れば、我が資本家階級も、丁度今日の英國資本家階級がその保守黨に期待しつゝある如き、積極的活動と精巧なる政策とを、我が資本家政黨に要するに至るであらう。無論さうなれば、今日の如き無意義の二大資本家黨の存在を許さず、之を「單一資本家政黨」に結成せしむるに違ひない。その曉に於て、我が資本家階級の政黨的關心は初めて鋭敏になるであらう。それ迄は、政友が倒れても同穴の民政黨が代るに過ぎない。ドチラに變つたところで政策に大差はない。さうである限り、資本家階級の政黨的關心は極めて消極的である。しかも、資本家階級以外に、資本家政黨を「輿論」の力で倒す手段は持つてゐない。大衆には四年に一度の總選擧以外に、氣に喰はぬ政黨を倒す機會を與へられてゐないからだ。之れ、田中內閣が斯くの如く不評判なるにも拘らず、尙ほ存續する見込の立つ第三のわけだ。

四

以上すべての理由にも拘らず、之を政友會それ自身から云へば、餘りの不人氣に抗して內閣に居据ることは、次の總選擧で民政黨にしてやられる重大なる危險を犯すことである。だから、若し、再起の自信すらあれば、田中は此際、潮時を見て退いて、次の活躍を圖るべきだ。然るに、田中にはその自信が持てない。萬口一致するところの觀測は、田中が政權を投げ出せば、總裁の位地も難かしいと云ふことだ。政友會內部は割れるに違ひないと云ふ見解だ。久原もいま投げ出されたのでは財政的理由から再起不可能だらうと見られてゐることだ。更に又、他の政友會首領連から云ふも、政權を離れた時の現在の政黨のミヂメさはツク〴〵味つてゐる。況んや、一度び政權を離れて、次の政權獲得の機會まで、果して、現在の政友會勢力を結束せしめ得るか否か極めて疑問である。已に、群雄割據の形勢は著しく黨人の目に映りつゝある。

若し、原敬總裁時代の如き結束あり、自信ある政友會ならば、現在の如き四面楚歌に陷れば、再起のために、潔く拔け出したに違ひない。だが、以上に述べたやうなわけ故、よし最後の場合に押迫られても、これを投げ出せば何時再びこの椅子につくかの自信なきまゝ、何處を

でもカヂリ付からとするのである。之れ、田中内閣が、周知の如き滿**身創痍で、政治常識からは倒れざるを得ざるところにまで押し詰りな**がら、尚ほ、容易に投げ出さうとしさうにもない第四の理由である。

× × × ×

果して以上の如しとせば、田中内閣の倒れさうで倒れず、意外に底力あるかの如く見へるは實は、それだけの底力が積極的にあるのではなくて、要するに、すべては、消極的な理由から、動きがとれぬから在職す**ることを許されてゐるのだ 田中内閣が不死身であると云ふこと、山**中内閣が闘々しいと云ふこと、政治的良心が痲痺してゐると云ふこと、それ等の何れもは、田中大將個人の道德的問題ではなくして、既述の如き資本家政黨現在の位地から、必然に發生する神經弛緩の症狀である。（四月七日記）

田中政治とムソリニ政治

山川均

□

最近の面白い現象は、ファシズムといふ言葉と反動的なブルジョア政治といふ言葉とが、漸次に、同意異語の如くに用ひられだしたことである。

この接近は、恐らく二つの方向から行はれた。先づ第一に、ブルジョアの階級的な支配そのものが、著しく大膽露骨になつて來た。これは云ふまでもなく、資本主義の存續がそれを必要とするからであるが、また一つには、各國の新興階級の運動が、あらゆる戰線で一時その鋭鋒を打ち碎かれ、總退却の有樣となつたことが、それを可能にしたのである。勿論、ブルジョアジーの政治的支配が、その本質を變じた譯ではない。しかし曾てのブルジョアジーは、多少とも、彼ら自身の政治形態、即ち民主主義的な政治形態の手前に憚つてゐた。この政治形態は、彼らが舊勢力を打ち破つて彼ら自身の政權を確立する鬪爭の途上に、この鬪爭の必要によつて形成したものであるが、彼らの立場が一變し、主として新興階級の下からの勢力に對して防衞しなければならぬ立場に立つてみると、彼らは多いか少ないか、この政治形態

級がその利益擁護のために資本家政黨に期待するところは、主としてその、、、と、、、その他の直接の甘味とであつて、未だ、精巧なる政策そのものではないわけだ。之れ、田中内閣の彼れの如きへマの續出と國民大多數の不人氣とにも拘らず、我が資本家階級が泰然として之をその位地にそのまゝ放置してゐる所以だ。いま、我が資本家階級が、直接的に期待してゐる當面の用件は、田中内閣でも優に役立つからである。

さり乍ら、若し一度び無産政黨勢力にして擡頭せんか、資本家階級の存立を脅かすことゝなる。資本家政黨の人氣の如何は直ちに資本家階級の運命を支配するに至る。かうなれば、我が資本家階級と雖も、今日の如く、資本家政黨の行狀に無關心たることを得なくなる。この時に至れば、我が資本家階級も、丁度今日の英國資本家階級がその保守黨に期待しつゝある如き、積極的活動と精巧なる政策とを、我が資本家政黨に要するに至るであらう。無論さうなれば、今日の如き無意義の二大資本家黨の存在を許さず、之を「單一資本家政黨」に結成せしむるに違ひない。その曉に於て、我が資本家階級の政黨的關心は初めて鋭敏になるであらう。それ迄は、政友が倒れても同穴の民政黨が代るに過ぎない。ドチラに變つたところで政策に大差はない。さうである限り、資本家階級の政黨的關心は極めて消極的である。しかも、資本家階級以外に、資本家政黨を「輿論」の力で倒す手段は持つてゐない。大衆には四年に一度の總選擧以外に、氣に喰はぬ政黨を倒す機會を與へられてゐないからだ。之れ、田中内閣が斯くの如く不評判なるにも拘らず、尙ほ存續する見込の立つ第三のわけだ。

四

以上すべての理由にも拘らず、之を政友會それ自身から云へば、餘りの不人氣に抗して内閣に居据ることは、次の總選擧で民政黨にしてやられる重大なる危險を犯すことである。だから、若し、再起の自信すらあれば、田中は此際、潮時を見て退いて、次の活躍を圖るべきだ。

然るに、田中にはその自信が持てない。萬口一致するところの觀測は、田中が政權を投げ出せば、總裁の位地も難かしいと云ふことだ。政友會内部は割れるに違ひないと云ふ見解だ。久原もいま投げ出されたのでは財政的理由から再起不可能だらうと見られてゐることだ。更に又、他の政友會首領連から云ふも、政權を離れた時の現在の政黨のミヂメさはツク〴〵味つてゐる。況んや、一度び政權を離れて、次の政權獲得の機會まで、果して、現在の政友會勢力を結束せしめ得るか否か極めて疑問である。已に、群雄割據の形勢は著しく黨人の目に映りつゝある。

若し、原敬總裁時代の如き結束あり、自信ある政友會ならば、現在の如き四面楚歌に陷れば、再起のために、潔く拔け出したに違ひない。だが、以上に述べたやうなわけ故、よし最後の場合に押迫られても、これを投げ出せば何時再びこの椅子につくかの自信なきまゝ、何處ま

でも力ぎり付かうとするのである。之れ、田中內閣が、周知の如き滿身創痍で、政治常識からは倒れざるを得ざるところにまで押し詰りながら、尙ほ、容易に投げ出さうとしさうにもない第四の理由である。

× × × ×

果して以上の如しとせば、田中內閣の倒れさうで倒れず、意外に底力あるかの如く見へるは實は、それだけの底力が積極的にあるのではなくて、要するに、すべては、消極的な理由から、倒さながらも存續することが許されてゐるのだ 田中內閣が不能力であると云ふこと、田中內閣が圖々しいと云ふこと、政治的良心が痲痺してゐると云ふこと、それ等の何れもは、田中大將個人の道德的問題ではなくして、旣述の如き資本家政黨現在の位地から、必然に發生する神經弛緩の症狀である。（四月七日記）

田中政治とムソリニ政治

山川均

□

最近の面白い現象は、ファシズムといふ言葉と反動的なブルジョア政治といふ言葉とが、漸次に、同意異語の如くに用ひられだしたことである。

この接近は、恐らく二つの方向から行はれた。先づ第一に、ブルジョアの階級的な支配そのものが、著しく大膽露骨になつて來た。これは云ふまでもなく、資本主義の存續がそれを必要とするからであるが、また一つには、各國の新興階級の運動が、あらゆる戰線で一時その鋭鋒を打ち碎かれ、總退却の有樣となつたことが、それを可能にしたのである。勿論、ブルジョアジーの政治的支配が、その本質を變じた譯ではない。しかし曾てのブルジョアジーは、多少とも、彼ら自身の政治形態、即ち民主主義的な政治形態の手前に憚つてゐた。この政治形態は、彼らが舊勢力を打ち破つて彼ら自身の政權を確立する鬪爭の途上に、この鬪爭の必要によつて形成したものであるが、彼らの立場が一變し、主として新興階級の下からの勢力に對して防衛しなければならぬ立場に立つてみると、彼らは多いか少ないか、この政治形態

級がその利益擁護のために資本家政黨に期待するところは、主としてその、、、と、、、その他の直接の甘味とであつて、未だ、精巧なる政策そのものではないわけだ。之れ、田中内閣の彼れの如きヘマの續出と國民大多數の不人氣とにも拘らず、我が資本家階級が泰然として之をその位地にそのまゝ放置してゐる所以だ。いま、我が資本家階級が、直接的に期待してゐる當面の用件は、田中内閣でも優に役立つからである。

さり乍ら、若し一度び無産政黨勢力にして擡頭せんか、資本家階級の存立を脅かすことゝなる。資本家政黨の人氣の如何は直ちに資本家階級の運命を支配するに至る。かうなれば、我が資本家階級と雖も、今日の如く、資本家政黨の行狀に無關心たることを得なくなる。この時に至れば、我が資本家階級も、丁度今日の英國資本家階級がその保守黨に期待しつゝある如き、積極的活動と精巧なる政策とを、我が資本家政黨に要するに至るであらう。無論さうなれば、今日の如き無意義の二大資本家黨の存在を許さず、之を「單一資本家政黨」に結成せしむるに違ひない。その曉に於て、我が資本家階級の政黨的關心は初めて鋭敏になるであらう。それ迄は、政友が倒れても同穴の民政黨が代るに過ぎない。ドチラに變つたところで政策に大差はない。さうである限り、資本家階級の政黨的關心は極めて消極的である。しかも、資本家階級以外に、資本家政黨を「輿論」の力で倒す手段は持つてゐない。大衆には四年に一度の總選擧以外に、氣に喰はぬ政黨を倒す機會を與へられてゐないからだ。之れ、田中内閣が斯くの如く不評判なるにも拘らず、尚ほ存續する見込の立つ第三のわけだ。

四

以上すべての理由にも拘らず、之を政友會それ自身から云へば、餘りの不人氣に抗して内閣に居据ることは、次の總選擧で民政黨にしてやられる重大なる危險を犯すことである。だから、若し、再起の自信すらあれば、田中は此際、潮時を見て退いて、次の活躍を圖るべきだ。然るに、田中にはその自信が持てない。萬口一致するところの觀測は、田中が政權を投げ出せば、總裁の位地も難かしいと云ふことだ。政友會内部は割れるに違ひないと云ふ見解だ。久原もいま投げ出されたのでは財政的理由から再起不可能だらうと見られてゐることだ。更に又、他の政友會首領連から云ふも、政權を離れた時の現在の政黨のミヂメさはツク〴〵味つてゐる。況んや、一度び政權を離れて、次の政權獲得の機會まで、果して、現在の政友會勢力を結束せしめ得るか否か極めて疑問である。已に、群雄割據の形勢は著しく黨人の目に映りつゝある。

若し、原敬總裁時代の如き結束あり、自信ある政友會ならば、現在の如き四面楚歌に陷れば、再起のために、潔く抜け出したに違ひない。だが、以上に述べたやうなわけ故、よし最後の場合に押迫られても、これを投げ出せば何時再びこの椅子につくかの自信なきまゝ、何處ま

でもカギり付かうとするのである。之れ、田中内閣が、周知の如き満身創痍で、**政治常識からは倒れざるを得ざるところにまで押し詰りな**がら、尚ほ、容易に投げ出さうとしさうにもない第四の理由である。

× × × × ×

果して以上の如しとせば、田中内閣の倒れさうで倒れず、意外に底力あるかの如く見へるは實は、それだけの底力が積極的にあるのではなくて、要するに、すべては、消極的な理由から、嘆きながらも存續す**ることを許されてゐるのだ。田中内閣が不徳義であると云ふこと、田**中内閣が図々しいと云ふこと、政治的良心が痲痺してゐると云ふこと、それ等の何れもは、田中大將個人の道徳的問題ではなくして、既述の如き資本家政黨現在の位地から、必然に發生する神経弛緩の症狀である。（四月七日記）

田中政治とムソリニ政治

山川 均

□

最近の面白い現象は、ファシズムといふ言葉と反動的なブルジョア政治といふ言葉とが、漸次に、同意異語の如くに用ひられだしたことである。

この接近は、恐らく二つの方向から行はれた。先づ第一に、ブルジョアの階級的な支配そのものが、著しく大膽露骨になつて來た。これは云ふまでもなく、資本主義の存續がそれを必要とするからであるが、また一つには、各國の新興階級の運動が、あらゆる戰線で一時その鋭鋒を打ち砕かれ、總退却の有様となつたことが、それを可能にしたのである。勿論、ブルジョアジーの政治的支配が、その本質を變じた譯ではない。しかし曾てのブルジョアジーは、多少とも、彼ら自身の政治形態、即ち民主主義的な政治形態の手前に憚つてゐた。この政治形態は、彼らが舊勢力を打ち破つて彼ら自身の政權を確立する闘爭の途上に、この闘爭の必要によつて形成したものであるが、彼らの立場が一變し、主として新興階級の下からの勢力に對して防衞しなければならぬ立場に立つてみると、彼らは多いか少ないか、この政治形態

級がその利益擁護のために資本家政黨に期待するところは、主としてその、、、と、、、その他の直接の甘味とであつて、未だ、精巧なる政策そのものではないわけだ。之れ、田中内閣の彼れの如きヘマの續出と國民大多數の不人氣とにも拘らず、我が資本家階級が泰然として之をその位地にそのまゝ放置してゐる所以だ。いま、我が資本家階級が、直接的に期待してゐる當面の用件は、田中内閣でも優に役立つからである。

さり乍ら、若し一度び無產政黨勢力にして擡頭せんか、資本家階級の存立を脅かすことゝなる。資本家政黨の人氣の如何は直ちに資本家階級の運命を支配するに至る。かうなれば、我が資本家階級と雖も、今日の如く、資本家政黨の行狀に無關心たることを得なくなる。この時に至れば、我が資本家階級も、丁度今日の英國資本家階級がその保守黨に期待しつゝある如き、積極的活動と精巧なる政策とを、我が資本家政黨に要するに至るであらう。無論さうなれば、今日の如き無意義の二大資本家黨の存在を許さず、之を「單一資本家政黨」に結成せしむるに違ひない。その曉に於て、我が資本家階級の政黨的關心は初めて鋭敏になるであらう。それ迄は、政友が倒れても同穴の民政黨が代るに過ぎない。ドチラに變つたところで政策に大差はない。さうである限り、資本家階級の政黨的關心は極めて消極的である。しかも、資本家階級以外に、資本家政黨を「輿論」の力で倒す手段は持つてゐない。大衆には四年に一度の總選擧以外に、氣に喰はぬ政黨を倒す機會を與へられてゐないからだ。之れ、田中内閣が斯くの如く不評判なるにも拘らず、尙ほ存續する見込の立つ第三のわけだ。

四

以上すべての理由にも拘らず、之を政友會それ自身から云へば、餘りの不人氣に抗して内閣に居据ることは、次の總選擧で民政黨にしてやられる重大なる危險を犯すことである。だから、若し、再起の自信すらあれば、田中は此際、潮時を見て退いて、次の活躍を圖るべきだ。然るに、田中にはその自信が持てない。萬口一致するところの觀測は、田中が政權を投げ出せば、總裁の位地も難かしいと云ふことだ。政友會内部は割れるに違ひないと云ふ見解だ。久原もいま投げ出されたのでは財政的理由から再起不可能だらうと見られてゐることだ。更に又、他の政友會首領連から云ふも、政權を離れた時の現在の政黨のミヂメさはツク〴〵味つてゐる。況んや、一度び政權を離れて、次の政權獲得の機會まで、果して、現在の政友會勢力を結束せしめ得るか否か極めて疑問である。已に、群雄割據の形勢は著しく黨人の目に映りつゝある。

若し、原敬總裁時代の如き結束あり、自信ある政友會ならば、現在の如き四面楚歌に陷れば、再起のために、潔く抜け出したに違ひない。だが、以上に述べたやうなわけ故、よし最後の場合に押迫られても、これを投げ出せば何時再びこの椅子につくかの自信なきまゝ、何處ま

でもカギリ付からとするのである。之れ、田中內閣が、周知の如き滿身瘡痍で、政治常識からは倒れざるを得ざるところにまで押し詰りながら、尚ほ、容易に投げ出さうとしさうにもない第四の理由である。

×　×　×　×　×

果して以上の如しとせば、田中內閣の倒れさうで倒れず、意外に底力あるかの如く見へるは實は、それだけの底力が積極的にあるのではなくて、要するに、すべては、消極的な理由から、喘ぎながらも存續することを許されてゐるのだ。田中內閣が不死身であると云ふこと、田中內閣が圖々しいと云ふこと、政治的良心が痲痺してゐると云ふこと、それ等の何れもは、田中大將個人の道德的問題ではなくして、既述の如き資本家政黨現在の位地から、必然に發生する神經弛緩の症狀である。(四月七日記)

田中政治とムソリニ政治

山川均

□

最近の面白い現象は、ファシズムといふ言葉と反動的なブルジョア政治といふ言葉とが、漸次に、同意異語の如くに用ひられだしたことである。

この接近は、恐らく二つの方向から行はれた。先づ第一に、ブルジョアの階級的な支配そのものが、著しく大膽露骨になつて來た。これは云ふまでもなく、資本主義の存續がそれを必要とするからであるが、また一つには、各國の新興階級の運動が、あらゆる戰線で一時その鋭鋒を打ち砕かれ、總退却の有様となつたことが、それを可能にしたのである。勿論、ブルジョアジーの政治的支配が、その本質を變じた譯ではない。しかし曾てのブルジョアジーは、多少とも、彼ら自身の政治形態、即ち民主主義的な政治形態の手前に憚つてゐた。この政治形態は、彼らが舊勢力を打ち破つて彼ら自身の政權を確立する闘爭の途上に、この闘爭の必要によつて形成したものであるが、彼らの立場が一變し、主として新興階級の下からの勢力に對して防衞しなければならぬ立場に立つてみると、彼らは多いか少ないか、この政治形態

によつて、その行動の束縛されてゐることを感ぜざるを得なかつた。しかし彼らは或る程度まで、自分自身の手で造つた神様——民主政治——に遠慮をし、この神様に對する迷信に左右せられてゐた。今日は、ブルジョアジーの偶像破壊の時代である。人間は必要に應じて偶像を造り、必要に應じて偶像を破壊する。存在の必要は、ブルジョアジーを大膽にした。

そこでこの範圍においては、大膽露骨になつたブルジョアジーの反動政治は、ブルジョア本來の政治形態、ないしはブルジョアの正常な政治形態から、それだけファシズムの政治に近づいたといふことが出來る。

□

ところがファシズムの政治の側からは、ファシズムの勃興した非常時的な形態が鎭まるにつれて、或る程度までは、ブルジョア本來の支配に跡戻つたといふことが出來る。少くとも、ファシズムが非常時的な形勢の下において現はした特異な外貌が、大いに緩和され、その形相が著しく柔和に——ブルジョア的に柔和に——なつたことは爭はれぬ。例へば選擧法の改正がそれである。よしその議會が自分の右の手と左の手に指相撲を取らせるような、氣儘勝手な選擧方法でこしらへた、おもちゃの議會であらうとも、兎も角、[illegible]すと棍棒、サーベルと爆彈の代りに議會によつて合法的に政權を維持しようとするのは、何といふ殊勝な心掛けだらう。よし國民の投票の代りに買收、誘拐、脅迫などに依らうとも、兎にも角にも議會における多數によつて政權を維持しようといふ。、、、、、、、、、、、、、、ファシズムの政治は立憲的になつたといふことが出來る。

ファシズムの政治は反動主義の政治である。しかし反動政治が悉くファシズムの政治でないことは云ふまでもない。一方では、ブルジョアジーが、支配の能力を失つたこと、ないしはブルジョアジーの支配の能力が、一時的にもせよ痲痺狀態に陷入つたこと、しかるに他方には、これに代はるべき準備と決意をもつた新興階級の力がなかつたこと、これがファシズムの支配を現出した主要な動機であつた。そこでファシズムの支配は、ブルジョアジーの指導を離れ、しかも新興階級の實力に疑ひを持つ小ブルジョア的な社會層を根據とした。

かようにファシズムの支配は、ブルジョアジーに對しても、新興階級に取つても、政權の簒奪者として現はれた。その劍は兩刃の劍であつて、プロレタリアに向けられると共にブルジョアジーに向けられた。

けれども云ふまでもなく、現代の社會における主たる階級はブルジョアジーとプロレタリアである。この事實は、ファシストといへども燒き拂ふ譯にはゆかぬ。そして現代の社會が、この二つの主たる階級勢力の對峙と抗爭と權衡との上に成り立つてゐる以上は、ファシズムの標榜したような、第三の立場を維持することは出來ぬ。ファシズムの獨裁が、いふまでもなく新興階級の、、でない限りは、ファシズム

の標榜が何であらうとも、そしてファシズムが政權を奪取した機會がどのやうなものであつたにせよ、それは唯だ、本質においてブルジョア獨裁の一つの形態となることによつてのみ、能く存續することが出來るに違ひない。

かやうにファシズムは、直接にブルジョアの手からその政權を奪取したには違ひないが、この政權は最早やブルジョアジーに向けられてゐるものではない。ファシズムは、ブルジョアジー本來の正常な支配形態の否定によつて起つたが、それは新興階級の支配を樹立するものではなかつたから、從つて、ブルジョアジーの支配形態の、一つの新しいタイプを樹立することに歸着した。しかるに一方では、新興階級の勢力は、よし一時的にもせよ、致命的に擊破することが出來た。ファシズムは政權を奪取した前後のやうに、一方にはブルジョアジーに對し、他方には新興階級に對して、最早や血刀を振り廻はす必要がなくなつた。そこでファシズムの人相も大いに變つて來た。ファシズムの政治は、、、、、が極まりを惡るがつてもよい位まで、『立憲的』になつて來た。

□

かうして双方から歩み寄つて來た結果、人々はファシズムの政治を、たゞの反動化したブルジョア政治の別名くらゐにしか考へなくなつた。しかしこれは裏返へしにして云へば、現代の反動的ブルジョアジーの支配は、ブルジョア本來の政治上の制度や形態に對してさへも、最早や昔日のやうな迷信をも遠慮をも持つてゐないこと、必要がそれを迫る瞬間には、何時でも本來のファシストと同じやうに、これを弊履の如く投げ棄て叩き毀はすに躊躇せぬものだといふことを、人々が、云はゞ無意識的に意識して來たといふことになる。

もつと具體的に云へば、例へばファシズムの政治は、その支配を維持するために、選擧法を改正した。この新選擧法によつて、ファシスト政府は何時でも氣に入るやうな議會を持つことが出來る。この選擧法の改正は、云ふまでもなく、民主的な制度としての、、、、、、、、したものには違ひない。しかしよく／＼考へてみると、初めて聞いた時ほどに、驚くに値ひしたものではない。ファシスト黨ではなくて『立憲』といふ形容詞のついてゐる政友會とその內閣も、吾々の鼻先きで同じやうに選擧法の改正を企てたではないか。そしてその目的も同じやうに、政權の維持に都合のよいやうな議會を作ることゝ、新興階級の政治的進出を阻止することではなかつたか。そこでファシズムが企てゝ成功したことは、田中內閣が企てゝ失敗したこと以上のことでも以下のことでもない。ファシズムの側から云へば、ファシズムの政治は、少くとも、立憲政友會の內閣ほどには立憲的である。しかし反對の方向から云へば、田中內閣はムッソリニ政府ほどにファシスト的だといふことになる。いづれ劣らず立憲的である。若しこの一事實だけについて云ふならば、田中政治がムッソリニ政治に及ばぬところは、品質ではなくて容積である。ムッソリニが五六省の大臣を兼ねて

ゐる時に、わが田中大將が僅かに一省の大臣を兼ねてゐるに過ぎないように。

□

かう云つたからとて、田中首相がムッソリニ氣取りで反身になられるのは、まだ早い。(この內閣には、すぐ反身になる氣早やな人物が外にもありそうだ)。分量の相異は、時としては品質の相異となる。

今の內閣は、田中政友會內閣と云ふよりも、田中反動內閣と云つた方が、一そう通りもよく、語呂もよい。その上この內閣には、ムッソリニに私淑する人もあるらしい。それにも拘らず、田中政治が尙ほたゞの反動政治であつて、ファシズムの政治となり得ないのは、そして、、、、、、、、、、たる光榮に浴せしめないのは、階級勢力の關係に基づいてゐる。田中反動內閣が苟も用ひ得られる有ゆる力と方法とを用ひて、それに對して自己の政權を維持しようとしてゐるものは、新興階級の勢力ではなくて、ブルジョア第二黨である。これは決して田中反動內閣の『反動』が、新興階級に向けられてゐないといふ意味ではない。また新興階級に對する田中內閣の反動政策が、決して(新興階級の實際勢力と相對的に)强烈なものでないといふ意味ではない。けれどもそれにも拘らず、現在當面に、政權爭奪の鬪ひは、ブルジョアジーと新興階級との間に行はれてゐるのではなくて、ブルジョアジーの異つた分派の間に行はれてゐるものである。階級鬪爭の進行は、反動主義の溫度を高めてゆく。けれども田中反動政治の熱湯を、ファシズム政治の蒸氣に轉化せしめるためには、——反動政治の分量の相異を性質の相異に轉化せしめるためには——、、、、、に達しなければならぬ。

田中反動政治はファシズムの政治であるかと問ふ人があるならば、何人も否と答へるに違ひない。我國現在の階級勢力の關係には、本來の意味でのファシズム政治を出現せしめるやうな條件は、何處にも見當らない。言葉を換へて云へば、ブルジョアジーは大體において、正常な支配形態によつて、その支配を續けられるからである。

けれども反動化したブルジョアジーは、それを必要とする瞬間には、何時でも反動政治の、、、から、、、、への飛躍を遂行することの出來るために、有ゆる準備を意識的に行つてゐる。この點において、田中內閣は過去の如何なる內閣よりも、大なる貢獻をしたといふことが出來る。田中內閣が、議會政治に對する一般の信用を極度に低めたことにも、ファシズムの誕生を容易にする條件の一つを準備したといふ、副產的な功績がある! ムッソリニとファシズムとが公然と讚美され、意識的に宣傳せられたのが、田中內閣の時期であつたといふことも、恐らく偶然ではないだらう。

かような意味では、ブルジョア反動政治は、徐々にファシズム化しつゝあるとも云ふことが出來る。そして田中反動內閣は、いふまでもなく、この運動の指導的役割を勤める光榮を擔つてゐる。

田中外交の全部的失敗

中野正剛

一

さきに貴族院が實質に於て田中首相の問責を意味する決議案を通過し、剩つさへ地租移讓案、小選擧區制復活案等の政府案を握り潰すや、政友會の少壯分子の間には一時思ひ出した樣な貴族院改革運動の聲が起つた。流石に與黨幹部は、この身の程知らずの悲鳴に耳を藉す程迂遠でなかつたが、由來貴族院の操縱に妙を得たと自信する現內閣として、貴族院の反感が斯くの如く猛烈であつたことは、實に案外であつたに違ひない。然し乍らこれを國民の目から見れば、ことは決して意外ではない。文字通りに不自然なる多數黨により、衆議院の本來の機能が阻止さるゝ際、國民の眞實なる意嚮を最少限度にも表示することは貴族院の外には殘されてゐなかつたからである。國民の意志が衆議院に於て代辯されず、衆議院を通過した重要法案が貴族院に於て阻止せらるゝことは、議院機構の運用に於て、まさしく異常なる現象に相違ない。然るにその單純なる形式論の詮索を超越して、今日國民の、、、、、、、、、を求めざるを得ぬ。今期議會に於ける貴族院の異例な活動は、國民の常識の支持するところであつたし、何れにしてもかゝる變態的現象が議院政治の運用に遺憾な例を遺すとすれば、その罪は、貴族院よりは、政府及び與黨の負擔すべきものなることは疑ふ餘地がない。泥縄式貴革論は、其議論の實質に於て當然であつても、何の反響をも惹起することなく、そのまゝ泡沫の如く消え失せてしまつたのは、その一つの證據と云はねばならぬ。これは獨り貴族院にとゞまらなかつた。政府は二個の重要なる問題に於て今や樞密院の追擊に苦んでゐる。即ち一は濟南事件協定の問題に於て、一は不戰條約調印問題に於てである。この二つの問題は、さきに議會に於て痛烈なる野黨の攻擊に逢ひながら、政府は田中首相自身の如く、不死身にも等し

い、、を以て押し切つて來たものである。昨年に於ける山東第二次出兵といひ、治安維持法の緊急勅令問題といひ、今回の濟南協定といひ、政府は常に議會を回避して、問題の不自然なる收拾を圖るを以て常套手段とした。而して斯の如き手段は、厚顔なる現政府にとりて最も安全なる方法とさへ考へられた。しかも見事に議會回避に成功した政府が、今日却つて樞密院の審議に於て行き詰つたのは、まさしく自業自得である。問題の性質はこの場合も貴族院に於けると同斷である。

二

別にあり體に云へば樞密院の業蹟は、過去に於て指彈すべきものが多かつた。樞密院の存在そのものは別箇の動機と立場に於てならば、嚴正なる批判の理由は十分存在する。責任を負はぬ樞密院が、政府の最高政策を遮斷する事は、理論として正則の途ではない。然しながら、そは遂に一箇平常の原則であつて、今回の事態は遙かにこれを超越して居る。國民は旣に貴族院を支持したと同じ理由によりて、今日樞密院の態度を、、に感じて居る。

樞密院の硬化の理由は何であるか。濟南事件の協定は二箇の國に於ける約束であり、約束は樞密院條例によりて、當然批准奏請以前に、樞府の諮詢を要するに關らず、政府がこれを怠つたといふのを表面の原因としてゐる。然しながらこれを以て原因の全部と見做すことはむしろ國民の理解を潔しとせぬところであらう。もし事件の協定が更に滿足すべき內容であり、當局の政府が現にあるが如き、、なる存在でなかつたとしたならば、樞府が果して斯かる態度に出で得たかは疑問である。內治外交の全般に亙りて、今回程政府が國民の前に愛想をつかされたことは實に空前の現象である。樞密院はこの國民の全雰圍氣を負ふて、その法規の上に有せる最少限度の權能を以て政府を彈劾しつゝある。この場合も問題の眞相に、現政府に對する全民衆的、、に究極の原因を置いてゐると見るべきである。政治の責任と良心の羞恥といふものに對して、全く已に感覺を失つた現政府自らが招來した當然の、しかも殆んど唯一のこの結果に對して、どちらが責任を負擔すべきかといふことは最早や問題でなく、なつて來るのである。

三

同樣のことは不戰條約問題に就いても云へる。不戰條約そのものが持つ所の趣旨に對して、日本國民の一人と雖も反對の者はない。イン、ゼ、ネーム、オブ、ゼア・レスペクテイヴ、ピープルスといふ言葉は、正しく一つの強力なる條項として起草されたことは、恐らくその通りであらう。眞意は眞意として、形式が日本國體の上に對する重大なる注意の缺乏を明示してゐることは正しく政府の責任である。斯の如く立憲君主政體たる我國特殊の國家の威容を傷くが如き文句が、現田中內閣によつて、平氣で國際條約の原文に書き聯ねられて居ることは、單に偶然の過失とのみ見られない。此の問題はあらゆる方面に

於ける政府の無良心的態度の一の現はれであつて、それが、、、、と國家の威容とに關するが故に、現內閣はどうすることも出來ぬ苦境に陷つたのである。議員の數は買收で揃へる、貴族院の糾彈は厚顏無耻で押し通すと云ふ現內閣が、今回の恐懼に堪へざる重大事項で二進も三進も行かなくなつたのは、、、、、であり、民意である。

國民は今や正しく田中內閣を、、して居る。しかも田中內閣に對する反感は、その正面の政策論に手を觸るるの餘地を封ぜられたが故に、不戰條約問題の形式論に集注するの現象を生じたのである。、、ることを知らざる田中首相が、尾を振り首を垂れて、所謂諒解運動に奏効したにせよ、田中現內閣の輕重は、十二分に問ひ盡されたのである。議會に於ける反對黨の質問に對して、田中外相はこの譯語を「國家の利益のために」と云ひ放つたに係らず、今や田中首相が樞府の前に運動してゐるのは「人民の名に於て」の言葉に對する留保批准若しくは何等かの彌縫の形式に於てである。この兩箇の矛盾は、若し政府が樞府を欺かぬとすれば、議院を欺むいたことを立證する。この明白なる、、的行爲の使ひ分けは、田中首相の押しの力だけでは、天下が通さない。

四

田中首相が專任外相を置かずに今回迄押した惡度胸と豪膽とに至つては、正しく三嘆に値する。而し良心を失へる一個の、、、、、が、斯くの如き禍根を殘したことに就て、國民は憤懣の情を禁じ得ない。濟南事件協定に對する樞府諮詢問題の硬化は、最も尖銳なる田中外交の彈劾を意味する。而して支那に對する田中外交の全部的失敗は、國民的常識に於て正に彈劾に値するのみならず、國民的感情に於て樞府の彈劾を支援するに十分である。東方會議以來所謂滿蒙交涉や條約改正の行惱み、二度に亘る山東出兵、南北妥協問題、排日問題等數へ來れば一から十まで、悉く重大なる失敗の連環である。吾人は今日繰返へしてその非を鳴らすの煩に堪えない。

唯田中外交の主要産物であり半年間日支間の癌であつた、濟南事件は、三月二十二日に兎も角解決した。而してこの問題の結末こそ最も端的に日本外交の失敗を暴露する事項である。是に於てか數多き現內閣失敗の一として、一應その內容の檢討を試みるの必要がある。先づ三月廿二日成立し發表された協定內容が、それより一ヶ月前一度芳澤公使と王正廷氏との間に成立を傳へられたものと殆んど同じ條件であるに關らず、何故それが前には決裂し、後には成立したか。端的に言へば、その重なる理由は對議會策のカムフラージ以外ではない、

あのまゝの內容をもつて議場の批判に曝すことは、如何に鐵面皮の現內閣と雖も堪え得るところではなかつたであらう。何となればあの協定は山東出兵の理由を自ら抹殺する何よりの證據を提供するからである。政府はかるが故に議會の會期さし迫るを待ち構へ、俄然調印を了して、厄介拂ひした積りであつたらう。唯夫れ政府はあまりにあは

て過ぎた。是に於て法規上の遺漏を後日に遺し、現在樞府の關門にブッツかつて身動きもならぬ狀態に陷つたのである。

然らば濟南協定は何故に山東出兵に對する自己否定であるか。これは濟南事件が支那側の責任であるとの前提の下に、事件直後福田司令官の手から提出した四ヶ條の要求と、責任賠償の相殺、無條件撤兵の基礎の上に立つ今回の諸條項とを對比すれば一目瞭然である。

交換された公文のいづれにも我等は支那側の責任を發見することは出來ない。而して又曩に支那軍隊の保護に居留民を安んじ能はざるが故に、出兵した濟南の地から、今や單なる口頭の約束を信じて、我軍は撤退せんとしつゝあるのである。政府當局が假りに昨年と今年の狀勢の變化を以て、これを理由づけるとしても、それが單なる强辯に過ぎないことは、居留民の大半が已に撤兵に先ち青島へ引上げつゝある事實により、蔽ふべくもないのである。田中內閣の現地保護政策の最後までの支持者であつた山東の在留邦人が、今や最も强烈なる怨嗟の聲を放つまでに、彼等の體驗は苦きものであつた。

而も更に高度の政治的見地より見なければ濟南出兵の眞の過ちを發見することは出來ぬ。七千萬の軍費一億に及ぶ排日の損害、支那と日本との諸局面に於ける正面衝突、その兩國民の心境に根ざした民族的乖離凡そこれ等のものは皆な濟南事件が捲き起した直接間接の災禍であつた。何が日支關係の好轉であるか。好轉したとすれば、それは逆轉のドン底から生れた已むを得ざる好轉である。然る限り、事件の解決が假令日支關係を好轉したとしても、それは、日本の全部的、、を基石としての好轉である。

素より吾人は日支關係の常道に歸へることを念ふの切なるに於て人後に落ちない。濟南事件の拾收が大體に於てこの邊の折りあひで切りあぐることは、それ自體として必ずしも異存はない。然し乍ら問題はこれに對する責任の所在である。濟南事件の協定は明白に濟南出兵の否定である。濟南出兵政策と、斯くの如き結果とは、濟南出兵そのものゝ失敗を斷定するものである。現政府は自己の失敗の責任を明白にして、日支關係を拾收せよ。然らざる時、禍根は意外の邊に及ぶであらう。

政局はどう動く

馬場恒吾

政界バロメタアの役を勤めてゐる所の床次竹二郎氏は四月二日元老西園寺公を興津に訪問して、自分が政友會に入るべきや否や、を質問した。さうした事は固より元老に質問すべき筋合のものでない。元老も其質問には呆れた。迂濶に何んとか云はうものならば、忽ち床次一身の將來を見てやる責任を負はなければならぬ。それ故に何にも要領を得た返事はしなかつたと聞く。

所ろで、かうした身の上相談を元老に持掛けるものは床次氏のみではない。田中總理大臣も總理大臣を辭職すべきか否かを元老に相談して決める筈であつた。四月四日に彼れは元老を訪問した。それから五日間を伊豆修善寺に靜養した。吾々はこれを見て、元老に向つて自分の進退を相談し、それで、内閣退却の準備に溫泉で氣を落ち付けてゐるのかと思つた。然るに其後の樣子を見ると、未だ進退の相談を仕て來たらしくない。

尤もこの話のあつたのは今に始まつた事でない。まだ議會閉會中の三月中旬にも田中首相は興津を訪問した。其時は貴族院が優諚問題で、總理大臣問責案を通過せしめた後であつて、内閣は義理にも辭表を提出せねばならぬ破目に陷つてゐた。田中首相は西園寺公に相談して進退を決するかの如く云つて興津に出掛けた。併し其時は何にも云はなかつた。云ふ時間がなかつたと云ふけれども、一時間半の會見故、云へば云へない事はない。畢竟するに云ふ意志がなかつたのであらう。即ち辭職したくなかつたのであらう。

だから四月四日の會見に於ても、同じ趣旨に於て自分の進退には觸れなかつたのである。田中首相は此會見後、新聞記者に向つて、政局の問題に關しては、自分からは意見を述べるが、元老は意見を述べられない。又元老の意見を求める事はなすべき事でないと云ふ意味を力説してゐる。

總理大臣が自分の進退を自分で決する事が出來ず、其相談を元老に持ち掛けると云ふのは褒めた話しではない。併し總理大臣の頭が不透明にして、當然辭職すべき理由があるのに、辭職する決心が付かぬとしたならば、次善の策として、總明な元老に相談しても早く進退を決して與れた方が、國の爲めには利益である。併しそれもしない。彼れは飽くまでも政權に嚙り付いてゐる。

然らば何故に内閣は辭職せざる乎。玆に驚くべき事實がある。それは内閣が今辭職すれば、政權が反對黨の民政黨に行くべき形勢がある。それは田中首相に取つては以ての外の事柄である。さうでなければ、必ずしも辭職しないのでもない。只政權を民政黨に取られる事が心外であると云ふ理由の下に、政權に嚙り付いて居る。

何故に民政黨に政權を渡す事がそれほど恐いか。其詳しい事情はよく判らぬ。立憲政治の行れてゐる今日に於ては、政權が對立する二大政黨の間を往復する事は、最早普通の事と考へねばならぬ。この普通の事を世界が破滅する如き大事と考へる處に、政治の變態性が存在する。政權を反對黨に渡すときは、今迄榮華の夢に陶醉してゐた政府當

局者は如何なる非違を暴露されるかもしれない。其政府を援助した政黨は如何なる非運に沈淪するかもしれない。即ち彼等に採つては政權を反對黨に渡すと云ふ事は、無限の恐怖が伴ふ。それ故に彼等は死物狂ひになつて、政權噛り付きの方針を立てつゝある。

其政權維持のプログラムに依れば、先づ第一に政府は樞密院の難關を突破する。それが突破出來たとして、第二に内閣問題改造の難關を突破する。其間に床次氏と其率ゆる新黨倶樂部の選擧地盤を政友會に併合する。そして來年の議會に或口實を見付けて衆議院を解散し、政友會の絶對多數を占める。さうすれば貴族院が何んと云はうと、樞密院が如何に反對しやうと、政府と政友會は五年十年は大盤石の如く鞏固になると云ふのである。

問題はかうしたプログラムが實行され得るか否かである。

第一の樞密院はどうか。一昨年の金融恐怖の前日に、樞密院は若槻内閣の提出した所の臺灣銀行救濟案を一蹴し、そして内閣を潰した。其結果として現在の田中内閣が成立したのである。其時、樞密院に向つて、さうした行動を採るべく最も有効に運動したのは鈴木喜三郎氏であつた。其論功行賞の意味で彼れは田中内閣の内務大臣に擧げられた。在職一年、彼れは昨年の特別議會に於て彈劾され、田中内閣は鈴木内相を罷めさして、内閣それ自身の壽命を延ばした。其後一年間鈴木は捨てゝ顧られない。殘つた大臣は臺閣の上で浮かれ興じてゐる。若し鈴木が切齒扼腕して憤慨したとするならば、彼れは若槻内閣を潰したと同じ運動を樞密院に向つて試みるであらう。そして田中内閣を一度退却せしめ、そして二度目に浮き上るときには或は自分が總理になつてゐる時だと考へるであらう。

樞密院が政變を起す震源地になる事は感心出來ない事柄である。併し、樞密院とても、單獨に政變を起し得るものでない。一昨年の時も輿論は若槻内閣の臺銀救濟に反對してゐた。それは其後の出來事に照らして見れば、輿論の方が間違つてゐた。併し問題の起つた當時は、輿論の大勢は若槻内閣に反對し、樞密院の主張には贊成した。樞密院があのやうに大膽に強硬に、内閣倒壞を企て得たのは、此輿論の贊成に依つて力付けられたからである。今回は亦樞密院は輿論の趨勢を見て、それに適合した行動を採つてゐる。かうした場合には輿論は樞密院の行動を是認する外はない。

然らば樞密院が飽くまで強硬であつた場合に、田中内閣は潰れるかと云ふに、一昨年若槻内閣が潰れたと云つて、必ずしも今年田中内閣が潰れると限らない。四月十日田中首相は濟南事件解決の交換文書を、其効力發生前に樞密院に掛けなかつた事に對し、樞密院の諒承を求めた。其時に首相は此事に關しては、四月二日に天皇陛下に拜謁して奏上したと云つた。樞密顧問の說では、憲法政治の下に於ては、總理大臣は政治の責任を負ふべきである。元首に奏上した事に依つて總理大臣の過失の責任は解除されないと云ふのである。併しかうなつては最早理論の問題でなく、政治上の責任觀念がありやなしやの問題と

なる。責任觀念の稀薄な政治家に向つて、責任を知れと云つても、暖簾に腕押の觀がある。

不戰條約の問題其物は餘り輿論の共鳴を惹かなかつた。唯それが田中內閣打倒の槓杆になる點に於て大なる興味を喚んだ。此問題に關する政府の方針はかうである。政府は凡べて樞密院に屈從する。內閣の壽命を延長する爲めには如何なる無理難題でも承諾する。只政府のやつた事が憲法違反だと銘打たれる時には戰ふ。憲法違反の政黨と云はれては將來政友會の立つ瀨がないからである。それでなくば何んでも屈從するのだと。所ろで此政府の方針が樞密院に知られてゐる。それ故に、樞密院が政府を潰ぶす決心ならば、不戰條約を調印した政府を憲法違反者として指摘するであらう。

現在に於てこそ、政府は憲法違反ならば戰ふと云ふ。併し、憲法違反と議決せられた時、又內閣の壽命の事を考へるであらう。再び平身低頭して陳謝し、耻を呑み、垢を含んで居据るかもしれぬ。命あつての物種は上下を通じての最後の人情であるからだ。これは難關突破でない。關所を通る毎に、お咎め者たる烙印を額に捺されながら通つて來たのである。さうした烙印を捺された內閣でも、存在しやうと思へば存在出來る日本である。

第二の難關である內閣改造は二人の政治家を問題の焦點とする。卽ち久原遞信大臣を罷めさす事と、床次竹二郎を入閣せしめる事である。久原遞相は第五十六議會で攻擊の中心になつた。政友會內部には田中內閣が陣營を新らたにして次ぎの議會に臨まんとすれば、久原遞相を罷めさせなければならぬと云ふ說である。田中と久原は切つても切れない親密な關係である。田中首相を助ける爲めならば、久原遞相は喜んで犧牲になるだらうとすら云はれる。

然るに、これには反對論がある。田中首相は昨年は鈴木內相を犧牲にして、自分を助けた。又水野文相をも犧牲にして自分を助けた。今度は久原遞相を犧牲にして自分を助けんとする。さうする事は首相の人格を疑はしむるものである。首相としてなすべき事でないと主張するものがある。

かうした議論があるにしても、田中首相は內閣を助ける爲めに必要とあらば、久原遞相を罷めさす位の事は敢て爲す人と見られてゐる。併し陣營を新らたにする爲めに、かくの如き內閣の根本改造をなすのは、それは元氣旺盛のときの政府にして初めて爲し得る所である。今の田中內閣は氣息奄々として、僅かに一日でも生き延びんとしてゐる。それが大規模の改造を企てるときは、必ず內閣不統一を來たして政權を取り落す危險がある。それ故に今は內閣の大改造は誰れも口にすることがなく、責任外相と拓植大臣の補充が關の山と見られてゐる。

床次氏の入閣は別の意味に於て內閣への衝動を與へる。床次氏が入閣すれば、政府の力が幾分か強くなることは爭はれない。そして床次氏としても、現在の如く二十八名の少數黨を有つてゐては、何んとも身の振り方の付けやうがない。彼れの生きる途は民政黨に復歸する事

が不可能ならば、無條件で政友會に復歸する外はない。然るに此所に問題となるのは彼れの總理大臣たらんとする夢である。其夢は永久に醒めない。だから、彼れが政友會に復歸するとせば、それは田中總裁の後に、自分が黨の總裁となる期待を以てゞある。所ろで、田中の後に黨の總裁たる希望を有するものは、政友會内に已に餘り多く存在する。鈴木前内相、中橋商相、久原遞相、小川鐵相、何れも其候補者である。玆に床次氏を新候補者として收容する事は、此紛爭を混亂せしめるのみである。それ故に床次氏の方は、田中内閣が樞密院の難關を切り拔け得て、愈ゞ當分瓦解しないと決定した時、自分に内務大臣の椅子でも提供さるれば、必ずしも入閣を拒絕しないであらう。それ故に問題は床次氏の方よりは寧ろ内閣の内部の事情の方にある。床次氏に對する非公式の入閣勸誘が頻ゞとして傳へられるに拘らず、また正式の交渉は行はれてゐず、田中首相は床次氏に向つて『何れゆつくり話しをしやう』と云ふのみで、未だ何んとも具體的の申出はしてゐない。若し床次氏の入閣、若しくは入黨が政友會内部の紛爭を滋くする惧れのある場合は、田中首相はこれをも斷念するであらう。微動でもすれば内閣は碎はれる。それ故に、なる丈けそつとして生き延びやうと云ふのが此場合の作戰である。

然らば田中内閣は此儘存續するであらう乎。それは今日豫想せられざる事件が發生しない限り、存續し得るものと政府自身は考へて居る。何となれば現在は立憲政治の時代である。然るに政府が立憲政治の原則を無視しても、政權を握つて居らうと決心した場合には、之を立憲政治の武器で辭職せしむる方法がないからである。

政府が立憲政治を蹂躪するものであつたならば今日迄に已に幾度も倒壞してゐるのである。例へば

昨年の特別議會に際して、衆議院は鈴木内相を選擧干渉の爲めに彈劾し、遂にそれを辭職せしめた。立憲政治の内閣は連帶責任を負ふべきである。政友會内閣でも原敬時代は一蓮托生を固執して、決して一大臣をも犧牲にしなかつた。原と田中の相違は此點にある。田中内閣は政黨内閣でありながら、鈴木内相を犧牲にして内閣は存續してゐる。若しそれが立憲的な内閣であつたならば、其時已に總辭職した筈である。

水野文部大臣が優諚に依つて留任したと聲明し、そして物議を起して辭職したとき、此事件の主役でなくとも少くとも、相棒の役を勉めた田中首相は留任した。これは兩方助かるか、或は兩方共辭職すれば、問題にはならなかつたのである。それが一方を辭職せしめて、一方が留任したが故に、内閣全體が非立憲な存在となつた。

今年の議會に於て、貴族院は此優諚問題に關し、田中總理大臣に對し、輕率不謹愼、首相としての職責に缺くる所ありと云ふ決議案を通過せしめた。それは總理大臣に對する不信任案である。然るに此決議案が通過した後に、政府はそれを貴族院の好意の忠告なりと解釋して、矢張其職に留まつてゐる。これを好意の忠告と解釋するのは無理にさ

り曲解した迄である。何となれば、若し初めよりそれを好意の忠告と解してゐるならば、政府は何故に此決議案採決の間際迄、それを否決さすべく、貴族院議員に向つて哀訴歎願、醜態を極めた諒解運動を行つた乎。此運動が効を奏せず、問責案の通過後に、これは好意の忠告だと解釋しても、時機已に遲い。只さう云つて瘠我慢を張るに過ぎない。居据るべからざるに居据らんとすれば、さうした無茶苦茶を云はざるを得ない。

政府は衆議院の多數に支持されてゐるのだから、貴族院の反對は顧みるに足らずと云ふ。併しそれは昨年鈴木内相が衆議院の多數に反對された事を忘れての言分である。それほど貴族院よりは衆議院を大切に思ふならば昨年の議會に於て政府は已に辭職して居るべき筈であつた。

今年の議會に於て政府の重要政策たる地租營業收益委讓案を始め、自作農、肥料管理、鐵道買收法案、宗教法案等が不成立になつた。それ〲の主管大臣は來る一年間は何んにも爲る仕事がなくて困るであらう。同時に何の爲めに彼等は大臣になつてゐるかの意義が疑はれる。苟くも立憲主義の大臣ならば、其地位に居た堪まらない筈である。それが涼しい顏をして大臣となつてゐる所に、彼等の立憲政治無視が暴露されてゐる。

是に於て、吾々は極めて面白からざる結論に到達する。即ち日本の政治組織に於ては、内閣が無理に政權を握つてゐやうとすれば、誰れの力でもそれを辭職さす事が出來ないと云ふ事である。國民が政府反對の衆議院を選擧しても、政府は其有する權力と金力とに依つて、どうにか、かうにか過半數の政府與黨を作り上げる。貴族院が不信任の決議をしても、重要法案を不成立にしても、政府は顏を拭ふて知らぬ顏をしてゐる。樞密院が政府の無責任を責めれば、政府は只陳謝する。諮問案を否決すれば、否決されても致方がない。政策の行へないのも已むを得ないと云つて、敢て辭職するとは云はない。かゝる政府に對しては如何なる智者も手の出しやうがない。

立憲政治は言論の政治である。言論の政治とは道理の政治である。だから吾々の武器は言論である。言論の武器は道理を解するもののみに向つて有効であつて、道理を無視する封建時代の甲冑を着てゐるものに對しては有効でない。田中内閣が憲法上の責任を無視して、只政權を握つてゐる狀態は、これは確かに立憲時代の存在ではない。封建時代の諸侯が武力を以て政權を握つてゐると同じ系統の思想を代表してゐるものだ。政府を辭する事が必ずしも厭ではない。反對黨に政權を渡すのは絶對に拒絶すると云ふが如きは、封建的な敵愾心を最も露骨に表白してゐる。

田中内閣は已に人心を失つてゐる。それは田中首相も已に諒解してゐるらしい。それ故にこそ、彼れは進退を元老に相談せんかとも思つた。衆議院を解散しても政友會の絶對多數は得られまいと悲觀してゐる。内閣を改造して人心を新たにせんかとも考へた。

かくの如く人心の去つた事を知りながら、尚政權を握つて居らんとする處に、吾々は彼れに封建時代の、、の姿を見る。若し此、、の意志が遂げられるものならば、吾々は其所に日本の立憲政治の弱さに直面せしめられる。

封建的政府を攻撃するには封建的武器を必要とする。國民が貴族院や樞密院の力を借りて、政府に迫る事も、此意味に於て是認される。そして、政府が尚反省せざるとき、最後に起つものは民衆である。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

かうした苛烈な爭ひをするのは國家の不幸である。其所に田中首相の意志の働く餘地が存在する。蓋し田中首相の年來の理想は一度總理大臣になる事にあつた。其望は遂げられた。彼れは二度と總理大臣となる志望は有たない。從つて總理を辭すると共に總裁をも罷めるであらう。總理大臣となる目的を有たずして、政黨總裁の負擔を負い度くないからである。殘る問題は如何にして彼れは立派に退却し得るかと云ふ事である。彼れが心機一轉すれば、彼れは今日綺麗に辭職する事に依つてのみ彼れの名譽が恢復せらるゝ事が判るであらう。只其心機一轉は吾々の所謂豫想外の事に屬する。今日にも心機一轉するか、或は最後迄心機一轉せざるか、それは誰れにも豫言出來ない。(四、四、一二)

改造社出版圖書目錄

(1) 政治・法學

書名	著(譯)者名	内容	頁數・體裁	價格・送料
離婚制度の研究	法學博士 穗積重遠著	○離婚救濟論○離婚原因論○カトリック教の離婚禁止○イギリス其他各國の離婚制度の研究	菊判、上 940頁	10.00 内.30
家族制度と婦人問題	法學博士 河田嗣郎著	(一)家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項 (二)婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	四六、上 332頁	2.00 .20
婚姻の基調	京大教授 宮本英雄著	○婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻譲納○家族制度と婚姻婚約婚に關する研究	四六、上 208頁	1.50 .18
現代法律問題の研究	法學博士 高柳賢三著	○永劫の姿に於ける正義○移民問題と太平洋の平和○支那に於ける治外法權撤廢問題○相續思想と改正要綱相續法○外十二	菊判、上 799頁	4.80 内.27
小作法と自作農創定法	農學博士 澤村康著	○小作法に關する各國の制度政策を紹介し且つ我國の自作農創定法及び小作法案に對し徹底的批判を加ふ	菊判、上 785頁	4.80 内.27
增補 普通選擧法要綱	阪 内務事務官 三宅司法書記官 著	○普通選擧法に對する最も信頼すべき當局者の釋義。各府縣警察署にては皆本書を參考書として採用した	判 裁 半 頁 276	.60 .16
法と宗教と社會生活	帝大教授 田中耕太郎著	○法律と宗教○社會生活の二元性○法と教會○國家と宗教生活○我國に於ける國家と宗教の關係○外數項	四六、上 408頁	2.50 .24
私法學序說	帝大助教授 廣濱嘉雄著	○私法學緖說○我が民法總則編の通則性○私法關係の要素○契約の自由○私法關係の過程○外三項	菊判、上 460頁	3.00 .26
ソビイエト・ロシアの民法と勞働法	京大教授 末川博著	○ソヴイエト・ロシア民法の特色○同勞働立法概觀○同農業立法○民法令施行調令○民法典	四六、上 402頁	2.50 .22
法窓閑話	法學博士 末弘嚴太郎著	○新法學の權威たる著者が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	四六、上 412頁	2.50 .22
噓の效用	法學博士 末弘嚴太郎著	○噓の效用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	四六、上 454頁	2.60 .22
農村法律問題	法學博士 末弘嚴太郎著	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	四六、上 418頁	2.50 .22
勞働法研究	法學博士 末弘嚴太郎著	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の效力等勞働法概論	菊判、上 340頁	3.00 .24
法律に於ける階級鬪爭	帝大助教授 平野義太郎著	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	菊判、上 342頁	2.50 .26
法制講話	法學博士 [illegible]三郎著	○總論○親族法及び相續法○民事法○憲法、全國の中學師範女學校の教科書、參考書としての最良書	四六、上 434頁	2.50 .22
現代日本の政治過程	大山郁夫著	(一)現代に於ける社會思想及び政治事實の發展(二)現代日本の政治過程(三)多元的國家觀の批判	四六、上 354頁	2.50 .22
大衆に呼びかける	大山郁夫著	○勞働農民黨の黨首たる著者が現政局の一般的情勢と勞働農民黨の立場を論ず○第よるに黨の綱領政策規約を以てす	四六、並 102頁	.20 .14
勞働法總論	商大教授 孫田秀春著	○勞働法○基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の效力等	菊判、上 340頁	2.60 .20
勞働政黨と勞働組合	ジ・ダイエフ著 富士辰馬譯	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動勞働組合に關する世界的名文献の翻譯	四六、並 104頁	.90 .14
露國共產黨「内訌」錄	「プラウダ」紙所載 近藤榮藏譯	○所謂内訌問題に關する共產黨大會の議事論爭を殘らず採錄す。兩派大立物の主張、議場の動靜等詳細に知る事を得、レーニン主義研究並に露國政治研究上得難き好資料	(近刊)	

(2) 經濟・社會

書名	著(譯)者名	内容	頁數・體裁	價格・送料
社會政策と階級鬪爭	法學博士 福田德三著	(一)社會政策序論○「社會」の發見○外三項(二)階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	四六、上 574頁	3.00 .24

經濟學全集

我民衆の實生活を指導する唯一の全集

全四十七卷 一册壹圓 一時拂四十四圓 ◇刊行中◇

特色

體系整然、規模の雄大なるは日本は愚か世界に比類なし。

◇

執筆者は一般經濟學とマルクス學の權威を悉く登場せしめ正に學界總動員にて兩面の代表學說を網羅す。

永遠の生命を有つ超優越全集

社會運動と勞銀制度	法學博士 福田徳三著	(一)社會運動の[illegible](二)[illegible](三)勞銀制度を博士一流に論評す	四六、上 436頁	2.30 .20
ボルシェヴキズム研究	法學博士 福田徳三著	○マルキシズムとしてのボルシェヴキズム○レーニン[illegible]○ボルシェヴキズム○資本主義への[illegible]	四六、上 296頁	2.00 .20
レーニニズム	ニコライ・レーニン著 [illegible]譯	○ロシヤ革命の[illegible]○ボリシェヴィキの[illegible]○一[illegible]○ボリシェヴィズム[illegible]	四六、並 214頁	1.20 .16
改訂 價値論と社會主義	慶大教授 小泉信三著	○價値論○[illegible]研究○[illegible]研究○[illegible](三章)○[illegible]河上博士との論爭記事	菊判、上 433頁	2.30 .20
改訂 資本論解説	カウツキー著 高畠素之譯	○難解にして[illegible]なる資本論も此の良解說書によりて何人にも理解し易からしむ。[illegible]本論研究の手引として第一の好評。[illegible]以來[illegible]十數[illegible]	四六、特 306頁	1.20 .16
社會主義と進化論	高畠素之著	○進化說と社會進化○[illegible]の問題○[illegible]と[illegible]○[illegible]化と[illegible]○生物學と社會主義○宗教と社會○外大項	四六、並 272頁	1.00 .16
社會主義社會學	レウキス著 高畠素之譯	○コントの人間[illegible]○コントの[illegible]分類論○スペンサーの[illegible]社會學○スペンサーの[illegible]社會學○外九項	四六、並 248頁	1.00 .16
マルキシズムと國家主義	高畠素之著	「マルキシズム[illegible]」と「國家主義[illegible]」とを收む。前者はマルキシズムに對する批判にして後者は著者一流の國家論なり	四六、並 262頁	1.00 .16
國家思想の研究	[illegible]著	○文化と國家○[illegible]國家と都市國家○[illegible]に於ける[illegible]國家[illegible]の努力○國家哲學の問題○外[illegible]項	四六、上 344頁	2.00 .20
社會問題綱要	法學博士 河田嗣郎著	○社會問題を[illegible]が、[illegible]の[illegible]、中正の見を[illegible]て社會問題の全般に亙りて[illegible]せるもの、[illegible]必讀の書なり	菊、上 644頁	4.30 内.27
青年學徒に訴ふ	森戸辰男著	○[illegible]たる社會科學問題に[illegible]し[illegible]者に對し[illegible]を放つ。學生[illegible]は本問題の内容[illegible]を本書で知れ	四六、並 60頁	.30 .14
學生と政治	森戸辰男著	○[illegible]の學生の社會科學研究問題に[illegible]なる[illegible]と決定的の[illegible]を與ふ[illegible]學徒の必讀書	四六、並 64頁	.25 .14
思想闘爭史上に於ける社會科學運動の重要性	森戸辰男著	○社會科學運動の[illegible]性と文化史的[illegible]○大學を中心とする社會科學研究團體の[illegible]化	四六、並 74頁	.35 .14
思想と闘爭	森戸辰男著	○[illegible]と主義者と[illegible]力○[illegible]主義者と[illegible]的[illegible]人○大杉榮君の[illegible]○外[illegible]項	四六、上 336頁	2.00 .20
帝國主義研究	猪俣津南雄著	○資本主義[illegible]の[illegible]○帝國主義の[illegible]性○資本主義日本の帝國主義○日本帝國主義の[illegible]問題○外二項	四六、並 189頁	1.00 .18
近世封建社會の研究	經濟學博士 本庄榮治郎著	○徳川時代の社會經濟上の[illegible]と、[illegible]つて生じたる封建社會崩壞の事情とについての研究。[illegible]時代より[illegible]代への[illegible]を[illegible]る	四六、上 316頁	2.00 .22
日本社會史	經濟學博士 本庄榮治郎著	○日本社會史の[illegible]○氏族制度の社會○[illegible]制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會等	菊判、上 396頁	2.30 .24
愛國心の功過	[illegible]著	○日本人にかくも[illegible]い[illegible]を與えた思想家はない。我々は此の書に依て「[illegible]れる愛國心」「[illegible]に[illegible]せざる[illegible]國民」「[illegible]なき[illegible]し[illegible]」たる[illegible]と[illegible]じ、且つ學ぶ	四六、上	1.80 .18
民衆の苦悶	カイヨー著 [illegible]井貫一郎譯	○大戰の[illegible]○世界的[illegible]○[illegible]の力○[illegible]一[illegible]經濟の[illegible]○[illegible]問題と[illegible]○外三章	四六、並 240頁	1.20 .16
資本主義末期の研究	高畠[illegible]著	○資本主義の作用[illegible]の公式はその[illegible]と[illegible]とでは[illegible]しく事情を異にすると云ふ[illegible]より[illegible]の學說を是正したる名著	四六、上 536頁	3.50 .24
石油帝國主義	[illegible]著 [illegible]譯	○石油は[illegible]問題の[illegible]の的だ。[illegible]勢力、戰爭を[illegible]する[illegible]である。[illegible]問題の[illegible]は本書を[illegible]って了解さる	四六、上 280頁	1.50 .22
封建社會の統制と闘爭	京大教授 黒正巖著	○徳川時代封建社會の[illegible]の[illegible]とこの統制の下に於ける社會闘爭の[illegible]的[illegible]によって[illegible]封建社會の[illegible]亡の跡を[illegible]せる好著	菊判、上 510頁	3.80 .30
經濟學の批判のために	[illegible]著	○第一篇、「方向轉換」と、資本の現實的運動[illegible]一篇○第二篇、經濟學批判の方法、外二篇○第三篇、經濟史の研究方法	四六、上 400頁	1.00 .18
唯物史觀のために	[illegible]著	○第一篇、唯物史觀、外四篇○第二篇、唯物史觀(社會の發展[illegible]に[illegible]の[illegible])○第三篇、我が國に於ける唯物史觀の發展、外四篇	四六、並 274頁	1.00 .16
唯物史觀	ブハーリン著 [illegible]譯	○[illegible]第一の[illegible]たる著者が現代思潮の[illegible]たる唯物史觀を平易に體系的に論述せるもの	四六、上 690頁	3.30 .26
日本社會經濟編年史	吉田[illegible]著	○神代より大正に至る社會現象を[illegible]れなく年表體に記述[illegible]し各項一々其の出典を[illegible]明記に[illegible]す。研究者[illegible]必備の良書	菊判、上 684頁	8.00 .37
日本財政史	經濟學博士 本庄榮治郎著	○日本財政史の[illegible]○氏族社會○[illegible]社會○莊園社會○分權的封建社會○[illegible]的封建社會○[illegible]時代の財政	菊判、上 316頁	2.80 .22
英國資本主義成立史	慶大教授 野村兼太郎著	○現代社會の經濟組織を正しく理解する上に近代資本主義の[illegible]たる英國資本主義成立過程の[illegible]が如何なる地位にあるか[illegible]しない事だらう。本書は正に[illegible]學の爲に一大[illegible]を[illegible]くものである。	菊判、上 650頁	4.80 .27
轉換期の經濟學	ブハーリン著 [illegible]譯	○序言(一)世界資本主義の構成(二)經濟、國家權力及戰爭(三)資本主義制度の崩壞(四)共產主義的建設の一般的條件(五)社會的轉換過程に於ける都市と農村(六)生產力、革命の[illegible]及び技術的[illegible]以下[illegible]	四六、上 261頁	1.80 .22
世界經濟論	ブハーリン著 [illegible]譯	○國家資本主義的トラストより[illegible]る帝國主義の[illegible]と[illegible]を明示せる[illegible]現代社會の[illegible]なる批判	四六、上 256頁	1.60 .20
日本殖民地經濟論	[illegible]大三郎著	○[illegible]○[illegible]○[illegible]○[illegible]○[illegible]○[illegible]○日本殖民地[illegible]	菊判、上 310頁	2.80 .24
國際經濟論	經濟學博士 [illegible]江[illegible]一著	○[illegible]○國際大[illegible]○外國貿易と國際[illegible]○外國貿易と[illegible]○以下[illegible]	菊判、上 417頁	3.30 .25

書名	著者	内容	判型・頁	定価・送料
[illegible]経済と国民経済	法学博士 堀江帰一著	○[illegible]と国民[illegible]○[illegible]上より見たるマノア[illegible]○[illegible]○外七項	菊版、上製 343頁	2.80 .25
[illegible]と国民経済	法学博士 堀江帰一著	○[illegible]の[illegible]と[illegible]の[illegible]○[illegible]より[illegible]的[illegible]へ○[illegible]の[illegible]○外九項	四六、上製 394頁	2.30 .20
貨幣[illegible]行外国為替（上巻）	法学博士 堀江帰一著	○貨幣の[illegible]と[illegible]○[illegible]○[illegible]○[illegible]の[illegible]分配○[illegible]の[illegible]○本位制度○[illegible]	菊版、上製 394頁	3.00 .25
貨幣[illegible]行外国為替（下巻）	法学博士 堀江帰一著	○銀行の本質[illegible]○銀行の[illegible]的[illegible]○銀行[illegible]○銀行の[illegible]的[illegible]○銀行[illegible]○[illegible]銀行制度○外[illegible]	菊版、上製 511頁	4.50 .20
金資本位制の興廃	法学博士 堀江帰一著	○金資本位制の本質○金資本位制の[illegible]○[illegible]○インフレーションとデフレーション○外一項	四六、上製 323頁	1.60 .18
英国預金銀行論	法学博士 堀江帰一著	○英国に於ける銀行[illegible]の[illegible]○英国[illegible]行の[illegible]に[illegible]○[illegible]銀行の[illegible]○銀行以外の[illegible]	四六、上製 280頁	1.00 .18
中世寺院法と経済思想	東大講師 山口正太郎著	○序言○利子論[illegible]の歴史○中世寺院法と[illegible]○中世寺院法と組合及び会社論	四六、上製 [illegible]頁	1.80 .18
階級及第三史観	文学博士 高田保馬著	（一）[illegible]○[illegible]の本質○マルクス的[illegible]外一篇（二）第三史観○[illegible]史観より第三史観まで等	菊版、上製 364頁	2.80 .24
近世商業史	慶大教授 野村兼太郎著	○近世商業の本質と[illegible]を明確にし其の現代[illegible]に[illegible]へたる影響を評論したる良著	菊版、上製 364頁	3.00 .20
明治維新経済史	[illegible]一著	○近代日本の[illegible]の歴史的研究、[illegible]より資本主義社会への[illegible]に関する[illegible]、[illegible]よるに確実なる史料を以てす	菊版、上製 340頁	2.30 .20
唯物史観[illegible]の再吟味	法学博士 [illegible]三著	○[illegible]すれば[illegible]的[illegible]に[illegible]マルクス研究に[illegible]的に学問的立場から冷静に一々原本資料に[illegible]って公平に批判する[illegible]の下に[illegible]された[illegible]士の学的研究	菊版、上製 274頁	2.50 .20
マルクス学解説	高[illegible]之著	○[illegible]にして[illegible]なるマルクスの[illegible]をよく[illegible]に[illegible]に亘って[illegible]に[illegible]べた[illegible]は[illegible]しい。[illegible]めてマルクス学を知らんとする者の入門書として最適の書である	四六、並製	1.00 .13
農業の原理と其の運用	京大教授 [illegible]口[illegible]著	○本書は[illegible]の[illegible]本的な要[illegible]としての[illegible]をなすことが[illegible]されたるものにて[illegible]が国[illegible]に関する[illegible]中最も[illegible]の少なき[illegible]である	菊版、上製 404頁	3.50 .24
明治大正農業[illegible]史	[illegible]著	○[illegible]の現代日本研究に最も必要な、[illegible]の[illegible]を総合的に研究したもので、[illegible]国民の[illegible]と[illegible]とによりて、はじめて[illegible]し得らるる[illegible]である	菊版、上製 776頁	6.00 内 .26
経済学原理（分冊一）	マーシァル著 大塚金之助訳	第一篇[illegible]論、第二篇[illegible]、第三篇[illegible]とその[illegible]	菊版、上製 400頁	2.50 .24
経済学原理（分冊二）	マーシァル著 大塚金之助訳	○[illegible]なる土地、労働、資本、[illegible]を[illegible]に於いて[illegible]	菊版、上製 400頁	3.00 .24
経済学原理（分冊三）	マーシァル著 大塚金之助訳	○現代の[illegible]、[illegible]、学としての[illegible]なるものはない。本書は[illegible]を[illegible]	菊版、上製 [illegible]頁	2.80 .20
経済学原理（分冊四）	マーシァル著 大塚金之助訳	○[illegible]は、晩年のマーシァルに[illegible]した人、[illegible]に[illegible]つつある[illegible]したる名著	菊版、上製 340頁	2.70 .20
代理 ブルジョア経済学批判	[illegible]著			（近刊）

マルクス＝エンゲルス全集

[illegible]として[illegible]くマルキシズムの[illegible]!!

現代思想の根幹であり、全社会運動の基調をなすマルキシズムの真理を全解するには「本全集」を[illegible]破せねばならぬ。[illegible]訳の正確、流[illegible]、本社は[illegible]き確信を有つ！

全二十巻 一冊[illegible]円 [illegible] 拾九圓 目下刊行中

本全集を[illegible]まずして思想問題を論ずる勿れ!!

マルクス資本論

高畠素之訳

改訂廉價版

現代思想の根柢をなす名著

◇ ◇

訳者は斯界の最高権威・訳文平明

全五冊 [illegible] 一冊[illegible]円 [illegible] 八拾銭 刊行書

マーシァル経済学原理

商大教授 大塚金之助訳

改訂廉價版

新正統派の始祖、マーシァルの学説の根本をなすもの、学としての[illegible]い光彩を有つ！訳者は晩年のマーシァルに親炙したる人、名訳の定評がある

全四冊 一冊一圓 [illegible] 八十銭 刊行会

（3）労働・農村

書名	著者	内容	判型・頁	定価・送料
労働問題原理	[illegible]一[illegible]著	○[illegible]○[illegible]○労働の[illegible]不安○[illegible]労働問題[illegible]会[illegible]○[illegible]本[illegible]者の[illegible]と[illegible]○社会[illegible]○[illegible]	四六、上製 390頁	2.00 .20
女工哀史	細井和喜蔵著	○我国の工場及女工[illegible]を知る[illegible]的[illegible]十五ヶ年の[illegible]の血と肉とから成る本書を国民は一読せよ	四六、並製 4[illegible]頁	2.00 .20
野田大労働争議	[illegible]著	○野田の大労働争議は本邦労働運動史上の一大事件であった。本書は[illegible]に当った[illegible]の[illegible]、資本家の[illegible]、組合の[illegible]、[illegible]	四六、並製 413頁	1.00 .16

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
農政四十三講	法學博士 河田嗣郎著	○農村問題解決の鍵鑰○小作爭議と農村破壞○外國十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	四六、上 398頁	2.50 .22
農村問題と對策	法學博士 河田嗣郎著	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分裂○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	四六、上 344頁	2.00 .20
農業問題研究	河西太一郎著	○農業問題の基礎的考察○農業理論及び政策研究○農民運動及び其他	四六、上 433頁	2.30 .22
土地問題論	リープクネヒト著 河西太一郎譯	マルクスの農業理論及び政策の基礎的見解を著者獨特の絢爛なる表現を以て躍動せしめてゐる好著。譯文亦た流麗。	四六、上 332頁	2.30 .20
農村研究講話	農學博士 小野武夫著	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	四六、上 228頁	1.50 .18
日本農民史語彙	農學博士 小野武夫著	日本農村の社會經濟史に關する用語を簡易通俗に說明したるもの。採錄語數實に千二百餘に及ぶ。	四六、上 492頁	3.50 .24
近世農村問題史論	經濟學博士 本庄榮治郎著	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	四六、上 360頁	2.30 .22

堀江歸一全集

我國一流の經濟學者で財政學者。旺盛な研究心、鋭き觀察力の持主。街頭に立てば口に筆に烈々風霜の如く時人を激動せしむ。今、博士街頭に勇敢に斃れて大業績を殘す。學界經濟界の方向を指標する經世的大全集!!

全十巻　一冊 貳圓五十錢　全揃 貳十四圓　目下刊行中

近世社會經濟叢書

日本文化の研究者に不可缺の快著見よ永年埋沒せられし德川時代に於ける稀覯の珍文献を!萬人共學共究の絕好資料。編者は斯界の權威者のみだ!

全十二巻　一冊 參、圓　全揃 三十三圓　刊行濟

海舟全集

海舟の偉大なるは今更言ふを要しない。聰明な經世家、好個の外交家、先見ある財政家たると同時に品性皎潔な哲人、純情な詩人であつた。今玆に零簡片墨漏らすなく完全なる海舟全集を刊行した。敢て好學の士に薦む。

全十巻　一冊 四圓　全揃 卅六圓　刊行濟

アインスタイン全集

理學博士 石原純
理學士 山遠阿
理學士 田端部
理學士 光美良
理學士 純雄淳夫
共編譯

（理學博士・理學士 石山遠阿、原田端部、原光美良、純雄淳夫 共編譯）

世界的碩學の回天の新學說を熱烈正確に紹介し我國學術界に貢獻す。內容に就いては今更贅言を要しないであらう。

全四冊　一冊 五圓　全揃 二十圓　刊行濟

文化哲學叢書

◇第一篇◇ リッケルトの歷史哲學　文學博士 米田庄太郎著（價四圓七十錢）

◇第二篇◇ 新カント派の歷史哲學　板垣應穗著（價一圓五十錢）

◇第三篇◇ ジムメルの經濟哲學　帝大教授 恒藤恭著（價參圓）

◇第四篇◇ ディルタイの哲學　廣島高師教授 務部謙造著（價貳圓）

(4) 哲學・宗教・科學

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
生存競爭の哲學	賀川豐彥著	生存競爭の原理を闡明し生存互助の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に證す。	四六、上 360頁	2.00 .22
心理學講話	文學博士 松本亦太郎著	一般心理學を體得せんと欲する學徒のために解り易く書かれた我國で心理學の最良書。	四六、上 546頁	3.50 .24
智能心理學	文學博士 松本亦太郎著	人間力の智能方面を、博士獨自の廣汎にして精緻なる立場より研究したるもの。	菊、上 1040頁	9.00 内 .36
ヴントの民族心理學	文學博士 桑田芳藏著	(一)序論(二)本論、民族心理學(三)別論、文化と歷史○文化の領域○文化の詩歌(四)附錄	四六、上 516頁	3.50 .24
カントの平和論	文學博士 朝永三十郎著	○カントの平和論○カントと政治○思想問題と哲學的精神等――カント研究者に必要の一書。	四六、上 246頁	1.50 .18
生の哲學	リッケルト著 小川義章譯	理想の破なき生の偶像を讃謂するの風を悟り誤の生の意義を闡明せるもの新理想の巨擘たる著者の傑作。	菊、上 346頁	2.80 .24
數理哲學概論	ラッセル著 宮本鐵之助譯	本書は努めて數學專門語を避け平易明快何人にも理解し易からしめたものである。文化科學と自然科學の理念と其成果を完全に認識するには先づ數理哲學に據る外はない。	四六、上	2.80 .22
藝術哲學	京大教授 植田壽藏著	○藝術的理念○藝術的自然○藝術家○藝術作品○觀照――藝術の普遍性を新鋭の氏が熱烈に論究す。	菊、上 344頁	2.70 .24
無產階級の哲學	ディッゲン著 山川均譯	○ディッゲンの為人と其哲學○哲學の實果○一勞働者の觀たる人間の頭腦の働きの性質	四六、上 388頁	2.50 .22

哲學思想の史的考察 ヤン[illegible]マン著 [illegible]一郎譯
[illegible]マム[illegible]で古代より現代に至る哲學思想の史的考察と[illegible]の[illegible]を[illegible]。
菊、342頁 上 2.00 .22

實[illegible]哲學研究 [illegible]著
〇カント定言命令の形式性に就て〇定言命令の一般性と個性との關係に就て〇カントの矛盾の[illegible]に就て〇フィヒテ研究の[illegible]〇ロッツェの[illegible]の由來〇外五篇
菊、380頁 上 5.00 .27

學校兒童心理學 東京大學教授 [illegible]之著
學齡兒童を研究の對象として實驗的にまた統計的にその心理狀態を考究したる教育的心理學である。
四六、472頁 上 2.70 .20

現代文化人の心理 文學博士 [illegible]田庄太郎著
現代に亙る文化的學者、文化的要求を極めて平易に而も詳細に解說した快著、現代文化を研究せんとする人々の是非讀まねばならぬ唯一の文化哲學書。
四六、上 2.70 .22

靈の王國 [illegible]著
獨逸の[illegible]ラテナウの思想的[illegible]を傳へたもの人の心の[illegible]なるものを[illegible]し靈の王國を[illegible]せしと表明す。
四六、上 1.80 .15

經濟哲學 ブルガコフ著 [illegible]三郎譯
「經濟としての世界を[illegible]せしものに本書の如く[illegible]なるは嘗て見ざる所、實に二十世紀初頭の[illegible]界に於ける一大文獻なり」とは本書に對する[illegible]の[illegible]。
四六、430頁 上 2.80 .22

日本道德論 [illegible]高等[illegible]教授 [illegible]著
〇總說〇國家〇國體〇日本道德の要素〇基礎〇[illegible]の[illegible]と[illegible]的[illegible]〇武士道の[illegible]〇[illegible]と國民道德
菊、564頁 上 4.[illegible] .30

現代教育哲學の根本問題 [illegible]高等[illegible]教授 長田新著
〇現代教育哲學〇社會的教育學の現今〇社會的理想主義教育〇ペスタロッチと理想主義教育學。外三章
菊、[illegible]頁 上 2.00 .24

ガンヂーと眞理の把持 [illegible]著
印度の聖者ガンヂーとは何者であるか。彼は如何にして眞理を探求し、これを把持したか。本書によつて彼の偉大なる全貌に親接せよ。
四六、上 2.20 .18

ガンヂー審判の日 [illegible]著
個人的なその[illegible]主義、廣く[illegible]められてゐる、かの恐るべき「力」「武器」——印度民族のために[illegible]した[illegible]ガンヂーの有つ魅力は世界的である。[illegible]彼は如何にして審判され、何を[illegible]ひられたか？
四六、上 1.30 .18

現代哲學思潮 矢山[illegible]著
第一章「[illegible]」第二章「[illegible]」第三章「心理學の發見」第四章「[illegible]」第五章「形而上學的乃至世界觀的思潮」第六章「トーマス主義」第七章「結論」
四六、268頁 上 1.80 .20

體驗宗教の研究 [illegible]著
（一）序言〇體驗宗教の意義（二）本論〇カント、シュライエルマッヘー、ルッターの宗教（三）結論
四六、306頁 上 2.00 .20

自我經 スティルネル著 辻潤譯
（一）人間〇人生〇古代と近代の人々〇古代人〇近代人自由人（二）自我〇所有〇所有人唯一人者
四六、[illegible]頁 上 2.80 .20

校註 切支丹殉血遺書 [illegible]著
三百年前キリシタンを信奉して長崎立山にて殉教されし二十六人の殉教記錄、皆これ血涙記。
四六、[illegible]頁 上 3.30 .20

老子の研究 竹内[illegible]著
古人未見の材料により老子を孔子以後と論じ[illegible]に對し新なる斷案を下し東洋哲學に大貢獻をなしたる學的研究。
菊、360頁 上 3.50 .20

物理學と認識 理學博士 [illegible]本[illegible]著
〇物理學と認識〇文學上の[illegible]と科學〇物理學上の認識の問題〇[illegible]〇外[illegible]篇
四六、[illegible]頁 上 1.30 .15

電子說から見た世界 中村[illegible]著
一代の文豪として[illegible]を[illegible]せし[illegible]氏の[illegible]的文學であり[illegible]である。
四六、432頁 上 1.[illegible]

遺傳學概論 [illegible]著 [illegible]正人譯
[illegible]遺傳學[illegible]する[illegible]は少ない。本書は[illegible]に於ける[illegible]の[illegible]を[illegible]する[illegible]である。
四六、[illegible]頁 上 1.80 .20

婦人の健康の爲に 醫學博士 [illegible]口[illegible]著
世界婦人界の大家たる[illegible]博士が多年の[illegible]に[illegible]より[illegible]せる婦人必讀書。
四六、[illegible]頁 上 1.80 .20

[illegible]年齡より[illegible]の精神發育研究 文學博士 [illegible]三郎著
著者が十一ケ年を費して研究した世界的權威の大著で、六歲より廿一歲までの兒童の精神發育を研究した[illegible]の大名著。
菊、上 4.00 .30

スタイナハ若返り法研究 [illegible]三郎 共著
スタイナハの[illegible]なる生理學の智識と、七十にて[illegible]を[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]
上 1.80 .20

增補 アインスタインと相對性理論 理學博士 石原純著
ニュートン引力を否定して全科學界を革命せる氏の人となりと、「相對性理論」とを知るに最良唯一の書。著者は[illegible]の[illegible]者だ。
四六、上 2.80 .20

アインスタイン教授講演錄 理學博士 石原純譯 岡本一平畫
一、[illegible]二、[illegible]三、[illegible]五、[illegible]七、[illegible]八、[illegible]
四六、288頁 上 1.[illegible] .20

相對性理論の斷面 第一編 理學博士 石原純著
アインスタインの學說を研究せんとするもの、ために斯界の最高權威石原博士が編著されたもので研究者の必讀すべき好著の書である。
四六、上 .80 .14

空間及時間概念 第二編 理學博士 石原純著
相對性原理を解する上に於いて空間及時間に對する概念が尤も重要——[illegible]するとに依つてアインスタイン教授の相對性[illegible]は明瞭に解されるであらう。
上 .80 .14

近代物理學概念 [illegible]共著
（一）物質〇分子及び原子〇電子〇量子の關係等（二）エネルギー〇波動〇輻射等
菊、384頁 上 2.00 .20

增訂縮刷版 智能心理學 文學博士 松本亦太郎著
本書は特に東西學界に於ける心理學的方面の研究の[illegible]を[illegible]し、[illegible]を[illegible]に[illegible]の[illegible]と[illegible]を受けた。今之を縮刷版として廣く[illegible]に頒つこととした。
四六、1086頁 上 5.00 .30

上田敏全集

（6） 文學・評論・文明評論・研究

出づべくして出でなかつた柳村先生の全集が本社より出版されたのは我社の欣びである。[illegible]たる明治文學の偉大なる功勞者柳村の散逸したる幾多の珍しき遺稿は集大成さる。彼の剝琢せる不磨の金字塔は殘らず此處にあり。時効を經へて聳立せる芳香高き彼の風貌を本全集に仰げ！

全八卷 每冊[illegible]五十錢 [illegible] 刊行中

文學と革命 トロツキー著 茂森唯士譯
〇非十月革命文學〇革命の文學的同伴者〇未來派〇詩の形式派とマルクス主義等
四六、506頁 上 3.00 .20

苦悶の象徴	文學博士 厨川白村著	白村の唯一といつてもよい系統ある藝術を論じたもので千古の名文。情熱に富んだ立派な文學概論だ。	四六、上製 214頁	1.80 .20
愛する人々へ	有島武郎著	○序○歐米からの手紙○病蓐雜筆○遺された手帖から○凡てのものは悉く壊れる○藝術とは何ぞや○談	四六、上製 504頁	3.00 .24
近代文明と藝術	吉江喬松著	○近代思想と文藝○現代日本文明と藝術○大自然と文藝等を氏の流麗な文章で論ぶ。	四六、上製 334頁	2.00 .22
文藝管見	里見弴著	○自序○自分自身の紹介○藝術の分野○文藝概觀○内容と表現等、文藝に志す人の必讀の良書。	四六、上製 188頁	1.20 .16
學藝論鈔	帝大教授 阿部次郎著	○若きゲーテ○ゲーテの藝術○フーゴー・ヴルフの歌○晩年のロダン○美の問題について等。	四六、上製 412頁	2.20 .20
露國現代の思潮及文學	昇曙夢著	露國現代の思潮文學を解剖した我國での唯一の大文獻。近代の露國文學を知る人の第一の參考書。	四六、上製 786頁	4.80 .30
ゆかり	親佛文學會編	クローデル大使を送る爲めに兩國國に關係ある文豪詩人畫家が自分の最もいい作を集めた趣味ある叢書。	四六、上製 446頁	3.50 .22

石川啄木全集

情熱の詩人・薄命の天才啄木の全き姿成る!!

第一卷（小說集）	新發見
第二卷（小說・小品集）	創作三十余篇
第三卷（詩歌集）	短歌五百余首
第四卷（評論・感想集）	評論四十篇
第五卷（書簡集）	書簡百數十通

啄木の珠玉の如き名作・埋れたる遺稿を遺憾なく網羅!!

全五卷　一冊壹圓　全部四圓八十錢　送料一冊十四錢　書留十錢增　刊行濟

吉利支丹文學抄	東北大學教授 村岡典嗣編	鎖國時代に西歐文化を象徴せし吉利支丹に關する文獻の大集成。ゆと名付づくるは著者の謙遜のみ。	菊、上製 362頁	3.50 .26
文學に志す人へ	武者小路實篤著	氏の文學論を纏めたもので文學志望者藝術鑑賞家に文學の眞の目標の何處にあるかを指示する好著。	四六、上製 266頁	1.30 .18
ロマンチク時代	京大教授 太宰施門著	ロマンチク時代○ラマルチーヌ○ジョルジュサンド○バルザックの小說○レアリスムへ○附錄註解	四六、上製 268頁	2.00 .20
文藝當座帳	菊池寬著	菊池氏の隨感隨錄。歷史論あり演劇論あり人物月旦あり文藝批評あり經驗談あり多趣多面の好讀物。	四六、上製 274頁	1.50 .18
文藝評論	正宗白鳥著	著者の明晰なる鑑賞眼と銳き骨をさす評論は正に古今獨歩である。文藝を鑑賞するの士は是非熟讀あれ。	四六、上製 372頁	1.80 .20

文祿舊譯 天草本伊曾保物語	新村出著	大英博物館所藏の稀覯本により本文を嚴密に校訂し、添ふるに興味津々たる研究論文數篇と、珍らしき寫眞十數葉を以てす。面白き讀物にして又文化史の好資料。	四六、上製 394頁	3.00 .24
革命後のロシヤ文學	昇曙夢著	革命後十年間に於る新ロシア文學の發達經路、各派闘爭の消長、作家及作品の特質等の研究を纏めたるもの、露國の文學演劇映畫教育等を知らんとする者の必讀書。	四六、上製 348頁	2.00 .20
文藝一夕話	佐藤春夫著	○潤一郎人及び藝術○文藝家の生活を論ず○文藝時評（一國本の流行。心境小說と本格小說。無產階級文學について。戀愛の文學。友愛の文學。人格露出の一方法としての批評。芥川龍之介を哭す。）○外十篇	四六、上製 282頁	1.50 .18
日本演劇の研究	文學博士 高野辰之著	演劇と歌謠の研究に於て當代第一の權威ある著者多年の研究を集大成せる書。第一部演劇舞踊篇第二部歌謠篇。	菊、上製 411頁	4.00 .30
日本演劇の研究（第二輯）	文學博士 高野辰之著	第一集刊行後一年有半の新たなる研究十數篇を收錄す。前篇は歌舞伎劇以前、後篇は歌舞伎劇以後とす。何れも日本演劇の研究に志す少壯學徒への好參考書。	菊、上製 500頁	5.00 內 27
近代の戀愛觀	文學博士 厨川白村著	○近代の戀愛觀（十三項）○再び戀愛を說く（七項）○三度戀愛に就て言ふ○結婚式を評す等實行日本一。	四六、上製 370頁	2.50 .22
戀愛價値論	理學博士 石原純著	○戀愛價値論○戀愛と道德○愛の一つの相としての戀愛の本質○戀愛と生活○現代女性の步むべき道	四六、上製 282頁	1.60 .18
雷鳥の目醒むる前	賀川豊彦著	本著は人間愛、男女愛を氏の嚴格なる立場から解說された有益な著書で、青年男女は勿論凡て人間として生きんとする人々の必讀すべきもの。	四六、上製 402頁	2.30 .20
近代女性の表現	北澤秀一著	モダーン・ガールの表現、洋裝と肉體美、婦人解放の意義、婦人問題の現實性、モダーン・ガールの特徵、ラ・ギャロネーズ、其他十項、何れも近代女性の必讀すべき文字	四六、上製 284頁	1.70 .18
大衆時代の解剖 ——文明の沒落 3——	室伏高信著	（第一、二章）大衆時代の解剖。（第三章）帝國主義の文明批評。（第四章）人口の論理。（第五、六章）この人間を見よ。（第七章）經濟技術的批判の批判。	四六、並製 326頁	1.00 .16
萬葉漫筆	文學博士 佐々木信綱著	萬葉研究の權威たる著者が、鑑賞研究等に關する、古典籍の話、學者の話、興味中心の物語等を集めた頗稀なる書。	四六、上製 380頁	2.00 .20
硯友社と紅葉	江見水蔭著	紅葉を中心に硯友社をつくりし當代文士の風中逸話の回顧談。盡きざる興趣を含める明治文壇史。	四六、上製 274頁	1.50 .18
空中征服	賀川豊彦著	滑稽諷刺、寓話に筆をかりて社會改造の理想を語る奇書、行文の妙、排輪の奇、痛快にして一讀途を解き、再讀何等かの思念を彼に强く與ふるものがある。	四六、並製 254頁	1.00 .20
先立ちて來るもの	ロマン・ローラン著 大澤章譯	深遠なる思想と熱意ある筆致を以て世界の思想界で牛耳たる位置を占むるローランの「先驅者」の翻譯。	四六、上製 296頁	1.50 .16
現代文藝評論	正宗白鳥著	冷徹白眼假借することなく先づ漱石、紅葉、露伴、泡鳴、二葉亭より現代流行中堅作家まで犀利に剔抉し併せて演劇の話題を述べる一代の名評論なり。	（近刊）	
綠の觸角	北原白秋著	童謠とは何か自由詩とは何ぞ。著者は豐富なる實例を引用して此の問題に解答を與へ、育くまれゆく幼きもの、生命を如何に愛護するかを考へてある。	四六、上製 429頁	2.50 .22

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
文藝と法律	勝本正晃著	東西古今の文藝上の作品を、法學者としての著者が法律見地から縱横に讀め、批評した興味深き書。最後に出版法に關する問題を、著作權出版權等の解決を論ず。文學者出版關係者必讀の書。	四六、上 498頁	2.80 .22
十年	志賀直哉 里見弴 佐藤春夫 [illegible] 編	武者氏が人道主義的社會觀の立場から日向に新しき村を創めて十年、是は氏が苦闘御苦十年の勞を謝ふべく文・歌・詩・賞・境七十名家が其最近の秀作を寄せしれし文藝史上空前の一大パノラマだ。	菊、上 600頁	3.00 .36

現代日本文學全集

「現代日本文學全集」既刊集

第一回 尾崎紅葉集
第二回 樋口一葉、北村透谷集
第三回 谷崎潤一郎集
第四回 島崎藤村集
第五回 國木田獨歩集
第六回 菊池寛集
第七回 夏目漱石集
第八回 有島武郎、有島生馬集
第九回 里見弴、佐藤春夫集
第十回 永井荷風集
第十一回 德富蘆花集
第十二回 武者小路實篤集
第十三回 幸田露伴集
第十四回 森鷗外集
第十五回 芥川龍之介集
第十六回 少年文學集
第十七回 近松秋江、久米正雄集
第十八回 正岡子規集
第十九回 歷史家庭小說集
第二十回 志賀直哉集
第廿一回 石川啄木集
第廿二回 泉鏡花集
第廿三回 二葉亭四迷集
第廿四回 德田秋聲集
第廿五回 高山樗牛集
第廿六回 戰爭文學集
第廿七回 正宗白鳥集
第廿八回 柳浪、眉山、綠雨集
第廿九回 現代日本詩及漢詩集
第三十回 吉田絃二郎、藤森成吉集
第卅一回 　集
第卅二回 　集
第卅三回 　集
第卅四回 　集

全五十卷 各冊 特製 一圓四十錢 並製 一圓

(6) 小說

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
壽々	志賀直哉著	○小僧の神樣○正義派の護作の逍恨○母の死と新らしい母○城ノ崎にて○網走○和解等の十數名篇	四六、上 412頁	2.50 .22
雨蛙	志賀直哉著	○雨蛙○冬の往來○濠端の住ひ○國舊○轉生○鳥○斷片○子供三題○廿代一面○或る男其姉の死等	四六、上 412頁	2.30 .22
沙羅の花	芥川龍之介著	○羅生門○奉教人の死○きりしとほろ上人傳○或日の大石内藏之助○南京の基督○秋山圖等	四六、上 478頁	2.80 .22
改版 直輔の夢	里見弴著	○廿酒○直輔の夢等最近氏の代表作を集む。名人の名作といふ感じが橫溢す。	四六、上 274頁	1.50 .20
第三の隱者の運命	武者小路實篤著	武者小路氏の創作中尤も力の這入つた傑作と稱せらるべきものだ。そして尤も考へさせられる大作。	四六、上 390頁	1.90 .20
東京へ	藤森成吉著	○東京へ○無心○少年の群○歿走者○若き修道者○山閣等社會意識を明にせる逸品	四六、上 370頁	2.30 .20

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
惱み笑ふ	藤森成吉著	北見○ある體操教師の死○親心○古賦二篇○路上○地主○京都の秋○野人○某子の無緣○祭の夜○幼年	四六、上 300頁	1.30 .16
故鄉	藤森成吉著	○羅文傳○島○御殿醫○とぼける子供達○祖母○お國の手紙○お絵○群犬○祇園○三等寢○外五篇	四六、上 282頁	1.50 .18
脂粉の顏	藤村千代著	○人間の意企○追憶の父○東京と云ふところ○巷の雛○脂粉の顏等新人の力作を集む	四六、上 359頁	2.30 .22
海神丸其他	野上彌生子著	鋭い觀察と洗練されたる感覺をもつて描かれた著者會心の力作「海神丸」「多神子」「所有」等を收む。	四六、上 210頁	1.30 .20
佗しすぎる	佐藤春夫著	美文家として名聲高き著者の名作、傷々しき戀の記錄詞は花の如く想は星の如し藝術味豐なる作品	四六、上 276頁	1.60 .18
窓展く	佐藤春夫著	魔笑録マリ○窓展く○時計のいたづら○鷺○アダムルツクスが讀書○哀れ○稲○秋立つ○FOU	四六、上 346頁	2.00 .20
結婚禮讃	武林無想庵著	現職の擴大は古今に絕し人間の性慾を赤裸々に取扱つたものゾラのナナ以上に問行く一讀書を惜ふ不能	四六、上 336頁	2.30 .20
文明病患者	武林無想庵著	○結婚禮讃○アナルキスタの夢○混沌○日記より○でめとりずす○巡女くりじす○文明病患者等	四六、上 408頁	2.30 .20
青銅の基督	長與善郎著	青銅の基督○陶風直次郎○トスカの○一夜C○島崎著者の陥ち著いた風格がどの作にも窺はれて珠玉篇	四六、上 330頁	2.00 .20
工場	細井和喜藏著	悲慘な資本家無智なる女工哀史の犧牲すべき奴隷生活は著者の體驗と觀察より如實に描出す	四六、並 427頁	2.00 .20
奴隷	細井和喜藏著	經濟的封建たる主人公が農村に生れ工場に追込まるゝ迄の生活を描き「工場」の前篇をなすもの	四六、並 464頁	2.00 .20
無限の鐘	細井和喜藏著	○無限の鐘○或る關域○死と生と一緒○親○混沌呪文○殺明恐怖の頃○愛のテロリスト○外數篇	四六、並 420頁	2.00 .18
農夫喜兵衛の死	中西伊之助著	小農喜兵衛の伜は滿洲で戰死し、娘は賣られて朝鮮に行き、彼は地主に虐られて水に溺れた、現代社會の縮圖	四六、上 208頁	1.70 .18
哀しき父	葛西善藏著	○不良兒○仲間○西○本家の話○療○惡夢○父の出○靴○湖畔そのほか○子人風呂○M氏の失策等	四六、並 344頁	1.00 .18
縁談	里見弴著	○縁談○教育の影響○伊賀ずだれ○不良○ホードキャン○大阪の喪面○うで玉子○夢みたいな話○其他	四六、上 438頁	2.30 .22
二人の獨り者	近松秋江著	戀愛を描くに獨特の名聲を有せる氏が最長篇力作、男ばかりの生活は寂しいが又別種の趣がある。	四六、上 312頁	3.00 .18

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
一つの時代	犬養健著	○閑かな父○細君の智恵○弱い生徒○多の出來事○姉妹と幼馴配達○二人兄弟○騒夜	四六、上 365頁	2.50 .22
則天武后	[illegible]原[illegible]子著	題材を支那に採りて權力と愛とにまつはる女性の心理を深刻に描寫するもの文壇未曾有の高き藝術品	四六、上 248頁	1.00 .18

死線を越えて

◇全三巻◇

全民衆の一度は味讀すべき勞働記録の聖書、世界各國に飜譯され熱烈な讚賞を獲得しつゝある世界的名著!!

我國第一の賣行きを示せる賀川氏の自傳的小說・刊行以來版を重ぬること數百回この事實は何を語るか!

(上巻)死線を越えて
(中巻)太陽を射るもの
(下巻)壁の聲聽く時

各冊 價壹圓 送料二十錢

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
啓吉物語	菊池寛著	文壇の雄菊池氏の自傳とも出世作とも見るべき短篇集 若き氏が如何に才氣に富み力強きかを語る絶好書	四六、上 469頁	1.00 .18
第二の接吻	菊池寛著	富、地位、名聲、戀愛の卍巴と渦く中を、溺れ、泳ぎ、踏抜き、躍る、現代男女の苦悶と歡喜の活寫圖。	四六、上 398頁	2.00 .20
奔流	三宅やす子著	因襲の奴隷たりし節子も最後に眞の愛を把握するには凡てを棄てゝ顧みなかつた女性の強さを示す作	四六、上 454頁	2.80 .20
或兵卒の記録	細田民樹著	○入營の日○最初の唄○多忙な初年兵○傭兵譚○ひとつの飯盒○眼○馬頭の廏舍○愛馬獨木○外五篇	四六、上 468頁	2.50 .20
番町夜講	泉鏡花著	○取かくしの畫○夫人利生記○雛宅話○きん稍○光籃○道標○犬のいたづら○梅の實○雨ふり○外二篇	四六、上 330頁	2.00 .20
新選谷崎潤一郎集	谷崎潤一郎著	○神童○嘯○麒麟○刺青○秘密○あくび○前科者○異端者の悲しみ○人面疽等外數十篇	四六、上 1110頁	5.50 内.27
癡人の愛	谷崎潤一郎著	マゾヒズム代表作として世界的のもの。また作中の主人公ナオミの名はナオミズムといふ新時代語をさへ生じて各方面に問題となつた程だ。最近創作壇に珍しきたるを失はない名作である。	四六、上 398頁	2.00 .22
鮫人	谷崎潤一郎著	林真珠の奇しき運命と彼女を繞りて演ぜらるる痴態劇是是現代の縮圖。	四六、上 314頁	2.00 .20
赤い屋根	谷崎潤一郎著	露西先生○馬の糞○赤い屋根○友田と松永の話○二月堂の夕○瀧の人々○金を借りに來た男○外二篇	四六、上 396頁	2.00 .22
運命の秋	吉田絃二郎著	○西郷吉之助○春日○人間を愛しむ○霧の中○故郷の町○花蔭の下	四六、上 396頁	2.00 .20
父	吉田絃二郎著	○父○カフスとカラー○石岡老人○蛉○凡人の一生○秋まゆく○大谷瀧夢	四六、上 315頁	1.90 .20
ダビデと子たち	吉田絃二郎著	ダビデと子たち○叔父夫婦○救はれぬ人間○高原○燕○著者獨特の澄んだ境地から人間の苦惱の姿を如實に描いた名篇のみだ。浮々と胸に迫る著者の情意を聽け	四六、上 388頁	1.80 .20
芭蕉	吉田絃二郎著	○芭蕉○赤壁○或る中學教師○二老人と僧○生れ來る者を愛む。就中芭蕉は好評高し。	四六、上 248頁	1.00 .18
一人歩む	吉田絃二郎著	○草の上○夜鶴○師さん○老妻○愛執の日○少年○闇○教誨○闇の中○寥の野邊○門	四六、上 404頁	1.80 .[illegible]
秋の一夜	廣津和郎著	三年○大旅行き○獵犬○狗が捉れてゐる○舊友○秋の一夜○邂逅○三人の患者○彼心○小柄な女○事務	四六、上 294頁	1.60 .18
網の上の少女	片岡鐵兵著	○崩潰前○網の上の少女○早鐘○慈村○雲とアルプの球○階調者○甘い物語○ある結末○直角○悲しい男○身を内める○我儘を言はない仲○冷酷○今日と明日○○外五篇	四六、上 432頁	2.00 .18
山科の記憶	志賀直哉著	○矢島柳堂○プラトニツクラヴ○弟の歸京○山形○黒犬○過去○山科の記憶○痴情○瑣事○晩秋○[illegible]	四六、上 221頁	1.50 .18
旅人	吉田絃二郎著	○漂泊の人○雪○霜夜○或る男と女○草の裏○支那陸路○夢の旅○某の花○匂の味と蝕○信濃路にて○夜空○野尻湖畔から○日暮れ頃○いろ／＼の旅○都會○外九篇	四六、上 374頁	1.80 .20
恐ろしき私	中河與一著	○天の門○乳○恐しき私○讃めの布○希望○黄○つつましき親言○祖母○或時代の心持○秋風の宿○孫逸仙の友○壁がたき○モナコとレナ○内身の談	四六、上 280頁	1.80 .18
木靴	久米正雄著	○無知○天花○一つの寫眞○勝房○墜落を待つ○姉子○懇參○山渓の早百合○馬袴○定評○此方が詫びる○清水二等卒と純○盛喪餘○樺近○萬年大學生○マギー	四六、上 368頁	2.00 .22

葛西善藏全集

本全集を讀むもの誰か藝道の至難を嘆ぜぬであらう。また、人生の陰慘と苦悶とに打たれないであらうか!

第一巻 第二巻 第三巻 小說集
第四巻 隨筆集
第五巻 書簡集

全五巻 各冊 貳圓五拾錢 送料各廿四錢
豫約出版に非らず 第一、二、三、四巻 既刊

書名	著者	内容	判型・頁	定價・送料
大道無門	里見弴著	○白鷺紅○徵候○酔○影法師○隠家○謡曲○白夜○隣人○反射○區日○一番鶏○背信	四六、上 410頁	2.00 .22
無限抱擁	瀧井孝作著	新設文壇中の第一人者。ドッシリした風格もて巴が抱懷しに愛護しつつある著者作中の場篇。作中病妻を抱擁する主人公の氣持は醇潤なる現代人に如何な感銘を與ふるか。	四六、上 351頁	2.00 .22
母と子	武者小路實篤著	正義と愛の世界に親の慈愛限りなく理想家庭を中心に母性愛の廣大さを示現する母子、殺身にたつて愛惜する教子、友情を完うする中尾等を點じ、構想雄大なる最近の傑作。	四六、上 558頁	2.00 .22
海村	有島生馬著	○その海村○小さい死○網の上と下○日暮○帽らしい話○海の奥さん○怪我○霧の中○白豆の花○父の墓詣○帰花○盲女の著主○砂上の老人○溺れる砂○外四篇	入二巻 本函上下	2.50 .20

書名	著者	内容	判型・頁数	定價・送料
[illegible]	田中貢太郎著	[illegible]○[illegible]○[illegible]○[illegible]○外十五篇	四六、上 3[illegible]頁	1.80 .20
小說六つ	野上彌生子著	○一つの[illegible]○[illegible]の中[illegible]○[illegible]る男の[illegible]○[illegible]る女の[illegible]○[illegible]子○[illegible]の[illegible]	四六、上	2.70 .22
死線を越えて（上巻）	賀川豊彦著	[illegible]第一の[illegible]行をも示せる有名なる賀川氏の自叙傳的小說。此三巻は世界各國に翻譯された高名の書籍	四六、上 551頁	3.00 .26
死線を越えて（中巻）太陽を射るもの	賀川豊彦著	氏の貧民[illegible]化[illegible]教化がいかに[illegible]であることは[illegible]の全民衆の[illegible]する所。[illegible]の書籍。	四六、上 494頁	2.80 .22
死線を越えて（下巻）壁の聲をきく時	賀川豊彦著	賀川[illegible]に氏が[illegible]の如く[illegible]せるさまは本書を讀むものの[illegible]でも[illegible]なしでは讀み得ぬところである。	四六、上 510頁	3.00 .24
勝利を前にして	島田清次郎著	大作「地上」を物して一躍天才の名をかち得た著者の大傑作。青春の[illegible]すが如き情熱とその[illegible]味のある人生觀。それらが大交響樂となつて我々と人胸に迫る力作。	四六、上	2.40 .22
革命前後	島田清次郎著	「大化革新」の[illegible]に潜む[illegible]足と[illegible]との[illegible]的[illegible]を題材とし、革命のさなかに芽生へる愛情をこまやかに織り出して若き人々の心胸に一つのかゞり火を数する氏の傑作	四六、上	1.80 .20
緑土に芽ぐむもの	中西伊之助著	朝鮮といへば我國だ、朝鮮人と云へば我々の同胞だ、その水山、そのいぢらしい人情、その[illegible]の苦しみ、などの何事にも[illegible]しい、血の流れゐる[illegible]な小說を見よ。	四六、上 505頁	3.00 .22
汝等の背後より	中西伊之助著	妖[illegible]花の如き女革命家を取巻いて若き社會革命家が[illegible]に狂ふ[illegible]、[illegible]、[illegible]の[illegible]を肉太い筆に載せて讀者を[illegible]へ[illegible]へと引張つて行く。	四六、上 410頁	2.30 .20
逃避行	尾崎士郎著	人間の[illegible]的[illegible]と否定的[illegible]とが[illegible]して[illegible]る[illegible]たる[illegible]の上に浮かびあがるある一つの時代を描いた自傳的小說。	四六、上 296頁	2.20 .22
懐疑者の群	尾崎士郎著	若き社會主義者の内面生活、その首領等の裏面史、そして若き日の[illegible]み多き[illegible]を如實に描寫す。[illegible]本書は[illegible]の[illegible]である。	四六、上 280頁	1.60 .20
盲魚	真山青果著	○南小泉村○あの家とこの家○[illegible]の兄弟○[illegible]上○不[illegible]女の一生○[illegible]○[illegible]○[illegible]○男五人○[illegible]の花○外四篇	四六、上 350頁	1.80 .20
伸子	中條百合子著	「伸子」ものを一纏めにし、著者の[illegible]な[illegible]にあつた生活を[illegible]するもの、夫と[illegible]との[illegible]の[illegible]の[illegible]なた、人間[illegible]の[illegible]を[illegible]に、[illegible]と時代の[illegible]を[illegible]した長篇。	四六、上 570頁	2.50 .24
南京の皿	佐々木茂索著	[illegible]に[illegible]○[illegible]の[illegible]で○古い[illegible]○[illegible]○ふるさとびと○[illegible]日立つ○兄との[illegible]係○[illegible]を死○父子一[illegible]○父の[illegible]もはく○竹[illegible]へて○ある[illegible]○外五篇	四六、上 380頁	2.30 .20
白い紋帳	中條百合子著	[illegible]な風景○白い紋帳○[illegible]○[illegible]○一太と[illegible]○[illegible]の二階○帆○一本の花	四六、上 [illegible]頁	近刊
橇	黒島傳治著	[illegible]○[illegible]の一生○[illegible]○[illegible]○[illegible]○[illegible]○外十一篇	四六、並 [illegible]頁	1.00 .18

大衆文藝

書名	著者	内容	判型・頁数	定價・送料
世紀の[illegible]	山[illegible]著	[illegible]の[illegible]と[illegible]の[illegible]…[illegible]一[illegible]	四六、並 2[illegible]頁	1.30 .18
[illegible]ぎ行く日	[illegible]著	○[illegible]ゆく日○[illegible]○二人の[illegible]人○子を[illegible]に○[illegible]た小鳥○[illegible]の[illegible]へ○[illegible]のまゝに	四六、上 [illegible]頁	1.80 .20
海に生くる人々	葉山嘉樹著	海に[illegible]ける[illegible]を如實に描く。プロ作家に[illegible]ありて[illegible]なしと言ふ人は此作を讀みて後ちよ！	四六、並 310頁	1.30 .18
春は馬車に乗つて	横光利一著	○春は馬車に乗つて○[illegible]はどこにでもある○ナポレオンと田蟲○[illegible]○街の底○[illegible]へる[illegible]○外五篇	四六、上 320頁	1.80 .20
昭和新集	[illegible]花著	（小說）[illegible]本の[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]の天女、ピストルの使ひ方[illegible]、[illegible]、[illegible]（小説）[illegible]、芥川龍之介氏を[illegible]ふ、[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]の事、[illegible]を[illegible]る、[illegible]水[illegible]、[illegible]じより	四六、上 715頁	（近刊）
もだん・てかめろん	谷[illegible]次著	○デュ・デボア夫人の出[illegible]○[illegible]な[illegible]○大[illegible]とB・V・D○[illegible]○[illegible]と[illegible]人○魔法の[illegible]○[illegible]い[illegible]○[illegible]の手○妖[illegible]と[illegible]○[illegible]のない人々の[illegible]	四六判 374頁	1.20 .20
テキサス無宿	谷[illegible]次著	○ヤング東郷○[illegible]ンナと[illegible]○[illegible]ロウヂ・ワレントン○[illegible]○[illegible]○AMMA○テキサス無宿○めりけん・じやつぷ商賣往來六篇○他十七篇	四六判 500頁	1.50 .24
怪談全集（現代篇）	田中貢太郎著	○あかんぼの首○女の首○[illegible]○[illegible]○大犬記○[illegible]○[illegible]○[illegible]○青い[illegible]○[illegible]木[illegible]の中○白いシャツの[illegible]○外四十四篇	四六判 541頁	1.50 .18
怪談全集（歴史篇）	田中貢太郎著	○[illegible]○[illegible]○[illegible]○白い花赤い[illegible]○[illegible]○六人の[illegible]○[illegible]○外五十九篇	四六判 658頁	1.50 .18
奇談全集（現代篇・歴史篇）	田中貢太郎著	さきに怪談全集を著して異常なセンセーションを惹き起した著者が更に新たに[illegible]を各時代各方面から廣く取材して[illegible]ある[illegible]に[illegible]せて[illegible]り出した[illegible]しき物語の大集成だ	近刊	各冊 1.50 .18
劍俠受難	國枝史郎著	數多の命を犠牲にした[illegible]は果して[illegible]の所在を[illegible]り得るか[illegible]…三[illegible]なる性格を持ちつゝ血を分けた[illegible]…物語は讀者を[illegible]に[illegible]す。	四六、並 280頁	1.00 .18
赤穗浪士 ◇全三巻◇	大佛次郎著	正しく新しき忠臣藏により全民衆の義士觀一變す！見よ!! 此の澎湃たる民衆の壓倒的支持を！ 「眞實の武士道」の教科書として其實行出版界を風靡す!!		各冊 壹圓五十錢 送料[illegible]
どろつき船（上巻・下巻）	大佛次郎著	上巻…………上巻定價壹圓八十錢 下巻（海の[illegible]）…………近刊		
南京六月祭	犬養健著	「一つの時代」—以後六年の間にものしたる第二の創作集——[illegible]を[illegible]げ[illegible]きに[illegible]かんとする時流に抗し[illegible]と藝術本道を行く著者の精進の跡は一讀[illegible]を[illegible]はずにはおかない。		（近刊）

新選名作集

◇◇本書は「現代日本文學全集」の姉妹出版であつて、同全集に編入せざりし名作を悉く網羅す。「現代日本文學全集」と併讀すれば、僅か一圓で我國巨匠の大全集を讀むことが出來る譯である!!◇◇

▽既刊集△

新選谷崎潤一郎集　新選菊池寛集　新選前田河廣一郎集　新選永井荷風集　新選武者小路實篤集　新選藤森成吉集　新選葉山嘉樹集　新選小山内薫集　新選北原白秋集（詩歌篇）　新選北原白秋集（散文篇）　新選久保田万太郎集　新選宇野浩二集　新選近松秋江集　新選吉田絃二郎集　新選森鷗外集

新選横光利一集　新選岡本綺堂集　新選山本有三集　新選長田幹彦集　新選前田河廣一郎集（續篇）　新選久米正雄集　新選里見弴集　新選佐藤春夫集　新選夏目漱石集　新選室生犀星集　新選與謝野晶子集　新選德田秋聲集　新選相馬泰三集　新選片岡鐵兵集　新選西條八十集　以下續々刊行

四六判・八ポイント二段組・各册壹圓・送料二十錢

(7) 戯曲

書名	著者	内容	體裁	定價・送料
愛慾	武者小路實篤著	戯曲「愛慾」は最近の文壇で確固たる定評とセンセーションを惹き起した名戯曲だ。不具である貧しい美術家と夫を愛さぬその妻との葛藤。狂ほしい愛慾の火柱だ。他の一篇「父と娘」も亦名著である。	四六、上 279頁	1.60 .18
ある心の影	正宗白鳥著	○ある心の影○人生の幸福○影法師○秘密○白壁の五篇。「人生の幸福」は氏の大力作	四六、上 286頁	1.60 .18
安土の春	正宗白鳥著	○安土の春○夢假の最後○ある文學者の心○柿の木○老醜	四六、上 197頁	1.30 .16
歡迎されぬ男	正宗白鳥著	○歡迎されぬ男○光秀と紹巴○わしが死んでも○さまざまな不安○臨死者の夢	四六、上 262頁	1.50 .18
嬰兒殺し	山本有三著	戯曲家としての山本有三氏はあまりに有名である。本書に收むるもの著者が傑作中最も定評ある津村教授○嬰兒殺し○生命の冠○女親○坂崎出羽守の力作五篇。	四六、上 508頁	2.00 .20
戀愛病患者	菊池寛著	○[illegible]子○[illegible]の首縊○ある抵抗○後家來○奴評○[illegible]○戀愛病患者○[illegible]上人○[illegible]	四六、上 276頁	1.30 .18
愛憎	長田秀雄著	著者は中堅劇作家として定評ある人。收容せる石山開城記○父の罪症の二篇はこの定評を裏づける代表作だ	四六、上 206頁	1.60 .18
愛すればこそ	谷崎潤一郎著	○愛すればこそ○永遠の偶像○彼女の夫○或る調書の一節等藝術品として我國第一の實行を示す。	四六、上 282頁	1.60 .18
愛なき人々	谷崎潤一郎著	著者のみが有つ奇調な、そしてエロチツクな情緒の世界が本書に收められてある。「本牧夜話」に「お國と五平」に「白狐の湯」に「愛なき人々」に鮮かな色調によつて描かれてある。	四六、上 344頁	2.00 .20
森有禮	小山内薫著	演出家としての故小山内氏の名は餘りに有名だ。戯曲家としての氏は本書に收められた森有禮○吉利支丹信長○ある敵討○奈落○鐘の諸作によつて確固たる地位を示す。	四六、上 200頁	1.30 .18
麺麭屋文六の思案	岸田國士著	懸愛恐怖病○第一幕○驟雨○麺麭屋文六の思案○ゼンマイ飢れ	四六、上 216頁	1.50 .18
江戸ッ子の死	岡本綺堂著	○康頼京歸○長崎の兄弟○虚無僧○江戸子の死○新宿夜話○寺の門前	四六、上 332頁	1.80 .20
何が彼女をそうさせたか?	藤森成吉著	何が彼女をそうさせたか?○犬脚○仇討物語の三篇を收む。就中「何が彼女をそうさせたか?」は戯曲家としての確固たる地位を氏に與えた最近劇壇の傑作である	四六、上 252頁	1.20 .18
縮刷 愛すればこそ 愛なき人々	谷崎潤一郎著	○愛すればこそ○永遠の偶像○彼女の夫○或る調書の一節○本牧物語○お國と五平○白狐の湯○愛なき人々	四六、並 288頁	1.00 .16
生きて行く	廣津和郎著	○生きて行く○勝者敗者○父の心配○海晴小景○男の心・女の心	四六、上 224頁	1.50 .18
鼠小僧次郎吉 桃中軒雲右衛門	眞山青果著	眞山青果氏の戯曲における盛名は人も知る。收むる「鼠小僧次郎吉」「桃中軒雲右衛門」の二篇は好評嘖々たりし名篇。	四六、上 326頁	1.80 .20
橋・おらんだ人形	池谷信三郎著	○三月廿二日○獨り○首○踊りを持つ人々○踊つて來た唄○おらんだ人形○街に哭ふ○まいとん○賞品の中偏○忠僕○この蟹人○橋	四六、並 416頁	1.80 .18
西郷と大久保	山本有三著	名戯曲家山本有三氏が近來の力作「嘉門と七郎右衛門」「父親」「大磯がよひ」「雪」「西郷と大久保」の六篇を收む	四六、上 200頁	1.50 .18
錢屋五兵衛父子	中村吉藏著	○錢屋五兵衛○日蓮和尚○小山田庄左衛門の三篇を收む。何れも氏の代表作品のみである。	四六、上 250頁	1.50 .18
幻の部屋	北村壽夫著	貧乏な美術家、資本家の娘、秘書役等を拉し來りて人生の各斷面を生々しく讀者の面前に投げ付けた傑作。	四六、上 270頁	1.60 .18

(8) 飜譯（小説・戯曲）

書名	著者	内容	體裁	定價・送料
血と砂	イバニエス著 鈴木厚譯	西班牙の闘牛士の生活を描く。闘牛がいかに社交界に於て、そしてその生活のいかに華かなるかを見よ。	四六、上 538頁	2.00 .20

書名	著譯者	内容	判型・頁數	定價・送料
獣人	エミル・ゾラ著 三上於菟吉譯	失戀に狂ふ女、見ゆる女をたらす色魔を描いて情慾の匂に充ちた戰慄すべき作ゾラの作中傑作なるもの。	四六、上 頁	3.00 .22
鬼火の踊り	ジ・サンド著 田沼利男譯	靈氣香る佛國の田園を背景として村乙女と若き農夫の清新純朴なる戀を描く佛國文壇の一大傑作。	四六、上 244頁	1.80 .18
此世は如何にして終るか	フラマリオン著 高瀬毅譯	精細なる科學的立場より世の終末を鮮明に描出せる特殊の文學、譯文亦毫の遺憾なく原文の趣を傳ふ。	四六、上 364頁	2.00 .20
みつけもの	ビルドラック著 鈴木榮子譯	新しい感じ方で世界を感じてゐると稱讃さるゝ著者が種々の事物の中に人生の眞實を「みつけ」たる小品。	四六、上 224頁	1.50 .18
一週間	リベディンスキー著 池谷信三郎譯	建設途上にある現代露國の各階級各典型の男女を拉し來りて彼等の苦惱と葛藤とを如實に描出せる名篇。	四六、上 324頁	1.80 .18
運命のチュード	トマス・ハーディ著 内多精一譯	結婚と靈肉闘爭社會組織の欠陷と現代の學風信仰に對する皮肉を深刻に描けるプロ文學の代表小説。	四六、上 708頁	3.20 .24
バッアラ	ルネ・マラン著 高瀬毅譯	著者は亞弗利加國人でこの「バツアラ」は一九二一年度のゴンクール賞を得ただけルネ・マランの代表作として世界的に知られてゐる。その燃ゆる如き熱情と哲人的鋭い觀察眼によつて黑人の惱める姿とその苦惱を描いた傑作だ。	四六、上 256頁	1.50 .15
義人ジミー	ア・シンクレア著 前田河廣一郎譯	米大陸と歐洲大戰亂を背景にして純朴なジミー君が如何に其の殉情を發揮するか？ プロ作品中の白眉。	四六、上 450頁	2.00 .20
寡婦マルタ	オルゼシュコ著 衛見陸郎譯	悲慘なる一寡婦の生活を通じて現代社會組織の缺陷、ブルジョアの心理、男性の横暴、譯筆流麗、創作を讀むの思あり。此一篇に描き盡さるるあらゆる女性に熱讀を勸む。	四六、並 224頁	1.00 .16
クリッペン事件	フ・ヤンソン著 村上常太郎譯	世界を聳動せしめし稀有の犯罪事件―美しきベル・エルモアの消失、彼女の夫クリッペンとルネイブ孃との戀愛逃亡、穴倉に發見されし内臓片等々、凡てこれ永久の謎。	四六、上 316頁	2.00 .20
空氣饅頭	ベ・ロマショフ著 昇曙夢譯	新經濟政策直後の好景氣時代を背景に、各種ネップマン、共産黨員、新婦人女性を無數に拉し來て露國新社會の生活を描く「空氣饅頭」と、露國兒童劇中の傑作「一剎風」の二名篇を收む。	六四、上 180頁	1.20 .18
ボストン	ア・シンクレア著 前田河廣一郎譯	サッコ・ヴァンセッチ事件をプロレタリア・リアリズムの立場から取扱つた大作。アメリカ文明の裏面を暴露して遺憾なし。譯文はシンクレアものに於て何人の追隨をもゆるさざるの名譯。	（近刊）	
母	マ・ゴリキー著 長岡毅夫譯	本書は露國勞働者の生活を寫し、如何にして彼等は自分達の利益を擁護すべきかを自覺するに至る徑路を描き、強い母性愛の發露を織り交ぜた、涙と勇氣なしでは讀み得ぬ小説。	（近刊）	

（9）詩歌

書名	著譯者	内容	判型・頁數	定價・送料
歌集 屋上の土	古泉千樫著	著者現歌壇の目標により本書成る。生前屋上粹を輝へ挽著な期待を受けつゝ、推敲を重ね心血を注ぐ實に十五年、漸く世に出づ。明治四十一年以降十年間一千餘首を收錄。	四六、上 398頁	2.50 .24
勞農ロシア詩集	尾瀬敬止編譯	露國帝政時代から詩壇に重きをなしてゐるブロック、ベールイ、ブリューソフ、三人を始めカーメンスキー、エレンブルグ等革命後現はれた優れた詩人二十七人の代表的詩を蒐む。譯亦よく原詩の匂ひを傳ふ。	四六、上 290頁	2.00 .18
詩集 亂舞する焔	加藤一夫著	著者の燃ゆるが如き、熱情と闘志の火塊だ。我むるもの〇亂舞する焔〇愛の成長〇苦しき道づれ〇愛の復活の四大長詩。	菊半、上 308頁	2.00 .18

世界大衆文學全集

時代も文學も大衆へ！

◇藝術的に不朽の世界大衆文學全集です。
◇世界中で一番面白く、そして一ばん多く讀まれた作品の全集です。
◇日本人を世界的に知識づけ、日本人の未來を明るくする全集です。
◇一度讀みはじめたが最後おわりまでやめられない全集です

日本的より世界的へ！

全三十六巻
一冊 五十錢
全揃 十七圓五十錢
送料一冊八錢
刊行中

（10）隨筆・紀行

書名	著譯者	内容	判型・頁數	定價・送料
庭を造る人	室生犀星著	〇庭〇陶器に就いて〇佛道〇魚眠洞雜記〇小說四種〇花と茶〇人物評論〇魚鳥昆蟲〇小品集〇發句〇少年時代の文章〇映畫小感〇附錄	四六、上 340頁	2.00 .22
北郊雜記	帝大教授 阿部次郎著	〇北郊雜記（十三項）〇[illegible]記（二十五項）〇雜纂（十一項）等氏の日常における學究的態度の反映だ。一つとして光りを有たぬものはない。	菊半、上 502頁	1.80 .18
超克	倉田百三著	〇善と惡との一致に就いて〇人間主義と超克主義〇卑しむべきものに就いて〇心なき業に就いて等。	四六、上 392頁	2.20 .20
星より星への通路	賀川豐彦著	〇星より星への通路〇ディオニソスの誕生〇混沌の甕より。	四六、上 378頁	2.00 .20
樹木とその葉	若山牧水著	氏の洒脱な旅行記、感想、歌道感、人生感、自然感を集めた面白く讀へらるる一書。	四六、上 367頁	2.00 .22
南蠻更紗	文學博士 新村出著	〇南蠻のサンタマリヤ〇吉利支丹文學斷片〇[illegible]の西洋本〇切支丹宗の遺物〇外三十二項	四六、上 400頁	2.50 .30
先驅者の言葉	野口米次郎著	〇言言〇英雄崇拜の提唱〇無用の長物〇美感の興路〇單純性〇世界心〇近代生活〇隅田川外十一項	四六、上 320頁	1.80 .16
生る人間の評論	野口米次郎著	〇母性禮讃〇巨大な結果〇米國人〇メレデスへ行け〇詩に於ける想像の力〇外數篇	四六、上 218頁	2.00 .18
溪仙八十一話	富田溪仙著 下店靜市編	〇浮世繪師〇洒話〇紙屋川の追憶〇觀音〇詩〇花を殘さし〇夢〇芝居の繪看板〇茶の話外七十餘項	菊上、342頁	3.00 .26
言葉・言葉・言葉	岸田國士著	近代的感覺の持主たる著者の隨感隨錄二十八篇を蒐めたものである。全篇悉く珠玉の如し。	四六、上 250頁	1.90 .18

書名	著者	内容	體裁	定價・送料
幽秘記	文學博士 幸田露伴著	○運命○幽夢○師師○樊敷暴殘○水殿雲廊○共命鳥○一枝花○泥人○玉主○碧梧紅蕉○狂詩變魂外數章	菊、上 346頁	2.50 .24
龍姿蛇姿	文學博士 幸田露伴著	○觀畫談○夢樹記○不見神山○將棊雜起○情恨雜子○怪傑誕生○暴風裏花	四六、上 328頁	2.50 .20
鶴軒遊戯	醫學博士 土肥慶藏著	○奥村良筑考○奇傑岡崎屋○郷里の先哲○郷里の亡友○我が實家○小松宮殿下○追懐○訳詩○附錄	四六、上 460頁	3.00 .26
からたちの實	藤原義江著	○父さん○第一と第二○蘭州の歌○作曲家組合○アメリカ漫談○南歐漫談○ウヰンブルドンにて○車中○メリー○出發前半時間○二上り三下り○唄日記○其他三篇	四六、上 256頁	1.80 .20
樂天囚人	堺利彦著	○序○一夜々零記○後の風鴨○白紙の壁○赤旗事件の同囚○貝だより○震災の獄中○判檢事の文化的進歩○豐多摩から巣鴨○獄中問答○入獄前後	四六、並 153頁	.50 .16
最後の日記	有島武郎著	山莊の夜に痛ましい最後を遂げてより六星霜。この日記は氏の死後陰底より發見された手記である。一讀故人の天際と純情とに打たれる。卷頭の寫眞五十二葉は事前二週間までの著者各時代の俤を偲ぶに遺憾ない。	四六、上 131頁	2.00 .20
當なし行脚	堺利彦著	○利根の水郷と醬油の町○秩父の山水と人間○ロシアの大使とアイヌの偉丈夫○伊勢を中心の男女と貧富○汽車と汽船の一等切棄○讀者御註文の木賃宿旅行	四六判 140頁	.50 .14
山行	槇有恒著	○山と戯る男○アルペンに於ける登山の發達○登高記○南側よりのアルペン○山村の人と四季等	菊、上 272頁	3.20 .22
オリンピアへの旅	野口源三郎著	○首途○太平洋上から○桑港より○プルマン車窓によつて○紐育の秋○大西洋日記等	四六、上 408頁	2.50 .20
印象と傾向	室伏高信著	(一)人の印象○ロオラン○ベルグソン外七人 (二)世界の傾向○アメリカ見聞○混亂の英國○外六項	四六、上 430頁	2.00 .20
支那游記	芥川龍之介著	詩情淹溜神韻縹緲な氏の筆は支那の人事風物の戯れるを離まし觸るを竭めて新鮮奇拔の如き爽快味あり。	四六、上 270頁	2.00 .22
雲水遍路	賀川豐彦著	太平洋の彼岸○大英帝國○氣候の國へ○斜に見た獨逸○瑞西の雪嶺○伊太利紀行○聖地巡禮○エヂプト	四六、上 526頁	3.00 .26
在歐通信	帝大教授 河合榮治郎著	英國勞働運動○倫敦生活○夏の英國○オクスフオルドの學園○大陸に立つ迄○獨逸學界の印象等。	四六、上 322頁	2.00 .18
侯爵の服	深尾須磨子著	詩の數六十五章○散など七篇二十章○翻譯十三篇等、深尾須磨子氏の佛蘭西歸りの鞄に收められたかずかず この中に秘められてゐる佛蘭西の詩情に手を胸に捜せ	四六、上 300頁	2.00 .20
天馬の脚	室生犀星著	○天上の梯子○月光的文獻○井泉揺籃○詩に就いて○文藝時評○映畫時評○和歌○發句○人物と印象○隆江堂雜記○審病と就評○映畫雜筆○日錄○自畫像	四六、上 488頁	2.50 .22
外遊心境	土岐善麿著	海外印象記としてこれ以上のものは無いだらう。著者の鋭かな詩情に映る新しい天地をふんだんにカメラに收め、溢れる歡喜と遣切れぬ哀愁を自由なエツセイに綴つて晴朗明快の心境を披瀝してゐる（寫眞數百挿入）	ノート版 頁	2.50 .24

現代代表自選歌集

第一次 森田恒友裝幀		
第一篇 朝の螢 齋藤茂吉著 1.50	第二篇 十年 島木赤彦著 1.50	第三篇 川のほとり 古泉千樫著 1.80
第四篇 松の芽 中村憲吉著 1.80	第五篇 海やまのあひだ 釋迢空著 1.80	第六篇 立春 木下利玄著 1.80

第二次 河野通勢裝幀		
第一篇 花樫 北原白秋著 1.80	第二篇 人間往來 與謝野晶子著 1.80	第三篇 槻の木 窪田空穗著 1.80
第四篇 原生林 前田夕暮著 1.80	第五篇 野原の郭公 若山牧水著 1.80	第六篇 空を仰ぐ 土岐哀果著 1.80

(11) 美術

書名	著者	内容	體裁	定價・送料
支那南北記	文學博士 木下杢太郎著	透徹したる美術眼と之を表現するに適しい才筆を駆せて支那及び朝鮮全土の古蹟名勝を行脚したる記錄	四六、上 586頁	3.00 .24
文人畫概論	文學博士 [illegible]一著	○文人畫の起源○文人畫の流派化○文人畫の原理○文人畫の精神○詩家の文人畫等	菊、上 84頁	2.00 .20
表現と背景	板垣鷹穗著	○ギリシャ思潮の推移と神像の變遷外四篇（附圖四十葉）	菊、上 198頁	3.80 .22
圖畫教育論	岸田劉生著	(一)圖畫教育私見 (二)我子への圖畫教育 (附錄)慶應義塾幼稚舍に於ける圖畫教育(附圖五十四)	菊、上 128頁	3.50 .22
太陽を慕ふ者	矢代幸雄著	○レオナルドに過ふ日○惱しき晝○緑色のレヨパン○本寺の覧彫○スペインの踊者○底の少女等	四六、上 214頁	1.50 .18

厨川白村全集

文藝鑑賞の最高指標！　近代戀愛觀の確立!!

一世を風靡せる文藝批評家、白村厨川辰夫の現代に遺せる足跡の如何に大なるかを思へ。本社は彼の全集を滿腔の熱意を以て現代の人士に贈る。來つて此の文藝指導の全集を繙け！

- 第一巻 文學論(上)
- 第二巻 文學論(下)
- 第三巻 文學評論
- 第四巻 文藝評論及印象記
- 第五巻 戀愛觀及雜纂
- 第六巻 英詩選釋

全六巻　一册 壹圓　一册 五圓八十錢　刊行中

隨筆叢書

第一篇	大・街・人間	一圓八十錢
第二篇	野外劇の一幕　堺利彦著	四六判 二五八頁 一圓五十錢
第三篇	嵐の前　中澤臨川著	四六判 二三四頁 一圓五十錢
第四篇	の庭	一圓七十錢
第五篇	蕃の向くまゝ　武者小路實篤著	四六判 二〇四頁 一圓四十錢
第六篇	二重生活　河東碧梧桐著	四六判 二二八頁 一圓二十錢

(12) 歴史及傳記

書名	著者	内容	判型・頁數	定價・送料
大正震火災誌	改造社編	其内容の豐富なる共記述の正確なる共寫眞の鮮明なる其他凡ゆる點に於て類書中の白眉と推賞定評あり	四六倍 上 861頁	15.00 内.45
ツタンカーメンの生涯と時代	ピ・ナハス著 高瀬毅譯	○埃及小史○埃及の村落○埃及の發掘○ツタンカーメンの王朝○ツタンカーメンの生涯外三章	四六、上 192頁	1.80 .11
近世名匠列傳	村松梢風著	○豐田長齋○島村俊明○狩野芳崖○木内喜八○橋本雅邦○竹内久一○森寛齋○旭玉山等	四六、上 356頁	2.50 .20
改版 レーニンとトロツキイ	山川均著	ニコライ・レーニン○レーニンの生涯と事業○レオン・トロツキイ○印象と批評	四六、上 308頁	1.50 .18
自叙傳	大杉榮著	○最初の思出○少年時代○不良少年○幼年學校時代○新生活○母の思ひ出○獄中生活○葉山事件	四六、上 344頁	2.00 .20
蒲生氏郷 平將門	幸田露伴著	露伴氏最近の名作二篇を錄す。文豪の見たる複雑と戰國の一英雄の面目躍如たるものあり	菊、上 262頁	2.00 .22
頼朝 爲朝	文學博士 幸田露伴著	露伴の筆たる名劍のメスの如し鬱の頼朝を見よ爲の朝を見よ縱横無盡讀者をして快感を叫ばしむ。	菊、上 258頁	2.00 .22
ジャン・ジョレス	細澤健著	○ジョレスの生涯及び思想○ジョレス(ロマン・ロラン)○ジョレス(ブリュール)	四六、上 239頁	1.50 .18
堺利彦傳	堺利彦著	堺氏の自傳は即ち我國社會主義發達史と言ふべし。氏の麗筆は自らを語るよりも寧ろ當時の社會を語る	四六、上 344頁	1.90 .20
ヘンリ・フォード	有川治助著	自動車王フォードの數奇な生ひ立ちより、其經營の詳細に至るまで、著者の麗筆によりて紙上に活躍す。最近此の書程各方面に大なる衝動を與へた本は少ない。	四六、並 326頁	1.80 .18
自傳	片山潜著	ソヴエト・ロシヤに於てレーニン、トロツキーと同等の待遇の下にある氏は我有史以來主義のため然も無産者の味方として世界的に活躍した最初の人。本書は其自傳だ。	四六、上	1.80 .18
アインスタイン評傳	モスコスキー著 高橋誠譯	偉大なる我がアインスタインの生立ち、綱羅を知ることは趣味あり實益あることだ。本書は正確にして評細趣致あるアインスタイン氏の評傳である。	四六、上 326頁	1.60 .18

書名	著者	内容	判型・頁數	定價・送料
天狗				
漱石の思ひ出	夏目鏡子述 松岡譲筆錄	偉大なる國民的作家として人、作品等つながら絶對的敬慕の的たる大漱石を亡き人が心憎とこめて赤裸に一す。是を國民興味の中心たるべき文學史上の劃期的一大快著。	四六、上 518頁	3.00 .18
ハーバート・フーヴァ	加藤三郎譯	本書は單なる傳記ではない。彼が如何に彼の職務を其他に活かして成功し、如何なる態度で難局を打破したかを讀者と共に暗示し豪かに語つたものだ。一國産業術の入門書でもある。	四六、並 425頁	1.00 .18
レーニン 彼の生涯と事業	レーニン夫人 ブハーリン 外二十名執筆 稲村順三譯	レーニンを最も知るのは、彼と共に苦闘せるものである。本書は、此意味に於いて、レーニンの最良の索引である。執筆せるものスターリン、ブハーリン等に二十三名。かれの面影を傳へて餘すところがない。	四六、上 305頁	1.30 .18
勝海舟	山路愛山著	海舟は幕末の偉人である。幕府外交財政上の手腕に一世にぬきんづる一面に哲人詩人の風格を備えてゐる。愛山氏獨特の史眼、流麗の筆、此偉人の面目を傳へて遺憾なし。	四六、上 205頁	1.50 .18

改造文庫

廉價叢書の豪華版

文學、科學、哲學、思想、藝術あらゆる分野に亘る代表的名著名作を東西より網羅す。

知識の大衆的解放!!

布裝上製 百頁拾錢

目録進呈

(13) 童話

書名	著者	内容	判型・頁數	定價・送料
ピノチオ	佐藤春夫著	豐富な奇想と上品な諧謔と適度の教訓と空想や感傷に陥らず而も子供の性情とぴつたりせる少年文學の上乘	四六、上 206頁	1.80 .18
蝗の大旅行	佐藤春夫著	最もよき夕○月光異聞○花と風○おもちやの蝙蝠○魔のもの○笛ふきと王との話○園鶴○外七篇	菊、上 286頁	3.50 .20
三つの寶	芥川龍之介著	芥川氏と小穴隆一氏との共著と云つてもいゝものだ。芥川氏の○白○蜘蛛の糸○魔術○杜子春○アグニの神○三つの寶の六篇に小穴氏の優美な挿畫がある。少年少女たちに是非讀ませたい、見せたいものである。	菊倍、上 162頁	5.00 内.30

運動叢書

第一篇	テニス	熊谷一彌著	四六判上製 三二八頁 二圓三十錢
第二篇	野球	三宅大輔著	四六判上製 三三六頁 二圓八十錢
第三篇	水泳	梅澤親光著	四六判上製 二六四頁 二圓
第四篇	山岳スキー	平井左門著	四六判上製 三一六頁 二圓五十錢
第五篇	ラグビー	香山蕃著	四六判上製 三一六頁 二圓五十錢
第六篇	スキーイング初歩	東京帝大スキー部編	四六判上製 二三二頁 一圓五十錢
第七篇	ボート	長谷川宗雄著	四六判上製 〇八頁 三圓五十錢

遊臺灣日記

蘇峰迂人

一　臺灣と予

明治二十七年の下半期頃かと覺ゆ。故松方海東公の名によりて、臺灣占領の意見書を、廣島大本營地に於て認めたるとを記憶す。明治二十八年の始めには、民友社から『臺灣』なる小冊子を刊行した。此の編纂には、塚越芳太郎君を煩はしたるかと記憶す。予と臺灣とは、決して沒交渉ではなかつた。然も今日まで親しく臺灣を見なかつたとは、何故乎。別に理由はない、唯だ其の機縁なかりし爲めのみ

＊　＊　＊　＊

臺灣には予の友もあれば、門人もある。特に予の知己であつた樺山伯に創り、兒玉、後藤兩伯に大成したる治績をも尋訪したい。而して南荒の山水、風土、人情、風俗、亦た我が遊心を唆るもの少くない。偶ま昭和四年一月、故ありて國民新聞社を去る。此に於て急に老妻と相携へて、臺灣行を企つ。是れ天賜の清閑を、最も有効に善用せんが爲めのみ。

＊　＊　＊　＊

二月五日、特急にて東京驛を發す。好天氣。横濱、沼津、靜岡、隨處友人の歩廊に我等を待つあり。靜岡からは『靜岡民友』の大石君同乘、名古屋にては橘瑞超君送りて岐阜に至りて相別る。京都、大阪にても期したる友人、期せざる友人と相見る。神戸三宮に下車すれば、乍ち進藤神戸新聞社長に拉せられて、常盤花壇に至る。濱田君及び夫人、國木田君、岡本君、何れも舊國民新聞社員也。特に濱田、國木田二君は、單に

社友と云ふばかりではない。

予等は橘君の携へ贈りたる鮨を喫し、更に汽車食堂の晩餐を喫し、今亦た常盤花壇にて御馳走を享く。算し來れば晩餐三回。されど驚く勿れ、三回食し來るも、此時の一回にも値らさるを。花壇では『オコゼ』のチリ、甚だ妙。『オコゼ』は魚類中、頗る醜容にして、最も美味、分けて當夕のは新鮮にて、覺えず幾皿を快喫した。

* * * *

海岸通りの西村に投宿した。入口には長谷場致堂の額がある。此處は昔ながらの汽船宿屋だ。此處には三四十年前の神戸がある。三宅驊七君夫婦、外孫女等、我等を待つ久し。乃ち包を披らき、土産物等を取り出した。

* * * *

此の如くして第一日を、極めて愉快に且つ幸福に送つた。

昭和四年二月六日午前七時、神戸海岸通り西村旅店に於て。

二　神戸から馬關

二月六日、發船までは四時間ばかりある、舞子邊まで快駛せんかと思うたが、間もなく來客にて思ひ止つた。其中にも播州の堀覺治君の如きは、遠方から故らに尋ね來り、予の顏を見るや、流涕殆んど言ふ能はず。予が現狀――國民新聞退去の件――に深く同情してのこと、予亦た黯然。

* * * *

西村旅館は、明治十九年の暮、父母を首として一家を舉げ、熊本から東上の際、立ち寄りたるところ。主人は六甲山下にありて、予に面會したしとのことにて、予は定めて前垂掛の老賈の商人ならんと思ひきや、夫婦何れも新式と云はんより、最新式の文士ならんとは。

* * * *

其の趣味は陶器、古書、ゴルフ。ゴルフは閉口だが、古書は予も聊か素好あり。予は御身は先人の稼ぎ溜めたる財産を、坐から譲り受けて、それを享樂する身分であらうと星をさせば、全く其通り、そこで社會奉仕の爲め、シンポジウムの會を、大正十四年以來開催しつゝあり。歸途には先生にも、御臨席を希ふとのことにて、予は會合は兎も角、書物だけは是非拜見願ひたしと約束した。主人は西村貫一、藏書標などに就ては、頗る

研究してゐると承る

＊　＊　＊　＊

十一時瑞穂丸に乗る。八千五百噸の新式船にて、氣持尤も佳し。一行は我等夫婦、仁藤生、臺灣新聞東京支局長德富廸君、及び予を送りて臺北に至る鹿子木彥三郎君。

＊　＊　＊　＊

送行には、阪神の同業者、(予は失業者なれども)親戚、其他予の愛讀者の方々にて、サロンは可なり賑ぎ合うた。而して船中にて意外にも、神田の書肆一誠堂主人を見出した。彼も臺北に赴くと云ふ。

＊　＊　＊　＊

午餐から晩餐の間は、連日の疲勞にて、殆んど一睡過した。但だ岩屋の瀬戸と、小豆島、五劍山邊の風光を、一寸賞した。然も甲板の上、風寒くして久しく立つ可らず。風流とは寒きものとは、今更ながら首肯せられぬ。

＊　＊　＊　＊

布衣宰相册餘春。休レ謂千言筆有レ神。
今日始知無職樂。乾坤落落一閑人。

此れは国民新聞引退声明書発表の日口占したるもの。船中偶ま東坡詩集を讀み、更に左の一首を得た。

文章豈敢擬二三蘇一。自笑平生心計粗。
一事較優前輩跡。雲飛水宿老二江湖一。

心計粗の三字は、正しく予の病處。されど東坡先生は、一生官職に繫がれたれども、予は一生野人として、大自由境に在り。憾む所は、大自在力—阿堵物—を少くのみ。

昭和四年二月七日午前六時　船漸く馬關海峽に入らんとす。

三　長府及び乃木神社

二月七日、曉起、船は既に馬關海峽に入る、海風面を吹いて寒し。門司に著港間もなく、人吉方面から井福君、別府から日名子君、やがて八十歳に垂んとする予の長姉山川老夫人は、熊本から近澤、大橋二君を伴ひ來る。九州日々の後藤是山君亦た來る。關門の新聞記者諸君は先づ在り焉。吾母の沒後長姉を見る猶ほ母のごとし。極めて簡單に、國民新聞引退の事情を語る。要は郷里の親族達を安心せしめんが爲め也。

＊　＊　＊　＊

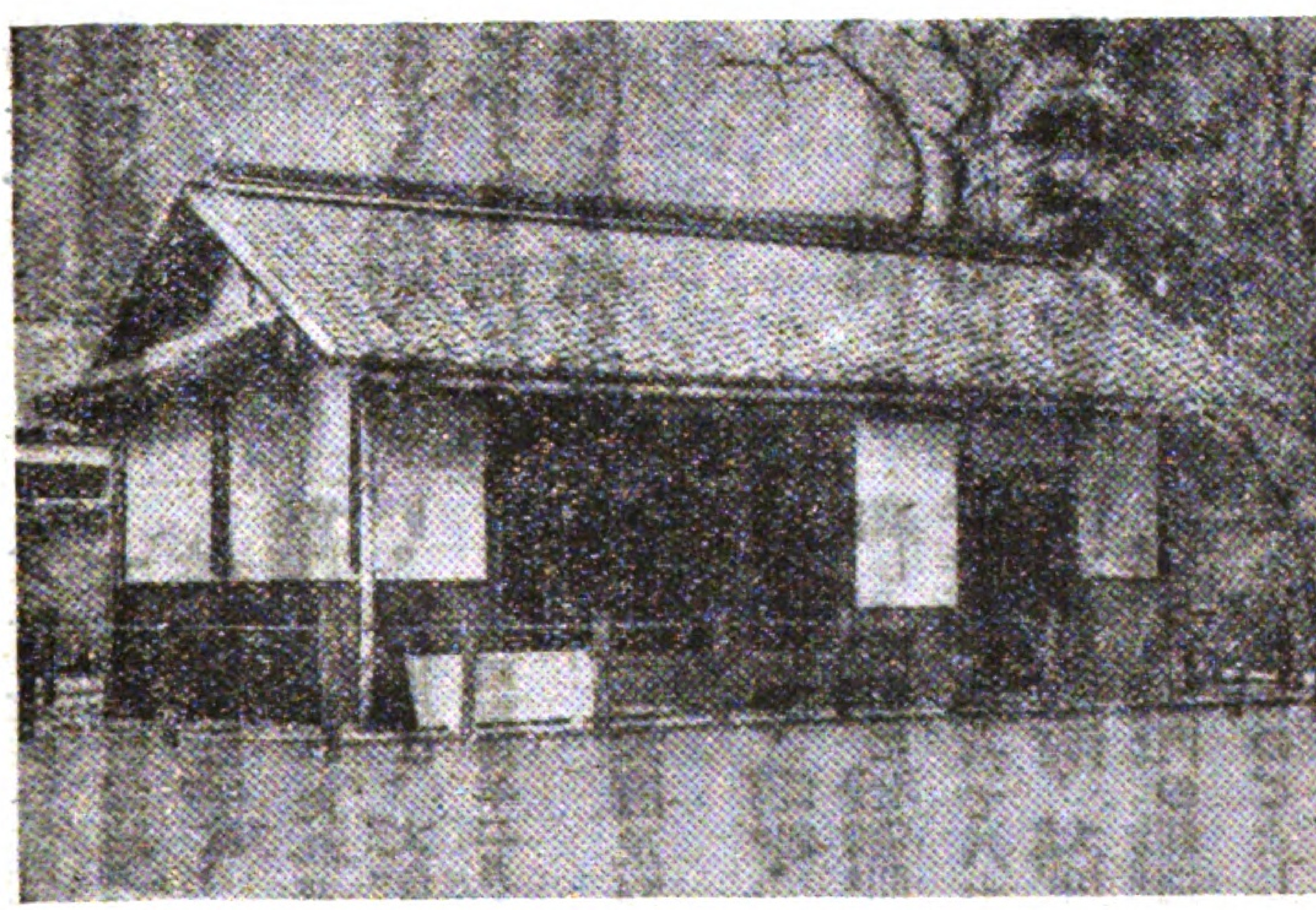
門司稅關長泉至剛君は、予の故人也。小蒸汽艇を艤して、來り迎ふ。乃ち我等及び來訪者諸君一同、之に乘じて馬關に抵り、自動車にて長府に赴く。馬關の街を出づるや、道は海峽に添ひ、對岸の豐山手に挹る可し。一路坦々、自動車快駛路として、寔に誂へ向きである。

＊　＊　＊　＊

泉君の語る所によれば、前日までは風勁く、雪さへ加はり、殊に寒かつたが、今日はまた打て變りたる好天氣だ。長府は前に灣を控へ、後に山を負ふ。干珠、滿珠の二小嶼は、指顧の間にあり。英雄生處山河好、此處が乃木將軍の故郷であると思へば、我をして更らに風光に流連せしむるを覺えしむ。

＊　＊　＊　＊

乃ち乃木神社に詣し、寶物庫を觀る、其の舊邸跡を訪ふ。豫言者故郷に容れずと云ふが、其の故郷に神社として祭られたる將軍は、何たる幸運兒であらう。而して將軍を此の如く祭る鄉人も、亦た何たる仕合者であらう。



乃木記念館

＊　＊　＊

地は二百二十三坪。柿や、梅や、亦た防風の爲め乃木十郎翁が、將軍の幼時に將軍をして、手栽せしめたる杉などあり。特に將軍が愛賞したる井戸端の老梅は、龍の如く蟠曲し、樹下の水仙は半ば奇葩を吐いてゐる。正に是れ宛然一幅の南畫。

＊　＊　＊

記念館は、舊邸其儘のものを模造し、唯だ少しく前に推し出したばかりだ。建坪は八坪二合五勺、六疊、三疊、及び土間一坪に過ぎず。庇の下に踏み臼あり、其上に見臺あるは、米を搗きつゝ、書見したるものと思はる。

＊　＊　＊　＊

萩に松陰神社あり、長府に乃木神社あり。何れも長へに長防二州の鎮たり。我等の注文は、此れより以上、餘りに人工を加へないことだ。莊嚴の美は、決して古人を偲ぶ所以ではあるまい。

＊　＊　＊　＊

我等は神功皇后に由緒ありと稱せられたる忌宮神社に謁し、社務所より渺々たる滄波を眺めて、當年の遠征を憶ひ、船に還れば福日の池田君、泉稅關長夫人、人見君未亡人、及び其の令孃など、何れも船に待ち受けつゝあり。最早發船の期に迫りたれば、我等は唯だ目と心とを以て、相ひ語るに過ぎなかつた。此の如くして我等は半日を最も愉快に過し、船はやがて海峽を過ぎて、六連島の外に出でた。

昭和四年二月七日午前五時半　瑞穂丸客室に於て。

四　瑞穂丸船中

二月八日、今日は全く安樂日也。但だ無線電信の爲めに、外界と交通斷絶の出來ぬが、是非もなき。

＊　＊　＊　＊

早起船室より、紅霞の海中から躍り上るを見る。赤た一丸。洋上點々、トロール船を見る。日本漁業者の勇敢と、銳進とは、隨處に立證せらる。世界中の魚介は、日本漁業者の取るに任す。予は船影を見送りて、遙かに漁運の萬歲を祝せざるを得ない。

＊　＊　＊　＊

昨日來屢ば臺北から講演と、宴會の申込がある。講演と、宴會と、揮毫とは、予の旅行の三禁物である。臺灣行に就ても、特に此事を理り置いた。然るに講演に就ては、一再ならず長文の電信が到來し、迷惑の至りだ。

＊　＊　＊　＊

予は凡夫である。四十年來の國民新聞を離れたる予の心中は、甚だ落莫である。到底此際講演などの氣分にはなれない。予が臺灣に遊ぶは、單に臺灣見學の爲めのみではない。寧ろ内地を離れ、後ろに心中の悩を撥せんが爲めだ。予は斯ることまで他人に語るを好まない。されど餘りに強請せられたから、已むを得ず、二三回ほど其の理由を陳べて、理つた。

＊　＊　＊　＊

序でながら一言する、予は臨時に講演するとを好まない。即座料理は、予の所好でない。少くとも數月前から準備して、予の最善を竭したいと思ふ。特に漫遊のついでに講演などは、最も禁物だ。講演のついでの漫遊は兎も角も。演者も精一杯に演じ、聽者も精一杯に聽く。此の如くして始めて講演の効能はある。

＊　＊　＊

船中の和食、洋食共に試みた。洋食は先づ上位であらう。ローズトビーフなどは、英國のそれを想起せしむる。近來食慾減退したが、船客となりて、聊か恢復したる心地がする。

＊　＊　＊

夜は三等船客娯樂室にて、餘興の催あり。何れも船員諸氏の演藝にて、予等も打出しまで見物した。中には玄人に迫る藝人もあつた。

＊　＊　＊

船中無事、予は既に携へ來れる、ベルロク著『ロベスピエル』を讀み、最早半を盡した。讀畢るのが惜いから、更らに『臺灣史と樺山大將』を讀んだ。樺山伯は、予が壯時、知遇を忝くしたる先輩の一人だ。之を讀んで伯の臺灣に於ける功勞の、實に世人想像の外であることを知る。

昭和四年二月初九午前七時　瑞穗丸船室中にて、只今漸く船が横振りに搖れて、船中らしき心地が生じた。

五　基隆より臺北

二月九日、昨日來船は聊か動搖する、横搖りだ。今朝は霧雨だ。船は四十度ばかりの傾斜をする。船中にては卓が倒れる、鞄が飛び出す、一寸船らしき光景。

＊　＊　＊

層雲接レ水水連レ空。萬斛樓船萬里風。
一片詩思無二著處一。漫漫蕩蕩水雲中。

同行の鹿子木君の爲めに、禁を破りて數紙を書す。動搖せる船中の揮毫は、汽車中でハガキを書くよりも、聊か厄介だ。

＊　＊　＊

船は豫定よりも一時間早く、零時半、基隆に入港した。官民諸君、故らに臺北から出で迎られ、其の名刺は兩握に滿ちた取り敢へず船のサルンにて挨拶する。亦た新聞通信記者諸君に

も會見する。各使の名一々記せず、但だ松岡臺灣新聞社長、佐藤臺北支局長など舊友と、此の船中にて相見たるは、殊に嬉しかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

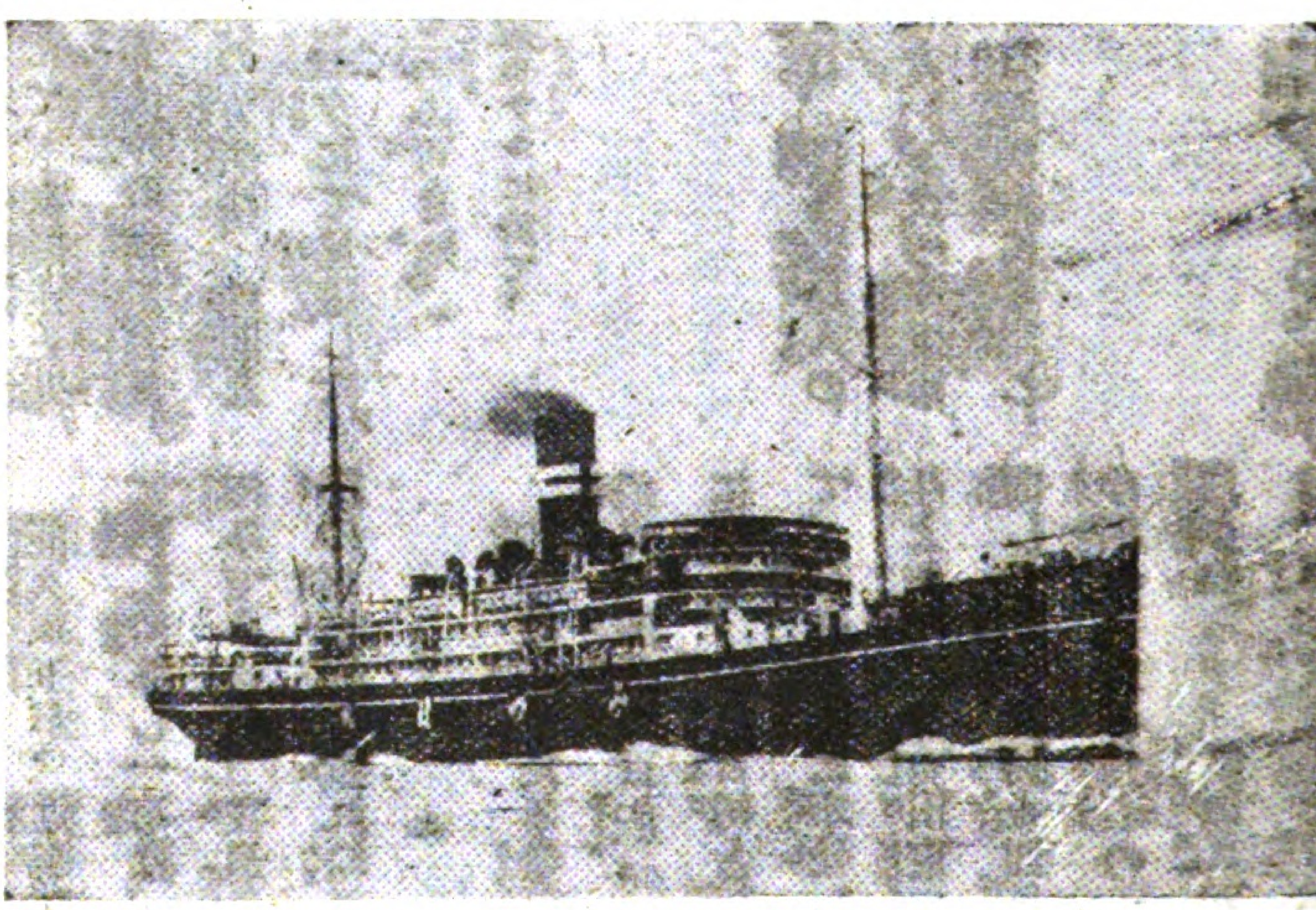
雨中の基隆、亦た風情あり。最近幾十日、東京に於て、殆んど雨に渇したる我等は、雨ほど有り難きものは無つた。

＊　＊　＊　＊　＊

我等は瑞穗丸に別を告げた。少壯時代に荷物船にて歐洲に赴きたる吾、ボロ船にて太平洋を横斷したる吾は、一萬噸に垂んとする瑞穗丸、客室から、料理まで申分なく、極めて居心地好き瑞穗丸に、三宿したるとを愉快とする。

＊　＊　＊　＊　＊

大阪商船會社樓上にて、暫らく官民の諸君と談話し、二時發の臨時汽車にて臺北に向ふ。此行門司より生蕃合社々長村田俊彦君と同船した。君は曾て東拓理事として、朝鮮以來の舊知である。基隆にて木瓜一籠を惠まれた。此れは船中から電報もて、産地から取り寄せられたるものと云ふ。



瑞穗丸（八五〇〇噸）

＊　＊　＊　＊　＊

沿道は宛も苗代時だ。氣候は內地の四月頃であらう。山も野も青青、蒼々である。水牛が田を耕してゐる。芭蕉が野に茂りてゐる。本島人の家屋が內地人の家屋と連りてゐる。斯くて臺北停車場にて、官民諸君の出迎を受け、臺北ホテルに落ち着いた。未見の地を踏むは、未見の書を讀むが如く、未見の人に接するが如く、格段の興味がある。

＊　＊　＊　＊　＊

午後六時から總督官邸にて、我等夫妻の爲めに、川村總督の名によりて、豐川長官代理より晩餐會が催された。豐田君及び夫人、丸茂交通總長、後藤高等法院

長、幣原大學總長、石黑文教局長、常吉專賣局長、平島秘書官及び夫人、高木電力社長、三好徳三郎君、川村臺日、松岡臺灣社長、及び臺灣新聞東京支局長徳富廸氏等にて、御馳走と共に、愉快なる談話に打ち興じ、更らに臺灣東海岸の活動寫眞を、田中文教局長の説明にて、觀覽した。此の方面は、時間なき爲め踏査を見合せたる地方にして、それを一夕にて見盡したるは、古人の臥遊にあらずして、眼遊とでも云ふ可き歟。

昭和四年二月十日午前五時十五分　臺北鐵道ホテルに於て。

六　臺灣神社

二月十日、今日は思ひ掛なき舊曆の正月元日、即ち本島人の新正である。天氣は陰欝だが、頼ひに降雨はない。先づ臺北市の見物と出掛けた。最初には申す迄もなく、臺灣神社に參詣した。

＊　＊　＊　＊

我が大和民族の特徴の一は、隨處に神社を建立することだ。而して此れは最も感服す可き特徴だ。臺灣神社は、實に上古國土經營に大功勳ある大國魂命、大己貴命、少彦名命、及び北白川宮能久親王の四神を奉祀する神社だ。

能久親王が、近衛師團長として、領臺の當初、身を以て軍務に殉し給ひし一事は、金枝玉葉の御自身に取りては、痛ましき極みであるが、我が皇族の爲め、我が國家の爲めには、千古不磨の好模範を垂れ給ひたる盛事である。

＊　＊　＊　＊

我等は坦々たる參社道路を駛り、基隆川に架したる明治橋を過ぐ。鐵橋三百呎、幅三十九呎、斯くて石磴を攀ぢて社務所に至り、山口宮司と相見る。宮司は親王御入臺の際より隨從して、今や神社に奉仕しつゝあり。宮司は意外にも、横井小楠先生より越前の吉田東篁翁に寄せられたる、書翰數通を示さる。而して其書は嘉永四年、先生が上國漫遊後のものにして、漫遊中面會したる知名の士に關する評論などもあり、一讀發明する所少からず。別に又た新島襄先生の書翰二通を見る。尚ほ宮司は、予が父洪水、予が叔父徳富一義に關する、横井、吉田兩先輩の書翰を藏すれば、取調べの上示す可しとのことであつた。途中にて停頓の處ありたれば、此より濟轎を受け、階を上りて、

玉串を捧げた。而して宮司の案内にて、域内の各宮殿下の御獻木を觀た。就中大正六年十月、久邇宮殿下が、御手植あらせられたる稚松が、今や亭々として天を拂はんとする氣勢を現しつつあるを。昭和三年の夏、殿下重ねて臨ませられて、御滿足にあらせられた旨、宮司の打ち語りたるを聞き。今更ら殿下の俄かなる薨去を悼み、坐ろに涙を催した。

＊　＊　＊　＊　＊

神社は臺北市の北、劍潭山の中腹に位し、東は基隆に連り、西北は觀音諸峰を望み、南は蕃山渺杳、俯して臺北の平野を瞰る、而して基隆川は帶の如く、其下を環る。眞に神々しき形勝の地である。

＊　＊　＊　＊　＊

予は成貴堂藏儲、勅版日本書紀の、特別複製一部を、刊行者一誠堂主人酒井宇吉の名を以て、神庫に納めた。希くは此書長へに社寶の一として存せよ。

七　臺北見物

神社を下り、社域を横ぎりて、劍潭寺を訪うた。此れは鄭氏時代の開基の由にて、觀世音菩薩の靈場だ。寺は劍潭山の南麓、基隆川の右岸にあり。當日は本島人の正月元旦なれば、何れも綺羅を飾り、滿艦飾の兒女雜沓し、香火の烟は喉を咽ばしめ、爆竹の音は、耳を聾せしむる。

＊　＊　＊　＊

此れから三橋町の墓地に赴き、明石總督墓前に、一瓣の香を獻げた。總督は大正八年十月、鄕里福岡に逝いた、而して遺言により、其の遺骸を此處に葬つた。栢蔭將軍は實に好男兒である。今日に於て斯人を懷ふの情、尤も深し。次には乃木大將母堂の墓、及び大將夫婦の遺髮碑を一拜した。

＊　＊　＊　＊

墓地には木犀の花が咲いてゐた、梔子花もあつた。又たけばけばしき海老茶色の佛桑花も咲いてゐた。躑躅花も若干見かけた。

＊　＊　＊　＊

此れから建功神社に詣した。此れは臺灣に於ける靖國神社だ。其の建築は、和漢洋折衷とでも申す可きか、如何にも鵺然だ。然も其の神殿に色硝子を嵌めたるなど、何となく天主堂の

氣味がある。白蟻豫防の爲め、故らに木材を避けて、コンクリートを用ひたと云ふ。されど神社の建物としては、如何にも不似合である。

・　・　・　・

予は植物の知識なし、されど植物園は、最も好む場所の一だ。亞熱帶、熱帶の諸植物に接し、如何にも愉快であつた、桄榔、各種の椰子、ごむ、相思樹、而して楊柳の花は、今や雪片の如く、『風起楊花愁殺人』の句の、如何にも眞境なるを想うた。我等は自動車の警笛に催促せられて、漸く植物園を出で、龍山寺に詣した。此處は艋舺方面にて、先づ淺草觀世音と同様、參詣の子女群集す。特に正月元旦のこととて、中々の混雜だ。とても劍潭寺の及ぶ所ではない。本尊は觀世音であるが、臺灣第一、若しくは唯一の彫刻家黄土水氏が、丹誠を抽んで彫刻したと云ふ釋迦御座す。開基は乾隆三年であるが、昭和三年十二月改築竣工したと云ふ。石柱から家根まで、彫刻盡しだ。

・　・　・　・

此處では香の外に、紙錢を燒き、其煙は濛々として、息もつまるばかりであつた。我等は鼓樓に上りて、周邊の光景を眺め、此處から臺北に於ける新聞通信者諸君の招宴の席なる、蓬萊閣に赴いた。

八　老新聞人の氣焔

蓬萊閣は臺北に於ける支那料理の魁である。比較的に清素である。予には同業者と相會するほど、愉快なることはない。我等新聞人は、互ひに一點の靈犀相通ず。本日は休日にて故らに席を設けたる由にて、支度も十分でないと主人の申譯があつたが、中々の御馳走であつた。

・　・　・　・

予も諸君の活氣に釣り込まれて、谷河臺日主筆の挨拶に、答辭として、大いに氣焔を吐いた。如何に吐いても老人の氣焔なれば、諸君も當てられた心配はあるまい。予は不老不死の靈藥は、唯だ新聞人たるにありと云うた。七度人間に生れても、新聞記者は止められないと云うた。惟ふに諸君も諒としたであらう。座間には臺北の本島美人も周旋した、老妻も彼女等と頻りに談話を交換した。其中には曾て青山南町に寓したと云ふ者も

あつた。

* * * * *

此れから大橋町に赴き、淡水河に架したる臺北橋を過ぎた。延長二百三十九間の鐵橋にして、工費百四十四萬圓、工程三年を經て、大正十四年六月開通式を擧げたと云ふ。同行の自由通信支局の安藤君は、山河を指點して、領臺當時土匪横行の事を說明した。

* * * *

斯くて博物館に至れば、予等を待ち設けたる尾崎秀眞君は、逐一案內し、逐一說明し、先づ石器、土器の類より、歷史的參考品、諸蕃族の土俗に關する資料等に就て、其の詳細なる意見を垂示した。

* * * *

有體に云へば、當日は早朝よりの見學にて、暮氣催ほるゝの際にて、十分に質問も出來なかつたが、然も尾崎君の所說には、予の蒙を啓く所、決して少くなかつた。

* * * *

更らに意外なるは、尾崎君が其の自室に導いて、壁間に予の父洪水翁手書の詩を掲げ示されたることであつた。此れは吾父が七十七歲の時、高崎正風大人に贈りたるものにて、如何にもなつかしかつた。予が父母は、高崎大人の彰善會の發起に、第一番に賛成し、其の會員となり、而して此詩は正に彰善會のことに關するものであつた。尾崎君は、高崎大人の依囑にて、當時彰善會雜誌の編輯者として、此詩を大人より轉贈せられたるものと云ふ。

此の如くして臺北の第一日は了つた。而してホテルに於て、晩餐の後、東京に於ける不信任案否決の報に接した。東京は定めて騷がしきことであらう。

昭和四年二月十一日午前六時半　臺北鐵道ホテルの一室に於て。

九　病友訪問、新店遊賞

二月十一日、臺北の此頃には、珍らしき好天氣。著臺以來、始めて日光を見て、此の紀元節を祝す。我等は起き出るや否や、先づ散歩に出掛けた。昨日は本島人の正月元旦、本日は帝國の建國祭日、市中の光景、何れも洽々としてゐる

* * * *

我等は舊友梶原保人君を、病床に見舞うた。君は大江義塾生の一人にて、嘗に『國民之友』の社中である。相見ざる二十餘年。舊を談ぜんとするも、君は久病沈衰。唯だ互ひに手を執りて、兩眼の涙珠相濺るを見るのみ。

* * * *

室内には新島先生の書、洪水翁の詩、及び予が新島先生の墓に謁したる詩を、明治三十二年頃書したるもの、及び健次郎弟の書牘を掲げてある。一として我が思出の種子たらざるものはない。

* * * *

それから西門市場を觀た。吾妻は野菜類の珍らしく、且つ廉價なるに驚いてゐた。予は拳より大なる老鼈が、活洲に泳いでゐるを見、且つ菓物の美なるを賞した。

* * * *

此れから南門を出で、一路新店に向うた。行程三里、センダン樹の並木を貫いて駛る。滿目の青山、田には苗代、畑には豆花や、菜花が滿開だ。淸渠の水は、溶々として流れ、輕風習々面を吹いて寒からず。紀元節のドライヴとしては、最好の天氣であり、最好の場所である。

* * * *

新店は、文山郡新店庄にあり。溪水は源を蕃地に發し、此處に至りて斷崖絶壁を繞廻して、碧潭をなす。先づ瀞八町の規模を小にしたるもの。我等は堤防の上を歩して、向岸の風色を幽賞し、其の沙洲に繋げる漁舟や、其の潭上に欹つた危岩や、其の岩上を掩ふ綠樹や、更らに其上に連る青山や、而して其の沙洲の邊にある楊柳やを眺め、此身亦た宛も南畫景中にある心地した。

* * * *

但だ正午には、我等の爲めに官民の歡迎會が催されたれば、愛を割いて歸途に就いた。

一〇　臺北圖書館

紀元節正午、鐵道ホテルに於て、臺北官民の歡迎會は、催された。頗る盛會であつた。當地の重なる方々は、何れも出席せられた。發起者の一人、田端臺北市尹は、會主側を代表して、歡迎の辭を陳られた。

＊　＊　＊　＊

予は何ぞ此際予の意見を聞きたしとの言に對し、答辭として、日本國史の研究を必須とする所以、及び日本國史の特色一二に就て、聊か語る所があつた。今ま配達し來れる『臺灣日々新報』を見れば、『臺北官民有志主催の歡迎會席上、德富蘇峰氏の獅子吼』と題し、其の筆記が掲げてある。

＊　＊　＊　＊

とても獅子吼と申す程には參らなかつたが、諸君の芳情に酬いる一片の微意を看取せられなば、此にて仕合である。

＊　＊　＊　＊

會散じて後、予等は圖書館に田中文教局長、幣原大學總長、其他の諸君と、山中館長の案内にて赴いた。館は元來彩票局の爲めに作りたる由にて、書籍館としては、不便且つ不相應である。建物としては中々立派だ。然も富籤の本家としてよりも、學問の府として使用せらるゝとは、館其物に取りては、昇格と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

館長は豫じめ予の注文に應じて、和漢洋各種の珍籍を、一室に陳列して、閲覧に供せられた。特に臺灣に關する地誌類の蒐集には、最も苦心せられたる由にて、内閣文庫やら、圖書寮やら、帝大、上野邊にも、それぞれ手を廻はし、且つ對岸の福建省からも收拾したらしく、假すに數年を以てせば、臺灣に對する文獻は、悉く此の館中に集むるを得るであらうと思はれた。

＊　＊　＊　＊

予自身に取りても、明治七年征臺に關する史料を、陳列せられたる書籍中に於て見出し、其の嘉惠を荷ふと少くなかつた。

＊　＊　＊　＊

最も面白き一は、乾隆時代臺灣土匪討伐の銅版圖幅であつた。此れは毎に乾隆御筆の題詩ありて、十二枚連續してゐる。此れは帝が佛蘭西巴里に托して、銅版にて彫刻せしめたるものにて、其類少からざるも、特に其の題目が『臺灣土匪討伐』にあるが爲めに、臺北圖書館の藏備としては、最も其所を得たりと云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

午後からは朝來の好天氣も、何となく曇り、雨もやがて降り

出したれば、他日を約して去つた。惟ふに臺灣總督府の富と、力とを以てすれば、今少しく書籍館を優遇しても、差支あるまいと思ふ。

昭和四年二月十二日午前七時半　臺北鐵道ホテルに於て。

一一　總督府及總督官邸

二月十二日、今日は先づ臺北見物デーとでも云ふ可き日だ。雨は止んだが、空は味噌汁の如く濁りてゐる。ジメジメした天氣だ、ベタベタした天氣だ。臺北の諸君は、寒くてたまらないと云ふが、東京からの客には、寒くないだけが取柄かと思はれた。

＊　＊　＊　＊

先づ中央研究所に至り、一通り見學す。素人には白蟻や、毒蛇の話が、尤も興に入つた。やがては



總督官邸前記念撮影

青蛇とか、百歩蛇とか、飯匙蛇とか、雨傘蛇とか、凡有る毒蛇の飼養所までも見た。流石の毒蛇も、即今は冬眠中にて、元氣が少かつた。

＊　＊　＊　＊

酒類研究の標本として、龍眼酒、紅酒、糖蜜酒などを饗せられた。予は唯だ其香を嗅いだだけであつたが、同行の諸子中には、きゝ酒にて、其顏を酡たらしめたる者もあつた。

＊　＊　＊　＊

此れから臺灣總督府を訪問した。此れは工費三百三十三萬餘圓、建坪二千百七坪、各階延坪一萬〇二百六十八坪、ルネスサンス式の堂々たる大建築である。予等は一百八十尺の中央高塔に上り、臺北全市を俯瞰した。

＊　＊　＊　＊

予等と前後して、生蕃の老若男女約二十名、警官に導かれて參殿に來た。此に於て東京からの熟蕃──申迄もなく蘇峰生一行──と臺灣の生蕃との會見が、總督府政廳の大廊下にて行はれた。男女何れも顏面に黥し、男子は額の中央に、垂直に一線を下し、婦人は其の上唇から兩頰にかけて、髭の如く、濃厚に描いてゐる。彼等の年少者中には、邦語を解するものもあつた。

* * *

此れから總督官邸の庭にて、豐田長官代理、石黑文教局長、平島秘書官其他と撮影した。それから上山盛庵翁が、釣絲をたれたと云ふ池を繞りて、樹色禽聲の間を逍遙した。庭上躑躅滿開、池水に映じて頗る趣があつた。

一二　臺北醫院

臺北醫院は、實に臺灣の誇りである。而して其中にある仁濟團は、臺北醫院の誇りである。予は東京に於て、後藤伯爵から此事を聽き、今ま實見して、其の寧ろ聽く所に勝るものあるを覺えた。

* * *

本院建築の價格、二百七十一萬餘圓、其の建坪五千五百三十三坪、延坪一萬二百三十九坪、其の敷地は實に二萬三千九百八坪を占む。少くとも外觀は壯大、內容は清潔、其の清潔は、東京の赤十字社に及ばざるも、やゝ跂行するに足る。

* * *

予等は倉岡院長、松田仁濟團主事等と、仁濟團の仕出しにかかる午餐の馳走に預り、一通り巡覽した。仁濟團は、臺北醫院に於ける患者の救護を目的とし、食物其他必需品の供給をなす。而して其の役員は醫院長が仁濟團長として、自餘の醫院の當務者が、何れも獻身的に其任に當つてゐる。

* * *

予等は料理所、洗濯所、看護婦室、書籍室、販賣店等を過ぎ、特に料理所の清潔なるに敬服した。由來病院の賄と云へば、不廉と不潔は、避く可らざる通患と見做されたるに、此の仁濟團は、全く之に反して、廉價と清潔との標本となつてゐる。但だ此れは法のみでなく、亦た其人によりて然るものがある。苟も其人にして一點の私心あらば、仁濟團も、不仁濟團

とならむ。

＊　＊　＊　＊

此れから臺北水道の水源地に赴く。此れは新店溪の右岸から取り入れてゐる。我等は菫花咲ける小徑を上りて、四阿屋の邊に至る。四望開豁、下に新店溪の碧流あり。案内の長谷川市助役は、先年獨逸大使が、流汗淋漓として、此處に上りたるを語つた。我等は仕合せに氣候がよかつたから、汗をかくまでには至らなかつた。

＊　＊　＊　＊

此れは人口十五萬を限度としたもので、即今臺北人口二十餘萬に上りたれば、別に水道計企あり、此れと相待つて給水し、併せて其の電力を利用して、新たに計企せられたる、臺北市街電鐵の動力に供する由。

＊　＊　＊　＊

此れから臺灣總督府中央研究所農業部を訪うた。所長大島金太郎博士は、予を見るや否や、自分は當初から國民新聞の愛讀者にして、隨處に國民新聞と相伴はざるなかつた。先生一たび去りて、實に落寞の感に堪へずと申された。

＊　＊　＊　＊

乃ち其の標本室を一巡し、博士と相伴うて、臺北大學に赴いた。

一三　臺北大學

臺北帝國大學は、今や草創中にて、生氣溢れてゐる。總長幣原坦博士は、予の舊知だ。予は明治三十九年五月、京城に於て、始て君と相見、夜中當時の朝鮮町に、君の寓所を訪ひ、犬に吠えつかれたとを記憶してゐる。當時君より『大韓疆域考』の一書を惠まれ、一通り朝鮮に關する地理的知識を得たるとを感謝してゐる。

＊　＊　＊　＊

座中には幣原總長、大島理農學部長（金太郎博士）藤田文教學部長（豊八博士）三澤高等學校長、山中總督府圖書館長などあり。特に青木司書官の肝煎にて、諸珍籍を縱覽せしめられたるは、快心の事であつた。

＊　＊　＊　＊

固より今日のところにては、圖書も十分ではないが、臺灣研

究の篤志者伊能嘉矩君の遺藏全部を、收容するを得たるは、大學に取りて、先づ何よりの祉である。伊能君の遺藏中には、新聞の切拔帖も少くなかつた。而して其中には予の國民新聞に掲げたる『日曜講壇』『東京だより』其他小品文の類、其の一少半を占めてゐた。此れは臺灣には直接關係なきことながら、伊能君の目に、何か留つたものがあつた爲めであらう。予は此の篤學者と遂ひに相見るの機會を逸し、今更ら遺憾の情に勝へない。

＊　＊　＊　＊

愛を割いて大學を辭し、專賣所に至り樟腦精製の現狀を一覽し、歸宿間もなく高木友枝翁の邸に、晩餐の馳走に赴いた。

＊　＊　＊　＊

來賓十餘、何れも臺北に於ける官民の一粒撰りの方々であつた。主人翁は、予に向て、若し臺灣に關して、御研究もあれば、餘りに難題ならざる限りは、此の座中の面々にて御返答に差支へる心配はありませぬから、御遠慮なく質問あれとの言であつたが、予は諸先生のお顏を拜見しては、最早胸が一杯になりて、とても質問などいたす勇氣がないと挨拶した。

＊　＊　＊　＊

されど談笑の間に、臺灣の昔から今に至るまでの逸事珍話など、それとはなしに承り、腹にも頭にも十二分の御馳走であつた。特に高木令夫人が、吾妻の爲めに、最新式獨逸製の料理器具などを示し、實物教育を惠まれたるは、望外の仕合であつた。

昭和四年二月十三日午前六時半　臺北鐵道ホテルにて。

一四　桃園より大溪

二月十三日、午前八時ホテルに於て、熊本縣人の歡迎朝餐會がある。朝餐の歡迎會などは、頗る振つてゐる。然も時間無きために、强ひて繰り合せた結果此の如し。雨と云ひ、朝と云ひ、兩ながら人寄りには禁物だが、然も會者百餘名、——鈴木君、江上君、値賀君、其他の舊知新知——實に盛會であつた。聞けば縣人の家族懇親會などには、千餘名も集ると云ふ。熊本縣人の臺灣に於ける、其數に於ては、第一位。予は戲に諸君に向て、若し臺灣に普通選擧制が布かる日には、當地を選擧區として、打て出んと云へば、諸君何れも其節は必らず御身を當

遷せしめんと相答へた。

● ● ● ●

予は同郷の諸君が、予の現狀に對し、多大の同情を垂れらるを見て、中心より感謝し、尚ほ今後に於て、今ま一番の奮闘を試みんとする決心を披瀝した。

● ● ● ●

午前九時二十三分臺北停車場より乘車、汽車窓から眺れば、一雨中の光景亦た佳、一時八分桃園着、此より自動車にて大溪に至る。大溪は從來大料崁と稱す。市街は大溪の溪流を帶び、斷崖削り成す高臺地の上に在り。此處は乾隆の初期に、福建人謝秀川なる者、開拓を始め、光緒十二年臺灣巡撫劉銘傳此地を卜して、北蕃統轄の資源地となしたる由にて、理蕃の上からは、要地の一であつた。爾來山地には製腦業開け、平地には米、茶等の製産增加し、今は大溪郡役所の所在地となりてゐる。

● ● ● ●

予等は此處にて自動車を下り、出迎の官民、及び學校生徒に挨拶し、小閑を偸んで、奈須未亡人に伴はれ、故奈須義質君の宅を見舞うた。奈須君は大江義塾社中の一人にて、『國民之友』創立の際、最初に民友社の庶務に從うたる者。志を立てゝ此地に往し、專ら植林を事とし、前年逝いた。未亡人の筐底を探りて取り出されたる遺物中には、洪水翁及び予の書簡、我等同人少壯時の寫眞などもあつた。其の書簡は明治三十七年四月附にて、『双鬢霜を帶ぶるも、尚ほ一點の雄心を存す』の句あり。回顧既に二十有六年、往時を憶うて悵然之を久うす。奈須君未亡人は、内田伯爵の令妹にして、若し奈須が居たならば、如何に喜ぶ可きにと、涙を揮うて語られた。」

一五　大溪より角板山

大溪から臺車に乘り換へた。賴ひに雨は止んだ。臺車は二人相並んで乘り、後から二人の苦力が、レールの上を推して行く。巧みに其の勾配を利用し、傾斜線に至れば苦力も後に乘りて、自然の惰力に一任す。途中本島人及び生蕃に出會す。其の男女老若を問はず、何れも跣足である。

＊ ＊ ＊ ＊

道は漸く萬山の中に向て入る。隨處に開墾が行き屆いてゐる。宛も内地の中國路を過ぐるが如く、『翠破山上幾朶雲』の

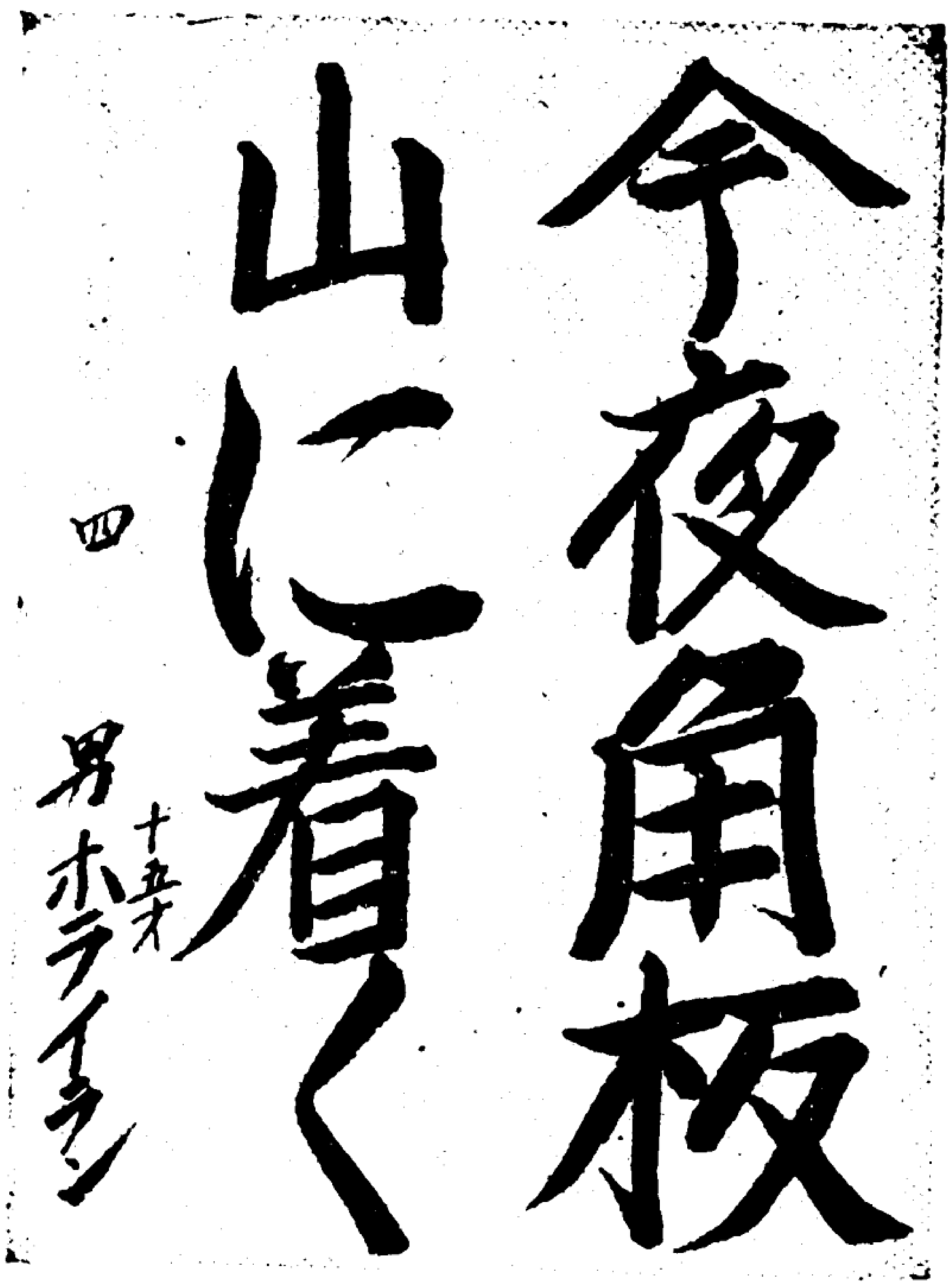
趣がある。平地には田や畑を作り、傾斜地には茶を栽ゑてゐる。殆んど寸分の餘地、隙地さへ無い樣だ。

＊　＊　＊

山中に入れば明治三十六年の造林にかゝる樟樹が、鬱蒼として天を掩うてゐる。更らに宮の臺に至れば、此處は秩父宮、久邇宮、朝香宮各殿下が、御休憩、御展望の跡とて、四阿屋がある。海拔一千四百十尺と云へば、左程の高地ではないが、展望には最も妙だ。但だ當日は白雲繚繞、翠巒出沒、宛も米點山水を見る心地して、其の髣髴を得たる耳。

＊　＊　＊

此れから八結に至れば、本島人の小部落あり、桃花、李花、繚亂として、紅白妍を爭ひつゝあり。此の附近は悉く三井合名會社の所有地にして、滿目茶園ならざるなし。其他樟樹、相思樹、臺灣松、銀夜合花樹などを雜栽す。而して苟も水利の便ある所、寸大の地も、悉く墾して田を作つてゐる。



蕃童揮跡

我等は流水東の三井舍宅にて、午餐の饗應に預つた。時間も二時を過ぎ、特に肥たる家鴨のスキ燒にて、覺えず滿腹した。而して田中君の案內にて、烏龍茶及び紅茶の製造所を一覽し、三時出發、四時には角板山の教育所に至り、當地の官民及び生徒に出迎られ、相ひ伴うて、教育所に至り、蕃人小學兒女の教習を一覽した。

＊　＊　＊

彼等は入り代り立ち換り、談話をした。其中には金太郎の話もあれば、馬や、鼠の話もあつた。日本建國神武天皇の話もあれば、海軍記念日の話もあつた。特に驚きたるは、ナイチンゲル孃の話であつた。如何に考へても、臺灣生蕃の子供から、クリミヤ戰爭に於けるナイチンゲル孃の話を聞かんとは、予自ら予の耳を疑ふ程であつた。其他暗算、習字、圖畫など、何れも見事の出來榮であつた。而して生蕃人にして醫學校を卒業したる、公醫渡井三郎君にも面接した。

一六　角板山の一夕

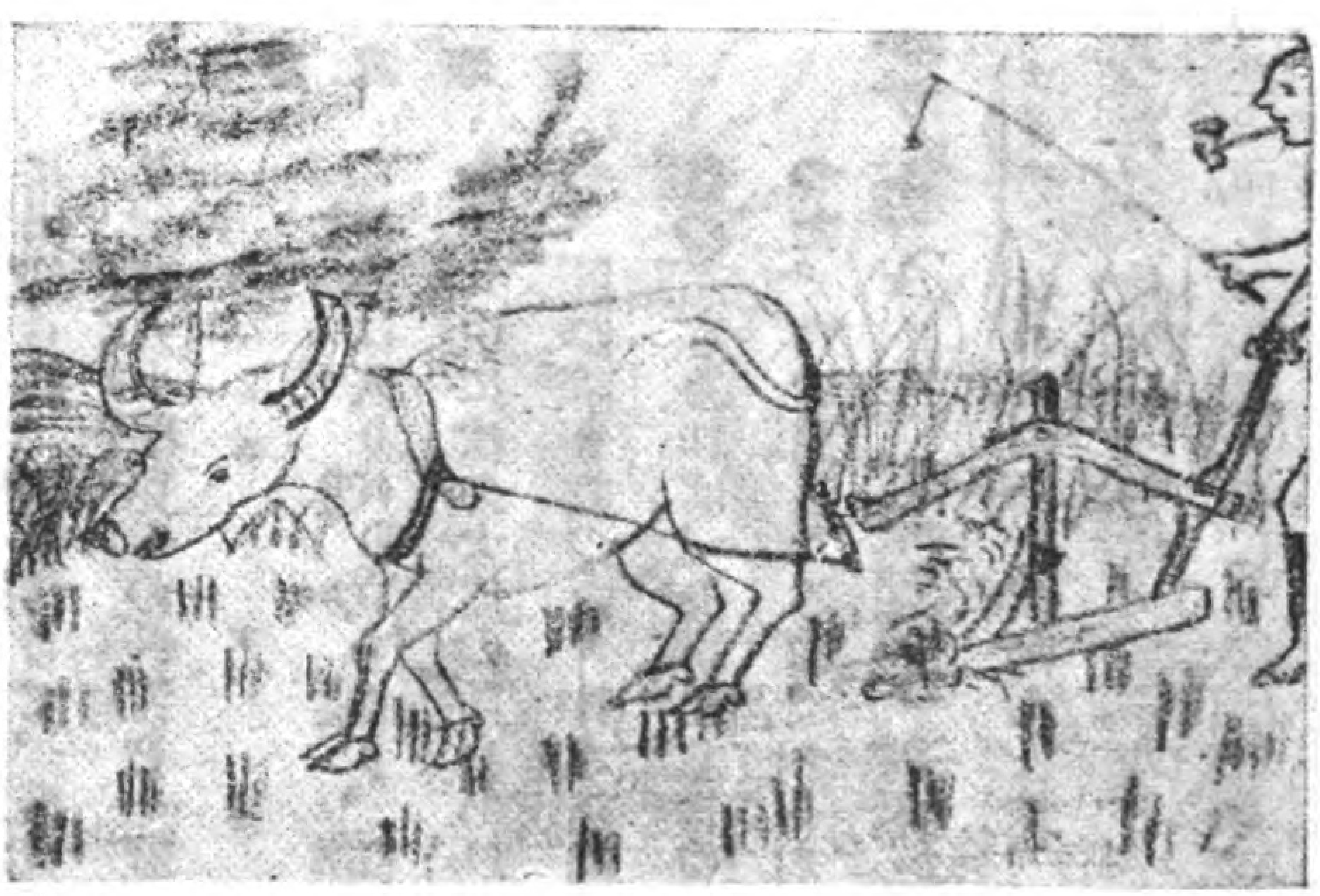
我等は此から物品交換所に赴き、生蕃の製作品を一覽し、更らに蕃社を見舞うた。其の家屋は最も簡易にして、所謂簡易生活の標本に幾し。倉は竹柱茅簷であるが、其床甚だ高く、何となく正倉院の御庫を聯想せしむ。此れは南洋一帶、何れも此の式である。

＊　＊　＊　＊

斯くて貴賓館の庭上から、枕頭山、烏嘴山、插天山などを指點し、淡水河の水源たる碧流を俯瞰し、近く蕃界を眺め、更らに秩父宮殿下の大正十四年御渡歐の砌、臺臨あらせられ、御手植遊ばされたる烏心石樹の成長しつゝあるを見、庭上に咲ける緋櫻を賞し、我等一行も貴賓館の一隅に、倦脚を伸ばした。時に午後五時前。桃園より此處に至る、實に九里十七町。正直の所、此の山地に、悠然と他力を假りて、此身を運び來りしこと、倦脚などと申す柄ではない。冥加恐る可し。

＊　＊　＊　＊

同夜は結城警部から、明治四十年以來、生蕃討伐の物語を聞いた。此の一事は、故佐久間總督の功、最も大なるものにして、當時總督が五年計畫もて、臺灣に於ける尺地寸土も、我が皇化に洽ねからしめんとの苦心は、今や漸く其の効果を擧げつつあり。然も世人動もすれば、之を忘却し、之を閑却す。而して總督を佐けて其事に從うたる諸氏の勞、亦た沒す可らざるものがある。



蕃童の描ける畫

＊　＊　＊

貴賓館は、佐久間總督が、大正天皇の皇太子殿下にて在せし際、臺臨を仰ぐ爲めに建設したるもの。然も明治天皇の御登遐

の爲め、其事止んだが、然も爾來各宮殿下の臺臨を辱くし、總督の志は空しからず成りぬ。尚ほ角板山教育所に於ては、當所駐在巡査本野演暢氏夫婦、最も獻身的に努力し、その効果著明と云ふ。

*　*　*　*　*

予は生蕃人の男女生徒が、何れも元氣旺盛、態度活潑なるを見て、頗る快愉を覺えた。其の唱歌なども、實に勇ましきものであつた。而して其の面目、亦た秀發愛す可きものもあつた。

*　*　*　*

夜來雨、今朝に至りて風さへ加はつた。歸途の困難想ふ可し。されど此位の困難は相當のことであらう。

昭和四年二月十四日午前六時十五分　角板山貴賓館の一隅に於て。此地は實に一千四百六十尺、甚だ高からざるも、奥地である。

一七　角板山より新竹

二月十四日、夜來の風雨、尚ほ餘勢を逞してゐる。角板山なる貴賓館の一隅に厄介となりたる我等は、起き出して、蕃界を眺むれば、四顧茫々、只だ白雲のみ。庭前の緋櫻も、風に打たれ、雨に敲かれ、宛も是れ楊妃啼後の風情だ。

*　*　*　*

午前八時雨を衝て下山す。何れも輕車の中にうづくまり、外から荒布にて包まれ、唯だ前面に五寸四方のセルロイドの小片を嵌めて、明りをとるまでだ。されど概して下り坂なれば、苦力どもは其勞少かつた。斯くて大溪街に著し、公會堂にて小憩した。公會堂は大溪に臨み、川原一望、烟樹蒼茫、頗る風光に饒む。奈須未亡人は、河原の漁梁を指點して、此れは其家に屬する鮎の梁であると語つた。憾らくは其の期節に外れたることを。

*　*　*　*

大溪にて我等を角板山に案内したる山本大溪郡守、其他の諸有志に別れ、桃園驛に抵り、十一時五十分上車、新竹に向うた。

*　*　*

大溪街から桃園驛までの道は、桃園埤圳に添うてゐる。此れは實に此の地方の高原約三萬二千甲の田畑灌漑用水を供給し

て、二期作田たらしめたる事業にて、大溪（舊名大嵙崁溪）の水を、其の上流石門から取入れ、溪の右岸に沿うて、延長十二里に亘り、隧道、暗渠、開渠を穿つて、用水を桃園附近に導き、その幹支線の給水延長六十五里に達す。其の經費一千四百萬圓、大正五年に着手し、同十四年に完成したと云ふ。

＊　＊　＊　＊

途中から新竹州技師田島彌市君相迎へ、沿道の風光に就て說明した。君は熊本の產、柑橘の博士にて、新竹州の椪柑が、今日の盛大を致したるは、專ら君の力によると聞く。予は君より椪柑、桶柑、雪柑等の講義を聞き、聊か得る所あつた。現在椪柑は、新竹州の新埔と、臺中州の員林とを、其の本場としてゐる。從來は自家用料として栽植したが、今や新竹州の如きも、重なる產物の一となつてゐる。

＊　＊　＊　＊

午後一時十六分、新竹驛着、直ちに臺灣神社の分靈を奉祀する新竹神社に詣し、玉串を捧げた。神社は停車場の南三十町、松嶺山の頂にあり。折柄雨は止んだが、風が強くして人を吹き倒さんとした。我等は北白川宮殿下の露營の遺跡や、新竹街にて御宿泊の家を此處に移建したる、爽吟閣に上り、當時御親營の模樣を、詳かに神官の說明にて聞き、轉じて通草會社に赴き、其の製造の順序を一覽し、州廳を訪ひ、永山知事より新竹州の物產等に就て、說明を受け、新竹公園を廻り、永山知事其他官民の見送の諸君に別れ、二時四十八分發臺中驛に向うた。

昭和四年二月十五日午前五時　臺中松岡君邸に於て。

一八　新竹より臺中

新竹から臺中に向ふ海岸線は、一望沙地にて、遠く海に連り、何となく小沙漠の趣がある。聞けば沙丘が風に從うて移轉し、動もすれば家を埋め、田畑を沒するの憂ありと云ふ。左もありなん。

＊　＊　＊

見渡す限り遠沙にて、退潮の際には滿目の干潟を現出す。予は海墾地の作業が、追ては行はる可きを豫想す。

＊　＊　＊　＊

沙原を變じて良地となすとは、和蘭人や、獨逸人には、決して珍らしからぬことだ。島田君の說明によれば、先づ沙地に茅

を植ゑ、其間に木麻黄樹を植うれば、茅は沙を止め、木麻黄樹は、數年ならずして林を爲す可しと云ふ。木麻黄樹とは其膚は樅の如く、其葉は木賊に似てゐる。樹として何等の雅趣もなけれども、沙地でも、瘠地でも、生存し、生長し、且つ能く根を張ると云ふ。聞けば靜岡縣には二百年の齢ある老樹ありと云へば、内地にも從來存したるものならむ。

＊　＊　＊　＊

尚ほ尾佐竹警察部長より、民情悪化の話を聞いた。君は尾佐竹博士の令弟にて、有志の士と見受けたから、予も腹藏なく、現代政治批判の一斑を告げた。

＊　＊　＊　＊

此より漸次海岸線は、瀰望無際の沃野の中を駛る。此邊何れも臺中米の産地であらう。今や蓬萊――日本米を臺灣化したる――種が、殆んど臺灣全島に廣がり、米質も頗る改良せられたりと云ふ。沿道の光景は、宛も吾郷の松橋から八代邊を行くの心地がする。此の平原も古は滄海であつたらしい。行く行くは更らに現在の干潟か又た平原となるであらう。

追分にて松岡君夫婦出迎へられ、一路臺中線に入る。臺中は海岸縱貫線には取り遺されたるが、臺中官民の熱心にて、特に追分から臺中に至る線路が出來、急行車は必らず臺中に立寄ることとなつたと云ふ。

＊　＊　＊　＊

臺中は四顧皆山、中央山脈と、海岸山脈との間にある、臺中平野の略ぼ中央に位し、面積一方里餘、如何にも落附きのある市である。之を小京都と稱するも、恐らくは過褒ではあるまい。

＊　＊　＊　＊

我等は官民の出迎諸君に挨拶し、直ちに松岡君の邸に入つた。邸は市外の杜の內にあり。何となく鎮守の森と云ふ趣きがある。予は主人公に向ひ、此家に入るには先づ柏手を打つて一拜せねばなるまいと、一笑した。

＊　＊　＊　＊

主人夫婦の待遇には、痛み入つた。我等は吾家に還つた心地で、安々と双脚を伸ばして眠つた。晩餐の馳走は、悉く主婦の采配にて、一同何れも滿腹した。特に生蕃家鴨のスキ焼など

は、別して珍味であつた。生蕃家鴨とは、鷄と家鴨との合の子とか云ふ。果して然る乎否乎、兎も角も珍味であつた。

　昭和四年二月十五日午前六時　臺中松岡君邸に於て。

途中既に田植が濟んだる場所もあつた。只今予の机上には、自然咲きの牡丹花一鉢ある。

一九　臺中見物

二月十五日は、臺中見物デーだ。早起松岡氏邸内を散歩す。何れも主人手栽の由なるが、我等の眼には極めて珍らしき木が天に參してゐる。就中在來の榕樹、恐らくは二百年も經たらんもの、一本の老幹より八方に枝葉を擴大し、獨り自ら林をなしてゐる。

＊　＊　＊　＊

朝餐後臺中神社に詣す、域内の池には、紅白の水蓮滿開す。工藝傳習所に赴き、臺中公園より水源地を經て、行啓記念館に於て、本島及び臺中の物產陳列所を觀、師範學校に赴き、大岩校長の案内にて、生徒諸氏に挨拶し、更らに大岩校長の請に應じ、禁を破りて、講堂の額を書した。大岩校長は、予が著『國民小訓』を科程書として使用しつゝあり。生面たれども、同志の士。附近は田植最中にて、白鷺や、五位鷺が、頻りに田の上を去來してゐる。

＊　＊　＊　＊

それから村田俊彦君の主宰する米實檢査所を過ぎ、帝國製糖會社に至りて、其の工場を視察した。此れは松岡君が發起したる會社にして、今や松方正熊君其の社長たり。それから州廳を訪ひ、生駒知事に面し、去りて市民館なる熊本縣人の歡迎會に出席した。

＊　＊　＊　＊

此地も熊本縣人は、優勢である。會者百餘名、予は平等觀、差別觀の調節宜しきを得たるを、中庸の道と云ふ所以を陳し。縣人會の必要なる所以を語つた。此れから臺南新聞社を見舞うた。此れは宮島球川君が筆政を掌りたるもの、故人を懷うて、低徊之を久うす。松岡社長以下社員諸君と社前に於て、撮影して相別れ、此れから刑務所を訪問し、松岡君邸に還り、主人の需に應じ、市民館の額面、其他若干揮毫した。是れ主人の好遇に對して、聊か酬ん爲めである。

・・・・

夜は生駒知事、小島市尹、坂本素魯哉、松岡富雄君等の發起にて、官民合同歡迎會に出席した。富貴亭の廣間にて、如何にも盛會であつた。小島市尹の熱心なる歡迎の辭ありて、予亦た少しく演る所あつた。それは世界大戰後、世界主義と、國民主義との二潮流あること、宣傳と現實との相違あること、日本人が無暗に他の宣傳に乘ること、臺灣統治の根本義は、堅實有力なる中央政府を建立すること、日本は政黨內閣の舊套を打破して、更らに一歩を邁進す可き事等を、言葉短く語つた。

＊　＊　＊　＊

今朝は七時から當地を立つて、埔里に赴く筈なれば、先づ取り敢へず一日間の梗概を記して措く。

昭和四年二月十六日午前五時半　臺中松岡君邸に於て。

二〇　臺中より埔里に向ふ

二月十六日、去月の今日は、予が國民新聞社の社長としてしりたる日だ。最近一個月間に、幾許の變化を、予の一身に來去つゝある乎。それが又た予の一生に、如何なる影響を及ぼす可き乎。過去を憶ひ、將來を想ひ、感慨中より湧く。

＊　＊　＊　＊

午前七時零四分、臺中驛を發す。生駒知事、小島市尹、松岡君を始め、同鄕の諸君、其他に見送られ、彰化驛にて、縱貫本線に乘り換へ、九時過ぎには二水驛に着した。途中滿目水田、芭蕉畑、而して芭蕉畑に雜ふる椪柑畑がある。桑原員林郡守の語る所によれば、先づ苗木を作り、鉢拔きのまゝ、畑に移植するから、昨年の米田は、今日の椪柑畑となる。而して每反の所得、多きものは、六七百圓に上ると云ふ。

＊　＊　＊　＊

竹舍蕉園送且迎。水牛得得水滲橫。
倩レ誰描取眼前景。想殺能詩賴子成。

＊　＊　＊　＊

過日本山松蔭翁が、九鬼隆一男を鎌倉に訪うたる砌り、談偶ま予に及び、人皆な蘇峰を現代の山陽と云ふ當れり。但だ詩山陽に及かざるを惜む。然も酒と女―に對して安全なる―の點もて、やゝ之を補ふに足れりと語られたりとか。偶ま之に想着して、此作を口占した。

「春水溶溶滿二野塘一。紅柑熟盡翠蕉香。」
北人不レ解南中趣。平田二月已挿レ秧。

臺中以南は今が田植の最中だ。其の早きものは、早苗が既に風に戰いでゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

車中偶ま臺中に於ける、松岡君邸の雜詠を作る。

＊　＊　＊　＊　＊

四圍山色翠屏長。蘊藉風光憶二舊京一。
庭上老榕三百尺。樹陰相對說二家鄕一。

予家と松岡君の家とは、二世の通家だ。而して我等は少壯時代よりの相知である。

＊　＊　＊　＊　＊

二水にては二水總督と綽號せる增澤君、及び熊本縣人諸氏出迎らる。此處でも阿部驛長、伊東郵便局長、坂本校長、高本君など、何れも熊本縣人にて、予も何となく故郷に還りたる心地がした。

＊　＊　＊　＊　＊

此れから汽車を乘り換へ、外車埕に至り、此處にて辨當を喫し。臺車に乘り埔里に着したのは、午後四時半を過ぎてゐた。埔里の宿は、日月館と云ひ、田舍には珍らしき清素であつた。庭前の木犀、今や滿開にて、殆んど人を薰殺せんとした。

昭和四年二月十八日午前六時　虎尾大日本製糖會社俱樂部臺春館に於て

フラッパアを語る

――英國總選擧の幕開く――
――各黨の婦人有權者獲得ぶり――

改造社
ロンドン特派員　木村毅

(一)

毎年二つか三つ位な割りで、世界の耳目を聳動するやうな事件が、世界のどこかに起る。或る者は全く不意に。そして又或るものは前から充分に豫期されて。

今回の英國の總選擧はさうした事件の一つに數へてもいゝであらう。上の二つの分類の中後者に屬すべきは言ふを要せぬ。期日は、早ければ五月、遲くも七月上旬よりは延びまいと觀測されてゐるから、私がこの原稿を執筆してゐるのは二月下旬で、政戰の幕のあく拍子木が鳴りかけた位な所だが、これが雜誌に出る頃は、いづれにしても白熱戰の眞最中であらう。

單なる總選擧と違つて特に今回のそれが刮目に値する理由は二つ數へられる。勞働黨が再び天下を取り得るかと云ふ事と、今度初めて男子と同樣の參政權を獲た婦人の投票が如何に政局に反映するかと云ふ事とがこれである。

この前勞働黨が政權を執つた一九二三年の總選擧の結果は、聊か拾ひ物の觀があつて、あれ程の議席をかち得たのも、自由黨が援助を宣言したのも、凡て黨員の期待以外に出でたと言はれる。その位だから世界の觀望者の興味も、選擧前に於てはそこには大して焦點されてゐなかつた。

今度は、その成否は兎も角として、そこが一つの焦點になり得る。尤も此れは初めからかうであつた譯ではない。實は去年の秋頃までは、勞働黨のために芳ばしい豫想を立ててゐる者は殆んどなかつた。「どうだ、君達の手に天下が取れるやうな氣がするか」と聞いても、

黨員自身からして "I hope so." と氣の乘らぬ返事をしてゐた。

されば去年の秋ヤアマスに於ける保守黨の大會で、ボルドウキン首相は『過去四年間の補缺選擧に於て吾黨の失ひたる議席は僅かに六個のみ。もし算術が誤まらぬものとするなら保守黨が全部の議席を失ふまでには、まだ百四十年かゝる。』と、上機嫌で反對黨を揶揄一番した位である。そこで私達は友人と、成程、いかに『英國は革命を見るべき最後の國』だと言つても、もう百四十年すれば今の保守黨のやうな政黨は無くなつて了ふであらうと話し合つてゐたのであつた。

所が去年の十一月の市會議員選擧に勞働黨は壓倒的大勝を占めた上、正月に入つてから四五回行はれた補欠選擧には連戰連勝の勢なので、今や勞働黨のため次の總選擧は "Very hopeful" の呼び聲が到る所に聞えるやうになつた。去秋のヤアマスの保守黨大會迄に、同黨の失つた議席は六個に過ぎなかつたが、今年の一月の統計では勞働黨は十個、自由黨は一個の議席を増し、保守黨はその總和十一個を失うてゐる。更に二月に入つてから三回の補選があつて勞働黨が悉く勝利を占め、保守黨は總計十五個の議席を失うたことになつた。總選擧までにはまだ五つ補選がある。今の所ではそれらもなかく勞働黨に有望らしいから、保守黨は五年天下を取つた間に二十近くの議席を失ひ、ボルドウキンの言ふ如く算術が誤まらぬとすれば、百四十年の壽命が三分の二ばかり縮むことになる。

尤もそれは勞働黨に好意を持つた見方で、中には、補選は非常に乘棄權者が多いから、此れを以て總選擧を卜する材料にはならぬと言つてゐた人もあつた。

所で何黨が勝ち、何黨が負けるにしても、それを決定する中心勢力は、今度初めて投票用紙を手にする婦人新有權者の向背である。この前の二四年の總選擧では男の投票者が一二・四三一・二五三に對し、女は三十歳以上と云ふ制限があつたから九・二九七・九二四で、大體男三に對する女二の比率であつた。今度は去年の議會で政治上の權利の『性の不平等』が撤廢されたので元來が男よりも女の數の多い國だから概數五百二十五萬と言ふ夥しい婦人有權者が尊き一票の權利を持つことになり、茲に男女の比率は轉倒して男三に對する女三・五となり、女ならでは日の暮れない事になつて了つた。

新有權者、言ひ換へれば二十一歳から三十歳迄の女五百二十五萬の中、百五十九萬は二十五歳以下の若い娘さんである。何がさて、彼等は一躍して一國の政治の動きを支配する重要な地位を占めて來た上に、若い娘なのだから、當然、華やかに賑やかに、世の話材に上らざるを得ぬ。"Flapper" とはこの若い娘の有權者を通して、婦人新有權者全體に與へられた新名稱である。元よりこの語の存在は英語の發生と共に古い事であらうが、この新意義を含んで來たのは、少くとも去年の初夏新法案が通過してから後の事らしい。

何人によつて最初にかゝる稱呼が與へられたかは私の知る所でない。英國にも新居格君のやうな人氣者のラウド・スピイカアがゐて、そ

の口から出たのだと想像しておけば、先づ大して間違ひはあるまい。

I・L・P（獨立勞働黨）で發行された〝Flapdoodle about Flappers〟と云ふパンフレットの冒頭には『或る資本家新聞が新らしい婦人有權者にフラッパアなる名稱を與へて、婦人に對する全き侮蔑を意義づけた。』とある。

實は一人々々、別々に聞いてみると『フラッパア』が彼等に適當な名稱だと思つてゐる者は誰れもない。前記引用のI・L・Pのパンフレットの一言もその抗議の一つと見る事が出來るし、去年十月のデイリイ・ヘラルド（勞働黨の機關誌）の論説面に載つた『何故私は勞働黨に投票するか』なる投書にも『吾々大抵の若い女はフラッパアなる新名稱を好まない。それは吾々は仕事をもつ忙しい身で、本來の語義通りのフラッパアとは似よりも付かない境遇にあるからである』とあつた。

今度は反對の保守黨の方の意嚮を見ると、十一月のデエリイメイル（保守黨系）が特に掲げたパークンヘッド侯（この人は一九二四年現在の保守黨内閣が組織されると印度大臣になつたが十一月一日職を辭した）の『フラッパア投票に關する懸念』なる論文に『便宜だから私も此の名稱を用ふるが、意義の上からはいさゝか不正確だ（a little inaccurately）』と言つてゐるのなど代表的なものと見る事が出來やう。

二三日前に『現下の諸義務と諸問題に對する手引』と傍題した〝The New Voter〟と云ふパンフレットが出た。朝日新聞の『普選講座』と言つたやうな通俗向きのもので、今やどこの書店をのぞいても店頭に山の如く積まれてゐるが、その中には『嘲弄の語氣を帶びたフラッパア投票なる語は、意義も曖昧だし、表現も俗惡だ』とある。一般の人の考へがこれに依つて窺はれると見てよからう。

辭書を引いてみるとフラッパアの語には『箱入娘』（Girl not yet out）と云ふ譯が付けてある。それでは勞働黨の方の新有權者から正面的抗議の出るのはあたり前だ。そこへ行くとさすがに面白い事には保守黨の貴族連は、正面反對をするのも氣がさすと見えて、バークンヘッド侯は『聊か不正確』な憾みがあると、遠慮しい〳〵抗議を出してゐる。

併し如何に氣兼ねしながらも、抗議は抗議だから、貴族政黨者さへフラッパアを適當な名稱でないと思ふ位なら、大英國のどこを叩いても、個人でこの稱呼を歡迎する者は無ささうに思へる。

個人としてみんなが反對なら、こんな語の流通は止まりさうなものだが、そうは社會學者の言ふ通り、社會は單なる個人の總和でないと見えて、通俗な例を取れば、みんながその面倒くさい事を充分に感じてゐながら歳暮の贈答がなか〳〵廢止されず、日本國民の極大多數が愛想をつかしてゐながら田中反動内閣が仲々倒れないのと同じやうに、この語も多々益々行はれてゐるのである。

政黨はどこでも仲が惡い。不倶戴天とまでは行かぬが、用語なども なるべく自黨特有のものを作る。そして民衆に訴へる際に、勞働黨は

Proletariat よ、自由黨は Mass よ、保守黨は Citizen よと呼び掛けるのに、新有權者に對してのみは、各黨が、その不都合さを認めながら、フラッパアなる語を仲よく共用してゐるのは、以て奇觀と云ふべしである。

（二）

さきにも言ふ通り、政戰の興廢は、このフラッパアの髮の毛のさきに係つてゐるのだから、各黨共、その大衆獲得に必死である

では、このフラッパアの投票はどこへ流れこむであらうか。黨の所屬をはなれて一般的に見ると、大體に於て二つの見方がなされてゐる。それが一つは餘りに奇拔だし、一つは又餘りに平凡だ。

奇拔な方から言ふと、フラッパアは乾度、いゝ男の候補に投票するだらうと言ふのだ。此れは少し新有權者を馬鹿にしたやうな言ひ草だが、よく考へてみるとあながちさうでない。

英國の二十一才から二十五六才までの女性は、日本で言へば十六七のまだ肩揚げの取れないお茶ッピイ位にしか考へられてゐない。即ち一人前の成熟した『女』ではなくて『ガール』なのだ。こんな連中の大部分に政治的訓練も見解も大してあらう筈がないと考へられて、たとへば死んだヴアレンチノのやうな好男子が候補に立つたら、『艶めかしき氷室の投票が、怒濤の如くに』集注する事請合ひだと言はれるのだ。現に昨年の日本の總選擧のあとでも菊池寛氏は『もし婦人に投票權があつたら、自分は乾度當選したらう』と書いてゐた。これは必ずしもその場の根のないホラではなく、松屋のショウヰンドウの前に群がつた女學生が、菊池氏優勢の揭示が出ると歡呼を擧げてゐた光景は、諸君の記憶にまだ鮮かであらう。たとへ好男子でなくても女に人氣があるとその通りだ。だからもし茲に天下の婦人を惱殺するアドニス候補の出現を見たら、結果は推して知るべきである。先日I・L・Pの本部を尋ねたら、勿論冗談ではあるが『どこかに若い美男子の候補はないかね』と言つてゐた。

前記バークンヘッド侯の論文（これは新聞としてはかなり長いまじめな論文で、デエリイメエルは前からこの論文の載る豫告を揭げてゐた位だ）にさへ『世間では、新投票者は乾度、候補の男ぶりに興味の焦點をおくだらうと言つてゐる』と書いてある。尤も『私はこの風評の眞僞を知らない』と書き添えてはあるが、この書き添えこそは自分の上品さを崩すまいとする氏の貴族的虛飾で、かうした風評は外來の吾等が耳にも、しば〳〵入つてゐる事である。

次に平凡な觀察を言ふと、フラッパアは父、夫、乃至は兄弟と同じ候補に投ずるだらうと云ふのである。前記バークンヘッド侯の論文にも『私は、この國の婦人の投票はその全部が、男子と同じ所へ流れこむと、確信して疑はない。なぜなれば婦人は模倣性に富む、殊に無經驗で無知識な事に於てさうだ。』と言つてゐる。

もしさうだとすれば婦人に選擧權を與へた事は只彼等に正當な權利

を認め、個人的に滿足を與へたと言ふに留まつて、政局に及ぼす變化は、男子のみ投票權をもつてゐた時と違はないと言ふ事になる。果してさうかどうか？

（三）

それに就いて私は玆に面白い材料を以つてゐる。

デエリイ・エキスプレツスと言へば、本誌の一月號に高石眞五郎氏が書いて居られた通り、デエリイメエルと對立する大新聞だが、それが去秋、婦人擬國會を催した。（から云ふものは市川房枝氏などが主催になつて日本でも一度やつてみるといゝ。）

代議員などどうして選出したのか私は知らぬが、巷で偶然に買つたものだから最後の二日間の討議の記事の切拔を保存してゐる。その中に『選出代議員は夫と同じ候補に投票するか』なる質問の一項目がある。私の面白い材料と言ふのはこれだ。少し譯してお目に掛けやう。

ウード夫人（九四號議席・バーミンガム選出）

婦人も投票の自由をもつて、政治に參與し得るのは男と同じであります。この特權は男子に盲從せよとて與へられたのではなく、男女同權の認識の上に與へられたものであります、婦人はよく考へて、自分自身の結論を求めて、必要とあれば良人にも反對すべきです。大英國は凡ゆる婦人に、義務の履行を期待してゐます。そして凡ゆる婦人の政治的義務は自分自身でよく考へて行動する事です。

ハーン夫人（デームス・デイツトン選出）

女とは申せ一人前の年になつて、自ら、聰明なる近代人であり、時事に對する正しい理解ある事を誇つてゐる私達が、どうして他の人格の單なる影たる事に甘んじられませう。世界大戰は私をしてガールたる前にウーマンたらしめました。私は男の間に伍して自らの手でパンを稼ぎました。それ故、凡ゆる問題に對して私一箇の意見を立てる事が出來ます。良人と私の投票が同一な場合もありませう。併しそれは意識せぬ合致です。

リース夫人（十八號議席・メルチル・テツドフイル選出）

私の投票は全く私の秘密に屬します。それは私が獲得したのだと確信しますから、良人に相談せずに使ふ自由があります。生活の他の事は凡て、家庭の事も、食事のことも、着衣のことも、宗教の事も良人の便宜に隨ひませう。だが政治上の事だけは良人に盲從するわけに參りません。

ピイコツク夫人（十九號議席・バンジングストーク選出）

不幸にして私の良人は政治に何の興味も持つてゐません。選擧場へ行つても何等の感激なく、祖先の所屬した黨に所屬の候補者の名を投票用紙へ書きこむだけです。なぜ甲の黨へ投票するので、乙の黨へ投票しないのか、明確な理由がありません。だから私の豫想する所では、次の總選擧には夫婦別々に投票する事になるだらうと思ひます。尤もこれがために家庭の幸福の壞れるやうな事は斷じてなく、政治上で意見が違つたからとて、喧嘩口論をするやうな事にはなりません。

X夫人（この議論、稍々矯激なので新聞社が特に名も議席番號も秘す。
ノーサンバランド選出）

私の答は yes and no であります。もし良人が今の意見を更えて吳れゝば投票は同じになり、さうでなければ斷然別です。私は勞働者の家に勞働者の娘として育ち、又勞働者の家にその妻として嫁して、今は勞働者の母親でありますが、併し社會主義には同意しません。私達は資本家を必要とします。資本家が無かつたら良人はこの家族を扶養して行く事が出來ないでせう。良人は悧口な勞働者ですけれど、將來の見通しがつきません。もし世界中の金が一般の人に平等に分けられたら、すぐそれを使ひ果して、眞先きに慈善院の厄介になるのは私の良人でせう。だから良人が社會主義を捨ててくれない限り、私の投票は斷じて良人のそれと一緒であるわけには參りません。

カッシング夫人（カンバアランド選出）

私の答は、皆さんと違つて投票を良人と同じに致します。私達は足らざる所をお互に補足し合ふために結婚したので、反對し合ふために結婚したのではありません。私達は同じ國にほゞ同じ年齡に生れ合せ、私の血管には良人と同じ淸教徒の血が脈打つてゐるのです。そして同じ新聞雜誌を讀み、本も二人がほゞ同じのを讀み、良人の職業柄、餘り家を離れる事がありませぬから講演や、會議にも一緒に出掛け、同じ友愛を頒ち合ひます。かうして環境も思想も遺傳も同じだとすれば自然投票も同じからざるを得ませぬ。政治は私達の理想を實現するに最も健全な、最も安易な手段です。私達は最も信頼するに足る候補者を互に研究し合ひます。もし不幸にして意見の一致を見ない時は、良人を私の意見に同じさせるか、又は私の方で良人の意見に同じて行くか致します。

モリス夫人（十二號議席・ロンドン選出）

私は、夫婦の投票が同じであることを希望します。併し良人の方で、その投票を私に一致さすと保證してくれるのでない限り、私が同じにすると保證する事は出來ません。

アシュリイ夫人（四十七號議席・マークレーン選出）

私達夫婦の投票が同一であるかどうかは選擧が終つてから初めて分る事です。投票箱の神聖は家庭に於ても保たれねばなりません。私達は夫婦相互の判斷に信頼をおいて自分達で決定すべきです。

以上は演說の大要の筆記を又私が要約したのだが、大體の主旨は誤つてゐないと信じる。これでみると僅か一人か二人を除く外、頗る鼻息が荒くて、仲々男の投票に合流しさうにはなささうに思へる。隨つてこれのみから結論を下せば、フラッパアの投票がほゞ男を模倣する結果になるだらうとの豫想はかなり怪しい。

だが、私は、やはり世上の流說も同じく、彼等の投票の大部分が最も近い男のそれと同じ所へ合流する事を硬く信じてゐて、この討議からの推論が却つて危いと思つてゐるものである。なぜなれば此のデエリイエキスプレッスは保守黨系の新聞で、その選出された代議員も、平均よりは知識程度がみな高い。それにかうして女ばかりが寄ると、つい強がりを言ふ方へ引きずられて行く傾向があるから、これで一般を豫測するわけには行くまい。讀者は私の觀評を通して、一部の女の桃色の氣焰がどんなものかを知られゝば即ち足る。

（四）

フラッパアの投票が、最も近い男のそれに合流するとなると、茲に

初めて政黨別にして彼等を考察する必要が生じて來る。

大體に於て貴族、地主、資本家などの階級に屬するフラッパアの投票は保守黨へ行くものと見られてゐる。又消費階級、即ち中産の比較的知識階級に近いフラッパア、たとへば女教師、高等程度の女學生、女醫者、書記、タイピスト、雜誌記者などのそれは自由黨へ流れると考へて大過あるまい。ウエールスやスコットランドの工場地帶、炭礦地帶などのフラッパアは必ず勞働黨へ投票すると、これは最も堅き保證を以て斷言してもよささうだ。

尤も多少の例外はどこにもあるので、たとへばボルドウヰン首相の子供が社會主義者で勞働黨候補であるやうな例がフラッパアの間にも無いには限らない。殊に中産消費階級のそれは最も多く浮動投票となり易くて、どちらへでも動く危險があるから、自由黨はこれを取らぬ狸の皮算用として安心してゐる事は出來ぬ。そこへ行くとさすがに勞働黨のそれは支部や組合で多年訓練がよく行き屆いてゐるだけに、最も信頼するに足るらしい。

尤も保守黨でも虚勢を張つて、去秋ヤアマスの大會の前にそのWom n's unionist organisation の會員が百萬あると號し、更に大會までにもう九十萬を獲得してみせると傲語したが、勞働黨の機關紙はすくに一矢を酬いて『成程、それが事實なら會員の數は巨大驚くに足る。だが同じ婦人部の組織でも保守黨のそれと勞働黨のそれとではてんで質が違ふので、彼等は大して政治的意義は有つてゐない。宴遊會、音樂會、ダンス、名流婦人との握手。まじめな政治よりもその方まが彼等の嗜好に合つてゐる』と言つたが、さう言はれてもグウの音も出ないやうだつた。因みに勞働黨に屬する婦人部の勢力を言ふと、去秋バーミンガムの大會前の發表で組織千七百二十八、員數二十五萬と云ふ事であつたが、大會と共に組織千七百九十一、員數三十萬を數へるやうになつたと言ふ事である。

所が茲に右の三範疇のどれにも屬しないフラッパアの數が又かなりに尨大なものである。これは中産消費階級よりも更に濃度の強い浮動投票なので、實はこれの獲得の巧拙如何が勝負を決する事になるかも知れない。全然、組織の手のついてゐない、又は手をつける事の出來ない小さなファクトリのガール、ショップ・ガール、それから淫賣婦などがこの中に入る。或る所でロンドンの女の二十五パアセントは淫賣だと云ふ話を聞いた事がある。いくら何でも此れは少し誇張が過ぎると思ふが、併しさう云ふ流説のあるだけでも、その數が少なからぬものである事が想像出來やう。いづれにしても都市、殊にロンドンに自活してゐるガールの大多數は、親元を離れてゐるので、父兄の感化を蒙る事が殆んどない。彼等も大抵は屋主とか、或は自分のボーイとかの影響を受けはするだらうが、父兄の威壓が少いだけに、フラッパアの政治的批判の能力は或は茲に最も明確に反映されるかも知れぬ。私が興味を以つて見てゐる所以である。

但し、中には記名登錄の日を失念してゐた連中も少なからぬ樣子

で、現に私の知るガールの中にもその仲間が數人ある位だから、この失格者がやはり相當に多からう。

（五）

各政黨がフラツパア獲得のためのプロパガンダは、今迄の所では、機關誌の活用、パンフレツト、リーフレツト、ポスタアなどに限られてゐて、未だひどく奇拔な考案には接しない。機關誌の活用は何と言つても勞働黨が一番上手である。リーフレツト（ちらし）は自由黨のが一番いゝやうに思ふ。パンフレツトはさきに言つたI・L・Pのものが非常に早くから出來てゐるのを除けば、保守黨のしか未だ出てゐない。ポスタアも此のために特に作つてゐるのは保守黨だけで、自由黨のは選擧用のは澤山出來てゐるけれど、特にフラツパアに訴へたものは見當らない。勞働黨は、まだどのポスタアも一枚も出來てゐないのんきさである。（二月二十日私はポスタアやちらしを貰ふために各政黨の出版部を歴訪したのである。）

いま、保守黨を筆初めにして、プロパガンダの巧拙を比較して見やう。

フラツパアに對する保守黨の關係は、痛し痒しと評したら最も適當かと思ふ。去年前半期の議會で、平等婦選案を通過させたものは兎に角保守黨である。これは少くとも彼等を自黨に吸引する最好の看板になり得る。併しそれ迄の保守黨は、實は該案に頑強に反對し續けて來たので、中にも有力な一部の人士は、去年該案が議會を通過した際に於てさへ、なほ自說を讓らず反對投票をした。この點は丁度原內閣時代に普選に反對しておきながら、加藤（高明）聯立內閣でこれに贊成した政友會の立場と稍々似てゐる。通過させたのは自分達の支持する內閣だが、併し反對者だつたと云ふ過去の刻印はなか〳〵消えない。少くともスタートに於て二割位なハンデイキヤツプは付けられてゐるものと見ていゝ。

そこで保守黨の獲得政策は、有利な看板にはいよ〳〵ペンキの色を濃くし、不利な歷史はなるべく隱しておく事である。

本來はこの宣傳には新聞が一番有效なのだが、保守黨系の新聞は餘りに大物過ぎて、仲々黨の手足になつて動いてくれぬ。タイムス、デエリイ・メエル、デエリイ・エキスプレスなどいづれも超黨派的であるだけに、新聞としての獨自の存在を保つてゐて、新聞自己の立場、利益、主張まで犧牲にして黨と一身同體になるものではない。殊に保守黨が婦選案を通過さしたのは去春に於ける『急激な方向轉換』であるだけに、今迄婦選案に反對してゐた新聞が黨の方針に追隨する事はなほ六ケ敷い。上記三紙のうちではメエルが最も頑強な反對者であつたさうで、これは今もどうかすると、その餘燄の揚氣を吐く事がある。

大臣の中ではバークンヘツド侯など、最後に仕方なく政府の方針を默認したものの、聞えた反對者で、今でもその通過を餘り快くは思つてをらぬ。メエルが時も時、人も人、題目も題目、この際にバークン

ヘッド侯に依囑して、『フラッパア投票に關する懸案』を紙上に掲げたのは、反對の氣勢未だ全く壓服されず、機を得て唱濔したものと見て差支へない。

そんな次第だから保守黨では自黨系の新聞を信じて全部を任かしておくわけに行かないので、他黨に先んじてパンフレットやポスタアまで早くから用意したのではないかと思はれる。パンフレットの標題は"What the Conservative goverment has done for woman of children 1925 -1928"（一九二五年より二八年迄に、保守黨政府が婦人子供のために成せる諸貢獻）と言ふのである。外に婦人同盟の機關誌『家庭と政治』が二月に入つて"Special Recruiting campaign Number"（新有權者特別號）を出した。

この内容を説明する事になると勢ひ黨の掲げる政綱政策に觸れねばならぬ事になつて、範圍が自分の專門以外の事に擴大するから止めるが、前者は早く言へば保守黨組閣以來の功績の吹聽で、たとへば『世界平和』『住宅問題』『教育』『寡婦孤兒養老保險』『租税輕減』『生活費引下げ』『食物の良否鑑査』『不正度量衡の嚴禁』と言ふやうな見出しを掲げ、からうまで女の事にも手柄を立てたのだから投票はこちらへして貰ひたいと依賴してゐるのである。特別號の方は、もつと實際に露骨に投票獲得について語り、五個の保守黨婦人候補者の寫眞を掲げなどしてゐる。（その中に珍らしくもメリイ・ピックフオードと云ふのがある。日本にも氣の早い連中がゐて、例の「全世界の戀人」なる活動女優と間違つてはいけないから、一寸斷つておくが、これは全くの同名異人で、貴族のお孃さんなのだ。）

これらを通じて最も目につくのは、さきにも言つた通り、普選案を通過さしたのは吾黨内閣だとの一枚看板をうるさい程頻繁に强調してある事だ。即ちパンフレットにあつては結論にその一句を見、雜誌の特別號にあつては、毎論文、否、毎頁にその繰返しを見る。物に依つては、保守黨が今迄平等婦選案に反對したのは、婦人がまだ緊切に政治に興味をもつて來ない前の事で、猫に小判、豚に眞珠は投げ與へても仕方がないから（とは、まさか書いてはなかつたが）時機尚早論で待つてゐたのだ。されば婦人が今日の如く眞に政治的自覺を以つて來ると逸早く該案を通過させたものは吾が黨内閣だと効能を吹聽した所もあれば、『いづれ社會主義者はこの新投票者大衆を、自分のプロパガンダのための最も有望な沃野と認めるであらう。併し社會主義と云ふものは一度蒔かれたが最後なか〳〵根絶できないから、誤つてそんなものを導きこまないやうお互に要心が肝要だ』と、防禦の網を張つてゐる所もある。

だが後に聞く通り、勞働黨の方のプロパガンダは、保守黨が婦選反對者であつた歴史を遠慮なく摘發するので、これだけでは安心が出來ない。昔から該案の味方であつたやうに箔を付ける必要がある。そして拾ひ出して來たのがボルドウヰンの古證文と故パンカースト夫人の入黨一件だ

實はボルドウキンが婦選の有名なサツポータアだつたと云ふ話も大して聞かぬが、少くとも頑強な反對者ではなかつたやうだ。現に該案が通過したのも、この前の總選擧の前に、ボルドウキンが婦人の選擧權擴張のために各黨合同の協議會を開く旨を洩らしてゐた言質の結果で、そのために案の上程をせねばならなくなり、上程されゝば勞働黨は眞先きに贊成投票をする、自由黨も此れに追隨する、保守黨員も若し之に反對して大期選擧に議席を失ふやうな事があつてはならぬから心ならずも贊成をする。その結果通過したので必ずしも保守黨政府全部の意嚮ではないと保守黨の閣員自らが嘆いてゐたのを讀んだ事がある。(なほ後に援引する勞働黨からの暴露と對比せよ)その閣員はこれを總選擧前のerrorと呼んだが、フラッパア獲得のためにはmeritだ。そこで吾が首相は、千何百何年にはかう演説した、何年にはあゝ演説したと、首相の婦選主唱アンソロジイを作つて、誌面の餘白到る所を埋めてゐる。

パンカースト夫人は、此れは言ふまでもなく有名なウーマン・サフレジツトで、恐らく今日のフラツパアをあらしめた最大の功績者の一人に數へ得るであらう。私達が早稻田の學生であつた當時、婦人は萬朝報の寄稿家で、その通信は私達の低頭瞑目して迎へたものである。所が夫人は大の保守黨信者で、ゆく〳〵同黨から立候補する積りでゐたのに、遂にその實現を見ずして、死んで了つた。

この一大殊勳者にして保守黨だつたのだから、以て如何に吾が黨が婦人の權利を早くから尊重し、婦人が黨から如何に厚く歡迎されたかが分るだらうと云ふ言ひ草だが、成程、これは板垣守正君の入黨に依つて、自由民權論の正系吾黨にありと言つた憲政會の言明よりは、少しきゝ目があるだらう。

なほ保守黨のちらしには、特別に取り立てゝ語つてみるやうなものはない。もう一つ、該號では二月十八日から二十三日迄を"New women Voter's week"として、黨員全部に徽章を佩用するやうにと通達したが、二百萬からある筈の婦人黨員なのに、どうした加減か、その徽章を佩用してゐる女を、ロンドンでは只の一人も見かけた事がない。お姫樣達、さてはやつぱり徽章をつけるのが恥しかつたのかな!

（六）

轉じて自由黨の方策を見ると、こゝでは婦選の本家爭ひには一切口を噤んでゐる。同黨としては、蓋しそれが賢明の策であらう。そして一氣にもつと急所を押へる事を計つてゐる。

急所と言つても女の事だからその睾丸を蹴飛ばすわけには行かないので、臺所を押へに掛つた。

こゝで一寸斷つておきたいが、此の前々選擧で勞働黨がよく奇勝を博したのは、その掲げた政策が直接に個々の家庭の臺所經濟にピンと響いたので、新たに擡頭した婦人有權者にも腹からよく合點が行つて、歡ばれたのが大きな原因だと言はれる。そのためかどうかは知ら

んか、今度の總選擧でフラッパア獲得のため各黨の言ふ所を聞くと、一様にみんな臺所を狙つてゐる事に特に氣付かざるを得ぬ。外交問題だとか、産業問題だとか、響きの大きな言葉を用ゐたのでは、どうも直接にフラッパアの歡心を買ふことは六ヶ敷いらしい。そして此の點で特に成功してゐるのは自由黨のちらしではないかと思ふ

今日迄にフラッパア獲得のために發行されたちらしの數は自由黨のが一番多い。こゝも亦保守黨と同じく、機關誌が黨と一身同體になり切つて動いてくれぬ。マンチエスタア・ガアデイアンがその最も有力なもので、デエリイニユース、ウエストミンスタアガゼットが此れにつゞくが、かうした大新聞は黨のこと以外に、新聞獨自の存立の立場を考へるので、兩者のそりがうまく合はない事がある。ちらしはこの缺陥を救ふであらう。

自由黨が保守黨を攻撃する專らの目標は"Safeguarding"にある。成程、これは一石二鳥の策で、セーフガアデイングは保守黨の最大重要政策であると共に、臺所――と言ふのはつまり婦人の日常生活費と云ふ意味だが――に直接響くことが最も緊切である。だから此の秘術を攻撃、暴露すれば保守黨の死命を制すると共に、フラッパアにも歡ばれる事になる。

セーフガアデイングと言ふのは詮じつめれば保護關稅政策と云ふのも同じ事に歸着するらしい。ボルドウキンは一九二三年の總選擧の際Protective Tariff の名稱で一度この旗幟を揭げたが、眞ツ向から保護をふりかざすと、アダムスミスが地下三尺の底まで沁みこんでゐる英國だから、大衆のお氣に召さずとあつて脆くも敗れた。そこで今度は主旨は同じでも、保護の範圍を縮少し、セーフガーデイングと看板を塗りかへた所、選擧には勝つし、内閣も五年無事に壽命が續いた。つまり保守黨は英國の輕工業保護の名目で、今、主として輸入品に課稅してゐるのである。

自由黨はこれを捉へた。試みに"Woman should Vote Liberal"と題したちらしを見ると、『セーフガアデイングは生活費の向上を意味す』と大きく赤刷りにした下へ『セーフガアデイングは日用必需品への課稅に外ならない。こゝに保守黨政府が稅を掛けた物品六個の例を示す。課稅の結果、値段が如何に高くなつたかを見よ』と黒く刷り出して、更にその下へ手袋とコーヒ茶碗とエナメル鍋と水瓶と鉄と置時計の繪を現はし、片側に課稅前の値段、片側に課稅後の値段を書いてゐる。圖示するとかうだ。

課稅後		課稅前
一志三片	水瓶の繪	九片
一志	鉄の繪	九片
二志十一片半	時計の繪	一志十一片半

課稅後 二志十一片半	手袋の繪	課稅前 一志十一片半
課稅後 九片	珈琲茶碗の繪	課稅前 六片
課稅後 二志三片	鍋の繪	課稅前 一志十片

又"Taxes that women pay; by order of the Conservative government." と言ふのを見ると、買物に出ても、家にゐても、女が稅づくしの中にゐる事を書いたのだが一節を譯してみるとかうだ。

『稅金の掛つた時計がお茶の時間を敎へてくれる。稅金の掛つた蓄音機に、稅金の掛つたレコードをかけて聞き、稅金の掛つた紅茶に稅金の掛つた砂糖を入れ、稅金の掛つたコップを稅金の掛つた臺皿にのせて飮む。稅金の掛つたナイフで、稅金の掛つた菓子を切り、稅金の掛つた皿に入れて食ふ。』

かうした間接稅の暴露は日本でも無產政黨のしきりにやつた事だつたが、只、その手際は本場だけに英國の方が二三枚上のやうだ。殊に絹絲、チョコレートの事などうるさい程書いてゐるのは、やつぱり有効に違ひない。なぜと言つて、もし英國のガールから茶に招待されたお禮に、何か贈り物をせうか、尋ねて見給へ、屹度ねだられるものはストッキングでなかつたらチョコレートだから。

保守黨の方ではこの攻擊に應ずるために、『吾黨の稅を掛けたのは外國製品のみだ。愛國の士よ。なるべく自國品を用ゐて國產を保護せよ』とやつてゐる。

(七)

最にも言ふ通り勞働黨は、まだポスタアも一枚も出來て居らず、ちらしも貧弱なのが二つ刷つてある許りだ。その代り、こゝでは機關紙に充分信賴が出來る。デエリイヘラルドは型も小さく、紙質も惡く、多分部數もデエリイメエルやマンチエスタアガーデイアンに比較すればひどく少なく、新聞としては一番見劣りがするが、その代り、黨と一身同體になつて、どんなにでも動く。該紙が新有權者獲得の努力をしてゐるのは、去年の夏、私がロンドンへ着くと早々から眼に付いた事で、フラッパアなる新語を初めて眼にしたのもこの新聞を通じてゞあつた。

或る時は第一面の政治の報導欄で、或る時は四面の社說面で、又或る時は投書の形をとつて、絕えず目さきを變へてはフラッパアの注意を惹くに努めてゐる。

それに勞働黨の强味は一九〇〇年初めて黨が組織されて、第一回大會の開かれた時以來から男女平等參政案を主唱して、嘗つてその態度を變へない事で、丁度この一月二十四日がフラッパアの記名登錄の日であつたが、その日のデエリイヘラルドは『多難なりし戰』と題

して、社説に婦人參政運動の略史を論じ、更にヘンリ・ネギンスンに「參政運動の回顧」を執筆して貰つてゐる。

社説には一九〇六年から一三年までに議案は六回提出されて、六回共自由保守兩黨聯合軍のために一蹴された事、一九二四年には勞働黨の内閣で今度行はれる新選擧法の通過を計つたが、再び兩黨聯合軍のために事の成らなかつた事、その中去春、保守黨政府に急激な方向轉換があつて今日の選擧法改正を見るに到つた事などを叙し、更に又かゝる暴露を試みてゐる。

「去年のこの法案の第二讀會の時の光景が凡てを語る。勞働黨の議員は案の支持のために全部揃へに出席した。支持者の勢が餘りに强いために、さしもの保守黨議員も最後まで持ちこたへて反對投票をしたものはたつた十二人であつた。されども記せよ。同黨の議員中百三十六人は缺席してゐたので、その中には政府の該議案の提出をなかく納得しなかつた某々大臣も交つてゐたのである。」

更にネギンスンの回想錄には、アスキスが如何に頑强に反對したか、ロイド・ジョージが如何に惡ごすい振舞をしたかゞ遠慮なく摘發してあるので、利双の向ふ所、兩黨顏色なき態である。

又別な日の社説には、保守黨の施設が如何に台所に惡く響くかを指摘した論文をのせたが、併し今度の新有權者は若いフラッパアが多いのだから、前の三十才以上の婦人に選擧權を許した時と違つて世帶臭い説ばかり聞かしてゐたのでは、とても投票の有効な獲得は出來ないと斷定して、もつと華やかに若い娘さん達を吸集する題目を掲げた。これは保守自由兩黨とは違つた目のつけ所である。試みに "Youth has a right to happiness" と題したちらしを見ると冒頭にいきなり "Girls like dancing" と大きく見出しが置いてあり、その下に「若い青年達も勿論ダンスが好きだ。この點、青年もガールも變りはない。だがダンスが全部ではない。仕事と享樂と幸福な結婚生活と、これが大多數のガールの待ち望むものだ——大多數の青年も同様に。」

こちらの青年男女がダンスの好きな事は一種の累世遺傳中毒とでも言はうか、とても日本にゐては豫想も付くものではない。そこでかうした前置きをして、先づ若い者の注意の集注をはかり、それから、勞働黨の諸政策が如何に現在よりもよりよき將來を約束するか、保守黨の貧民救助法、失業保險等々が如何に却つて多數者の生活をより苦しめてゐるかと、宣傳の奧の手を除々に擴げてゐる。

お手のものだけにプロパガンダは何と言つても勞働黨のそれに鋭さとうま味とがある。たとへば保守黨のパンフレットは『世界平和』と云ふ大きな漠然とした見出しをおいてロカルノ條約やケロッグ協約に黨のつくした役割の効能を吹聽してゐるが、そんな事では若い娘さん達の頭にピンと響くとは思へない。之に反して一フラッパアと署名してデエリイヘラルドの論説面に載つた投書には『ブルジョアは私達が結婚も出來ないでゐるのを常に侮蔑し、嘲笑する。結婚難の最大原因が生活難にあるは言ふまでもないが、それを除外しても、婦人々口の

過剩が又一つの有力な原因になり得る。そして婦人の過剩數の半ば以上は這般の大戰の結果として生じたのだ。七十四萬四千七百〇二人の男子の命を失はしめ、百六十九萬三千二百六十二人の男子を不具ならしめて、私達の結婚難を愈々厳しくした責任者は誰だ!?』と啖呵を切つてゐるが、かうして彼等が最も切に希求してゐる『結婚』と言ふ餌を匂はせて物を言ふと、世界平和だとか、戰爭反對だとか言つただけでは、無神經なフラッパアの頭にも、ピンと徹へて來る。隨つて自由黨や勞働黨のプロパガンダぶりを見て、さて保守黨のそれを振り返ると、幾分殿様染じみてゐて、恨むらくは豎子兵法を解せずの嘆がなくもない。

戰爭と言へば大戰の時の組閣者は自由黨で、保守黨も參戰は支持し、途中からは聯立内閣で援助してゐるので、その責任については兩方とも臑に疵をもつ連中である。この點で勞働黨には一段の強味がある。と言つた所で、勞働黨の一部議員もお多分に洩れず參戰贊成者だつたが、併し玆には一部の反對者もゐた。殊にI・L・Pの出身者は根が平和主義の團體だけに全部反對した。勞働黨の主領は、即ちI・L・Pの出身で、戰爭の前そのチエアマンを務めたこともある位だから、反對には發頭人であつた。當時全國民が血に渇いてゐる矢先とて、參戰反對をすれば社會の表から葬られる危險が充分にあつたが、彼は斷乎として所信を翻さなかつた。その頑張りの強さは今もブルジョア新聞が『性格のミステリイ』として驚嘆する所である。主領の有權さは七光りである。彼が過去に於ける被いた所謂は、ふら〳〵腰だつた黨員の臑の疵を隱して餘りある。

フラッパアが好男子に投票するだらうとの豫想を書いた時、つい言ひ忘れたが、マクドナルドは英國議會切つてのい丶男ださうで、"Ko-kingly Handsome" と言はれ、フラッパア投票の吸收には勞働黨は非常な便利を有すると囁いてあつたのを讀んだ事があるが、その好男子の背後には戰爭反對の七光りがさしてあり、その上にプロパガンダは黨のお手のものだし、五百餘萬の新有權者中、少くも四百萬はプロレタリヤに屬すると勘定されてゐるから、フラッパア投票の獲得には、再び勞働黨が奇勝を博するかも知れぬ。

その他に勞働黨の宣傳ぶりを云ふと、デエリイヘラルドは普くフラッパアに『私は、何黨へ何故に投票するか?』なる懸賞論文の募集をなし、今日(二月二十二日)その當選論文の發表があつた。又マーガレット・ボンフィールド孃は二月に入ると何とかホールでフラッパアの政治教育の連續講演を開いてゐる。孃は英國議會の婦人議員中最も有能な一人である上、頗る雄辯家で、私は數回その演說を聞いたが、私の知る限りでは共産黨のマジョリイ・ヒッポリト夫人と相並び、英國婦人雄辯家の雙璧ではないかと思ふ。

講壇からは遠慮なく、保守黨政府が婦選案を去年になつて急に通す運びにしたのは、今年の總選擧を見越して、新投票者を釣るための好餌だつたのだとこき卸してゐる。最左翼のサンデイウオカアと言ふ週

職新聞なんかは、プリンス・オブ・ウエールスが、南ウエールスの失業者の惨状を慰問したのさへ、總選擧のため保守黨政府のからくりに使はれてゐるのだと公然書き立ててゐる位だから、こんなこき卸し位は朝飯前だ。尤も同じ選擧民を釣る餌にしても、鐵道よりは婦選の方が氣がきいてゐてい〻。藤森成吉君の立候補にあわて〻諏訪驛の出入口を急にもう一つ新設したなどと言ふのとは、第一、話が大きいだけでも愉快だ。

（八）

ペンを又政黨別からフラッパー全體の上に戻し、彼等の政治的進出と婦人議員の數の增加の比率とに關し、若干の考察を試みるであらう。英國の婦選獲得運動も、他の凡ての運動と同じく幾人かの『流血下獄』の洗禮を潜って今日に到つたのである。その位なら婦人投票者の莫大な數から言つても、あれ程待ち望んだのだから、もう少し多くの婦人議員が選出されてもよささうなものだとは、總選擧後で言はれる。試みに從來の制限選擧時代の結果を辿ると、一九一八年には十八人の婦人候補が立つて一人當選、一九二二年には三十三人の候補が立つて二人當選、翌二三年には三十四人の候補が立つて八人當選、その翌二四年には四十一人の候補が立つて四人當選してゐる。尤もその後十五六回の補欠選擧に婦人議員は五人當選して、現在は總計九人になつてゐる。もしこの補欠選擧の結果がそのま〻今度の總選擧の標準になるとしたら、婦人は正に全議席の三分の一を占める事になり、それが團結して婦人黨でも作らうものなら、優に議會の一大脅威だが、さうはなか〲問屋でおろさないので、各黨の婦人候補が全部當選したとしても、恐らく十分の一の議席も占められまい。

確か東京朝日新聞だつたと記憶するが、婦人議員進出の存外に少ない理由を說明して、婦人の政治的興味の稀薄、婦人の政治的教育の不足等々三四を數へた後、立候補者に對しては婦人同志の嫉妬的な氣持が投票を男子側候補に流れしめるのだらうと報じてゐた。私はこの說明の適否を知らない。

たゞ玆でもう一度讀者諸君にお目に掛けたいのは、例の去秋のデイリイエキスプレッスの催した婦人擬國會の議事である。議題は『代議員諸君はより多くの婦人代議士の當選を希望するか』と言ふのである。（當時の婦人代議士の實數は八人）これは甲論乙駁で議長が採決をしなかつたから、贊否いづれの論者が勝つたのか分らなかつたが、試みに代表的と見える演說を一つづ〻要約して譯載してみるとかうだ。

リチャード夫人（バックス選出）

議會に、いま以上の婦人議員が出現することに反對だと言つたら、私は既度舊弊だと言つて皆さんから笑はれるでせう。併し『料理人多ければお粥が出來損ふ』と云ふ諺がありますが、議會に於ける婦人議員の場合にこれが丁度よく當てはまります。議會へは政治と云ふパイの中へ指を突つこむ事の好きな婦人を代表者とし、指導者として數人送つたら澤山

です。政治は大して私達の興味を引きませんから、それは男の人達に任しておいてい〻でせう。家庭の經營、一家の豫算、卽ち私自身の王國の大藏大臣の仕事だけで私達は澤山です。女だてらに投票集めのポスタアを擔ぎ廻つたり、會合の壇上で演說したりしてゐる時、良人は家に歸つて、冷え切つた晩飯をすまし、ボタンの取れたシャツを着ねばならない目に會ふのです。これでは氣の毒な良人が居酒屋へ滑りこんだからとて、それを責めるわけには參りません。又これがそも〳〵離婚沙汰で裁判所のお世話をかける發端です。

リデイア・ホイツトマン（タリンフオード選出）

婦人は何も議會を支配する事を求めるのではありません。併しよりよき明日の將來に對して、婦人の直接の願望を代表して表現する人の殖ゑるのは望ましい事です。その上に子供は議會に發言の機會を有しません。子供の要求を代辯してやるのも婦人議員の任務です。又不當に女性を壓してゐる法律がありますから、何黨に屬するを問はず、婦人議員は協力して、婦人の見る所を了解さすやうに努めるべきです。住宅問題、工場法、公共衞生施設——これらのどこにも未だ婦人からの要求は充分に反映されて居りません。併し議會に婦人を歡迎せねばならぬ最大理由が、未だ外に一つあります。それは婦人が、種族の母親として特殊な建設的能力の所持者である事です。全ヨーロパが墓場たる事から救はれたのは婦人あるがためでありました。新らしい生命を創造するために、死の谷を步み降つてゐる吾々婦人は、世界會議を動かして、この生命が神聖であり、決して戰爭などで浪費してはならないものである事を認めさせる法律の制定を計らねばなりません。

かうした議論をはなれて一般的に言ふならば、婦人議員がもう少し多く選出されてもい〻と希望する向きが多いやうだが、新有權者五百餘萬の增加を見たとて、その割合に婦人議員の數が殖ゑるものでない事は、各黨が今日までに認めてゐる候補の數の到つて少いのに依つても[illegible]め窺はれる。

現在の婦人議員の數は保守黨四、自由黨一、勞働黨四で總計九人。その中でも本當に自分の力で當選したのは三人で、後の六人は良人が現在議員であるためその援助を受けたり、或は元議員であつたのが貴族院へ廻つたのでその地盤を繼承して當選したのだと言はれてゐる。その中自由黨のランシマンと、勞働黨のダルトンとは夫婦揃つて議席を有するので、一對のめをと議員として併稱される。ダルトン夫人はまだこの二月の補缺選で當選したばかりのほやほやだが、此れは次期總選擧の良人の地盤擁護のために立候補したのであるさうな。卽ち彼女の良人のダルトン博士は現在ペツクハムから選出されてゐるが、今度の選擧ではビシヨツプオークランドの地方協議會から推される事にきまつた。折も折とてそこに補缺選があつたので、もし良人の地盤が他から蠶食されるやうな事があつては一大事と、夫人が立つて首尾よく當選したのである。

自由黨のランシマン夫妻も同じ事情にあるので、氏は現在スワンシイから立つてゐるが、今度は夫人が地盤を Keep Warm してゐるセントアイヴスから立つと言ふ。このランシマンはロイドジヨージに對立して黨內に自分のフラクシヨンを有する勢力家で、今度の選擧で保守黨の絕對多數が破れ、自由黨が勞働黨を援助する事になつたとして

も、このフラクションは恐らく分離して保守黨を支援する事にたらうと言はれ、勞働黨の前途に一抹の暗雲を漂はせてゐる。

議會は私も二三度傍聽して、吾々日本人の眼から見て、彼等議員の行儀の惡いのには驚いた。長卓を隔てて保守黨と勞働黨が向ひ合ひ、ボルドウヰンが演說をしてゐるのに、マクドナルドは二本の足を卓にのせかけ、靴からさきを天に冲する格好でボルドウヰンの鼻先きへニユーツと突き出して聞いてゐたのは、壯觀と言へば壯觀であつた。外の議員もみなそれ式なので、これから推すと、英國ではこんな事は別段不行儀にはならないものと見える。その代り彌次はおとなしい『ヒヤ、ヒヤ』『ノウ、ノウ、デイア、デイア』を應酬してせい〳〵床板を踏み鳴らす位なものだ。所がこの一月末に婦人議員が一言の彌次を飛ばして、ロンドン滿都の子女の話柄に上つた事があつた。

問題は地方自治――の中でも婦人小兒の保護事業で、婦人議員の討議が自ら議會の中心になつた日であつた。

保守黨のアイギイ夫人が演說したのに對し、勞働黨のキルキンス孃が『乳母日傘で子供を育ててゐらつしやる御大家の奧樣方が、こんな問題に口をお出しなさるのはお門違ひでせう』と言つたのが抑々の發端だ。保守黨のアスタア夫人が『そんな事を仰有るならあなたこそ子供もない癖に子供の事を討議なさる資格がないぢやありませんか。』と賣言葉に買言葉で出掛ける。それから議事筆記で讀むと裏店の山の神も餘り違はない應酬が二三次あつた後、アスタア夫人が、

『お金持だつて貧乏人だつて子供の可愛いのは同じです。だから金持ちの女だつて皆さんと同じやうに、貧乏な人達の事を氣遣ますよ。』と**言つたのに對し、或る男の議員が**

『だが、金を貯める事には、もつと多くの氣を遣ふだらう。』

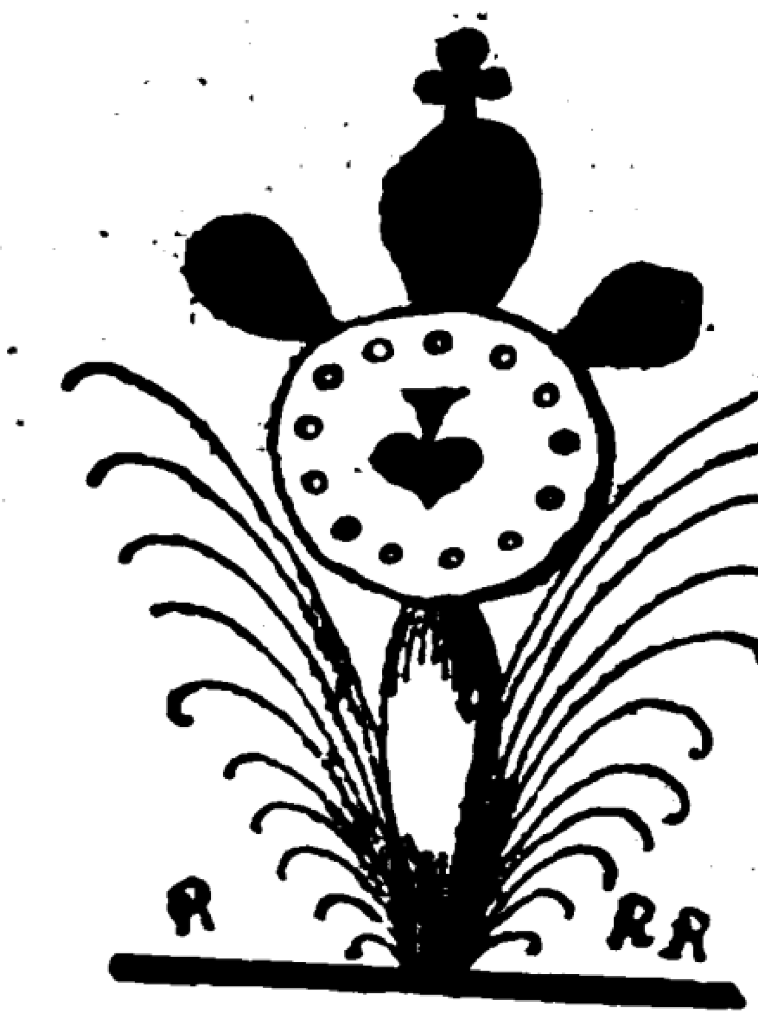
と横槍を入れたものだから溜らない。夫人は奮然として勞働黨議員の方を睨みつけて〝Oh rats〟と叫んだ。

馬鹿野郎、鷄の鳴まねから亂鬪劇に到るまで、餘興の多い日本の議會に馴れてゐる私達には『鼠(卑怯者)!』と言つた位は何でもないが、英國議會では餘ッ程珍らしかつたものか、それとも御大家の奧樣のあられもないと思つたのか、翌朝は各新聞がこの事を大きく書き立ててゐた。因に夫人はタイムスの持主なるメエジア・アスタアの兄貴なるロード・アスタアの奧さんである。

婦人議席が十指にも充たない今からこの權幕だと、フラツパアの意志が議會により多く反映されて、もつと澤山の婦人議員が下院へ送りこまれた時の壯觀は察するに餘りある。

『彌次は婦人より!』――この時代が今に英國議會に來ないものでもない。

如何な私もフラツパアを語るに少々飽きて來たから、この邊でペンを擱かう。兎に角これは若い娘が參政權をもつたのを冷やかし半分に用ゐられてゐる今期總選擧前後の英國の流行語の一つだと思つて貰へばよい。たゞ、問題の必要上、私が全く暗い英國政界の事情に若干言及したが、そこに思はぬ誤謬のたきを保せぬ。大方の寛恕を乞ふ。(二月二十八日稿)



中年者の幻想

石川欣一

一

何といふあたゝかさだ。このまゝ春になつて了ふのだらうか。そして、もう十一時だといふのに、どこの女供だ、往來で騒いでゐるのは。あたゝかい晩には火番の拍子木の音があまり聞えないから妙だ。

今日社では、宴會に來た一群の女學生が、階段をあがつて來るのを見て、ませた給仕が二人、ゲラゲラ笑ひながら廊下でつきとばしつこをしてゐた。春なんだ、テニソンがいつた「若者の幻想がやはらかく戀の思ひに向いて行く」春なんだ。蛙が繁殖作用をいとなみ、オホイヌフグリ――變な名である――が瑠璃色の花を咲かせ、中學二年生の諸君に面皰の出來る春なんだ。僕も今日は終日、頭の中で歌をうたつてゐた。ヴアレンシヤ、ラ モナ、バルセロナー、だが三十五になると、春の幻想も戀の思ひには向いて行かぬ。もう駄目だ。

二

信州にゐる僕の親友、三十七になるのが、このお正月スキーに行つた時、いつたことがある――「つくづく駄目だと思ふ。毎朝新聞を讀んでゐるが、強盗、掏摸、喧嘩、殺人、なぐり込み、すべて三面に出てゐる奴等の年齡を見ると、みんな僕より年下だ。たまに年上のがあるかと思ふと、せいぜい詐欺だ。僕なんぞこんな山の中にゐて、善いことも惡いことも何もしないで老人になつて了ふんだ」と。その時は笑つたが、三十五、六、七といふ年齡は、まつたく憂鬱を感じさせる。氣は若いが、山登りをしても、スキーをしても、夜更しをしても、酒を飲んでも、すぐ參る。四十になつたら仕事にばかり夢中になることも出來よう。七十になつたら日向ぼつこをするやうな氣持で、世間の出來ごとを眺めることも出來よう。だが、僕等の年齡は中途半端だ。二月の末に春めけば、ヴアルセロナを歌ふ若さの殘りと、何ひとつやらずに死んで了ふに違ひないといふ、妙な暗示の初りとが、こんがらがつてゐるんだから。

ピータア・パンには「二つはエンドのビギニングである」といふ文

句がある。が、本當の終末の戀愛は三十五だ。

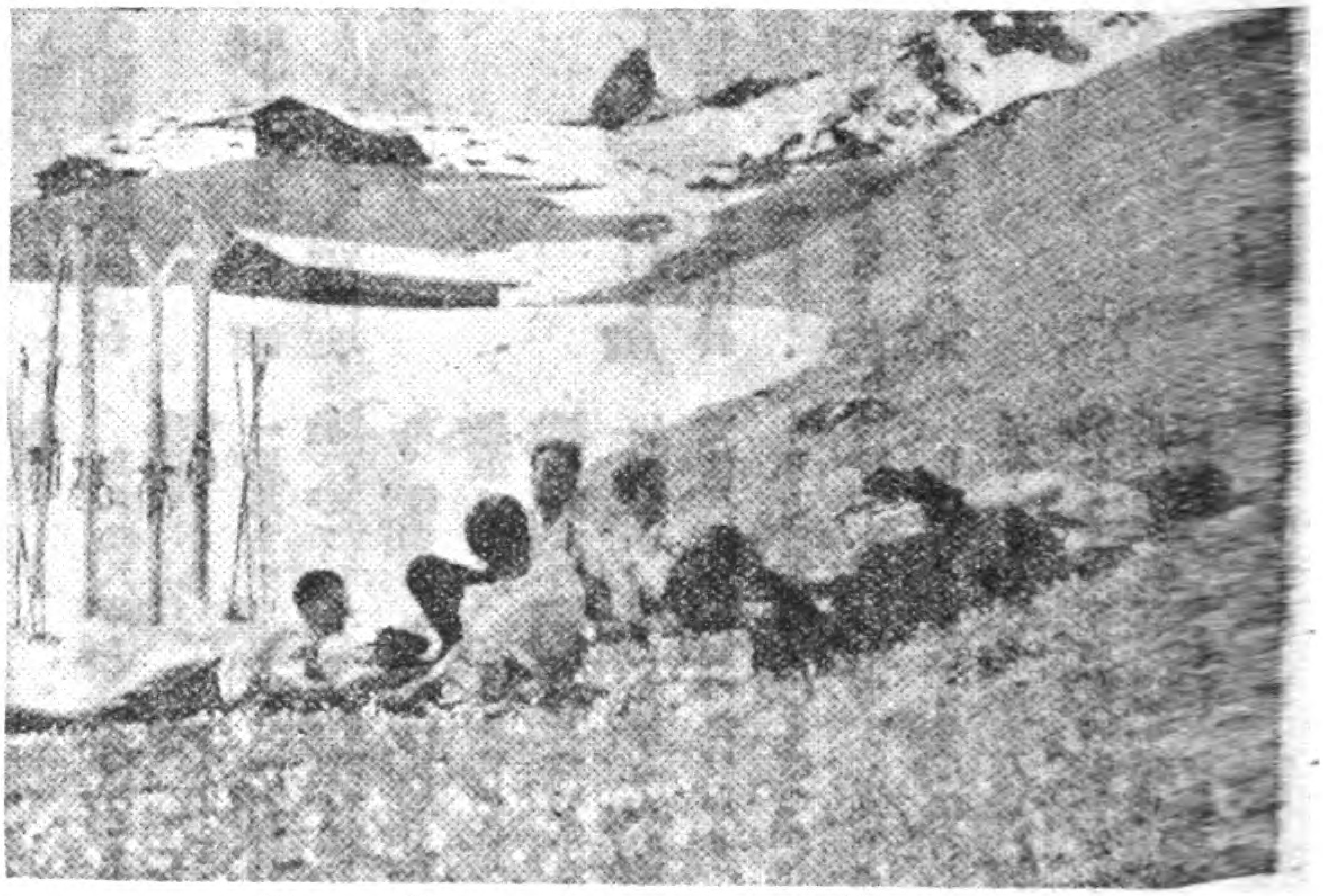
三

蛙の繁殖作用は、淺間しいの、凄じいのといふのを通り過して、むしろサブライムである。

僕は子供の時、四谷の家から永田町の幼稚園へ行つてゐたので、毎朝清水谷公園の前を通つたが、あすこの大きな溝が、春になると、蛙の死骸で一杯になつた。

二三年前の六月上旬、信州から越中へ山を越した時、一日、黒部川の平で遊んだ。岩魚を釣りに、左岸の岩を傳はつて行くと、とある岩の水たまりに蛙が澤山ゐて、例のいとなみをやつてゐた。こんな山の中でさへもと、蛙といふ動物が平素人間に近く住んでゐるものであるだけに、變な氣持がした。

南米には助産蛙といふのがゐる。雌が産卵する時、雄は上から押したり、腹をさすつたりして、それを助ける。「妻君がお産をする時、亭主がクナイペへ麥酒を飲みに行つたりする人間よりも、餘程感心ではありませんか」――これは動物學の教授が講義の中にはさむユーモアの



日回の体驗

一儀である。

四

から暖かくては雪もとけるだらう。いよいよスキーも駄目になる。僕等のやうにスキーが好きで、而も一年に一度か二度しかスキーに行けぬ都會の勤め人は、どうしてもスキーの道具をいぢつたり、ビンドウングの優劣を考へたりばかりするやうになる。從つてセオリストになり、道具オンチになるが、これはやむを得ない。

赤城山のシャンツェで、諾威の選手や日本の選手が、秩父、高松兩殿下にヂャンプをお目にかけた時、ある新聞が「アプローチ君八十米を飛ぶ」といふ見出しで記事を載せた。日本人の名前にはさまつて、ヘルゼット、スネルスルード、コルテルード等の外國名が入つて來るのだから、アプローチを外國選手の名前と考へたのであらうが、これはいささか世界記錄的の間違である。アプローチとは

出發點から飛び臺の踏切りまでをいふので、この長さが増せば飛ぶ時のはずみも増すから、飛跳距離も大きくなる。赤城の記事は三回飛んだ最後に、アプローチを八〇メートルにしたら、A選手三十何メートル、B選手四十何メートルといふのであつた。この新聞の編輯者はそこを間違へたのである。

だが、如何にも間違へさうな間違である。かく申す僕なんぞも、偶然このテクニックを知つてゐたから、こんなこともいへるが、專門以外のことでは、どんな間違をしてゐるか判つたものでない。

五

春のスキーは素敵にいゝらしい。今年は何とかして經驗したいと思つてゐる。あたゝかい日に、半裸體ですべり、疲れたら綠の草原にねころがつて休む――なんていふのは、實に理想的である。ヘンリー・ヘックの「雪・太陽・スキー」には、そんな寫眞が澤山入つてゐる。晴れた夜の星みたいにクローカスが咲いてゐる所の寫眞もある。この本はいゝ本だ。

六

六日の夜、信州の大町から二里ばかり北の、國道に添つた山中のヒユッテに泊つた時の經驗は、容易に消え去らぬ印象を僕に與へた。元來この小屋はスキー客のために建てたのであるが、山中ではあり、溫泉は無し、東京から出かけて行く人なんぞ丸でなく、却つて國道を通行する人の避難小屋として、主な存在理由を持つてゐるのである。

あれは八時頃だつたらうか。猛烈な吹雪で屋根も飛びさうな最中、突然戸があいて、雪まみれの男がよろめき入つた。この小屋から更に一里あまり北にある一寒村の青年で、大町へ買物に行つた荷馬車と一緒に來たのだが、吹雪のために馬がとまつて了ひ、蠟燭も燃えつくした。蠟燭があるなら賣つて貰ひ度いといふのである。小屋には蠟燭が無かつたが、私のルックサックにはフォールディング・ランタンと一緒に數本の蠟燭が入つてゐた。それを二三本出すと、彼は錢を拂ふといつたが、そんな詰らん心配はするなといふ譯で、彼――小屋番の話では兵隊から歸つたばかりで村の青年團長をしてゐるさうである。どうりで言葉つき等もはつきりしてゐた。――は持つて來た提灯に火をつけ、吹雪の中ですくんでゐる馬子と馬と車との所へ引きかへした。

しばらくすると今度は村から、歸りつかぬ荷馬車を案じて三人の男がやつて來た。これ〳〵と話をすると、それで一と安心、先づこゝで待たうと、落葉松の薪をどん〳〵焚くストーヴをかこんで、所謂四方山の話だ。僕は固い布團の中から、スウエッタアを頸にまいた頭だけ出して、半分ウト〳〵しながら話を聞いてゐたが、何でも年内に婚禮があるので村中でその準備をしてゐると、急病人が出來て死んだ。村中が今度はそつちの方の手傳ひで忙殺され、婚禮は日延になつた。所

に連日の大雪で、大町から來る筈の坊さんがやつて來ない。待つのは一向かまはぬが、掘つた墓穴が雪で埋り、何度も何度も雪をかき出してゐる。この荷馬車も、實は葬式と婚禮との兩方に使用する品を買ひに行く序に、坊さんも呼びに行つたのだが、この吹雪ではとても坊さんは來まい。墓はまた埋つたらう。……僕達がねてゐる頭の上で、彼等は遠慮會釋もない大聲を出した。殊に、さつきの青年と、馬子とが辿りつくと、話は餘計盛になつた。が、僕は一向氣にかけなかつた。

一週間ばかり前に、この小屋の番人が蕎麥粉を送つてくれた。婚禮と葬式とがかち合つたあの寒村は、蕎麥の名産地なのである。買つたのか貰つたのか、手紙には只「手に入れましたから」と書いてあつたが、三十五歲のロマンテイカアなる僕は、この蕎麥粉が、あの吹雪の夜の騒動に對するお禮として、あの村の人々から贈られたものゝやうな氣がしてならぬ。

七

歸りのバスに、とても變な洋裝の女性がのつてゐた。派手なので、こんでゐる間は若い人だらうと思つてゐたが、麴町六丁目で急にすいて、後の座席から僕のすぐ前へ坐り直した——それもよろけて、短いスカートの下から膝の上の肉を出した。——のを見ると、どうしても四十は越してゐる。

洋服は意氣であつた。靴下は肉色の絹であつた。帽子は深いトークであつた。[illegible]紗みたいな絹の布をまいてゐなければ、——[illegible]だらうつて？　駄冗談でせう、あれは安藝者が、白粉の衿につくのをふせぐ爲に使ふもので、夜店へ行けば廿錢位で賣つてゐます。——そして御同伴の紳士に、あゝ泣ベチヤベチヤ、表情たつぷりで話さなければ、あたゝかい晩だ、あるひは彼女、僕の幻想を「やはらかく戀の思ひに向けた」かも知れない。その時も僕は頭の中で「パール・セロナの、乙女子よ、來ませずや我が胸に！」と歌つてゐたのだから……。

八

日曜と、病氣でねてゐる時とを除いて、一週間に十二回、僕は大木戸と有樂町との間をバスで通行する。市營、青バス兩方の回數券を持つてゐて、さきへ來た方に乘るのだが、青バスには築地行があるので、同じ三錢の回數券でも、自然市營バスの切符の方が早くなくなる。

僕は孔子樣みたいに品行方正だが、それでも一週間に十二回乘るバスの車掌に、全然無關心ではあり得ない。往きには築地行のバスにばかり、復りには澁谷行のバスの方に、美しい車掌が乘つてゐるやうな氣がする。これはヒユーマン・ネーチユアだ。

暖かになつて一番有難いのは、二重廻しを着る人のへることである。二重廻しはバタバタして、公共の乘物に着て入るべき品ではな

い。坐れば兩方にひろがる。その上に腰をかけると、たいていの人は怒る。立つてゐれば坐つてゐる者の鼻さきを、袖が撫でる。元來和服、下駄等は、ひとりでブラ〳〵なり、シヤナリ〳〵なり、往來を歩くには適してゐるだらうが、多數の人が乘る電車やバスに着て乘つては、他人は迷惑であり、當人にとつては危險である。

九

女車掌に無關心であり得ぬ僕は、同樣に運轉手にも無關心であり得ぬ。幸にして今迄一度も僕の自動車が衝突したり、人を轢いたりしたたことが無いから、そんな風な心配を抱きはしないが、萬一運轉中の運轉手が、突然目をまはしたり、心臓痲痺を起したりしたら、どんなことになるだらうとは、しよつ中考へてゐる。

いふ迄もないが新宿から行くと、麹町三丁目から傾斜して半藏門にいたり、あすこを直角に曲ると三宅坂まで、かなり急な坂である。麹町三丁目あたりで運轉手がウンといつたら、果してどうなるだらう。更に半藏門を曲つた所でそんな事變が起つたら、バスよ、汝は何處へ行く？　である。乘客中に自動車の操縦を知つてゐる人があれば無事である。車掌がかゝるエマーヂエンシイに處する知識を持つてゐれば、これは結構である。さもなくば大變な結果になるにきまつてゐる。



クローカスの花畠

こんなことを考へてゐるので、數日前夢を見た。僕がバスのハンドルを握つて、文字通り夢中でそれを廻してゐるのである。ハンドルは右へ廻せば車體も右へ廻る。が、廻しきりでは理論上、車體は圓を描いて了ふから、一度方向が變つたら、すぐ元へもどさねばならぬ。これは僕も知つてゐた。然し止めやうを知らぬ。右の方に二三本出てゐる棒を、いくら押しても引張つても、何のきゝめも無い。仕方がないから運を天にまかせて、あのお堀ばたの坂を突破し、電車の線路がY字形になつてゐる所で櫻田門の方へ行かず、まつすぐに參謀本部の裏口の坂へのし上げた。するとバスはうまく止つたが、止ると同時に逆行はじめた。こいつはいけないと思ふ途端に目が覺めた。

一〇

紐育の地下鐵道——恐らく他の都市のもさうであらうが——は、運轉手に萬一のことが起る場合、直ちに自動停車をするやうになつて

ゐる。何でも運轉手は制動機のハンドルを常に押へつけてゐるので、この力がゆるむと電流が切れ、從つて電車は停車するとのことである。これは僕が紐育にゐた時、ひどい事故が起り、その時新聞に出てゐた話なのであるが、すべての地下鐵道、路面電車、電氣機關車のが、そんな仕掛になつてゐるのかどうか、僕は知らぬ。事實さうであるとしても、僕は當然だと思ふ。

紐育にゐた時起つた、一番面白い事件は、エレヴエータア・ボーイ達のストライキであつた。彼等にもユニオンとノン・ユニオンとがあり、從つて紐育中のエレヴエータアがとまつて了つたのではないが、所謂ダウン・タウンの何十階といふ建物のが動かなくなつたには、閉口した人が多かつた。十階、二十階と口でいへば何でもないが、餘程の登山家ならばとにかく、普通のビヂネス・マンに取つては、エッサエッサ登つて行くことは、容易ではない。

その時の噂によると、ストライキを起したくても口實を持たぬオペレータア達は、一策を案じ、その一人の、ウルウオース・ビルデイングだかに勤めてゐたのが、婦人の客に亂暴を働いた。表面的には婦人天下の米國のことだから、この亂暴といふのも、あるひは客の前で「ダム」とか、「ヘル」とかいつた程度なのかも知れない。あるひはもつと、すくなくとも男として得をした程度の亂暴だつたかも知れぬ。何にしても婦人は大きに怒り、地階に達するや否や巡査にこれを訴へた。その結果、この男は首になり、彼に同情してストライキが始つたとのことであつた。この話、あるひはストライキ・ブレーカア達の宣傳かも知れぬが、中々面白い。

二

エドワード・エス・モース氏は明治十年から十六年にわたつて、三度日本を訪れた生物學者で、同時に陶器の蒐集をした人であるが、同氏の著述「チャパン・デー・バイ・デー」を讀むと、日本人はみな正直で、杉聴や說教强盜はまるでゐないやうなことが書いてある。如何に太陽の黑點が活躍しなかつた頃とはいへ、これ程日本がよかつたとも思はれない、日本が好きで、萬事に同情を持つて日本を見たから、このやうなことに成つたのであらう。何にしてもうれしい話である。

日本人で外國へ行き、一から十まで外國をいゝと思ふ人と、まるで外國をけなす人と、兩方ある。が、それ等のどちらもが一致するのは、外國、殊に米國の辻便所その他に、樂書が無いといふことである。僕の經驗によつても、それは事實だ。と同時に、便所の壁が、多くはツルツルしたタイル張りで、樂書が出來ぬといふのも事實である。

ペンシルヴエニア鐵道でニュー・チャーシイ州の首府トレントンへ行くと、この都のはづれに短いトンネルがあるが、そのトンネルの内部の樂書は、ひどく猥雜なものである。樂書は勿論他所にも澤山あるが、こゝは多くの日本旅行家が通るところだから、一例としてあげ

る。もつとも今は消したかも知れない。

二

ある倶樂部で聞いた話――。東京の社交界、ことにダンス場や高級な西洋料理屋の常連から、クヰーンと呼ばれてゐた若夫人が、三度目の最後に働いた不義の相手は、活動寫眞の監督だか俳優だかであつた。三度目が最後になつたといふのは、旦那樣に見つかつて離緣になつたからである。それはとにかく、男との最初のランデヴーに横濱へ出かけた夫人は、二千圓をバツクへ入れて持つて行つた。監督だか俳優だかが、これは有難いと思つてゐると、横濱へ着くなり夫人は自動車をとても贅澤な店へ乘りつけ、目を廻してゐる男の前で、一千圓のフアー・コートを買つた。千圓や二千圓のフアー・コートはざらにある。目を廻した男も男だが、やがて事實を知つて、夫人を實家にかへした旦那樣が、夫人の居間や寢室の戸棚を調べると、驚くなかれ税金たつた一萬圓ではないが、洋服が百二十五着、帽子が八十七個、靴が七十八足、靴下が三十ダース（この數字はもちろん正確ではない、いく分大袈裟だらうとは思ふ）といふ始末である。旦那樣は見るも目のけがれとばかり、それを全部夫人の實家へ送りとゞけたが、汝ふたたびこれ等の綺羅を飾り、世人を迷すことなきやうにと、洋服、帽子、靴下は鋏で、靴は斧で、一寸きざみ五分きざみにしてから風呂敷に包んだといふ。支那にも衣類を裂いたり、小刀で穴をあけたりした男があつた。この旦那樣も、多少はそんな感じでこれを行つたかも知れぬが、何にしても豪勇な話である。

三

ある所で「キング・オヴ・キングス」といつたら、居合はせた一人が「君、あれは本當にいゝのかい」といひ、他の一人は「あいつは値段の割にうまくないや」といつた。僕は映畫の話をしかけてゐたのである。これだから話が面倒になるが、映畫「キング・オヴ・キングス」は、恐しく大がかりなものである。そして、同名のウヰスキーみたいに、値段の割にうまくなく、同名の藥みたいに、本當にいゝのかどうか判らぬ。よしんば本當にいゝにしても、いさゝか「大がかりさ」に壓倒された氣味である。

これの試寫を見てゐて僕は、しきりにオーバアアマガウの受難劇を思つた。あれは純眞であり素朴である。中央の舞台の左右の裏には、本當の窓が明いてゐて、そこからは初夏の丘が見え、燕が出たり入つたりした。僕はまた外國へ行き度くなつて來た。考へると、二度目の外遊を終へて歸つてから、まる六年になる。何も外國がいゝとは思はぬが、バイエルンの初夏や、スコツトランドの晩秋には、忘れられぬことが多い。スカンデイナヴイヤやスペインはまだ知らぬ。だがその時と違つて、今では家庭を持ち、今度の所得税は子供が三人ゐるから三百圓控除して貰へるぞ、なんて思つてゐる僕である。これでは行つた

ところで、暑さ寒さにつけて子供のことを心配し、神經衰弱になるかも知れない

一四

まだ二月の末なのに、何といふあた丶かさだらう。このま丶春になつて了ふのか知ら。それとも、また寒くなるのか知ら。とにかく今晩は、蚯蚓も鳴かうといふあた丶かさだ。

子供の時には、こんな晩のあくる朝は、きつと輜重兵第一大隊か、近衛四聯隊かの喇叭が聞え、そして風がすこし強いと、喇叭と一緒に練兵場の砂ほこりが舞ひ込んで、二階の椽側がザラ／＼になつたものである。中學時代には、こんな晩、テニソンの詩を讀んで、若者の幻想」云々にアンダー・ラインを引いた。高等學校時代には、ハイネの「すべての蕾がめぐむ時」を口吟みながら、我が胸の一隅に戀愛の種子をはぐくんだ。これでも僕は詩人だつたのである。今だつて、かう急にあた丶かい日が來れば、四五日さきの月末に支拂ふ可き金や返すべき金のことはすつかり忘れて、幻想にふけりはする。だが如何にクレーヴン・ミック スチュアの紫煙に見入つても、それは、BAH!要するに中途半端な、中年者の幻想に過ぎないのである。

（昭和四年二月二十三日）

自傳的に見た日本社會主義運動史（四）

堺利彦

——目次——

一 木下尚江氏の人物

（A） 婉言微辭、擒縱自在

社會民主黨創立者六人の中、前號に安部、片山、河上、三氏の人物を叙した。本號には他の三人について語る。先づ木下尚江君から。週刊平民新聞第六號（明治三十六年十二月二十日）の『同志の面影』は、木下君を左の如く描き出して居る。

『君は雄辯家である、君の演說は、其組立でも修辭でも抑揚でも、大膽に心を凝したもので、決して一語一字も苟くもしない、故に其一たび壇に立つや、時には糸を繰出すが如く、時には矢繼早に射出す如く、時には鐵砲をつるべ放つ如く、諄々として又滔々として說出し論じ去る辯舌は、少しの穴もなく、少しの隙もない、一句は一句より引締つて如何にも氣持が善い。

『特に君の演說に敬服するのは、其婉言微辭に富むことである、其諷

察が常に意外の側面に在ることである、片言隻辭は無限の趣味と餘韻とを生じ、側面の觀察は強く人の肺腑を衝く、常に君の演說を聞く者は、時には巧妙な淨瑠璃を聞くが如くに面白く、時には危險な輕業を見るが如くにハラ／＼思つたことが有るであらう、古人の「擒縱自在」の一語は、君の演說を評して餘りがある。

「君は雄辯のみならず、又文筆に長じて居る、「毎日新聞」紙上で、論說も書けば三面雜報も書く、社會政治文藝に關する評論隨筆を書く、國文を作る、和歌を詠む、近々の中に小說も書く筈ださうな、多藝多能、口も八丁手も八丁である。

「君は通人である、通人といつても放蕩の事ではない、君自身は酒も飲まず煙草も吸はず、隨分と頑固な基督信者である、而も君は能く世相人情に通じて居る、酸も甘いも嚙み分けて居る人だ。

「君の辯護士時代は知らないが、數年來の君の生活は極めて質素で、綿服の着流し、朴木齒の下駄、麻布の廣尾から銀座まで、毎日テクテク歩きで通つて居るのは、ホツト出の書生のやうだ、年齡は三十五六（以上秋水生記）」

（B）滑稽と熱誠、巧妙と誠實

次に「枯川生」は、それに續いて更に左の如く記して居る。

「予が最も多く君に取る所は其熱誠である、而して予が大いに君に服する所は其熱誠のいよ／＼熱誠ならん事である。

「君の演說には甚だ多くの滑稽がある、君は演壇に立つて自在に聽衆を笑はせるの術を知つて居る、其術たるや、實に巧妙を極めたもので、人をして殆んど其術たる事を感ぜしめぬ。

「或時、君は其演說について予に語つた事がある、あゝして笑はせて置いて、其あいた口の中にヒヨイと苦い丸藥を投げ込むのだと、如何にもソウであらう、殊に甚だ多くの滑稽を弄して居た君が、忽ち嚴肅の態度を取つて、其の丈高き體軀を直立せしめて、其の長き兩手を以て其胸を打ち叩きながら、燃ゆるが如き其腹中の情感を吐き瀉す時、聽く者覺えず其聲と色とに醉はされて森嚴歸依の心を起すに至る。

「君の本色は人を笑はせる前の術に在るのでなく、人を醉はしむる後の誠にあらねばならぬ」

（C）如何にして社會主義者となりし乎

木下君が「如何にして社會主義者となりし乎」については、彼自ら次の如く書いて居る。

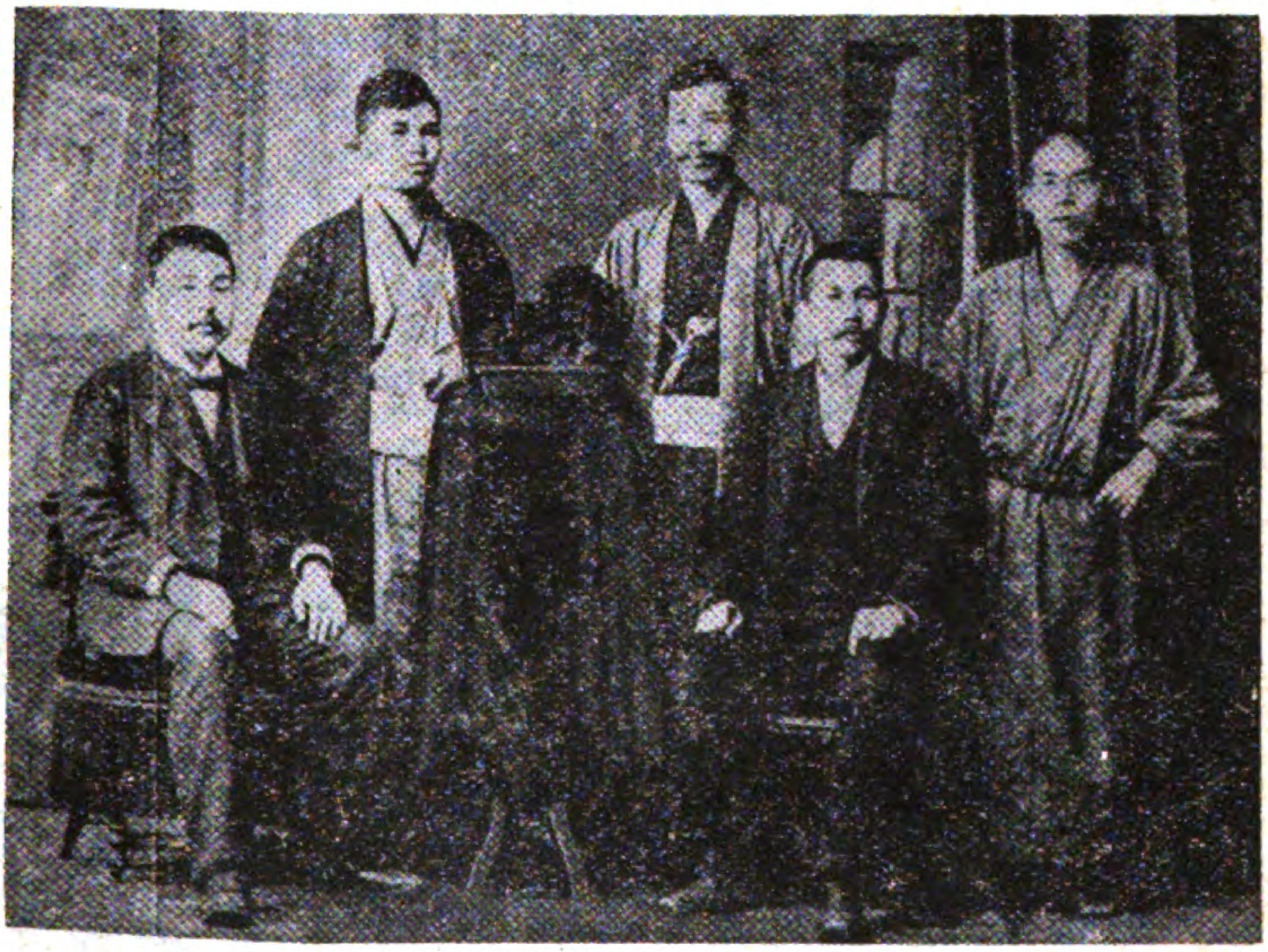
「余は初め少しく法律を學びたり、而して全く之を信じたり、既にして法律權威の淵源に向て疑念湧出するものあり、偶然にも從來輕蔑せる耶蘇教を通じて「神」テフ思想を得るに至り、一段の安意を得たりしなり、斯くて余は四海同胞主義の熱心なる信者となりしも、生存競爭の地上の悲劇は神學の解釋すべき所に非ず、天地の矛盾は新に發見せられて心中の煩悶殆ど名狀すべからざりしものありき、之を慰藉したるものは則ち社會主義の經濟論なり、斯かりし後、顧みて聖書を繙けば一切の疑問は基督の人格中に溶解せられ、其の言論行動の中に

悉く説明せられあるを見、愕然として驚き、欣然として喜べり、故に余の信仰は「基督教的共産主義」にして又た「共産主義的基督教」なり、是れ余が如何にして社會主義者となりし乎との質問に對して答ふべき過去の徑路なり、現在の立場なり、將來の念願なり、」

（D）千感往來の舊因緣

こゝまで『自傳』の原稿の出來た時、私は木下君に手紙を送つて、自筆の『略歷』が欲しいと要求した。すると彼は直ぐに次の一篇を送つて呉れた。こんな長文の珍品が得られようとは、私の豫期しない所だつた。思ふにこれは、木下君が筆硯を棄てゝから以後の廿餘年間に、僅かに數回しか書かなかつた所の、文章らしい物の一つに相違ない。

この一篇には次の手紙が添へてあつた。『貴書ニ接シテ妙ニ意動キ時日大切過トノ事ニ一氣呵成ヤッテ見タガ筆路硬澁頗ニ讀ムニ不堪、幸ニ觀察セヨ、只タ君ノ多忙ヲ想像シ何ノオ手傳ヲモナシ得ヌ身ヲ思ヒ千感往來如是、三月一日朝、尙江、利彦兄』



社會民主黨創立者

前列右から・片山潜・安部磯雄　後列同じく・西川光二郎・木下尙江・河上淸

私も『千感往來』でこの一篇を讀んだ。實は、私が木下君に『略歷』を求めたのにも自然の因緣があつた。この『自傳』に挿入すべき『社會民主黨創立者六人』の寫眞が私の手許になく、安部さんの所も探して貰つたが矢張りなく、結局、木下君に尋ねた處、幸ひにあつた。私は大變に嬉しかつた。私は早速、それを改造社に送り、あとで三枚の複寫を拵へ、木下君にその一枚を原寫に添へて送り、安部さんも欲しいと云はれたので一枚を送り私の手にも一枚を留めた。こんなツイデもなければ、私は木下君に『略歷』などの面倒をかける事を憚つたゞらうが、木下君が右の寫眞を送つて呉れて、『御役ニ立チテ結構』などゝも云つて呉れ、更に（本篇の次回に載せるであらう如く）社會民主黨の創立費の事などまで書いた葉書も送つて呉れたりしたので、私もツイ昔の親しみが回復したのであつた。木下君の

[redacted]書中に「君ノ多忙」云云とあるのは、私が今、東京市會議員選擧[redacted]に立つて居る事を指したのだらう。扨、いよ/\左に木下君の經歷を献せる。

(E) 木下君自筆の經歷

彥兄

明治三十四年社會民主黨の創立に參與するまでの僕の經歷を自分で書いて見よとの御申越。

僕も今年は所謂還曆と申すことに相成り、六十年と云ふ生活の殻を一つ脫ひで眺めて見ると、過去の我が姿と云ふものが妙に判然と我が目に映つる。其れを簡略に言明すれば、大體二た色になる。生慾と權力慾との二つだ。兄の御注文は丁度此の權力慾の消長の一面に當るので、謝罪かた/\聊か告白する。

○

僕は乳と藥と半々で育てられたと言はれる程に、生まれながら極めて病弱の兒であった。僕が此世で始めて襲はれた恐怖で、然かも僕一生の運命を決定したろうと思はれるのは、「死者の蘇生」と云ふ夜話であった。未だ小學へ上がらぬ頃のことだから、六七歳の時であったろう、僕の叔母に話上手な婦人があつて、種々な物語を聞かせて呉れたが、其中に死者が蘇生して、墓を破つて家に歸つたと言ふ話が度々出る。僕は未だ死の恐怖と云ふことを感ずる迄にはなつて居なかつたが、墓中の蘇生と云ふことを想ふと、言葉に盡くせぬ恐怖に壓され[redacted]て、[redacted]ることの出來なかった苦痛を、今以て判然記憶して居る。然うだろう、六つや七つの病弱の幼者が若し地中で蘇生したら、其の儘窒息して再び死なねばならぬではないか。此の死生の疑念と同時に、一個の男性と云ふ意識も其の芽を吹いて、是れが生慾史の他の一面となる。

○

明治九年、八歳で小學校へ行つたが、爰に始めて社會と云ふものに對する憎惡と輕蔑との反感に動かされた。其頃(全國共通の制度であつたろうと思ふが)月謝に上等中等下等の三級があつて、其れは財產の多寡で區別されて居た。一と組の生徒の間には、其の時代の社會狀態が戲曲の如く明白に描き出されて居た。

一、士族の子弟

二、町人の子弟

明治維新後尙ほ八九年に過ぎないので、士族の生活も未だ崩壞に至らず、而かも町人の子弟が、新興の勢力で士族に對抗する樣子は、實に露骨に動いて居た。面白きは士族の間にも階級があり、町人の間にも階級がある。富める士族の子弟と富める町人の子弟とは、妥協同盟して、貧しき士族貧しき町人を侮辱することだ。士族の子弟が家の系圖を持ち出して、我は源氏だとか、我は藤原だとか誇るのに對し、町人の子弟も亦た同じく系圖を持ち出して相競ふ。

此の如き演劇の間に立つて、僕は常に沈默を守つて居た。僕は階級

の最も低き士族で、無論下等月謝の一人だ。家の系圖なぞと云ふものは、見せられたことも無ければ聞かされたことも無い。且つ病弱の悲しさには、腕力で鬪ふこともならず、遊歩時間などにも、僕は大抵人を離れて孤獨で默つて居た。其れ故に僕は「おとなしい兒」と云ふ評判を取つたものだ。然れども僕は決して柔和な心の兒では無かつた。社會呪咀の惡氣は實に此の孤獨沈默の間に釀されたものであることが、六十を越した今日、實に手に取る如く明かに見える。

○

中學の三年頃まで、僕は窃かに農業を思ふて居た。士族の子の行く道は、官吏か開墾の外に無かつたので、官吏と云ふ樣な事は微塵も頭に浮んだことの無い僕は、何處か遠く離れて原野の開墾をやらうと云ふ樣な夢想を描いて居た。(僕の知つて居る老人が現に其れをやつて居たので)此の平和な少年の夢を破つて、半生を惡魔の境界に陷いれたものは、實に其頃西洋史で英國革命の講義を聞かされた時だ。國王を議會へ召喚して裁判すると云ふ一場の活劇を聽いた時、僕は沈默の中に驚歎の眼を瞬いた。(僕は中學でも其頃までは誠におとなしい少年であつた)是れから僕の歴史が一場の滑稽に落ちて行く。僕は開墾を棄てゝ「法律」に志した。

僕は十八歳の春、始めて父母の膝下を離れ、雪深き幾重の山を越して、法律修業の爲め東京へ出で、其頃創立日尚ほ淺き英吉利法律學校(今の中央大學の前身)と言ふへ入學した。其頃日本の政府は條約改正の準備に佛蘭西の法學者を聘して法典編纂中であつたので、先輩中には英法修學の愚を說いて、佛法修業のことを熱心に勸めて呉れる人もあつたが、僕は裁判官や辯護士を望んで法律を學ぶのでは無いから、只だ其好意を謝したのみで、從ふことは出來なかつた。

偖て本郷眞砂町の下宿から毎夜錦町の學校へ通つたが、何日經つても、國王を裁判する法律の講義が無い。或夜學校の歸路、知合ひになつた一人の同學者に、其れとなしに訪ねて見た。すると其人の言ふには、「君の求めて居るやうな問題は、憲法と云ふものに在る。」そこで學校の規則書を調べた所が、三年間の學課に、憲法と云ふ科目が無い。是れは駄目だと思つた。其頃英國法を教授する學校が外にも一二あつたので、其の規則を調べた所、東京專門學校(今の早稻田大學の前身)では、第一年の學課中に「英國憲法」と云ふのがある。成程、是れだと思つた。斯うした因緣で、僕は中途から早稻田へ轉學したものだ。

○

早稻田に於ける英國憲法の教室は、政治科と法律科と合併で、廣い講堂に學生は充滿して居た。僕が出席した始めての日、丁度「主權」の講義であつたが、「王は惡を爲すと能はず」と云ふ格言が教師から說明された時、滿場質問不滿の聲が蜂の巢の亂れた如く起つた。教師は兩手を擧げて其の喧囂をなだめながら、一生懸命に其の「法理」を說いた。――聞いて見ると、法理は然う云ふものらしい。僕が少年立

志の秘密は斯くて全く一場の茶番狂言に終つてしまつた。

○

學校の中途で父の病死。父を葬つて再び早稻田へ歸つた時、何かは知らず僕は自分の身中に一個暗黑の大空洞か氷室の如くに口を開いて居るのを感じた。

明治卅一年に郷里へ歸つて、始めて田舍新聞に筆を執つた時には、他日此處から議會へ行く用意と云ふ事を忘れなかつたが、地方問題で土地の有力者連と衝突し、爲めに新聞も忽ち廢刊と云ふ悲慘に逢着した時、今まで馬鹿にして居た宗教と云ふものに始めて心の向くやうになり、或時『神は在る』と云ふ一大觀念に打たれたと同時に、惡魔は、政治的革命の代はりに、宗教的革命の大破壞を僕の權力慾に教唆した。

彥兒

二十代と云ふ此の青年期は、生慾と權力慾との二重的惡闘期だ。是れが爲めに滅亡する有爲の同胞が如何に多きぞや。二十四歲、徒然なるまゝに受けた試驗に及第して、好むともなく辯護士の法服を着て見たが、一度でも面白いと思ふ事が無かつた。本來虛弱の身は所詮三十の坂を越し得べしとは思はれず、生れて來た甲斐には、何か驚天動地の一と芝居して華々しく幕にしたいと云ふやうな事ばかり考へて居た時、明治三十年の夏、友人の中村太八郞君が東京から歸つて來て、一つ『普通選擧の運動をやらう』との話、笑ふと勿れ、其時の僕に取ては、普通選擧と云ふ事が殆ど野心を滿足させる無上の好餌であつたのだ。事務は中村の長所なので、直に『普通選擧期成同盟會』と云ふ事務所を設け、僕は趣意書を印刷して是を廣く頒布した。無論、識者の冷笑の種。

土地の劇場で發會の演說をした數日、八月の何日、僕と中村とは或る問題の爲に突然入獄の身となつた。感謝すべき入獄よ、若し此事がなかつたらば、僕は兼ねて期したる如く、三十を越さずに滅亡したであらう。翌年二月第一審判決、同年十二月東京控訴院の判決、斯くて一年半の未決監生活を遂げて、再び世に出づると同時に、爰にスポリと故郷の生活を脫して、東京の記者生活に入ることになつた。

○

僕は十年間、四圍の山に對して、只だ空想を描ひて過ごして來た。東京に居る人達は、書物も讀んで居る、物も知つて居る、利巧なのには驚くが、何れも欲望が尋常で、つまらないと思つた。

僕は上京後三四日の時、始めて幸德に逢つた。僕と幸德とを友人にして吳れたのは石川半山君であつた。是より先き、僕が郷里で辯護士になつた時、再び新聞に關係して、其の論說を書いて居たが、「朝憲紊亂」と云ふ罪名で告發をされ、斯くて再び新聞に失敗した後、石川君が聘されて、主筆になつて信州へ來た。僕が監獄を出た時、石川は島田三郎先生に信任せられて每日新聞に居たので、僕は實に石川の世話で每日新聞に入社したのだ。僕は信州で石川から幸德の事を聞いて居

た。察する所、幸徳も亦た歸京後の石川から僕の事を聞いて居たらしい。去れば或日石川の下宿で圖らず幸徳と落ち合つたが、所謂一見如舊と云ふ感情を覺えた。

僕は大の不精漢なので、人を訪問すると云ふ事をしないが、幸徳はチョイ〱と新聞社へ僕を尋ねて吳れた。或時、其頃ユニテリアン協會内に在る「社會主義研究會」の事を話して、僕にも行つて見ないかと勸めて吳れたが、僕は「研究會」と云ふやうな物は嫌いだと言ふて拒絕した。其後、或日、又た幸徳が來て、イキなり、

「君、社會黨をやろうじやないか」

と言つたものだ。

「うム、やろう」

と僕は即坐に承諾した。斯くて僕は社會民衆黨創立者の一員になつた。

○

帝國議會の出來た後、世は既に所謂政治問題から移つて社會問題の時になつて居た。僕が田舍で二度目の新聞をやつた時、論說の題目は多く社會問題であつた。然れども病弱な僕の全身は只だ權力慾革命慾に燃熱して居るのみで、學問研究と云ふ風な餘裕が無い。僕は一個の無學者であつた。「神様」の名をさへ革命の手段にして居た當時の僕だから、苟も破壞革命の材料になる者ならば、何物にでも手を出した。僕が社會黨設立の勸誘に對して、直に幸徳に承諾を與へたのも、不思議は無い。

○

彦兄、

後年、即ち明治三十九年の夏、母の死と共に、僕の權力慾に突然大頓挫が來て、始めて人生の旅に昏迷を覺へ、一度世間と絕つて山へ逃れた時、十月の風寒き或朝、兄と幸徳と三人して四谷通の鰻屋の二階で最後の會談をした事を、僕は鮮やかに記憶して居る。今でも電車であの前を通る時「此處だつた」と、毎々懷舊の深情に打たれる。あの時、僕が

「僕は社會主義では無い」

と言ふと、

「君が然う言ふ上は仕方が無い」

と、幸徳が言ふた。兄は默つて聽ひて居た。二十餘年を經た今日、僕は兄に向つて改めて訂正をする。

「僕は社會主義では無い」

と言ふたのは誤謬だ。

「僕は社會主義を知らない」

斯う言はねば眞實で無い。僕は基督教徒として立つて居たが、然し少しも基督教を知らなかつた。僕は社會主義者として立つて居たが、少しも社會主義を知らなかつた。濟世救民の大義を標榜して、大聲疾呼して居たが、實は社會と民衆とを、我が慾望の犠牲にして居たに過

ぎなかつた。――此の僞善欺瞞の姿が、六十の山を登つた今日、アリアリと能く見へる。何程の人を誤り何程の人に厄介を掛けたか、其れはわからない。眞に低頭平身の外は無い。

○

兄の書に接して、實に久々にて此の如きの筆を執つて見た。兄の一覽を得ば本懷だ。

二月二十八日夜、時は既に一時に近く、
窓外雨蕭々　　　江生

× × × ×

右の中、明治三十九年以後の事に關する一節だけは、本篇の進行上から云へば、こゝに載せるべきでなく、モット後に、他の事件の推移と關連させて載せるべきであることは勿論だが、然しこの部分だけ切りはなしたのでは、折角の文章の情趣を失ひ、その効果をも減殺すると考へられたので、矢張りこゝに續載した。

『四谷通の鰻屋の二階で』の『最後の會談』については、もちろん後に委して書く積りであるが、こゝにもチョット一言して置く。木下君が『兄は默つて聽いて居た』と書いて居るのは正に事實である。然し私は、意見がなくて默つて居たのでなく、むしろ怒氣を抑へるに苦しんで默つて居たのだつた。幸德はそんな場合、むしろ冷靜で、或は皮肉で、或はイヤミで、『君が然う言ふ上は仕方が無い』と最後の返事をしたが、私としては、モット、モット云ひたい事があつた。然しそれを云ふとなれば、無遠慮な面罵になるか、或は少なくとも怒氣を含んだ突つかゝりになるより外は無かつた。それで私は默つて居た。

然し今日――二十餘年後の今日――となつて見れば、私は只だ平然としてこんな事を書き得る。木下君は『低頭平身』といふ言葉で解決をつけて居るが、私は只だ微笑である。

二　西川光二郎氏の人物

（A）札幌農學校、早稲田專門學校

西川君は、週刊『平民』第三號（明治卅六年十一月廿九日）の、『予は如何にして社會主義者となりし乎』の題下に、次の如く書いて居る。

『想起す十有餘年前、大和郡山の尋常中學にありし當時、余は小高き岡の上の一軒屋に下宿し居たりき、毎朝早起戸外を散策し、大和の平原を見下す毎に、若し未開の地に至りて地主となり、其所に平和なる一生を送らば如何に幸福なるべきかの感を起し、此感は余をして北海道の開拓者、若しくは南米移民の率先者たらんとの希望を抱くに至らしめたることを、

『余は此希望よりして札幌農學校に入學せしが、同校に於ける在學二年の間に、或者に動かされて一生の方向を轉ぜざるべからざるに至れり、或者とは何ぞ社會主義是なり。

『當時札幌農學校に社會主義を口にする二三の學生ありしが、余は彼

等の口より始めて此語を聞きし時、電氣に打たれしもの丶如くなり、余が滿身の好奇心の凡て此語に集注するかの如くなりしかば、彼等の一人に向て社會主義に關する書物なきかと聞き、民友社出版の「現時の社會主義」を借りて熱心に夫を翻讀し、次で博文館發行森山信規譯の「新舊社會主義」を熟讀したり、二書の余を益せしと決して少なからざりき、今にして之を思へば、民友社と博文館が余を社會主義者たらしむるの最初の手引となれるは奇と云ふべし。

『今は臺灣殖産局長なる新渡戸稻造氏、當時は札幌農學校の教授なりしが、先生は社會主義に趣味ある人なるより、時々斷片社會主義の事を談り、又大に余等を益せられたりき。

『斯くて在校二年の間に余は全く社會主義の信者となりしかば、農學校に用なしとの感を起し、東京に飛び出し來りて早稻田の專門學校に入りぬ、專門學校に於ける三年間、余は學科には熱心せずして其全力を社會主義の研究に注ぎ、半解の英語にて社會主義の英書を大分に讀み、社會主義傳道の爲めに一身を犠牲に供せんとの決心を爲して校を出でぬ。

『回顧すれば、校を出てより既に四年、未だ斯主義に何の貢獻する所なきも、日として斯主義の傳道に思を及ぼさざるはなきの一事は余の誇りとする所なり、熱心の前に若し道あるものならんには、日本に社會主義を發達せしむるの一器具として、余の身決して無用ならざるべし。』

西川君は早稻田卒業の後、クリスチャンとして内村鑑三氏の下に行き、東京獨立雜誌のグループに屬して居たが、同僚數人と共に叛旗を飜してそこを去つた。その結果内村氏は雜誌をやめて、程なく萬朝報に入社した。その時の事は少しく前々號の記事に現はれて居る。私はその時の事情を深くは知らないが、西川君に『叛旗』の癖のある事が、後に少しく思ひ合はされた。

西川君はそれから片山潜氏の下に行つて、雜誌『勞働世界』の編輯に從事した。彼はその時、始めて社會主義者として、世に立つたのであつた。

（b）粗野、大志、疾風、迅雷

週刊『平民』第五號の『同志の面影』に於いて、當時の私は西川君を次の如く描き出だして居る。

『屢々社會主義協會の演説會を聞きに行つた人は、必ず下の如き感じを起した事があるに違ひない、先づ會場の入口に行くと、丸く、堅く、肥えた、背の低い、薄きたない、毬栗頭の額と眉の間とに縱横の皺のある、稍アメリカ印度人らしき顔付の、粗野極まる一書生が切符を賣つて居る、それから時刻が來て開會となる、先づ演壇に現はれるのは即ち彼の一書生である、ハアあの男が露拂をやるのだなと思ふて、あれは何と云ふ男かと隣席の人に聞くと、あれは西川光二郎と答へる、ハア西川と云ふのはアンナ書生ッ坊かと少々馬鹿にして、マアどんな事を云ふか聞いてやれとさう思うて居ると、其の厚き唇一たび開き、其の濃き眉一たび動き、其の短き手一たび擧ると同時に、忽ち

[redacted]にして疾風、忽ちにして迅雷、[redacted]黒烟高く舞ひのぼり、[redacted]烈火四方に迸[redacted]る、其演説の奔放にして大膽なる、義に少々馬鹿にして掛つた其人のアイタロが塞がらぬ程である、是に於て其人終に感心して曰く、成程ヤッパリゑらいワイと

『君廿七八、未だ下宿屋の一室に居る、紳士にもならず、先生にもならず、只其主義に忠にして、口に筆に少しも其勞を惜まざる所、眞に大志ある者に非ずんば安くんぞ能く斯くの如くなるを得んやと、予は深く君に推服してゐるのである。

『世には粗野を裝うて、氣取らざるを以て氣取とする豪傑連も甚だ多いが、君に於ては其粗野が如何にも自然で、少しも氣取つた所が見えぬ、豪傑は君の最も嫌ふ所である。

『君の文章は隨分無雜で、修辭の妙を君に望む事は出來ぬかも知れぬが、天才の光は到る處に露出して、喩へて之を言へば、砂金を掬ひ取つて打眺める心地がする。(以上枯川生記)』

(c) 烈火、洪鐘、滑稽、頓才

文に秋水は、西川君の面影を左の如く描いて居る。これは實に、私の書き方の足りない所を、誠に善く補つて居る

『君は服裝には少しも構はないが、健康衞生には深く注意して居る、酒も飲まず、煙草も飲まぬ、其代り食ふことは中々エライ、鰻飯の二つ位はペロリと平げる、

『君の演説は烈火の如く洪鐘の如くであるが、一面には實に得易からざる滑稽の天才を持て居る、[redacted]演説中にも[redacted]座談の中にも、時々非常な機[redacted]智頓才を以て聽者を笑はせる、而も君の顔は矢張マジメである。

『君は何の道樂もないやうだ、演説と作文とで隨分多忙なのに拘はらず、暇さへあれば讀書に餘念がない

『勉強家で、親切で、無邪氣な人、そして演壇に立てば猛烈な戰士(以上秋水生)』

三　××××の人物

(a) 自筆の年譜

私は彼の人物を語るにつき、先づ彼自身が書殘して置いた年譜をここに寫す。この年譜はペン・インキで小形のノートブックに記してある。(ノートブックその物は、彼の親友たりし小泉三申君の手に保存されてある。)

× × × × × ×

明治辛未四年
舊九月二十二日夜八ツ半土佐幡多郡中村に生る
明治五年壬申 (二歳)
舊八月十四日父篤明 (通稱嘉平次)死す
明治六年癸酉　三歳
明治七年甲戌　四歳
明治八年乙亥　五歳
明治九年丙子　六歳
明治十年丁丑　七歳

來(或は九年冬か)…(註。こゝに何か書きかけて、やめたものと考へられる。)

明治十一年　八歲

明治十二年　九歲

修道舍なる學舍に孝經の素讀を授けらる

明治十三年　十歲

明治十四年　十一歲

夏中村中學校に入る

明治十五年　十二歲

明治十六年　十三歲

明治十七年　十四歲

註(以上、一年毎に一ページの紙面が取つてある。跡で何か書入れるつもりであつたらしく考へられる。)

明治十八年乙酉　十五歲

中村中學校(高知中學中村分校)廢せらる　生徒多く就學の途を失へり

此冬より學友淡成會てふ結社をなし學會を地藏寺といへる無住寺に設く

十二月林有造君宿毛より中村に來ることあり年長の人々に伴はれて往て其宿處を訪問する初めて天下の名士豪傑なるものを見たり

淡成會にては會員の討論演說と牛肉を食ふことのみを仕事とせり

此頃繪入自由新聞の讀者なりきと記す

內閣官制改革　伊藤參議爲總理大臣

明治十九年丙戌　十六歲

一月十八日　年長の人々と宿毛に行、林有造君を訪ひ同君上京の途中村に立寄らんことを求む　此頃屢々宿毛に往來せり

年長等が縣會議員選擧に運動するを見聞せり

頻りに牛肉屋に行く一人の割前八錢位なりき

二月　板垣退助君銃獵の爲め我鄕に來る有志迎て小宴を張る予も亦席に列り初めて自由の泰斗なるものを見たり、板垣は坐談にて人民の自治の必要、、、賢相の人民の進步に害あるを、靑年身體を强壯にすべきことなど語れり、予は祝詞を朗讀せり。

二月廿二日　海路高知に遊學す、木戶明先生の遊焉義塾に寄寓す(註木戶氏は中村町出身の漢學者で、高知中學校の敎師であつた。)

四月末遊焉義塾高知市鷹匠町へ移轉す。

肋膜炎に罹る五月八日同市本町自然堂病院へ入院す、母上家兄を伴ひ來つて看護する病重く殆ど死に瀕せり

八月　病稍閑　一日鄕里中村に歸る

二十一日　洪水大至市中總浸水す山上の天神社內に遁る

明治二十年丁亥　十七歲

一月再び高知に赴き木戶先生の塾に入り中學校に通學す

七月他の家に下宿す

七月鄕里中村に歸る

八月十七日高知に赴くと稱し家を出で上京の途に就く家を出る時旅費僅に五十錢　二十日高知に着く

井上伯條約改正談判物議を惹き、谷干城農相を罷め板垣高知に歸り谷板垣兩氏の建白書は秘密に謄寫されて全國に流布し四方壯士皆結束して起つ人心恟々、予交る所の年長の人々亦頻りに秘密に畫策する所ありき書籍(史記八大家文等)を賣り四圓五六十錢を得たり

九月七日午前八時汽船出雲丸にて高知發　八日午前二時神戶着

同日長門丸に乘し九日夕橫濱着　同船の書生に伴はれ八時東京着錦町高知屋に投ず

林有造君の書生となり　小石川丸山町岩村通俊別莊に起臥し林通明の猿樂町英學館に通學す
岩村氏は北海道長官として任地にありき
十二月廿五日　保安條例により退去を命ぜらる
東海道を徒步西下す此時未だ汽車全通せず
明治廿一年戊子　十八歲
新年を三州豐橋に向へたり　一月十五日歸鄕
六月廿四日　宇和島に出づ二三友人と九州に赴き長崎より淸國に航せんと計畫せり八幡濱大洲に至り窮困して進むを得ず再び宇和島に返り七月より同地高木行正氏の家に寄食し尋で同氏の紹介にて法圓寺の一室に寓居す此時多少佛典を讀むを得たり九月退去令解除　十月志を得ずして家に返る
十一月二日再び東上の途に付く、大阪に止まる
中江篤介、栗原亮一の諸氏大坂にて東雲新聞を發行しつゝあり此時角藤定憲と共に壯士芝居を開始したる舊友橫田金馬の紹介にて中江篤介先生の學僕に住込めり
△廿二年己丑　十九歲
二月憲法發布さる
東京にて日刊政論發行し中江先生主筆たり先生東雲新聞とかけもちて京阪の間を往來す
十月五日　十二時中江令閉令遂令息に屈して神戶より海路東京に向ふ　翌六日午後着京
隼町に寓し更に表神保町にうつる
明治廿三年庚寅　廿歲
六月病む　一時千葉に轉地す
九月鄕里に歸る

明治廿四年辛卯　廿一歲
四月上京　寓中江家　六月發病一時轉白山心光寺　國民英學會に通學す
七月神樂坂小野に移る鄕里より七圓づゝを送り來ることとなれるより（註。小野とは××の義理の叔父小野道一氏の事）
森川町に下宿す此頃文學書のみを讀めり
此頃より吉原に通ひ始む
此頃の讀書は皆貸本によれり
明治廿五年壬辰　廿二歲
廿一年（戊戌）　廿八歲
二月中央新聞を去り朝報社に入る、但た國々珍聞學說を草する※の如し
卅二年己亥　廿九歲
卅三年庚子　三十歲
三月十一日母を奉じて歸省の途に上る、十四日着、十五日より老母耳順の賀莚を開くと二日
六月四日　麻布宮村町七十三番地に轉ず
卅四年辛丑　卅一歲
四月「帝國主義」を著す、五月社會民主黨（註、圈點は原文）を組織し禁止さる
八月二日　兆民先生の病を見んが爲め堺に向ふ
三日大阪に寄し四日堺に赴き泊す、五日堺妙國寺大寺など見る、六日京都に出で八日歸宅
此頃大井馬城勞働運動の爲上京
八月三十日　大宮政談演說に臨む、是れ予が勞働演說の初めなり
九月「一年有半」版成る

十月小山久之助死す
「續一年有半」成る
十一月十二日　田中正造直訴文
十二月　兆民先生死す
（このノートブックにはまだ餘白がたくさんあるが、一つ面白い事はその最後のページに俳句が一つ、亂雑な書體で、逆樣に書きつけてある。曰く、紙衾抱いてねた夜もありき年のくれ。）

（b）從弟安岡君の見た彼

次に私は、彼の從弟なる安岡秀夫君が先年時事新報に書いた少年時代追懷の隨筆の中から、彼に關する色々の面白い話を借用する。

『年月の流れ行く間に、種々な友垣が結ばれた。其中にもKといつて私より一つ年上の兒供があつた。これは……大勢の友達の中で際立つて頭が好かつた。先づ奇童とか神童とか云ふべき者であつたらう。私も學校の出來が好いので、聊か天狗になつては居たが、此Kには迚も及ばぬと思つた。其れで小學校から中學校へと進むまで、常にKを模範として其足跡をつけることに爲つた。

『Kの家は一郡の都會たる私の鄕里で、一二を爭ふ藥店であつた。……早く父に別れた身の上であつたが、頭の好い上に其……伯父さんが、……却々の學者であつた爲めもあらう、六七歳の頃からして、早くも十二三歳の讀書力があつたやうに憶へる。私が三國志などを讀始めたのも、實はその眞似であつた。

『Kは九歳の頃に、自分の創意に成る小說めいたものを書いて居た。其れは三國志などに擬へた狐と兎との戰爭の軍談で、「兎狐戰記」と題してあつたことを記憶する。……自分で挿畫までしてあつた。

『Kは……十二三歳のときには、自由とか民權とかを云云して居た。其れ許りでなく、自分で小さな新聞を作り始めた。……併し年に比べて體が小さくて、弱々しく見へる此Kなる兒供が、後日に及んで……恐ろしい犯罪の首魁にならうとは、思ひも寄らぬことであつた。

『土佐は……板垣伯の出生地であるだけ、自由民權の本場になつて居た。併し私の鄕里だけは、一郡殆んど皆……帝政黨なるものに屬し、……反動派の根據地になつて居た。……彼等は自由黨を目して……國賊だと認めた。

『Kなども斯樣な環境の中にあつたから、……その手製の新聞も最初は帝政黨の主義であつたが、軈て大の自由主義になつた。……其れは私の字へ來る繪入自由新聞の外、種々な新聞雜誌類を讀み散した影響でもあつたらう。……Kはその頃「自由黨」と題する新聞（自由新聞の前身）をも取つて居た。Kは又「西洋血潮小暴風」と題する、チュマの飜譯小說を耽讀して居た。

『私もKの變說改論には一時の間、甚だ不滿であつたから、……年上の少年組と一緒になつて、Kに壓迫を加へ、「擲る」（鐵拳制裁のやうなもの）とか何とか騒いだものであつたが、何時しかKに說きつけられて、眞先に自由主義の洗禮を受けることに爲つた。

『Kと私とが極小の自由主義者になつて以來、段々と所謂同志者が出

來た。……時々にKや私の家へ集まつては、例の新聞めいた物を拵へ、銘々に偉がつて居た。……矮小の自由黨連は（帝政黨）に對抗する意味で、（帝政黨）の懇親會のあるときに、十人二十人許りの者が、自由だの民權だのと記した紙の旗を持つて其近所へ出掛けた事もある。

『この矮小の自由黨も二三年は繼續したが軈て私もKも高知へ出て中學校に入學することになつたので、自然と解散せられた。併し兒供の癖に天下國家を云云することは、何時までも歇まなかつた。……

『Kも矢張り（高知で木戸氏）の塾に居た。塾には十七八歲までの學生も交つて居たが、一番の俊才と見るべき者は、矢張り此男であつた。時々先生の命令で詩會や書會や輪講や歷史に關する討論會などが催されたが、何時も拔群の成績を示したのはKであつた。今でも記憶に殘つて居るのは、或時の詩會で此男の作つた「春雨」の絕句の結句に「閑聽窓外落花聲」とあつたのが、大に先生に褒められたことであつた。』

（C）年譜の註釋少々

彼は、正式の敎育としては、中學校をも完全には卒業しなかつた。漢學は相當本式にやつたらしいが、英語に身を入れだしたのは、中江先生から強く外國語の必要を說かれてからの事だつた。後に彼はしみ〴〵と私に語つた事があつた。『僕は若い頃、よく國民英學會を卒業して置いた事だと思ふ。實はあの頃、今さら英語などコツ〳〵やるのはまどろしくて、厭で厭で堪らず、幾度やめかけたか知れないけれど、又思ひ返して勉強した。若しあの時、僕が英語をやめて居たら、一生涯どうにも仕樣は無かつたのだ。あぶない事だつた。』

實際、彼の英語は稍や不完全だつた。『ダルーウインの進化論』といふ言葉が、朝報社で彼の仇名になりかけた事もある程だつた。然し私が彼と共同に英文の飜譯をするやうになつた時、私は矢張り多くの場合、彼の判斷の正しい事を感じた。云はゞ彼は、漢文の讀書力で英文を讀みこなすのであつた。

彼が自由新聞に入つた時、彼はそこの同僚たる小泉策太郎（三申）君と最も懇く親善した。私はその當時に於ける二人の交りについて、××からも、小泉君からも、屢々『昔話』を聞いた事がある。彼等二人は或る下宿屋の一室に同居して居たが、二人で一人分の宿料しか拂はなかつた。と云ふのは、彼等は交代で一日置に新聞社の宿直を務めるので、つまり、下宿で寢るのも、飯を食ふのも、一人分で足りるわけであつた。彼等は又二人共同で、自由新聞の續き物の小說を受持ち、一日置にそれを書いて居た。その勞力に對しては、社から月給以外に一日分二十五錢づゝ支拂はれたので、彼等は常に『廿五錢、廿五錢』と云ひながら、その下らぬ仕事を機械的に續けて居た。自由新聞が明治廿四五年頃に於いて、その編輯局の一部に社會主義的傾向の可なり盛んであつた事は、前々號に記した通りであるが、××の入社した廿六年には、その傾向は姑らく沈衰して居たものと考へられる。從つて、彼も小泉君も、そこで直接、幾らかでも積極的に社會主義思想に觸れる機會は無かつたらしい。然し彼がそこで主筆の小松三省氏（前々號

の江口三省氏と同人）を知り、又同じく前々より記載の同紙記者、大道和一、佐藤勇作等の諸氏をも知つた以上、それらの諸氏から多少の社會主義的感化を受けたには相違ない。

彼は自由新聞の地位を失つた後、招かれて廣島新聞に行つたが、そこも面白くなくて、間もなく東京に歸り、今度は中央新聞にはいつた『××が中央新聞に入れるは、余廣島に於て松井柏軒に囑せし爲なり』と、後に小泉君が書いて居る。その頃、小泉君も松井君も戰時中の出兵根地據たる廣島に行つて居て、そこで××と落合つたものと見える。

中央新聞から萬朝報に轉じた時（明治三十一年）、彼の立場は急變した。彼は三十一年十月、既に社會主義研究會の會員となつたこと、前々號記載の通りである。

卅三年三月彼が『母を奉じて歸省の途に上』つた時、私は既に朝報社で彼を送つて居た。彼の歸省が暗に、衆議院議員の選擧に關する様子見であつた事は、うす〳〵私の記憶に存して居る。この頃『彼は故郷の政社に毎月十圓づゝ金を送り居るといふ、政治家は此の如き必要あるや』と、私の日記に書いてある。その點から見れば、彼の立場が急變したとは云へ、彼の社會主義もまた充分ハツキリしたものでなく、矢張り舊式の政治家的態度が多量に殘存して居た事がわかるとも云へる。その時、私が彼を送つた歌がある。『到る處うぐひす鳴きて迎ふらく、君達よくぞ歸り來ませし。』私にはまだ舊式の文人的態度が多量に殘存して居たのである。

彼が『帝國主義』を著はした事、社會民主黨創立に參加した事などは、前々號記載の通り、兆民先生に關する事より以下は、改めて後に記す。

彼は明治三十二年に結婚したが、程なく離婚した。そして同年冬、再び結婚した。彼は新婚の妻と共に母を奉じて、歸省したのであつた。彼の離婚と結婚とについては、種々なる悲話および笑話も殘つて居るが、それらは小泉君が何かの機會に何處かの紙上で書く筈になつて居るから、私は觸れないでおく。

× × × × × ×

以上、社會民主黨創立者六人の人物を叙した。この中、××は死し、木下、河上、西川の三君は去り、片山、安部の二大長老のみが、前者は第三インタナショナルの幹部員としてモスコウに、後者は社會民衆黨の衆議院議員として東京に、現存して居る。私はこの『自傳』の中に於いて、まだ幾度も幾度も、これらの諸君について（河上君だけを除いて）語るべき機會を持つであらう。——（寫眞を見よ）

築地小劇場の分裂について

金子洋文

一

かういふ問題は、表面にあらはれない種々雑多な微妙なものが作用してゐるので公平な批判はなか〳〵困難なものである。うつかりするとます〳〵紛糾を重ねて悪い結果をもたらすおそれがある。

私が聞いたことはかうだ。

土方君は、芝居について、いろ〳〵苦勞してきてゐる人だが、なんと言つてもいゝとこに育つたお坊ちやんだ。我儘な所がある、したがつて全員を統轄して行く器量に乏しい。だから今度の紛糾に際しても土方君についた人が少ない。

また土方君は進取的で從來の役者氣質を好まない、それで或一部のさうした俳優には反感をもつてゐたし、俳優の方でもそれに反撥してゐた。

土方君が愛したのは若い左傾した俳優だつた、然しそれ等の俳優中にはウルトラ・ファンが混つてゐて、（またウルトラの策動もあつて）土方君の思想的進出を社會民主主義として肯じなかつた、したがつて土方君は愛さうとした若い俳優からも背を向けられた。

かういふ狀態の中で、小山内薫氏在世中から醸されてゐた反目が龜裂を生じたのだ。

その反目とは、

思想的には、藝術至上主義、社會民主々義、左翼主義の三つの對立、我儘な土方君に對する反感、それ等一切より重大な經濟的行詰り…………等々。

以上は殘留派の人から傳へきいたことであるが、ある脫退派の人に聞き訊したところ、殘留派の人の言としては穩當な可なり當つてゐる批評とのことだ。が、反對に脫退派から殘留組の策謀や何かを批評したら、もつと醜いことを言はなければならないが、それは最早言ふ必要あるまいと言つて口をつぐんだ。

双方の聲明書以外私の聞き知つたことは以上だ。

二

この事件から私が最も不自然な無理な印象をうけたのは土方君を築地から追ひ出したことだ。

北村喜八君に言はすと追ひ出したのでないと言ふが、それは言葉だけのことであつて追ひ出したといふ印象は築地に關心をもつ何人にも與へたいつはることのできない實感である。

築地小劇場は土方君一個人のものでなく劇場員全體のものであることは言ふまでもないが、而し、土方君對築地は、小山内薫氏同樣に密着した肉體であり血を一つにする生命なのだ、しかも土方君にとつては劇場を所有することより、築地の演出を分擔することにその全生活が依存されてゐるのだ、その人から演出を取りあげて劇場主事に閉ぢ込めることは言ふまでもなくていのよい追拂策であると見られても致方あるまいと思ふ。

かうした印象を與へるのは何のためか、そ

れは殘留派の解明書に感取される不自然な印象と一方築地創生以來の土方君の努力、活動が反映するのだ。

私は殘留派の言ふところの土方與志擧君說を決して斥けるものでない、或はさうかも知れぬ、が、たとへそれが事實としても築地創生以來の同君の決死的努力を思ふ時、またそのため投出されてゐる莫大な費用を思ふ時、殘留派の採つた態度がやゝ正鵠を失しはせまいかと疑はれる。若し殘留派が土方君と共に仕事をすることができなかつたら、潔く築地小劇場を投げ出して新たに結束し仕事を初めた方が穩當で自然のやうに考へられる。

さういふ點から考へて脫退組が土方君を援けて演出の二部制を主張し、それがいれられない故に潔く身を退いたことは私等に共感できるし、自然な行動のやうに考へられる。

土方君の社會主義的進出に對して（思想的左傾といふ流行的假面の下に秘かに策動し）云々の解明書の文字も私には不自然な響きを傳へる。これを逆に皮肉ると（思想的善導といふ反動的假面の下に……………）殘留組が策動し結束したとも言へる。土方君がどういふ考へをもつてゐるか私の知るところでないが、土方君の社會主義的進出を生ぬるいとして反撥した左翼派及びウルトラ・フアンの居殘る殘留派がかういふ解明書を出したことは更に不自然で皮肉である。

三

殘留派、脫退派の二つの流れが、今後どういふコースをたどるか今から豫知できないが新劇運動に對する私の考へでは、その發展の途は二つの階級に依屬するより外にないと思ふ。ブルジョアの御機嫌をとるか、プロレタリアの發展と勝利に合流するか。

ある人々は社會民主主義を反映することに依つて新劇運動の他の發展策があるやうにも說くが、それはむしろ、新劇運動とは別に新國劇や新派劇類似の大劇場運動に屬する發展策となるのであるまいか。

新劇運動はその運動の性質として、演劇に於ける一つの種であるとする說に私も大體贊成である。その種は死ぬることに依つて、換言すれば大劇場をひつくるめた演劇に何等かの影響を與へることによつてその使命を果して自らも亡んで行く……………たとへその反復であつても新劇運動の意義は低下しないし、むしろ一層意義深いとも言へる。

かういふ見地から言ふと築地小劇場を初め多くの新劇團があまりに多く飜譯物に、ことに自然主義作物に執し過ぎて日本の演劇に與へるもの尠かつた憾みがある。

二つの分離した劇團が一つの劇場に立籠つてやつて行くことは經濟的にも演劇的にも得策であつて露骨な感情の吹きまくらない限り實現できさうに思はれるが築地小劇場の名稱の繼承について一破亂起るのでないかと杞憂される。順序から言ふと土方君並に脫退組が身をひいたのだからいざこざないことだが、さうなると劇場が土方君の所有である限り、新らしく再建する自分の劇團にふさはしく新築地小劇場とでも何とでも改稱できる、すると歷史ある葡萄のマークものけられることになるだらうし、そこに感情のいきさつが起つていやなことが考へられるが、願はくばこの際双方とも大きな心を示して、爭ひなく二つの劇團が自分の信じる途を進むことを切に希望したい。

學生社會科學運動の最近相

寧ろ自由討究を助長せよ

阿部賢一

九州のある學校でのこと——そう遠い過去の事ではない。試驗中に警察官がゞ來て、一學生を教室から連れ出した。その譯はその學生の友人の友人が思想事件で檢束されたとかの乘ば散りを受けての事であつた。その學生は無論すぐに釋放されたが、試驗點は零で落第した。

爾來その學校の學生の多くは、校長の權威を認めなくなつたばかりでなく、教室にまで延びて來た官憲の手を何がそうさせたかを、靜かに考へ、深く研究せざるを得ざるやうになつたと云ふ。つまり、、、の、、、な、、と學校當局者の不見識とは、計らずも社會現象に對する學生の批判眼を開き且つ之を深刻化せしめたのであつた。もうそうなれば學生同胞の蹂躪せられた名譽に對する一時の憤慨では終らずに、抑へられた沈默の中に學生の一人一人の心に——學校の禁止する學會を造らずとも——、、、、、、、、、、、、、。

春秋の筆法を以てすれば、、、、、、を近くするもの、それは自由主義的官憲や政府でなく、却つて窒息主義の反動的政府でないと誰が云へよう。

皮肉に微苦笑する眼を見よ——。

× × ×

一個の土瓶の口から吹き出る蒸汽を見てワットは蒸汽力を發明したとか傳へられてゐる、、、一個の土瓶にも譬へられる。外から加はる熱、それは排日や經濟的壓迫やだ。內に資源少なく、人多く、然もこの不景氣に揉まれて不滿と不安とが國民大衆を支配してゐる。都會は商工業の不振、失業、就職難、營養不良、焦燥と失望の際によつて蔽はれてゐる。地方へ行けば農村の荒廢とか農家の疲弊をまづ耳にする。

土瓶の蓋は湯の沸騰と共に鳴る。蒸汽の逃出し得る間は土瓶は安全である。蓋を封じて蒸汽の沸出を壓すれば、それは恐るべきことで

なければならぬ。

古來聰明なる支配者は蒸汽の出口を自由にして社會制度自體の保存法を心得てゐた。大國を料理する者は、小魚を燒くやうにコセツイてはいけないと云はれてゐた。我國現今の政府者の態度は如何である。國民多衆の要望を滿たすべき、不安を除くべき、不滿を醫すべき何等の方法をも講せずして、その耳を蔽ひその口を封ぜんとしてゐる。而してその、、の諸々の立法と行政の爲すところは單に、、、、、、、、、、、と、機を覗ふて迸出せんとする、、、、ではないか。しかも政府權力の機關となつてゐる司法及び行政上の官公吏自身さへが、昔とは違ひ今日では身分と職業の不安定と生活の不安に人知れず惱みつゝ心の內では民衆の惱みに伍してゐるではないか。少數資本家及び特權階級を本位とする政府とその政策が、、、を知つて、、るを知らず、訴ふるに耳を傾けずして徒らに口を封ぜんとする。まことに、、、と思ふ。何故かと云へばそは社會生活上の自然性と彈力性を無くするものであつて、制度と人心を硬化するからである。

× ×

かゝる窒息狀態に閉ぢ込められた社會の其の一隅に、否、其の眞中に學校がある。そこに學ぶ學生は未完成だと云はれる。併し因襲や低級な常識によつて完成せられるよりか久遠の未完成が尊いとせられまいか、いや、未完成であるとしても誇るべき純情の持主として青年學徒は社會の中堅たる價値を多分に持つとも云へる。學生たると勞働者たるを問はず、青年たることが我々の胸奧に測々として迫り來るものあるはその純眞である。純眞なるものにして始めて科學の殿堂に參ずるの資格がある。之を開く鍵を持つ資格がある。今日多くの青年學徒が專門にせよ專門ならざるにせよ涵々として社會の研究に興味を持ち、何物かを把握しようとするのは當然の事であつて、權力を以て抑止し得べきことではない。思索と研究は空に存せずして、現實の生活に發源するものであるからである。

學生の多數は簡單に云つて退ければ父兄の脛かぢりだ。社會の不生產的消費者だ。併しかぢられる脛の持主たる父兄の最大多數は社會の生活苦者である。小地主である。小作人でもある。會社銀行等のサラリーマンである。高からぬ地位の官公吏である。その何れもが今日と明日との生活に對して確信乏しき不安者である。然も身を切る思ひで仕送る學資金が、何年かの後に、同じ不安を持つ後繼者を仕上げることに終るかと考へては心細からざるを得ぬ。仕送りを受くる學生の中で心あり志あるものは、學資金の由來や厚薄や、さては父兄の生活苦の意義を檢討しなければ相濟まぬ氣持となるであらう。學生とは云へ社會の生活苦を嘗める點について云へば、多くは貧しき父兄と同一線上に立つからである。それ故にこそ眞劍なる研究態度に入ることも出來、その故にこそ學生の視野が一求職者たること以上に展開し得るのでもあらう。

學校、特に大學が社會文運について現代的特殊の使命を果たし得る點の一つは、この點

を明確に認識することでなければならぬ。大學がたま〳〵學資金の仕送りを得ることの出來た少數者の一身の功利を滿足せしむるに終るとあれば、餘りに理想が低いと云ふものである。

× ×

國家が國民の、、や、、にまで、、、、、、を試みようとする其事は、國家の權力の强大の故にそうなのではない。それは寧ろ國家とその機能の弱さの故であると觀ねばならぬ弱犬は吼へ、弱虫は强がる。眞に國家機能の强服なる場合は決して騒がない。騒がねばならぬほど自信に缺乏しないが故である。しからば學生の社會研究にまで、鵜の目鷹の目で空騒ぎし、警察的學生主事を置いて國費を無駄費せねばならぬのは現代國家の弱點と無力の暴露でなくて何であらう。心ある支配者であれば、左様な事はしない。

× ×

道徳の、宗教の、武力の、そして凡ゆる舊來の權威が、善かれ惡かれ、失墜しつゝある時代だ。國民が指導標を見失ふて然も生活苦の荒野に彷徨せる今日である。眞理を求むること最も切實であり、之を把握せんとする心情最も純眞なる學生大衆の研究の自由を奪ひ之を抑へんとするは最も嘆ずべき、而してやがて最も厭ふべき文化背反である。今日の急務は、社會經濟の本質に關する學説や思想の何たるを問はず、之を蔽ふにあらずして、その論議檢討を隆盛ならしむるにある。科學と社會は何れも批判によつて進化するのであり公然の批判を抑壓するは進化を阻んで、社會の、、、に謂ゆる、、、、を弄せしむるに終る。

吾々は各國の歷史に學ばねばならぬ。現實の國民苦を直視せねばならぬ。然らば即ち社會現象の本質的認識に直入しなくてはならぬ之が民衆の而して學徒の學的良心の命令である。何れは背後の金力を代表する政黨や政府に多くを吾々は期待しないが、も少し彼等も聰明であるべき義務と責任があると思ふ。

學生と社會科學研究

菊川忠雄

つい先頃の新聞紙上には、『卒業生の就職難の深刻化』を報ずる年中行事的記事と同時に『左傾學生の處分』に關する頻々たる報道が載せられて居る。

この『左傾學生』の處分は、最近兩三年に亘り、學校當局並に文部省當局がとり來つた學生の社會科學研究に對する禁壓が、實質的に何等の効果を支配階級に與へなかつたことを裏書すると共に、從來は『學生の若氣の至り故の過ち』として取扱はれ來つた『學生の思

想惡化』が、支配階級の手による『善導』や『教育』では、、、、、、のものとして『處分』されるに至り、これらの教育機關がもつ階級性を、、するに至つたことによつて二重の意義をもつものである。偶然とはいへ、この兩記事を同時に揭載した新聞紙は、『左傾學生』の根治は、資本主義が『卒業生の就職難の深刻化』を解決するや否やに依存することを說明する社會問題解說圖として役立つたわけである。

從來、入學難と卒業難と就職難は、資本主義社會に於ける學生の三難とされて來たが、これで新たに思想難ともいふべき一難を加へた、これを六ヶ敷論議すれば、資本主義最近の發展段階たる帝國主義日本の學生生活に現はれた一變化といふべきものであるかも知れないが、兎に角、社會進化の必然が學生生活に內在する、、、、、、、、、しつゝある裡に生活する學生の關心が、社會問題の解決に注がれないとすれば、、、、、、、、、、、、、、、、。更に、この社會問題に對する關心が、當然の歸結たる社會科學研究に對する熱意と、、、、に趨き、また、之に對する、、、との、、が、かゝる學生の運動を實質的に、、、、、、、、、、、、。

由來、學生の社會科學研究問題が汎く論議されるに至つたのは、大正十二年學生社會科學運動が漸く大衆化して以來のことである。この運動は、主觀的に見れば、學生生活の內在的矛盾の發展であるが、社會的に見れば、歐洲大戰以後の社會的不安と思想動搖が學生生活の分野にもたらした社會運動に外ならない。從つて、その本質は、大學乃至は高等專門學校のブルジョア教育とはそのカテゴリーを異にする新興無產階級的教育の確立を要求する運動である。この故に學校當局並に支配階級の、、、、に對して、『社會科學研究の自由』乃至は『學問研究の自由』をそのスローガンとして、、、『學生による學校、、』を要求する學生大衆運動乃至は之が社會化されたる學生の政治運動を以て、その運動の組織形態として居るのである。

『社會科學研究の自由』獲得の鬪爭は學生社會科學運動勃興の當初にあつては、相當容易に可成りの成功を收めた。大正十二年五月帝大新人會が、全學生大會に於て、『凡ての權力を學生大衆へ！』のスローガンの下に大學自治運動を指導し、この學生大衆の壓力によつて、最近に至る迄、社會科學研究の自由を獲保し來つたが如き、次いで何日を出でずして、早大文化同盟は、軍事研究團に對する、、的、、を敢行して、社會科學研究の自由を壓迫せんとする學校當局の陰謀を粉碎したるが如き、また、之と前後して全國的に社會科學研究會公認要求の運動が起され、從來の祕密的存在から公然たる學生社會科學研究會の組織をもつに至つたもの、全國四十余校一千余名の會員を數ふるに及んだが如き、何れも、、、、、、を物語るものである。

學生社會科學運動のかゝる大衆化に對する壓迫も、この運動の增大すると共に加重化されて行つた。當初は、學生の思想問題を單に『若氣の過ち』程度に取扱ひ、大正十二年の初めには、某高校に於ては、社會科學研究會員たる一學生に對して、社會科學研究の代りに茶の湯と生花の稽古を勸め、他の某高校に於ては、全高校生を捉へて『マルクスが好きか嫌いか』式のメンタルテストを試みたる如き他愛ない善導振りを示した。然し、翌大正十

三年以來の高等學校並に高等專門學校の全國校長會議が、之が對策を主要議題の一つとするに至つて、これらの高等諸學校に於ける社會科學研究の自由は、『かゝる社會問題の研究は大學に於てなすべきもの』との先附小切手によつて收奪された。ついで、この先附小切手も、所謂京都大學學生共產黨事件なる、、、に乘じて、大學の社會科學研究會の禁壓によつて不渡りとなつた。かくて、支配階級の彈壓は三、一五事件後に於ける帝大新人會の解散を最後として、表面的成功を收め、社會科學研究會の影は學校內から沒し『學校內の治安維持法』的諸取締りの前に學生の社會科學研究の自由は禁壓されたのである。

然らば、かゝる支配階級の禁壓は、學生の社會科學研究を一時的にもせよ死滅せしめる上に、何等かの實質的成功を收めたであらうか。

最近の新聞紙上には所謂『左傾學生』の處分はこれに對して『否』と答へて居る。また昭和三年以來の各學校に頻發する幾多の學校騷動は、その鬪爭を學生自治、校內刷新、學問研究の自由等の要求に集中して、學生の、、、、、によつて着々、、を克ちつゝある。これらの事實によつても、學生社會科學運動の一、、を窺ふに難くないであらう。之を學生社會科學運動に現はれた最近の著しい特徴に見るに、更にこの事實を裏書きするものがある。

最近の學生社會科學運動は、第一に異常なる量的發展を遂げつゝあるを見逃すことが出來ない。、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。しかし、こゝに指摘せんとする學生社會科學運動の質的發展とは、かゝる、、、、の形態にあるのでない。從來の學生社會科學運動は、所謂『學生の本分』を強要された固型的なものであつたが、支配階級の禁壓は、學生社會科學運動に、本來の社會運動の一翼としての立場から、自由に學生を、、し、、さるの機會を與へた。例へば東京帝大について見れば、帝大新人會解散後の社會科學運動は、學生自由擁護同盟東大支部の活動に轉化され、更に、反戰同盟東大支部、學生消費組合赤門支部等の如き、、、、、、を通じて依然たる、、を確保して居る。また地方に於ても、最近の弘前高等學校々長公金費消問題を契機とする學生自治要求運動の如きはその一例である。これらの學生社會科學運動が、緊密に無產階級の政治運動の一翼として、學生の政治鬪爭を最も活潑に遂行しつゝあるは勿論であつて、この點から見れば、學生社會科學運動は、今や、學校當局乃至は文部當局に對する鬪爭から、反政府の鬪爭に躍進しつゝあるといへやう。

次に、最近の學生社會科學運動の特徵は、その、、、、、が、從來の高等專門學校並に大學々生の範圍を超えて、、學校程度の學生に發展を遂げつゝある點に求めることが出來やう。社會の進化は、從來高等學校程度の學生々活に於て提起しつゝあつた問題を、、、學校の學生々活に提起するに至ることは敢て怪しむに足らない。今日の、、學校の學生が英雄主義的な物語りよりも社會問題の書物に注目し、講談本よりも社會文藝に興味を持つに至る傾向は今後益々增大する必然性をもつて居る。學生社會科學運動がこの、、學校の學生間に如何なる、、、を持ち込むかは正に注目すべきものがあらう。（五月七日）

南米大アマゾン河の下航とアンデスの縱走

崎山比佐衛

今回の私の旅行は、南北兩米踏破の第二回目の旅である。第一回は大正三年から五年へかけて三ケ年、第二回が一昨年十一月から本年二月まで、足掛三年滿十七ケ月の旅であつた。第一回の旅より歸つて海外に植民的自覺を持つ人材を送ることの必要を感じて、海外植民學校を創立した。今日迄に三百余名の卒業生を出して、南米其の他各地に貢献をして居る。此等出身者の活動狀態を視察し、併せて南米の山河の大自然に接すると云ふ事が私の旅行の目的であつた。

南米は、今日我移民の爲に門戶を開放する唯一の大陸で、最良の發展地である。現在十二萬餘の邦人が活動して居る。

此の南米大陸の中心をなすものが、アンデス大山脈で、これに源を發して東流するものに、アマゾン、オリノコあり、南流するものにラプラタ河がある、リヤノス、セルバス、パンパの三大平野は此等の河川が造つた沃野である。此の沃野を背景として活動する者達にとつて、其の源をなす、アンデスの山とアマゾン其の他の河川とを忘るる事はどうしても出來ない。エンシヤーダの上にのる一塊の土も亦其の恩惠によるのである。

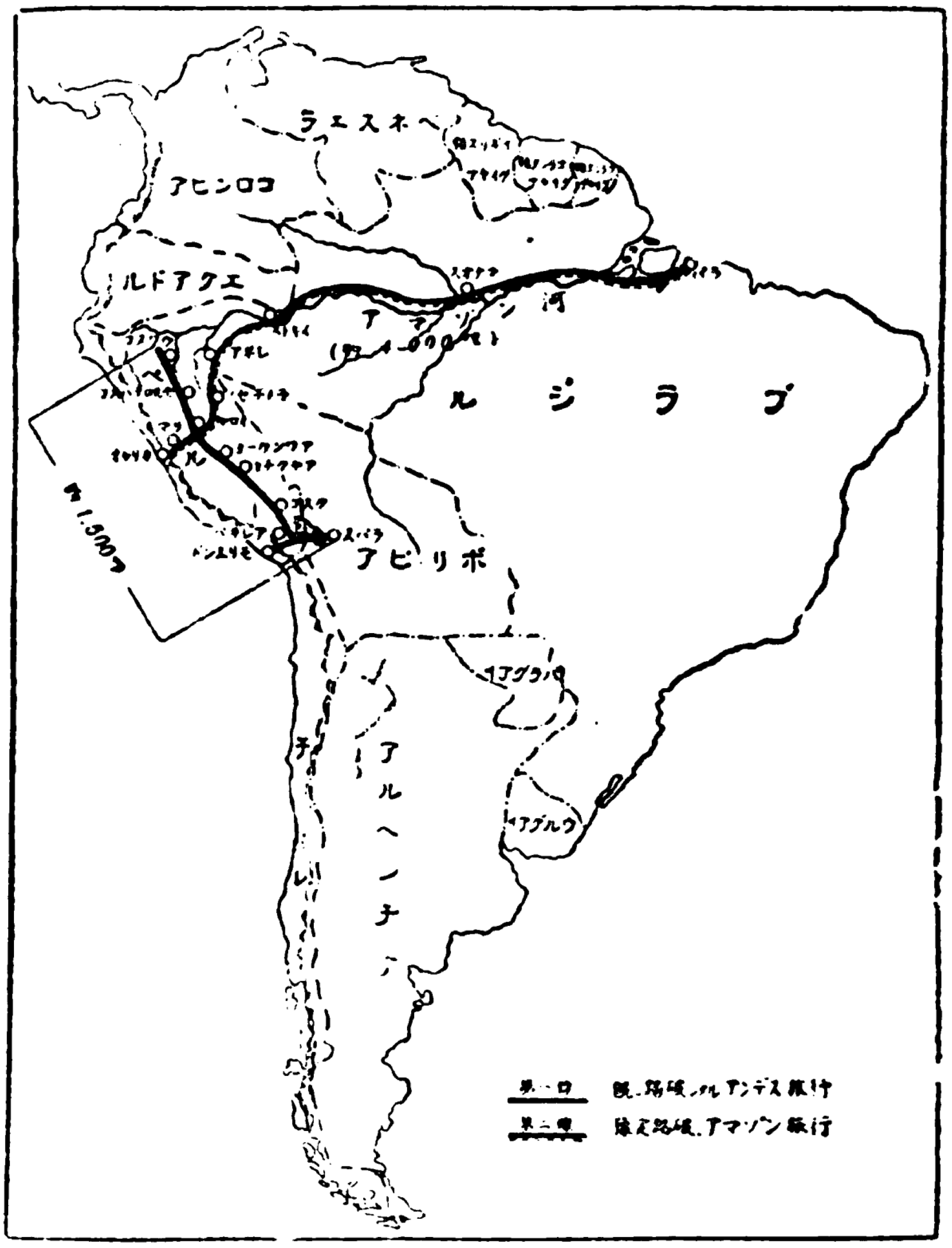
邦人未踏のアマゾンの奥地雄々しく聳立つアンデスの勇姿、此等の神秘境に接し、その懷に入らんとする私は、昭和二年十一月下旬横濱を出帆して旅程に上つた。此の行程は頗る難行で世人より危惧の念を以て迎へられて居た。が、私は容易に成就し得る自信を持つて居た。それは、此の恩惠深き大陸の父アンデスと、母アマゾンに見へ、其の懷に幼子の如くなつて抱かるゝ限りなき懷かしみによつて何等の憚も危險をも感ずる事が無かつたからである。

只身を潔うし心を正うして、素の心の自然に添うて行かねばなら

ぬと深く覺悟した。そこには何等の冒險的の考へも、營利の考へも無いのである。

昭和二年一月上旬、南米ペルー國のカイヤオ港に到着した。其の附近の視察を終つて同國南部のモリエンド港に至り、ペルー南方鐵道によりボリビヤ國の高原へと目指して上つた。

ボリビヤ國は南米のチベットと稱せらるゝ國で、西半はアンデスの高臺で東半は平原である。汽車はアルト・デ・ラパースに達し、こゝより漸次擂鉢狀をなす急傾斜面を迂回しつゝ千四百尺を下つて、首府のラパースに到着した。此處は尚一萬一千五百尺の高度を保つ、高原の大都市である。人口十五萬、邦人の在留する者百四十名である。家屋は二階建多く赤瓦を以て屋根を葺き、大小十個の公園、二十數個の寺院、政廳を始めとして諸官衙、銀行、學校等の宏壯なる建築物が並び、國内第一の繁榮地である。その背後に聳ゆるボリビヤアンデス山脈中のイリマニ峰は、二萬數千尺の勇姿を表はし千古の白雪を頂いて、高地の澄める大空に屹立して居る。此處は高地で燃料に乏しき爲、ヤマと稱する動物の糞を乾して焚くのも面白い習慣である。ヤマの群が小さい袋を背負つて山から下りて來る。これは此の高原特有の家畜である。



在留邦人は商人多く、曾てゴムの盛況當時マドレ・デオス河方面に自然ゴムの採集に入り此處に留まつた者が多いのである。立派に日本人會が創立せられ、山本常次郎氏（石川縣出身）が會長をしてをられる。氏は以前に花の波と稱し一時相撲の強者であつて立派な體格の持主である。土人は木を切る事が非常に上手であつ

て、日本人は普通彼等の半分位しか切れないのであるが、氏は二倍以上も切り倒して土人を驚かしたと話された。會員が皆誠實によく經營をやり、着々堅實なる地盤を築いて居る。

私はこゝよりペルー國のウアヌコに至る約一千五百哩を縦走すべく出發した。最初は鐵道でグワキ港に至り、有名なる世界最大の高地湖たるテイテイカヽ湖に達し此の湖水を縦斷する事になつた。

テイテイカヽ湖は日本語のチヽカヽに通じ甚だ親しみ易い感がする。此の湖水は一萬二千七百尺の高所にあり、我近江の琵琶湖の十三倍半の面積を有し、水深平均百尋に達し淡水で百七十七哩（青森より函館に至る航路の二倍餘）の汽船航路を持つて居る。宛然大海に異ならない大湖である。湖内に大小二十五個の島々があるが、最大なるものを「太陽島」と稱して古代インカ帝國の廢墟を存じ、「太陰島」は月を崇めし場所として知られ、他の島々夫々幾多の遺蹟を數へて、古代インカ民族の隆昌なりし昔を偲ぶ種ならざるは無い。



ラパース市外（南米ボリビヤ國）

千餘噸の大汽船インカ號に人となり、遠くイリマニ峰の秀麗を眺めつゝ舊蹟に富む島々を廻りて進む。船のデッキには、遙に偲ぶ民族の消長や大自然の雄渾に、感慨深き旅士の數も亦多く、身一萬二千尺の高處にあるを忘れて只神境に彷徨するの感がある。

湖水に注ぐ五つの大河は、アンデスの雪融の水を滿々と湛へて絶えず送り込んで居るのであるが、テイテイカヽ湖よりデスクワデロ河となりポーポー湖となり遂に排水口を發見する事が出來ないのである。其の水は蒸發するか、地下に潜りて逸するか、地理學上の一驚異である。蘆舟トトラを操縦して沿岸貿易に從事する土人の小舟も亦湖水風景として見逃す事の出來ないものである。

プーノ港。百四十七哩の航路を終へて船はペルー國のプーノ港に到着する。こゝは人口一萬有餘の都會で、

海拔二千七百尺の高所にある。これより二百十哩北行してペルーの舊都クスコに行く。

クスコ市は丘陵性の山地にあつて、海拔一萬二千尺の高所である。人口三萬餘、往昔インカの首府となり、當時二千萬の民を有したりと稱せらるゝインカ文明の發祥地である。最も古い大學があり、邦人が八名商業に從事して居る。往時の文明を尋ねて觀光に來るもの研究に來るものが甚だ多い。

インカ帝國はスペイン人ピサロの侵略によつて顚覆せられ、其の貯藏する多くの金銀、財寶を掠奪せられて滅亡したのである。往時に於て既に一種獨特の文明と社會組織を有し、アンデスの高峰中にあつて立派なる社會を建設して居た民族である。種々なる點より邦人と相通ずる處が多い。如何なる程度に於て文化に達したるか之を知る事困難であるが、其の彫刻建築等の遺蹟を尋ねて一驚を喫するのである。殊に石垣の技術は驚くべきものでサツシユサワマンの城跡を見るに、市の後方七百呎の高所にあつて、巨大なる石を以つて疊んである。大なるものは高さ三間巾二間半奥行二間と云ふものあり、此の大なるものを如何にして運びしか、また之を積むに精密に良く合せて今日尚間隙を生ぜず、如何なる技術を用ひしか眞に驚くの外はない。

城の外方遠く要所々々を堅めし所をタンボと稱し、我國の砦の如きものがある。こゝを小石を以て疊む技工は到底今日の文明人にも爲す能はざる處で、自然石は風雨の爲に崩るゝも積上げし石は決して崩解して居ないのである。



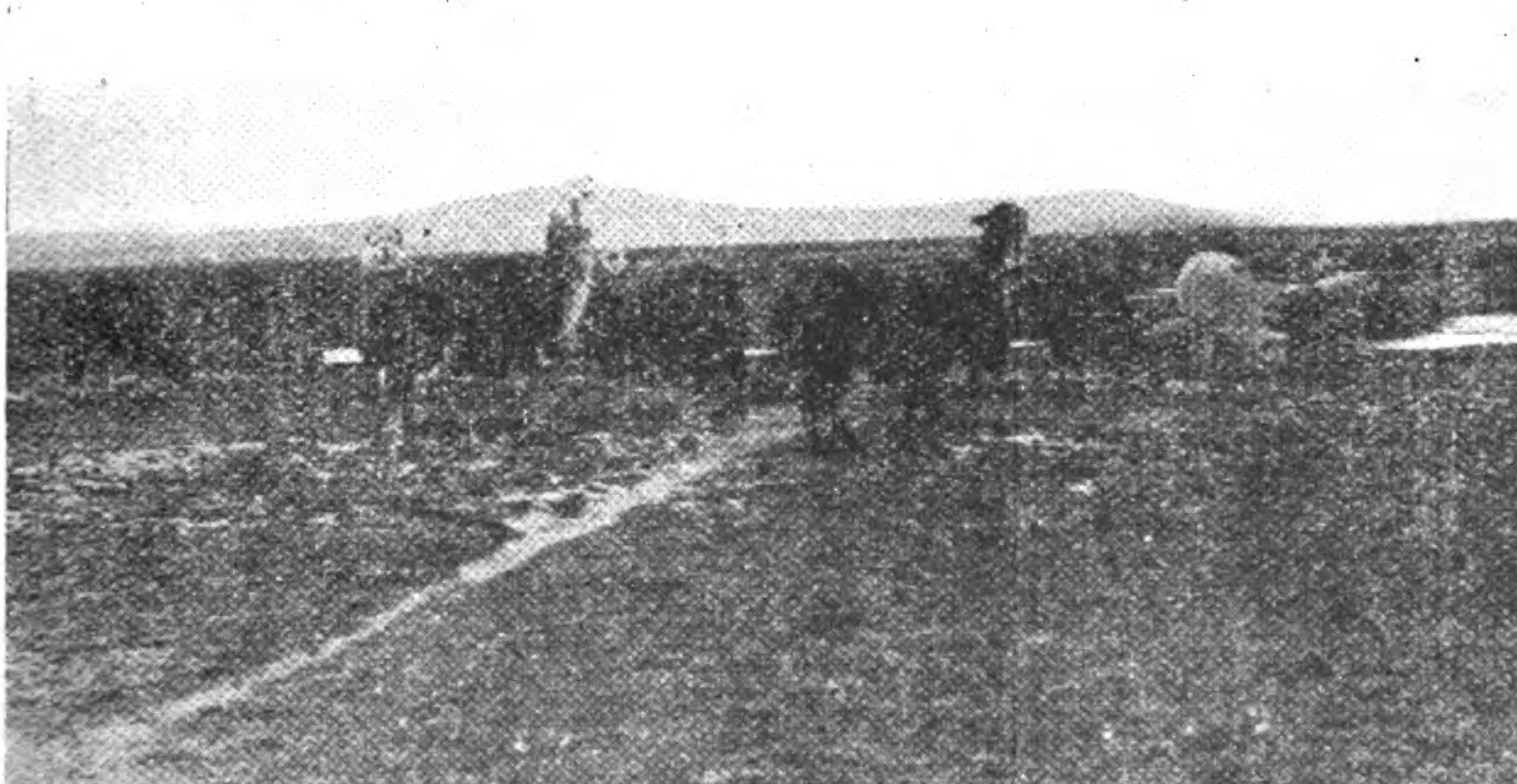
ボリビヤ國ラパースの岡よりイリマニ峰を望む

此等の人種はケチユア族に屬し、今日極めて溫順なる土人である。アンデスの高原に廣く散在して居る。私を見た彼等はハポネース、ハポネースと云ふて非常に尊敬してくれた。ペルー人口の七割を持つ之等の人種、往昔文明を建設した之等の民族が邦人に共通した種々なる點を持ち、吾人に最も親しみ易

い。

私は南米の父アンデスの高原中に於て之等親しみ易き人種に接し、若しや日本人と同じ祖先ではなかつたかと思ふ時に非常に深い感激に打たれた。これが果して同一祖先であると言明する學者の出づる時に南米は更に一層緣故の深い處となる事であらう。是非將來に於てかゝる研究學者が出て欲しいと思ふ。

これより鐵路を離れてアヤクーチヨまでは二百哩、殆んど峻峰と溪谷である。山の中腹にゴロ石の小路が作られてある。私は一頭のムーラ(騾)を百二十圓出して購入し、風呂敷の如きもので中央に首を通す穴のあるマント(ポンチヨ)を買ひ入れ、土人を雇うて一行三名いよ／＼父に見ゆると云ふ考へで進んで行つた。少しも焦心らず急がずムーラを勞はりながら進んだ。此の附近は高所である爲に草木なく、斷崖の中程に道は出來て居る。二百哩の間に一萬二千尺以上の雲降る處、三千尺位の甘蔗の茂る溪谷を七個所も過ぎる。如何に路が險惡で急坂であるかは御想像がつかうと思ふ。元來ムーラは上り坂が得意で下りは下手である。或時はムーラを下りて之を曳き、或時は數百尺の上に懸れる吊橋を通つて、十八日目に漸くアヤクーチヨ市に達した。其の間家に寢たのは僅か七晩で、十一日は土人の軒下や岩窟に寢て行つたのだつた。案內者はあれども言語が通ぜず、只自然の雄大なる懷に融和して人の身の微なるを感じつゝ進んだ。



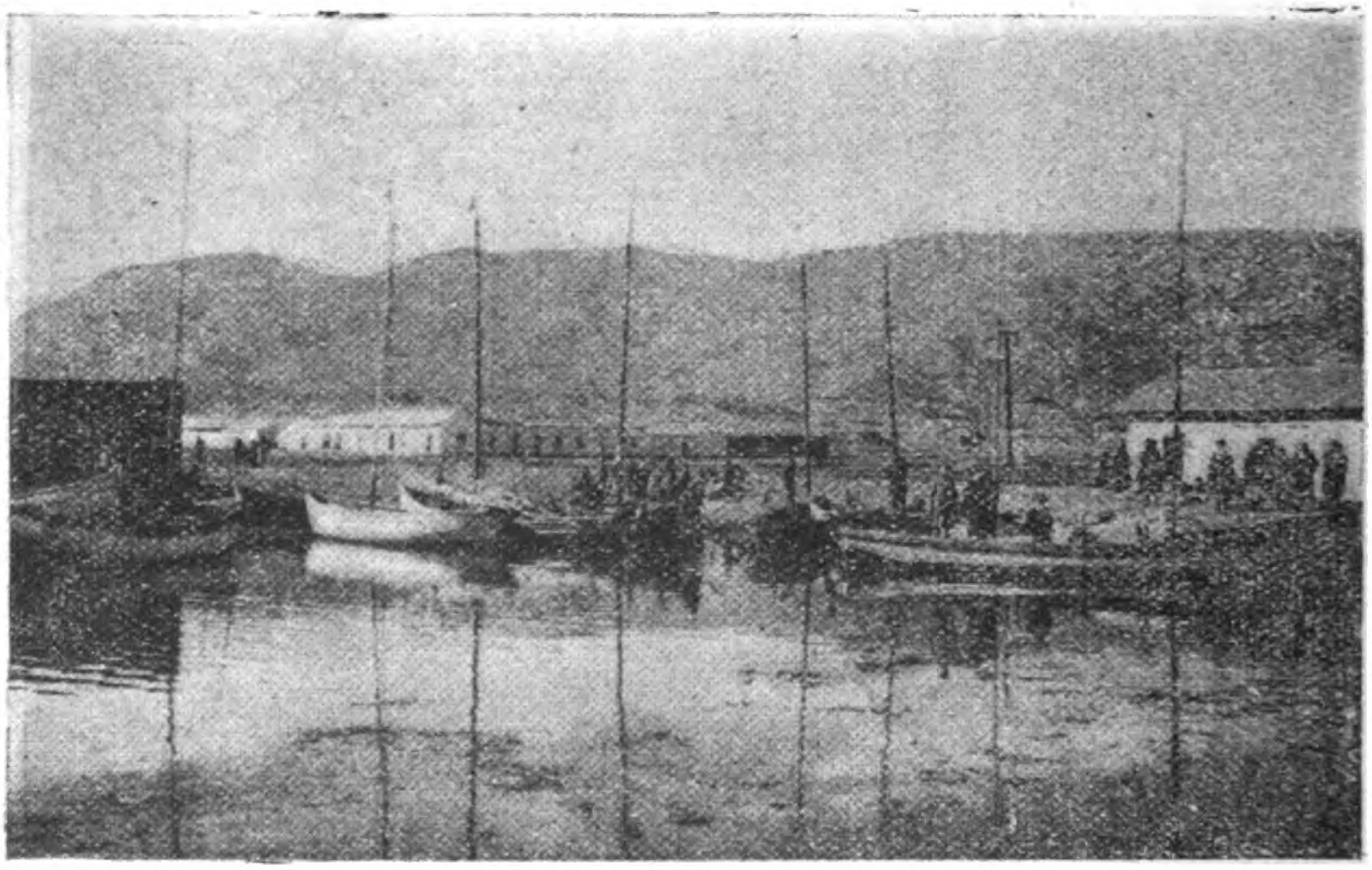
南米ボリビヤ國高原にヤマ遊ぶ

私のムーラは最も良き從者となり案內者となつてくれた。或時、夕方になり宿を求めて進むが更に家なく、また野宿を覺悟して行く中漸く一部落に到着した。こゝに暫く休む中に十二、三名の騎馬の一隊來つて飲酒亂舞を初め、亂暴なる野卑の風丰は一見して眞面目の職業を持つものでない事を直觀したのであつた。元來身に一物の護衛の品をもつけず、金もなし、易々として彼等の

爲すまゝに委せて漸く危地を脱した。若し私がピストルとか其の他の武器を持つて居つたなら命を奪はれたかも知れない。ムーラはすべてを馬耳東風と聞き流して相不變ゆう〳〵と進んで行く。其の後は或夫人の一隊と合して之と同行する事が出來た。

アヤクーチョ市が遙の下方に見え出した時私のムーラ（イリマニ號）は一聲高く嘶いた。十八日間一度も嘶かなかつたムーラはさも嬉しさうに見えた。高くコンドルの飛來するを眺め、一回も危險に遭遇せず此の大アンデスの旅行の一部が無事に終る事を限りなき天父の惠みと感謝した。

アヤクーチョ市は一萬二千尺以上の高所にある。ペルー獨立最後の地點である。邦人石川貞重氏（靜岡縣出身）は此の地方の最も信用ある人である。目下この地よりリマ市に送る金銀其他重要なるものを引受けて之が輸



テイテイカカ湖岸のグワキー港

送の任に當つて居る。此れは此の地方の人々に最も信用のある人でなければ出來ないのである。獨立戰爭の時將軍の宿つた立派な家に住つて、土地家屋も持ち、有福な生活をして居る。かゝる地點に邦人が非常の勇氣と信用とを持つてかゝる仕事に從事しつゝある事は邦人の誇りである。切に同氏の健康を祈つて別れた。明方になると何處よりか聞ゆるソザロと云ふ鳥の聲に旅の身に亦何となく淋しさが感ぜられた。

更にアヤクーチョよりセロデパスコ市までは自働車、狹軌、廣軌の乘物がある。其の途中にアワンカーヨと云ふ處がある。邦人が信用を得てゐる事業の見る可きものがあつた。鈴木勇氏（山形縣出身）奧川勇生氏（山口縣出身）は重きをなす成功者である。

漸くにしてセロデパスコ市に入つた。此處は殆んど熱帶の赤道に近い處でありながら夏の無い國である。年中ストーブを焚いて居る。一萬四千尺の

高所にあつて世界一の高い都會である。赤道近く炎熱なる可き此の地のかく温度低きは全く土地の高き爲である。住民の多くはアンデス山中より金銀を採掘する爲に來て居るのである。

これよりオハラ川に沿つてウアヌコ縣ウアヌコ村の星製藥農園に入る事が出來た。此の農園はコカと稱するコカインを採集する原料を栽培して居る。支配人は澤田氏と云ひ、此の僻地によく奮闘をして居る。

南米の父アンデスはかくして私を安らけく、愛兒の如く此の地點まで送つてくれた。私は一層の元氣を以て更に母たるアマゾンに見えるべく一旦ペルーの首府リマ市に引返した。

四月廿七日、在留官民の盛大なる應援と袂別の辭にペルーの首府リマを出發して、いよ〳〵アマゾン本流の上流であるウカヤリー川に向つた。見送りの方々よりは「決して引き返すな」「到着したらば必ず電報を」と種々激勵の言葉を送られしを思ひ浮べつゝ、汽車は急坂をよち登りオロヤに至る間に十三回も引返し運轉を行ひ、或はトンネルによつて道を造り、或は千丈の懸崖に吊橋を造つて鐵路を敷き、漸くにして一萬五千八百六十五尺の高度に達するのであつた。小供や弱い婦人は酸素吸入によつて僅に呼吸すると云ふ有樣である。



チイテイカカ湖蘆舟トトラ

オロヤから、ラメデセーまでは急坂の下りである。自動車が通じて居るが此の運轉手は乘車するに先立つて、必ず「サンタ」の廟にローソクを上げ安全を祈願し乘客も亦參拜して乘車する。如何に眞劍であるかが判る。眞に一草一木もなき數千丈の斷崖の中程を自動車は徐々と下つて行く。車窓より眺むる谿谷は千仭の谷、自ら肌に粟の生ずるを覺えた。而し私共の自動車は無難に此の難關を過ぎてラメデセーに安着した。そしてこゝにて直ちにチンチューの土人の居るのを見て、アマゾンの上流に來たなと云ふ事を直観した。チンチューの土人

は赤い入ずみをなし腰に刀をさして居る。奥地の森林地帯に居住する者が何かを求めて人家のある所に來たのであらうと思はれる。土人は私の姿を見ると直ぐ大木の蔭に隠れて、行き過ぎるのを待つてまた歩き出した。絶えず何物にか恐れて居る様な風があつた。かゝる態度は長い間の習慣から來て居る事と思はれるが、これは決して良い習慣ではなく、萬人の中を堂々として行く氣概が無ければ大將となる事は出來ない。須らく吾々特に海外に出でて世界の人々と交る者はオープンリーにならなければ人の頭になれぬと思ふ。

ラメデセーよりウカヤリーの支流パテチヤ川まで、幸ひに一ヶ月一度の便である郵便の一隊と合して同じく馬上の人となつた。

こゝより先は大森林地帯となり行けども／＼千古斧鉞の入らざる森林である。同じく急坂ではあるが目を遮る樹木のある爲にさほどの危險を感ぜず、すべてが原始の狀態そのまゝに眠つてゐる。あたりの落葉、枯木は馬の足を膝上まで沒して遅々として進まず、道は捗らない。加ふるに常雨地帯とて、雨は木の葉傳ひにぽつ／＼と降る。無風地帯なるが故に梢を渡る微風だにもない。水音のみは何處よりか高く聞えて、莊嚴と云ふか神秘と云ふか何物にも譬へるものゝない鬱蒼の氣持に満たされて進んだ。

行きてパリニヤ川の溪谷にかゝつたとき、急に人聲騒がしく一行の周圍を取卷いた者共があつた。驚きの中に眺れば彼等は無期の囚人であつた。一行の中にはイキトス行の婦人も交つて居つたので囚人の眼は異様に輝き、人の本能のさみしき情慾は期せずして暴となり、動作となつて現はれ、看視の人のある中に喧騒を極めたのであつた。囚人は今千古の森林を切開いて後の世の人の爲に道路開鑿の事業をして居るのだ。かくて果つる罪人の爲に一掬の同情の涙を自ら一同はしぼつたのであつた。

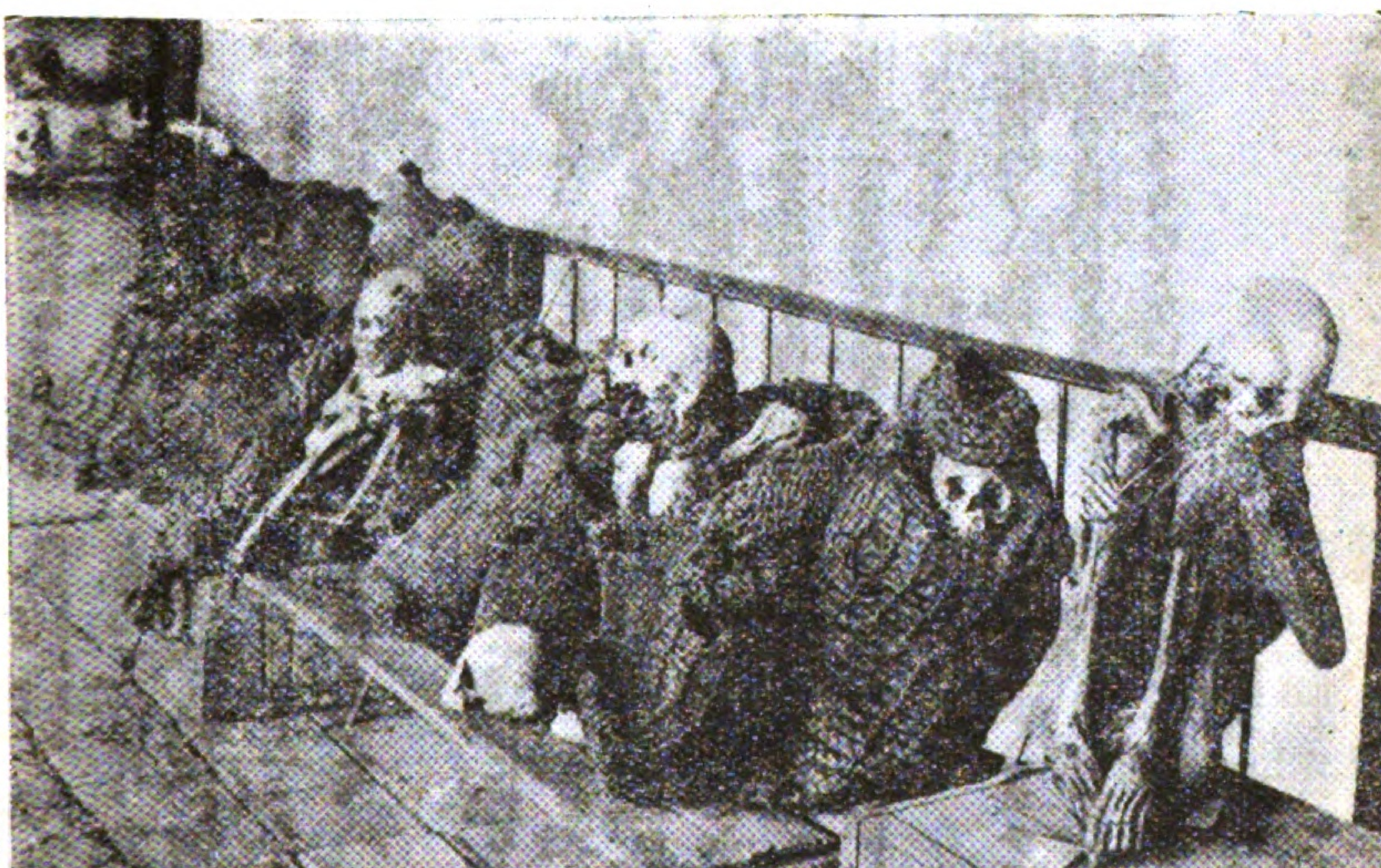
かくて常雨に煙る大森林の中を、或は道路を造り或は大木を切つて道なき山道に道を求めて既に八日の行程を辿つたのである。

高僧日蓮が身延の山を下つて常陸に行くときも五月雨の日の馬上に人となりて森林を踏み分けつゝ進んだ記憶を思ひ出して、せめて私の馬がかく感じてくれる様に等祈りつゝとぼ／＼と行かねばならなかつた。雨の八日は過ぎし半歳の旅程そのものより尚遥に長き思ひがした。

而して漸くパテチヤ川の川岸に達し、筏を用意して之に一同は乗る事が出來た。仰ぎ見ると鬱蒼暗き樹木の海、兩岸より覆ひかぶさる蔓植物の間を、筏は水の流れにまかせて進む。太古そのものである。下る程に我等の一行はカノーに分乗し、更に之を二隻づゝ連絡して屈曲せる川の面を走つて行く。と、遥か先方に一隻の筏が頻りに旗を振り合圖するのを見て近よれば、大ウヅマキの中心に入りて自由を失ひ助けを呼んで居るのであつた。直ちに全力を擧げて救助する事が出來

た。筏の上には五人の人々が二ケ月分の糧食を用意して、リマを立ちアンデスの裾より下つて來たと言つて居る。かれ等はドイツ人であつた。私はあゝドイツ人なる哉と深く感じた。未だ邦人でこゝを通つて河口に達した者が一人も無いと云はれる此の地帶を、五人の人々が決死を覺悟し險を冒して今下りつゝあつたのであつた。彼等の徹底せる考へは既にこの地點にまでも及んで居る。かくて一行は處々郵便の用事を濟せて、軈てウカヤリーの本流に到達した。その途中一匹の大蛇も一頭の鰐も見る事が出來なかつた。只水を飲みに川邊に下つて來た一頭のオンサ(アメリカ虎)を認めた。一行中の或者が之を射留めて早速料理して食膳に供した位であつた。

本流は實に洋々として流石にアマゾンであると云ふ感を深くした。このあたり鳥の多き事其の種類の雜多な事、實に形容にものなく恰も動物園の檻の中に諸鳥の遊ぶ様で、宛然一大



ペルー、インカ時代のミイラ

動物園の觀がある。水面にはブヘーロと稱する鯨に類する魚の川水を吹きつゝ走るあり、宛かも神話に出る樂園の觀があつた。

これより更に船を小蒸汽に乘換へイキトス指して下航を續けた。ラメデセーを出でゝ二十二日目約一千哩を下つて漸く五月二十日イキトスに到着する事が出來た。イキトスまでに寄港せる小港實に五十七、船は薪を焚くこと二萬四千本に上つた。

此のイキトスは港である。河口より二千哩の上流であるが、こゝから大汽船が紐育へもリバープールへも出る。邦人が八名、長さは十數年短きも七、八年以上は居る。皆男子で女子は一人も居ない。此處の人等は日本人を半分しか見ないと云つて居る。これは男子ばかりを見て居るからである。邦人たちは土地の婦人を妻として立派な家庭を造つて居る。附近にポーランドの移民により開拓された土地で今は失敗に歸して放棄さ

れてある處や、北米人によりて開かれつゝある所などを視察して便船を待つた。

五月二十六日出帆のブラジル國船ビクトリヤ號に便乘して、マナオス指して再び船中の人となつた。マナオスは人口七萬アマゾナス州の首府で、頗る贅澤な町である。婦人が窓から顏を出して終日頰杖をついて、行人を眺めて居るのを見る。かくして臂に繭を生じ之を有するを以て得意とする面白い風習がある程である。墓地に參詣し日本名譽領事たりし伯國人の墓を弔つた折立派なる一基の墓標を發見した。それは高橋某と云ふ日本人の墓であつて、英國の軍艦に乘り込み病死したのであるが、其の軍艦が再びマナオスを訪問したとき此の墓を建てたと聞いた。何れの國民を問はず其の墓碑を立派にする事は誠に美しい心掛けであつて大國民たるものはかくあり度いと思ふ。

更に便船を求めてマウエス地方を視察しペレン市に到着した。ペレンは人口二十四萬赤道直下の都會として最大のものである。頗る近代的の都市である。北米の市場を控へ、アマゾン天産物の集散地として繁華である。他日アマゾン流域の開發さるゝ曉には南米第四の大都會となるであらう。

遂に大アマゾン四千哩を下航し、こゝに別れを告げてサンパウロ州へと旅立つた。が、この視察中私は少なからず失望を禁じ得なかつたのである。それはアマゾン河は川の中處々に島あり森林があつて一眸何百哩の洋々たる大河を見る事が出來なかつたのである。[illegible]の揚子江に見る様た洋々たる大河の流れに接する事が出來なかつたのである。川巾百七十五哩と云ふ地理書の實際の巾はあつても、一目の中に集める事は不可能であつた。

故にアマゾン河は目の川にあらずして數の川であると思ふ。

長さ四千哩、川巾百七十五哩、其の流域二百十萬方哩、河口より一千哩の間の平均深さ二百尺、二千哩の平均深さ百尺、最も深き處千六百五十尺あり、流域に生茂る植物の數二萬二千種を越え、魚の數は千二百種を越して居る。一秒時間の海に吐き出す水量は五十萬立方呎北米のミシシッピ河の二倍の水量を持つて居る。其の支流を合して可航航路は五萬哩、地球を二廻り以上する里程である。

アマゾンは實に感情の川にあらずして智的の川である。

而して此の無限の寶庫を有する地帶が何故に今日まで開發されなかつたかと云ふ事は頗る疑問とする處であるが、私は左の諸點によると思つてゐる。

第一は天産の豐なる事、餘りに天産の豐なる地方は天然物に依賴して開發の遲れて居る事は事實である。人の努力の必要なくして生産し得らるゝ地帶は必ず開發後るゝ事は世界の各地に見る處である。

第二は奴隷の開放である。河口にあるマラジョウ島（我九州位の大きさ）の如きは奴隷使用の時代は非常なる牧畜の適地としてりスボ

ンに從つた牛の皮は全部此の處の産であつたものが、其の開放と同時に衰微して今日まただん〱盛んになつて來て居る。

第三は探險家によりて紹介せられた事、探險家はすべて好奇の眼を以つて見、珍らしき物をのみ世界に紹介して居る。奇觀をのみ紹介せられたる事は總てこの土地に對する誤解を傳へて其の衆目の批評が正鵠を得なかつたのである。

而しながら地球表面上あらゆる方面の殘り少なに開拓せられた今日、此の沃野此の廣大無邊の流域を依然として神秘の狀態に打捨てゝ置く事は出來ない。必ずや世界の人々によつて開かるべき時期は來るであらう。

既に獨逸人は科學の力を以て、北米人は知識と財力を以て、英國人は不屈不撓の精神を以て之が開拓に當らんとして居る。勞働問題と人口問題は今日世界人類共通の問題である。今後五十年を待たずして大アマゾンの流域が開拓せられ文化の花咲く時の來る事は明かなる所である。

藝術の社會的地位について

（游歐雜記の序）

阿部次郎

46

——……近世にいたりては、或は座敷淨ろり、あるは芝居淨るりなんど、專らもてはやす事には成ぬ。然ども其文勢筆力なく、何となく拙く、感情もなかりければ、只下々のもてはやすのみにして、中人以上は曾て其本とて取上げ見る事もなかりしに、元祿年間に近松氏出て始て新作の淨るりを作り出し、竹本氏が妙音にうつさせたりければ、聞人感情を催し、ひそかに本を求めて其作文を見るに、文體拙からず、儒神佛によく渡り、譬をとり故事を引にも人の耳に遠からず、貴賤のさかひ尊卑のわかちそれ〳〵の品位につきてさこそあるらめと思はせ、道行等のつゞけがらもいせ源氏の俤をうつして、しかも俗間の諺言をおかしくつらねければ、自然と貴人高位も御手にふれさせ賞し翫し給ひしより、打續て數多の淨るりを作り出すに、佳言妙句擧て數へがたし、終にその名を天下にあらはし、彼淨るり本を見るに恥なく成て、專ら世上に流行する事數十年に及べり、是偏に近松氏が力なり」（難波土産、發端）——この文章は二重の意味に於いて面白い。その一つが近松の社會的影響を立證する點にあることは云ふまでもないが、もう一つは同時代の評價がどれほど皮相であり得るか、或作家若くは作品のその時代に對して持つ本質的意義が如何にその當時の批評家の眼を逸する場合があるかの證據として面白いのである。其作家若くは作品がその時代を動かす實力ある以上、一般的事實として彼の勢力を承認することは、苟も公平な批評家にとつては、決して困難なところではない。併しその影響は如何なる意味を持つか、その時代に對する本質的意義は何處にあるかの問題については、彼は頗る多くの場合に於て正鵠を失する。輕いものを重く見、重いものを輕く見るか若くは全然視野の外に置くからである。併し當時の批評家がこれを認

めると否とを問はず、作品はその本質に從つて批評家の見そこなつた意味に於いて影響して行くのである。その時代は、自覺するにせよせぬにせよ、實際その作品の歴史的役目通りに動かされて行くのである。穗積以貫は心から近松に傾倒した人であるだけに、その喰ひ違ひには特別の面白さがあると云はなければならぬ。

以貫が近松の淨るりに感心する點は何處にあるか。一言で云へばその「作文」にある。儒神佛に通じ、伊勢源氏の俤をうつし、而もこの雅を俗と調和せしめて、比喩引例自然にして人の耳に鋭からず、佳言妙句あげて數ふべからず、又都鄙貴賤のわかちが成程人を首肯せしむるものあるが故に、彼は近松に敬服するのである。實際以貫の敬服した點が敬服に價ひすることについては、何人も異存がないであらう。併し敬服すべき作文が社會に影響して行く方面は後の作文の模範となるところにある。又作文の模範として作文者流以外の社會の景慕を集め、かくて作文の社會的地位を高めて行くところにある。その博學、その雅俗折衷、その佳言妙句、その都鄙貴賤のわかち——かういふものが後世の作文者流の模範となり、一般(特に有識者)社會の感歎を集めたところに、果して近松の歴史的意義があつたか。近松が實際當時の社會を動かした力の最も本質的な意味は、果してこの言葉によつて盡されてゐるか。正にこの點に於いて極めて重要な問題が殘されてゐるのである。

茲で吾々の記憶に蘇へつて來るものは、近松の心中物が心中流行の風潮を煽つたといふ說である。それが統計的に證明され得るかどうかについては、私が既に疑ひを述べたところであるが、兎に角かういふ說が——場合によつてはかういふ謬說が——通用するには、それだけの根據がなければならぬ。彼の藝術によつて聽者がかういふ方向に動かされた體驗があればこそ、人はさうも考へることが出來たのである。併しかういふ體驗は作文の巧妙によつて惹起されることが出來るか。換言すれば作者の博學、雅俗の調和、佳言妙句その他によつて惹起されることが出來るか。作文といふ言葉を極めて廣義にとつてこれを凡そ藝術的優秀と同義にとれば、人はさういふことも出來るかも知れない。併しその場合には、作文の中心美をなすものは以貫の擧げたやうな諸點ではない。作者の中に動き、作品によつて客觀化された感情が力強く讀者の魂に迫るところに、その根本的な力はあるのである。以貫は「閑人感情を催し」といふ一句によつてこの體驗に表現を與へる。他の數十言よりはこの一句こそ最も意味が深い。彼が敷衍に當つて段々皮相的にして行つた感銘の底にはこの一つのことが潜んでゐたのである。さうして作文の巧妙はこの一つのことに仕へる手段であるに過ぎない。この一つのことが如何なる內容を持ち、如何なる方

向に人を動かして行かうとするかは、私が前に述べたところによつてほぼ明かであるであらう。彼はその作文ではなくてこの感情の力によつて、本當の文化的勢力になり得たのである。

單に近松と云はずあらゆる眞正な藝術の作用は、人の心を融かして生命に活氣を與へ、これを自由にしたり深くしたりするところにある。固より此處に「融かす」といふのは、シラーの所謂融解的藝術(Schmelzende Kunst)をのみ意味するのではない。人心に緊張を與へ、これを鼓動して嚴肅にする藝術も亦私のいふ意味の「融かす」もの、範疇を出でない。凡ての藝術は生活の形式化や硬化から人心を融かす。それは或場合には柔かな涙脆さによつて、或場合には嚴肅な緊張によつて、社會の動脈硬化に、融かすものとして作用する。時としてそれが革命的に作用するのも生活硬化を救ふ外科手術として、依然として融かす方に、解放する方に、特に感情の正しき解放を導く方に働きかけて行く例には洩れないのである。近松の時代にあつては、硬化形式化の傾向が上流階級武士階級智識階級の方面に於いて特に著しかつた。さうしてそれが支配階級に現れた徴候であるだけに、民衆に擴がらうとする力も亦強大なものがなければならぬ。平民藝術の基礎を確立するためには、何等かの形式でこの支配階級との渡りをつける必要がある。それは結局支配階級の趣味を征服する點に歸着することは云ふまでもないが、問題が物理的な力ではなくて內心の文化に關する以上、征服の武器はその敵にも訴へるに足るもの、彼等の鑑賞に堪へてその賞讃を博するに價ひするものでなければならぬ。「自然と貴人高位も手にふれ賞し翫し給ひ……彼浮るり本を見るに恥なく成て」といふ言葉は近松の作品がこの有力な武器となり得たことを證明する。民衆は彼等の生活と憧憬とを結晶させるレンズを得たのみならず、又上流社會を征服して彼等自身の文化を一般社會の中に確立する武器をも手に握つたのである。この意味に於いて、彼自身の出身の門地が何であるかを問題外にして、彼は實質上平民階級のための戰士であつた。平民文化の社會的確立のチャンピオンであつた。これは世話物のみならず時代物についても亦云はれ得る。時代物にあらはる丶多くの英雄貴人の類がそれ〲の時代色を以て描きわけられた歷史的人物ではなくて、元祿期の現代人であることは云ふまでもなく、それは又町人の眼を以て見られた武士、武士階級を止揚契機とする町人に違ひないからである。寧ろそれが武士階級の止揚契機をより多く含んでゐるところに、征服の武器として世話物以上の强みがあつたかも知れない。「國性爺合戰」の大當りの中には、恐らくこの意味も含まれてゐたであらう。私は今これを證明すべき確實な資料を持合せてゐないが、この想像は決して單純な想像には止るまいと思ふ。

玆に於いて吾々の洞察は更に一歩を深める。平民文化の基礎を確立するためには、止揚契機としての武士階級が必要であつた、寧ろ彼等によつて代表される和漢の古文化の傳統が必要であつた。卑俗な町人の魂がこれを攝取することによつて高められる。かく高められることによつて平民文化は始めて支配階級の硬化に對抗すべき實力を獲得する。故に平民文化の社會的基礎を確立する文藝は又一面彼等を反映するのみならず彼等を教育する役目をも勤めなければならないのである。「いせ源氏の俤をうつして、しかも俗間の流言をおかしくつらね」といふ言葉は、此處に於いて新しく深い意味を與へられる。それは單に修辭の問題だけではなくて、支配階級と平民階級との魂の媒介を意味するのである。凡そ文化の領域に於いては、征服とは媒介であり、或意味に於いては融合であるが、近松の淨瑠璃は正にこの媒介と融合の役目をつとめた。彼が割合に容易に「貴人高位」の心への通路を發見することが出來たのは、彼が貴人高位の教養を比較的多量に自家の藥籠中に收め得たところにもよると云はなければならぬ。

併し彼の藝術が一般的社會的勢力となり得た最も本質的な理由は、彼の對人生態度の特色にある。人間の魂の權威を認めてそれを一切の根本に据ゑた點にある。それは勇敢に演繹して行けば革命的契機ともなり得る分子を含んでゐるが、彼の藝術のもう一つの特質なる通俗性が柔かにこれを包んで、それはただ凡ての人に快い同感を與へる作用をするに過ぎなかつた。私はこの革命的契機の一つとして彼の人格平等の思想を——「形こそ町人、心は侍」の思想を擧げる。それは階級打破の倫理的基礎となるものであつて、明治維新の最も有力な原動力となつた思想も——主權の正當な所在に對する宗教法律的解釋を除けば——結局その發展に外ならぬのである。この思想が町人に自信を與へて彼等を勵ましたことは云ふまでもなく、特權階級と雖もそれが彼等の脅威となり得ることを恐れるよりは、寧ろ人間的同感を以てこれを受取つたことも亦想像するに難くない。特に彼の人生觀の倫理的傾向は一面に於いて町人の心術を高める作用を發揮すると共に、一面支配階級の教養と一致して容易に彼等の間に通路を發見せしむる重大な理由となつたであらう。「儒神佛によく渡り」といふ言葉は畢竟この意味に轉釋せられなければならぬ。此等の一致が根柢にあるが故に、彼の藝術は戀愛文化の方面に於ける動脈硬化を融かすべき勝利の一路を辿ることを得たのである。

さうして絕對的見地から見れば彼の通俗性と名けなければならぬ特質も亦その藝術の社會的征服を滑かにする。その通俗性が一面近松の妥協と迎合とを意味することは前に云つたが、この妥協と迎合との可能か彼の本質と民衆との溫かな交感から發生してゐるとすれば、吾々

に既にこの現象をすら單純に外部的に解釋し去ることが出來ないであらう、彼の通俗性の根據は最後の點に於いては彼の本質にある。彼は或程度まで通俗に自ら考へたり感じたりしたのである。其處に彼の通俗性のおのづからなる力があり、それが彼と社會との通路を平滑にする。當時の民衆は――さうしてこの事は現在の民衆にも當嵌る――西鶴よりもずつと親しい心持を以て近松の藝術を翫賞することが出來たであらう。さうして今日に於いて彼を不當に通俗なものに見せる他の一面は、彼の後輩のもつと空虛な模倣と追隨とによつて吾々の感覺が痲痺させられたところにあるとすれば、この無數の模倣を喚起したことそれ自身が彼の藝術の力を證明するものと云はなければならぬ。後の淨瑠璃作者達は近松から民衆の心をつかむ秘密を學ばうとした。この目的のために彼の作文は彼等の模範となつた。この意味に於いて文學に及ぼした近松の感化はヘーゲル流の意味に於いて間接（ミッテルバール）であるといふべきであらう。中間に介在する民衆の力が後に來る作者の追隨熱を媒介して、其處に有力な一つの文學的潮流を喚起したのである。

近松に比すれば西鶴の影響は寧ろ專門的である。彼の浮世草子が廣く行はれたことは云ふまでもなく、その出版部數から云つてもそれは恐らく當時の小說のレコード破りであつたらうと思はれるが、併し彼の藝術が近松と同じ程度に正當に理解されて、その正しい意味に於いて民衆に作用して行つたかどうかは甚だ疑問と云はなければならぬ。寧ろそれは、殆んど明治時代までも繼續して流れて來た偏見のやうに、誨淫の書として愛誦され若くは擯斥されて來たのではなかつたか。單に好色物だけではなくて町人物までも「無下に卑しき姿」あるものとして表向に非難せられ、蔭で益々愛好せられたのではなかつたか。若しこの推測が當つてゐるとすれば、彼の藝術は近松のそれのやうに民衆の心に觸れ、近松のそれのやうに上皇の叡覽に入つたり碩儒徂徠の嘆賞を得たり儒者以貫に註釋を書かせたりするやうな勢力を持つことは到底出來なかつたであらう。藝術が社會を征服する戰ひに於いて、西鶴の勳功は到底近松に比較することを得ない。彼の勢力は寧ろそれとは異れる方面にあつた。彼は專門家の嘆賞を刺戟して、彼等の作文の模範となる。さうして此處に「作文」といふのは題材の選擇やその取扱ひやその觀察點などをも含んでゐることは云ふまでもない。かくて彼の難解な文學は、云はゞその諺解とも名くべき八文字屋物を產み出した。更にその後に於ける德川時代の小說が絕えず彼の流れを汲みつゝあつたことも亦云ふまでもないであらう。彼の文學的勢力は常住に湧きいでゝそれぞれの時代に灌漑の水を供給する泉のやうな意味に於いて始めて偉大である。

孰れにしても彼等は文學の方面に於いて德川時代の創造的藝術の絕

頂をかたちづくる。彼等が如何に新しく鍛へた勢力であるかは、その以前の假名草子若くは淨瑠璃本と西鶴及び近松のそれとを比較すれば明かであるであらう。私の知つてゐるもののうち西鶴以前の假名草子で最も注目すべきもの丶二つなる「恨之介」や「薄雪物語」などには確かに新興社會の勃々たる情熱が戀愛の方面にもその俤を見せて、お伽草子流の虚脱せる修辭の殼を破つてゐる部分があるが、全體として見れば、それはまだ幼稚な、大まかすぎる筋書か、心理の發展への注意を缺ける引例の集積かにすぎない、彼等はまだ雪にうづもれて去年の秋の傳統を地下に育てつ丶ある。蕾も固き梅といふべきである。さうしてこの蕾は西鶴にいたつて、殆んど突如として、郁々たる芬香を放つて初花として咲き出でるのである。同樣のことは近松についても云ふことが出來る。金平淨るりや加賀椽正本を持ち出すまでもなく、近松自身が義太夫のために制作せる初期のもの、例へば「賢女手習並新暦」に比べても、「冥途の飛脚」や「天の網島」や「國性爺合戰」などの劇的な進歩はどれほどであらう。「關八州繋馬」の最後にいたるまでその力の老衰を見せぬ彼の後期の作品は、櫻の花の爛漫として咲き亂れた趣があるといふべきである。固より文學一般から云へば、彼等の外に俳諧の芭蕉を加へるべきこと勿論であるが、彼は戀愛文化の發展と交渉すること比較的薄きものとして、茲には姑く傍證とするにとどめるとすれば、彼等は徳川時代の文學に於いて、全然疑問の餘地を殘さぬ二つの最高峯である。實質から云つても影響から云つても徳川時代に於ける彼等ほど鮮かな絶頂を持つてゐる時代は、東西を通じて容易に發見し難いであらう。彼等以後の文學は結局この兩先輩によつて大體の範圍を劃せられ、多かれ少かれこの二つの高峯の日蔭に置かれる。その後の文學にも時處に應じた歴史的進行があることは言を俟たぬところながら、それは大つかみに云へば、それ〴〵に時代及び個性の色ひを附加して、兩先輩の事業を轉調したものに過ぎぬ。而も秋成や馬琴など獨創的地位の見るべきものを除けば、多數者の轉調には萎縮及び墮落の著しい臭氣さへ附着して來るのである。彼等は西鶴や近松にくらべれば、より多く束にして取扱ふに適する。故に吾々は個人の事業について詳しい考察をする義務を、此處で打きることを許されなければならぬ。これから先の吾々の仕事は、大體の潮流を一纏めにして觀察する間に、二三の顯著な實例を投げ込んで行けばそれでいゝのである。一體に尻ふくれになつて來たこの論文に於いて、吾々は西鶴と近松との最も甚だしいふくらみ峠をもう乘越した。今や瓢簞は尻をつぼめて最後の總收を目ざゝなければならぬ。本論文全體のプランから見ても、この簡約は合目的なものとして許されるであらう。

東京市會と社會民衆黨

赤松克麿

普選第一回の東京市議戰に於て、無產政黨就中社會民衆黨は驚くべき好成績を收めた。社會民衆黨が約七割の當選率を示し、しかもその中で島中雄三、馬島僴の兩君が最高點を獲得した如き好成績を收めるに至つた原因を考へて見るに、次の三點に歸すると思はれる。

（一）　前市會が空前の大疑獄事件を惹起し、既成政黨に屬する市會議員連の腐敗狀態が遺憾なく白日下に暴露され、その結果として既成政黨に對する市民の反感が高まつた。殊に普選制下の新有權者は利權採集に沒頭する有產者的市會議員に絕望して、純眞な新興階級の代表へ期待する念が強くなつた。大疑獄事件直後の時機と普選最初の選擧とが調子よく配合されたために、市民の市會淨化の意議が高調されたことが、新興勢力に取つて頗る好條件を作つたのであるが、一方各新聞紙が長く東京市政に巣喰ふた舊勢力の排擊と、新勢力の興起とのために、一齊に積極的な筆陣を張つたことも大きな力を與へたと見るべきである。

（二）　社會民衆黨は言論戰に於て、他の無產政黨よりは小市民階級、知識階級の心理を摑むことに成功した。勞働者の少いそして農民の全く居ない神田の眞ん中で、舊勞農黨の辯士が、「勞働者農民の政府を樹立せよ」と叫んだところが、聽衆は唯だ目を剝いて驚くばかりである。我黨は馬島君の出た本所區、島中君の出た小石川區に於いて勞働者の票を隨分多數獲得したのであるが、つまり社會民衆黨の主義政策が、勞働者のみならず小市民階級や知識階級の間にも次第に理解され共鳴されてきたことが、今回の成功の有力なる一因である。

（三）　帝國議會に於ける無產黨議員團の活躍が、他の地方に對してもそうであらうが、特に東京市民に對して好印象を與へたことは事實であつて、この好印象が今回の市議戰にもたしかに好影響を與へたと思はれる。ところで無產黨議員團の多數派は社會民衆黨であるから、自覺した市民の人氣が社會民衆黨の候補者に注がれることになり、それがまた勝利の一因をなして居ると考へる。

市議戰が終つて、我黨が五名の市會議員を獲得するや、直ちに我黨の東京支部聯合會內に東京市會對策委員會を設け、議員はこれの監督統制を受けることになつた。如何に信賴すべき人物を議員に推したからといつて、議員に萬事を一任することは弊害を生ずる恐れがあるから、あくまで大衆の公僕たるの實を示すために、議員の統制機關を設けて、議員の一擧一動に聊かの過もなからしめんとするのである。この點は大衆本位の無產政黨が議員本位の有產政黨と異る一點であつて、我黨は上は衆議院議員より下は村會議員に至るまで、すべてこの方法を以て一貫して居る。

市會内では社會民衆黨の五名と日本大衆黨の一名堺利彥氏とが無產派議員團をつくり共同戰線を張ることになつた。堺氏は社會運動の長老であるし、甘いも辛いもかみわけた苦勞人であつて、事毎に公式論を振りかざすやうな書生論を吐く人ではないから、我黨議員との共同戰線も順潮に運んで行くことと思はれる。そしてこの無產派議員團は無產階級的立場に違背せざる限り、他の個人又は團體と提携することを決定した。若し出來ることならば中立議員の中の純眞性に富んだものを啓蒙し教化して、我々の勢力圏内へ誘導する考である。將來或は中立議員の中に共鳴者が現はれてきて、これらの議員と無產派議員とが一個のクラブをつくるやうになるかも知れない。

鳩山内閣書記官長は東京市會に於ける無產黨の一大進出を見て、これはとばかりに既成政黨は團結せよと叫んだ。たしかに既成政黨を驚かすに足る一大進出である。衆議院では四百六十六名中の七名であるが、東京市會では八十四名中の六名である。我々は議長及び副議長の選擧では敗れたけれども、市參事會員の選擧では見事に島中雄三君の當選を得た。市政運用上の重要機關たる市參事會に無產派が割り込んだことは、有產者同市政のからくりを暴露し批判し革新する上に頗る有利な地步を占めた譯である。今後は有產派議員の利權採集も、無產派議員團といふ秋霜的なる監視機關の存在するために、よほど牽制されることであらう。現在有產派議員團が無產派議員團の存在と活動とを頗る厄介視して居ることは事實である。私は新市會の最初の二日間の議場を眺めて、既に有產派議員團の階級感情の鋭角化を見た。鳩山書記官長の言は或る程度に實現されつゝある。政治上に於ける階級的對立の現象は、國會よりも東京市會に於て一步早く現はれて居る。今後の東京市會は我々の深甚な關心を要するものがある。

二十年と人

有島生馬

一　舊友

巴里に着くと私共一行四人は、タント・カロヲが部屋をきめて、鏡臺の前の花瓶にごしや〱と生花を盛つて置いてくれた、ホテル・スプレンディドに三晩泊つてみたが、どうも居心地がよくない。それに日本人に不平等待遇をする習慣の家らしいので、直ぐその近處のフリイドラン街にあるホテル・キャムベルに移つた。プラス・ド・レトワルから一足、シャンゼエリゼに隣る町だ。義兄の原田熊雄が初めて巴里に着いた時の宿もそこだつたといふし、行つてみると、シンガポールから香取丸に同船して來たベルギー人のN一家も泊つてゐた。セシルとアンドレといふ二人の小娘は、あき子や、ちゑ子のいゝ遊び仲間だつたので、船中の交遊をそこまで延長して喜んでゐた。N氏は東洋で永年かゝつてもうけた金で、巴里に新築をする間、一年か二年はそのホテルに住ふつもりだといふし、その間蒐集するお化粧にこつてりなおばあさんの如き、驚くべし三十年間、このホテルの一室に居住してゐるといふ風に、信用ある宿らしいので、一月ほどの假住ひとする。

そこのサロンで、私は實に久しぶりな人々を迎えた。先づ齋藤與作君は五六時間もかゝるヴェネヴォルの片田舍から、早速出て來てくれた。頭の眞中が薄くなつてゐるだけで、白い八重齒を出し、目尻に少し皺をよせて笑ふ時は、舊い友情そのものを自分に感じさせた。

「君蓮根は持つて來たがね、途中船倉に保管して置いて貰つたから、一度も水をやらなかつたが、まだしつとりしてゐるよ。」

私の持つて行つた荷物の中で、一番奇拔な代物は、この齋藤から頼まれた泥だらけの蓮根に相違なかつた。がりつ〱といふ齒切れのいゝ蓮根の三杯酢、その味が忘れられないといふ風流かと早合點されるかもしれないが、彼は田舍のお城に住つてゐるので、そのお城の内堀の中で、東洋の蓮の花を開かせてみよう、花が開くやうになつたら



モンパルナス街（カフエ・ドーム）よりカフエ・ロトンドを望む（有島生馬筆）

總にしてみようといふ、例の贅澤な氣永な計畫に外ならなかつた。彼は殊のほか喜んで、それを田舍に持つて歸つて植ゑた。その結果は改めて他の項で書く。

ある晩、支那飯を喰ひに行かうと齋藤が云つた。まだ川向ふへ渡つたことがなかつたので、セエヌ河を渡り、キャルティエ・ラタンへ足を踏み入れるのは樂みだつた。案内してくれたのは萬花樓又はレストオラン・パスカルと呼ぶ店で、セン・ミッシェルの通りから一寸リュ・ド・レコオル・ド・メドウシンへ曲つた處にあつた。巴里の町で朱塗りの聯に漢字や對句を見つけたりするのは、二十年前を回顧すると全く意外である。何んでもパンテオンを中心として、七軒とか、八軒とかの支那料理屋が出來てゐる相だ。然しもう十年もして見給へ、千九百四十年の頃になれば、きつと巴里中に百軒近い支那料理屋が出來て、素晴らしい繁昌をするに違ひない。なぜつて、支那料理そのものにさうなり得る素質特長があるのだから仕方がない。それに比べると日本料理屋の如きは、現存の三軒が潰れないで、五軒位にでもなつてゐれば大出來だ。なぜつて、ある特殊な自然や、ある局限された文化に、餘り隷屬し過ぎた料理だもの。それに營業振りも日本人以外のものを相手にしようとはしてゐない。一言で云へば世界へ擴まるやうな普遍性を持つてゐない。工風すればさうならないことも、ないかも知れないが、少くも現在ではさうしようといふ野心はないやうである。此細のことではあるが、一事は萬事、支那人は大陸の民で、地圖にかいてあるやうなはつきりした國境など實際は眼中に措いてゐない。巴里であれば佛人と、倫敦であれば英人と結局立派に協同して營業がして行けるやうである。

所で巴里の支那料理はお世辭にもまだ甘いとは云はれない。北京や上海のとは勿論のこと、日本内地のそれに比べても遠く及ばない。

小供達をそこから先にホテルに返して、齋藤と二人肩を並べ、往交ふ學生、夜の女などの間を縫ふて、セン・ミッシエルの阪になつた通りをソルボンヌ、パンテオンの方へと上つて行つた。點燈は煌々と明るく、道幅も記憶のそれより廣く感じられた。商店の家並みも大して變つてはゐなかつた。あの帽子屋、あの本屋も原のまゝである。一週に二三度は行きつけたことのあるダアルクルや、パンテオンのカフェのテラス、その上に差出されたテントの樣も、昔そのまゝ、變つたとは思はれない。但し客種は大分變つて、學生などは多くモンパルナスの方へ吸收されてゐる樣子だつた。

明るい往來、明るい噴水の廣場から、リュクサムブウル公園の鐵柵に沿ふた邊まで來ると、月のない暗い晩で、霧のやうな春雨がしとしとと降つて、プラタンヌの並木の葉の落ちてゐる梢から雨垂れがぼたぼた顏にあたつた。

一歩一歩古い記憶が甦つて、二十年の歲月は消散したやうに、かの過去からこの現在へ、この現在からかの過去へ、自分といふ存在が密接に連續してゐるやうに感じられた。どこかそこらに當時の足跡か

殘つてはしないか。私は再びその足跡の上を踏みつけつゝあるのではないか。

齋藤はと見ると、兩手を深くポケットに突込み、眞直ぐ二三間先を見詰めたまゝ、感慨深さうに默然として濡れつゝ歩いてゐる。暗がりでみる姿なり、歩き方なりは、私の記憶に殘つてゐる彼の俤そのままである。青年時代から彼は無口であつた。いつも考へながらこつこつ歩いてゐた。二十年たつてもまだ考へてゐる。その頃吾々と一緒にゐた人で、死んだ人もある、畫をやめた人もある、東京にゐる人もある、京都にゐる人もある。さうして私と齋藤と二人だけがかうして並んで、嘗て通ひなれた道を歩いてゐる。他人が聞けばなんでもないことだが、私には唯だ不可解といふ感しかしない。その間に吾々は結婚したり、父になつたり、病氣で死にかゝつたりしてゐる。

「思ひ出すよ、思ひ出して仕方がないよ、かうして一緒に歩いてゐると、あの頃と少しも變つたことはない。互にまだカムパーニユ・プルミエルに住んでゐて、あの當時の畫室へ歸つて行くやうな氣がするねえ。」

彼は突然元氣さうに笑つてそれに答へたが、直ぐ又沈默に歸つて終つた。外套の肩は濡れた。少し寒いが、濡れるのもよかつた。カルポウの噴水のある小リユクサムブウルの入口の方へ近づくにつれて、街燈も人もまばらになつて暗かつた。春待ち顔な並木が黒く二列に並んで聳えてゐるが、丈が伸びたとも思はれない。

迫るやうなこの場合の様々の思ひ出は樂しいより、苦みに近いものか、それとも泣き度いやうなものか、さうでもなかつた。胸の一杯になるほど寂しい、息の詰るやうなものだ、唯ださうとでも云ふ外なかつた。

ブュリエ（舞踏場）の前まで來ると、そこに建つ一本の街燈も私を呼びとめた。月桂樹模様のあるあの鐵の柱、その上に輝くアーク燈の圓味をもつた硝子、その硝子に反射する青白いやうな光が私を呼びとめた。

「あゝ、あの跛の憐れなPはどこへ行つて終つた」

Pは跛だつた。踵の片方だけ高い靴をはいて、それを引づりながらいつも歩いてゐた。小作りな身體の割に手の平の厚い、不格好な大きな手をもつてゐた。學生の癖に卷き上げた口髭を生し聰明と愚直とを併せ持つたやうな黒い瞳の丸い眼は、物憂げに憂鬱だつた。その朋輩達のやうに女の友達など一人でも持つてはゐなかつた。

ある日曜日の晩、方々のカフェで夜を更かし、こゝいらまで一緒に來たものゝ、彼はどうしてもまだ家の方へ歸り度くなかつた。無理に引張つて行かうとすると、この街燈の柱に嚙りついて離れなかつた。終ひにはとうとう柱の上まで這ひ上つて、守宮のやうにアーク燈にしがみつき、大聲で誰れも人間の聞いてゐない空に向つて唄ひ出した。大きな口を開いて、片手を振りながら、下らない流行歌を唄つてゐるのであつたが、それは決して快活には聞えないで、陰鬱に夜の空氣

を顯はせた。然し跛の足で、高い柱の上にしがみついてゐるのを見上げると、どうも悲喜劇的に笑はずにはゐられなかつた。憐れなPよ。

ブュリエの前から廣場を距てゝ、マルシャル・ネイの紀念像の木立の陰にちら〲クロゼリイ・デ・リラの燈火が見える。これは藤村先生の紀行などにも屢々描かれた古い由緒のカフェ店だ。又私達が留學してゐた時分いつまでも議論に花を咲かせた家だ。

「齋藤、久しぶりで、デ・リラへ行つてみようか。」

「リラも中の樣子がすつかり變つたよ。アメリキャン・バーが出來たりしてゐる。何んでも變つて終つた。」

眼前に變遷を見てゐる彼にとつては、變ることは何も好ましくなかつたらう。デ・リラの角まで行くと、これも懷かしいモンパルナスの大通りが一直線に見透された。カルティユ・ラタンの中心は次第に、このモンパルナスとラスパイユ街の交叉點の方へ移つて、今は日増しにそつちのカフェなどが繁昌しつゝあつた。

二　歸る人々

小山敬三君や、海老原喜之助君のやうに、いつの間にか外人を妻君に貰つてゐた人達は、その話をするより前に先づマダム達を連れて來て紹介した。齋藤君や藤田君は今更ら云ふまでもないが、硲伊之助君や、長谷川潔君、岡見富雄君等も正式に佛蘭西人と結婚してゐた。外にもまだ澤山さうした例はあるであらう。但し折角結婚はしてゐても、子供のある人が殆どないのは少し物足りなく感じられる。それとも藝術家といふものは子供を甘く育てる能力のないものなのであらうか。

その頃小山君は日本へ歸らうか、歸るまいかと考へあぐんでゐた。同君に限らず長年巴里に住んで、折角そこの畫壇で芽を吹きかけて來た人達まで、故鄕を顧み、その自然や、生活や、畫壇に幾らかでも幻を感じ、歸國すれば一層いゝ仕事が出來るやうに思ふといふことは無理もなからうが、今日我國の現狀は果してどうであらう。それ等の人々を懇ろに迎へ入れる狀態にあるであらうか。特に夫人でも同伴して歸るとなれば、問題は一層面倒になるのではないか。今後國際的結婚の問題は益々頻繁になつて行くであらうが、その落付きは果してどうであらう。

一方それに巴里は依然として畫家にとつて不思議に魅力の盡きない都である。世界各國の畫家がそこに集つて厭でも洗ふやうにごた〲仕事をしてゐる。恰も一大アトリエたるの觀がある。ピカソ、ドンゲン、藤田、キスリングと一寸見廻はしただけでも、巴里は佛蘭西人だけのモンパリーではなくなつてゐる。だから日本人なるが故に、極東特異の文化のうちに介在してゐる日本人なるが故に、歸國すれば思ふやうに油繪の仕事が續けられないといふだけの問題ではない。多くの隣國人さへ巴里にアトリエを持つことを喜ぶの風があるのである。巴里でも、モンパルナスとか、モンマルトルとかいふ特別藝術家の多い區

内などには一種これと指して云ふに云はれない自由で、潑剌たる氣風が漲つてゐる。各種の藝術運動、藝術家氣質、それがある醱酵素に似たものを發散しつゝある。ある者はそれが爲め墮落し、腐敗もするが、ある者は向上鍛錬された物になつて行く。勿論巴里でなければ繪がかけないといふ理窟は一つもないが、そこにはある超社會的、藝術的な自由、創造の氣分が滿ちてゐるとは云へるのである。

小山君は私より半年程先に巴里を立つて、小諸に歸り、信州地方でかいた日本風な水彩など三十點ほどを折返し送つて寄來し、モンパルナスのコンタンプランといふ畫堂で、十二月に個展を開いてゐた。この早業には誰れしも感心した。義妹にあたるモントロイといふ人や、小澤秋成君などが主となつてそれの世話をしてゐた。招待日には小山君を贔屓にする政界に名ある人々も來場し、挨拶や答辭のデイスクールが取交はされてゐた。それも單に形式だけでもなく、多少作品の内容にまで云ひ及んでゐたのは流石佛人らしく思はれた。展覽會の成績もよく、諸經費を償ふて餘りあつたといふことである。そこで偶然ストプレール君に逢つた。二十年前柏原君やデニッケル君などゝ同じやうに畫を修業してゐた連中の一人である。氏から聞く處によると、デニッケルは繪畫を捨て、通譯官として外務省に入り、今は北京公使館に在勤しつゝある相である。ずぼらで約束を忘れるのを何んとも思つてゐなかつた當年のデニッケル氏に、よくそんな規帳面な職業が勤まるものだと思つた。

林倭衞、兒島善三郎、東郷青兒君等にもそこのサロンで久しぶりに面會した。皆な目前に歸期を控えてゐる人々なので、日本の近況を聞きたがつたり、歸つて行く不安を漏したりしてゐた。私は又巴里藝壇の現狀を訊き質したいと思つた。

一體巴里のやうな廣い都へ行つた時、そこの事狀を少しでも正確に知らうといふにはどうすればいゝであらう。これは容易な事ではない。一年や二年では何も分らない。然し十年や二十年でも分らないと云へば分らない。一生や二生でも分つたとは云へない。私は到着當時、「巴里を知るには一生ではとても不足である。少くも三生涯が必要である。」と誰れかへの手紙に書いたのを覺えてゐる。なぜつて、現代文學を一寸知らうとしたとしても、それには佛語といふものを一通り先づ學ばねばならない。それから古典にもざつと目を通さねばなるまい。それでもう半生涯は十分にかゝる、さうしてあとの半生涯で近代の文學が一通り讀破出來るであらうか？　恐らくその一部分でもむづかしい。文學だけでも既にそれである。まして人間は文學のみにて活けるものに非ず、その他に樣々な問題が山積してゐる。それ等の有ゆる文化が交錯し、堆積し、活動する上に、巴里なら巴里といふ怪物のやうな都市が打建てられてゐるのである。

所で常識といふものは最も低い常識のうちでも亦最も不正確なものとされてゐる。視識の方がまだしも正確だといふのである。それに相違はなからうが、巴里のやうな町に入つて、どうして急にそこにある大

畫の繪畫に目を通すとか出來よう！　日々何百といふ展覽會が催され、何千軒とも數へ切れない畫商が店を開いてゐる。一番よさ相な展覽會だけでも見ようと云つてみたところで、誰れがそのナンバーワンを選定する程廣く全體に亘つて研究してゐる人があらうか。であるからかうした場合、幾人かの異つた人々の異つた主觀を通してみた、可なり普遍性の足りない、不公平な意見に相違ないものを訊いて、更らに不公平な自分の主觀を加へて現代巴里の繪畫なるものを理解するといふのも結局止むを得ない方法なのである。例へば林君はスゴンザックをもつて現代の巨匠となせば、兒島君はピカソとか、ドランとかを擧げるといふが如き例である。然しその間に自ら各人各樣な判斷が築かれて來る。それには餘程運命的な面白い所があるものだ。

　時には又衆口一致といふ場合もある。例へば巴里に於ける大展覽會、所謂サロンなるもの丶權威墜落の如きは誰れがみても異論を差挿む餘地がないやうである。先年兄が大展覽會制に反對し、個展を唱導せる如きも一種の先見であつた。然し今やそれらの小展覽會を奪し、それに代らうとしつゝあるものは市井の畫商である。畫商の跋扈は昨今のことではないが、今日はその全盛と見らるるであらう。近代繪畫の運動は流派の相違から、主義主張の對抗に移り、朋黨に分裂し、今や無數の畫商の手に支配されようとしつゝある。從つて今日繪畫の標準となるものは美學とか理論とかそんな尤もらしいものではない、却つて簡單明瞭な只の事實である。即ち賣れるか、賣れないか、この一語に凡て盡されてゐる。これ以外に何もなくなつて終つた。

　勿論これは商人の横暴や畫家の自墮落を嘲つて云ふのであるが、然し一方それだからと云つて、全然無意義な現象かといふに、そこには又ある眞劍さも認めてやらねばならぬ。なぜなら、感受性の全く缺けた頭の悪い、人間でも、美學など丶、勝手なでたらめを机上に並べてゐればそれで濟む世の中に、兎も角資本をおろして商賣をしようといふ者の心理は、それよりや丶緊張を要する場合があるからである。

　林君や東郷君は私など丶違つて、畫家中にあつては多少とも音樂を解し得る側の人々である。サロンに隣る一室で、ちゑ子がピアノを練習しつゝあるのを聞いて、素敵ですなと、舌を巻いて行つた。

「こゝに來てゐる吾々畫家のなかに、あれだけの藝術を持つてゐる人がありませうか。」

　これは感慨深さうに東郷君の漏らした言葉だつた。隨分でたらめな生活をして來たといふのに、君の感受性はまだ磨滅して終はないのだと思つた。

三　チエレニウスキイ

　朝からスモーキングといふ服裝で、チ氏はマダム同道私の到着を聞きつけて早速ホテルへ訪ねて來てくれた。

　一寸餘談に亘るが、服裝のことが出た序に、ある有名な日本の文士が安達大使と初對面しに出かけた時、同伴者の注意のまゝ午前中だと

いふに、これもスモーキングで押出したといふ逸話を思ひ出す。何んぼ巴里で夜が更けたとは云へ、日が出てからはおかしかつたといふので、同件者に苦情を申立てたといふ。眞僞は知らないが、文士などの逸話としては磊落で面白い。巴里大使館で三大節などの場合、午前の式にフロックコート或はモーニングコート着用のこと、といふ揭示が出たが、吾々市井の者には絶對にもうそれらの服裝を用ゐる場合がなくなつて終つてゐる。或る時K書記官にそのことを談じたことがある。そのせいか、次回からはそれに準ずる服裝といふ風に寬になつて、吾々も出席出來るやうになつた。モーニングもフロック同樣今日ではもう廢物になつたやうである。紺色のクロワゼーの背廣なら夜でも晝席位は間に合ふことになつてゐる。

然しニースにスモーキングを持つて行かないため喜劇を演じた失敗がある。除夜の晩、與謝野さんの次男や、荻原君のやうな若い外交官達と一緒になつて、踊らうといふので、大きなテーブルを豫約して置いた。ホテルを出る九時頃になつて、スモーキングかアヴイでなければいけないと、同行のコムマンダン・ヘタトルが言ひ出し、自分の上着を着せてみたり、滯在客のを借りて來て着せたりしても、私のやうな小さい者に西洋人の上着が間に合ひ相なことがない。それでも氣休めに、その位長いのはいゝとか、肥つて見えるとか言つて、納得させやうとしながらも、皆んな笑ひこけるので、私は只苦々しく思ふのみであつたが、とう／＼終ひに考へ出したのは白シャツに、スモーキングの胴衣を着、上に黑の背廣を羽織るといふ新發明である。雜踏の席だつたので、大して人目にもつかずに濟んだか知れないが、窮すれば自ら名案を案出するものだと窃かに感心したのである。

本題に戻るが、久しぶりに逢つたチ氏の前額も禿げ、茶色の頰髯を細く僅かに顏の輪廓に殘してゐるので少し人相が變つて、もつともらしく見えた。病氣はいい方だと云つたが、まだよく咳嗽をしてゐた。マダムはどうも見覺えがなくなつてゐた。カプリ島の生れで、日本へ來てゐた頃にはいかにも伊太利の野花といふ風に、人見しりをしたりする女であつたが、今では良人の國語ボオランド語も、佛語も自由に喋べり畫の鑑賞なども出來るやうになつてゐた。娘が三人末の子が中の子が日本生れの筈である。

夫妻の日本に對するノスタルヂイは依然として變らない。日本人の會合とか、展覽會とか云へば、無理をしても出席するといふ風で、準日本人をもつて自ら任じてゐた。高石選手等が巴里へ來て競技をした時も、一家を引連れ應援に行つたりした。

夕方になると彼は程近いゲエテエの町から、一人でか、妻君をつれてか、モンパルナスのカフエへ出て來て、そこの椅子に腰かけ、煙草を燻らし時を過してゐた。彼の知人の半數は日本人かと思はれるほど澤山の日本人を知り、又日本人間の消息に通じてゐた。

日本人間では往々彼をよく云はない人もゐたが、それは單に彼がひどく貧乏をしてゐた時代があつたからであらう。彼は決して富んでは



ニース（プラス・マセーナの公園）——有島生馬筆

ゐなかつた。五階の小さい一室のうちに親子五人起臥し、その一隅で制作しつゝある有様を見る時は氣の毒な感がしてならなかつた。然し彼は貧乏によつて生得の藝術家氣質を少しも傷けてはゐない。この仲のいゝ夫婦は多くの點に於て、他の富んだものより遙かにノオブルで、幸福であると屢々私に思はせることがあつた。

兄が死んだ時、熱烈な慰問狀を遙に寄來してくれたのも彼であつた。ホテルの對面にも第一にその事を話し出して、深い理解と愛とをもつて兄の心事をよく洞察してゐてくれた。巴里に來て異國人の間に、かくの如き熱意ある同情を受けやうとは夢にも豫期しなかつた所である。彼は兄をも朧ろに覺えてゐると言つた。

私がヂ君と識つたのは、上野竹の臺の展覽會場での事で全くの偶然であつた。ある曇つた日文展で黑田さんの繪を見てゐると私の傍に立つて同じやうにそれを眺めてゐる一人の痩せた藝術家らしい外國人があつた。私は試みにあなたは藝術家ですかと訊いてみた。彼はさうだと云つて、直ぐ喜んで話し出した。私達は展覽會を見終つてからも尚ほ一緒に話し續けて、遂に櫻木町にあつた彼の住宅にまで行つた。青いペンキ塗りの一軒建の洋館であつた。彼はシベリアから東京へ着くと直ぐそれを貸りてゐた。日本で彼が識つた最初の畫家は實に私であつた。私は石井君初め多くの友人に彼を紹介した。さうして數年來二科會の一員となつてゐる。

私が上野で彼と識合ひになつたのも、後十四五年振りで、再び巴里に邂逅したのも實に奇緣である。最近彼の作品は少しづゝ本國にも認められかゝつてゐる。金さへ少し自由になれば私の夢である日本へ直ぐ出立するとは彼の口癖である。彼はもう一度位日本へ來ることがあるかも知れない。

社會科學

三月號内容　(年四回發行)

論文

資料

社會科學文獻批評

定價壹圓（送料四錢）

東京芝區愛宕下町　改造社發行　（振替東京八四〇二）

世界大衆文學全集

第十五回配本（二册）

トルストイ作◇近松秋江譯

カチユウシヤ

（價五拾錢）

「カチユウシヤ」——それは一貴族と一娼婦の魂の復活を主材とした、神聖なる兩性の問題小說である。——曠世の大偉人トルストイは、彼の思想、精神、宗教、藝術、のあらゆる主張を之に打ち込んで、帝政ロシヤの缺陷多き社會組織に峻嚴な批判と、痛烈な解剖を試み、人間苦惱の淒慘な描寫と、燃ゆるやうな青春の美と力とに溢れた美しい詩とを、太い線で浮彫し、人生の祕奧を抉つて、讀者の肺肝を突く。

オルツイ作◇松本泰譯

紅蘩蔞

（價五拾錢）

「紅蘩蔞」——その優にやさしい小さい花は、何と象徵するか？其頃英國では、有ゆる流行品の魁には、此美しい星のやうな花がつけられて、稀代の英雄の象徵とし、崇拜し、愛慕された。これに反し佛蘭西新政府は蛇蠍のやうに忌み嫌ひ且つ戰慄した。それは彼の覆面の義人「紅蘩蔞」が、ギロチンに送る貴族を盜み去るのに妙を得てゐたからである。此の事件に憤怒した佛蘭西は、虎狼の如き密偵をして逮捕に向はしめた。果して何れが勝つか？痛快なる探偵的興味と、美しいロマンスとは、强烈な酒以上に讀者を陶醉させる。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

（最新刊）加藤三郎譯補◇四六判四百四十一頁 寫眞八葉挿入◇定價壹圓（送料二十錢）

ハーバート・フーヴァー

新大統領フーヴァアとはどんな人か？

田舍鍛冶の子と生れ幼にして孤となり流離顚沛新聞の配達、洗濯の取次、坑夫等々あらゆる艱難と戰ひ遂に大統領となつた氏の傳記こそは現代第一等の青年の立志傳であるばかりでなく、產業界浪費征伐の一大記錄であり、又實に世界大戰の側面史である。且つ米國政治組織の說明書である。國家民衆の爲には常に一身の犧牲を顧みず、世界人道の爲には國家を超越せる彼の英雄的行動は三嘆措く能ざる所、今や彼れ廟堂に立つて新經綸を行はんとす、列國が彼の施設にその視聽を集中せる故なしとせず、此の時に當り本書の刊行を見る、我國民最大の關心事として必讀の快著である。

有川治助著 **ヘンリ・フォード** 人及び其事業（好評五十二版）　定價壹圓（送料十八錢）

發行所　東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

谷讓次新著

もだん・でかめろん

大都會に夜が下り、星屑とビルデングの灯が一つにぼやけて來ると、蝙蝠みたいに屋根裏に寢てゐた獵奇者の群は、どこかに何かしら面白いこと變つた事件があるやうな氣がして街に流れ出る。斯くて彼等は近代都會の神經を探ぐり心臟に觸れる。近代十日物語(もだん・でかめろん)は彼等の見た亞米利加といふ大都會の不思議な挿話のかずかずと、いろいろな場面を次々に展開する。讀者は唯彼等と共に夜毎々々に街を彷徨し大都會の驚異を飽かずに觀る。恰も夢遊病者の如くに。

(内容)●デユ・デボア夫人の出靈●勇敢な惡魔●太郎とB・V・D●キキ●腸詰と詩人●魔法の絨毯●黑い舞踏會●兎の手●妖婆と南瓜と黑猫の夜●國のない人々の國

價壹圓貳拾錢
送料 廿錢
四六判 上製
三百七十四頁

テキサス無宿 他三十一篇

めりけん・じやつぷは單なる在米日本人ではない。それは亞米利加の社會のみが生み出した日本人の一變種である。特殊の生活樣式を持つ特殊の人々である。テキサス無宿他三十一篇の中に彼等は谷氏の輕妙・深刻の筆によつて、哄笑し、啼泣し諧謔を弄し惡戯を行ひ失敗に萎れ得意に踊る。異境に於ける同胞の不思議な生活は限りなき興趣を與へる。同時に如何なる觀察者も未だ語らない亞米利加現代文明の眞相が鋭く解剖され暴露されてゐる。

(内容)●ヤング東郷●ダンナと皿●ジョウヂ・ワシントン●Sail, Ho●喧嘩師ジミイ●靴●返報●AMMA●テキサス無宿●めりけん・じやつぷ商賣往來六篇●他十七篇

價壹圓五拾錢
送料 廿四錢
四六判 上製
五百〇四頁

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

土岐善麿著

外遊心境

◇恩地孝四郎装幀 全アート紙刷 新型特製判

◇定價貳圓五十錢 送料廿四錢

最新刊

「外遊心境」一巻の海外印象記は他に比類を見ない。多感の遊子土岐氏の詩情に澄徹せる新鮮な光と影とをいみじくカメラに搾取し、溢るゝ歡喜と底知れぬ寂寥とを快適なエッセイに綴出して、行く先々の土地の、人々の心にひた〳〵と觸れた旅らしからぬ旅の心境は前人未到である。繙けよ。こゝろ坐乍ら旅する憧るる。

附錄**エスペラント**譯文(松本清彦)

土肥慶藏著 **鶚軒遊戯** (四六判 クロス天金) 定價參圓 送料廿七錢

新村出著 文祿舊譯 **天草本伊曾保物語** (四六判 天金) 定價參圓 送料廿四錢

發行所 東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

入學試驗に就いて

（抗議に對する抗議）

野上彌生子

一昨年の秋、私は東京朝日新聞紙上に『入學試驗お伴の記』と題する一文を連載した。これはその前の年、小學校を卒業した二番目の息子が上級の學校の入學試驗を受けた時、附添人としていつしよに行つた時の經驗に基いて書いたものであつた。幸ひにしてそれは反響なしではなかつた。私はその中に發表した感想や意見に對して多くの人々から贊否交交の批評を受け取つた。爾來春になつて、所謂入學試驗シイズンが廻つて來る度に、光榮にも、記憶のよい讀者は私の過去のその文章を引つ張り出し、新たに論議の對象としてくれてゐるやうである。同時に抗議者の力點は何に置かれてあるかと云ふと、現在の社會事情の下では、入學試驗が必ずしも否定されないと私が信じたこと、いはゆる「試驗地獄」なるものは、保護者たちが子供の學力を過不及なく判斷し、優しい注意と訓戒で成績相當の學校を撰ばせるならば、殆ど生じないですんだであらうと主張したこと、もう少し積極的に云へば、如何に激しい試驗も、落第さへも、一日十二時間も工場の隅で働らかされることや、小學校の運動場からすぐ田畝の中に追ひ込まれることに比較すれば不幸ではない筈だと斷定したことに對してのやうであつた。

併し以上の私の意見は單なる議論ではなく、實感に基因するものであつた。新聞紙上では分量の制限もあつてあれ以上書き續ける譯には行かなかつたので、若しこの問題を繰り返す機會があれば、私の考察をより委しく附加することに依つて、もう一度人々の批判を仰ぎたいと考へてゐた。

ところが四月號の『改造』を讀むと上田女史が『春と少年』に於て、他の抗議者と同じ抗議を私の上に投げ、なほ私の息子があの時の試驗に落第してゐたら、あゝ云ふ感想が公にされたであらうか、と云ふ念の入つた疑問まで抱いてゐられるのを見た。私はこれを目にした時丁度よい機會であると感じた。で、少し廻り道になるけれども、どうして私があの一篇を書く氣になつたかと云ふことからはじめようと思ふ。それは一方から云へば、上田女史の疑問に、筆者として答辯の義務を果すことであり、同時に私の考察や感想に新たな順序を與へ、それを一層明瞭にするであらうから。

人一倍不精で出おつくうな私は、子供の學校關係の會合なぞにも常に出たことはない

し、上の兄の入學試驗の場合も行つて見なかつた。併し次男の場合は、遠方で朝も暗いうちから出掛けなければならなかつたので、ほかの人に頼むのは氣の毒であつた。且つ、受驗場の光景は果してどんなであらう。一度見ておくのもよいかも知れない。——この漠然とした興味も手傳ひ、私は珍らしく附添人の役目を引き受ける氣になつた。

その三日間、私はそこに於て多くのことを見、感じ、味つた。すべてが初めての印象であつたから、馴れた人には何んでもなかつたであらうことも、私自身に取つては發見であり、驚異でさへあつた。同時に受驗生の親であると共に作家である私の頭の中では、それは子供の入學試驗に關する單なる經驗に留まらず、一つの藝術的素材として貯へられた。

書いて見ようかな、二三月もたつと私は時々さう思ふやうになつた。兒童の入學試驗がやかましく問題にされてゐるに拘はらず、試驗場に於ける具象的な描寫や記錄はまだ誰からも發表されてないやうに思はれた。議論よりは事實だ。私はその事實を見た。新鮮且つ重要な事實だ。議論では表はし得ない暗示と批判を私はそれに裏附けることが出來たであらう。——斯うしてその一つの素材は私のペンの下で受くべき彫琢を受けた。

この心的過程は、上田女史には普通人よりも一層よく分つて貰へる筈ではないかと思ふ。それだけ女史の疑問の詰難は私を啞然とさせた。假に一歩を讓つて、子供が入學出來たから發表したのだとして、反對に落第したら、彼女の云ふやうに私はあの文章を書く勇氣を持たなかつたであらうか。私たちの冷酷の興味の前には、不幸は幸福よりも、悲哀は歡喜よりも常によりアトラクチヴな題目でないだらうか。それ故この點に就いては上田女史の作家としての正しい理解を促したく思ふ。

次に私のあの一文を成心なしに讀んでくれた人には容易に知つて貰へることだと思ふが、私は現狀に於ては入學試驗を已むを得ないものとは信じたが、主張した譯でもなければ勿論奬勵した積りでもない。多くの不完論者が云ふやうに、また上田女史が書かれてゐるやうに、若し入學試驗が廢止され、生徒等が一年生から二年生になるやうに自由に上の學校に進むことが出來たならばこれ以上結構なことはない。如何に頑固な馬鹿者と云へどもそれに反對する筈はないであらう。が、同時にその理想案には一つの條件が附されなければならないと私は思ふ。即ち入學は全生徒に亘るべきで、一人の除外者もあつてはならない。委しく云へば、月謝が拂へないことや、制服や靴が買へないことや、教科書の金を持たないことが、除外の理由になつてはならない。併し現在の社會組織の下に於て、これ等の美しい自由な入學が果して可能であるであらうか。

考へて見るまでもなく、それは夢想に過ぎない。とすれば小學校の一年から六年まで同じ權利、同じ親愛、同じ快活、同じ向上心で子供らしく結びついて來た少年たちが、卒業期になると共に突然一つの單純な理由のため

に區別されて、一方の富裕な子供たちは、どこの學校へでも望み次第ろくな勉強もしないで呑氣に入學し、それこそ小鳥と共に春を樂しみながら通學され得るに反し、他の貧しい子供たちは、小僧にやられ、工場で働らかされ、鑛山のまつ暗な坑道に投げ込まれることが——それは單に「春と少年との間に掘られた不自然な深い溝渠」でなく、彼等を人生の春から永久に遮斷する怖ろしい罅隙である——無慈悲でないであらうか。殊にこの痛ましい差別を涙と羨望で不幸な子供たちの頭に極印づけることが地獄でないであらうか。私と私の抗議者との分岐點は主として此處に存してゐる。彼等はその惠まれざる少年等の悲嘆をば無視してゐるに對し、私はそれを入學試驗に劣らない、寧ろそれ以上の悲慘事だと考へる。何故ならば、入學試驗の悲劇は前にも述べた如く、實力相當の學校を選ぶことに依つて緩和され得るに反し、貧しい少年たちに課せられてゐるこの際の悲劇は、運命的なものであるから。

上田女史はギッシング氏の樸な村落に行つた六ペンスの奇蹟を引いたついでに、自分は「六ペンスの遺失」に依つておびやかされたことはなかつたけれども、入學許可證の一枚が得られなかつたために泣きわめいたと云ふ少年の日の記憶を根據にして入學試驗に反對してゐられるらしいが、これは忌憚なく云へば特權階級者のエゴイズムではないだらうか。(また餘計な差出口を許して貰へるなら、彼女は入學許可證を貰へなかつたその學校以外の他の學校をどれか選むことに依つて、泣きわめかないでもすんだのではなかつたらうか)。六ペンスの遺失の苦い涙も知らず、入學試驗のむづかしさも知らず、さてはそれで何の苦勞をする積りなのであらう。それとも斯う云ふ階級の子供たちだけは何んにも苦勞させる必要はく、もとの小學校仲間が油だらけになり、畑の泥にまみれ、石炭の粉末で病氣になり、また下婢に、女給に、賣笑婦に賣られる時に、完備した贅澤な學校の運動場で、自然に和して喜び歌つてゐればそれでよいものであらうか。私にはさうは思へない。

これ等の私の考へ方は單なる理論ではなく實感に基因してゐることを前に述べた。私はその引例をこゝに附記したいと思ふ。

私の家の右隣にメリヤス工場がある。もとは米問屋であつたのが、持主が變ると共に商賣も變つたのである。白狀すれば、この變化は私の家に取つては脅威であつた。家から一間半とは隔らない距離に据ゑつけられた數臺の器械は、絶え間なき騷音に依つて文字通り私たちの生活をかき亂した。晩秋から冬にかけて戸障子の閉め切られる時分はそれでもどうにか我慢は出來るが、他の時期になると、なにものにも遮斷されない雜然たる音響が寒い季節の幾倍にもなつて襲つて來た。

或る夏の夜、はじめての訪問客は、最も遠い二階の部屋まで開けつ放した窓を通して侵入する、小刻みな、潮を打つやうなその響を耳にし、不思議さうに尋ねた。

『河があるのですか。』

さうだ。それは河であつた。誰も、どの家

も、減らなければならない、荒く音高き生活の奔流であつた。この認識が、迷惑な、殊に私たちの生活に取ては人一倍迷惑なそれ等の騒音に對する不平を私たちに屈服させた。

　併し『馴れ』の惰性で、この頃ではやかましい器械の響にもだんく＼無感覺になりつゝある。同時に今までは十分よく知る機會のなかつた此の種の家庭工業のやり方や、職工等の勞働狀態が私の注意を引きつけるやうになつた。すべての工業が個人から組織的な會社の經營へ、小資本から大資本の大量生產的な方法へ移りつゝある中で、メリヤスだけは家庭工業者が有力で、たまに會社組織にしても引き合はない。主なる理由は大した金がなくても仕事がはじめられる上に、勞働時間に制限されないからだ、と云ふ意味をなにかで讀んだと思ふが、私の見聞はたしかにこれを裏附ることが出來る。今時分だと朝六時過から器械はすでに鳴りはじめる。さうして夕食のあとの夜業にまでそれは連續する。夏になつてもう二時間も早く明け、もう二時間もおそく暮れる頃には、それだけ勞働時間が延長される。寒い冬の間だつて朝七時よりおくれることはない。正月の近づく頃には殆ど徹夜の狀態である。これ等の特別な季節は別としても、毎日少くとも十二時間、夜業を入れると十五六時間の勞働時間を職工たちは課せられてゐるらしい。斯くして器械を使用するよりは器械に驅使されてゐる近代工業の一般的法則に從ひ、彼等は人間である前に常にベルトであり、齒車であり、ペタルである。而かもその過半數は十三四から六七位までの少年工である。

　私は板塀を隔てゝ彼等の子供つぽい鼻歌と口笛を聞く。それは併し勤勉な器械が晝飯のために十二時から十二時五十分まで彼等を解放する時に限つてゐる。(仕事の間も歌ふことや話すこと位は自由であるのかも知れないが、器械の音がすべてを壓し消す。)お天氣がよいと彼等は前の往來に出かけてキャッチ・ボオルをはじめる。陽氣な笑ひ聲と叫びが、向ふの硝子戶の內側に並んでゐる鏡臺の支配者を忘れさせてゐる。が、そこにちよつとした悲劇が發生する。

　同じ町のすぐそばに或る有名な中學校がある。晝休を利用して買ものにでも行くらしい生徒たちが、五六人連れ立つて通りかゝる。殊に土曜日の退け時分には、彼等のあまり上手でない球技が一層多くの生徒たちの無言の冷評に曝らされる。と、彼等は急に面白くなくなつたやうに遊戲をよしてしまふ。でなくも、頓てまたはじまる仕事がそれを中止させる。反抗と憫げと羨望で、彼等は再び腰掛けた器械の前から、明日の日曜日の期待で常にも増して愉快さうに見えるそれ等の特殊な通行人を眺める。云ふまでもなく彼等には日曜日と云ふ明日はない。同時にまた暑中休暇もなければ、運動會もなければ、旅行もなければ、對抗競技もない。

　これ等の可憐な器械的部分品が、到るところの工場にベルトや齒車と共に無數に存在してゐることを私は信ずる。さうしてまた同じ類似のものが、石炭山に、水飲百姓の小家

に、會社の給仕室に、市電の少年車掌の溜まりに、さうしてまた女中部屋に、同じ反抗と悄げと羨望と、更に氣の毒な諦めで生きてゐることを。——彼等のことを思ふと、入學試驗位なんでもない、と云ふ氣になることが、非常に不自然な粗雜な考へ方であるだらうか。

今一つの實感は、現在の社會狀態に於て、學校の組織や行政に何等の改變も加へず、單に入學試驗だけが省かれるならば、金持や貴族や官吏や、乃至それに緣故のある有產階級の子供たちだけが恩澤を蒙ることになりはしないか。と云ふ憂慮を私に抱かせる。

次男の入學試驗の時、最初の學術試驗の合格者として發表された子供は九十一名であつた。然るに、募集の定員は八十名であつたから、その中から十一名の子供がメンタルテストと體格檢査に依つて當然ふるひ落されなければならなかつた。その最後のふるひ落しに出逢つた子供の中には、日本に於ける最大の富豪の一人として知られてゐるX——家の子供も交つてゐた。次男と同じ小學校であつたので、私は彼がよく出來る子供であり、また體格でも落されるほど不健康でないのを知つてゐた。然るにその子供は落ちた。金もなければ、地位もなく、また名譽もない家の子供なる三四名の同級生は合格することが出來たのに。——恐らくその及落の差は一點か二點の相違であつたかも知れない。私は彼に同情し、試驗の峻嚴さに脅えたと共に、同時にまた反對の場合を考へて更に一層強い恐怖を感じた。若し試驗がその冷酷な公平を失ひ、墮落せる政治界や實業界に於けるが如く、すべてが金と情實に依つて左右され得たとすれば、——この場合に就いて云ふと、彼の不足の一二點が彼自身の力以外に彼の父の富や權勢に依つて補充され得たとすれば、果してX——家の子供が不合格になつたであらうか。

終に臨んでもう一度繰り返して云ふ。私は決して入學試驗廢止に反對するものではない。寧ろそれを理想とする點では人後に落ちない積りであるが、併しそれはX——家の息子も、工場の小さい職工たちも同等の入學權を獲得する日に於てこそ初めて有意義である。でなくして單なる廢止は現行以上の深刻た悲劇を生むに過ぎないであらう。

追放を語る

レオン・トロツキー手記

第一信

（コンスタンチノープル二月二十六日）

「これが物事の成り行きだ。」

センセイションは政治の避け難い影である。私のロシアから追放せられたことは、餘りにも大きな影を投げた。凡そ高い理想を持つ政策はセンセイションを避けなければならない。それ故に私が此の通信を書く目的も決して自分の事件を更に此の上センセイション化する爲めではない。それ所か反對に、政治的事件に於て客觀性が可能である限りに於て、一般公衆に客觀的ニユースを提供し、センセイションを消し止めやうとするに在るのである。

讀者が欺される樣な事の無い爲めに、私は消息に通じた人達が既に知つてゐる事柄から述べて行かう。卽ち革命に對する私の態度、ソヴイエツト權力に對する、マルキシズムとボルシエヴイズムに對する私の態度が依然變化してゐないと云ふ事である。政治は個人的爭ひなどから成り立つものではない。

私が今日輿論に近付くのに今迄と違つた手段を執りつゝあることは事實である。しかし、それは私が以前と違つた境遇に在るからである。長い年月の間私の生活は愚にも付かぬ空想や臆測、或は作り事の種となつて來た、これに對して私自身としては、自分の全生活信條が關係しない限り、一笑に付して來る事が出來たのである。今日ではしかし私は自分の周圍を神秘で包んで置く理由を有しない、否それ所か、今迄にも增して凡ての眞實を私の同志達に、同時に敵に、語りたいのである。私の目的はプロパガンダではない、單なる眞實だ。この通信を書き始めるに先立つて私は絕對的な表現の自由を要求した。從つて私は自分の考へる通りを述べるであらう。然らずんば全然何事も述べないであらう。

私はこの通信をソヴイエツト汽船イリイツチ號が二月十二日に私を

運んで來たコンスタンチノープルに於て認めてゐる。或る新聞記者は反對の報道をしてゐたけれども、私は自分自身の發意で此處へ來たのではない。ドイツやフランスに於ける私の同志達が、私の此處へ來たのは全く誤謬に依るものだと述べてゐるのは正しい。船上には私の家族とオ・ゲ・ペ・ウ（國家保安部）のエヂエントの外誰も乘つてゐなかつた。私は下船と同時にケマル・パシャ（トルコ大統領）に宛てた次の聲明を行つた、『余は自由意思を以て貴下の領土内に入るものに非ず、強制せられて入國するものなる事を聲明す。』

私は之を自分の署名付きの文書で提出した。

ソヴイエット・ロシアから追放せられる以上、私は勿論言語と習俗を知つた國に行きたかつたのである。しかし追放される者の利害は滅多に追放する者の利害と兩立するものではない。

一九一六年にフランス政府は私を言葉の全然分らないスペインへ追放した。當時のスペインのロマノネス自由黨内閣も私に言語を勉強する遑を與へず、私を更に海の彼方へ（米國へ）追放して了つた。若し道理ある政治上の議論に侮辱と云ふ事が仲間入り出來るものとしたら、私は自分を追放した、時のフランス大臣マルヴイーが、數ケ月ならずして自分自身クレマンソーに追放せられた事實を回想して滿足することが出來た筈である。それのみか、私の追放の主なる原因となつた、當時のフランス政治警察部長ビデール・フオークスパー自身も一九一八年にロシアで餘り友誼的でない秘密使命を果してゐる間に逮捕されたのである。彼は當時現にウクライナ人民委員であつた私の前に引き出されて來た時、私はこう訊いた、『一體どうしたのだ？』所が彼は答へて云ふ、『これが物事の成り行きです。』

私はこれを素敵な返答だと考へた事である。

世界は今後長い間この文句が多くの場合に甚だ手頃であると考へられる樣な狀態を繰り返へすであらう。

私をロシアから放逐したからと云つて決して事件の終末となるものではない。然も私は自分一個の運命に就いて語つてゐるのではないのである。事態は迂餘曲折を重ねるであらう。が私はマルキシスト學派に於て歷史を觀る事を學んでゐる。されば吾々は現在の情勢を自ら說明する事實を觀察することにしよう。

一九二八年一月、第十五回共產黨大會は——之は事實上スターリン一派の大會であつた——黨から凡ての反幹部派を追逐し、更に私に對する政府の彈壓を承認した。間もなく、反幹部派の數百名の人々が、後更に數千名の人々がシベリアや中央アジアの各地に追放されたのである。

その中には前ウクライナ人民委員會議々長で又駐佛大使だつたのみか、ブルガリア、ロシア、フランス及びルーマニア等で過去四十年間もプロレタリア權利の爲めに鬪つて來たラコフスキーがあり、世界でも最も名の知られたマルキシズムの著述家の一人である、カール・ラデツクがあり、黨の創始者の一人で人民委員もしたスミルノフがあつ

た。又偉大な經濟學者でフランスとの交渉に財政專門家として加はつたプレオプラゲンスキーがあり、赤衛軍のオーガナイザーで革命戰の殊勳者たるムラチヨフスキーやウラロフもあつた。それから、追放前迄內務人民委員だつたベロボロドフ、黨の秀れたプロパガンヂスト、ソスノフスキー、極東婦人の間に於けるコミンターンの任務を指導したカスパロヴア女史、小人民委員會議前議長ボグスラスキー等々があつた。

　私は以上極く少數の名を擧げたに過ぎないが、その他にも一九一六年の革命並に一九一七年の二回の革命に參加した多くの人々の名を擧げることが出來るのである。その中の或る人々の生涯は戲曲の材料となり得るものである。だが政治的に云つて、私は單に彼等の革命的價値が、聊か、彼等を追放した人間のそれよりも優つたものである事を述べるに止どめて置かう。

流謫の艱苦

　私の追放の爲めに撰ばれた場所はカサクサタナの新しい首都アルマアタであつた——マラリアの猖獗する、チヤンシヤン山麓の地震と洪水の都會、それはモスコウから二千五百哩もあり、最も近い鐵道からでも百五十哩は距れてゐた。私の妻と息子はこの土地で私と一緒に、幾何かの書物を友として、之だけは實際素張らしい自然の環境の中に生活した。

　手紙や新聞紙は二週間の間隔を置いて、或は一ケ月、二ケ月、又はそれ以上、季節と政府の氣紛れとに依る間隔を置いて到着した。此處には又同志も澤山ゐた。が私達は全く離れて暮してゐた、と云ふのは私達と交通しやうとした人々は嚴重な處罰を受ける事になつてゐたのである。私に取つて唯一の眞の意味の外部との接觸は狩獵であつた、私はオ・ゲ・ペ・ウの官吏に護られて息子と一緒に狩をした。そして何週間も星の下で寢たり、ジプシーの車の中で眠つたり、或は駱駝の背に乘つて旅行したりして、まるで游牧民の樣な生活をした。獲物は豐富だつた。山羊、猪、鴨、鵞鳥、それから雉、そればかりか蝎までゐた。

　この一月一日には私は電報で虎が三匹までアルマアタから百五十哩以內の地點に現れ、川に沿ふてバルチヤツシユ湖の方へ下つて來ると云ふ報告を受けた。私の息子と私とはこの虎に向つて防禦の一戰を挑むべきか、或は又ケロツグの不戰條約に訴へべきかに迷つた。クレマンソーの例に依ると、虎は不戰條約に贊成するに違ひない。しかし、多分吾々に取つて幸な事には、私達はこれを實際に試みて見る前に追放せられたのである。

　追放されてから最初の十ケ月間は吾々の手紙は、檢閲されながらも、半分位は目的地に到着した。實際追放者の手紙が如何に廣汎な範圍に亙つて頒布されたかを知る人は稀であらう。或る場合には此等の手紙は小册子に印刷されて、國內にも國外にも、廣く公にされた。

だが去年の十月に至つて突然變化が起つたのである。吾々と政治的同感者達との通信は、極く個人的な友人同士の間に於てすら、突然中斷され、電報は一本も來なくなつた。それは丁度十月革命の十週年記念祭當時の事だが、私は後になつて當時モスコー電信局に私に宛てた數百通の祝電が受け付けられてゐた事を知つたのである。私達は次第次第に嚴重に包圍せられて來た。

政府當路者の遁辭

ロシアの大衆ばかりでなく、スターリン自身の官吏さへも、追放された古い革命家達に對する政府の處置に叛意を感じてゐた事實を忘れてはならない。しかし彼等は、黨の統一をし、政府に平和維持の目的を追求せしむる爲めにはこの種の手段も必要であると述べる當路の者に依つて宥められてゐたのである。

スターリンの支持者達は反幹部派領袖の追放に依つて私の一派の活動を終止せしめることが出來ると考へた——或は少くもそう公約した。しかしそうはならなかつたのである。第十五回大會の翌年は黨に取つて最も面倒な年であつた。實際大衆が眞に領袖間の爭に興味を持ち出し、黨の數百千の領袖達が追放せられる程の大きな軋轢が存在してゐるのだと云ふ事を如實に知る樣になつたのは、實にこの第十五回大會以後のことなのだ。

斯くの如き彈壓にも拘らず反幹部派は一九二八年中（卽ち大會に續く年）に、特に各工業中心地に於て著しい成長を遂げた。更に彈壓が結果した、そして追放された指導者間の交通禁止となつたのである。吾々は更にそれ以上の彈壓が起るであらうと云ふことを豫期した、果せる哉この豫期は決して失望させられはしなかつたのである。

十二月十六日、オ・ゲ・ペ・ウの特別使者が到着して、私に一通の最後の通牒を手渡した。それは私に凡ての反幹部的活動を中止すべきことを命じ、然らざる場合は政治生活から全然私を孤立せしむべき手段が取られるであらうと云ふものであつた。追放の事には何等言及してゐない、私は之を全然國內的手段の意味だらうと想像した。私は幹部會に一書を送つて私の主義を概說し、右に對する返書とした。

幹部會へのステートメント

私は此處で右の書の主要な部分を引用して置かなければならぬ——

一切の政治的活動を中止せよとの余に對する要求は、余が過去三十二年間、卽ち成年後の全生涯をその爲めに鬪つて來たプロレタリアの諸權利の爲めの鬪爭を余に斷念せよと求めるに等しい。

余のこの活動を反革命的であると誣ひんとする企を行ひつゝあるものこそ、余が世界のプロレタリアートに對して、マルクス並にレーニン主義の根本的基礎の顚覆者であり、世界革命の歷史的諸原則並に十月革命の傳統及び敎訓を干犯し、斯くて無意識的に、然も不可避的に新しきテルミドール（フランス革命の第十一月、ロベス

ピエールの没落、從つて恐怖政治の終焉を指す）への道を自ら準備しつゝあるものであると非議する人達である。

私は各種の國内並に國際問題に就いての、吾々の種々の意見の乖離點を數へ上げて後に、更にかう續けた――

ブルジョア革命のみならずプロレタリア革命の後にも反動は來得るものである。過去六ケ年間ソヴイエット・ロシアは、徐々にではあるが確實に、十月革命への反動に向つて逸脱し、その爲めに自分自身のテルミドールへの道を拓いて來た。この反動の最も明白な徴候は、黨の左翼に對する兇惡な、組織的迫害である。スターリンとその一派はその最後の微弱な抵抗を試みんとするに當つて、武器として、現に追放されてゐる反幹部派の黨員が提供した思想の、然もボロボロとなつた殘物の外何物も有つてゐないではないか。彼等自身の創造力と云ふものはゼロである。左翼に對する彼の鬪爭は、彼等から凡ての安定を奪つた。彼等の實際的政策は、建設的に非ずして虚僞であり、自己撞着であり、且つヒヨロヒヨロである。彼等の反動家共に對する華々しい鬪爭は、多くは、大衆の眼から、ボルシエヴイキに對する、又レニニストに對する、眞に破壞的な鬪爭を遮はんとする爲めの欺瞞に過ぎない。

私の書簡は結論して云ふ――

吾人は第十六回コミンターン大會（第六回の間違か）に對する宣言中に於て、分派主義云々の非難に答へてかう述べた、即ち分派主義は、裏切にも吾人に強ひられた第五十八條を取消し、吾人を悔い改めたる罪人としてではなく、未だ嘗て自分等の戰旗を裏切つた事のない革命家として復黨せしめない限り、決して止まないであらうと。然も吾人は今日の最後通牒を豫見して大會に對する右の宣言中に於て斯う書いてゐるのである、『唯最も腐化した官吏のみ、革命家に對してその政治的活動を中止せよと求めることが出來る。唯最も下劣なる變節者のみ、此の種の約束を爲すことが出來る。』と。余は今以上の言葉を改變すべき何物も有してゐない。各人をしてその責任を取らしめよ。貴下等は依然として敵對者を彈壓し續けんとするか？ 吾人は吾人の責務を知るのみ。之を最後まで果すであらう。

エル、トロツキー

アルマアタ、一九二八年十二月十六日

以上が私の追放までの經緯である。追放のことに就いては、私は次信に於て語るであらう。

第二信

（コンスタンチノープル二月二十六日）

私は一切の政治的活動を中止せよと求められた時、その樣な要求は

唯最も野化した部分のみから出來ることが出來、又變節漢の外は何人も同意出來ないものだと答へた。私は今尚、スターリン派自身すら、此れ以外の答を豫期してゐたかどうかを疑ふのである。一ケ月は何事も無く過ぎた、私達の外部の世界との關係は完全に切斷せられ、一九二八年の終の頃まで、政府の監視を物ともせず、アルマアタの私にモスコウやその他の中心地に於ける出來事の極めて完全なニュースを見事に供給し續けてゐた政治的同志達との違法な關係すら斷れた。

一月中私はモスコウ新聞の外一切何物をも受け取らなかつたが、新聞が右翼に對する政府の方策に就いて次第に多く報ずれば報ずる程、私達は左翼に對する攻勢をも豫期しない譯に行かない事を益々痛感したのである。それがスターリンの遣り方なのだ。

モスコウから派遣せられたオ・ゲ・ペ・ウのエヂエント、ヴォリンスキーはこの間中ずつと訓令を待つてアルマアタに留待つてゐた。一月の二十日に彼は私の所へ遣つて來た。彼の兩側を護衞して來た數名の武裝警官は直に家の入口と云ふ入口、出口と云ふ出口を占領した。ヴォリンスキーは私に一月十八日附の次の樣なオ・ゲ・ペ・ウ令の拔萃を手渡した——

市民トロツキー・レオン・ダヴイドウイツチは、最近反ソヴイエツト叛亂の煽動に從事し、且つ現にソヴイエツト權力に對する武力鬪爭の準備を爲しつゝある違法なる黨派を形成して、反革命的活動に對する刑法第五十八條違反の罪あるを以て、此處に市民トロツキー・レオン・ダヴイドヴイツチをソヴイエツト社會主義共和聯邦の領土内より追放すべきことを命ず。

私は此の文書の受領に署名する樣求められた時、次の如く書いた——

その本質に於て犯罪的であり、その形式に於て違法なるオ・ゲ・ペ・ウの決定は、一九二九年一月二十日余に傳達された。

トロツキー

私は之を犯罪的と呼んだ、何故となれば私が武力的抵抗を試みんと準備しつゝあるとの云ひ掛りはたくまれた虚僞だからである。追放を正當化する爲めにスターリンに必要であつたこの方式を使用した事自身が、ソヴイエツト權力に對して存在し得べき攻撃中の最も邪惡なるものでなくて何であらう。何故となれば、十月革命の首領迄の凡て、ソヴイエツト共和國並に赤軍の創造者の凡てを包含する反幹部派が現にソヴイエツト權力の軍事的沒滅を企てつゝあると云ふことが若し事實だとすれば、この事實こそロシアの破局的形勢を實證するものではないか。斯くの如き場合、最も淡懷なブルジョアも云ふであらう、『ソヴイエツトと急いで經濟的關係に入る必要はない。目下準備中の武力的鬪爭の結果を待てば良い』と。

幸なことにオ・ゲ・ペ・ウの方式は單に暴慢な警察の虚構に過ぎないのである。反幹部派の政策は武力的抗爭などとは何の關係もない。私達は依然ソヴイエット統治の活力と彈力性に全然確信を持つてゐるものである。

吾々の政策は内部的改革のそれである。私は此の機會に、スターリンに依つて命ぜられたオ・ゲ・ペ・ウの方式の惡影響を出來る限り防止してソヴイエット共和國の利益を保護する爲め世界に聲明する。客觀的事情のみならず、効果なき逡巡の政策より來る所の内的困難が假令如何に大きなものであらうとも、ソヴイエット統治の急速な崩潰を期待する者は無殘なる失望の憂目を喫しなければならない破目に在るのだ。

オースチン・チエンバレンがこの程の錯覺を有してゐないことは明白である。若し新聞紙と云ふものが信ずるに足るものならば、特にアメリカの週刊誌ネイションが信ずるに足るものであるとすれば、オースチンは英國とソヴイエットとの關係は、トロツキーが『銃殺される』日が來れば全く實際的となるであらうと宣言してゐる。この文句は、米國の海軍に就いて語る場合、恐ろしく榮食主義者らしい言葉使をする保守黨大臣の氣魄に榮譽を添へるものである。

私は外交官の地位を有するものではないが、失禮ながら、私一個の利益の爲めにも、將又一般の利益の爲めにも、英國の外務大臣に對して、餘り字義通りに右の文句を固執しない樣御忠告申し上げる。スターリンは既に私を追放してチエンバレンの希望に添ふ用意のあることを示した。彼が更にそれ以上一歩を進め得なかつたからと云つて、それは決して御意に添ふ意思が無かつたからではない。その爲めに英國とソヴイエットとの通約關係がその影響を蒙らなければならない理由にはなり得ないものである。

私は尚國際的關係は相互主義に基くものであることを云ひ得るのであるが、之は愉快でない問題である。寧ろ止めにしやう。

吹雪中の出發

オ・ゲ・ペ・ウの命令を受け取るに當つて、私はこの犯罪性と違法性を強調した。こうする事に依つて私は市民は國を去るか刑罰を受けるかの選擇權を與へられべきもので、本人の承諾なしに追放することは合法的であり得ないと云ふ事を主張せんとしたのである。私が『何處へどう云ふ風にして自分を追放するつもりであるか？』と訊ねた時、私は、この問題は獸露で私に出會ふ樣派遣せられたオ・ゲ・ペ・ウの特殊エヂエントが傳へる事になつてゐるとの答を得た。

翌日はトランクに衣類や原稿や書物を塡め込むのに忙しかつた。私の飼つてゐた二匹のポインターは私達の靜かな住ひに非常に澤山の見慣れぬ人々がやつて來たので可成り面喰つてゐた。とは云ふものの私はオ・ゲ・ペ・ウの態度は決して敵對的ではなかつたことを述べて置かなければならぬ。

二十二日の夜明けに私の妻と息子と私自身とは自動車に乗つてトドク雪の積つた道をタルメ山道に向つて進んだ。其處には猛烈な吹雪が荒れ狂つてゐた。タルメ山脈を越えて私達を曳く筈の強力な牽引車は曳かれる筈の數台の自動車諸共雪中に深く埋づた。七人の人間と、數頭の馬がこの吹雪の間に死んだ。私達はとう／＼自動車を棄てゝ橇に乗らなければならなかつた、そして二十露里行くのに七時間を要したのである。道すがら私は新しいトルキスタン・シベリア鐵道建設の材料や、巡羅兵の大太鼓等々を積んだ澤山の橇が凡て半ば雪に埋れてゐるのを見た。人や馬は近くの小屋に避難してゐたのである。

山道を通過して私達は再び自動車に移り、ペチウエケ・ペケで列車に乗り込んだ。

此處で受取つたモスコウの新聞は反幹部派員の追放に就いて一般輿論を徐々に馴らしてゐることを示してゐた。私達はアクチユビンスケで電報を以て、目的地がコンスタンチノープルであることを知らされた。私はモスコウに住む私の家族の二人に會ふべき機會を要求した。その結果二人はラヤゲスクで私達に會ふ樣に送られて來て、私達と同じ樣な監視の下に置かれた。交替した新しいオ・ゲ・ペ・ウのエチエント、ブラノフは私に流刑地としてのコンスタンチノープルがアルマアタに優る有利な諸點を思ひ込ませやうと骨を折つたが、私は斷然行くことを拒絶した。

ブラノフはモスコウへ電報した、其處では凡ゆる場合の事柄を豫想してゐたが、唯私を運んでロシアを去ることを拒絶するかも知れないと云ふ可能性だけは別であつた。私達の特別列車は別の線路へ乗り入れられ、やがて靜かな小驛で止つたが、此處で私達は長い間留つてゐた。

幾日も幾日も過ぎ去つた。食料の容器は列車の周圍に堆積し、烏が群を爲して饗宴に集つた。野兎は冬季の恐ろしい傳染病に襲はれて死に絶えてゐたので一匹も居なかつた。機關車は一輛連結して一番近い大驛へ毎日食糧を取りに行つた。私達の一行は感冒に犯されて毎日毎日嚔をしながら待ち暮した。

私はアナトール・フランスを再讀し、又クルチエフスキーのロシア史をも讀み返へした。

モスコウは各々の問題を討議しつゝあつた。機關車は凍結を避ける爲めに徐やかに前後へ走り續けた。夜に夜が續き、遠くの無電局は私達の居場所のニユースを求めて空中を探り求めてゐた。私達は將棊をやり、無電局の間は聞かなかつた。假令聞いた所が私達は唯かう答へることが出來ただけであらう、『吾々は夜間此處へ伴れて來られた。だから何處に居るか分らない。何處かクルスク地方の內であらう』と。

同志の追放を聞く

斯くて十二日と十二夜が過ぎた。私はその間に、トロツキー派として知られてゐる人々の外に更に數百名の同志が逮捕されたことを

聞き知つた。名前を指し示した人々の中にはゲオルギア人民委員會議前議長カヴタラチエ、前パリ駐在ソヴイエット通商代表ムヂヴアニ、黨最上の著述家の一人ヴオロンスキー、ウクライナ革命中の最も英雄人物の一人ドロプリスその他多數があつた。凡て黨の創設に活動し、十月革命に參加した人達である。

二月八日ブラノフはこう聲明した、『モスコウ政府が最善の努力を拂つたにも拘らず、ドイツは全然貴方の入國を拒絶しました。それ故私は貴方をコンスタンチノープルまでお導きする命令を受けてゐます。』

之に對して私は、自分が決して進んでコンスタンチノープルに行くものでない事を答へ、トルコの國境に到着したら矢張その通り宣言すると述べた。ブラノフの返事はこうである、『と云つて、貴方がトルコへ行くと云ふ決定には何の變化もありませんよ。』

『君はトルコの官憲と一緒になつて、本人の意志に反してまで我が輩をトルコへ伴れて行かうとするのか？』

『それは知りません、吾々は唯訓令に從つてゐるだけです。』

この樣にして十二日間靜止してゐた後私達の列車は動き始めた。列車は少し長くなつてゐた、と云ふのは吾々の護衞が增したからである。私はビシユペカを立つてから後は自分の車輛を離れることを許されなかつた。私達は全速力で南へ走つた。停車は唯水と燃料とを補給する爲めに小驛で行つただけである。こうした極端な用心は私が一九二八年の一月初めて追放される時モスコウの停車場で起つたヂモンストレイションの爲めである。あの時群集は列車の出發を妨げ、私は翌日迄、秘密に送り出されることが出來なかつたのである。

政府部内の不一致

新聞はトロツキー派に對する更に新しい大彈壓のニユースを傳へた。其等の記事の行間に私達は、私の追放に就いて政府部内にも大きな論爭のあることを看て取ることが出來たのである。スターリン派はあせつてゐた。彼等は單に政治的難關ばかりでなく、打ち勝つべき物理的難關にさへも直面してゐたのだ。

汽船カリーニン號が私を載せる命令を受けてオデッサに碇泊してゐたが、凍り付いて動けなかつた。モスコウは極めて急を要することを主張したが、何隻もの碎氷船もカリーニン號を自由にすることが出來ない。とう／＼汽船イリイッチ號が用意された。列車は二月十日の夜オデッサに到着した。私は窓から見慣れた景色を眺めた、と云ふのは子供の時分此處で七年を過した事があるのである。

車輛は波止場に横着けとなつた。猛烈に寒い、眞暗な夜だつた。が、私は波止場がオ・ゲ・ペ・ウと兵隊で一杯になつてゐるのを見ることが出來たのである。

此處で私は二週間の孤獨を共にして來た家族の二人に別れねばならなかつた。私は列車の窓から船を認めた。そして嘗て私達を氣の進まぬ目的地に運んだ今一隻の船を想ひ出さざるを得なかつたのである。

それは一九一七年二月、ハリファクスでの事であつた。英國の水夫達は、私がクリスチャニア（今のオスロ）とペテログラード（レニングラード）に行く爲めに必要な一切の書類や査證を持つてゐたにも拘らず、船乘の面前で私をノルウェイの汽船クリスチャンスフォード號から移したのだ。私の家族はその時も同じだつたが、今よりは十二年若かつた。當時十一才だつた私の長男は、私が漸く止めるまで、拳固で英國の水夫を毆り付けた。その樣にして私はペテログラードへ行く代りに一ケ月間もアムハーストの收容所に留め置かれたのである。

イツイッチ號は貨物も他の乘客も乘せないで朝一時にオデッサを立つた。六十哩の間はその前を一隻の碎氷船が走つた。嵐は既に次第に衰へ掛けてゐたが、私達は時折不意打を喰ふこともあつた。そして二月十二日に私達はボスポラス海峽に入つたのである。私は、豫め私達の到着を知らされてゐたトルコの大統領に、私が自分の意思に反して此處に伴れて來られたものである事を述べた宣言を手交した。しかし此のステイトメントは何の效果も無かつた。二十日と四千哩の旅行の後私達は遂にコンスタンチノープルに上陸したのであつた。

第三信

（コンスタンチノープル二月二十七日）

如何にして起つたか？ それが問題である。答は二つの方法に依つて提出することが出來るであらう。孰れも支配階級の間の闘爭の内的機構を述べ、或は更にもつと深く根ずる社會的諸勢力を明かにするものである。この二つの方法は互に補足し合ふものであり、全然排他的なものではない。勿論諸君が、發生したる事件を──如何にして支配の特發的變化が起つたか、如何にしてスターリンが統治機關を占領し、之を排他的に指導する所まで漕ぎ着けたか──を正確に知らうと希望するならば、それには兩方の遣り方で答へる必要がある。

階級諸勢力の集群的再配合並に革命諸段階の進展と云ふ本質的問題に比べれば、單なる集群離合の問題は比較的興味の薄いものである。それにも拘らず凡ての釣合を考慮するとすれば、この問題も矢張り意義があり、論じない譯に行かない事となる。

スターリンの分析

スターリンは何者であるか？ 最も簡明な答はからだ、彼は我が黨の最も秀でた通常人である、と。彼は自分の目的を追求するに當つて實際的感覺と、節度と、そして不拔な忍耐心とを有してゐる。彼の心意は、政治の觀點からすれば、寧ろ狹隘である。理論上の能力に於ては、彼の知識は限局されてゐる。彼がその中に於て黨の諸理論に對して讚仰を捧げやうと企てた小著『レーニン主義の諸原理』は實に學校生徒の誤謬に滿ちてゐる。彼は外國語に無智な爲めに──彼は一ケ國語も知らない──已むを得ず外國の政治生活に就いての知識を凡て聞き傳へに倚頼らざるを得ない。

全く彼は實際的政略家である。創造的想像力もなければ、黨外の經驗もない、彼はより廣い分野に在つては完全に知られてゐないのである。彼は常に第二次的役割を演ずる人物の如く思はれた。彼が今日指導役割を演じつゝある事實は決して彼の人物に對する讃辭になるものではなく、寧ろロシアが現に達してゐる過渡的な不安定の狀態に對する非難になるべきものである。ヘルヴエチーは云つてゐる、『凡ての時代にはその時代の偉人がある。若し生れてゐなければ時代が之を造る。』と。

凡ての實際的政略家と同樣にスターリンもまた矛盾だらけである。彼は一貫した達識なく衝動で行動する。彼の政策はジグザグの道を走る。彼はどの形勢にでも應じて之に當て嵌る理論を即製する。或は他人に即製することを求める。事實並に人間に對する彼の態度は度放れに思慮の缺けてゐる事が特徴だ。私は唯一つの例を引くことにする。讀者はこの例が私自身に關聯した事であるとしても寛恕されることと思ふ。スターリンは最近數年間を全く、所謂『トロツキーの王位を奪ふ』ことに獻して來たのである。

この目的の爲めには全然新しい十月革命史を、又新しい赤軍史を或は新しい黨の歷史を組み立てることが必要であつた。スターリンは一九二四年十一月十九日に、『十月革命に於て、或は黨に於て、トロツキーが演じた特別の役割と云ふものはない』と宣言して、右に述べた價値の一般的再評價に對する合圖を與へた。彼は凡ゆる機會に於て此の確言を繰り返へしてゐる。

或る者がスターリンに、彼自身革命一週年記念當時書いた論文を指摘して注意を促した。この論文に於てスターリンは次の如く述べてゐる、

『十月叛亂の實際的組織に關する凡ての仕事はペテログラード・ソヴイエット議長レオン・トロツキーの直接指揮の下に行はれた。黨は營舍をソヴイエットの側に迅速に引渡す保證や革命委員會の賢明な組織等に就いて、凡てトロツキーに負ふ所があると積極的に誌すことが出來る』

彼は自働人形

スターリンは如何にしてこの困却すべき自己撞着から脫したか？極めて簡單である、更に多くの侮辱をトロツキーに投げ掛けることに依つて。その他數百の例證を擧げることが出來るのである。

スターリンのジノヴイエフ及びカーメネフに對する非難も又同じ樣に矛盾してゐた。スターリンが遠からずしてルイコフ、ブハーリン及びトムスキー等に、反幹部派が之まで云つて來たと同じことを、スターリンが讒誣だと稱して來たと同じことを、然も最も激しい毒舌を以て云ひ始めるであらうことは極めて確實である。

どうして彼はこんな矛盾だらけな事を大膽にも云ふであらうか？事實は彼が演說したり論文を書いたりするのは敵が應酬の機會を全然

奪はれてゐる場合に限られてゐるからである。スターリンの論爭は要するに彼の組織の機構が、少し遲れて反響してゐるに過ぎないのである。スターリンは要するに一個の自働人形である。

レーニンは自ら稱して遺書と爲したものゝ中に於てスターリンの特性の二つを特記してゐる、それは粗暴と不公明である。しかしこの特徴が充分現れて來たのはレーニンが死んでから後やつとであつた。スターリンの主なる仕事は黨の内部的爭に出來得る限りの毒々しさを付へ、斯くて黨を分裂に直面せしむるに在つた。

レーニンは既に一九二一年當時、早くも黨にかう警告してゐる、「彼は何でもかんでも胡椒の中に打ち込む料理人である。」反幹部派が武力鬪爭の準備をしてゐると誣ひたオ・ゲ・ペ・ウの令も、決してスターリンの作つた恐ろしく胡椒の利いた料理の唯一の例ではない。一九二七年七月卽ち、反幹部派がまだ黨の内部に限られてゐて依然官職を維持してゐた時分、スターリンが突然質問を發した事がある、

「ソヴイエットの來るべき帝國主義との鬪爭に於て反幹部派がソヴイエットを支持しない機會の來る事が有り得るだらうか？」

この樣なあてつけに微塵も根據のない事などは云ふ必要もあるまい。だが料理人は當時既にその傑作、第五十八條の調合最中だつたのである。私は反幹部派のソヴイエットに對する態度は國際的重要性を有するものであると考へるが故に、當時私がスターリンの設問に答へた演說中の拔萃を此處に引用することはソヴエイット共和國の利益の爲めに缺くべからざることであると信ずる。曰く、

「吾々は設問の無禮さを無視しやう。或はスターリンの性格に就てのレーニンの言葉を想起しやう。で吾々は此の設問を有るが儘に受取り、之に答へることにする。白衞軍以外の何人も帝國主義に對するソヴイエットの勝利に反對し得るものはない。だが、スターリンの眞に意味する所はかうだ、「反幹部派はスターリンの指導が勝利を確保する大任に堪えないと信ずるか」と。吾々は「然り」と答へる。吾々はスターリンの指導は勝利を一層困難ならしめるであらうと考へてゐるので、反幹部派の黨員は一人殘らず前線でも後衞でも黨が割り當てた通りの部署に就く決心だ。しかし一人だつて黨の政策の改善の爲めに働く權利を拋棄するものではない。かるが故に若し社會主義國家に贊成かと訊かれたら、吾々は「然り」と答へる。若しスターリンの政策に贊成かと問はれたら、「否」と答へるのだ。」今日は狀態も幾分變つた。しかし此等の原則は今尙吾々の持するところである。

テロリストの讒誣

吾々がソヴイエットに對する武力抗爭の準備を行つてゐるとの云ひ掛り、並にソヴイエット統治の防衞に冷淡であるとの云ひ掛りに關しては、私は今一つ、スターリン派テロリストの料理した素敵らしく味の強い御馳走を上げなければならない。コンスタンチノープルに親しい

た場合に私の述べた樣に、トロツキー派の一部の者がテロリスト的方策を企圖中であるとの風評が世界中の新聞紙に現れてゐた。

私はアルマアタからの書簡中に於て、自分の同志達に對して、スターリンが當時取りつゝあつた方針から判斷すると、彼は間もなくトロツキー派はテロリズムを企圖中であると誣ひる事が必要な事を悟りそうだと警告して置いた。反幹部派が武装的叛亂を起すに足るだけの充分經驗を積んだ革命家達の參謀本部に依つて指導されてゐると何人かに信じさせる如きは殆んど不可能と云つて良かつた。しかしトロツキー派の小さな集群に對して、テロリスト的目的を有してゐるものだと誣ひる事は遙かに易しい事柄だつたのである。之れは明かに今日スターリンの努力が取りつゝある方針である。私がこの事實を豫報したからと云つて必ずしも人民に此の糸を垂下させやうと云ふスターリンの仕事を不可能に陷れるものではないであらう。しかし幾分之を妨げることは出來るに違ひない。私が豫報する理由も又それである。

スターリンの戰術は一九二六年私をして政治部の會合の時から彼に語らざるを得ざらしめた、彼は益々墓掘りの仕事の――黨と革命の墓掘りの仕事の卓越した候補者になりつゝある、と。私は今日以上の警戒を更に二重の堅さを以て繰返へす。

しかしながら我々反幹部派は、スターリンが黨に對してではなく、時が最後にはスターリンに打ち勝つであらうと信じてゐる。

第四信

（コンスタンチノープル二月二十八日）

スターリンは一九二一年、レーニンがまだ生きてゐる内に黨の幹事長に選任せられた。當時この地位は殆んど純然たる技術的なものであつた。それにも拘らず、當時に於てさへ、レーニンはスターリンを候補に立てることに反對であつた。しかしレーニンも此の點では、幾分渋りながらも政治部の他の部員に讓つた。

「先づあの男を試して見やう。」

レーニンの病氣に依つて事情は全く變化した。その時まではレーニンはポリツトビユーロー（黨中央委員會政治部）を主宰し、黨の一般指導を行つてゐた。スターリンは幹事長として單に中央委員會の仕事の執行方面のみを委任せられてゐるに過ぎなかつた。所が他の各員は各各特殊の職能を持つてゐたので、レーニンの病氣は忽ち中央の指導をスターリンの手に移して了つた。しかしほんの一時的にと云ふ筈であつた。誰でもレーニンが間も無く恢復するだらうと見込を付けてゐたから恒久的な移動を行ふと云ふ樣な問題は無かつた際である。

レーニンの最後の病臥

その間スターリンは[illegible]みの樣に活躍し、黨の凡ゆる重要な地位に自分の味方を据えた。レーニンが病牀から恢復して仕事を見

だした頃までには、官僚主義は充分勢力を擁つて、スターリンは黨の大衆に對して大勢力を獲得してゐた。レーニンは私が彼の後を襲つて人民委員會議々長たらんことを固執し、スターリンの官僚主義と鬪ふ方法を私と協議した。吾々の目的は左程の葛藤なしに此の目的を達すると云ふ點に在つた。

しかしレーニンは再び病氣に襲はれた。一九二三年一月四日書かれた所謂遺書なるものに於て、レーニンは再びスターリンを黨の指導的地位より除くことを強く勸告してゐるが、その理由とする所はスターリンが率直さに缺けてゐること、及びその權力を濫用する傾向のあることであつた。だがレーニンは再び床に就かなければならない事になり、スターリンが重ねて臨時的指揮を行ふこととなつた。レーニンが恢復するであらうと云ふ望は急速に衰へて行つた。彼が居なくなるかも知れないと云ふ見込は後任の問題を提起した。當時に在つては未だ意見の根本的相違と云ふものは現れてゐなかつた。が、ジノヴイエフ、スターリン及びその一黨の警語は、『トロツキーを支配權から遠ざけろ』と云ふに在つた。

その後ジノヴイエフとカーメネフがスターリンと決裂した時、當時の秘密は陰謀に參加した人々自身に依つて明かにせられたのだ。と云ふのは之こそ眞に一の陰謀であつた。一の秘密の政治部が、（セミオルカと他に七人の部員を以て）創設せられたが、それは私自身を除く外全部の公式政治部員を包含し、その上更に現全國最高經濟會議々長クイビシエフをも加へたものであつた。

唯一目標はトロツキー

凡ての問題は、先づこの秘密政治部に依つて決定せられ、部員ともその決定を支持する協定が出來てゐた。彼等は更にお互同士の間では論爭しないこと、同時に私を攻撃する爲めには凡ゆる口實を捜すことを約束してゐた。黨の地方的各組織も又類似の秘密政治部を持ち、セミオルカと密接な關係を結び、鐵の如き規律に縛られてゐた。彼等は通信用の秘密暗號さへ有してゐた位である。

此は黨内に組織せられた違法の團體であり、然も唯一個人に對して向けられたものであつたのだ。黨並に政府の責任ある地位に任命される人物に當て嵌めて見るテストは、『トロツキーに反對かどうか？』と云ふことであつた。レーニンが病氣の長い空位中この鬪爭は絶え間なく續けられてゐたが、しかしレーニンが恢復した場合は地雷を埋めた橋が相變らずその儘に見える樣に、實に注意深く秘密にやつてゐた。陰謀者等は慾得づくの雇人さへも使用した。各種の地位の候補者は當人に要求されてゐる事柄を『推測する』ことを求められてゐた。若し『推測す』れば、その人は必ず昇進する。その後『反トロツキー主義』の名を貰つたのは此の特殊な依怙贔屓主義なのである。

レーニンの死はこの陰謀に自由を與へ、公然と立ち現れる事を許容した。

この腐化的陰謀に抗議した黨員は、凡ゆる口實の下に、時として想像的口實の下に於てさへ、不信極まる惡性の攻擊を蒙つた。一方ソヴイエット治下の最初の五年間は絶えず放逐の危險に曝されてゐた黨の道德的虛弱者は凡ゆる機會を捕へてトロツキーと意見の疎隔を來し、放逐等の處分に對する一種の保證を贏ち得た。同じ戰術が一九二三年の終以來ずつとコミンタンを組成する各黨の中に於て追求されて來た。

或る指導者等は却けられ、他のものがその後に代つた、凡てトロツキーに對する態度に基いてである。選擇は才能に依つてではなく適應性に依つて決せられた。黨の一般政策は獨立有爲の人物の代りに、上長に從順な凡庸の士を置き換えると云ふに在つた。

スターリンはこの凡庸の權化となり、最高の表現となつた、黨の役員の四分の三がこの方法に依つて選ばれて了つた一九二三年の末頃には、鬪爭は平黨員の間にまで押し進められた。凡ての出口は警護され、唯攻擊の合圖を待つばかりであつた。

彈壓開始さる

やがて合圖は發せられた。最初に二つの討論が私に向けられた。即ち一九二三年の秋と、一九二四年の秋である。然も兩方の場合共私が何の會合にも出られない病勢の際と時を同ふした。同時に中央委員會からの壓迫に依つて到る所平黨員が攻擊の用意をした。古い記錄から私とレーニンの昔の意見の相違點まで引き出されて來た。その相違點と云ふのは革命どころか大戰よりも古いもので、二人の共同鬪爭に依つて既に久しい以前に帳消しにせられたものであつた。それが今となつて變形せられ、敷衍せられて、最も焦眉の興味ある事件として黨に對するメッセイヂ中に綴られ、何も知らぬ人々に提供された。

大衆は吃驚し、狼狽させられ、また脅し着けられた。人員選擇の方法は更に一般低下した。今やトロツキーに對する嫌惡の感情を少しでも仄かさない限り、工場の支配人に任命され、或は商店委員會の書記に、地方コンミューンの議長に、簿記係りに又はタイピストにさへ任命されることは不可能となつた。

私は出來得る限りこの戰に參加することを避けた、特に之は自分の一身に對する規律なき陰謀に過ぎなかつたからである。私に取つては、この種の戰が一度び開始された以上不可避的に極めて激化したものなり。プロレタリア獨裁の狀態の下に於て、危險極る結果を齎すに違ひないと云ふ事は明瞭であつた。

私は、大きな個人的犧牲の價を拂つて黨の統一を維持しやうと試みたことが正しかつたかどうか、將又充分重要な原理が危殆に瀕してゐる譯ではなくとも、飽く迄攻勢を執るべきであつたかと云ふ問題を此處で論議する譯に行かない。唯事實は私はその前者を擇び、その後起つた凡ての事柄にも拘らず、今尙之を後悔してゐない事之れである。或る種の勝利は新しい窮地に導く、或る種の敗北は新しい大道に向つ

て開ける。私は愈々、單なる陰謀を遙か背後に押し遣つた、深い意見の相違が現れて初めて紛爭を原理の討議の限界内に止めて相反する意見並に豫言の價値を體驗に依つて試みることに努力したのである。

他方に於て、ジノヴイエフ、カーメネフ及びスターリン——ジノヴイエフは最初の程は用意深く他の二人の背後に隱れてゐた——は全力を注いで闘爭を押し進めた。彼等は黨に熟慮して經驗に依つて孰れが正しいかを見分ける時を與へやうとしなかつた。ジノヴイエフとカーメネフがスターリンと決袂した時、スターリンは兩人に對して、三人が共に過去三年間トロツキー主義に向つて注いだと同じ兇猛な精力を用ひたのである。

スターリンの凱歌は永續すべきか

以上はスターリンの戰勝の歷史的說明ではない、單に彼が勝利を占めた遣り方の早急な記述に過ぎないのである。私は自分に向けられた陰謀の泣言を列べんとするものではない、自己の政策の敗北を敵中の陰謀の責に歸しなければならない樣な政策は、盲目の政策である。陰謀は或る意味で云へば實務のテクニックである——その役割は必然的に第二次的なものだ。

大きな歷史的問題は大きな諸社會力に依つて解決される。

あの優柔不斷で移り氣なスターリンの勝利は革命社會に於ける諸階級の關係の上に起つた廣汎な變化を實證するものである。それは過去數年間に於ける國際關係の一の反映に過ぎないのであるが、此等の諸問題の全豹となるとより詳細な取扱を要する別箇の主題となるのである。

目下の所私は單にから云つて置かう、世界の新聞界が犯した凡ての錯誤並にソヴイエットの內部闘爭の各種段階解釋に就いての凡ての混亂にも拘らず、又そのボルシエヴイズムに對する敵對にも拘らず、本質的な社會的核心を把握する點に於て、それは大體正しかつた。スターリンの勝利は比較的穩和な、保守的な、官僚的な、そして國權的な諸傾向並に私有財產制の朋黨の、世界革命及びマルキシズムの傳統に對する勝利である。故に私はブルジョア新聞界がスターリンの現實主義を口を極めて稱讚しても何等抗議すべき理由を有しないのである。唯彼の勝利がどれだけ長く續くか、又將來の事態は如何なる方向に向つて進むかと云ふことは全く別な問題である。

(本篇はトロツキーのコンスタンチノープル到着後最初に米國の新聞紙に打電した四回に亙る通信の全譯である。原文はロシア語、以上はニューヨーク、タイムス紙に據る——譯者)

この腐化的陰謀に抗議した黨員は、凡ゆる口實の下に、時として想像的口實の下に於てさへ、不信極まる惡性の攻撃を蒙つた。一方ソヴイエツト治下の最初の五年間は絶えず放逐の危險に曝されてゐた黨の道德的虛弱者は凡ゆる機會を捕へてトロツキーと意見の疎隔を來し、放逐等の處分に對する一種の保證を獲ち得た。同じ戰術が一九二三年の終以來ずつとコミンタンを組成する各黨の中に於て追求されて來た。

或る指導者等は却けられ、他のものがその後に代つた、凡てトロツキーに對する態度に基いてである。選擇は才能に依つてではなく適應性に依つて決せられた。黨の一般政策は獨立有爲の人物の代りに、上長に從順な凡庸の士を置き換えると云ふに在つた。

スターリンはこの凡庸の權化となり、最高の表現となつた、黨の役員の四分の三がこの方法に依つて選ばれて了つた一九二三年の末頃には、鬪爭は平黨員の間にまで押し進められた。凡ての出口は警護され、唯攻撃の合圖を待つばかりであつた。

彈壓開始さる

やがて合圖は發せられた。最初に二つの討論が私に向けられた。即ち一九二三年の秋と、一九二四年の秋である。然も兩方の場合共私が何の會合にも出られない病勢の際と時を同ふした。同時に中央委員會からの隧道に依つて到る所平黨員が攻撃の用意をした。古い記錄から私とレーニンの昔の意見の相違點まで引き出されて來た。その相違點と云ふのは革命どころか大戰よりも古いもので、二人の共同鬪爭に依つて既に久しい以前に帳消しにせられたものであつた。それが今となつて變形せられ、敷衍せられて、最も焦眉の興味ある事件として黨に對するメッセイヂ中に盛られられ、何も知らぬ人々に提供された。

大衆は吃驚し、狼狽させられ、また脅し着けられた。人員選擇の方法は更に一般低下した。今やトロツキーに對する嫌惡の感情を少しでも仄かさない限り、工場の支配人に任命され、或は商店委員會の書記に、地方コンミユーンの議長に、簿記係りに又はタイピストにさへ任命されることは不可能となつた。

私は出來得る限りこの戰に參加することを避けた、特に之は自分の一身に對する規律なき陰謀に過ぎなかつたからである。私に取つては、この種の戰が一度び開始された以上不可避的に極めて激化したものなり。プロレタリア獨裁の狀態の下に於て、危險極まる結果を齎すに違ひないと云ふ事は明瞭であつた。

私は、大きな個人的犧牲の假を拂つて黨の統一を維持しやうと試みたことが正しかつたかどうか、將又充分重要な原理が危殆に瀕してゐる譯ではなくとも、飽く迄攻勢を執るべきであつたかと云ふ問題を此處で論議する譯に行かない。唯事實は私はその前者を擇び、その後起つた凡ての事柄にも拘らず、今尚之を後悔してゐない事之れである。或る種の勝利は新しい窮地に導く、或る種の敗北は新しい大道に向つ

て開ける。私は愈々、單なる陰謀を遙か背後に押し退けた、深い意見の相違が現れて初めて紛爭を原理の討議の限界內に止めて相反する意見並に豫言の價値を體驗に依つて試みることに努力したのである。

他方に於て、ジノヴイエフ、カーメネフ及びスターリン――ジノヴイエフは最初の程は用意深く他の二人の背後に隱れてゐた――は全力を注いで鬪爭を押し進めた。彼等は黨に熟慮して經驗に依つて孰れが正しいかを見分ける時を與へやうとしなかつた。ジノヴイエフとカーメネフがスターリンと決裂した時、スターリンは兩人に對して、三人が共に過去三年間トロツキー主義に向つて注いだと同じ兇猛な精力を用ひたのである。

スターリンの凱歌は永續すべきか

以上はスターリンの戰勝の歷史的說明ではない、單に彼が勝利を占めた遣り方の早急な記述に過ぎないのである。私は自分に向けられた陰謀の泣言を列べんとするものではない、自己の政策の敗北を敵中の陰謀の責に歸しなければならない樣な政策は、盲目の政策である。陰謀は或る意味で云へば實務のテクニックである――その役割は必然的に第二次的なものだ。

大きな歷史的問題は大きな諸社會力に依つて解決される。

あの優柔不斷で移り氣なスターリンの勝利は革命社會に於ける諸階級の關係の上に起つた廣汎な變化を實證するものである。それは過去數年間に於ける國際狀態の一の反映に過ぎないのであるが、然しその諸問題の全豹となるとより詳細な取扱を要する別個の主題となるのである。

目下の所私は單にかう云つて置かう、世界の新聞界が犯した凡ての錯誤並にソヴイエットの內部鬪爭の各種段階解釋に就いての凡ての混亂にも拘らず、又そのボルシエヴイズムに對する敵對にも拘らず、本質的な社會的核心を把握する點に於て、それは大體正しかつた。スターリンの勝利は比較的穩和な、保守的な、官僚的な、そして國粹的な諸傾向並に私有財產制の朋黨の、世界革命及びマルキシズムの傳統に對する勝利である。故に私はブルジョア新聞界がスターリンの現實主義を口を極めて稱讃しても何等抗議すべき理由を有しないのである。

唯彼の勝利がどれだけ長く續くか、又將來の事態は如何なる方向に向つて進むかと云ふことは全く別な問題である。

(本篇はトロツキーのコンスタンチノープル到着後最初に米國の新聞紙に打電した四回に亙る通信の全譯である。原文はロシア語、以上はニューヨーク、タイムス紙に據る――譯者)

この腐化的陰謀に抗議した黨員は、凡ゆる口實の下に、時として想像的口實の下に於てさへ、不信極まる惡性の攻撃を蒙つた。一方ソヴイエット治下の最初の五年間は絶えず放逐の危險に曝されてゐた黨の道德的虛弱者は凡ゆる機會を捕へてトロツキーと意見の疎隔を來し、放逐等の處分に對する一種の保證を贏ち得た。同じ戰術が一九二三年の終以來ずつとコミンタンを組成する各黨の中に於て追求されて來た。

或る指導者等は却けられ、他のものがその後に代つた、凡てトロツキーに對する態度に基いてである。選擇は才能に依つてではなく適應性に依つて決せられた。黨の一般政策は獨立有爲の人物の代りに、上長に從順な凡庸の士を置き換へると云ふに在つた。

スターリンはこの凡庸の權化となり、最高の表現となつた、黨の役員の四分の三がこの方法に依つて選ばれて了つた一九二三年の末頃には、鬪爭は平黨員の間にまで押し進められた。凡ての出口は警護され、唯攻撃の合圖を待つばかりであつた。

彈壓開始さる

やがて合圖は發せられた。最初に二つの討論が私に向けられた。即ち一九二三年の秋と、一九二四年の秋である。然も兩方の場合共私が何の會合にも出られない病勢の際と時を同ふした。同時に中央委員會からの慫慂に依つて到る所平黨員が攻撃の用意をした。古い記錄から私とレーニンの昔の意見の相違點まで引き出されて來た。その相違點と云ふのは革命どころか大戰よりも古いもので、二人の共同鬪爭に依つて既に久しい以前に帳消しにせられたものであつた。それが今となつて變形せられ、敷衍せられて、最も焦眉の興味ある事件として黨に對するメッセイヂ中に盛られられ、何も知らぬ人々に提供された。

大衆は吃驚し、狼狽させられ、また脅し着けられた。人員選擇の方法は更に一般低下した。今やトロツキーに對する嫌惡の感情を少しでも欠かさない限り、工場の支配人に任命され、或は商店委員會の書記に、地方コンミユーンの議長に、簿記係りに又はタイピストにさへ任命されることは不可能となつた。

私は出來得る限りこの戰に參加することを避けた、特に之は自分の一身に對する規律なき陰謀に過ぎなかつたからである。私に取つては、この種の戰が一度び開始された以上不可避的に極めて激化したものなり。プロレタリア獨裁の狀態の下に於て、危險極る結果を齎すに違ひないと云ふ事は明瞭であつた。

私は、大きな個人的犧牲の價を拂つて黨の統一を維持しやうと試みたことが正しかつたかどうか、將又充分重要な原理が危殆に瀕してゐる譯ではなくとも、飽く迄攻勢を執るべきであつたかと云ふ問題を此處で論議する譯に行かない。唯事實は私はその前者を擇び、その後起つた凡ての事柄にも拘らず、今尚之を後悔してゐない事之れである。或る種の勝利は新しい窮地に導く、或る種の敗北は新しい大道に向つ

の相違が現れて初めて紛爭を原理の討議の限界內に止めて相反する意見並に豫言の價値を體驗に依つて試みることに努力したのである。

他方に於て、ジノヴイエフ、カーメネフ及びスターリン——ジノヴイエフは最初の程は用意深く他の二人の背後に隱れてゐた——は全力を注いで鬪爭を押し進めた。彼等は常に熟慮して經驗に依つて孰れが正しいかを見分ける時を與へやらうとしなかつた。ジノヴイエフとカーメネフがスターリンと決袂した時、スターリンは兩人に對して、三人が共に過去三年間トロツキー主義に向つて注いだと同じ兇猛な精力を用ひたのである。

スターリンの凱歌は永續すべきか

以上はスターリンの戰勝の歷史的說明ではない、單に彼が勝利を占めた遣り方の早急な記述に過ぎないのである。私は自分に向けられた陰謀の泣言を列べんとするものではない、自己の政策の敗北を敵中の陰謀の責に歸しなければならない樣な政策は、盲目の政策である。陰謀は或る意味で云へば實務のテクニックである——その役割は必然的に第二次的なものだ。

大きな歷史的問題は大きな諸社會力に依つて解決される。

あの優柔不斷で移り氣なスターリンの勝利は革命社會に於ける諸階級の關係の上に起つた廣汎な變化を實證するものである。それは過去へ

諸問題の全豹となるとより詳細な取扱を要する別個の主題となるのである。

目下の所私は單にかう云つて置かう、世界の新聞界が犯した凡ての錯誤並にソヴイエットの內部鬪爭の各種段階解釋に就いての凡ての混亂にも拘らず、又そのボルシエヴイズムに對する敵對にも拘らず、本質的な社會的核心を把握する點に於て、それは大體正しかつた。スターリンの勝利は比較的穩和な、保守的な、官僚的な、そして國權的な諸傾向並に私有財產制の朋黨の、世界革命及びマルキシズムの傳統に對する勝利である。故に私はブルジョア新聞界がスターリンの現實主義を口を極めて稱讃しても何等抗議すべき理由を有しないのである。

唯彼の勝利がどれだけ長く續くか、又將來の事態は如何なる方向に向つて進むかと云ふことは全く別な問題である。

（本篇はトロツキーのコンスタンチノープル到着後最初に米國の新聞紙に打電した四回に亙る通信の全譯である。原文はロシア語、以上はニューヨーク、タイムス紙に據る——譯者）

この腐化的陰謀に抗議した黨員は、凡ゆる口實の下に、時として想像的口實の下に於てさへ、不信極まる惡性の攻撃を蒙つた。一方ソヴイエツト治下の最初の五年間は絶えず放逐の危險に曝されてゐた黨の道德的虚弱者は凡ゆる機會を捕へてトロツキーと意見の疎隔を來し、放逐等の處分に對する一種の保證を獲ち得た。同じ戰術が一九二三年の終以來ずつとコミンタンを組成する各黨の中に於て追求されて來た。

或る指導者等は却けられ、他のものがその後に代つた、凡てトロツキーに對する態度に基いてである。選擇は才能に依つてではなく適應性に依つて決せられた。黨の一般政策は獨立有爲の人物の代りに、上長に從順な凡庸の士を置き換へると云ふに在つた。

スターリンはこの凡庸の權化となり、最高の表現となつた、黨の役員の四分の三がこの方法に依つて選ばれて了つた一九二三年の末頃には、鬪爭は平黨員の間にまで押し進められた。凡ての出口は警護され、唯攻撃の合圖を待つばかりであつた。

彈壓開始さる

やがて合圖は發せられた。最初に二つの討論が私に向けられた。即ち一九二三年の秋と、一九二四年の秋である。然も兩方の場合共私が何の會合にも出られない病勢の際と時を同ふした。同時に中央委員會からの脅迫に依つて到る所平黨員が攻撃の用意をした。古い記録から私とレーニンの昔の意見の相違點まで引き出されて來た。その相違點と云ふのは革命どころか大戰よりも古いもので、二人の共同鬪爭に依つて既に久しい以前に帳消しにせられたものであつた。それが今となつて變形せられ、敷衍せられて、最も焦眉の興味ある事件として黨に對するメッセイヂ中に盛られ、何も知らぬ人々に提供された。大衆は吃驚し、狼狽させられ、また脅し着けられた。人員選擇の方法は更に一般低下した。今やトロツキーに對する嫌惡の感情を少しでも仄かさない限り、工場の支配人に任命され、或は商店委員會の書記に、地方コンミユーンの議長に、簿記係りに又はタイピストにさへ任命されることは不可能となつた。

私は出來得る限りこの戰に參加することを避けた、特に之は自分の一身に對する規律なき陰謀に過ぎなかつたからである。私に取つては、この種の戰が一度び開始された以上不可避的に極めて激化したものなり。プロレタリア獨裁の狀態の下に於て、危險極る結果を齎すに違ひないと云ふ事は明瞭であつた。

私は、大きな個人的犠牲の價を拂つて黨の統一を維持しやうと試みたことが正しかつたかどうか、將又充分重要な原理が危殆に瀕してゐる譯ではなくとも、飽く迄攻勢を執るべきであつたかと云ふ問題を此處で論議する譯に行かない。唯事實は私はその前者を擇び、その後起つた凡ての事柄にも拘らず、今尚之を後悔してゐない事之れである。或る種の勝利は新しい窮地に導く、或る種の敗北は新しい大道に向つ

[illegible]の相違が現れて初めて紛争を原理の討議の限界内に止めて相反する意見並に豫言の價値を體驗に依つて試みることに努力したのである。

他方に於て、ジノヴイエフ、カーメネフ及びスターリン——ジノヴイエフは最初の程は用意深く他の二人の背後に隱れてゐた——は全力を注いで鬪爭を押し進めた。彼等は黨に熟慮して經驗に依つて孰れが正しいかを見分ける時を與へやうとしなかつた。ジノヴイエフとカーメネフがスターリンと決袂した時、スターリンは兩人に對して、三人が共に過去三年間トロツキー主義に向つて注いだと同じ兇猛な精力を用ひたのである。

スターリンの凱歌は永續すべきか

以上はスターリンの戰勝の歷史的說明ではない、單に彼が勝利を占めた遣り方の早急な記述に過ぎないのである。私は自分に向けられた陰謀の泣言を列べんとするものではない、自己の政策の敗北を敵中の陰謀の實に歸しなければならない樣な政策は、盲目の政策である。陰謀は或る意味で云へば實務のテクニックである——その役割は必然的に第二次的なものだ。

大きな歷史的問題は大きな諸社會力に依つて解決される。

あの優柔不斷で移り氣なスターリンの勝利は革命社會に於ける諸階級の關係の上に起つた廣汎な變化を實證するものである。それは過去[illegible]諸問題の全豹となるとより詳細な取扱を要する別箇の主題となるのである。

目下の所私は單にから云つて置かう、世界の新聞界が犯した凡ての錯誤並にソヴイエットの內部鬪爭の各種段階解釋に就いての凡ての混亂にも拘らず、又そのボルシエヴイズムに對する敵對にも拘らず、本質的な社會的核心を把握する點に於て、それは大體正しかつた。スターリンの勝利は比較的穩和な、保守的な、官僚的な、そして國權的な諸傾向並に私有財產制の朋黨の、世界革命及びマルキシズムの傳統に對する勝利である。故に私はブルジョア新聞界がスターリンの現實主義を口を極めて稱讃しても何等抗議すべき理由を有しないのである。

唯彼の勝利がどれだけ長く續くか、又將來の事態は如何なる方向に向つて進むかと云ふことは全く別な問題である。

（本篇はトロツキーのコンスタンチノーブル到着後最初に米國の新聞紙に打電した四回に亙る通信の全譯である。原文はロシア語、以上はニューヨーク、タイムス紙に據る——譯者）

改造社創立滿十週年記念會

花曇りの四月十日午後五時半より、本社創立滿十周年記念祝賀會は、丸の内東京會館に於て行はれた。政界、思想界、實業界、文壇、操觚界等の諸名士六百餘名に社員を打交へ空前の盛況を呈した。かく、現代日本文化の各方面の代表者達の一堂に會せられたことは、獨り我社のみの擔ふ光榮である。

會は、樂壇の明星永井郁子女史の獨唱によつて始まつた。女史は各國民謠五曲と、三味線の伴奏による「御詠歌」、「朝顏の唄」など得意の名曲を以て、來會者一同を先づ樂しい記念會の雰圍氣に導き入れた。それより宴會に移り、一同歡を盡してデザート・コースに入るや山本社長は嵐の如き拍手を浴びて立ち上り、別項の如く創業十年に亙る感慨深き言葉と經綸の跡を辿り、更に將來への大抱負を率直に豪放に述べ、本社としての歷史的シーンを展開した。言々皆、熱意に溢れ、一大感銘を與へた。

次に[illegible]田[illegible]三氏來賓を代表して別項の祝辭をのべ、引きつゞいて馬場恒吾氏斡旋の下に、卓上演說に移り床次竹二郎氏、長谷川如是閑氏、堺利彥氏、菊池寬氏、最後に德富蘇峰氏が、夫々熱烈なる祝辭を述べて下さつた。そして帝國通信社長光永星郞氏の發聲の下に、萬歲を三唱した。

かくて、盡きぬ感激の中に、九時過ぎ散會した。

挨拶

山本實彥

本夕は御多忙の折にも關らず本社に心を寄せて下さる多方面の方々の御來會を辱ふし感激の至りにたへません。私は改造社全員を代表して厚く御禮を申上げます。改造社の事業につきましては各位既に御承知のことと思ひます。私どもが大正八年三月――四月三日の名において――帝都の一隅に其存在を宣してから本月で滿十年になりますのでその間の感慨を茲に一二陳べて我々の執つた行動が果して社會進展のために、何等かの寄與を遂ぐることができたか、嚴正なる御考慮を煩はしたいと思ひます。ただ私どもは才も眞面目に自分の正しいと思ふとほりを歩いて來た、そして社會本能の認識において誤りなかつたと思ふ。單に我々が主觀に思ふのみでなく客觀的にも我々の行動を肯定

[illegible]ゆる遭難を迎へ戰はねばなりませんでした。思想的に、政治的に、經濟的に、そして出版革命のために――。その各方面の難關を突破すべく私共はあまりに多忙であり、あまりに孤立無援でありました。そして富と權勢に無緣でありました。この光榮ある孤立あればこそ我々の力は一難ごとに加はり、そして正義感は權勢に打のめされるごとに磨かれて行きました。私どもはどんな壓迫、迫害の中においてもヂャーナリズムの正道を忘れませんでした。いぢめられてひがまぬやうに。そして國家、大衆の成長に對しいつも溫か味を以つて接して行くことを忘れませんでした。そして我國の解放運動の第一期に於いて我々は不敏ながらそれ〴〵の役割を遂げることができたことを信ずるものであります。これすべて各位の衷心からの御援助によるものと信じ、ここに滿腔の敬意を表するものであります。

私どもは今後雜誌『改造』においては特に東洋の解放を主要の題目とし、そしてその正當なる解決を見るべく强く主張せんとするものであります。勿論我國の社會、經濟諸方面の正常なる發展のために努力するは勿論です。又我社は雜誌改造及出版物を通して文藝、美術、科學その他に對しましては新たなる躍進を期し、我大衆の徹底的批判力の涵養に倍舊の努力を拂ひたいと思ひます。來賓各位は本社の意を諒とせられ今後に於きましても一層の御援助を賜はりたいと思ひます。實際我社は今日では漸く礎柱が成つたばかりで、其の私どもの事[illegible]んか、どうかこの氣分のいい春の夜をゆつくりお寛ぎ下さらんことをお願するものであります。

祝辭

福田德三

私が御指名になりまして、床次、德富兩先輩を差措いて若輩の私が甚だ僭越でありますが御挨拶を申上げます。

東京會館は、私は是で二回參ります。先度は德富先生の國民新聞社をお退きになりました慰勞の爲の會として、やはり多數の方がお集りでありました。今晩は改造社長山本君の御招待であります。先度の會は私に取りましては悲しみの會でありました。何となれば私共は明治二十二年國民の友第一號、明治二十三年國民新聞第一號以來の愛讀者でありましたが、今はもう愛讀者ではありませぬ。一月の幾日か德富先生が退社の辭をお書きになつたのが載つた新聞以來、十日分ばかりの新聞代を損をしてもう讀みませぬ。それまでは三十何年間、西洋へ行つて居つたこともありましたが、新聞を西洋へ送らせて讀んで居つた。其の國民新聞から德富先生が去られると云ふことは、是はどんな辭を以てしても私には悲しみの會であつたのであります。ところが今

日は其の反對に、改造社が、國民新聞の三十何年に比べては三分の一ではありますが、兎に角十週年と云ふお祝ひの爲に集ると云ふことは、私に取つて甚だ愉快なことでありまして、曾ては悲しみの場としてこの東京會館に來た者が今日は悅びの場たる東京會館に來た譯であります。

ところが丁度席を並べて居られる德富先生と山本君と對照して、甚だ面白い比較を見出し得ると思ふ。德富先生について私が申上げたいことは日本の新聞は大農場式――それが資本的であるかないかは別として大農場式になつてしまつたが、國民新聞だけは自作農であつた。それが五反百姓でなく何百反百姓と云ふ大きな農場を自ら耕されて居つたが、私は自作農と云ふものは餘り大きくなると滅びるものであると云ふことは、世界の經濟史に明であると思ふ。是は前途甚だ危いと豫て思つて居つたが、果して德富先生はその自作農たることを止められた。斯う云ふことを此前も申上げましたが、當時悲しみを以てお送りした所の德富先生は今日は東京日日、大阪每日と云ふ日本で一ばん大きな新聞に於て、非常に厚い禮を以て迎へられ、社賓となられた悅びの德富先生を迎へることが出來るやうになつたのであります。併し德富先生の資格は全然變られた。先の自作農が今日は――工場勞働者ぢやないけれども、併しながら大きく分類すれば工場勞働者の方へどつちかと云へば入る――におなりになつた。即ち復活せられたのである。

ところが山本君は德富先生と違つて、終始自ら筆を執らず、自ら田を耕さぬのであるが、飽までも開墾して盛に移民を入れ、又盛に植民を迎へ、各〻能を盡さしめて今日の大、今日の盛を爲したのである。私から見れば同じ農場の經營としても、德富先生と山本君とは全然違つた行き方をされたのであると思ふ。日本に於ける此二つの事實、即ち一方は日本の新聞界に於ける唯一の自作農を去られたのである。是は吾々から見れば、今日德富先生が國民新聞を捨てられたことは、どこまでも日本の筆政界の不幸と言はざるを得ない。この不幸を見るやうになつた日本の最大の自作農新聞記者が滅びてしまつて、而して又今日の東京會舘に於て、吾々は、初めから小さな田を持つて、それを擴張して、有ゆる方面の有ゆる智識、有ゆる思想を持つて居る者、有ゆる文明の範圍の基礎の者を、悉く呼び迎へて、其の能を盡さしむるところの『改造』を經營し、今日の十週年記念に至つたところの山本君の客となつて、さうして今夕の歡を共にするは、私に取つては實に感慨無量たらざるを得ないのであります。どう云ふ行き方が今後の日本の筆政界を支配するやうになるかは分りませぬ。併ながら德富先生の後を追ふてゐる者が若しあつたとしましたならば、德富先生のこの一つの例に依つて、或はそれ等の方には失望落膽せられたか知れませぬが、山本君の爲された改造社の仕事に依つて、確かに吾々は日本の言論界に於て一つの新しい例が開かれたと思ふ。

改造社に於ては出版事業の上に於ては、尙ほ今後着々計畫されると

云ふことであります。[illegible]つまらないものを載せて戴くところの光榮を持つて、今日まで來たのでありまして、殊に緣故を深く持つてゐることを感じてゐるのであります。德富先生にお目にかゝつたのは割合に稀でありましたけれども、國民の友第一號からの愛讀者であり、山本君に對しては『改造』の始まる時からの友人の積りで私は居るのであります。この日本の筆政界の二つの違つた行き方を吾々の前に示された所の兩氏を中心にして、今夕、或は間接か、或は直接か、兎に角いろ〳〵な方面に於て日本の言論筆政に關係してゐる者が、斯く多數集まると云ふことは、私は確に日本筆政界の一つの記すべきことであると思ふのであります。

此の機會に於て、床次先生も居られることであるし、是非諸君にお願ひをしてお考へを願ひたいのは、出版法、新聞紙法を根本的に改正することに依つて、改造社が過去に於て嘗められたところの苦艱を、今後德富先生の後を追ふ者と山本君の後を追ふ者とを問はず、嘗めしめざらしめるやうにしたいと思ふ。改造社に對する註文もいろ〳〵あるでありませうが、それは段々に行ふことが出來る兎に角出版法、新聞紙法の根本的改正を行つてもつと自由に――大抵な言論が日本に蔓つたところが、決して國家の根本など動くものでない。日本と云ふ國は其點は大丈夫な國であると云ふ確信を私は持つて居る。出版法、新聞紙法を根本的に改正すると云ふことは吾々筆政に關係あるものゝ

[illegible]うな政界の先達となつて居られる方は、吾々の聲に十分耳を藉されて漸々實現して戴きたいと云ふ希望を述べて、甚だ蕪雜な言葉でありますが、馬場君の御指名に隨ひまして改造社に御禮の言葉を述べ、幸ひこゝに盃がありますから、諸君と共に盃を擧げて改造社の萬歲を三唱したいと思ふのであります。(拍手)(萬歲三唱)

感想

床次竹二郎

只今、滿場に徹底せぬから椅子に立つてと云ふ聲がありますが、私の聲は大概聞える積りであります。但し申上げることはお聽き取り下さるやうなことを申上げる考を持ちませぬ。私共は斯う云ふ文筆の社會には全く素人でありますから、意見を申すでなく、唯々お慶びを申上げます。

改造社が只今承ります通り、尠からざる困苦に堪へ、今日の隆運を招來せられたその御努力に對して、深く敬意を表し、又將來の方針に付ても、今承りまして如何にも我が文化に御貢獻下さることを感謝申上げる次第であります。福田博士から私も政治界に居る一人として御注文かございましたが、このことは確に記憶致しまして、何れ獨り福

田博士ばかりでなく、他の方の御議論もありませう。さう云ふ點は衆議を集めて決したが宜からうと考へて居ります。

私は此の場合、山本君に對して二十年來の知己でありますから、それに付ての所感を簡單に申上げて見たいと思ふのであります。山本君と私共とは二十年以上の知合ひであります。その當時は二十幾才でありまして、今日の如く相變らずにこ〳〵した、人好きのする人相であられた。目先も中々よくきくのであります。素より大努力家であつた。屈すべからざる大志を懷いて居られるものと見て居りました。二十年餘りと云へば隨分短からざる時でありますが、併し一方から見れば極めて短い時である。即ち吾々共の如く何等爲す所なく、碌々暮して來た者は、過去を顧みて全く夢の如くで僅の時であります。この時間の間に十年經つて改造社を起し、その改造社が今日の盛運を持ち來すと云ふのに付ては、如何に山本君が大努力家であるか、經營の才を持つて居る人であるか、如何に文筆に依つて我國に貢獻しやうと云ふ大志を持つて居る人であるか、と云ふことは之に依つて十分に證明されるのであります。私は深く山本君の御努力に對してお慶び申上げる次第であります。

併ながら玆に、唯々全然お慶びと云ふよりは、何となくまだ滿腹ではない――失禮ながら、さう云ふお慶びの考を持つて居るのです。即ち君の大志から見れば、今日はまだ蓋し緒口ではないかと思ふのが一つである。內容は如何なることか知りませぬが、先程のお話を承つて見ると、隨分社の經營も、決して是で御安心とはまだ行かないのぢやないかと思ふ。火の車では勿論あるまいと思ふけれども。十分とは申されなからうと思ふのであります。それに只今ここでもお話がありましたが、山本君は今年四十五になられる。是からが本當の仕事の成就する時である。蓋し社の內容を充實し、その基礎を强固にすると云ふのは是からのことであらうと考へるのであります。德富先生は、今日までの君の成功を祝する。併しながら、自分が希望する所は、どうか政治界に足を踏出さぬやうにして吳れぬかと云ふ御注文であります。私は君の如き人が出られて、政界に來て下されば宜いと思ふのでありますけれども、併ながら是は文筆界の長老たる德富先生の言ふことに聞くのが本當であらうかと思ひますが、其點から申しても君の事業は未だ半であるやうに考へます。私は益々是から實力を充實し、さうして基礎を强固にせられて、社會の爲にお盡しあることを。其時は滿腹の慶びを以て祝盃を擧げたいと存ずるのであります。

それに私に此席をお與へ下さつたのは、蓋し同鄕であるからと云ふことでお與へ下さつたかと思ひますが、さうすれば矢張りさう云ふ狹い考からも一應慶びを申上げて宜いではないかと思ふ。少々皆樣にはお氣の毒かも知れませぬけれども、私共之を手短に、一口に申せば吾々は世の中から藩派と見られて居る者であります。然るに此の藩派の勢力なるものは、日に〳〵衰亡に傾きつゝあることは、どなたも御覺下さる所である。(ノー〳〵)ノー〳〵と仰つしやる方は、殊に私共

む願くは思ひますが、實際はさうはいかない。其間に立つて、未だ年齒に富んだ山本君が、今日其の大志の一部分の梯子段に足を踏み上げて、大に頭を擡げんとせられつゝあると云ふことは、私共黨派として は大に氣丈夫に思ふものであります。（拍手）此方だけは大にお慶びを申して止まぬ所であります。

私は簡單にお慶びを申上げて是からの御成功を祈ります。（拍手）

感想

長谷川如是閑

私の聲は大抵聞えない積りであります。

福田君はこゝへ二度來られたと言ふが、私も二度來たのです。一遍は友達に連れられてあちらですき燒を喰つたのであります。こんな立派な御馳走を喰ふのは初めてゞあります。又お喋舌りをするのも生れて初めてであります。何を言つていゝか分らない。皆さんがお祝ひを申上げると云ふのでありますけれども、私は言ふことが下手で、お祝ひの積りで申上げたことがまさか弔ひにはならないが、お祝ひの積りで惡口を言つたり、お世辭の積りで言つたことが聞き苦しかつたりして非常にまづいのでありますから或はお祝ひにならないか知れませんが、何かしら一つ賀を述べます。

私が山本君と知合になりましたのは改造を始められてからでありますが、其前に不思議と屢々山本君に付て耳にして居つたのであります。初めて耳にしたのは今から二十年程前でありますが、其の時分山本君が東京市の一級市會議員になられた時であります。私の友人で山本君を知つて居る人がありまして、山本實彦と云ふ人は、非常な才幹を持つた人物で、最年少を以て東京市會議員に當選した。末恐ろしい人物である。と云ふやうなことを言はれたのでありますが、其後餘程久しく經つて、山本君が改造を拵へられてから會つて見ると、非常に感じが好かつた。何處か恐ろしいとは思ひませぬでした。けれども末の分らぬ人で、恐ろしいのぢやないだらうと云ふやうな氣分がしました。さう云ふ風に恐ろしからうと思つた人が恐ろしくなかつたのであります。

改造を創められた時に、ちよつと之を見て、日本を改造するらしい。が、後ろの方に改造するのぢやないかと云ふ風に感ぜられました。今の山本君の話を聞いて分りましたが、四年後に改造を拵へ直して、本當に改造して初めて非常な賣高になつたと云ふやうなお話を承つたのであります。私が山本君とお知合ひになつたのは、改造を改造された四年後のことであります。其の時分に私は山本君に會つて、今まで聽いた印象のことをちよつとお話したことがありました。その時の話は忘れましたが、其前に山本君のことをいろ〳〵伺つてゐるのに、山本君と云ふ人は、非常に派手にやつて、やり出すと締括りのない人

で、何をやつても續かない。東京市の市會議員も直きに止してしまひ何かの新聞社長になられたさうでありますが、是も一時わあつとやつて直きに止してしまふ。私はさう云ふことを聞いて居り感じて居つたから、私は山本君が改造を創められた時に山本君に會つてそのことを話した所が、いや是は自分の畢生の仕事としてやるのだ、と言はれるので、私も大に感心して大に同情をしたのでありますが、さうしますと、軈て年が經ちますと、政治家として乘出す、衆議院の候補者として立つと云ふことを聞いたので、私は其時に締括りのないと云ふのは是だなアと思つたのであります。是だから矢張りすることがおしまひになるのぢやないかと思つた。一體山本君と云ふ人はいろ〳〵なことに手を出すことの出來ない人で、其代り一度やり出すと夢中でやる人だと云ふことを聞いて、成る程それでは改造社をよして、衆議院議員に打つて出て、そつちへ行く人だらうと思つた。さうなつちやア是はまア大變だ。大變だと云ふ意味は、さうなつたら改造社の人々が不安であらうし、文筆勞働者も不安であると云ふ風な考が致しまして、又事實非常に不安を感じたのであります。それで私は山本君が失敗すれば宜いと思つてゐた所が、果して失敗して歸つて來たから大變いゝことであつたと云ふ譯です。是が出られたら大變です。山本君が當選して大臣にでもなられて、改造社なんぞは全部國費でやつてしまふと云ふことになるなら、改造社も非常に悦ばしい。けれども國家の爲に困りますから、出ない方がよかつた。

さう云ふ風にして尻括りのないことをやられるが、其時に山本君はもう是でおしまひである。改造社の事業の爲に全身を注ぐ。全力を注ぐと言はれるのです。全力を注ぐと云ふ言葉は二度聽くのだけれども、今度は本當だらうと思つて居りました。が、矢張り本當で、其後の活躍と云ふものは、實に恐ろしい。恐らく衆議院に行つてもあれ程のことは出來なかつたらうと思ふ。此年月の間に是だけのことは出來なかつたらうと思ふ。

いろ〳〵のことをやられた中で、吾々を驚かせ、出版界を驚ろかしたのは、圓本と云ふものであります。今だから誰も彼も圓本と云ひますが、山本君が創められた時其の計畫を聞いた時、私はさう云ふ倖いことをやるのはいゝが失敗するだらうと言つたのでありますが、それが非常な成功をせられまして、圓本に依つて讀書界が多大の利益を得たのみならず、文筆勞働者に取つては非常な利益を得たのであります。是は併し利害得失で、文士などが得られなかつた不勞所得で、それが非常に得られるやうになつて、文藝の士に階級的資格と云ふものを失はれ、文筆勞働者の勞働意識を失つて、階級的に向ふの方に飛出さうと云ふ傾向を生じたのです。社會の文藝の爲に、文筆の士の爲にいゝことであるかどうか分らない、と云ふ風に私は感じたのであります。併し考へて見ると文筆の士が、數十年苦心をして書いたものを蒐めて、それが爲に一萬二萬位の金を得て、それで階級性を失ふと云ふやうなことは意氣地のないことである。ちよつと電話をかければ何十

[redacted]に依つて得た一萬二萬の金を、私は不勞所得とは考へられない。さう云ふ一萬や二萬の金を得たからとて、決して階級觀念を失はないのであります。依然としてプロレタリヤで働かうと、私だけはさう云ふ觀念を持つて居るのであります。安心して二萬でも三萬でも私に下さつても、私の階級的觀念は失はれないと云ふことを御信用下さらんことを……是は自分のことになりました。私に喋舌らせると斯う云ふ風になります。此邊で實を繋ぎます(拍手)。

感想

堺利彦

私は新米の市會議員であります。山本君は今から二十年も前に市會議員になられた。私は六十歳の今日初めて市會議員になつた晩學者であります。今日も私は市會議事堂から、直ぐにこゝへ來たやうな次第であります。所が市會に於きましては八十四名の市會議員の中に於て私共は僅に六名居る。非常に心細い。まるで敵の圍みの中から抜けて來てゐるやうな氣持がして居ります。その敵のかこみの中から抜けて來たここは何處かと云ふと、私に取つては實に故郷の感がある。(拍手)

[redacted]々の爲に言論の舞臺となつて戴きたい。山本君が床次君と同じく臨派なることは致方ありませぬ。併しそれと同時に、山本君が少々位は、吾々と同じく危險人物になつて戴きたい。是だけ……(拍手)

感想

菊池寛

僕等が丁度文壇へ出てから改造社と同じ位の年になります。ですから創刊當時の改造社は私はよく知つてゐる。創刊する少し前に、僕達を招んで御馳走をされた。其時に招待された方は幾人もないだらうと思ふ。皆さん方は十年記念會と云ふので、威張つてゐられるか知れないが、其時に招待された人は少ないだらうと思ふ。僕も其時の招待に行つてゐればもつと威張るのですが、實は行つてゐない、當時はよく雜誌が出ては潰れました。それで私も少し馬鹿にしてかゝつたのですが、それが十年後の今日、こんなに盛大になつて、日本の思想界、文藝界の連中を斯様に集めてゐると云ふことは、改造社の偉大な成功であると私は感心してゐる。

改造社の成功したのは山本さんの非常な熱のある所が[illegible]んだと思ひますが、もう一つ非常にきいたことは、山本さんの頼み上手と云

ふことである。山本さんに頼まれるとついウカ〳〵と何か書いてしまふ。あそこが雜誌記者として非常に成功した第一原因ぢやないかと思ふ。それから十年の間にこんなに盛大になつた改造社に就て、何等の惡評を聞いてゐない。是は實に感心してゐる。改造社は中々完成しない。組織が不完全だと云ふことでありますが、もつと不完全の儘でやつて行きたいと思ふ。内部が火の車かどうか知らないが、山本氏が大童になつてやつてゐる間は、文藝の連中、思想家の連中は決して改造社を見捨てないだらうと思ふ。さう云ふ意味に於て山本さんが出版業者として大成しないで、今の儘のやうな有樣で、大に奮闘して戴きたいことを希望する。

もう改造社の功績に至つては後世の史家がきつとはつきり判定を下すと思ひます。改造が思想的に一つや二つの帝國大學よりも、もつと大きなことをしてゐやしないかと思ふ。文藝の作家の生活を保證し、いろ〳〵な作品を出す舞臺となつた點に於ても、私は十分に感謝されていゝと思ふ。（拍手）

感想

徳富蘇峰

私は聲が小さくて聞えないか知れませぬが、どうぞもうお聽きにならない方は、存分御遠慮なくお歸りを願ひます。

今夕は私に於きましても洵に愉快に感じます。私は改造の寄書家としては寧ろ新しい方に屬しますけれども、山本君の友人としては、必ずしも新しいと云ふ譯ではありませぬ。床次先生程であるかどうか知りませぬが、略ぼ同時であると存じて居ります。今夕圖らずも山本君の隣りに坐ることを得ることの光榮を得、更に福田先生の一軒置いて隣りに坐ることの光榮を得たが爲に、まるで私は、山本君を引立てる爲の役を勤めに出たやうであります。福田先生は成功者の標準として山本君を擧げ、失敗者の標準として私を擧げて、そこに一つの老衰なる失敗者と、ここに一つの盛壯なる成功者とを並べてお話になつたやうなことで、是は私に取つて洵に本望の至りである。若し私が山本君を引立てることが出來れば、是れ程私の本懷はないのであります。

只今皆さん方がいろ〳〵お話になつて、一々私は御同感に思ひますが、唯少しく御同感に思はないのは、堺先生のお話である。私は實は山本君の危險人物の分量が寧ろ私共の眼から見れば多過ぎると思ふ。及ばずながら私や何かゞ改造に投書すると云ふことは、發行禁止を止めるところの、まじなひになる積りであります。私は何にも山本君に御奉公はないから、私の黴の生えた文章を以て、黴の生えた思想を以て、現代離れのした所の考を以て、さうしてあの中に入れて、熱いところのお湯をなま温るくしやうと云ふのが、私の考であります。若しそれに依つて聊か私が改造社に貢獻することが出來れば、是も亦私の

本望であります（拍手）。斯う云ふ話は思ふことを申さなければならぬ。拂先生は拂先生の思ふことを言はれるので、私は私の考を申上げるのである。所謂各ゝ其の志を言ふと云ふのがそれである。

私はいろ〱山本君に感じてゐることが澤山ある。併ながら山本君の成功は何かと言へば、玆に私は詰らぬながら歴史家の末班に屬して居りますから、歴史から例を採つて申上げます。朝鮮の役の時に、取者が薩摩の陣に用を持つて行き、さうして其の大將の島津義弘入道にお目にかゝると云ふことである。ところが鹿兒島の陣に行つて見れば陣屋の中に火を焚いて、皆そこに足を投出して、火にあたつてゐる。どれが島津義弘であるか、どれが大將であるか、皆そこにあつて話をしてゐるから、誰に向つて挨拶のしやうがなかつた。其中に少し人相の違つた者がゐるから、これが大將であらうと云ふことで、漸くその人に挨拶をしたらば、それが島津義弘であつたと云ふことであります。改造社の今日を成したのは、矢張り山本君が島津義弘をやつてゐる。即ち改造社には主人もなければ家來もない。皆互ひに一致してやるから今日を成したのであらうと思ふのであります。即ち此の精神を以てやられるから改造社の業が盛になつたと云ふことであるならば、今後改造社がいよ〱盛になるに從つて、どうか此の創業の精神の衰へないやうにして戴くと云ふことが、吾々一般の祈る所であらねばならぬと思ひます。（拍手）

私は此上贅辯を弄する必要はありませぬが、ここに所謂鹿兒島出身の大先輩、床次先生がおゐでになるからして、一つお願ひがあります。今年山本君が四十五歳と云ふことであるならば、今後十年間が、山本君の最も脂の乘つた時節である。然るに山本君の如き人は政界にも誠に少ない人であるからして、私は先程床次先生のお話を承つてゐたが、どうもまだはつきりしかねてゐる。德富が言ふから先づそれにして置かうと云ふだけの話であつて、御自身がさうすると云ふことをお話にならない。私は是非お願ひをして置く。どうぞ山本君を誘拐して政界に引張らないやうにして戴きたい。假令五ヶ月や七ヶ月大臣になつたつても、改造社の仕事をやる方が、餘程是は國家の爲めになる（拍手）。山本君が總理大臣になればいざ知らず、それでない以上は、長くとは申しませぬ。せめて山本君が、五十五歳になるまでは、絕對に誘拐せないで戴きたい。之をお誓ひを願ひたい。又山本君も絕對にいかないと云ふことを此場で御明言を願ひたい。

もう申上げることは是で盡きましたから是で終ります（拍手）。」

萬歳の提唱

光永星郎

改造社の萬歳は先程既に福田先生の御發聲で三唱致しましたが、お目出度いことは何遍繰返しても差支ないと思ひますから、御指名に對

しまして、玆に皆樣と共に盃を擧げて萬歲を三唱したいと思ひますが、私の聲は非常に小さうございますから、諸君の大きな聲で、東京會館の破るゝやうにお願ひしたい。

改造社萬歲　三唱

お答へ

山本實彥

私は最後に德富先生にお答へしなくちやなりませぬ。私は明日から先のことをお誓ひすることは、斷じて出來ませぬ。此ことだけは御好意でありますけれども、どうぞ明日の氣持次第にして戴きたいと思ふのであります。（拍手）

來賓氏名（イロハ順）

石川欣一　石川巖　石川千代松　石川六郎
石川三四郎　石川武美　石井文作　石井研堂
石塚吉祐　石塚陸美　石濱知行　井上圓三
井上憲一　井上敬吉　井土靈山　井戶川辰三
岩田豐雄　岩崎純孝　伊藤好造　市來政直
稻葉熊野　稻葉輪一　稻村順三　板垣鷹穗

池谷信三郎　泉鏡太郎　猪俣津南雄　同夫人
生駒粂藏　犬養健　濱井憲一　濱井松之助
原田繁一　原きん　長谷川萬次郎　長谷部濟
長谷部繁平　林房雄　林平次郎　秦豐吉
早坂二郎　早坂善太郎　橋本五雄　橋戶信
葉山嘉樹　春口善吾　萩原羅月　蓮田聖三郎
馬場恒吾　濱本浩　新井格　星島二郎
細田民樹　堀眞琴　堀口大學　堀野芳一
本間久雄　富永良太郎　土岐善麿　土岐章
德富蘇峰　東鄉實　鳥海篤助　豐島與志雄
德田秋聲　德廣巖城　戶川明三　床次竹次郎
友岡久雄　都河龍　中條精一郎　中條百江
近松秋江　千葉龜雄　遲塚麗水　龍膽寺雄
大塚稔　太田哲三　大島治淸　大橋光吉
大森義太郎　大野茂藏　大城政次　大野孫平
大熊長次郎　大濱亮作　大久保利武　大町文衛
大谷譽部　大關柊郎　岡田禎子　岡田復三郎
岡田宗司　岡田三郎　岡本精兒　大江勳
岡本一平　小川未明　小川多一郎　小野武夫
小田內通敏　小山內夫人　小山內徹　尾崎士郎
岡田實　折田[illegible]　折口信夫　大戶喜一郎

緒方竹虎　渡邊仁　渡邊秀雄　和田萬吉
脇水鐵五郎　加藤勘十　加藤三郎　加藤政治郎
加藤正治　加納寅次郎　川原壯之進　同　夫人
川田久長　川島友三　川合晋　川端康成
川上道晴　上村清敏　河野密　河野通勢
河井醉茗　河西太一郎　河東秉五郎　桂近乎
河內時中　樺山可也　金子曾太郎　片山哲
片岡鐵兵　上司小劍　冠松次郎　梶原仲治
柏田哲男　鹿子木日出男　吉田英雄　吉田弘二
横山安夫　吉田龜治　吉田秀人　吉岡牛五
吉田鐵太郎　吉川正一郎　吉井哲三　吉野正雄
吉谷專吉　吉江喬松　吉植庄亮　横井春野
横光利一　吉田孤羊　横田地巴　横關愛造
米川正夫　與謝野寛　與謝野晶子　高石眞五郎
高柳賢三　高橋龜吉　高橋方雄　高橋茂藏
高橋源次郎　高橋邦太郎　高木俊正　高木島三
高田義一郎　高信喜代松　田中九一　高平始
田中阿歌麿　田中貢太郎　田中純　田中早苗
田中廣太郎　田中松太郎　田口文太　田所輝明
谷口武　竹內喜太郎　田邊元三郎　竹內萬平
竹下延保　谷敬行　谷崎精二　谷川徹三

橋篤郎　武井武雄　立石泰輔　伊達豐四郎
莊原達　添田啞蟬坊　宗道太　土田朝二
土田蟻九郎　土屋泰次郎　土屋文明　塚原ゑへ
塚越都四郎　根本鐸之助　中島眞　中島彌團次
中村正常　中村吉藏　中村淸之助　中野登美雄
中川正左　中河與一　中澤辨次郎　永井潛
永井郁子　永井庄吉　長田秀雄　長田景貞
長岡義夫　長與善郎　長野朗　並木仙太郎
那須皓　來馬琢道　村松梢風　村田秀治
村松正俊　村上定一　村山知義　室生犀星
村上敦　室伏高信　武者小路實篤　上原才一郎
宇都宮數馬　宇都宮謙　宇野千代　內山賢次
植原悅二郎　植村四郎　植田庄助　浦松佐美太郎
浦本政三郎　歌代勝三郎　生方敏郎　野尻淸彥
野口米次郎　野間淸治　野中虎雄　野田七郎
昇曙夢　延原謙　廚川蝶子　藏園三四郎
黑瀨忠夫　邦枝完二　栗田確也　栗原澂之
栗下芳光　國領友太郎　黑島傳治　黑屋金吉
栗田三藏　黑崎貞吉　久保田萬太郎　久慈學
久留義郷　久木崎時義　桑木嚴翼　草間八十雄
山本有三　山本定助　山本留次　山本善吉

山本久三郎　山田清三郎　山下[illegible]　山岡眞之助　柳田泉　山本三生　松本木太郎　松永米次郎　町田曲江　米田實　牧野武夫　福田良太郎　福永兵太郎　藤井誠次郎　古莊國雄　小林周郎　小林新　小村欣一　小穴隆一　近藤憲二　郡山幸男

山口毅　山川亮　山之内一次　矢島寛太郎　柳澤健　八並武治　松本泰　松居松翁　町田經宇　前田河廣一郎　牧口常三郎　深田久彌　福永良晃　藤森成吉　深尾須磨子　小林芳次郎　小島政二郎　小村俊三郎　小原勇　兒島善和　甲賀三郎

山崎信興　山下[illegible]一　八木[illegible]　矢上仁一　柳瀬正夢　保高徳藏　松下芳男　松宮三郎　增田義一　牧野初太郎　丸山泰治　福田金次郎　福山福太郎　濱田忠良　富士辰馬　小林良正　小杉天外　小泉鐵　小木曾[illegible]　兒玉新三　江口渙

山崎卓雄　山本實彦　山内義雄　矢野正世　八木澤善次　松本淺次郎　松下國武　松根東洋城　前田[illegible]一　牧野富太郎　槇有恒　福田徳三　藤井悌　二神哲五郎　小林友次　小林榮子　小村雪岱　小牧健夫　小山政也　今東光　江草重忠

遠藤金英　寺内寅三郎　阿部賢一　青木得三　安藤虎雄　荒川實藏　明石鐵也　秋場隆一　佐藤恒民　佐々木ふさ　佐久間衡治　齋藤昌三　笹川種郎　笹原一郎　木村信兒　北澤新次郎　菊池寛　宮城久輝　三浦定之助　宮島新三郎　島田青峯

寺田[illegible]　[illegible]　青木實[illegible]　青野季吉　安藤克郎　荒畑寒村　相賀武夫　佐藤春夫　佐藤貞二　佐々木邦　坂本眞三　齋藤尊雄　佐藤實義　木下濟文　木村武雄　北村美那子　岸田國士　三木七郎　三浦修治　水島治男　島田昇平

寺田市正　有島健助　青木弘　安藤富之助　秋田忠義　淺見文吉　雨森彙次郎　佐藤績　佐々木信綱　佐々弘雄　坂口武之助　齋藤哲郎　堺利彦　木下源一郎　北原鐵雄　北村小松　百合野怒濤　三宅やす子　三輪壽莊　宮尾義雄　島中雄作

寺木定芳　有島生馬　青木正晃　芥川武雄　秋山[illegible]　赤阪長助　天野四郎　佐藤進　佐々木茂索　佐多芳久　齋藤茂吉　西條八十　里見弴　木下莊　北原白秋　瀧澤嚴　三木露風　箕輪錬一　光永星郎　濱呂木克　清水公平

志毛井確太郎　下島空谷　榮野源治　芝孝濤
新見武雄　椎名昇　篠田義市　白島省吾
清水彌太郎　柴田勝衛　白柳秀湖　茂森唯士
鹽谷晴如　新村出　澁澤壽三郎　平野英一郎
平田貫一郎　平野亮平　平井新　廣田義夫
平林初之輔　平林たい　平澤直吉　東健兒
土方與志　樋口悅　樋口繁次　廣島晃甫
比嘉春潮　廣島定吉　菱刈實雄　日夏耿之助
森養次郎　森岩雄　森數樹　森島金次郎
森園豐吉　森村謙三　兩角侃　兩角信
桃井繁藏　餅原重男　瀨戶口操　關口鯉吉
關屋益郎　關田藤作　關口次郎　鈴木堅次郎
菅沼純一郎　鈴木德太郎　鈴木一意　鈴木多三郎
鈴木重威　鈴木厚　鈴木茂三郎　鈴木千文
杉山義雄　杉山愛二　杉浦非水　杉村楚人冠
杉下廣一　杉井初太郎　菅忠雄　吹田順助
須藤眞金

其他の諸氏

懸賞詩當選發表

去る一月末締切つた本社の懸賞詩の應募は實に二千五百篇の多きに達した。爾來愼重審査を進め、四月號に發表のところを今月號に持ち越し、嚴選して三百五十篇を得た。夫れ夫れ皆懸隔なき粒揃ひの佳篇なるため、非常に苦心した結果、左記の通り一等二等の當選二篇と、佳作十四篇を得た。規定により一等には賞金壹百圓、二等には五拾圓を呈する。佳作十四篇は全部、本誌今月號及び六月號に分割登載し、夫々本社の圖書切符を呈することゝいたしました。

一等當選　レエニンの月夜　近藤東

二等當選　ペリカン　井上廣雄

佳作

納涼博覽會　龜山まさる
街の詩　津嘉山一穗
超現實主義の作品　上田敏雄
間借者の詩　上田黎
ある北方的な風景　工藤正一
寂 四　府川恣造
(以上五月號發表)

寄す　柏文彌
獻詩　候御葛稔
だんだら詩集　萩原野呂
山雀の言葉　林蓉一郎
へんなのりて　古迫勇
健康地帶　仲村渠
創造詩　柿山陶造
秋草圖詩集抄　長江道太郎
(以上六月號發表)

レエニンの月夜（一等當選）

近藤東

橋からの下り勾配。黄包車(ワンポオツア)に西瓜の種だ。西瓜の種はコムニストではない。

黄浦江の霧は拳銃を亂射した。ソヴィエット領事館の窓は無數に散つて光つた。空色の軍艦は水兵を吐瀉した。陸戰隊。透明な哨兵は一着の雨合羽(エロウ・スリッカア)である。

ぼくは月夜を感じた。月夜を。レエニンの月夜を。寢台(ベッド)の中で。女は白系ロシアの食用薔薇。女は機關車のやうにおしかかつて來た。ぼくは轢死する。

逃亡

をんなの髮に昨夜(ゆうべ)の新月が引懸かつてとれない。
をんなの腋毛は飴色の腋毛だ。

窓の港には白いパイロツト・ボオトが搖れてゐる。
をんなと僕は急に悲しくなつた。

日本の軍艦が遡航して入港した。午後三時。
——とうとう驅逐艦で追つかけて來たわョ。

ペリカン（二等當選）

井上廣雄

ペリカン

脂肪過多症のお女中さん
今朝はエプロンが新しい

春

春は　お孃さん方と御交際は致し兼ねる
彼女らは日に幾回となく　森や室內で
あられもない姿をしては溺死する

訪問

室內には振子が揺れてゐる

外では木の葉が搖れてゐる
私の訪ねた彼の人は何處か散歩にでたさうな

冬

齒車が喰違つてがたんと地球が降下した
ぴんと空氣が引き緊つて夜にそまつた

煙を吐かぬ煙突

起重機が空へ月をつり上げてゐる
時刻が屋根や街路にこぼれてくる

歪んだ街の風景だ
一九二九年のおれの舞臺だ

突然夜のやつ奴がみぶるひした。

納涼博覽會

龜山まさる

納涼博覽會の化物屋敷。
枯れた笹の中で頭の重すぎる幽靈が、
狩犬のやうにガサガサ
何を探してゐるのだらう？

死骸にでも躓きさうな闇所で
物凄く青白い光がさしたと思つたら、
呪はれてあれ――僕の鼻は
ついマグネシウムの臭ひを嗅ぎつけて了つた。

お岩の額には何故何時までも
野球の球が留まつてゐるのか？

男達はみんな勇氣があるので
一つ一つ化物の顏を覗き込んでゐた。
どれが貴方の縁者ですか？

婦人連は心臓みたいにビクビクし、
小供らは平常の二倍喧ましい。

木製の生ま首が、僕の麥稈帽と衝突した！
痛いことが可怕いことゝ同じいのである。

夜眼にも著るく塵埃が舞ひ立つて
何故此の墓場の木といふ木が乾からび、
提燈が骨をむき出し、
化物が一々の通行人に
パアをするのだらう？

可怕いことは凉しい。
此の理論に誤りはない！
が、此處の化物は砲彈のやうに
飛來するので、
僕はよけるのに汗をかく。

ドロドロと又もやうす氣味惡い太鼓が鳴る。
僕は此の上、化物達の
暴れ廻るのに恐れをなして、
戸外へと逃げてゆきます。

●選　[illegible]

街の詩

津嘉山一穂

街は生きてゐる
街は街ぐるみ空に上つてゆくようだ
とても美しい淡彩な陽炎
街の中には機關庫があつて
誰れか石炭を燃やすのであろうか
ながめてゐるとうつとりするやはらかな夢
霧に浮いてゐる萬國飾の軍艦
街は生きてゐる
けれども汚ない姿をした火夫が
エンジンに油を注いでゐるからであろうか
灯がつく　色彩の灯だ華が華がさいた
何といふ奥深い表面だ
何といふ夢ごこちの觸手だ
何といふみやびな娘であろうか
けれども心臓には煤煙色の舵手が
いつしんに機關を廻はしてゐるのだ
街は生きてゐる

そして街は街ぐるみ　だんだん
星空に浮いてくるようだ

●ビルヂング

青空をたち破(わ)れる
四角形の華麗な通路よ
汝の谷底を見下すがいい
何といふ滑かな石疊であるか
汝の窓を展くがいい、
空氣は黄色い花粉だ
その多彩な瞳を蹴れ
蒼ざめた京人形の群がみえないか
青空をおし潰(つぶ)せる
汝　豪放なるものよ
花車は不具(かたわ)を蹂むものよ
汝の騰せる機關を感じないか

超現實主義の作品

JE SUIS ENFINI

上田敏雄

私は私の愛人を無限に愛してゐます　私の瞳は無限に美しくあります
無限の愛人者である私は無限の戀愛家であります
あの女は私の唯一の無限の愛人であります
美しい野原の上の無限の劇場(テアトル)の中の私は無限に美しくあります
其處に廻轉する窓はイロニイのやうに美しい旗を腕の上に持つた魔術家を誘ひます？
私は無限に美しい魔術家をもう見ます
貴方であります　無限に美しい手と瞳で無限の誘惑を愛人等に與へるのは
活潑な遊戯者は美しい帽子を腕に吊つてゐるのでございます

彼に讃美される世界は惡魔のやうに美しいのでございます
私は前に述べたやうに無限に美しい夢の遊戯をも讃美いたしますがこのやうな無限に美しい惡魔の遊戯も讃美いたしたいのでございます
世界は退屈ではございませんか尤も世界は陶醉なのでございます
貴方が詩人でいらつしやいますか　私は慇懃で光榮の貴方に御挨拶を申しあげます

湖水の上に月がある　私はあの女を思つてゐる
私は裝飾された Roi であつてあの女は裝飾された Reine であります
兩人は世界の征服者で勝利と魔術の呼吸をいたしてをります
唯今私は無限に美しい人魚のやうな蜃氣樓でございます
御存じでありませうが無限に美しい人魚は無限に裝飾された人魚で最新流行に屬します
無限に美しいヨット　かの女はそれに乗ります
無限に美しい飛行船　私はそれに乗ります
單に無限の世界の出來事であります

間借者の詩

上田　黎

その室

長屋の端を老母は借り
その二階を俺は間借する
古木を燻(いぶ)す夕餉の焼が
梯子を暗くのぼつてくる
貧しいものの上に貧しく蹲り
ありやなしやの炭火をかきわけ
凍(こご)えた十本の指をかざす。

その窓から見える風景

古鑵を集めたたいてゐる
紙屑を集めのしてゐる
襤褸と髪の毛をわけてゐる
いぎたなく罵りながら賣買する。

運河に黒く澱んだ水は
これらの現象を倒に寫し
一日かれらの喚きを舐めてゐる
一日かれらの姿を眞似てゐる。

その窓から見える天景

冬空をばたばたたたいてゐる
みすぼらしく天に汚れてゐる
上層建築の細い頂にかかる旗
風に騒ぎ高く俺を呼んでゐる
たよりない人の世の上に呼んでゐる。

その室に歸る

家畜の嗅ひこもるもの
腐蝕の妖しい嗅ひを流すもの

俺は汗ばむ靴下をぬぐ
俺を待つてた柱の釘に帽子をかける
俺は汗ばむ襯衣をぬぐ

荷揚げする重きにたえたこの足よ
鐵材を一日抱いたこの肋骨よ。

その隣室

夜更に輕い咳のあと
瀬戸壺をざらざら軋る音

となりのひとよ　寢れずあなたは

血糸が悲しくまわつてゐる
瑪瑙のたんを吐くのですか。

その窓下の店

燈火も淡い店先に
玩具をならべ駄菓子をならべ
老母はひとり縫物する
（眼鏡に寫る夕燒雲と天の色）
小供が店先によりかかり
飴を舐りまた指につまみ
夕暮空に透してゐる。おしんでゐる。

貪欲者の歌

若山喜志子

いたづらに嘆くやめむとあきらめの早かりしことの今悔いらるる

われにはわれの行くみちありきと身ぶるひをおぼえて强く立ち上りたり

かくて行く路は新し何ものもさへぎるなかれあと追ふなかれ

夫故に子故に深くひそみをりしわが本性のきざしそめたる

恐るるなかれ立てよゆけよと血みどろの死物狂ひのわれの生きざま

生きてゆくを重荷と思ふ時は去りぬ男の人の苦しみも知りぬ

ありし日の夫が負ひたる茨かもこの眞裸の身にせまれるは

くるしきは甚くたのしきは甘し噛みて味はふそのことごとに

くるしみもたのしみもこの不敵なる貪欲者の餌食とはなる

醉ふな醉ふなひとりのみちの險しきにめざすゆくてのきはみもなきに

寂しさのきはまりしらぬただ中にいつしかひとりよろけ入りたる

寂しさぞわが身の糧に燃えてをる恐ろし恐ろしこのさびしさの

新刊批評

勝本正晃氏著『文藝と法律』を讀む

尾佐竹　猛

『文藝と法律』といふブッキラ棒な標題に似合はず、内容の趣味津々として巻を措くに忍びざるは、恰も著者が東北帝大教授法學博士として七六かしい法律の講壇に起ちながら、一度口を開けば古今東西の文藝を縦横に驅使して、無味乾燥なるべき法律の講義が百花燎爛の觀を呈し學生をして時の移るのを忘れしむると、同じ趣きである。

世には法律家は無數にある、また文藝家はあり餘る程存在する。しかも法律の研究も文藝家の目ざす處も結局人間そのものゝ研究に外ならない(本書序文)であるにも拘はらず、法律家と文藝家とは全然懸け離れた別世界に生活して居る。偶法律家から文藝家の領分に手を出さんとするものもあるが、文藝家からは法律家の領分へ手出ししようとも考へなかつたのである。しかもこんな變態は永續すべきものでは無い。先づその手始めとして文藝家は探偵小說といふ幾分法律家の領分に近い處へ一新領土を開拓したが、これに反し法律家の文藝界への進出は更に無い、偶々これありとするも、殆んど成つて居ないといふのは、法律家たる立場を忘れて全然文藝家たるかの如き錯覺に陥るか又は法律家たることが鼻につくのが多いからである。然るにこの書の著者は法律家たる立場を忘れずに、また文藝家としての立場にも立つて双方から事を進めたことに於て出色があるのである。

「文藝に現はれたる法律諸相」に對し「法律に現れたる文藝諸相」があり。「文藝家の法律的素養」に「法律家の文藝素養」に進み、最後に「文藝家と法律家との境」と「文藝と法律との闘爭及び協和」に終つて居る。その取扱はれたる題材としては、「ヴェニスの商人」、「ハムレット」、「復活」、「罪と罰」などはいふを待たず、探險秘事から默阿彌物や、さては「眞珠夫人」や「ドモ又の死」に迄及び、ノラやオスカーワイルド、ドンキホーテー、「晝夜用心記」、縱横無盡に鋭きメスを振ふあたり、天馬空を馳するの概がある。その他「法律家としてのゲーテ」「沙翁の本體に關する種々の疑問」などは獨立の大論文としても可なるものである。最後の章の「文藝と法律との闘爭」「藝術價値と、法律價値」は文藝家も法律家も再讀三讀すべき好文字である。

藝術は愉快の念を起さしむるが故に最も民衆的となり易い、其處に民衆に迎合するの弊を生ずると共に一方に於て藝術至上主義に走るの陥穽がある。吾人が法律至上主義とか道徳至上主義とか云ふ言葉を聞かない

のは、それ等が眞に民衆的であり得なかつた爲めである。(四四八)

この何んでもないような言葉であるが、著者ならでは言ひ得ない妙句である。而して「法律を面白く説明すると民衆は面白味だけ味はつて肝心の法律の眞諦を忘れてしまふ」(四四八)を注意し、また「藝術は法律や道德の手段に墮してはならぬ」「藝術の中に吾人の血となり肉となる尊いものゝあることを示してゐるのである」(四四九)と喝破して居るあたりは著者の眞の面目である。

文章の妙はいふ迄もなく、處々に趣味多き寫眞版を挿入してあるのも、本書の價値を増すものである。故穗積陳重先生の名著『法窓夜話』以降の好著として江湖に推奬するのである。

因に著者は刑法界の權威たりし故勝本勘三郎博士の後嗣であり、親子二代の教授博士ではあるが、一面に洋畫家として一家を成すの技がある、本書のある所以である。(東京市芝區愛宕下町四丁目改造社發行・定價貳圓八十錢)

川崎貞明氏著

『米國信託會社の組織と經營』

吳　文　炳

我國の信託業は既に十三億の信託財産を有することによつて、銀行と保險會社との中間に、その儼然たる存在を明かにした。本書は此の新興事業のために米國に於ける信託會社の實務を紹介せられたものである。著者は最近二年間、我國信託業の母體である英米に在つて實地に亘細の研究を遂げられ、殊に一會社では社長より一般書記に至るあらゆる階級の人々から悉くの經驗と知識とを受けられ且つ重要書類縱覽の便宜を與へられたと云ふ。實務説明の中心として個人信託課法人信託課、證劵部、不動産擔保貸付部、貸金庫及權利保險業務を擧げて一々懇切なる説明を下されるところは、流石に著者の體驗の深いことを思はせるものがある。

本書を讀むで今更ながら感ずることは、彼地の信託會社の社長、副社長其他役員の眞摯なる態度が遺言執行者、後見人、受託者として安じて三尺の童子をも託し得るものであること、社債發行に關聯する業務即ち社債引受並に社債信託の引受に於ける嚴格なる諸條件は社債發行者、信託會社ともに社債の聲價並に信用の維持を以て主眼とせるものであることなどである。

また、信託會社と保險會社との接近を說かるゝところは著者が現實保險業にたづさはる人であるだけに、一入の興味を以て讀むことが出來且つ尠からぬ啓發を受けた。尙我國の信託業者が久しく其の實行を希望しつゝ遂に今議會に法律案の通過を見るに至つたところの遺言執行事務に關する詳細な說明がある。これは同書の卷尾に添へられた一般事務に關する數十葉の實務樣式と共に直に採つて以て範とするに足るものであらう。唯聊か同書を繙いて物足りなく思ふところは

私は此の著書から清算人及レシーバー事務に就て今少しく詳細に聞きたかつたことである。がそれにもかゝはらず、私はまだ成育の初歩に在る今日の我國信託業に此の有益な文献を加へ得たことを心から喜ばずにはゐられない。（東京市日本橋區通三丁目丸善發行・四圓）

西洋學哲史　第一卷

出隆著

田中美知太郎

正直なところ、私はこの書物をどう言つてよいのかわからない。たとへばこの書物で取扱はれてゐる時代を著者は自然哲學者の時代と呼んでゐる、そしてそれはよいが、この大事な自然といふ語の説明が私にははつきりしないのである。著者は命名によつて説明しようとするかのやうに、一方では自然（ピュシス）を物の世界、コスモス14頁、生成變化する世界、自然界46頁などゝ呼び、他方では世界の眞相14頁、世界のあるがまゝ、世界の本質45頁52頁、實相43頁など、名づけてゐる。そして「世界の眞相（ピュシス）を追求し、そのもとのもの（アルケー）からこの世界（ピュシス）を理解せむとした」59頁、といふやうな言葉をきかせる。（ついでながらこのアルケーもピュシスに應じて、ある時にはそれはピュシスと竝び、ある時にはピュシスのもとのものと考へられてゐる45頁52頁）そしてつひにこの時代の——後の時代は問題ではない——哲學者たちが「かゝる生成變化する世界（自然界）そのもの或はその本質或はその實相をピュシスなる語を以つて呼んだ」と主張してゐる。抑いかなる史料にもとづいて著者はこれらのことを言はうとするのであらうか。私の狭い知識ではほとんど想像がつかない。また著者はどういふ風にして二つの意味（世界と世界の眞相）の一語ピュシスに於ける統一を私たちに理解させようとするのであらう。「ピュシスは初には有ると成るとの未だ區別されない現象の如實事物事象のそのまゝ Sache an sich を意味したのであらう」46頁といふ言葉はこれに對して何か今の二つの意味を統一するピュシスのより根源的な意味を與へるものともとられる。さうすると、こゝからしてそれが「有るがまゝの世界成るがまゝの世界」52頁の意味や「世界のあるがまゝの本質（これも氣になる言葉であるが）」45頁の意味になることを理解出來ないことはない。然しながらこれによつては私たち著者がどうして日本語でかう考へたかといふ著者の心理にふれるだけである。（今の説明がもつと明確な形をとり、史料にもとづいて證明されない限り、これではピュシスにはとゞかない。

ピュシスだけで豫定の枚數が一杯になりさうになつたが、はじめの方だけで言つてもこの外ロゴスの種々の譯語やスコレーの説明やテオーリアーと合理的といふことの結びつきその他が解らない。また主觀、客觀、論理的、理想主義等々の語や他の色々な斷定

が氣にかゝる。恐らく私の偏見や無學のためだらうと思ふけれど、然し解らないことを解つたやうな顔をして、いゝ加減なことを言ふのはいやだ。然も「解らない」や「氣になる」だけでは何も斷定出來ない。時に責任のある斷定は出來ない。つまり改造社はこの書物の批評をするには不適當な人間を選びあてたわけである。然しこの種の「判斷中止」はこの書についての一般の人々の印象をわるくするおそれがある。私は人々に一言しなければならぬ。私がこゝで解らないとか氣になるとか言つてゐることはいづれも諸君にとつてはどうでもいゝことなのだらうと思ひます。もし諸君が世に出てゐる他の書物からギリシヤについて既に何かを學ばれたとするならば、無論この書物からはもつと多くを學ばれるに相違ないのです。(東京市麹町區元園町一ノ一〇啓明社發行・定價二圓五十錢)

新刊紹介

◆帝制ロシア沒落の眞因(大竹博吉監輯 ロシア問題研究所版・東京麹町內幸町一ノ五・同研究所發行・非賣)

◆街頭の社會學(室伏高信著・東京京橋上槇町十二・田舍社・定價壹圓六拾錢)

◆監獄部屋(沼田流人著・東京神田區今川小路二丁目・金星堂發行・定價壹圓)

◆本當にあつた事(續篇)(鈴木常吉著・大阪市北區中之島・朝日新聞社發行・定價壹圓參拾錢)

◆文藝年鑑(文藝家協會編・東京牛込區矢來町・新潮社發行・定價壹圓五拾錢)

◆原始から出た(林一郎著・東京本郷湯島切通坂町一九・ロゴス書院發行・定價壹圓)

◆政治家よ何處へ行く(山浦貫一著・東京麹町區麹町三ノ二・日本書院發行・定價貳圓)

◆日蓮聖人の實現の宗教(山川智應著・東京下谷櫻木町一・天業民報社發行・定價貳圓五拾錢)

◆(詩集)棕櫚の木(佐野嶽夫著・東京小石川白山御殿町三二・抒情詩社發行・定價壹圓五拾錢)

◆若き日のギヨーテ(阿瀬利吉著・市外杉並町四一五・森林詩社發行・定價八十五錢)

◆社會思想批判(川邊喜三郎著・東京神田北神保町二・新生堂發行・定價貳圓五拾錢)

◆(戲曲)小栗上野の死(十菱愛彥著・東京麹町內幸町一ノ六・第一出版社發行 定價壹圓六拾錢)

◆(散文集)雪と野菜(前田夕暮著・東京市外西大久保一二八・白日社發行・定價壹圓八拾錢)

◆支那古代史(ヒルト博士著・西山榮久譯補・小石川區原町六・丙午出版社發行・定價參圓五拾錢)

◆國民に訴ふ(中野正剛著・東京麹町下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓五拾錢)

ティルダへの手紙

故 有島武郎

兄の日記「觀想集」第九卷、千九百六年（明治三十九年）十一月十七日を開いてみると、瑞西ルツェルンから、シャフハッゼンの古都へ到着した晩のことが書いてある。羅馬で識つた私の友人達がそこで吾吾の到着を待つてゐてくれたのである。その藝術家のグルプのうちに三人の若い女性が居た。その中のティルダ・ヘックといふ野歌などを唄つた金髪靑眸の一處女が兄の心を惹いた。二十三日そこを辭した時の日記には「涕淚を垂る」と識してある。この僅か一週間の交遊から二人の文通は始まつて、實に十八年間の長日月に亙つた。兄の殉情、友愛はその半生の外面的移推と共に悉くこの書簡のうちに告白されて居る。

私は去年九月、三度目にシャフハッゼンを訪問した。ティルダは兄の死を勿論知つては居たが、改めて生前死後の詳細な事情を物語つた。ティルダの室は兄の記念物で充されてゐて、尙ほ生ける人に對するが如き感情を抱いてゐた。十二月彼女は全書信のコピイ百二十一枚を携へて巴里へ到着し、日本でそれを發表することの許可を與へた。こゝに掲載するものはその最後の一部分である。

飜譯には吳茂一君と山田文雄君とを煩はした。（有島生馬附記）

一九一五年十一月十七日（東京より）

九月八日附の御手紙はどんなに私を驚かせたでせう。さうして人間の運命を悲しく感じます。あれ程希望に充ちたあなたの婚約がどうして突然破約されるやうになつたのです。勿論私は今度の悲劇が如何して起つたなどと云ふ事をあなたにお尋ねしてあなたの心の中の傷に血をぬる樣な事は致しません。併し一人の友として、特に關係の深い一人の友として、あなたの惱の全てを知り度い。さうして出來るならばあなたの苦を如何にもしてお慰めしたいと願ふのです。併し心を安めて下さい。私は心からなる同情をこの手紙と共にあなたの許に送ります。あなたの爲めに、あなたと共に、あなたの心の中に私は泣きます。全能の神があなたの思ひ遣り深いやさしい美しい心を支持し、人類の正しさと貴さと、信ずる力とを與へ、遙か離れたこの世の一隅に常に愛と同情とを持つ一つの魂の存在を信じて下さい。あなたが野

戰病院に起き、人類の敵なる野獸性の爲めに傷き苦む哀れな人々に慰安を與へられようとするのは、あなたにも大きな慰めでありませう。苦しめるもの丶爲にあなたの全力をお盡しなさい。與へるものは與へらるゝものより幸福です。而してあなたの悲は一つの泉となり、假令憂鬱で暗くとも、そこから湧き出る清淨な水は、あなたの隣人が最も求めてゐる同情と尊敬となつて濺がれるでせう。

あなたの二葉のお寫眞は私を喜ばせました。私は一見あなたを見分けました。三人の中の眞中に坐つて居られるのがあなたですね。而してあなたの微笑み、それは私があなたと共にある時にあなたが私に微笑みかけられたその微笑みです。

別の包で幾つかの小さな人形をお送りします。それは豆の様に小さいので豆人形と呼ばれてゐます。その一つ〳〵があなたへ私の友情を傳へて呉れるように。これで筆を擱きます。あなたの御元氣で苦しい試練から雄々しく立ち直られん事を祈りつゝ。

二伸　先日シャツフハゥゼン宛に人形のお禮のお手紙を書きました。お受取り下さいましたか。若しまだなら該地の郵便局にてお問合せ下さい。(註。當時ティルダは墺國野戰病院に働いてゐた。)

妻は幾分良好に向ひ、滿足に思つて居ります。我國は目下御大典で大變な賑はひです。氣の毒な〳〵ティルダよ、私はあなたを胸に抱く。

一九一八年六月廿九日(東京より)

あなたの事をなつかしみながら、こんなに長く手紙を書かなかつたのは私の誤りです。何年も前にお別れした切りで、しかも尙かく強い愛着を覺えるとは唯々不思議です。貴女は私の最も愛する最も價値ある友の一人として、常に私の心の中に生きてゐる事を信じて下さい。長い間の御無沙汰で書き度い事は山程あります。この前のお手紙で貴女がK氏との婚約を破棄された事を知りました。その報知はどんなにか私の心を顚倒させましたらう。許婚者に對して、あれ程誠實で愛情深くあつた貴女は、この世でたつた一人を愛すべきでした。併し過ぎ去つた悲をこゝに繰り返しますまい。現世はあまりにも苦惱に滿ちてゐます。過去の不幸を繰り返して、現在の悲みを更に増すやうな事は致しますまい。併し純潔な堪忍を以て悲を忍ばねばならぬ者はあなた一人でないと云ふ事を告白させて下さい。私自身癒しがたい不幸に遭遇しました。卽ち一昨年妻は肺の病から世を去りました。前にも書きました通り、妻は一九一三年の秋以來肺結核を患ひ、到に一九一五年の八月四日、私を始め彼女の兩親等の悲みを後に、三人の遺兒を悲嘆と寂しい父の手もとに殘して永遠に逝つたのです。あなたから贈られた人形は死の床に間に合ひました。彼女は死ぬ前にその人形を愛撫し、あなたの御厚意を心から謝してゐました。私の生涯はこの世の樂園[illegible]の下から靈魂の奈落に落ちてしまひました。しかし

私は人生は結局情あるものだと云ふ確信を以てこの不幸を切り拔けて行きませう。鬪ひ鬪き戰つて遂に私は勝利を得ました。私は教職を退き、一個の決心と苦い經驗とを以て、文筆の境涯に飛び込みました。私の仕事は文壇に認められて來ました。私は知識階級の生活の進歩と善の爲に良き努力を盡す事が出來るでせう。三人の子供も立派に育つて來ました。私は確實な歩を續け、全精力を傾けて、人類生活の成長進歩の爲めに盡しませう。

あゝ、私はあまりにも思ひ上つてゐます。恕して下さい。私はあなたの前にそんなにまで高振る必要はありません。貴女は私を愛して下さる。私は貴女を愛する。それで充分です。私達の心が時間と空間との距を越えて、固く結ばれてゐると云ふ事は如何に不思議な併し又如何に美しい事でせう。愛するティルダよ。私達の間が國籍、國、血、教育、生活、習慣の差異、その他凡ての相違にも不拘、私達はお互に人間であると云ふ事で理會し合ひ、何ものもその間を距てる事の出來ぬ程完全に理會しあつてゐるのです。それは實に嬉しい、又美しい事です。

現在ヨーロッパを襲つてゐる恐ろしい戰禍の犧牲たる傷病者の看護に一身を獻けてゐると云ふあなたの態度に私は敬服します。それはあなたの樣な女性にとつて、最も適はしい仕事です。あなたは親切な愛情と注意深い思慮に富んだ方です。あなたの看護を受けた人々が、人類愛に目覺め、お互に殺し合ふと云ふ事を憎む樣になるのは疑ひもない事です。あなたのやさしい影響によつて現在ヨーロッパに跋扈してゐる恐ろしい戰爭を中絶せしめて下さい。併し貴女の御健康にも呉々氣を付けて下さい。こんなに互が遠く離れてゐると云ふだけで充分に淋しい事です。その上もし萬一、私達が幽明界を異にする場合にでもなつたら、どんなにそれは大きな淋しさでせう。もし私達が現實に手を握り、唇を接する事が出來ないならば、せめて手紙の中にそれを交しませう。

度々お便りを下さい。お閑のある度に書いて下さい。私も間違なく書きます。母君によろしく。

あなたに告げるといふより、要求する。この手紙が着き次第、返事を下さい。それを約束して下さいますか。あなたは常に私の愛の奥深くに住んでゐる事を信じて下さい。淋しがらないで下さい。私も淋しがりますまい。愛のある所、人生は生甲斐があります。あゝティルダよ。どんなに私はあなたを愛するか。

一九一八年八月十八日（輕井澤より）

妻の死、その他の報道を書いた手紙を御受取り下さいましたか。その后如何お暮しですか。病者、傷者の看護に御力めの事と思ひます。さうしてあなた自身御丈夫で御元氣ですか。いつも〳〵幸福で居られるように。あなたにそれを望む價値があります。既に耐へがたい樣々

の不幸を耐へて來られました。今や勝利を挙げられてよい時です。私自身は依然元氣で夏をこの避暑地に送つてゐます。こゝには實に澤山の外人が居ます。此地は三千呎の高原で非常に涼しく全ての人が夏の長い事を願つてゐる位涼しい土地です。三人の子供達も極めて元氣です。淺ましい戰爭の事は噂を聞くさへ忌しい事です。が日本も、今度その戰爭に參加したらしいのです。さうして一部軍隊のシベリア出兵の準備をしてゐます。私も國民軍の一人として（この事はあなたに知つて貰ひ度いのですが）出征簿に載せられてゐます。何と×な事でせう。それは實に何の意味もない事です。

もうそんな事は止めませう。あなたに對する暖かい友情、それこそこの手紙を書く第一の目的なのですから。誠の友情を心に懷くものこそ、國家別、皮膚の色の相違などを忘れて、固く結ばれませう。心と心とが深く結ばれようとする願のみ、世界の眞の平和を齎すでせう。あなたもさうお思ひになりませう。さうならば假令小さいながらも、あなたと私とはこゝに眞の平和の締結の楔となる事が出來ます。

こんな難かしい理窟はさておいて、あなたの事を想ふ度に、私の心は波立ちます、それは○○○○○○○不思議な位です。神が常に凡ての罪惡からあなたを守つて下さるように、さうして慰めを與へて下さるように。

私は著作に忙しく働いて居ります。第六番目の著作集が出かゝつてゐます。それは九月初に出版の豫定です。あなたが私の書くものを讀んで下さる事が出來たらと思ひます。假令あなたがお讀みになれなくとも、一部送りませう。さうして假令外觀だけでも、あなたの興味を惹くかも知れません。その本の裝幀は壬生馬の手になるものです。弟は美しい家内と、可愛い娘と共に、幸福に暮してゐる事を序でながら申し上げておきます。

出來るだけ度々お手紙を下さい。互に文通する事によつて万里の距たりを縮めませう。距離を忘れ、宛かも顏と顏と向き合ふやうな通信を交しませう。あなたのなさる事、あなたの健康、あなたの將來の計畫、希望、心配、それ等に關する凡てを一々知り度く思ひます。言葉の差と云ふものが嫌はしく思はれます。私達が考へ感ずる所のものを、そのまゝに傳へる事の出來ない言葉の相違と云ふことです。若し全世界を通じて同一の言葉であるならば、どんなに良いでせう。さうすれば私達の感情をそのまゝ知る事が出來ます。國別と國語別の不必要な障壁、こんな呪はしいものはありません。

母君は御機嫌いかゞです。ガムペルや、シュミトや、ブウフマンは？　それらの人々の消息を御存じですか。それからエンマ、フォルスターは？　リリエン スカヤは？　私達が無邪氣な小兒の群のやうに一緒に遊んだ日の事を想ふと、樂しい夢のやうです。物事は移り行きます。しかしティルダよ。私は變りません。私はいつもあなたの心からなる友で、いつも貴女の幸福を祈つてゐます。心からなる接吻を以てこの慌たゞしい手紙を閉ぢます。

よき勝利と、よき親睦と共にあなたを見舞はん事を祈ります。

二伸。恐らく一月後に私は東京に歸ります。御手紙はどうぞ東京宛に下さい。

一九一九年一月十五日（東京より）

御心の籠つた長いお手紙を頂きました。感謝と感動とを以て讀み了りました。何よりも先づあなたが御丈夫で常に渝らぬ愛と熱心とをもつて貴い仕事を續けられてゐる事を喜びます。最近のお姿を寫したお寫眞を送つては下さいませんか。同封にて私と三兒の寫眞をお送りします。私も隨分年をとりましたらう？ しかし私の心は老いず、若い羊のやうに、ときめき躍つてゐます。

血醒い歐洲の天地に平和の訪れた事は何といい喜ばしい願はしい事でせう。平和克復の聲を聞かれた時、あなたの胸はどんなに躍つた事でせう。この恐ろしい國際間の鬪爭から遠く離れてゐた日本人でさへ、平和成立の聲を聞いては「萬歳」を叫ばずにはゐられませんでした。この大事件の結果として、よし「黄金時代」を期待する事は出來なくとも、これを轉期とし、世界文明の潮流は全く新しい方向を取つて進んで行かねばなりません。「國家」と云ふものがその限られた領域に退き、これに代うるに人類と人格の威嚴とが進歩の原動力として立たねばなりません。ドイツ帝國の專制政治の末路と共に、我國にも亦民主主義の精神が入つて來ました。さうしてそれは頑迷な偏見者から不當に排斥せられてゐます。併し時がその解決をするでせう。さうして新しい精神は愚かな傳統を滅し、やがて取り入れられるでせう。あなたの祖國が既に數世紀以前に近代思想を體得せられた事は、如何に幸福な又先見の明でしたらう。

私達がシャッフハゥゼン滯在中に會つた人々の上にかゝつてゐる運命は私の氣になり、又私を悲しませる事です。ペシュリンはもうこの世にはゐないでせうか。あまりにも意外な又悲しい事ですね、あなたの母君は尙御元氣ですか。あなたの許婚者の心が再び歸つて來るのを、殆ど絶望に近いその事を今も尙待つて居られるのですか。何んと慘ましい悲しい事です。運命は如何にしてかくあなたに酷なのでせう。貴方はいつか日本を訪れると云はれましたね。それはいい。僞でないように。私の生ける限り心からの誠をもつてあなたをお迎へします。

私は文筆の仕事に一生懸命勵んでゐます。既に七種の出版が市場に出、何れも十版以上を重ねてゐます。之は日本の書物としては珍らしい成功と云はねばなりません。私はそれを英語に譯して、ヨーロッパの人々の間に讀者を得られたらと思ひます。いつかはこの望を實現したいと思つてゐます。壬生馬は家族と今、海邊に住つて繪筆に親しんで居ます。少しく健康を損してゐるので、海岸にゐる事が彼の健康を回復するに最も良いと思ひます。

ティルダー 手紙を下さい。澤山書いて下さる程良い。あなたの消息はいつも私に力を齎します。人生に力を與へるものは暖かい心のみ

です。あなたの心、それは私に無くてならないものです。忘れないで下さい。どうか、ティルダよ。

心からあなたの御健康と御幸福とを祈ります。

一九一九年三月十五日　東京より

元日に書かれた御手紙が暖かい愛と友情とを以て届きました。心からなる感謝をさうして更に〱大きな悦！　私達の心がかくも結ばれて、時の距たり、場所の距たりも、之を妨げる事のないのは不思議です。私が軍隊名簿に登録され戰線に送られるかも知れないと云ふ心配は無駄でした。私は召集されませんでした。さうして今や戰爭も終結を告げました。それのみならず、停年で今は全く軍籍から退いたのです。さう云へば年を老つたものですね、然も私の心は青年の心です。仕事は之から始まるのです。畢生の仕事を完成させる爲めに私は長く生きなければならない。あなたも長生きをして下さい。而して日本來遊と云ふあなたの夢が實現されるように。貴女が日本へ來られるようになつたら、どんなに私は嬉しいでせう。貴女が一生に一度日本を訪ねられる事は意味のある事です。

私は尚著述に勵んでゐます。私の著作（今までに七册出たのですが）は特に若い人々の間に評判が良く、私はその爲めに勇氣を得ます。或著作は一萬部から賣れました。それは日本の出版界には稀有の事です。私は同胞の爲に何事かをしてゐると思ふと喜ばしいのです。唯あなたがそれを讀んで下さることが出來ない。

母君が尚御健全な事を知つて喜ばしく存じます。私の家族も皆丈夫です。子供達も立派に育ちました。三人の中二人は小學校に通つてゐます。寫眞をお送り出來ると良いのですが。その中に一枚寫してお送りしませう。どうかあなたのも御送り下さい。

日本は今×××が起り兼ねまじき危機に立つてゐます。民主的の傾向は今や一般人の心に浸み亙り、社會生活の改造に對する何等かの方法が講ぜられないならば滿足しない狀況です。我々は六十年以前に所謂維新を經驗しました。それは單に西洋文明を（特に物質方面に於ける）鵜呑みにしたに過ぎません。今や西洋の思想が國内に充ちわたり、國民思想を××から××せしめようとしてゐます。その結果はどうなり行くか。誰にも分りません。しかしそれは興味のあると同時に××すべき事柄です。

無用な理論は扨おき、今一度あなたの手を取り、今一度なつかしいあなたの聲を聞き度いと云ふのが私の願です。なつかしい〱ティルダよ、私が日本への歸途あなたは幾度あなたの誠を認めて送つて下さつたのを御記憶ですか。港々で私はあなたのお便りを受け取り、大きな大きな勵めを受けたのでした。私がチューリッヒを立ち、ドイツに向ふ時でしたね。私達はゲーテ通を停車場の方へ歩いて行きました。私達は別れの最後の瞬間までお互の目と目でやさしい語らひをつづけたのです。それ以來私達は一つ心です。心で固く結ばれてゐます

これ程強い友情がこの世に二つと他にありませうか。ティルダー　この友情を大事に持ちつゞけて行きませう。私達の墓場までも。最愛のテ　ルダよ。この手紙に托して私の熱い／＼接吻と、抱擁とを送ります。私の貧しい英語では私の心は表はす事が出來ません。兎に角言葉を以ては人の心の最も深い所を傳へる事は出來ません。字と字、句と句の間にあなたは私の愛を讀み取つて下さるでせう。私の愛する、誰にも増して愛するティルダよ。

一九一九年九月廿六日　東京より

餘程以前に御親切な御手紙を有りがたく頂きました。今日まで御返事の遲れた事を眞に濟まないと思つて居ります。私の怠惰をお許し下さい。あなたに對する私の愛は微塵も搖ぎはしないのですが、英語を書く力がだん／＼駄目になつて來るのです。あなたは私に倣はないで下さい。この手紙着き次第返事を下さい。御元氣で傷病者にあなたの貴い仕事を續けておいでの事と信じます。既に全世界に平和が來ました。確に間違のない事實です。しかしその平和なるものが、如何に用心深く裝ひをこらしてゐるでせう。いつでもその假面をはぎ、平和の天使は惡魔の姿を表はす事が出來るでせう。吾々は眞の調和ある平和の爲めに尙努力せねばなりません。

私の著述の仕事については私の全能力を盡して、藝術的作品を生み出す事に努めてゐます。さうして、眞に私に同情のある、期待を私にかけて呉れる、讀者を得つゝあります。數に於て既に三萬、之はあなたの國に於ては多數ではないかも知れませんが、日本の讀書界に於ては莫大な數と云へます。私はかゝる多數の讀者を得る事によつて何か仕事をなす事が出來ると考へます。あゝ、もしあなたが私の傍にゐて下さつたなら。恐らくはもしあなたが我國語を分つてさへ下されば、あなたこそ私の藝術を最も強く支持して下さるでせうに。而して友誼と愛とを以て私を最も強く力づけて下さるでせうに。國別、更に又國語の差こそ呪はしい。しかし英國の作家の一人が私の劇の一つを英語に譯さうと云ふ企てもあるのです。もし出來上れば最初の一部はあなたに贈られねばなりません。

この手紙に日本の切手を同封します。貴女の甥御さん達に喜ばれゝば幸です。その中の幾つかは珍らしいもので、日本でさへ求め難いものです。ヨーロッパの切手をあなたから御送り下さいませんか。子供達が本當に熱心に集めてゐますので、どんなに喜ぶでせう。

あなたお送り下さつたお寫眞はあまりあなたに似てゐない樣です。あなたは少し固くなつて見えます。本當はもつと暖かで、もつとやさしい。それでもあなたのお姿に接するのは久しぶりです。私はそれを大事にとつておいて、あなたが側にゐて下さる事を感じませう。繰り返し繰り返し御禮を申します。

ティルダよ。私はいつも心からの友としてあなたを想つてゐます。それを繰り返す必要はない。しかもそれを繰り返し云ひ度いのです。

さう云ふ事が私を喜ばせるのです。あなたは二つ家を持つて居られる。一つはあなたの今住んで居られる所に、今一つは私の居る所に。私の事を想ひ出される時があればいつでもお手紙を下さい。

ティルダ！ ティルダ！ あゝティルダよ。心からなる接吻と抱擁とを以て。

一九二二年一月十四日　東京より

露の如くにあなたのお便りは私の眼を潤しました。三度まで私は悉しい便りを書かうとして、いつも書き度い事がありあまつて筆が進みません。あなたの懐しい友情に對しいつも私が感謝してゐる事は御想像以上です。ティルダよ、湖畔の散歩を覺えてゐますか。その時は月が美しかつた。空氣は冷く肌ざはりがよかつた。他の人人も私達の前を歩いてゐました。私はあなたに寄り添ひ、あなたのポケットに手を入れてあなたの手を握りしめやうとしましたが、あなたはそれを許されなかつた。その筈です。あなたは婚約中だつたのですもの。惡く取らないで下さい。その時のあなたに對する私の感は最愛の妹に對するそれでした。私は自分の行爲を恥かしいとは思ひません。私は親しくあなたに觸れないでは、私の感情を傳へる事が出來ないと思つたのです。併し、お別れに際して停車場であなたの眼が私の眼を射、他の何物にも比べられない數多の愛撫の意味を傳へられた時、私は全く滿足し、私達の生命のある限り、二人は離れてる事の出來ない友だと云ふ事を知りました。しかしそれは實際に證せられました。數年の長い年月の後、私達はかうして心からの友情を抱いて相對してゐます。ヨーロッパの旅行中の友人の追憶も凡て失はれました。たゞ一人あなたのみが殘つてゐます。あなたは私を忘れない唯一の人、さうして私が忘れない唯一の人です。これは偶然な併し又必然な事です。

お手紙には書いてないが、御元氣の事と喜んでゐます。併しあなたが野戰病院の仕事を止められてから、何をして居られるか分りません。今でも母君と一緒にお住ひですか。さうして母君の御機嫌はいかがですか。シャッフハゥゼンにゐた時の友はどうしてゐますか。ガムペルは？ リリエンスキーは？ シュミットは？ エンマは？ 一度それらの人々に就て知らせて下さいまし、その後の消息を知り度いものです。

私は相不變元氣で、文筆の仕事に勵んでゐます。小說、脚本、紀行その他の諸篇を含めて既に十三の著作集を公にしました。私がヨーロッパの旅に就いて、ナポリからアッシジまでの印象を記した旅行記を一部贈呈します。私の物した小さなスケッチが、あなたの興味を惹くかも知れません。字はお讀みになれなくとも、少くとも繪はお分りでせう。

來る可き春に私の胸に長い間抱いてゐた望を實現しやうと思つてゐます。即ち父から受けた全ての財産を棄てゝ、一介の文筆勞働者として生きて行かうと云ふ事です。社會的の地位とか、物質上の財産とか

は、唯私の生涯を妨げるだけです。何等か價値あるものを生み出す前に裸一貫の人間であらねばなりません。さうでなければ、次の時代の正しい位置を算定する事が出來ません。あなたは私を馬鹿らしい、急進派だとお取りになるかも知れません。が、さうではありません。私は唯近い將來の日本に於て、凡ての人がなさねばならぬ事をするだけです。この試練に自分はよく耐へ得ると信じます。あなたも同じ意見であつて下さる事を願ひます。三人の子供達も立派に成長しました。私は大きな興味をもつて彼等の將來を樂みに見て行きませう。壬生馬は少なからず健康を損してゐるので、家族と共に東京から三十哩ばかり離れた海邊に住んでゐます。しかし今では一日々々快くなつてゐますから間もなく全快するでせう。或る婦人に托して、お送りした御物は無事に着いたさうで安心しました。その婦人の夫は日本で私が教鞭を取つたと同じ學校でドイツ語の教授をしてゐます。その名前はハンス、コラーと云ひます。コラー夫妻は實に良い人です。特にコラー夫人のやさしい思ひ遣りのある性質が好きです。もしコラー夫人の住所を御存じで訪ねられるやうな事がありましたなら、貴方は非常に良い友を得られるでせう。

最愛のティルダよ。こんな風に書きつゞけてゐては際限がありません。もう止めなければなりません。筆を擱く前にもつと度々手紙を下さる事を約束しませう。私も亦もつとお便りを送ります。私の事を想ひ出されたなら端書なりと下さい。あなたの事に就て書いて下さる事が、どんな喜を私に與へるか想像なさる事も難いでせう。あなたも同じ心持でゐて下さると思ひます。

幸福な平和な生活をお送り下さい。一度で良いから、僅かの期間でも良いから、日本へ來られるといふ夢をお棄てにならぬよう、最愛のティルダ！抱擁と接吻とを以て。

一九二二年三月四日　東京より

今日は私の第四十四回の誕生日で、あなたにお便りを書くに最も適はしい日だと思ひます。御機嫌如何ですか。變らず御元氣である事を祈ります。春は來ましたものゝ未だ淺く、梅や桃の花盛りでも、大分寒いです。先達、さうですね、一月も前ですか、オイゲン、ヱールリといふ瑞西人の醫學博士が私を訪ねて來られました。その人はシャツフハ。ゼンでの親しい友達の寫眞を澤山持つて來て下さいました。日本に有島と云ふ兄弟がゐるから、行つたら是非逢つて來いとあなた方に云はれたのださうですね。けれどもヱールリ氏はアドレスを失つてどうして私達を探したらいゝか分りませんでした。所がアメリカから日本へ來る太平洋の船中で、最初に話しかけた一人の若い日本人があつたのです。それが（不思議な縁にも）私の二番目の弟だつたのです。その弟の姓は佐藤と云ひますが、その佐藤が私共の住所を教へたので、暇をみて直ぐ私の所を訪ねて來られました。どんなに喜んで氏を迎へたかはあなたの想像に任せます。その寫眞の一枚に、壬生馬が

カムペルやブフマン等とライン河の畔で、倚り添つて立つてゐるのがありました。勿論私が氏に尋ねた最初の言葉は貴方に就いてでした。博士は嘗て「白鳥ホテル」の直ぐ近所に住んでゐた事があつて、貴女の家族とはよく知つてゐると云はれました。さうして貴女が、今ホテルの近所に本屋の店を開いて居られる事を話されました。それだけの事を知つたのでも私は非常に喜びました。世界といふものも結局は何と小さいのでせう。

私は目下新しい小說に全力を盡して居ります。隨分長くかゝりますが、その完成を樂んでゐます。それは私の若い時の學生々活をモデルとしたものです。そこには私が默しては居られない位澤山の喜ばしい、又悲しい追憶があります。

同時に私は亡き父から讓り受けた財產を凡て擲棄し、全く裸一貫にならうと云ふ計畫を眞面目に企てつゝあります。あなたはそれを度外れの事と思はれるかも知れない。けれどもかくする事によつて、私は過去の仕事とは比較にならないいゝ仕事を作り出して行けると確信してゐるのです。私の過去の仕事は云はゞ遊戲でした。今著作と云ふ一事に私の生涯を限定してこそ、讀者の心の深い〳〵所まで訴へる事が出來ると信じます。私の變化を喜んで下さい。僅かの人だけが私の決心を理解して與れます。さうして貴女がその中の最初の人でなければならない。今后私の書翰紙は次第に粗末なものとなつて行くでせう。もしあなたが日本へ來られたとしても、私の家であなたを充分におもてなしは出來ないかも知れません。しかしそれにも不拘、あなたは私の中によりよき人間を見出して下されるでせう。私は有產階級の生活といふものに全く望を失ひました。その種の生活は危機に瀕してゐます。その中から望のある出口はありません。行きつまりの道同然です。より新鮮な、より淨化された空氣を呼吸する爲めには、それから先づ脫け出なければなりません。

あなた自身のことを書て語つて下さい。御仕事はどうですか。母君は？その他色々の事を。リリイ、ペシュリンの寫眞を見ました。今友達と幼稚園を開いて居られるのださうですね。隨分變つた樣に見受けます。昔ての愛らしさがなくなつて寧ろいかめしい様子に變りましたね。それは現在の職業のせいでせうか。それとも何か不幸にでもあつたのですか。又エンマ嬢の寫眞も見ました。所々皺を見かける他あまり變らない樣です。兎に角皆が年をとつて行くのですね。しかし、しかしティルダよ。私の心は決して年をとりません。少くとも私は昔つて私の胸の中に鼓動したと同じ火のやうな心を持つてゐます。それは奇妙な位です。而して私の心の最も神聖な場所に、あなたはいつも變らず、若く、やさしく、愼み深く藏されてゐます。

一九二二年三月廿日　東京より

春になりました。梅はもう散つて桃の時期です。瑞西の町では長い雪と嵐の冬が過ぎて、美しい樂しい季節になつたでせう。お障りなく

多をお過しでしたか、お蔭で私も相不變元氣、新しい小説を書く事に、精出してゐます。

同封で昔送つて下さつたあなたの御寫眞をお送りします。色々物語をお想ひ出しにはなりませんか。仕事の合間に一寸閑がありましたので一筆。

一九二二年四月五日　東京より

あなたとコラー夫人とからのお手紙を頂いて大變喜んでゐます。同夫人から色々私の事をお聞きでしたらう。本當に親切な高貴な婦人です。當地は春が酣はです。お友達の音樂家に日本で適當な地位をお尋ねの手紙に就ては何れ後で御返事致しませう。コラー夫人との御交際が益々親密になり行く事を祈ります。

一九二二年四月十八日　東京より

二月七日附御手紙約一週間程前に頂きました。音樂にそんなに秀でて居られるディスラー氏（註、ティルダは目下その妹にあたる人と共同してホテル經營をしてゐる。）をお迎へするのは非常に喜ばしい事です。日本の若い人達は西洋音樂の傑作を優秀な音樂家を聽く爲めにあらゆる機會を待つてゐる有樣です。しかし、經濟的には少しも惠まれてゐません。唯經濟的後援がないと云ふだけの理由で、若い人達の音樂に對する憧憬も滿されないのです。それ故に良い音樂を聽き度いと云ふ燃えるやうな望がありながら、吾國にはまだ一箇の管絃樂團もありません。かゝる狀況ですから、ディスラー氏の來朝も、非常な困難を見越さねばなりません。ここに數人の獨逸人の教師がゐます。東京に一つ國立の音樂學校があります。しかしその學校は頗る官僚的で、本國政府によつて資格あり、權威ありと認められたもの丶他は、絶對に採用しません。それのみでなく、それらの教師達は來朝當時はその本國でも何れも一流の人々だつたと云ふ話ですが、時と共にその技倆は著しく落ちて、數年後歸國する頃には本國の音樂家に伍してその名も技倆も非常に低いものとされ、殆ど存在さへ認められないやうになるさうです。此大きな缺點と技倆の退歩とは日本の音樂界に競爭者がないと云ふ事に基因してゐるらしく思はれます。ディスラー氏が日本へ來る事を決心される前に、この事情を充分よく考慮される必要があると思ひます。私の考へる最も良い方法は東洋をざつと旅行してまはつて、日本、支那、印度、濠洲の大都市で演奏會を催される事です。既に我國はエルマン、シューマンハインクなどを迎へ、之等有名な人々の技を聽きました。近く六月にはチンバリストを迎へる筈です。之等の人々の技倆は聽衆によく感ぜられ、その仕事は十分酬ひられたと思ひます。もしディスラー氏がこの種の旅行を望まれるならば、その興行に日本で一番適した帝國劇場の支配人に話し合つて見ませう。日本以外の國々の事は何等か他の方法で契約されなければなりますまい。この方法が一番安全でせう。どうかディスラー氏に萬事を

相談して下さい。その上あなたからお指圖で凡てを取計らひませう。

先達あなたとコラー夫人デ　スラー夫人（ディ　スラー氏の奥さんだと思ひますが）の寄せ書のお端書を頂きました。貴女方の御厚意を有りがたく存じます。コラー夫人の愛すべき性格をお分りになつたに違ひありません。私はコラー夫人を本當に高貴な人だと思ひます。あなた方お二人がお互に親密な友となられる事を祈つてゐます。その端書にその中長い手紙を下さるとお書きでした。心からお待ちしてゐます若しこの手紙を御覧になつて未だその約を果して居られなかつたなら凡てを措いて直ぐ書いて下さい。あなたのお手紙を開く時、いつも、神秘な喜が私の心に忍び寄ります。この世界の廣さと狹さを痛切に感じます。私達の知り合ひになつてからの長い年月も、たつた一瞬に縮まつてしまいます。その時私は私の傍に貴女を感じます。（ここに私の寫眞を入れておきます）ああ、私は前にそれを送つたのでした。何と云ふ馬鹿でせう。

コラー夫人にお逢ひの節はどうぞよろしくお傳へ下さい。それから夫人の住所をお知らせ下さい。デ　スラー夫人には「私の最も親しい友の友は又私の最も親しい友である」事をお傳へ下さい。

最愛の乙女よ。我が心からの祝福を受けられよ。

一九二二年六月廿日　東京より

五月四日附のなつかしいお便りを數日前頂きました。どんなに心から喜んだでせう。今度は特別に長いお便りを下さいました。

何よりも貴女の親しい友の一人が近々日本へ來られると云ふ事を知つて喜ばしく思ひます。さうして最近の消息を色々伺へる事を樂みにしてゐます。その方が見えたら、私はあなたに關して、あらゆる細かい端々まで聞き出さずには置きません。

私は相變らず元氣で、最近二册出版をしました。何れも相當賞讃を受けました。同時に財産處分の仕事にかゝります。全部片附くまでには相當長い時間がかゝりさうです。それは重大な仕事で、私は自分だけで靜かになさねばなりません。私は銀行株の他に幾らかの不動産を持つてゐます。その値段は大變廉くなつて來て、恐らく合衆國を除く外、他の凡ての國に於ても同樣である樣に適當な買手を求める事が困難です。集積した文明は急速に崩壞しつゝあるやうです。それは或意味に於てゞはありますが良い兆候でせう。

あなたのお友達の音樂家に關しての私の手紙はお受取でせう。殘念ながら日本で滿足な地位を見出すのは不可能ではないかと思ひます。

なさねばならぬ、差し迫つた仕事がありますから、今日は短信ながらこれで筆を擱きます。短くとも、長い手紙にも表はし切れない心からの愛をお送りします。ティルダよ。信じて下さい。お互の心を結ぶ愛の奇しき事よ。貴女に呼びかける毎に私の心の高鳴りを覺えます。常に私の心の奥深く貴女が若々しく、思ひやり深く生きてゐて下さる事を祈ります。

（終）

蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰　徳富猪一郎

第八　熊本に來た第一年

予が熊本に出たのは、何月と云ふことを記憶しない、多分明治三年の秋の半を過ぎた頃であつたらう。それは途中にて稲の穂が熟してゐたのを今尚ほ覺えてゐるからである。當時父は藩命に應じて熊本に出て藩廳の役人となつてゐたが、一家は尚ほ水俣にあり、父は熊本に旅寓生活をしてゐた。予は直の姉――湯淺初子――と共に、横井叔母に伴はれて出掛けた。横井叔母は即ち小楠先生の夫人、母の妹である。當時保養旁々水俣の吾家に來てゐたがその歸るさに、予及び姉は伴はれたのである。水俣から松橋迄二十里の間は、例の如く小舟にて往つた。ところが風が凪いで舟は動かぬから、性急なる予は、辛抱が出來ず、頻りに船頭に喰つてかゝつた。それには叔母も閉口したやうだ。大正十一年久振りに水俣に歸りたる時、勘左衛門といふ八十有餘の老人が來りて、頻りにその時の事を話してゐた。彼が當時の隨行者であつた。彼は吾家の召使であつて、吾父の通信機關であつた。彼は若き時には水俣から熊本迄、二十五里の間、しかも三太郎の險を越えて、一晝夜に往復したといふことであつたが、それは掛け値にしても、なか〳〵健脚であつた。予も六十有餘となつて、稠人廣座の眞中で、斯る昔噺を持出されては苦笑せざるを得なかつた。然るに一昨昭和二年水俣に歸りたる時は、彼は已に不歸の客となり、その孫が彼に代つ

て面會に來つた。

話元にかへる。

扨いよ／＼松橋に着し、それから陸上五里の間は、叔母は駕籠に、前に云つた勘左衛門と姉及び予は歩行したが、駕籠の脚は早く、從ふ勘左衛門の脚は尙ほ早く、姉と予兩人は全く後に振り殘され、聊か心細くもあつたが、この大道を歩けば、行き着く先は、多分熊本であらうと思ひ、宇土といふ三萬石の城下を過ぎ、川尻といふ町の手前、緑川の渡しにてやうやく勘左衛門が待受け、又叔母の駕籠と前になり後になり、やうやく熊本城の見ゆる處迄來たが、叔母は頻りに駕籠に乘れと云ひ、予も乘りたくないこともなかつたが、折角これ迄歩いて來たのが、叔母の駕籠に相伴をしては、面白くないと考へ、遂に足を引摺つて、熊本、本山なる三村氏の家に着した。三村氏は予の外祖母の家にして、又予の母の長姉の緣付きたる處。當時の伯父は、予が父と共に、藩廳の役人であつたが、何か父等と意見の合はないことがあつたか否は知らないが、やがて役をやめた。父はそこから近き矢部の出張所を借り受けて居た。當時熊本には各鄕から（當時は郡―鄕―村）出張するに、その出張所があつた。卽ち父の寓居は矢部鄕の出張所であつた。其處には父の僕、若黨、書生、一切男世帯にて、やがて予の第四姉――湯淺初子の姉大久保音羽が――來つた。予と同行したる姉は、叔母に伴はれて、そのまゝ横井家に赴き、四姉は予の伯母竹崎家に居たが、竹崎家も亦た吾家と同樣、熊本に召出されたが爲に、姉は父の旅宿に歸つて來たのだ。

父が藩廳に出勤する時には、僕や若黨は父に伴つて出勤し、書生はみなそれ／＼學校に赴いたから、後に殘る者は、予と姉と二人であつた。外に仕事もないから、二人で盛に喧嘩をしたが、あまり喧嘩をして、遂に長屋のお婆さんが、仲裁に入つたことも屢々であつた。予は到着當時は、論語の素讀を三村の外伯父――予の母の長姉の夫――に授かりに赴いたが、讀方が田舍讀でいけぬから、改めねばならんと云はれて、頻りにその讀方を正された。凡そ素讀にはそれ／＼讀方があつてなか／＼面倒なものである。例へば、子曰くとあるのを、『子のたまはく』とか『子のとふまく』とか若くは『子いはく』とか種々に讀んでゐる。山崎點、後藤點、道春點、一齋點など云ひ、それ／＼訓點者によつて、讀方がなか／＼違ふものだ。數へる人によつ

ピエールの沒落、從つて恐怖政治の終焉を指す）への道を自ら準備しつゝあるものであると非議する人達である。

私は各種の國內並に國際問題に就いての、吾々の種々の意見の乖離點を數へ上げて後に、更にかう續けた――

ブルジョア革命のみならずプロレタリア革命の後にも反動は來得るものである。過去六ケ年間ソヴイエット・ロシアは、徐々にではあるが確實に、十月革命への反動に向つて逸脱し、その爲めに自分自身のテルミドールへの道を拓いて來た。この反動の最も明白な徴候は、黨の左翼に對する兇惡な、組織的迫害である。スターリンとその一派はその最後の微弱な抵抗を試みんとするに當つて、武器として、現に追放されてゐる反幹部派の黨員が提供した思想の、然もボロボロとなつた殘物の外何物も有つてゐないではないか。彼等自身の創造力と云ふものはゼロである。左翼に對する彼の鬪爭は、彼等から凡ての安定を奪つた。彼等の實際的政策は、建設的に非ずして虛僞であり、自己撞着であり、且つヒヨロヒヨロである。彼等の反動家共に對する鞏々しい鬪爭は、多くは、大衆の眼から、ボルシエヴイキに對する、又レニニストに對する、眞に破壞的な鬪爭を蔽はんとする爲めの欺瞞に過ぎない。

私の聲明は總括して云ふ――

吾人は第十六回コミンターン大會（第六回の間違か）に對する宣言中に於て、分派主義云々の非難に答へてかう述べた、即ち分派主義は、裏切にも吾人に强ひられた第五十八條を取消し、吾人を悔い改めたる罪人としてではなく、未だ嘗て自分等の戰旗を裏切つた事のない革命家として復黨せしめない限り、決して止まないであらうと。然も吾人は今日の最後通牒を豫見して大會に對する右の宣言中に於て斯く書いてゐるのである、『唯最も腐化した官吏のみ、革命家に對してその政治的活動を中止せよと求めることが出來る。唯最も下劣なる變節者のみ、此の種の約束を爲すことが出來る。』と。余は今以上の言葉を改變すべき何物も有してゐない。各人をしてその責任を取らしめよ。貴下等は依然として敵對者を彈壓し續けんとするか？ 吾人は吾人の責務を知るのみ。之を最後まで果すであらう。

エル、トロツキー

アルマアタ、一九二八年十二月十六日

以上が私の追放までの經緯である。追放のことに就いては、私は次信に於て語るであらう。

第二信

（コンスタンチノープル二月二十六日）

私は一切の政治的活動を中止せよと求められた時、その樣な要求は

腐敗し變化した官吏のみから出來ることが出來、又變節漢の外は何人も同意出來ないものだと答へた。私は今尚、スターリン派自身すら、此れ以外の答を豫期してゐたかどうかを疑ふのである。一ヶ月は何事も無く過ぎた、私達の外部の世界との關係は完全に切斷せられ、一九二八年の終の頃まで、政府の監視を物ともせず、アルマアタの私にモスコウやその他の中心地に於ける出來事の極めて完全なニュースを見事に供給し續けてゐた政治的同志達との違法な關係すら斷れた。

一月中私はモスコウ新聞の外一切何物をも受け取らなかつたが、新聞が右翼に對する政府の方策に就いて次第に多く報ずれば報ずる程、私達は左翼に對する攻勢をも豫期しない譯に行かない事を益々痛感したのである。それがスターリンの遣り方なのだ。

モスコウから派遣せられたオ・ゲ・ペ・ウのエヂエント、ヴォリンスキーはこの間中ずつと訓令を待つてアルマアタに留待つてゐた。一月の二十日に彼は私の所へ遣つて來た。彼の兩側を護衛して來た數名の武裝警官は直に家の入口と云ふ入口、出口と云ふ出口を占領した。ヴォリンスキーは私に一月十八日附の次の樣なオ・ゲ・ペ・ウ令の拔萃を手渡した——

市民トロツキー・レオン・ダヴイドウイッチは、最近反ソヴイエット叛亂の煽動に從事し、且つ現にソヴイエット權力に對する武力鬪爭の準備を爲しつゝある違法なる黨派を形成して、反革命的活動に對する刑法第五十八條違反の罪あるを以て、此處に市民トロツキー・レオン・ダヴイドヴイッチをソヴイエット社會主義共和聯邦の領土內より追放すべきことを命ず。

私は此の文書の受書に署名する樣求められた時、次の如く書いた——

その本質に於て犯罪的であり、その形式に於て違法なるオ・ゲ・ペ・ウの決定は、一九二九年一月二十日余に傳達された。

トロツキー

私は之を犯罪的と呼んだ、何故となれば私が武力的抵抗を試みんと準備しつゝあるとの云ひ掛りはたくまれた虛僞だからである。追放を正當化する爲めにスターリンに必要であつたこの方式を使用した事自身が、ソヴイエット權力に對して存在し得べき攻擊中の最も邪惡なるものでなくて何であらう。何故となれば、十月革命の首領連の凡て、ソヴイエット共和國並に赤軍の創造者の凡てを包含する反幹部派が現にソヴイエット權力の軍事的沒滅を企てつゝあると云ふことが若し事實だとすれば、この事實こそロシアの破局的形勢を實證するものではないか。斯くの如き場合、最も淡懷なブルジョアも云ふであらう、『ソヴイエットと急いで經濟的關係に入る必要はない。目下準備中の武力的鬪爭の結果を待てば良い』と。

幸なことにオ・ゲ・ペ・ウの方式は單に暴慢な警察の虚構に過ぎないのである。反幹部派の政策は武力的抗爭などとは何の關係もない。私達は依然ソヴイエット統治の活力と彈力性に全然確信を持つてゐるものである。

吾々の政策は内部的改革のそれである。私は此の機會に、スターリンに依つて命ぜられたオ・ゲ・ペ・ウの方式の惡影響を出來る限り防止してソヴイエット共和國の利益を保護する爲め世界に説明する。客觀的事情のみならず、効果なき逡巡の政策より來る所の内的困難が假令如何に大きなものであらうとも、ソヴイエット統治の急速な崩潰を期待する者は無駄なる失望の憂目を喫しなければならない破目に在るのだ。

オースチン・チエンバレンがこの種の錯覺を有してゐないことは明白である。若し新聞紙と云ふものが信ずるに足るものならば、特にアメリカの週刊雜誌ネイシヨンが信ずるに足るものであるとすれば、オースチンは英國とソヴイエットとの關係は、トロツキーが『銃殺される』日が來れば全く實際的となるであらうと宣言してゐる。この文句は、米國の海軍に就いて語る場合、恐ろしく來食主義者らしい言葉使をする保守黨大臣の氣魄に榮譽を添へるものである。

私は外交官の地位を有するものではないが、失禮ながら、私一個の利益の爲めにも、將又一般の利益の爲めにも、英國の外務大臣に對して、餘り字義通りに右の文句を解釋しない様に忠告申し上げる。スターリンは既に私を追放してチエンバレンの希望に添ふ用意のあることを示した。彼が更にそれ以上一歩を進め得なかつたからと云つて、それは決して御意に添ふ意思が無かつたからではない。その爲めに英國とソヴイエットとの通約關係がその影響を蒙らなければならない理由にはなり得ないものである。

私は尚國際的關係は相互主義に基くものであることを云ひ得るのであるが、之は愉快でない問題である。寧ろ止めにしやう。

吹雪中の出發

オ・ゲ・ペ・ウの命令を受け取るに當つて、私はこの犯罪性と違法性を強調した。こうする事に依つて私は市民は國を去るか刑罰を受けるかの選擇權を與へられべきもので、本人の承諾なしに追放することは合法的であり得ないと云ふ事を主張せんとしたのである。私が、『何處へどう云ふ風にして自分を追放するつもりであるか？』と訊ねた時、私は、この問題は歐露で私に出會ふ様派遣せられたオ・ゲ・ペ・ウの特殊エヂエントが傳へる事になつてゐるとの答を得た。

翌日はトランクに衣類や原稿や書物を塡め込むのに忙しかつた。私の飼つてゐた二匹のポインターは私達の靜かな住ひに非常に澤山の見慣れぬ人々がやつて來たので可成り面喰つてゐた。とは云ふものの私はオ・ゲ・ペ・ウの態度は決して敵對的ではなかつたことを述べて置かなければならぬ。

二十二日の夜明けに私の妻と息子と私自身とは自動車に乗つてヒドク雪の積つた道をクルメ山道に向つて進んだ。其處には猛烈な吹雪が荒れ狂つてゐた。クルメ山脈を越えて私達を曳く筈の強力な牽引車は曳かれる筈の數台の自動車諸共雪中に深く埋づた。七人の人間と、數頭の馬がこの吹雪の間に死んだ。私達はとう〳〵自動車を棄てゝ橇に乗らなければならなかつた、そして二十哩行くのに七時間を要したのである。道すがら私は新しいトルキスタン・シベリア鐵道建設の材料や、巡羅兵の大太鼓等々を積んだ澤山の橇が凡て半ば雪に埋れてゐるのを見た。人や馬は近くの小屋に避難してゐたのである。

山道を通過して私達は再び自動車に移り、ペチウエケ・ペケで列車に乗り込んだ。

此處で受取つたモスコウの新聞は反幹部派員の追放に就いて一般輿論を徐々に馴らしてゐることを示してゐた。私達はアクチユビンスケで電報を以て、目的地がコンスタンチノープルであることを知らされた。私はモスコウに住む私の家族の二人に會ふべき機會を要求した。その結果二人はラヤゲスクで私達に會ふ樣に送られて來て、私達と同じ樣な監視の下に置かれた。交替した新しいオ・ゲ・ペ・ウのエヂエント、ブラノフは私に流刑地としてのコンスタンチノープルがアルマアタに優る有利な諸點を思ひ込ませやうと骨を折つたが、私は斷然行くことを拒絶した。

ブラノフはモスコウへ電報した、其處では凡ゆる場合の事柄を豫想してゐたが、唯私が進んでロシアを去ることを拒絶するかも知れないと云ふ可能性だけは別であつた。私達の特別列車は別の線路へ乗り入れられ、やがて静かな小驛で止つたが、此處で私達は長い間留つてゐた。

幾日も幾日も過ぎ去つた。食料の容器は列車の周圍に堆積し、烏が群を爲して饗宴に集つた。野兎は冬季の恐ろしい傳染病に襲はれて死に絶えてゐたので一匹も居なかつた。機關車は一輛連結して一番近い大驛へ毎日食糧を取りに行つた。私達の一行は感冒に犯されて毎日毎日臥をしながら待ち暮した。

私はアナトール・フランスを再讀し、又クルチエフスキーのロシア史をも讀み返へした。

モスコウは吾々の問題を討議しつゝあつた。機關車は凍結を避ける爲めに徐やかに前後へ走り續けた。夜に夜が續き、遠くの無電局は私達の居場所のニユースを求めて空中を探り求めてゐた。私達は將棋をやり、無電局の間は聞かなかつた。假令聞いた所が私達は唯から答へることが出來ただけであらう、「吾々は夜間此處へ伴れて來られた。だから何處に居るか分らない。何處かクルスク地方の內であらう」と。

同志の追放を聞く

斯くて十二日と十二夜が過ぎた。私はその間に、トロツキー派として知られてゐる人々の外に更に數百名の同志が逮捕されたことを

聞き知つた。名前を指し示した人々の中にはゲオルギア人民委員會議前議長カヴタラヂエ、前パリ駐在ソヴイエツト通商代表ムヂヴアニ、黨最上の著述家の一人ヴオロンスキー、ウクライナ革命中の最も英雄人物の一人ドロプリスその他多數があつた。凡て黨の創設に活動し、十月革命に參加した人達である。

二月八日ブラノフはこう説明した『モスコウ政府が最善の努力を拂つたにも拘らず、ドイツは全然貴方の入國を拒絶しました。それ故私は貴方をコンスタンチノープルまでお導きする命令を受けてゐます。』

之に對して私は、自分が決して進んでコンスタンチノープルに行くものでない事を答へ、トルコの國境に到着したら矢張その通り宣言すると述べた。ブラノフの返事はこうである、『と云つて、貴方がトルコへ行くと云ふ決定には何の變化もありませんよ。』

『君はトルコの官憲と一緒になつて、本人の意志に反してまで我が輩をトルコへ伴れて行かうとするのか？』

『それは知りません、吾々は唯訓令に從つてゐるだけです。』

この樣にして十二日間靜止してゐた後私達の列車は動き始めた。列車は少し長くなつてゐた、と云ふのは吾々の護衞が増したからである。私はピシユベカを立つてから後は自分の車輛を離れることを許されなかつた。私達は全速力で南へ走つた。停車は唯水と燃料とを補給する爲めに小驛で行つただけである。こうした極端な用心は私が一九二八年の一月初めて追放される時モスコウの停車場で起つたデモンストレイシヨンの爲めである。あの時群集は列車の出發を妨げ、私は翌日迄、秘密に送り出されることが出來なかつたのである。

政府部內の不一致

新聞はトロツキー派に對する更に新しい大彈壓のニユースを傳へた。其等の記事の行間に私達は、私の追放に就いて政府部內にも大きな論爭のあることを看て取ることが出來たのである。スターリン派はあせつてゐた。彼等は單に政治的難關ばかりでなく、打ち勝つべき物理的難關にさへも直面してゐたのだ。

汽船カリーニン號が私を載せる命令を受けてオデツサに碇泊してゐたが、凍り付いて動けなかつた。モスコウは極めて急を要することを主張したが、何隻もの碎氷船もカリーニン號を自由にすることが出來ない。とう〳〵汽船イリイツチ號が用意された。列車は二月十日の夜オデツサに到着した。私は窓から見慣れた景色を眺めた、と云ふのは子供の時分此處で七年を過した事があるのである。

車輛は波止場に横着けとなつた。猛烈に寒い、眞暗な夜だつた。が、私は波止場がオ・ゲ・ペ・ウと兵隊で一杯になつてゐるのを見ることが出來たのである。

此處で私は二週間の孤獨を共にして來た家族の二人に別れねばならなかつた。私は列車の窓から船を認めた。そして嘗て私達を氣の進まぬ目的地に運んだ今一隻の船を想ひ出さざるを得なかつたのである。

それは一九一七年二月、ハリファクスでの事であつた。英國の水夫達は、私がクリスチャニア（今のオスロ）とペテログラード（レニングラード）に行く爲めに必要な一切の書類や査證を持つてゐたにも拘らず、船乘の面前で私をノルウエイの汽船クリスチャンスフオード號から移したのだ。私の家族はその時も同じだつたが、今よりは十二年若かつた。當時十一才だつた私の長男は、私が漸く止めるまで、拳固で英國の水夫を毆り付けた。その樣にして私はペテログラードへ行く代りに一ヶ月間もアムハーストの收容所に留め置かれたのである。

イリイッチ號は貨物も他の乘客も乘せないで朝一時にオデッサを立つた。六十哩の間はその前を一隻の碎氷船が走つた。嵐は既に次第に衰へ掛けてゐたが、私達は時折不意打を喰ふこともあつた。そして二月十二日に私達はボスポラス海峽に入つたのである。私は、豫め私達の到着を知らされてゐたトルコの大統領に、私が自分の意思に反して此處に伴れて來られたものである事を述べた宣言を手交した。しかし此のステイトメントは何の效果も無かつた。二十日と四千哩の旅行の後私達は遂にコンスタンチノープルに上陸したのであつた。

第三信

（コンスタンチノープル二月二十七日）

如何にして起つたか？　それが問題である。答は二つの方法に依つて提出することが出來るであらう。孰れも支配團體の間の鬪爭の內的機構を述べ、或は更にもつと深く根差す社會的諸勢力を明かにするものである。この二つの方法は互に補足し合ふものであり、互に排他的なるものではない。勿論諸君が、發生したる事件を——如何にして支配の特殊的變化が起つたか、如何にしてスターリンが統治機關を占領し、之を排他的に指導する所まで漕ぎ着けたか——を正確に知らうと希望するならば、それには兩方の遣り方で答へる必要がある。

階級諸勢力の集群的再配合並に革命諸段階の進展と云ふ本質的問題に比べれば、單なる集群離合の問題は比較的興味の薄いものである。それにも拘らず凡ての釣合を考慮するとすれば、この問題も矢張り意義があり、論じない譯に行かない事となる。

スターリンの分析

スターリンは何者であるか？　最も簡明な答はかうだ、彼は我が黨の最も秀でた通常人である、と。彼は自分の目的を追求するに當つて實際的感覺と、節度と、そして不拔な忍耐心とを有してゐる。彼の心意は、政治の觀點からすれば、寧ろ狹陋である。理論上の能力に於ては、彼の知識は限局されてゐる。彼がその中に於て黨の諸理論に對して讃仰を捧げやうと企てた小著『レーニン主義の諸原理』は實に學校生徒の誤謬に滿ちてゐる。彼は外國語に無智な爲めに——彼は一ヶ國語も知らない——已むを得ず外國の政治生活に就いての知識を凡て聞き傳へに倚賴らざるを得ない。

全く彼は實際的政略家である。創造的想像力もなければ、黨外の經驗もない、彼はより賤い分野に在つては完全に知られてゐないのである。彼は常に第二次的役割を演ずる人物の如く思はれた。彼が今日指導役割を演じつゝある事實は決して彼の人物に對する讃辭になるものではなく、寧ろロシアが現に達してゐる過渡的な不安定の狀態に對する非難になるべきものである。ヘルヴエチーは云つてゐる、『凡ての時代にはその時代の偉人がある。若し生れてゐなければ時代が之を造る。』と。

凡ての實際的政略家と同樣にスターリンもまた矛盾だらけである。彼は一貫した達識なく衝動で行動する。彼の政策はジグザグの道を走る。彼はどの形勢にでも應じて之に當て嵌る理論を即製する。或は他人に即製することを求める。事實並に人間に對する彼の態度は度放れに思慮の缺けてゐる事が特徵だ。私は唯一つの例を引くことにする。讀者はこの例が私自身に關聯した事であるとしても寛恕されることと思ふ。スターリンは最近數年間を全く、所謂『トロツキーの王位を奪ふ』ことに費して來たのである。

この目的の爲めには全然新しい十月革命史を、又新しい赤軍史を或は新しい黨の歷史を組み立てることが必要であつた。スターリンは一九二四年十一月十九日に、『十月革命に於て、或は黨に於て、トロツキーが演じた特別の役割と云ふものはない』と宣言して、右に述べた價値の一般的再評價に對する合圖を與へた。彼は凡ゆる機會に於て此の確言を繰り返へしてゐる。

或る者がスターリンに、彼自身革命一週年記念當時書いた論文を指摘して注意を促した。この論文に於てスターリンは次の如く述べてゐる、

『十月叛亂の實際的組織に關する凡ての仕事は、ペテログラード・ソヴイエット議長レオン・トロツキーの直接指揮の下に行はれた。黨は營舍をソヴイエットの側に迅速に引渡す保證や革命委員會の賢明な組織等に就いて、凡てトロツキーに負ふ所があると積極的に誌すことが出來る』

彼は自働人形

スターリンは如何にしてこの困却すべき自己撞着から脫したか？極めて簡單である、更に多くの侮辱をトロツキーに投げ掛けることに依つて。その他數百の例證を擧げることが出來るのである。

スターリンのジノブイエフ及びカーメネフに對する非難も又同じ樣に矛盾してゐた。スターリンが遠からずしてルイコフ、ブハーリン及びトムスキー等に、反幹部派が之まで云つて來たと同じことを、スターリンが讒誣だと稱して來たと同じことを、然も最も激しい毒舌を以て云ひ始めるであらうことは極めて確實である。

どうして彼はこんな矛盾だらけな事を大膽にも云ふであらうか？事實は彼が演説したり論文を書いたりするのは敵が應酬の機會を全然

奪はれてゐる場合に限られてゐるからである。スターリンの論爭は要するに彼の組織の機構が、少し遲れて反響してゐるに過ぎないのである。スターリンは要するに一個の自働人形である。

レーニンは自ら稱して遺書と爲したもの丶中に於てスターリンの特性の二つを特記してゐる、それは粗暴と不公明である。しかしこの特徴が充分現れて來たのはレーニンが死んでから後やつとであつた。スターリンの主なる仕事は黨の內部的爭に出來得る限りの毒々しさを傳へ、斯くて黨を分裂に直面せしむるに在つた。

レーニンは既に一九二二年當時、早くも黨にから警告してゐる、「彼は何でもかんでも胡椒の中に打ち込む料理人である。」反幹部派が武力闘爭の準備をしてゐると誣ひたオ・ゲ・ペ・ウの令も、決してスターリンの作つた恐ろしく胡椒の利いた料理の唯一の例ではない。一九二七年七月卽ち、反幹部派がまだ黨の內部に限られてゐて依然官職を維持してゐた時分、スターリンが突然質問を發した事がある。

「ソヴイエットの來るべき帝國主義との闘爭に於て反幹部派がソヴイエットを支持しない機會の來る事が有り得るだらうか？」

この樣なあてつけに微塵も根據のない事などは云ふ必要もあるまい。だが料理人は當時既にその傑作、第五十八條の調合最中だつたのである。私は反幹部派のソヴイエットに對する態度は國際的重要性を有するものであると考へるが故に、當時私がスターリンの設問に答へた演說中の拔萃を此處に引用することはソヴエイット共和國の利益の爲めに缺くべからざることであると信ずる。曰く、

「吾々は設問の無禮さを無視しやう。或はスターリンの性格に就ての レーニンの言葉を想起しやう。で吾々は此の設問を有るが儘に受取り、之に答へることにする。白衛軍以外の何人も帝國主義に對するソヴイエットの勝利に反對し得るものはない。だが、スターリンの眞に意味する所はかうだ、「反幹部派はスターリンの指導が勝利を確保する大任に堪えないと信ずるか」と。吾々は「然り」と答へる。吾々はスターリンの指導は勝利を一層困難ならしめるであらうと考へてゐるので、反幹部派の黨員は一人殘らず前線でも後衛でも黨が割り當てた通りの部署に就く決心だ。しかし一人だつて黨の政策の改善の爲めに働く權利を抛棄するものではない。かるが故に若し社會主義國家に贊成かと訊かれたら、吾々は「然り」と答へる。若しスターリンの政策に贊成かと問はれたら、「否」と答へるのだ。」

今日は狀態も幾分變つた。しかし此等の原則は今尙吾々の持するところである。

テロリストの讖語

吾々がソヴイエットに對する武力抗爭の準備を行つてゐるとの云ひ掛り、並にソヴイエット統治の防衛に冷淡であるとの云ひ掛りに關しては、私は今一つ、スターリン派テロリストの料理した素張らしく味の強い御馳走を上げなければならない。コンスタンチノープルに近い

た場合に私の述べた様に、トロツキー派の一部の者がテロリスト的方策を企圖中であるとの風評が世界中の新聞紙に現れてゐた。

私はアルマアタからの書簡中に於て、自分の同志達に對して、スターリンが當時取りつゝあつた方針から判斷すると、彼は間もなくトロツキー派はテロリズムを企圖中であると誣ひる事が必要な事を悟りそうだと警告して置いた。反幹部派が武裝的叛亂を起すに足るだけの充分經驗を積んだ革命家達の參謀本部に依つて指導されてゐると何人かに信じさせる如きは殆んど不可能と云つて良かつた。しかしトロツキー派の小さな集群に關して、テロリスト的目的を有してゐるものだと誣ひる事は遙かに易しい事柄だつたのである。之れは明かに今日スターリンの努力が取りつゝある方針である。私がこの事實を發表したからと云つて必ずしも人民に此の糸を瞰下させやうと云ふスターリンの仕事を不可能に陷れるものではないであらう。しかし幾分之を妨げることは出來るに違ひない。私が發表する理由も又それである。

スターリンの戰術は一九二六年私をして政治部の會合の時から彼に語らざるを得ざらしめた、彼は益々墓掘りの仕事の──黨と革命の墓掘りの仕事の卓越した候補者になりつゝある、と。私は今日以上の警戒を更に二重の堅さを以て繰返へす。

しかしながら或る反幹部派は、スターリンが黨に對してではなく、黨が最後にはスターリンに打ち勝つであらうと信じてゐる。

第四信

（コンスタンチノープル二月二十八日）

スターリンは一九二一年、レーニンがまだ生きてゐる内に黨の幹事長に選任せられた。當時この地位は殆んど純然たる技術的なものであつた。それにも拘らず、當時に於てさへ、レーニンはスターリンを候補に立てることに反對であつた。しかしレーニンも此の點では、幾分躊躇しながらも政治部の他の部員に讓つた。

「先づあの男を試して見やう。」

レーニンの病氣に依つて事情は全く變化した。その時まではレーニンはポリツトビユーロー（黨中央委員會政治部）を主宰し、黨の一般指導を行つてゐた。スターリンは幹事長として單に中央委員會の仕事の執行方面のみを委任せられてゐるに過ぎなかつた。所が他の各員は各各特殊の職能を持つてゐたので、レーニンの病氣は忽ち中央の指導をスターリンの手に移して了つた。しかしほんの一時的にと云ふ譯であつた。黨でもレーニンが間も無く恢復するだらうと見込を付けてゐたから恒久的な移動を行ふと云ふ様な問題は無かつた譯である。

レーニンの最後の病臥

その間スターリンは[illegible]みの様に活動し、黨の凡ゆる重要な地位に自分の味方を据えた。レーニンが最初の發作から恢復して仕事を見

だした頃までには、官僚主義は充分根を張つて、スターリンは黨の大衆に對して大勢力を獲得してゐた。レーニンは私が彼の後を襲つて人民委員會議々長たらんことを固執し、スターリンの官僚主義と闘ふ方法を私と協議した。吾々の目的は左程の葛藤なしに此の目的を達すると云ふ點に在つた。

しかしレーニンは再び病氣に襲はれた。一九二三年一月四日書かれた所謂遺言なるものに於て、レーニンは再びスターリンを黨の指導的地位より除くことを強く勧告してゐるが、その理由とする所はスターリンが率直さに缺けてゐること、及びその權力を濫用する傾向のあることであつた。だがレーニンは再び床に就かなければならない事になり、スターリンが重ねて臨時的指揮を行ふこととなつた。レーニンが快復するであらうと云ふ望は急速に衰へて行つた。彼が居なくなるかも知れないと云ふ見込は後任の問題を提起した。當時に在つては未だ意見の根本的相違と云ふものは現れてゐなかつた。が、ジノヴイエフ、スターリン及びその一黨の標語は、『トロツキーを支配權から遠ざけろ』と云ふに在つた。

その後ジノヴイエフとカーメネフがスターリンと決裂した時、當時の秘密は陰謀に參加した人々自身に依つて明かにせられたのだ。と云ふのは之こそ眞に一の陰謀であつた。一の秘密の政治部が、(セミオルカと他に七人の部員を以て)創設せられたが、それは私自身を除く外全部の公式政治部員を包含し、その上更に現全國最高經濟會議々長クイビシエフをも加へたものであつた。

唯一目標はトロツキー

凡ての問題は、豫めこの秘密政治部に依つて決定せられ、部員ともその決定を支持する協定が出來てゐた。彼等は更にお互同士の間では論爭しないこと、同時に私を攻撃する爲めには凡ゆる口實を捜すことを約束してゐた。黨の地方的各組織も又類似の秘密政治部を持ち、セミオルカと密接な關係を結び、鐵の如き規律に縛られてゐた。彼等は通信用の秘密暗號さへ有してゐた位である。

此は黨内に組織せられた運動の團體であり、然も唯一個人に對して向けられたものであつたのだ。黨並に政府の責任ある地位に任命される人物に當て嵌めて見るテストは、『トロツキーに反對かどうか？』と云ふことであつた。レーニンが病氣の長い空位中この鬪爭は絶え間なく續けられてゐたが、しかしレーニンが恢復した場合は地雷を埋めた橋が相變らずその儘に見える樣に、實に注意深く秘密にやつてゐた。陰謀者等は慾得づくの雇人さへも使用した。各種の地位の候補者は當人に要求されてゐる事柄を『推測する』ことを求められてゐた。若し『推測す』れば、その人は必ず昇進する。その後『反トロツキー主義』の名を貰つたのは此の特殊な依怙贔屓主義なのである。

レーニンの死はこの陰謀に自由を與へ、公然と立ち現れる事を許容した。

この腐化的陰謀に抗議した黨員は、凡ゆる口實の下に、時として想像的口實の下に於てさへ、不信極まる惡性の攻撃を蒙つた。一方ソヴイエツト治下の最初の五年間は絶えず放逐の危險に曝されてゐた黨の道徳的虐殺者は凡ゆる機會を捕へてトロツキーと意見の疎隔を來し、放逐等の處分に對する一種の保證を贏ち得た。同じ戰術が一九二三年の終以來ずつとコミンタンを組成する各黨の中に於て追求されて來た。

或る指導者等は卻けられ、他のものがその後に代つた、凡てトロツキーに對する態度に基いてである。選擇は才能に依つてではなく適應性に依つて決せられた。黨の一般政策は獨立有爲の人物の代りに、上長に從順な凡庸の士を置き換へると云ふに在つた。

スターリンはこの凡庸の權化となり、最高の表現となつた、黨の役員の四分の三がこの方法に依つて選ばれて了つた一九二三年の末頃には、鬪爭は平黨員の間にまで押し進められた。凡ての出口は警護され、唯攻撃の合圖を待つばかりであつた。

彈壓開始さる

やがて合圖は發せられた。最初に二つの討論が私に向けられた。即ち一九二三年の秋と、一九二四年の秋である。然も兩方の場合共私が何の會合にも出られない病勢の際と時を同ふした。同時に中央委員會からの壓迫に依つて到る所平黨員が攻撃の用意をした。古い記錄から私とレーニンの昔の意見の相違點まで引き出されて來た。その相違點と云ふのは革命どころか大戰よりも古いもので、二人の共同鬪爭に依つて旣に久しい以前に帳消しにせられたものであつた。それが今となつて變形せられ、敷衍せられて、最も焦眉の興味ある事件として黨に對するメッセイヂ中に盛られられ、何も知らぬ人々に提供された。

大衆は吃驚し、狼狽させられ、また脅し着けられた。人員選擇の方法は更に一般低下した。今やトロツキーに對する嫌惡の感情を少しでも仄かさない限り、工場の支配人に任命され、或は商店委員會の書記に、地方コンミユーンの議長に、簿記係りに又はタイピストにさへ任命されることは不可能となつた。

私は出來得る限りこの戰に參加することを避けた、特に之は自分の一身に對する規律なき陰謀に過ぎなかつたからである。私に取つては、この種の戰が一度び開始された以上不可避的に極めて激化したものなり。プロレタリア獨裁の狀態の下に於て、危險極る結果を齎すに違ひないと云ふ事は明瞭であつた。

私は、大きな個人的犧牲の價を拂つて黨の統一を維持しやうと試みたことが正しかつたかどうか、將又充分重要な原理が危殆に瀕してゐる譯ではなくとも、飽く迄攻勢を執るべきであつたかと云ふ問題を此處で論議する譯に行かない。唯事實は私はその前者を擇び、その後起つた凡ての事柄にも拘らず、今尚之を後悔してゐない事之れである。或る種の勝利は新しい窮地に導く、或る種の敗北は新しい大道に向つ

て開ける。私は態々、單なる陰謀を遥か背後に押し遣つた、深い意見の相違が現れて初めて紛爭を原理の討議の限界內に止めて相反する意見並に豫言の價値を體驗に依つて試みることに努力したのである。

　他方に於て、ジノヴイエフ、カーメネフ及びスターリン――ジノヴイエフは最初の程は用意深く他の二人の背後に隱れてゐた――は全力を注いで鬪爭を押し進めた。彼等は黨に慫慂して經驗に依つて孰れが正しいかを見分ける時を與へやうとしなかつた。ジノヴイエフとカーメネフがスターリンと決裂した時、スターリンは兩人に對して、三人が共に過去三年間トロツキー主義に向つて注いだと同じ兇猛な精力を用ひたのである。

スターリンの凱歌は永續すべきか

　以上はスターリンの戰勝の歷史的說明ではない、單に彼が勝利を占めた遣り方の早急な記述に過ぎないのである。私は自分に向けられた陰謀の泣言を列べんとするものではない、自己の政策の敗北を敵中の陰謀の責に歸しなければならない樣な政策は、盲目の政策である。陰謀は或る意味で云へば實務のテクニックである――その役割は必然的に第二次的なものだ。

　大きな歷史的問題は大きな諸社會力に依つて解決される。

　あの優柔不斷で移り氣なスターリンの勝利は革命社會に於ける諸階級の關係の上に起つた廣汎な變化を實證するものである。それは過去數年間に於ける國際狀態の一の反映に過ぎないのであるか、此等の諸問題の全豹となるとより詳細な取扱を要する別個の主題となるのである。

　目下の所私は單にかう云つて置かう、世界の新聞界が犯した凡ての錯誤並にソヴイエットの內部鬪爭の各種段階解釋に就いての凡ての混亂にも拘らず、又そのボルシエヴイズムに對する敵對にも拘らず、本質的な社會的核心を把握する點に於て、それは大體正しかつた。スターリンの勝利は比較的穩和な、保守的な、官僚的な、そして國權的な諸傾向並に私有財產制の朋黨の、世界革命及びマルキシズムの傳統に對する勝利である。故に私はブルジョア新聞界がスターリンの現實主義を口を極めて稱讚しても何等抗議すべき理由を有しないのである。

　唯彼の勝利がどれだけ長く續くか、又將來の事態は如何なる方向に向つて進むかと云ふことは全く別な問題である。

（本篇はトロツキーのコンスタンチノープル到着後最初に米國の新聞紙に打電した四回に亙る通信の全譯である。原文はロシア語、以上はニューヨーク、タイムス紙に據る――譯者）

改造社創立滿十週年記念會

花盛りの四月十日午後五時半より、本社創立滿十周年記念祝賀會は、丸の内東京會館に於て行はれた。政界、思想界、實業界、文壇、操觚界等の諸名士六百餘名に社員を打交へ空前の盛況を呈した。かく、現代日本文化の各方面の代表者達の一堂に會せられたことは、獨り我社のみの擔ふ光榮である。

會は、樂壇の明星永井郁子女史の獨唱によつて始まつた。女史は各國民謠五曲と、三味線の伴奏による「御詠歌」、「朝顔の唄」など得意の名曲を以て、來會者一同を先づ樂しい記念會の雰圍氣に導き入れた。それより宴會に移り、一同歡を盡してデザート・コースに入るや山本社長は萬雷の如き拍手を浴びて立ち上り、別項の如く創業十年に亘る感慨深き言詞と經綸の跡を辿り、更に將來への大抱負を率直に直截に述べ、本社としての歴史的シーンを展開した。言々句、熱意に溢れ、一大感銘を與へた。

次に鎌田榮吉氏來賓を代表して別項の祝辭をのべ、引きつゞいて團琢磨氏斡旋の下に、卓上演說に移り床次竹二郎氏、長谷川如是閑氏、堺利彦氏、菊池寬氏、最後に德富蘇峰氏が、夫々懇篤なる祝辭を述べて下さつた。そして帝國電報通信社長光永星郎氏の發聲の下に、萬歳を三唱した。

かくて、盡きぬ感激の中に、九時過ぎ散會した。

挨拶

山本實彦

本夕は御多忙の折にも關らず本社に心を寄せて下さる多方面の方々の御來會を辱ふし感激の至りにたへません。私は改造社全員を代表して厚く御禮を申上げます。改造社の事業につきましては各位既に御承知のことと思ひます。私どもが大正八年三月――四月三日の名において――帝都の一隅に其存在を宣してから本月で滿十年になりますのでその間の感慨を茲に一二陳べて我々の執つた行動が果して社會進展のために、何等かの寄與を遂ぐることができたか、嚴正なる御考慮を煩はしたいと思ひます。ただ私どもは才も眞面目に自分の正しいと思ふと信りを歩いて來た、そして社會本流の認識において誤りなかつたと思ふ。單に我々が左樣に思ふのみでなく客觀的にも我々の行動を肯定

されてをることと思ひます。私どもはいろいろの意味で過渡期のあらゆる運動を迎へ戰はねばなりませんでした。思想的に、政治的に、經濟的に、そして出版革命のために――。その各方面の難關を突破すべく私共はあまりに多忙であり、あまりに孤立無援でありました。そして富と權勢に無緣でありました。この光榮ある孤立あればこそ我々の力は一難ごとに加はり、そして正義感は權勢に打ちのめされるごとに磨かれて行きました。私どもはどんな壓迫、迫害の中においてもヂャーナリズムの正道を忘れませんでした。いぢめられてひがまぬやうに。そして國家、大衆の成長に對しいつも温か味を以つて接して行くことを忘れませんでした。そして我國の解放運動の第一期に於いて我々は不敏ながらそれぞれの役割を遂げることができたことを信ずるものであります。これすべて各位の良心からの御援助によるものと信じ、ここに滿腔の敬意を表するものであります。

私どもは今後雜誌「改造」においては特に東洋の解放を主要の題目とし、そしてその正當なる解決を見るべく强く主張せんとするものであります。勿論我國の社會、經濟諸方面の正常なる發展のために努力するは勿論です。又我社は雜誌改造及出版物を通して文藝、美術、科學その他に對しましては新たなる躍進を期し、我大衆の徹底的批判力の涵養に倍舊の努力を拂ひたいと思ひます。來賓各位は本社の意を諒とせられ今後に於きましても一層の御援助を賜はりたいと思ひます。實際我社は今日では漸く礎柱が成つたばかりで、其の私どもの事業はこれからでありますから。今夕は粗酒野肴何等の備へもありませんが、どうかこの氣分のいい春の夜をゆつくりお寛ぎ下さらんことをお願するものであります。

祝辭

福田德三

私が御指名になりまして、床次、德富兩先輩を差措いて若輩の私が甚だ僭越でありますが御挨拶を申上げます。

東京會館は、私は是で二回參ります。先度は德富先生の國民新聞社をお退きになりました慰勞の爲の會として、やはり多數の方がお集りでありました。今晩は改造社長山本君の御招待であります。先度の會は私に取りましては悲しみの會でありました。何となれば私共は明治二十二年國民の友第一號、明治二十三年國民新聞第一號以來の愛讀者でありましたが、今はもう愛讀者ではありませぬ。一月の幾日か德富先生が退社の辭をお書きになつたのが載つた新聞以來、十日分ばかりの新聞代を損をしてもう讀みませぬ。それまでは三十何年間、西洋へ行つて居つたこともありましたが、新聞を西洋へ送らせて讀んで居つた。其の國民新聞から德富先生が去られると云ふことは、是はどんな辭を以てしても私には悲しみの會であつたのであります。ところが今

日は其の反對に、改造社が、國民新聞の三十何年に比べては三分の一ではありますが、兎に角十週年と云ふお祝ひの爲に集ると云ふことは、私に取つて甚だ愉快なことでありまして、曾ては悲しみの場としてこの東京會館に來た者が今日は悦びの場たる東京會館に來た譯であります。

ところが丁度席を並べて居られる德富先生と山本君と對照して、甚だ面白い比較を見出し得ると思ふ。德富先生について私が申上げたいことは日本の新聞は大農場式――それが資本的であるかないかは別として大農場式になつてしまつたが、國民新聞だけは自作農であつた。德富さんが自ら田を所有して田を耕して居られた。それが五反百姓でなく何百反百姓と云ふ大きな農場を自ら耕されて居つたが、私は自作農と云ふものは餘り大きくなると滅びるものであると云ふことは、世界の經濟史に明であると思ふ。是は前途甚だ危いと豫て思つて居つたが、果して德富先生はその自作農たることを止められた。斯う云ふことを此前も申上げましたが、當時悲しみを以てお送りした所の德富先生は今日は東京日日、大阪毎日と云ふ日本で一ばん大きな新聞に於て、非常に厚い禮を以て迎へられ、社賓となられた悦びの德富先生を迎へることが出來るやうになつたのであります。併し德富先生の資格は全然變られた。先の自作農が今日は――工場勞働者ぢやないけれども、併しながら大きく分類すれば工場勞働者の方へどつちかと云へば入る――におなりになつた。即ち復活せられたのである。

ところが山本君は德富先生と違つて、終始自ら筆を執らす、自ら田を耕さぬのであるが、飽までも開墾して盛に移民を入れ、又盛に植民を迎へ、各ゝ能を盡さしめて今日の大、今日の盛を爲したのである。私から見れば同じ農場の經營としても、德富先生と山本君とは全然違つた行き方をされたのであると思ふ。日本に於ける此二つの事實、即ち一方は日本の新聞界に於ける唯一の自作農を去られたのである。是は吾々から見れば、今日德富先生が國民新聞を捨てられたことは、どこまでも日本の筆政界の不幸と言はざるを得ない。この不幸を見るやうになつた日本の最大の自作農新聞記者が滅びてしまつて、而して又今日の東京會館に於て、吾々は、初めから小さな田を持つて、それを擴張して、有ゆる方面の有ゆる智識、有ゆる思想を持つて居る者、有ゆる文明の範圍の基礎の者を、悉く呼び迎へて、其の能を盡さしむるところの『改造』を經營し、今日の十週年記念に至つたところの山本君の客となつて、さうして今夕の歡を共にするは、私に取つては實に感慨無量たらざるを得ないのであります。どう云ふ行き方が今後の日本の筆政界を支配するやうになるかは分りませぬ。併ながら德富先生の後を追ふてゐる者が若しあつたとしましたならば、德富先生のこの一つの例に依つて、或はそれ等の方には失望落膽せられたか知れませぬが、山本君の爲された改造社の仕事に依つて、確かに吾々は日本の言論界に於て一つの新しい例が開かれたと思ふ。

改造社に於ては出版事業の上に於ては、尙ほ今後着々計畫されると

云ふことであります。私自らは『改造』が始りました殆どその當初から、つまらないものを載せて戴くところの光榮を持つて、今日まで來たのでありまして、殊に縁故を深く持つてゐることを感じてゐるのであります。德富先生にお目にかゝつたのは割合に稀でありましたけれども、國民の友第一號からの愛讀者であり、山本君に對しては『改造』の始まる時からの友人の積りで私は居るのであります。この日本の筆政界の二つの違つた行き方を吾々の前に示された所の兩氏を中心にして、今夕、或は間接か、或は直接か、兎に角いろ／＼な意味に於て、いろ／＼な方面に於て日本の言論筆政に關係してゐる者が、斯く多數集まると云ふことは、私は確に日本筆政界の一つの記すべきことであると思ふのであります。

此の機會に於て、床次先生も居られることであるし、是非諸君にお願ひをしてお考へを願ひたいのは、出版法、新聞紙法を根本的に改正することに依つて、改造社が過去に於て嘗められたところの苦艱を、今後德富先生の後を追ふ者と山本君の後を追ふ者とを問はず、嘗めしめざらしめるやうにしたいと思ふ。改造社に對する註文もいろ／＼あるでありませうが、それは段々に行ふことが出來る兎に角出版法、新聞紙法の根本的改正を行つてもつと自由に——大抵な言論が日本に裏つたところが、決して國家の根本など動くものでない。日本と云ふ國は其點は大丈夫な國であると云ふ確信を私は持つて居る。出版法、新聞紙法を根本的に改正すると云ふことは吾々筆政に關係あるものゝ、一つの大きな務として、是非日本の輿論を作りたい。又床次先生のやうな政界の先達となつて居られる方は、吾々の聲に十分耳を藉されて着々實現して戴きたいと云ふ希望を述べて、甚だ蕪雜な言葉でありますが、馬場君の御指名に隨ひまして改造社に御禮の言葉を述べ、幸ひこゝに盃がありますから、諸君と共に盃を擧げて改造社の萬歲を三唱したいと思ふのであります。（拍手）（萬歲三唱）

感想

床次竹二郎

只今、滿場に徹底せぬから椅子に立つてと云ふ聲がありますが、私の聲は大概聞える積りであります。但し申上げることはお聽き取り下さるやうなことを申上げる考を持ちませぬ。私共は斯う云ふ文筆の社會には全く素人でありますから、意見を申すでなく、唯々お慶びを申上げます。

改造社が只今承ります通り、尠からざる困苦に堪へ、今日の盛運を招來せられたその御努力に對して、深く敬意を表し、又將來の方針に付ても、今承りまして如何にも我が文化に御貢獻下さることを感謝申上げる次第であります。福田博士から私も政治界に居る一人として御注文がございましたが、このことは確に記憶致しまして、何れ獨り福

田博士ばかりでなく、他の方の御議論もありませう。さう云ふ點は衆議を集めて決したが宜からうと考へて居ります。

私は此の場合、山本君に對して二十年來の知己でありますから、それに付ての所感を簡單に申上げて見たいと思ふのであります。山本君と私共とは二十年以上の知合ひであります。その當時は二十幾才でありまして、今日の如く相變らずにこく／＼した、人好きのする人相であつた。目先も中々よくきくのであります。素より大努力家であられた。屈すべからざる大志を懷いて居られるものと見て居りました。二十年餘りと云へば隨分短からざる時でありますが、併し一方から見れば極めて短い時である。即ち吾々共の如く何等爲す所なく、碌々暮して來た者は、過去を顧みて全く夢の如くで僅の時であります。この時間の間に十年經つて改造社を起し、その改造社が今日の盛運を持ち來すと云ふのに付ては、如何に山本君が大努力家であるか、經營の才を持つて居る人であるか、如何に文筆に依つて我國に貢獻しやうと云ふ大志を持つて居る人であるか、と云ふことは之に依つて十分に證明されるのであります。私は深く山本君の御努力に對してお慶び申上げる次第であります。

併ながら玆に、唯々全然お慶びと云ふよりは、何となくまだ滿腹ではない——失禮ながら、さう云ふお慶びの考を持つて居るのです。即ち君の大志から見れば、今日はまだ蓋し緒口ではないかと思ふのが一つである。內容は如何なることか知りませぬが、先程のお話を承つて見ると、隨分社の經營も、決して是で御安心とはまだ行かないのぢやないかと思ふ。火の車では勿論あるまいと思ふけれども、十分とは申されないからうと思ふのであります。それに只今ここでもお話がありましたが、山本君は今年四十五になられる。是からが本當の仕事の成就する時である。蓋し社の內容を充實し、その基礎を强固にすると云ふのは是からのことであらうと考へるのであります。德富先生は、今日までの君の成功を祝する。併しながら、自分が希望する所は、どうか政治界に足を踏出さぬやうにして與れぬかと云ふ御注文であります。私は君の如き人が出られて、政界に來て下されば宜いと思ふのでありますけれども、併ながら是は文筆界の長老たる德富先生の言ふことに聞くのが本當であらうかと思ひますが、其點から申しても君の事業は未だ半であるやうに考へます。私は益々是から實力を充實し、さうして基礎を强固にせられて、社會の爲にお盡しあることを。其時は滿腹の慶びを以て祝盃を擧げたいと存ずるのであります。

それに私に此席をお與へ下さつたのは、蓋し同鄕であるからと云ふことでお與へ下さつたかと思ひますが、さうすれば矢張りさう云ふ狹い考からも一應慶びを申上げて宜いではないかと思ふ。少々皆樣にはお氣の毒かも知れませぬけれども、私共之を手短に、一口に申せば吾々は世の中から藩派と見られて居る者であります。然るに此の藩派の努力なるものは、日に／＼衰亡に傾きつゝあることは、どなたも御覺下さる所である。（ノー／＼）ノー／＼と仰つしやる方は、殊に私共

む強くは思ひますが、實際はさうはいかない。其間に立つて、未だ年歯に富んだ山本君が、今日其の大志の一部分の梯子段に足を踏み上げて、大に頭を擡げんとせられつゝあると云ふことは、私共臨派としては大に氣丈夫に思ふものであります。（拍手）此方だけは大にお慶びを申して止まぬ所であります。

私は簡單にお慶びを申上げて是からの御成功を祈ります。（拍手）

感想

長谷川　如是閑

私の聲は大抵聞えない積りであります。

鎌田君はここへ二度來られたと言ふが、私も二度來たのです。一遍は友達に連れられてあちらですき燒を喰つたのであります。こんな立派な御馳走を喰ふのは初めてゞあります。又お喋舌りをするのも生れて初めてであります。何を言つていゝか分らない。皆さんがお祝ひを申上げると云ふのでありますけれども、私は言ふことが下手で、お祝ひの積りで申上げたことがまさか弔ひにはならないが、お祝ひの積りで惡口を言つたり、お世辭の積りで言つたことが聞き苦しかつたりして非常にまづいのでありますから或はお祝ひにならないか知れませんが、何かしら一つ言を凌ぎます。

私が山本君と知合になりましたのは改造を始められてからでありますが、其前に不思議と屢々山本君に付て耳にして居つたのであります。初めて耳にしたのは今から二十年程前でありますが、其の時分山本君が東京市の一級市會議員になられた時であります。私の友人で山本君を知つて居る人がありまして、山本實彦と云ふ人は、非常な才幹を持つた人物で、最年少を以て東京市會議員に當選した。末恐ろしい人物である。と云ふやうなことを言はれたのでありますが、其後餘程久しく經つて、山本君が改造を拵へられてから會つて見ると、非常に感じが好かつた。何處か恐ろしいとは思ひませぬでした。けれども末の分らぬ人で、恐ろしいのぢやないだらうと云ふやうな氣分がしました。さう云ふ風に恐ろしからうと思つた人が恐ろしくなかつたのであります。

改造を創められた時に、ちよつと之を見て、日本を改造するらしい。が、後ろの方に改造するのぢやないかと云ふ風に感ぜられました。今の山本君の話を聞いて分りましたが、四年後に改造を拵へ直して、本當に改造して初めて非常な賣高になつたと云ふやうなお話を承つたのであります。私が山本君とお知合ひになつたのは、改造を改造された四年後のことであります。其の時分に私は山本君に會つて、今まで聽いた印象のことをちよつとお話したことがありました。その時の話は忘れましたが、其前に山本君のことをいろ〳〵伺つてゐるのに、山本君と云ふ人は、非常に派手にやつて、やり出すと締括りのない人

で、何をやつても續かない。東京市の市會議員も直きに止してしまひ何かの新聞社長になられたさうでありますが、是も一時わあつとやつて直きに止してしまふ。私はさう云ふことを聞いて居り感じて居つたから、私は山本君が改造を創められた時に山本君に會つてそのことを話した所が、いや是は自分の畢生の仕事としてやるのだ、と言はれるので、私も大に感心して大に同情をしたのでありますが、さうしますと、軈て年が經ちますと、政治家として乘出す、衆議院の候補者として立つと云ふことを聞いたので、私は其時に締括りのないと云ふのは是だなアと思つたのであります。是だから矢張りすることがおしまひになるのぢやないかと思つた。一體山本君と云ふ人はいろ〳〵なことに手を出すことの出來ない人で、其代り一度やり出すと夢中でやる人だと云ふことを聞いて、成る程それでは改造社をよして、衆議院議員に打つて出て、そつちへ行く人だらうと思つた。さうなつちやア是はまア大變だ。大變だと云ふ意味は、さうなつたら改造社の人々が不安であらうし、文筆勞働者も不安であると云ふ風な考が致しまして、又事實非常に不安を感じたのであります。それで私は山本君が失敗すれば宜いと思つてゐた所が、果して失敗して歸つて來たから大變いゝことであつたと云ふ譯です。是が出られたら大變です。山本君が當選して大臣にでもなられて、改造社なんぞは全部國費でやつてしまふと云ふことになるなら、改造社も非常に悦ばしい。けれども國家の爲に困りますから、出ない方がよかつた。さう云ふ風にして尻括りのないことをやられるが、其時に山本君はもう是でおしまひである。改造社の事業の爲に全身を注ぐ。全力を注ぐと言はれるのです。全力を注ぐと云ふ言葉は二度聽くのだけれども、今度は本當だらうと思つて居りました。が、矢張り本當で、其後の活躍と云ふものは、實に恐ろしい。恐らく衆議院に行つてもあれ程のことは出來なかつたらうと思ふ。此年月の間に是だけのことは出來なかつたらうと思ふ。

いろ〳〵のことをやられた中で、吾々を驚かせ、出版界を驚ろかしたのは、圓本と云ふものであります。今だから誰も彼も圓本と云ひますが、山本君が創められた時其の計畫を聞いた時、私はさう云ふ偉いことをやるのはいゝが失敗するだらうと言つたのでありますが、それが非常な成功をせられまして、圓本に依つて讀書界が多大の利益を得たのみならず、文筆勞働者に取つては非常な利益を得たのであります。是は併し利害得失で、文士などが得られなかつた不勞所得で、それが非常に得られるやうになつて、文藝の士に階級的資格と云ふものを失はれ、文筆勞働者の勞働意識を失つて、階級的に向ふの方に飛出さうと云ふ傾向を生じたのです。社會の文藝の爲に、文筆の士の爲にいゝことであるかどうか分らない、と云ふ風に私は感じたのであります。併し考へて見ると文筆の士が、數十年苦心をして書いたものを寃めて、それが爲に一萬二萬位の金を得て、それで階級性を失ふと云ふやうなことは意氣地のないことである。ちよつと電話をかければ何十

[illegible]國と云ふ金を儲ける人があるならば、[illegible]年間頭指鉢巻で働いたものに依つて得た一萬二萬の金を、私は不勞所得とは考へられない。さう云ふ一萬や二萬の金を得たからとて、決して階級觀念を失はないのであります。依然としてプロレタリヤで働かうと、私だけはさう云ふ觀念を持つて居るのであります。安心して一萬でも二萬でも私に下さつても、私の階級的觀念は失はれないと云ふことを御信用下さらんことを……是は自分のことになりました。私に喋舌らせると斯う云ふ風になります。此邊で席を辭きます（拍手）。

感想

堺利彦

私は新米の市會議員であります。山本君は今から二十年も前に市會議員になられた。私は六十歳の今日初めて市會議員になつた晩學者であります。今日も私は市會議事堂から、直ぐにこゝへ來たやうな大第であります。所が市會に於きましては八十四名の市會議員の中に於て私共は僅に六名居る。非常に心細い。まるで敵の圍みの中から拔けて來てゐるやうな氣持がして居ります。その敵のかこみの中から拔けて來たここは何處かと云ふと、私に取つては實に故郷の感がある。（拍手）

餘計なことは言ひませんが、私はどうか今後とも改造社が永く、吾々の爲に言論の舞臺となつて貰きたい。山本君が床次君と同じく黨派なることは致方ありませぬ。併しそれと同時に、山本君が少々位は、吾々と同じく危險人物になつて貰きたい。是だけ……（拍手）

感想

菊池寛

僕等が丁度文壇へ出てから改造社と同じ位の年になります。ですから創刊當時の改造社は私はよく知つてゐる。創刊する少し前に、僕達を招んで御馳走をされた。其時に招待された方は幾人もないだらうと思ふ。皆さん方は十年記念會と云ふので、威張つてゐられるか知れないが、其時に招待された人は少ないだらうと思ふ。僕も其時の招待に行つてゐればもつと威張るのですが、實は行つてゐない、當時はよく雜誌が出ては潰れました。それで私も少し馬鹿にしてかゝつたのですが、それが十年後の今日、こんなに盛大になつて、日本の思想界、文藝界の連中を斯樣に集めてゐると云ふことは、改造社の偉大な成功であると私は感心してゐる。

改造社の成功したのは山本さんの非常な熱のある所が[illegible]たんだと思ひますが、もう一つ非常にきいたことは、山本さんの組み上手と云

ふことである。山本さんに賴まれるとついウカ／＼と何か書いてしまふ。あそこが雜誌記者として非常に成功した第一原因ぢやないかと思ふ。それから十年の間にこんなに盛大になつた改造社に就て、何等の惡聲を聞いてゐない。是は實に感心してゐる。改造社は中々完成しない。組織が不完全だと云ふことでありますが、もつと不完全の儘でやつて行きたいと思ふ。内部が火の車かどうか知らないが、山本氏が大童になつてやつてゐる間は、文藝の連中、思想家の連中は決して改造社を見捨てないだらうと思ふ。さう云ふ意味に於て山本さんが出版業者として大成しないで、今の儘のやうな有樣で、大に奮鬪して戴きたいことを希望する。

もう改造社の功績に至つては後世の史家がきつとはつきり判定を下すと思ひます。改造が思想的に一つや二つの帝國大學よりも、もつと大きなことをしてゐやしないかと思ふ。文藝の作家の生活を保證し、いろ／＼な作品を出す舞臺となつた點に於ても、私は十分に感謝されていゝと思ふ。（拍手）

感想

徳富蘇峯

私は聲が小さくて聞えないか知れませぬが、どうぞもうお聽きにならない方は、存分御遠慮なくお歸りを願ひます。

今夕は私に於きましても洵に愉快に感じます。私は改造の寄書家としては寧ろ新しい方に屬しますけれどもが、山本君の友人としては、必ずしも新しいと云ふ譯ではありませぬ。床次先生程であるかどうか知りませぬが、略ゝ同時であると存じて居ります。今夕圖らずも山本君の隣りに坐ることを得ることの光榮を得、更に福田先生の一軒置いて隣りに坐ることの光榮を得たが爲に、まるで私は、山本君を引立てる爲の役を勤めに出たやうであります。福田先生は成功者の標準として山本君を擧げ、失敗者の標準として私を擧げて、そこに一つの老衰なる失敗者と、ここに一つの盛壯なる成功者とを並べてお話になつたやうなことで、是は私に取つて洵に本望の至りである。若し私が山本君を引立てることが出來れば、是れ程私の本懷はないのであります。

只今皆さん方がいろ／＼お話になつて、一々私は御同感に思ひますが、唯少しく御同感に思はないのは、堺先生のお話である。私は實は山本君の危險人物の分量が寧ろ私共の眼から見れば多過ぎると思ふ。及ばずながら私や何かゞ改造に投書すると云ふことは、發行禁止を止めるところの、まじなひになる積りであります。私は何にも山本君に御奉公はないから、私の黴の生えた文章を以て、黴の生えた思想を以て、現代離れのした所の考を以て、さうしてあの中に入れて、熱いところのお湯をなま温るくしやうと云ふのが、私の考であります。若しそれに依つて聊か私が改造社に貢献することが出來れば、是も亦私の

本望であります(拍手)。斯う云ふ話は思ふことを申さなければならぬ。拼先生は拼先生の思ふことを言はれるので、私は私の考を申上げるのである。所謂各ゝ其の志を言ふと云ふのがそれである。

私はいろ／＼山本君に感じてゐることが澤山ある。併ながら山本君の成功は何かと言へば、茲に私は詰らぬながら歴史家の末班に屬して居りますから、歴史から例を採つて申上げます。朝鮮の役の時に、或者が薩摩の陣に用を持つて行き、ざうして其の大將の島津義弘入道にお目にかゝると云ふことである。ところが鹿兒島の陣に行つて見れば陣屋の中に火を焚いて、皆そこに足を投出して、火にあたつてゐる。どれが島津義弘であるか、どれが大將であるか、皆そこにあつて話をしてゐるから、誰に向つて挨拶のしやうがなかつた。其中に少し人相の違つた者がゐるから、これが大將であらうと云ふことで、漸くその人に挨拶をしたらば、それが島津義弘であつたと云ふことであります。改造社の今日を成したのは、矢張り山本君が島津義弘をやつてゐる。即ち改造社には主人もなければ家來もない。皆互ひに一致してやるから今日を成したのであらうと思ふのであります。即ち此の精神を以てやられるから改造社の業が盛になつたと云ふことであるならば、今後改造社がいよ／＼盛になるに從つて、どうか此の創業の精神の衰へないやうにして戴くと云ふことが、吾々一般の祈る所であらねばならぬと思ひます。(拍手)

私は此上贅辯を弄する必要はありませぬが、ここに所謂鹿兒島出身の大先輩、床次先生がおゐでになるからして、一つお願ひがあります。今年山本君が四十五歳と云ふことであるならば、今後十年間が、山本君の最も脂の乘つた時節である。然るに山本君の如き人は政界にも誠に少ない人であるからして、私は先程床次先生のお話を承つてゐたが、どうもまだはつきりしかねてゐる。總裁が言ふから先づそれにして置かうと云ふだけの話であつて、御自身がさうすると云ふことをお話にならない。私は是非お願ひをして置く。どうぞ山本君を誘拐して政界に引張らないやうにして戴きたい。假令五ケ月や七ケ月大臣になつたつても、改造社の仕事をやる方が、餘程是は國家の爲めになる(拍手)。山本君が總理大臣になればいざ知らず、それでない以上は、長くとは申しませぬ。せめて山本君が、五十五歳になるまでは、絶對に誘拐せないで戴きたい。之をお誓ひを願ひたい。又山本君も絶對にいかないと云ふことを此場で御明言を願ひたい。

もう申上げることは是で盡きましたから是で終ります(拍手)。」

萬歳の提唱

光永星郎

改造社の萬歳は先程既に福田先生の御發聲で三唱致しましたが、お目出度いことは何遍繰返しても差支ないと思ひますから、御指名に對

しまして、玆に皆樣と共に盃を擧げて萬歳を三唱したいと思ひますが、私の聲は非常に小さうございますから、諸君の大きな聲で、東京會館の破るゝやうにお願ひしたい。

改造社萬歳　三唱

お答へ

山本實彦

私は最後に德富先生にお答へしなくちやなりませぬ。私は明日から先のことをお誓ひすることは、斷じて出來ませぬ。此ことだけは御好意でありますけれども、どうぞ明日の氣持次第にして戴きたいと思ふのであります。（拍手）

來賓氏名（イロハ順）

石川欣一　石川巖　石川千代松　石川六郎
石川三四郎　石川武美　石井文作　石井研堂
石塚吉祐　石塚隆美　石濱知行　井上圓三
井上憲一　井上敬吉　井土靈山　井戸川辰三
岩田豐雄　岩崎純孝　伊藤好道　市來政直
稻葉熊野　稻葉輪一　稻村順三　坂垣鷹穗

池谷信三郎　泉鏡太郎　猪俣津南雄　同夫人
生駒粂藏　犬養健　濱井憲一　濱井松之助
原田業一　原きん　長谷川萬次郎　長谷部清
長谷部紫平　林房雄　林平次郎　秦豐吉
早坂二郎　早坂善太郎　橋本五雄　橋戸信
葉山嘉樹　春口善吾　萩原羅月　蓮田聖三郎
馬場恒吾　濱本浩　新井格　星島二郎
細田民樹　堀眞琴　堀口大學　堀野芳一
本間久雄　富永良太郎　土岐善麿　土岐章
德富蘇峰　東鄉實　鳥海篤助　豐島與志雄
德田秋聲　德廣巖城　戸川明三　床次竹次郎
友岡久雄　都河龍　中條精一郎　中條葭江
近松秋江　千葉龜雄　遲塚麗水　龍膽寺雄
大塚稔　太田哲三　大島治清　大橋光吉
大森義太郎　大野茂藏　大城政次　大野孫平
大熊長次郎　大濱喜作　大久保利武　大町文衞
大谷營部　大關柊郎　岡田禎子　岡田復三郎
岡田宗司　岡田三郎　岡本精晃　大江勳
岡本一平　小川未明　小川多一郎　小野武夫
小田内通敏　小山内夫人　小山内徹　尾崎士郎
岡田實　折田[illegible]　折口信夫　大戸喜一郎

緒方竹虎
脇水鐵五郎
加藤正治
川田久長
川上道晴
河井醉茗
河內時中
片岡鐵兵
柏田哲男
横山安夫
吉田鐵太郎
吉谷專吉
横光利一
米川正夫
高柳賢三
高橋源次郎
高田義一郎
田中阿歌麿
田中廣太郎
谷口武
竹下延保

渡邊仁
加藤勘十
加納寅次郎
川島友三
上村清敏
河西太一郎
樺山可也
上司小劍
鹿子木日出男
吉田絃治
吉川正一郎
吉江喬松
吉田孤羊
與謝野寬
高橋龜吉
高橋邦太郎
高信喜代松
田中貢太郎
田中松太郎
竹內喜太郎
谷敏行

渡邊秀雄
加藤三郎
川原壯之進
川合晋
河野密
河東秉五郎
金子晋太郎
冠松次郎
吉田英雄
吉田秀人
吉井哲三
吉植庄亮
横田地巴
與謝野晶子
高橋方雄
高木俊正
田中九一
田中純
田口文太
田邊元三郎
谷崎精二

和田萬吉
加藤政治郎
同夫人
川端康成
河野通勢
桂近乎
片山哲
梶原仲治
吉田弘二
吉國牛五
吉野正雄
横井春野
横關愛造
高石眞五郎
高橋茂藏
高木島三
高平始
田中早苗
田所輝明
竹內萬平
谷川徹三

橋[illegible]篤郎
莊原達
土田蟻九郎
塚越郁四郎
中村正常
中川正左
永井郁子
長岡義夫
那須皓
村松正俊
村上教
宇都宮數馬
植原悅二郎
浦本政三郎
野口米次郎
昇曙夢
黑瀬忠夫
栗下芳光
栗田三藏
久留義鄕
山本有三

武井武雄
添田啞蟬坊
土屋泰次郎
根本鑄之助
中村吉藏
中河與一
永井庄吉
長與善郎
來馬琢道
村上定一
室伏高信
宇都宮謙
植村四郎
歌代勝三郎
野間清治
延原謙
邦枝完二
國領友太郎
黑崎眞吉
久木崎時義
山本定助

立石泰輔
宗道太
土屋文明
中島眞
中村清之助
中澤辨次郎
長田秀雄
長野朗
村松梢風
村山知義
武者小路實篤
宇野千代
植田庄助
生方敏郎
野中虎雄
厨川蝶子
栗田確也
黑島傳治
久保田萬太郎
桑木嚴翼
山本留次

伊達[illegible]內[illegible]
土田朝二
塚原[illegible]へ
中島[illegible]團次
中野登美雄
永井潜
長田景貞
並木仙太郎
村田秀治
室生犀星
上原才一郎
內山賢次
浦松佐美太郎
野尻清彦
野田七郎
藏園三四郎
栗原滋之
黑屋金吉
久慈學
草間八十雄
山本善吉

山本久三郎　山田清三郎　山下樂藏　山岡眞之助　柳田泉　山本三生　松本赤太郎　松永米次郎　町田曲江　米田實　牧野武夫　福田良太郎　福永兵太郎　藤井誠次郎　古莊國雄　小林周郎　小林新　小村欣一　小穴隆一　近藤經二　郡山幸男

山口政　山川亮　山之内一次　矢島寬太郎　柳澤健　八並武治　松本泰　松居松翁　町田經宇　前田河廣一郎　牧口常三郎　深田久彌　福水良晃　藤森成吉　深尾須磨子　小林芳次郎　小島政二郎　小村俊三郎　小原勇　兒島喜和　甲賀三郎

山崎佐興　山下樂一　八木關　矢上仁一　柳瀨正夢　保高德藏　松下芳男　松宮三郎　增田義一　牧野初太郎　丸山泰治　福田金次郎　福山福太郎　濱田忠良　富士辰馬　小林良正　小杉天外　小泉鐵　小木曾潔　兒玉新三　江口渙

山崎卓雄　山本實彥　山內義雄　矢野正世　八木澤善次　松本浪次郎　松下英麿　松根東洋城　前田蓮一　牧野富太郎　槇有恒　福田德三　藤井悌　二神哲五郎　小林友次　小林榮子　小村雪岱　小牧健夫　小山敬也　今東光　江草重忠

遠藤金英　寺内寬三郎　阿部賢一　青木得三　安藤虎雄　荒川實藏　明石鐵也　秋場隆一　佐藤恒民　佐々木ふさ　佐久間衡治　齋藤昌三　笹川種郎　笠原一郎　木村信兒　北澤新次郎　菊池寬　宮城久輝　三浦定之助　宮島新三郎　島田青峰

寺田鼎　鈴坂座行　青木實藏　青野季吉　安藤克郎　荒畑寒村　相賀武夫　佐藤春夫　佐藤貞二　佐々木邦　坂本眞三　齋藤龜雄　佐藤實義　木下濟文　木村武雄　北村美那子　岸田國士　三木七郎　三浦修治　水島治男　島田昇平

寺田吉正　有島健助　青木巖　安藤富之助　秋田忠義　淺見文吉　雨森泉次郎　佐藤績　佐々木信綱　佐々弘雄　坂口武之助　齋藤哲郎　堺利彥　木下源一郎　北原鐵雄　北村小松　百合野愁露　三宅やす子　三輪壽莊　宮尾義雄　島中雄作

寺木定芳　有島生馬　青木正晃　芥川武雄　秋山謙藏　赤坂長勳　天野四郎　佐藤迪　佐々木茂索　佐多芳久　齋藤茂吉　西條八十　里見弴　木下莊　北原白秋　滑澤巖　三木露風　箕輪錬一　光永星郎　澤呂木克　清水公平

志毛井確太郎　下島空谷　栗野源治　芝孝濟
新見武雄　椎名昇　篠田義市　白鳥省吾
清水彌太郎　柴田勝衛　白柳秀湖　茂森唯士
鹽谷晴如　新村出　澁澤壽三郎　平野英一郎
平田貫一郎　平野亮平　平井新　廣田義夫
平林初之輔　平林たい　平澤直吉　東健兒
土方與志　樋口悦　樋口繁次　廣島晃甫
比嘉春潮　廣島定吉　菱刈實雄　日夏耿之助
森義太郎　森岩雄　森數樹　森島金次郎
森園豐吉　森村謙三　兩角侃　兩角信
桃井繁藏　餅原重男　瀨戸口操　關口鯉吉
關屋益郎　關田藤作　關口次郎　鈴木堅次郎
菅沼純一郎　鈴木德太郎　鈴木一意　鈴木多三郎
鈴木重威　鈴木厚　鈴木茂三郎　鈴木千文
杉山義雄　杉山愛二　杉浦非水　杉村楚人冠
杉下廣一　杉非初太郎　菅忠雄　吹田順助
須藤眞金、

其他の諸氏

懸賞詩當選發表

去る一月末締切つた本社の懸賞詩の應募は實に二千五百篇の多きに達した。爾來愼重審査を進め、四月號に發表のところを今月號に持ち越し、嚴選して三百五十篇を得た。夫れ夫れ皆懸隔なき粒揃ひの作篇なるため、非常に苦心した結果、左記の通り一等二等の當選二篇と、佳作十四篇を得た。規定により一等には賞金壹百圓、二等には五拾圓を呈する。佳作十四篇は全部、本誌今月號及び六月號に分割登載し、夫々本社の圖書切符を呈することゝいたしました。

一等當選　レエニンの月夜　近藤東

二等當選　ペリカン　井上廣雄

佳作

納涼博覽會　龜山まさる
街の詩　津嘉山一穗
超現實主義の作品　上田敏雄
間借者の詩　上田黎
(以上五月號發表)
ある北方的な風景　工藤正一
寂囚　府川恵造
寄す　柏文彌
獻詩　候御葛稔
だんだら詩集　萩原野呂
山雀の言葉　林蓉一郎
へんなのりて　古迫勇
健康地帶　仲村渠
創造詩　柿山陶造
秋草圖詩集抄　長江道太郎
(以上六月號發表)

レエニンの月夜（一等當選）

近藤東

橋からの下り勾配。黄包車（ワンポオツ）に西瓜の種だ。西瓜の種はコムニストではない。

黄浦江の霧は拳銃を亂射した。ソヴイエツト領事館の窓は無数に散つて光つた。空色の軍艦は水兵を吐瀉した。陸戰隊。透明な哨兵は一着の雨合羽（エロウ・スリツカア）である。

ぼくは月夜を感じた。月夜を。レエニンの月夜を。寢台（ベツド）の中で。女は白系ロシアの食用薔薇。女は機關車のやうにおしかかつて來た。ぼくは蝶死する。

逃亡

をんなの髮に昨夜の新月が引懸かつてとれない。
をんなの腋毛は飴色の腋毛だ。

恋の港には白いパイロツト・ボオトが揺れてゐる。
をんなと僕は急に悲しくなつた。

日本の軍艦が遡航して入港した。午後三時。
――とうとう驅逐艦で追つかけて來たわョ。

ペリカン（二等當選）

井上廣雄

ペリカン

脂肪過多症のお女中さん
今朝はエプロンが新しい

春

春は　お孃さん方と御交際は致し兼ねる
彼女らは日に幾回となく　森や室内で
あられもない姿をしては溺死する

訪問

室内には椅子が据れてゐる

外では木の葉が搖れてゐる
私の訪ねた彼の人は何處か散歩にでたそうな

冬

齒車が喰違つてがたんと地球が降下した
ぴんと空氣が引き緊つて夜にそまつた

煙を吐かぬ煙突

起重機が空へ月をつり上げてゐる
時刻が屋根や街路にこぼれてくる

歪んだ街の風景だ
一九二九年のおれの舞臺だ

突然夜のやつ奴がみぶるひした。

納涼博覽會

龜山まさる

納涼博覽會の化物屋敷。

枯れた笹の中で頭の重すぎる幽靈が、
狩犬のやうにガサガサ
何を探してゐるのだらう?

死骸にでも戰顫きさうな闇所で
物凄く青白い光がさしたと思つたら、
呪はれてあれ——僕の鼻は
ついマグネシウムの臭ひを嗅ぎつけて了つた。

お岩の額には何故何時までも
野球の球が留まつてゐるのか?

男達はみんな勇氣があるので
一つ一つ化物の顏を覗き込んでゐた。
どれが貴方の識者ですか?

婦人達は心臓みたいにピクピクし、
小供らは平常の二倍喧ましい。

木製の生ま首が、僕の麥稈帽と衝突した——
痛いことが可怕いことゝ同じいのである。

夜眼にも著るく塵埃が舞ひ立つて
何故此の墓場の木といふ木が乾からび、
提燈が骨をむき出し、
化物が一々の通行人に
バアをするのだらう?

可怖いことは寂しい。
此の理論に誤りはない─
が、此處の化物は砲彈のやうに
飛來するので、
僕はよけるのに汗をかく。

ドロドロと又もやうす氣味惡い太鼓が鳴る。
僕は此の上、化物達の
暴れ廻るのに恐れをなして、
戸外へと逃げてゆきます。

街の詩

津嘉山一穂

●選　最

街は生きてゐる
街は街ぐるみ空に上つてゆくようだ
とても美しい淡彩な陽炎
街の中には機關庫があつて
誰れか石炭を燃やすのであろうか
ながめてゐるとうつとりするやはらかな夢
夢に浮いてゐる萬國旗の軍艦
街は生きてゐる
けれども汚ない姿をした火夫が
エンジンに油を注いでゐるからであろうか
灯がつく　色彩の灯だ華が華がさいた
何といふ奥深い表面だ
何といふ夢ごこちの觸手だ
何といふみやびな娘であろうか
けれども心臓には煤煙色の舵手が
いつしんに機關を廻はしてゐるのだ
街は生きてゐる

そして街は街ぐるみ　だんだん
星空に浮いてくるやうだ

●ビルヂング

青空をたち破(わ)れる
四角形の華麗な連峯よ
汝の谷底を見下すがいい
何といふ滑かな石疊であるか
汝の窓を展くがいい
空氣は黄色い花粉だ
その多彩な瞳を瞠れ
蒼ざめた京人形の群がみえないか
青空をおし潰(つぶ)せる
汝　豪放なるものよ
花車は不具(かたわ)を睨むものよ
汝の膿せる臓腑を感じないか

超現實主義の作品

JE SUIS ENFINI

上田敏雄

私は私の愛人を無限に愛してゐます　私の瞳は無限に美しく
あります
無限の殺人者である私は無限の戀愛家であります
あの女は私の唯一の無限の愛人であります
美しい野原の上の無限の劇場(テアトル)の中の私は無限に美しくありま
す
其處に廻轉する窓はイロニイのやうに美しい旗を腕の上に持
つた魔術家を誘ひます？
私は無限に美しい魔術家をもう見ます
貴方であります　無限に美しい手と瞳で無限の誘惑を愛人等
に與へるのは
活潑な遊戯者は美しい帽子を腕に吊つてゐるのでございます

彼に讃美される世界は惡魔のやうに美しいのでございます
私は前に述べたやうに無限に美しい夢の遊戯をも讃美いたし
ますがこのやうな無限に美しい惡魔の遊戯も讃美いたしたい
のでございます
世界は退屈ではございませんか尤も世界は陶醉なのでござい
ます
貴方が詩人でいらつしやいますか　私は慇懃で光榮の貴方に
御挨拶を申しあげます

湖水の上に月がある　私はあの女を思つてゐる

私は裝飾された Roi であつてあの女は裝飾された Reine で
あります
兩人は世界の征服者で勝利と魔術の呼吸をいたしてをります
唯今私は無限に美しい人魚のやうな蜃氣樓でございます
御存じでありませうが無限に美しい人魚は無限に裝飾された
人魚で最新流行に屬します

無限に美しいヨツト　かの女はそれに乘ります
無限に美しい飛行船　私はそれに乘ります
單に無限の世界の出來事であります

間借者の詩

上田　黎

その室

長屋の端を老母は借り
その二階を俺は間借する
古木を燻す夕餉の燒が
梯子を暗くのぼつてくる
貧しいものの上に貧しく蹲り
ありやなしやの炭火をかきわけ
凍えた十本の指をかざす。

その窓から見える風景

古罐を集めたたいてゐる
紙屑を集めのしてゐる
襤褸と髮の毛をわけてゐる
いぎたなく罵りながら賣買(うりかひ)する。

運河に黑く澱んだ水は
これらの現象を倒に寫し
一日かれらの喚(わめ)きを舐めてゐる
一日かれらの姿を眞似てゐる。

その窓から見える天景

冬空をばたばたたたいてゐる
みすぼらしく天に汚れてゐる
上層建築の細い頂にかかる旗
風に騷ぎ高く俺を呼んでゐる
たよりない人の世の上に呼んでゐる。」

その室に歸る

家畜の嗅ひこもるもの
腐蝕の妖しい嗅ひを流すもの

俺は汗ばむ靴下をぬぐ
俺を待つてた柱の釘に帽子をかける
俺は汗ばむ襯衣をぬぐ

荷揚げする重きにたえたこの足よ
鐵材を一日抱いたこの肋骨よ。」

その隣室

夜更に輕い咳(しはぶき)のあと
瀬戸壺をざらざら軋る音
となりのひとよ　寢れずあなたは

血糸が悲しくまわつてゐる
瑠璃のたんを吐くのですか。

その窓下の店

燈火も淡い店先に
玩具をならべ駄菓子をならべ
老母はひとり縫物する
(眼鏡に寫る夕焼雲と天の色)
小供が店先によりかかり
飴を舐りまた指につまみ
夕暮空に透してゐる。おしんでゐる。

貪欲者の歌

若山喜志子

いたづらに嘆くやめむとあきらめの早かりしことの今悔いらるる

われにはわれの行くみちありきと身ぶるひをおぼえて緊く立ち上りたり

かくて行く路は新し何ものもさへぎるなかれあと追ふなかれ

夫故に子故に深くひそみをりしわが本性のきざしそめたる

恐るるなかれ立てよゆけよと血みどろの死に物狂ひのわれの生きざま

生きてゆくを重荷と思ふ時は去りぬ男の人の苦しみも知りぬ

ありし日の夫が負ひたる歎かもこの眞裸の身にせまれるは

くるしきは甚くたのしきは甘し噛みて味はふそのことごとに

くるしみもたのしみもこの不敵なる貪欲者の餌食とはなる

酔ふな醒むるなひとりのみちの險しきにめざすゆくてのきはみもなきに

寂しさのきはまりしらぬただ中にいつしかひとりよろけ入りたる

寂しさぞわが身の髓に燃えてをる恐ろし恐ろしこのさびしさの

新刊批評

勝本正晃氏著『文藝と法律』を讀む

尾佐竹猛

『文藝と法律』といふブッキラ棒な標題に似合はず、內容の趣味津々として卷を措くに忍びざるは、恰も著者が東北帝大教授法學博士として七六かしい法律の講壇に起ちながら、一度口を開けば古今東西の文藝を縱橫に驅使して、無味乾燥なるべき法律の講義が百花燎爛の觀を呈し學生をして時の移るのを忘れしむると、同じ趣きである。

世には法律家は無數にある。また文藝家はあり餘る程存在する。しかも法律の研究も文藝家の目ざす處も結局人間そのもの丶研究に外ならない(本書序文)

であるにも拘はらず、法律家と文藝家とは全然懸け離れた別世界に生活して居る。偶法律家から文藝家の領分に手を出さんとするものもあるが、文藝家からは法律家の領分へ手出ししようとも考へなかつたのである。しかもこんな變態は永續すべきものでは無い。先づその手始めとして文藝家は探偵小說といふ幾分法律家の領分に近い處へ一新領土を開拓したが、これに反し法律家の文藝界への進出は更に無い、偶々これありとするも、殆んど成つて居ないといふのは、法律家たる立場を忘れて全然文藝家たるかの如き錯覺に陷るか又は法律家たることが鼻につくのが多いからである。然るにこの書の著者は法律家たる立場を忘れずに、また文藝家としての立場にも立つて双方から事を進めたことに於て出色があるのである。

「文藝に現はれたる法律諸相」に對し「法律に現れたる文藝諸相」があり。「文藝家の法律的素養」に「法律家の文藝素養」に進み、最後に「文藝家と法律家との境」と「文藝と法律との鬪爭及び協和」に終つて居る。その取扱はれたる題材としては、「ヴエニスの商人」、「ハムレット」、「復活」、「罪と罰」などはいふを待たず、棠陰秘事から默阿彌物や、さては「眞珠夫人」や「ドモ又の死」に迄及び、ノラやオスカーワイルド、ドンキホーテー、一晝夜用心記」、縱橫無盡に鋭きメスを振ふあたり、天馬空を馳するの概がある。その他「法律家としてのゲーテ」「沙翁の本體に關する種々の疑問」などは獨立の大論文としても可なるものである。最後の章の「文藝と法律との鬪爭」「藝術價値と、法律價値」は文藝家も法律家も再讀三讀すべき好文字である。

藝術は愉快の念を起さしむるが故に最も民衆的となり易い、其處に民衆に迎合するの弊を生ずると共に一方に於て藝術至上主義に走るの陷穽がある。吾人が法律至上主義とか道德至上主義とか云ふ言葉を聞かない

のは、それ等が眞に民衆的であり得なかつた爲めである。(四四八)

この何んでもないような言葉であるが、著者ならでは言ひ得ない妙句である。而して「法律を面白く説明すると民衆は面白味だけ味はつて肝心の法律の眞諦を忘れてしまふ」(四四八)を注意し、また「藝術は法律や道徳の手段に墮してはならぬ」「藝術の中に吾人の血となり肉となる尊いものゝあることを示してゐるのである」(四四九)と喝破して居るあたりは著者の眞の面目である。

文章の妙はいふ迄もなく、處々に趣味多き寫眞版を挿入してあるのも、本書の價値を增すものである。故穗積陳重先生の名著「法窓夜話」以降の好著として江湖に推奬するのである。

因に著者は刑法界の權威たりし故勝本勘三郎博士の後嗣であり、親子二代の教授博士ではあるが、一面に洋畫家として一家を成すの技がある、本書のある所以である。(東京市芝區愛宕下町四丁目改造社發行・定價貳圓八十錢)

川崎貞明氏著

『米國信託會社の組織と經營』

吳　文炳

我國の信託業は既に十三億の信託財產を有することによつて、銀行と保險會社との中間に、その嚴然たる存在を明かにした。本書は此の新興事業のために米國に於ける信託會社の實務を紹介せられたものである。著者は最近二年間、我國信託業の母體である英米に在つて實地に亘細の研究を遂げられ、殊に一會社では社長より一般書記に至るあらゆる階級の人々から悉くの經驗と知識とを受けられ且つ重要書類縱覽の便宜を與へられたと云ふ。實務説明の中心として個人信託課法人信託課、證券部、不動產擔保貸付部、貸金庫及權利保險業務を擧げて一々懇切なる説明を下されるところは、流石に著者の體驗の深いことを思はせるものがある。

本書を讀むで今更ながら感ずることは、彼地の信託會社の社長、副社長其他役員の眞摯なる態度が遺言執行者、後見人、受託者として安じて三尺の童子をも託し得るものであること、社債發行に關聯する業務即ち社債引受並に社債信託の引受に於ける嚴格なる諸條件は社債發行者、信託會社ともに社債の聲價並に信用の維持を以て主眼とせるものであることなどである。

また、信託會社と保險會社との接近を說かるゝところは著者が現實保險業にたづさはる人であるだけに、一入の興味を以て讀むことが出來且つ尠からぬ啓發を受けた。尙我國の信託業者が久しく其の實行を希望しつゝ遂に今議會に法律案の通過を見るに至つたところの遺言執行事務に關する詳細な説明がある。これは同書の卷尾に添へられた一般事務に關する數十葉の實務樣式と共に直に採つて以て範とするに足るものであらう。唯聊か同書を繙いて物足りなく思ふところは

私は此の著書から清算人及レシーバー事務に就て今少しく詳細に聞きたかつたことである。がそれにもかゝはらず、私はまだ成育の初歩に在る今日の我國信託業に此の有益な文獻を加へ得たことを心から喜ばずにはゐられない。（東京市日本橋區通三丁目丸善發行・四圓）

出　隆　著
西洋哲學史　第一卷

田中美知太郎

正直なところ、私はこの書物をどう言つてよいのかわからない。「たとへばこの書物で取扱はれてゐる時代を著者は自然哲學者の時代と呼んでゐる、そしてそれはよいが、この大事な自然といふ語の説明が私にははつきりしないのである。著者は命名によつて説明しようとするかのやうに、一方では自然（ピユシス）を物の世界、コスモス14頁、生成變化する世界、自然界46頁などゝ呼び、他方では世界の眞相14頁、世界のあるがまゝ、世界の本質45頁52頁、實相48頁など、名づけてゐる。そして「世界の眞相（ピユシス）を追求し、そのもとのもの（アルケー）からこの世界（ピユシス）を理解せむとした」59頁、といふやうな言葉をきかせる。（ついでながらこのアルケーもピユシスに應じて、ある時にはそれはピユシスと竝び、ある時にはピユシスのもとのものと考へられてゐる45頁52頁）そしてつひにこの時代の――後の時代は問題ではない――哲學者たちが「かゝる生成變化する世界（自然界）そのもの或はその本質或はその實相をピユシスなる語を以つて呼んだ」と主張してゐる。抑いかなる史料にもとづいて著者はこれらのことを言はうとするのであらうか。私の狹い知識ではほとんど想像がつかない。また著者はどういふ風にして二つの意味（世界と世界の眞相）の一語ピユシスに於ける統一を私たちに理解させようとするのであらう。「ピユシスは初には有ると成るとの未だ區別されない現象の如實事物事象のそのまゝ Sache an sich を意味したのであらう」46頁といふ言葉はこれに對して何か今の二つの意味を統一するピユシスのより根源的な意味を與へるものともとられる。さうすると、こゝからしてそれが「有るがまゝの世界成るがまゝの世界」52頁の意味や「世界のあるがまゝの本質（これも氣になる言葉である）」45頁の意味になることを理解出來ないことはない。然しながらこれによつては私たち著　者がどうして日本語でかう考へたかといふ著者の心理にふれるだけである。「今の説明がもつと明確な形をとり、史料にもとづいて證明されない限り、これではピユシスにはとゞかない。

ピユシスだけで豫定の枚數が一杯になりさうになつたが、はじめの方だけで言つてもこの外ロゴスの種々の譯語やスコレーの説明やテオーリアーと合理的といふことの結びつきその他が解らない。また主觀、客觀、論理的、理想主義等々の語や他の色々な斷定

が氣にかゝる。恐らく私の偏見や無學のためだらうと思ふけれど、然し解らないことを解つたやうな顔をして、いゝ加減なことを言ふのはいやだ。然も「解らない」や「氣になる」だけでは何も斷定出來ない。特に責任のある斷定は出來ない。つまり改造社はこの書物の批評をするには不適當な人間を選びあてたわけである。然しこの種の「判斷中止」はこの書についての一般の人々の印象をわるくするおそれがある。私は人々に一言しなければならぬ。私がこゝで解らないとか氣になるとか言つてゐることはいづれも諸君にとつてはどうでもいゝことなのだらうと思ひます。もし諸君が世に出てゐる他の書物からギリシヤについて既に何かを學ばれたとするならば、無論この書物からはもつと多くを學ばれるに相違ないのです。（東京市麹町區元園町一ノ一〇啓明社發行・定價二圓五十錢）

新刊紹介

◆**帝制ロシア沒落の眞因**（大竹博吉監輯 ロシア問題研究所版・東京麹町內幸町一ノ五・同研究所發行・非賣）

◆**街頭の社會學**（室伏高信著・東京京橋上柳町十二・田舍社・定價壹圓六拾錢）

◆**監獄部屋**（沼田流人著・東京神田區今川小路二丁目・金星堂發行・定價壹圓）

◆**本當にあつた事**（續篇）（鈴木常吉著・大阪市北區中之島・朝日新聞社發行・定價壹圓參拾錢）

◆**文藝年鑑**（文藝家協會編・東京牛込區矢來町・新潮社發行・定價壹圓五拾錢）

◆**原始から出た**（林一郎著・東京本鄉湯島切通坂町一九・ロゴス書院發行・定價壹圓）

◆**政治家よ何處へ行く**（山浦貫一著・東京麹町區麹町三ノ二・日本書院發行・定價貳圓）

◆**日蓮聖人の實現の宗教**（山川智應著・東京下谷櫻木町一・天業民報社發行・定價貳圓五拾錢）

◆（詩集）**棕櫚の木**（佐野嶽夫著・東京小石川白山御殿町三二・抒情詩社發行・定價壹圓五拾錢）

◆**若き日のギヨーテ**（阿瀨利吉著・市外杉並町四一五・森林詩社發行・定價八十五錢）

◆**社會思想批判**（川邊喜三郎著・東京神田北神保町二・新生堂發行・定價貳圓五拾錢）

◆（戲曲）**小栗上野の死**（十菱愛彦著・東京麹町內幸町一ノ六・第一出版社發行 定價壹圓六拾錢）

◆（散文集）**雪と野菜**（前田夕暮著・東京市外西大久保一二八・白日社發行・定價壹圓八拾錢）

◆**支那古代史**（ヒルト博士著・西山榮久譯補・小石川區原町六・丙午出版社發行・定價參圓五拾錢）

◆**國民に訴ふ**（中野正剛著・東京麹町下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓五拾錢）

私は此の著書から清算人及レシーバー事務に就て今少しく詳細に聞きたかつたことである。がそれにもかゝはらず、私はまだ成育の初歩に在る今日の我國信託業に此の有益な文献を加へ得たことを心から喜ばずにはゐられない。（東京市日本橋區通三丁目丸善發行・四圓）

出隆著　西洋哲學史　第一卷

田中美知太郎

正直なところ、私はこの書物をどう言つてよいのかわからない。たとへばこの書物で取扱はれてゐる時代を著者は自然哲學者の時代と呼んでゐる、そしてそれはよいが、この大事な自然といふ語の説明が私にははつきりしないのである。著者は命名によつて説明しようとするかのやうに、一方では自然（ピュシス）を物の世界、コスモス14頁、生成變化する世界、自然界46頁などゝ呼び、他方では世界の眞相14頁、世界のあるがまゝ、世界の本質45頁52頁、實相43頁など、名づけてゐる。そして「世界の眞相（ピュシス）を追求し、そのもとのもの（アルケー）からこの世界（ピュシス）を理解せむとした」59頁、といふやうな言葉をきかせる。（ついでながらこのアルケーもピュシスに應じて、ある時にはそれはピュシスと竝び、ある時にはピュシスのもとのものと考へられてゐる45頁52頁）そしてつひにこの時代の――後の時代は問題ではない――哲學者たちが「かゝる生成變化する世界（自然界）そのもの或はその本質或はその實相をピュシスなる語を以つて呼んだ」と主張してゐる。抑いかなる史料にもとづいて著者はこれらのことを言はうとするのであらうか。私の狭い知識ではほとんど想像がつかない。また著者はどういふ風にして二つの意味（世界と世界の眞相）の一語ピュシスに於ける統一を私たちに理解させようとするのであらう。「ピュシスは初には有ると成るとの未だ區別されない現象の如實事物事象のそのまゝSache an sichを意味したのであらう」46頁といふ言葉はこれに對して何か今の二つの意味を統一するピュシスのより根源的な意味を與へるものともとられる。さうすると、こゝからしてそれが「有るがまゝの世界成るがまゝの世界」52頁の意味や「世界のあるがまゝの本質（これも氣になる言葉であるが）」45頁の意味になることを理解出來ないことはない。然しながらこれによつては私たち著者がどうして日本語でかう考へたかといふ著者の心理にふれるだけである。「今の説明がもつと明確な形をとり、史料にもとづいて證明されない限り、これではピュシスにはとゞかない。

ピュシスだけで豫定の枚數が一杯になりさうになつたが、はじめの方だけで言つてもこの外ロゴスの種々の譯語やスコレーの説明やテオーリアーと合理的といふことの結びつきその他が解らない。また主觀、客觀、論理的、理想主義等々の語や他の色々な斷定

が氣にかゝる。恐らく私の偏見や無學のためだらうと思ふけれど、然し解らないことを解つたやうな顔をして、いゝ加減なことを言ふのはいやだ。然も「解らない」や「氣になる」だけでは何も斷定出來ない。特に責任のある斷定は出來ない。つまり改造社はこの書物の批評をするには不適當な人間を選びあてたわけである。然しこの種の「判斷中止」はこの書についての一般の人々の印象をわるくするおそれがある。私は人々に一言しなければならぬ。私がこゝで解らないとか氣になるとか言つてゐることはいづれも諸君にとつてはどうでもいゝことなのだらうと思ひます。もし諸君が世に出てゐる他の書物からギリシヤについて既に何かを學ばれたとするならば、無論この書物からはもつと多くを學ばれるに相違ないのです。（東京市麹町區元園町一ノ一〇啓明社發行・定價二圓五十錢）

新刊紹介

◆**帝制ロシア沒落の眞因**（大竹博吉監輯ロシア問題研究所版・東京麹町內幸町一ノ五・同研究所發行・非賣）

◆**街頭の社會學**（室伏高信著・東京京橋上槇町十二・田舍社・定價壹圓六拾錢）

◆**監獄部屋**（沼田流人著・東京神田區今川小路一丁目・金星堂發行・定價壹圓）

◆**本當にあつた事**（續篇）（鈴木常吉著・大阪市北區中之島・朝日新聞社發行・定價壹圓參拾錢）

◆**文藝年鑑**（文藝家協會編・東京牛込區矢來町・新潮社發行・定價壹圓五拾錢）

◆**原始から出た**（林一郎著・東京本鄕湯島切通坂町一九・ロゴス書院發行・定價壹圓）

◆**政治家よ何處へ行く**（山浦貫一著・東京麹町區麹町三ノ二・日本書院發行・定價貳圓）

◆**日蓮聖人の實現の宗教**（山川智應著・東京下谷櫻木町一・天業民報社發行・定價貳圓五拾錢）

◆（詩集）**棕櫚の木**（佐野嶽夫著・東京小石川白山御殿町三二・抒情詩社發行・定價壹圓五拾錢）

◆**若き日のギヨーテ**（阿瀨利吉著・市外杉並町四一五・森林詩社發行・定價八十五錢）

◆**社會思想批判**（川邊喜三郎著・東京神田北神保町二・新生堂發行・定價貳圓五拾錢）

◆（戲曲）**小栗上野の死**（十菱愛彥著・東京麹町內幸町一ノ六・第一出版社發行　定價壹圓六拾錢）

◆（散文集）**琴と野菜**（前田夕暮著・東京市外西大久保一二八・白日社發行・定價壹圓八拾錢）

◆**支那古代史**（ヒルト博士著・西山榮久譯補・小石川區原町六・丙午出版社發行・定價參圓五拾錢）

◆**國民に訴ふ**（中野正剛著・東京麹町下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓五拾錢）

私は此の著書から清算人及レシーバー事務に就て今少しく詳細に聞きたかつたことである。がそれにもかゝはらず、私はまだ成育の初步に在る今日の我國信託業に此の有益な文獻を加へ得たことを心から喜ばずにはゐられない。(東京市日本橋區通三丁目丸善發行・四圓)

西洋學哲史 第一卷

出隆著

田中美知太郎

正直なところ、私はこの書物をどう言つてよいのかわからない。たとへばこの書物で取扱はれてゐる時代を著者は自然哲學者の時代と呼んでゐる、そしてそれはよいが、この大事な自然といふ語の説明が私にははつきりしないのである。著者は命名によつて説明しようとするかのやうに、一方では自然(ピュシス)を物の世界、コスモス14頁、生成變化する世界、自然界46頁などゝ呼び、他方では世界の眞相14頁、世界のあるがまゝ、世界の本質45頁52頁、實相48頁など、名づけてゐる。そして「世界の眞相(ピュシス)を追求し、そのもとのもの(アルケー)からこの世界(ピュシス)を理解せむとした」59頁、といふやうな言葉をきかせる。(ついでながらこのアルケーもピュシスに應じて、ある時にはそれはピュシスと竝び、ある時にはピュシスのもとのものと考へられてゐる45頁52頁)そしてつひにこの時代の――後の時代は問題ではない――哲學者たちが「かゝる生成變化する世界(自然界)そのもの或はその本質或はその實相をピュシスなる語を以つて呼んだ」と主張してゐる。抑いかなる史料にもとづいて著者はこれらのことを言はうとするのであらうか。私の狹い知識ではほとんど想像がつかない。また著者はどういふ風にして二つの意味(世界と世界の眞相)の一語ピュシスに於ける統一を私たちに理解させようとするのであらう。「ピュシスは初には有ると成るとの未だ區別されない現象の如實事物事象のそのまゝSache an sichを意味したのであらう」46頁といふ言葉はこれに對して何か今の二つの意味を統一するピュシスのより根源的な意味を與へるものともとられる。さうすると、こゝからしてそれが「有るがまゝの世界成るがまゝの世界」52頁の意味や「世界のあるがまゝの本質(これも氣になる言葉であるが)45頁の意味になることを理解出來ないことはない。然しながらこれによつては私たち著者がどうして日本語でかう考へたかといふ著者の心理にふれるだけである。今の説明がもつと明確な形をとり、史料にもとづいて證明されない限り、これではピュシスにはとゞかない。

ピュシスだけで豫定の枚數が一杯になりさうになつたが、はじめの方だけで言つてもこの外ロゴスの種々の譯語やスコレーの説明やテオーリアーと合理的といふことの結びつきその他が解らない。また主觀、客觀、論理的、理想主義等々の語や他の色々な斷定

が氣にかゝる。恐らく私の偏見や無學のためだらうと思ふけれど、然し解らないことを解つたやうな顔をして、いゝ加減なことを言ふのはいやだ。然も「解らない」や「氣になる」だけでは何も斷定出來ない。特に責任のある斷定は出來ない。つまり改造社はこの書物の批評をするには不適當な人間を選びあてたわけである。然しこの種の「判斷中止」はこの書についての一般の人々の印象をわるくするおそれがある。私は人々に一言しなければならぬ。私がこゝで解らないとか氣になるとか言つてゐることはいづれも諸君にとつてはどうでもいゝことなのだらうと思ひます。もし諸君が世に出てゐる他の書物からギリシヤについて既に何かを學ばれたとするならば、無論この書物からはもつと多くを學ばれるに相違ないのです。（東京市麹町區元園町一ノ一〇啓明社發行・定價二圓五十錢）

新刊紹介

◆**帝制ロシア沒落の眞因**（大竹博吉監修　ロシア問題研究所版・東京麹町内幸町一ノ五・同研究所發行・非賣）

◆**街頭の社會學**（宗伏高信著・東京京橋上槇町十二・田舍社・定價壹圓六拾錢）

◆**監獄部屋**（沼田流人著・東京神田區今川小路一丁目・金星堂發行・定價壹圓）

◆**本當にあつた事**（續篇）（鈴木常吉著・大阪市北區中之島・朝日新聞社發行・定價壹圓參拾錢）

◆**文藝年鑑**（文藝家協會編・東京牛込區矢來町・新潮社發行・定價壹圓五拾錢）

◆**原始から出た**（林一郎著・東京本郷湯島切通坂町一九・ロゴス書院發行・定價壹圓）

◆**政治家よ何處へ行く**（山浦貫一著・東京麹町區麹町三ノ二・日本書院發行・定價貳圓）

◆**日蓮聖人の實現の宗教**（山川智應著・東京下谷櫻木町一・天業民報社發行・定價貳圓五拾錢）

◆（詩集）**棕櫚の木**（佐野嶽夫著・東京小石川白山御殿町三二・抒情詩社發行・定價壹圓五拾錢）

◆**若き日のギヨーテ**（阿瀬利吉著・市外杉並町四一五・森林詩社發行・定價八十五錢）

◆**社會思想批判**（川邊喜三郎著・東京神田北神保町二・新生堂發行・定價貳圓五拾錢）

◆（戯曲）**小栗上野の死**（十菱愛彦著・東京麹町内幸町一ノ六・第一出版社發行　定價壹圓六拾錢）

◆（散文集）**雪と野菜**（前田夕暮著・東京市外西大久保一二八・白日社發行・定價壹圓八拾錢）

◆**支那古代史**（ヒルト博士著・西山榮久譯補・小石川區原町六・丙午出版社發行・定價參圓五拾錢）

◆**國民に訴ふ**（中野正剛著・東京麹町下六番町一〇・平凡社發行・定價壹圓五拾錢）

ティルダへの手紙

故 有島武郎

兄の日記「觀想集」第九卷、千九百六年（明治三十九年）十一月十七日を開いてみると、瑞西ルッェルンから、シャフハッゼンの古都へ到着した晩のことが書いてある。羅馬で識つた私の友人達がそこで吾吾の到着を待つてゐてくれたのである。その藝術家のグルプのうちに三人の若い女性が居た。その中のティルダ・ヘックといふ野歌などを唄つた金髪青眸の一處女が兄の心を惹いた。二十三日そこを辭した時の日記には「涕涙を垂る」と識してある。この僅か一週間の交遊から二人の文通は始まつて、實に十八年間の長日月に亙つた。兄の殉情、友愛はその半生の外面的移推と共に悉くこの書簡のうちに告白されて居る。

私は去年九月、三度目にシャフハゥゼンを訪問した。ティルダは兄の死を勿論知つては居たが、改めて生前死後の詳細な事情を物語つた。ティルダの室は兄の記念物で充されてゐて、恰ほ生ける人に對するが如き感情を抱いてゐた。十二月彼女は全書信のコピイ百二十一枚を携へて巴里へ到着し、日本でそれを發表することの許可を與へた。こゝに掲載するものはその最後の一部分である。

飜譯には吳茂一君と山田文雄君とを煩はした。（有島生馬附記）

一九一五年十一月十七日（東京より）

九月八日附の御手紙はどんなに私を驚かせたでせう。さうして人間の運命を悲しく感じます。あれ程希望に充ちたあなたの婚約がどうして突然破約されるやうになつたのです。勿論私は今度の悲劇が如何して起つたなどと云ふ事をあなたにお尋ねしてあなたの心の中の傷に血をぬる様な事は致しません。併し一人の友として、特に關係の深い一人の友として、あなたの惱の全てを知り度い。さうして出來るならばあなたの苦を如何にもしてお慰めしたいと願ふのです。併し心を安めて下さい。私は心からなる同情をこの手紙と共にあなたの許に送ります。あなたの爲めに、あなたと共に、あなたの心の中に私は泣きます。全能の神があなたの思ひ遣り深いやさしい美しい心を支持し、人類の正しさと貴さと、信ずる力とを與へ、遙か離れたこの世の一隅に常に愛と同情とを持つ一つの魂の存在を信じて下さい。あなたが野

戰病院に赴き、人類の敵なる野蠻性の爲めに傷き苦む哀れな人々に慰安を與へられようとするのは、あなたにも大きな慰めでありませう。苦しめるもの丶爲にあなたの全力をお盡しなさい。與へるものは與へらる丶ものより幸福です。而してあなたの悲は一つの泉となり、假令憂欝で暗くとも、そこから湧き出る清淨な水は、あなたの隣人が最も求めてゐる同情と尊敬となつて灌がれるでせう。

あなたの二葉のお寫眞は私を喜ばせました。私は一見あなたを見分けました。三人の中の眞中に坐つて居られるのがあなたですね。而してあなたの微笑み、それは私があなたと共にある時にあなたが私に微笑みかけられたその微笑みです。

別の包で幾つかの小さな人形をお送りします。それは豆の様に小さいので豆人形と呼ばれてゐます。その一つ〳〵があなたへ私の友情を齎して與れるように。これで筆を擱きます。あなたの御元氣で苦しい試錬から雄々しく立ち直られん事を祈りつ丶。

二伸　先日シャツフハ。ゼン宛に人形のお禮のお手紙を書きました。お受取り下さいましたか。若しまだなら該地の郵便局にてお問合せ下さい。（註。當時ティルダは墺國野戰病院に働いてゐた。）

妻は幾分良好に向ひ、滿足に思つて居ります。我國は目下御大典で大變な賑はひです。氣の毒な〳〵ティルダよ、私はあなたを胸に抱く。

一九一八年六月廿九日（東京より）

あなたの事をなつかしみながら、こんなに長く手紙を書かなかつたのは私の誤りです。何年も前にお別れした切りで、しかも尙かく強い愛情を覺えるとは唯々不思議です。貴女は私の最も愛する最も價値ある友の一人として、常に私の心の中に生きてゐる事を信じて下さい。

長い間の御無沙汰で書き度い事は山程あります。この前のお手紙で貴女がK氏との婚約を破棄された事を知りました。その報知はどんなにか私の心を顚倒させましたらう。許婚者に對して、あれ程誠實で愛情深くあつた貴女は、この世でたつた一人を愛すべきでした。併し過ぎ去つた悲をこ丶に繰り返しますまい。現世はあまりにも苦惱に滿ちてゐます。過去の不幸を繰り返して、現在の悲みを更に增すやうな事は致しますまい。併し純潔な堪忍を以て悲を忍ばねばならぬ者はあなた一人でないと云ふ事を告白させて下さい。私自身癒しがたい不幸に遭遇しました。卽ち一昨年妻は肺の病から世を去りました。前にも書きました通り、妻は一九一三年の秋以來肺結核を患ひ、遂に一九一五年の八月四日、私を始め彼女の兩親等の悲みを後に、三人の遺兒を悲嘆と寂しい父の手もとに殘して永遠に逝つたのです。あなたから贈られた人形は死の床に間に合ひました。彼女は死ぬ前にその人形を愛撫し、あなたの御厚意を心から謝してゐました。私の生涯はこの世の樂園から、日の下から暗黑の奈落に落ちてしまひました。しかし

私は人生は結局情あるものだと云ふ確信を以てこの不幸を切り抜けて行きませう。闘ひ闘き戰つて遂に私は勝利を得ました。私は教職を退き、一個の決心と苦い經驗とを以て、文筆の境涯に飛び込みました。私の仕事は文壇に認められて來ました。私は知識階級の生活の進歩と善の爲に良き努力を盡す事が出來るでせう。三人の子供も立派に育つて來ました。私は確實な歩を續け、全精力を傾けて、人類生活の成長進歩の爲めに盡しませう。

あゝ、私はあまりにも思ひ上つてゐます。恕して下さい。私はあなたの前にそんなにまで高振る必要はありません。貴女は私を愛して下さる。私は貴女を愛する。それで充分です。私達の心が時間と空間との距を越えて、固く結ばれてゐると云ふ事は如何に不思議な併し又如何に美しい事でせう。愛するティルダよ。私達の間が國籍、國、血、教育、生活、習慣の差異、その他凡ての相違にも不拘、私達はお互に人間であると云ふ事で理會し合ひ、何ものもその間を距てる事の出來ぬ程完全に理會しあつてゐるのです。それは實に嬉しい、又美しい事です。

現在ヨーロッパを襲つてゐる恐ろしい戰禍の犧牲たる傷病者の看護に一身を獻げてゐると云ふあなたの態度に私は敬服します。それはあなたの樣な女性にとつて、最も適はしい仕事です。あなたは親切な愛情と注意深い思慮に富んだ方です。あなたの看護を受けた人々が、人類愛に目覺め、お互に殺し合ふと云ふ事を憎む樣になるのは疑ひもない事です。あなたのやさしい影響によつて現在ヨーロッパに戰手をしてゐる恐ろしい戰爭を中絶せしめて下さい。併し貴女の御健康にも呉々氣を付けて下さい。こんなに互が遠く離れてゐると云ふだけで充分に淋しい事です。その上もし萬一、私達が幽明界を異にする場合にでもなつたら、どんなにそれは大きな淋しさでせう。もし私達が現實に手を握り、唇を接する事が出來ないならば、せめて手紙の中にそれを交しませう。

度々お便りを下さい。お閑のある度に書いて下さい。私も間違なく書きます。母君によろしく。

あなたに告げるといふより、要求する。この手紙が着き次第、返事を下さい。それを約束して下さいますか。あなたは常に私の愛の奥深くに住んでゐる事を信じて下さい。淋しがらないで下さい。私も淋しがりますまい。愛のある所、人生は生甲斐があります。あゝティルダよ。どんなに私はあなたを愛するか。

一九一八年八月十八日（輕井澤より）

妻の死、その他の報道を書いた手紙を御受取り下さいましたか。その后如何お暮しですか。病者、傷者の看護に御力めの事と思ひます。さうしてあなた自身御丈夫で御元氣ですか。いつも〳〵幸福で居られるように。あなたにそれを望む價値があります。既に耐へがたい様々

の不幸を耐へて來られました。今や慰安を享けられてよい時です。私自身は依然元氣で夏をこの避暑地に送つてゐます。こゝには實に澤山の外人が居ます。此地は三千呎の高原で非常に涼しく全ての人が夏の長い事を願つてゐる位涼しい土地です。三人の子供達も極めて元氣です。淺ましい戰爭の事は噂を聞くさへ忌しい事です。が日本も、今度その戰爭に參加したらしいのです。さうして一部軍隊のシベリア出兵の準備をしてゐます。私も國民軍の一人として（この事はあなたに知つて貰ひ度いのですが）出征簿に載せられてゐます。何と×な事でせう。それは實に何の意味もない事です。

もうそんな事は止めませう。あなたに對する暖かい友情、それこそこの手紙を書く第一の目的なのですから。誠の友情を心に懷くものこそ、國家別、皮膚の色の相違などを忘れて、固く結ばれませう。心と心とが深く結ばれようとする願のみ、世界の眞の平和を齎すでせう。あなたもさうお思ひになりませう。さうならば假令小さいながらも、あなたと私とはこゝに眞の平和の締結の楔となる事が出來ます。

こんな難かしい理窟はさておいて、あなたの事を想ふ度に、私の心は波立ちます、それは不思議な位です。神が常に凡ての罪惡からあなたを守つて下さるように、さうして慰めを與へて下さるように。

私は著作に忙しく働いて居ります。第六番目の著作集が出かゝつてゐます。それは九月初に出版の豫定です。あなたが私の書くものを讀んで下さる事が出來たらと思ひます。假令あなたがお讀みになれなくとも、一部送りませう。さうして假令外觀だけでも、あなたの興味を惹くかも知れません。その本の裝幀は壬生馬の手になるものです。弟は美しい家内と、可愛い娘と共に、幸福に暮してゐる事を序でながら申し上げておきます。

出來るだけ度々お手紙を下さい。互に文通する事によつて互の距たりを縮めませう。距離を忘れ、宛かも顏と顏と向き合ふやうな通信を交しませう。あなたのなさる事、あなたの健康、あなたの將來の計畫、希望、心配、それ等に關する凡てを一々知り度く思ひます。言葉の差と云ふものが嫌はしく思はれます。私達が考へ感ずる所のものを、そのまゝに傳へる事の出來ない言葉の相違と云ふことです。若し全世界を通じて同一の言葉であるならば、どんなに良いでせう。さうすれば私達の感情をそのまゝ知る事が出來ます。國別と國語別の不必要な障壁、こんな呪はしいものはありません。

母君は御機嫌いかゞです。ガムペルや、シュミトや、プウフマンは？ それらの人々の消息を御存じですか。それからエンマ、フォルスターは？ リリエン スカヤは？ 私達が無邪氣な小兒の群のやうに一緒に遊んだ日の事を想ふと、樂しい夢のやうです。物事は移り行きます。しかしティルダよ。私は變りません。私はいつもあなたの心からなる友で、いつも貴女の幸福を祈つてゐます。心からなる接吻を以てこの慌たゞしい手紙を閉ぢます。

よき夢と、よき現實と共にあなたを見舞はん事を祈ります。

二伸。恐らく一月後に私は東京に歸ります。御手紙はどうぞ東京宛に下さい。

一九一九年一月十五日（東京より）

御心の籠つた長いお手紙を頂きました。感謝と感動とを以て讀み了りました。何よりも先づあなたが御丈夫で常に渝らぬ愛と熱心とをもつて貴い仕事を續けられてゐる事を喜びます。最近のお姿を寫したお寫眞を送つては下さいませんか。同封にて私と三兒の寫眞をお送りします。私も隨分年をとりましたらう？ しかし私の心は老いず、若い羊のやうに、ときめき躍つてゐます。

血醒い歐洲の天地に平和の訪れた事は何といい喜ばしい願はしい事でせう。平和克復の聲を聞かれた時、あなたの胸はどんなに踊つた事でせう。この恐ろしい國際間の鬪爭から遠く離れてゐた日本人でさへ、平和成立の聲を聞いては「萬歳」を叫ばずにはゐられませんでした。この大事件の結果として、よし「黄金時代」を期待する事は出來なくとも、これを轉期とし、世界文明の潮流は全く新しい方向を取つて進んで行かねばなりません。「國家」と云ふものがその限られた領域に退き、これに代うるに人類と人格の威嚴とが進歩の原動力として立たねばなりません。ドイツ帝國の專制政治の末路と共に、我國にも亦民主主義の精神が入つて來ました。さうしてそれは頑冥な偏見者から不當に排斥せられてゐます。併し時がその解決をするでせう。さうして新しい精神は愚かな傳統を滅し、やがて取り入れられるでせう。あなたの祖國が既に數世紀以前に近代思想を體得せられた事は、如何に幸福な又先見の明でしたらう。

私達がシャッフハウゼン滯在中に會つた人々の上にかゝつてゐる運命は私の氣になり、又私を悲しませる事です。ペシュリンはもうこの世にはゐないでせうか。あまりにも意外な又悲しい事ですね、あなたの母君は尙御元氣ですか。あなたの許婚者の心が再び歸つて來るのを、殆ど絕望に近いその事を今も尙待つて居られるのですか。何んと慘ましい悲しい事です。運命は如何にしてかくあなたに酷なのでせう。

貴方はいつか日本を訪れると云はれましたね。それはいい。僞でないように。私の生ける限り心からの誠をもつてあなたをお迎へします。

私は文筆の仕事に一生懸命勵んでゐます。既に七種の出版が市場に出、何れも十版以上を重ねてゐます。之は日本の書物としては珍らしい成功と云はねばなりません。私はそれを英語に譯して、ヨーロッパの人々の間に讀者を得られたらと思ひます。いつかはこの望を實現したいと思つてゐます。壬生馬は家族と今、海邊に住つて繪筆に親しんで居ます。少しく健康を損してゐるので、海岸にゐる事が彼の健康を回復するに最も良いと思ひます。

ティルダ！ 手紙を下さい。澤山書いて下さる程良い。あなたの消息はいつも私に力を齎します。人生に力を與へるものは暖かい心のみ

です。あなたの心、それは私に無くてならないものです。忘れないで下さい。どうか、ティルダよ。

心からあなたの御健康と御幸福とを祈ります。

一九一九年三月十五日　東京より

元日に書かれた御手紙が暖かい愛と友情とを以て屆きました。心からなる感謝さうして更に〱大きな悦！　私達の心がかくも結ばれて、時の距たり、場所の距たりも、之を妨げる事のないのは不思議です。私が軍隊名簿に登錄され戰線に送られるかも知れないと云ふ心配は無駄でした。私は召集されませんでした。さうして今や戰爭も終結を告げました。それのみならず、停年で今は全く軍籍から退いたのです。さう云へば年を老つたものですね、然も私の心は青年の心です。仕事は之から始まるのです。畢生の仕事を完成させる爲めに私は長く生きなければならない。あなたも長生きをして下さい。而して日本來遊と云ふあなたの夢が實現されるように。貴女が日本へ來られるようになつたら、どんなに私は嬉しいでせう。貴女が一生に一度日本を訪ねられる事は意味のある事です。

私は尚著述に勵んでゐます。私の著作（今までに七册出たのですが）は特に若い人々の間に評判が良く、私はその爲めに勇氣を得ます。或著作は一萬部から賣れました。それは日本の出版界には稀有の事です。私は同胞の爲に何事かをしてゐると思ふと喜ばしいのです。**唯だあなたがそれを讀んで下さることが出來ない。**

母君が尚御健全な事を知つて喜ばしく存じます。私の家族も皆丈夫です。子供達も立派に育ちました。三人の中二人は小學校に通つてゐます。寫眞をお送り出來ると良いのですが。その中に一枚寫してお送りしませう。どうかあなたのも御送り下さい。

日本は今××××が起り兼ねまじき危機に立つてゐます。民主的の傾向は今や一般人の心に浸み亙り、社會生活の改造に對する何等かの方法が講ぜられないならば滿足しない狀況です。我々は六十年以前に所謂維新を經驗しました。それは單に西洋文明を（特に物質方面に於ける）鵜呑みにしたに過ぎません。今や西洋の思想が國内に充ちわたり、國民思想を××から××せしめようとしてゐます。その結果はどうなり行くか。誰にも分りません。しかしそれは興味のあると同時に××すべき事柄です。

無用な理論は扨おき、今一度あなたの手を取り、今一度なつかしいあなたの聲を聞き度いと云ふのが私の願です。なつかしい〱ティルダよ、私が日本への歸途あなたは幾度あなたの誠を認めて送つて下さつたのを御記憶ですか。港々で私はあなたのお便りを受け取り、大きな大きな慰めを受けたのでした。私がチューリッヒを立ち、ドイツに向ふ時でしたね。私達はゲーテ通を停車場の方へ歩いて行きました。私達は別れの最後の瞬間までお互の目と目でやさしい語らひをつゞけたのです。それ以來私達は一つ心です。心で固く結ばれてゐます

これ程強い友情がこの世に二つと他にありませうか。ティルダ！　この友情を大事に持ちつゞけて行きませう。私達の墓場までも。最愛のテルダよ。この手紙に托して私の熱い〳〵接吻と、抱擁とを送ります。私の貧しい英語では私の心は表はす事が出來ません。兎に角言葉を以ては人の心の最も深い所を傳へる事は出來ません。字と字、句と句の間にあなたは私の愛を讀み取つて下さるでせう。私の愛する、誰にも増して愛するティルダよ。

一九一九年九月廿六日　東京より

餘程以前に御親切な御手紙を有りがたく頂きました。今日まで御返事の遲れた事を眞に濟まないと思つて居ります。私の怠惰をお許し下さい。あなたに對する私の愛は微塵も搖ぎはしないのですが、英語を書く力がだん〳〵駄目になつて來るのです。あなたは私に倣はないで下さい。この手紙着き次第返事を下さい。御元氣で傷病者にあなたの貴い仕事を續けておいでの事と信じます。旣に全世界に平和が來ました。確に間違のない事實です。しかしその平和なるものが、如何に用心深く裝ひをこらしてゐるでせう。いつでもその假面をはぎ、平和の天使は惡魔の姿を表はす事が出來るでせう。吾々は眞の調和ある平和の爲めに尙努力せねばなりません。

　私の著述の仕事については私の全能力を盡して、藝術的作品を生み出す事に努めてゐます。さうして、眞に私に同情のある、期待を私にかけて吳れる、讀者を得つゝあります。數に於て旣に三萬、之はあなたの國に於ては多數ではないかも知れませんが、日本の讀書界に於ては莫大な數と云へます。私はかゝる多數の讀者を得る事によつて何か仕事をなす事が出來ると考へます。あゝ、もしあなたが私の傍にゐて下さつたなら。恐らくはもしあなたが我國語を分つてさへ下されば、あなたこそ私の藝術を最も強く支持して下さるでせうに。而して友誼と愛とを以て私を最も強く力づけて下さるでせうに。國別、更に又國語の差こそ呪はしい。しかし英國の作家の一人が私の劇の一つを英語に譯さうと云ふ企てもあるのです。もし出來上れば最初の一部はあなたに贈られねばなりません。

　この手紙に日本の切手を同封します。貴女の甥御さん達に喜ばれゝば幸です。その中の幾つかは珍らしいもので、日本でさへ求め難いものです。ヨーロッパの切手をあなたから御送り下さいませんか。子供達が本當に熱心に集めてゐますので、どんなに喜ぶでせう。

　お送り下さつたお寫眞はあまりあなたに似てゐない樣です。あなたは少し固くなつて見えます。本當はもつと暖かで、もつとやさしい。それでもあなたのお姿に接するのは久しぶりです。私はそれを大事にとつておいて、あなたが側にゐて下さる事を感じませう。繰り返し繰り返し御禮を申します。

　ティルダよ。私はいつも心からの友としてあなたを想つてゐます。それを繰り返す必要はない。しかもそれを繰り返し云ひ度いのです。

さう書く事が私を喜ばせるのです。あなたは二つ家を持つて居られる。一つはあなたの今住んで居られる所に、今一つは私の居る所に。私の事を想ひ出される時があればいつでもお手紙を下さい。

ティルダ！ ティルダ！ あゝティルダよ。心からなる接吻と抱擁とを以て。

一九二二年一月十四日 東京より

露の如くにあなたのお便りは私の眼を潤しました。三度まで私は悉しい便りを書かうとして、いつも書き度い事がありあまつて筆が進みません。あなたの懐しい友情に對しいつも私が感謝してゐる事は御想像以上です。ティルダよ、湖畔の散歩を覺えてゐますか。その時は月が美しかつた。空氣は冷く肌ざはりがよかつた。他の人人も私達の前を歩いてゐました。私はあなたに寄り添ひ、あなたのポケットに手を入れてあなたの手を握りしめやうとしましたが、あなたはそれを許されなかつた。その筈です。あなたは婚約中だつたのですもの。惡く取らないで下さい。その時のあなたに對する私の感は最愛の妹に對するそれでした。私は自分の行爲を恥かしいとは思ひません。私は親しくあなたに觸れないでは、私の感情を傳へる事が出來ないと思つたのです。併し、お別れに際して停車場であなたの眼が私の眼を射、他の何物にも比べられない數多の愛撫の意味を傳へられた時、私は全く滿足し、私達の生命のある限り、二人は離てる事の出來ない友だと云ふ事を知りました。しかしそれは實際に證せられました。數年の長い年月の後、私達はかうして心からの友情を抱いて相對してゐます。ヨーロッパの旅行中の友人の追憶も凡て失はれました。たゞ一人あなたのみが殘つてゐます。あなたは私を忘れない唯一の人、さうして私が忘れない唯一の人です。これは偶然な併し又必然な事です。

お手紙には書いてないが、御元氣の事と喜んでゐます。併しあなたが野戰病院の仕事を止められてから、何をして居られるか分りません。今でも母君と一緒にお住ひですか。さうして母君の御機嫌はいかがですか。シャッフハゥゼンにゐた時の友はどうしてゐますか。ガムベルは？ リリエンスキーは？ シユミットは？ エンマは？ 一度それらの人々に就て知らせて下さいまし、その後の消息を知り度いものです。

私は相不變元氣で、文筆の仕事に勵んでゐます。小說、脚本、紀行その他の諸篇を含めて既に十三の著作集を公にしました。私がヨーロッパの旅に就いて、ナポリからアッシジまでの印象を記した旅行記を一部贈呈します。私の物した小さなスケッチが、あなたの興味を惹くかも知れません。字はお讀みになれなくとも、少くとも繪はお分りでせう。

來る可き春に私の胸に長い間抱いてゐた望を實現しやうと思つてゐます。即ち父から受けた全ての財產を棄てゝ、一介の文筆勞働者として生きて行かうと云ふ事です。社會的の地位とか、物質上の財寶とか

は、唯私の生涯を妨げるだけです。何等か價値あるものを生み出す前に裸一貫の人間であらねばなりません。さうでなければ、次の時代の正しい位置を算定する事が出來ません。あなたは私を馬鹿らしい、急進派だとお取りになるかも知れません。が、さうではありません。私は唯近い將來の日本に於て、凡ての人がなさねばならぬ事をするだけです。この試練に自分はよく耐へ得ると信じます。あなたも同じ意見であつて下さる事を願ひます。三人の子供達も立派に成長しました。私は大きな興味をもつて彼等の將來を樂みに見て行きませう。壬生馬は少なからず健康を損してゐるので、家族と共に東京から三十哩ばかり離れた海邊に住んでゐます。しかし今では一日々々快くなつてゐますから間もなく全快するでせう。或る婦人に托して、お送りした荷物は無事に着いたさうで安心しました。その婦人の夫は日本で私が教鞭を取つたと同じ學校でドイツ語の教授をしてゐます。その名前はハンス、コラーと云ひます。コラー夫妻は實に良い人です。特にコラー夫人のやさしい思ひ遣りのある性質が好きです。もしコラー夫人の住所を御存じで訪ねられるやうな事がありましたなら、貴方は非常に良い友を得られるでせう。

最愛のティルメよ。こんな風に書きつゞけてゐては際限がありません。もう止めなければなりません。筆を擱く前にもつと度々手紙を下さる事を約束しませう。私も亦もつとお便りを送ります。私の事を想ひ出されたなら端書なりと下さい。あなたの事に就て書いて下さる事が、どんな喜を私に與へるか想像なさる事も難いでせう。あなたも同じ心持でゐて下さると思ひます。

幸福な平和な生活をお送り下さい。一度で良いから、僅かの期間でも良いから、日本へ來られるといふ夢をお棄てにならぬよう、最愛のティルメー　抱擁と接吻とを以て。

一九二二年三月四日　東京より

今日は私の第四十四回の誕生日で、あなたにお便りを書くに最も適はしい日だと思ひます。御機嫌如何ですか。變らず御元氣である事を祈ります。春は來ましたものゝ未だ淺く、梅や桃の花盛りでも、大分寒いです。先達、さうですね、一月も前ですか、オイゲン、ヱールリといふ瑞西人の醫學博士が私を訪ねて來られました。その人はシャツフハゥゼンでの親しい友達の寫眞を澤山持つて來て下さいました。日本に有島と云ふ兄弟がゐるから、行つたら是非逢つて來いとあなた方に云はれたのださうですね。けれどもヱールリ氏はアドレスを失つてどうして私達を探したらいゝか分りませんでした。所がアメリカから日本へ來る太平洋の船中で、最初に話しかけた一人の若い日本人があつたのです。それが(不思議な緣にも)私の二番目の弟だつたのです。その弟の姓は佐藤と云ひますが、その佐藤が私共の住所を教へたので、暇をみて直ぐ私の所を訪ねて來られました。どんなに喜んで氏を迎へたかはあなたの想像に任せます。その寫眞の一枚に、壬生馬が

カムペルヤブフマン等とライン河の畔で、倚り添つて立つてゐるのがありました。勿論私が氏に尋ねた最初の言葉は貴方に就いてでした。博士は嘗て「白鳥ホテル」の直ぐ近所に住んでゐた事があつて、貴女の家族とはよく知つてゐると云はれました。さうして貴女が、今ホテルの近所に本屋の店を開いて居られる事を語られました。それだけの事を知つたのでも私は非常に喜びました。世界といふものも結局は何と小さいのでせう。

私は目下新しい小說に全力を盡して居ります。隨分長くかゝりますが、その完成を樂んでゐます。それは私の若い時の學生々活をモデルとしたものです。そこには私が默しては居られない位澤山の喜ばしい、又悲しい追憶があります。

同時に私は亡き父から讓り受けた財產を凡て拋棄し、全く裸一貫にならうと云ふ計畫を眞面目に企てつゝあります。あなたはそれを度外れの事と思はれるかも知れない。けれどもかくする事によつて、私は過去の仕事とは比較にならないいゝ仕事を作り出して行けると確信してゐるのです。私の過去の仕事は云はゞ遊戯でした。今著作と云ふ一事に私の生涯を限定してこそ、讀者の心の深い〳〵所まで訴へる事が出來ると信じます。私の變化を喜んで下さい。僅かの人だけが私の決心を理解して呉れます。さうして貴女がその中の最初の人でなければならない。今后私の書翰紙は次第に粗末なものとなつて行くでせう。もしあなたが日本へ來られたとしても、私の家であなたを充分におもてなしは出來ないかも知れません。しかしそれにも不拘、あなたは私の中によりよき人間を見出して下されるでせう。私は有產階級の生活といふものに全く望を失ひました。その種の生活は危機に瀕してゐます。その中から望のある出口はありません。行きつまりの道同然です。より新鮮な、より淨化された空氣を呼吸する爲めには、それから先づ脫け出なければなりません。

あなた自身のことを偕て語つて下さい。御仕事はどうですか。母君は？その他色々の事を。リリイ、ペシュリンの寫眞を見ました。今友達と幼稚園を開いて居られるのださうですね。隨分變つた樣に見受けます。昔の愛らしさがなくなつて寧ろいかめしい樣子に變りましたね。それは現在の職業のせいでせうか。それとも何か不幸にでもあつたのですか。又エンマ嬢の寫眞も見ました。所々皺を見かける他あまり變らない樣です。兎に角皆が年をとつて行くのですね。しかし、しかしティルダよ。私の心は決して年をとりません。少くとも私は昔つて私の胸の中に鼓動したと同じ火のやうな心を持つてゐます。それは奇妙な位です。而して私の心の最も神聖な場所に、あなたはいつも變らず、若く、やさしく、愼み深く藏されてゐます。

一九二二年三月廿日　東京より

春になりました。梅はもう散つて桃の時期です。瑞西の町では長い雪と嵐の冬が過ぎて、美しい樂しい季節になつたでせう。お障りなく

多をお過しでしたか。お蔭で私も相不變元氣、新しい小說を書く事に精出してゐます。

同封で昔送つて下さつたあなたの御寫眞をお送りします。色々物語をお想ひ出しにはなりませんか。仕事の合間に一寸閑がありましたので一筆。」

一九二二年四月五日　東京より

あなたとコラー夫人とからのお手紙を頂いて大變喜んでゐます。同夫人から色々私の事をお聞きでしたらう。本當に親切な高貴な婦人です。當地は春が酣はです。お友達の音樂家に日本で適當な地位をお尋ねの手紙に就ては何れ後で御返事致しませう。コラー夫人との御交際が益々親密になり行く事を祈ります。

一九二二年四月十八日　東京より

二月七日附御手紙約一週間程前に頂きました。音樂にそんなに秀でて居られるディスラー氏（註、ティルダは目下その妹にあたる人と共同してホテル經營をしてゐる。）をお迎へするのは非常に喜ばしい事です。日本の若い人達は西洋音樂の傑作を優秀な音樂家を聽く爲めにあらゆる機會を待つてゐる有樣です。しかし、經濟的には少しも惠まれてゐません。唯經濟的後援がないと云ふだけの理由で、若い人達の音樂に對する憧憬も滿されないのです。それ故に良い音樂を聽き度いと云ふ燃えるやうな望がありながら、吾國にはまだ一箇の管絃樂團もありません。かゝる狀況ですから、ディスラー氏の來朝も、非常な困難を見越さねばなりません。東京に一つ國立の音樂學校があります。そこに數人の獨逸人の教師がゐます。しかしその學校は頗る官僚的で、本國政府によつて資格あり、權威ありと認められたもの丶他は、絕對に採用しません。それのみでなく、それらの教師連は來朝當時はその本國でも何れも一流の人々だつたと云ふ話ですが、時と共にその技倆は著しく落ちて、數年後歸國する頃には本國の音樂家に伍してその名も技倆も非常に低いものとされ、殆ど存在さへ認められないやうになるさうです。此大きな缺點と技倆の退歩とは日本の音樂界に競爭者がないと云ふ事に基因してゐるらしく思はれます。ディスラー氏が日本へ來る事を決心される前に、この事情を充分よく考慮される必要があると思ひます。私の考へる最も良い方法は東洋をざつと旅行してまはつて、日本、支那、印度、濠洲の大都市で演奏會を催される事です。既に我國はエルマン、シューマンハインクなどを迎へ、之等有名な人々の技を聽きました。近く六月にはヂンバリストを迎へる筈です。之等の人々の技倆は聽衆によく感ぜられ、その仕事は十分酬ひられたと思ひます。もしディスラー氏がこの種の旅行を望まれるならば、その興行に日本で一番適した帝國劇場の支配人に話し合つて見ませう。日本以外の國々の事は何等か他の方法で契約されなければなりますまい。この方法が一番安全でせう。どうかディスラー氏に萬事を

相談して下さい。その上あなたからお指圖で凡てを取計らひませう。

先達あなたとコラー夫人デ　スラー夫人（ディ　スラー氏の奥さんだと思ひますが）の寄せ書のお端書を頂きました。貴女方の御厚意を有りがたく存じます。コラー夫人の愛すべき性格をお分りになつたに違ひありません。私はコラー夫人を本當に高貴な人だと思ひます。あなた方お二人がお互に親密な友となられる事を祈つてゐます。その端書にその中長い手紙を下さるとお書きでした。心からお待ちしてゐます若しこの手紙を御覧になつて未だその約を果して居られなかつたなら凡てを措いて直ぐ書いて下さい。あなたのお手紙を開く時、いつも、神秘な喜が私の心に忍び寄ります。この世界の廣さと狹さを痛切に感じます。私達の知り合ひになつてからの長い年月も、たつた一瞬に縮まつてしまいます。その時私は私の傍に貴女を感じます。（ここに私の寫眞を入れておきます）ああ、私は前にそれを送つたのでした。何と云ふ馬鹿でせう。

コラー夫人にお逢ひの節はどうぞよろしくお傳へ下さい。それから夫人の住所をお知らせ下さい。デ　スラー夫人には「私の最も親しい友の友は又私の最も親しい友である」事をお傳へ下さい。

最愛の乙女よ。我が心からの祝福を受けられよ。

一九二二年六月廿日　東京より

五月四日附のなつかしいお便りを數日前頂きました。どんなに心から喜んだでせう。今度は特別に長いお便りを下さいました。

何よりも貴女の親しい友の一人が近々日本へ來られると云ふ事を知つて喜ばしく思ひます。さうして最近の消息を色々伺へる事を樂みにしてゐます。その方が見えたら、私はあなたに關して、あらゆる細かしい端々まで聞き出さずには置きません。

私は相變らず元氣で、最近二册出版をしました。何れも相當眞率な賞讃を受けました。同時に財産處分の仕事にかゝります。全部片附くまでには相當長い時間がかゝりさうです。それは重大な仕事で、私は自分だけで靜かになさねばなりません。私は銀行株の他に幾らかの不動産を持つてゐます。その値段は大變廉くなつて來て、恐らく合衆國を除く外、他の凡ての國に於ても同樣である樣に適當な買手を求める事が困難です。集積した文明は急速に崩壊しつゝあるやうです。それは或意味に於てゞはありますが良い兆候でせう。

あなたのお友達の音樂家に關しての私の手紙はお受取でせう。殘念ながら日本で滿足な地位を見出すのは不可能ではないかと思ひます。

なさねばならぬ、差し迫つた仕事がありますから、今日は短信ながらこれで筆を擱きます。短くとも、長い手紙にも表はし切れない心からの愛をお送りします。ティルダよ。信じて下さい。お互の心を結ぶ愛の奇しき事よ。貴女に呼びかける毎に私の心の高鳴りを覺えます。常に私の心の奥深く貴女が若々しく、思ひやり深く生きてゐて下さる事を祈ります。

（終）

蘇峰自敍傳（追憶記）

蘇峰　徳富猪一郎

第八　熊本に來た第一年

予が熊本に出たのは、何月と云ふことを記憶しない、多分明治三年の秋の半を過ぎた頃であつたらう。それは途中にて稲の穂が熟してゐたのを今尚ほ覺えてゐるからである。當時父は藩命に應じて熊本に出て藩廳の役人となつてゐたが、一家は尚ほ水俣にあり、父は熊本に旅寓生活をしてゐた。予は直の姉――湯淺初子――と共に、横井叔母に伴はれて出掛けた。横井叔母は即ち小楠先生の夫人、母の妹である。當時保養旁々水俣の吾家に來てゐたがその歸るさに、予及び姉は伴はれたのである。水俣から松橋迄二十里の間は、例の如く小舟にて往つた。ところが風が凪いで舟は動かぬから、性急なる予は、辛抱が出來ず、頻りに船頭に喰つてかゝつた。それには叔母も閉口したやうだ。大正十一年久振りに水俣に歸りたる時、勘左衞門といふ八十有餘の老人が來りて、頻りにその時の事を話してゐた。彼が當時の隨行者であつた。彼は吾家の召使であつて、吾父の通信機關であつた。彼は若き時には水俣から熊本迄、二十五里の間、しかも三太郎の險を越えて、一晝夜に往復したといふことであつたが、それは掛け値にしても、なか／＼健脚であつた。予も六十有餘となつて、稠人廣座の眞中で、斯る昔噺を持出されては苦笑せざるを得なかつた。然るに一昨昭和二年水俣に歸りたる時は、彼は已に不歸の客となり、その甥が彼に代つ

て面會に來つた

話元にかへる。

扨いよ／＼松橋に着し、それから陸上五里の間は、叔母は駕籠に、前に云つた勘左衛門と姉及び予は歩行したが、駕籠の脚は早く、從ふ勘左衛門の脚は倘ほ早く、姉と予兩人は全く後に振り殘され、聊か心細くもあつたが、この大道を歩けば、行き着く先は、多分熊本であらうと思ひ、宇土といふ三萬石の城下を過ぎ、川尻といふ町の手前、緑川の渡しにてやうやく勘左衛門が待受け、又叔母の駕籠と前になり後になり、やうやく熊本城の見ゆる處迄來たが、叔母は頻りに駕籠に乘れと云ひ、予も乘りたくないこともなかつたが、折角これ迄歩いて來たのが、叔母の駕籠に相伴をしては、面白くないと考へ、遂に足を引摺つて、熊本、本山なる三村氏の家に着した。三村氏は予の外祖母の家にして、又予の母の長姉の縁付きたる處。當時の伯父は、予が父と共に、藩廳の役人であつたが、何か父等と意見の合はないことがあつたか否は知らないが、やがて役をやめた。父はそこから近き矢部の出張所を借り受けて居た。當時熊本には各郷から（當時は郡―郷―村）出張するに、その出張所があつた

即ち父の寓居は矢部郷の出張所であつた　其處には父の

僕、若黨、書生、一切男世帶にて、やがて予の第四姉――湯淺初子の姉大久保音羽が――來つた。予と同行したる姉は、叔母に伴はれて、そのまゝ横井家に赴き、四姉は予の伯母竹崎家に居たが、竹崎家も亦た吾家と同樣、熊本に召出されたが爲に、姉は父の旅宿に歸つて來たのだ。

父が藩廳に出勤する時には、僕や若黨は父に伴つて出勤し、書生はみなそれ／＼學校に赴いたから、後に殘る者は、予と姉と二人であつた。外に仕事もないから、二人で盛に喧嘩をしたが、あまり喧嘩をして、遂に長屋のお婆さんが、仲裁に入つたことも屢々であつた。予は到着當時は、論語の素讀を三村の外伯父――予の母の長姉の夫――に授かりに赴いたが、讀方が田舍讀でいけぬから、改めねばならんと云はれて、頻りにその讀方を正された。凡そ素讀にはそれ／＼讀方があつてなか／＼面倒なものである。例へば、子曰くとあるのを、『子のたまはく』とか『子のとふまく』とか若くは『子いはく』とか種々に讀んでゐる。山崎點、後藤點、道春點、一齋點などゝ云ひ、それ／＼訓點者によつて、讀方がなか／＼違ふものだ。數へる人によつ

て、その點者が違ふから、自然、讀方も違ふことになる。

當時予は已に髮を切つてゐたやうであるが、父は結髮であつたやうに覺えてゐる。朝暗き中から起きて僕が父の髮を結うてくれてゐたやうに覺えてゐる。父の頭は最早や白黑相交り、その髮をみる每に、予は自然父が老人であり、それにしては予は餘りに幼くある。如何にして父に追付くことが出來やうかといふことを、自然自ら考へざるを得なかつた。或時三村家から父の宿所に歸へる時に、横井家の老女壽賀といふ婦人と道件れになつた。壽賀は叔母が小楠先生に嫁ぐ以前から横井家に居たもので、なか〳〵有力なる女であつた。その時に如何なる話のハズミであつたか壽賀の問に答へて、予は早く年をとつて、父の跡を嗣ぎたいと云つたことを記憶して、予が成人の後に、壽賀は屢々予に向つて『貴君はなか〳〵若い時からコマツチヤクレテゐた』と語つた。別にコマツチヤクレテゐたわけでもあるまいが、父も常にその跡目を相續する者のなかつたことを歎じ、たまたま予が生れた後は、なんとかこの子を早くものにしたいと考へてゐた。それが別段その通り父から訓されたわけでもなかつたが、自然予の幼心にも深くしみわたり、なんとかして一年に年を三ツもとつて、早く父と予の間に距離が近くなるやうにと祈つてゐたことは、寧ろ當然のことゝ思はれる。

やがて予は高田原なる高野先生といふ寺小屋の少し毛色の違つたやうなところに行くことになつた。これはその附近に藤島伯母がゐて、その紹介であつたと思はれる。藤島伯母といふのも亦た母の姉にして、三村の伯母とは双子であつたが、容貌の似てゐるだけにて、その氣象も性格も、全く相反してゐた。その伯母は已に後家であつて、その長子の正健氏は當時多分東北地方に官遊してゐたであらう。

扨右の高野先生の家に每朝通ふことになつたが、予にとつては種々の困難に際會した。熊本城下の人は自から威張るばかりでなく、驚くべき程地方の者を輕蔑した。如何なる立派な身分の者でも、地方から出た者は、まるで特種部落の如く輕蔑した。之を賤稱して、在郷兵衛と云うた。それから士族と輕輩との差別が非常であつて、百石以上を士族と云ひ、中小姓以下を輕輩と稱してゐたが、予は田舍者であり、且つ輕輩である。しかも予が田舍訛を彼等は盛に口眞似して嘲笑した。予は可成りおしやべりであつたが、嘲笑せらるゝよりも、默つてゐる方が

得であると思つて、熊本言葉の稽古がすむ迄は、成可く口を開かぬ事とした。田舍者であることは致方ないが、幸ひ高野先生の處は、先生自らが輕輩であり、又た生徒も過半數は輕輩であるから、別に輕輩であることを深く耻づることもなかつた。唯だ困難であるのは、往復の途中である。到る處に當時の少年等は己れに異りたる者をいじめることを、一ッの愉快としてゐた。小石を投げる、砂をふりかける、唾を吐く、悪言を放つ。時としては向うからぶつつかつて來て、何故にぶつかつたかと云つて喧嘩をしかける等のことは、殆ど當前であつた。予は彼等と喧嘩したりとて、何も己れに得することはないから、成可く彼等と接觸しないこととした。それで彼等が待伏をし、若くは通行をしつゝあるに、成可く出會せぬ樣にして、常に警戒して歩いた。幸ひにその爲に一度も彼等に侮辱せらるゝ樣なことはなかつたが、侮辱せられまいとして警戒したことは、決して尋常でなかつた。予は今日に於て何故であつたといふことを想起することが出來ぬ。或は途中の面倒を避くる爲であつたか、若くは勉强の都合であつたか。ゆくもなく、先生に乞うて、先生の家に寄宿するやうになつた。固より予の外に寄宿する者は一人もなかつた。先生は尚ほ獨身であつて老母が居られた。老母は夜中予の薄き蒲團の下にある双脚が、鐵火箸の如く堅く且つ冷なるをみて、可哀相であるとて、涙を流さんばかりにいたはつた。高野先生は、わざ〳〵紫の紐にてその長髮を束ねてゐた。結髮ではなく、束髮だ。よくはわからなかつたが隨分時勢に反抗してゐたやうだ。時にはその年長の門人と共に國友先生の會讀に出掛けたやうだ。國友先生といふは、熊本に於ける漢學者の一人であつた。唯だ予が意外に思ひ、且つ興をさましたとは、先生がその老母と、屢々喧嘩口論することだ。苟も先生とも云ふべき人は、決して親と喧嘩するなどといふことはある間敷きことゝ思うたが、先生はなか〳〵やつた。時としては鏡餅などを盛に投げつけてゐたことがあつた。それ等のことをみてから予は長くその處にゐるを欲しなかつた。

斯る場合に、若くはそれと前後して、母始め一家はいよ〳〵家を擧げて水俣から熊本に引移すことゝなり、斯くて明治三年の暮には熊本東郊大江村に引移つた。こゝは野中の一軒家にて、適に一町餘を隔てゝ元田先生の家と相接した。吾父の居をトすることになつたのも、元田先生の直接ではなかつたかも知れぬ

が、先生の家の人の世話であつたといふことを聞いた。此の如くして予の熊本に來た第一年、卽ち八歳は暮れた。

（昭和三年三月二十三日　大森山王草堂に於て）

第九　兼坂先生

吾家が大江村に移つて以來、予は高野先生をやめて、元田先生の塾に通ふことゝなつた。隣家と云へば云へぬでもない。吾家と先生の家との間には、約一町を隔てゝゐても一軒の家もなかつた。先生の塾にはいづれも年長者のみにて、予の兄といはんよりも、寧ろ父と云ふべき人々が多かつた。予は父に伴はれて先生に謁したが、先生の書齋には何やら青き幕の如きものを排して入り、その中はせい〳〵六疊位でもあつたと覺えてゐる。何やら温厚の面影にて予は父に從つて恭々しく辭儀をし、先生と父との對話を傍聽してゐたが、それが何事であつた歟は記憶しない。その後間もなく先生は東京に出掛けられて、後は先生の重なる門人等がそれ〴〵留守をあづかつてゐた。先生の長子は寧ろ農業專門にて、自ら鍬をとつて百姓をせられてゐたが、予及び吾家より通學する從兄德永規矩等はいづれもその人より素讀を授つた。然るに此の人は敎へる本を自ら讀むことが出來ず、經典餘師とて四書に假名がついてゐるのを持つて、我等に敎へてくれた。併し其人は極めて好人物であつた。その妻君は當時熊本の名士津田弘道氏の娘であつたと覺えてゐる。なか〳〵活潑なる婦人で、先生の家を環る小川にてよく我等に泳ぎなどを敎へてくれた。塾長としては深水賴寬―昭和四年二月八十餘歳にて逝いた―園田太邑などの人々であつた。余は當時深水氏の書いた手本を習ふことゝした。深水氏は水俣の人、代々總庄屋にて、賴寬氏は父の友人といはんよりも、やゝ門人に近き方であつた。當時予及び二三の少年共は塾の傍にある垣根の竹を拔き來つて、それにて模擬戰爭をしてゐたが、或日予等は深水氏より呼びつけられ、痛くその心得違ひを諭され、『御身達は先生の垣根に一本の竹でも附加へねばならんのに、先生の垣根から拔きとるなどとはけしからん』と叱られ、その時丈は、誠に尤もの事と考へ痛く後悔した。自分等は家にゐては、あまり我儘をするといふ事にて塾に寄宿したが、さて夏になつて蚊帳がない。予は何よりも蚊が嫌であつて、これには閉口しその爲に年長者が、わざ〳〵物を入れてゐる行李を空けて、それを予の臥

から被せて呉れた事を覺えてゐる。それでもなか〱閉口した。元田先生は上京せられたが、夫人その他家族の人々は尚ほ家にあつた。予は最も年少者であつたから、屢々夫人に招ばれ種々の御馳走になり、又いつも先生が歸られる時には如何にする乎と問はれる毎に、必ず途中迄御出迎する等と答へて、よくも答へられたと、又しも馳走を重ねられたことがあつた。予が先生の家に行くことを好んだのは、先生の家には、繪入通俗三國志があつた、その書物が最も予を多くひきつけた。吾家には武王軍談、呉越軍談、漢楚軍談等の支那の通俗ものがあり、予はいつの間にかそれを讀み習つて、一通りの歴史上の簡略なる知識はそれで得た。併しそれ等よりも予の最も好きは三國志であつたが、しかもそれが繪入りで先生の宅にあつたから、それを借り受くるわけにはゆかず、機會毎に行いてそれを讀み、且つ眺めた。その中に先生の家族は東京に赴くことになり、自然塾も閉鎖したから、重なる門人の一部は、本山なる竹崎先生の塾に轉じた。



兼坂塾時代の蘇峰氏（向つて右より）德永規矩（從兄）德永次郎（從弟）、蘇峰氏、母久子刀自、長姉初子

竹崎先生の塾とは、吾が母の姉竹崎順子の夫にて、竹崎律次郎後には茶堂と改めた、その人の塾である。予等は固より當然の成行きとして、其處に通學する事となつた。其處も大人が重なる塾生であつたが、時に又た年少生も多く加りて、塾運はなか〱盛大であつた。當時の同學生には林田亀太郎氏等があつた。予は前に云つた如く、予が從兄德永規矩と毎日吾家から通學した。當時予が記憶に殘つたる一事は、或時塾からの歸途白川端にて兩人にて九九を暗記してゐたが、二三が六と、二三が五といふことにて大議論を始めた。德永は二三が六とい

うたが、予は確信を持つてゐるかの如く、二三が五といひ、德永は彼是その理由を說明するけれ共、予は二と二を合すれば、四であるから、二二が四である。此くすれば二と三を合すれば五ではないかと云ひ、なか〳〵議論が埒あかず、遂に毆り合ひとなつて、彼は予よりも二つか三つ年長であつて、予は危く、土手に押しつけられんとしたるが、偶々通行の老人の爲に仲裁せられて、相伴つて家に歸つたことがある。如何に予が數學に趣味を持たなかつた乎といふことは、これにても證明せらるゝ。當時予は全く二三が五と思うてゐたのであつた。

　如何なる理由であつた乎、明白にはわからないが、とても家においては、充分の敎育が出來ないと考へられたであらう乎。又た竹崎先生は親類にて、思ふやうに躾ける事が出來ぬと考へられたであらう乎。或は又た他に理由があつた乎。兎に角予は竹崎先生の塾から、兼坂先生の塾に轉ずる事となつた。予は今明白に記憶してゐないが九歲の末か十歲の初めであつたらう。卽ち明治四年の末乎、五年の初めであつたらうと思ふ。兼坂先生の塾は予の家より二里弱位はあらう。兎に角予が家は熊本の東の極端であつたが、先生の宅は西の極端であつて石神山といふ山の中腹である。當時先生の塾は竹藪の中にあつて、一塾があまりに狹かつた爲に、予は先生の家に寄宿することゝなつた。予は此處にはじめて全く異邦人の眞中に投げ込まれたる心地がした。左右前後一人も予の知つてゐる者は居ない。而して生活の樣式が全く從來とは變つてゐる。予も此處に來つて、自ら悲觀せざるを得なかつた。第一に閉口したのは、淋しき事であつた。友達といふべき者は一人もなかつた。第二に困つたのは食事であつた。凡そ粗食といふが、これ程の粗食なるものは生れて初めてゞあつた。飯は無論粟の飯である。然らざれば麥飯である。予は如何なるわけか麥飯が非常なる嫌ひで一粒の麥をみてさへも最早食氣を絕つほどであつた。麥飯を喰はねばならん程なら寧ろ絕食するといふ程であつた。粟の飯も大抵ならば容赦が出來るが、先生の家の粟飯は、殆ど米の粒は數へる程であつた。副食物と云つては、からき味噌汁、堅き澤庵。たまたま堅き豆でもあればそれは御馳走の部分であつた。予は味噌汁が嫌であり、澤庵が嫌であり、殆ど先生の家に行つては喰ふものがなかつた。それから食事の時には、長幼の序をもつてすることゝなり、先生の家に食事のみに來る塾生が彼是十人餘

もあつたらうが、規則として最後にしまつたものが、すべての人の食膳の始末をせねばならん事になつてゐた。最年少者たる予は予が番になるときには、汁の實などは固より樂にしたくもなく、予が飯を盛んとするときには、上席の者は既に二杯目となつてゐることがあつた。その爲に予は屢々跡始末をせねばならんこととなつて、その爲に如何にして早く食事をしまふべき乎といふことに就いて、非常に練習をなし、飯は嚙むものでなく、呑むものであるといふ原則を發明し、不幸にしてその癖が今日迄殘つてゐる。

そもそも兼坂先生といふは如何なる人であつた乎。世間では先生のことを豚先生と綽名してゐた。その理由は詳しく聞いたことがない。一橋慶喜公なども世間では豚一と稱せられてゐた。いづれにしても尊敬の名でない事は明白である。兼坂先生を豚先生というたのは先生が豚の馳走に人を案內して、あとからその割前をその人々に出さしめたからといふ說がある。

併し兎も角も先生は世間離れのした人であつた。先生の家は五百石取りの士族で立派な武士である。それを維新の際に弟と折半して自分は歸農した。而して先生の家の標札には農と書いてあつた。常時はいづれも双刀を橫へてゐたが、先生はただ脇差一本をさしてゐた。先生の住所は元熊本藩の家老長岡監物の一門米田波門といふ詩人の別莊にて、四時園と稱し、或は百梅園と稱した。それ程澤山の梅があつた。先生は必ずしも貧乏ではなかつた。先生の奧さんは千石取りの林家から來りお八重さんといつた。而して奧さんは臺所は勿論、薪採りまでも自らした。先生の家庭には、先生の繼母、先生の弟、妹、及び僕がゐた。下女は奧さんが勤めてゐた。而して僕の仕事の半は先生の弟が勤めてゐた。妹さんは吾姉大久保音羽の親友で、後には吾姉と相携へて、上州邊に製絲の練習に赴いた。併しそれは後のことである。

當時兼坂先生の仕事は、熊本古城の洋學校に隔日出張して、漢學を敎へる事であつた。然るに先生は當番の日には先生として學校に出張するかとみれば、非番の日には自ら馬をひいて新を賣りに出掛けた。予等は朝から只だ一同先生若くは年長の塾生から素讀を授り、その他は習字位であつた。やがて竹藪の中の塾は廢せられ、石神山の下に長命水といふ有名なる湧き水がある、その前の田圃を埋め、其處に塾が出來、それを藏春堂と稱

し、一時は殆ど寄宿生が二階から下まで塡充した。先生は一般の學生は姑くおき、吾等の如き所謂內弟子と稱する者をば無遠慮に使用した。庭の草をむしることから、湯に入りたる先生の背を流す事などは勿論、家には立派な井戶があるに關らず、殊更長命水の水にて湯を立てることを好み、予等は坂の下から手桶でそれを擔ひ上げた。予の如きは年齡も最も若く、且つ力も最も弱かつたが、併し一人前の任務は是非共負はねばならず、爲に一個の手桶を他の年少者と共に擔ひつゝ、急坂を幾回も繰返したことを覺えてゐる。その他山から薪をかついで來る事やら、粟の穗を稜ることやら、靑麥を蹈み付くることやら、櫨の實を採ることやら、米をふむことやら、あらゆる力役に服した。時としては先生が石神山の上で食事をすると云ひ出し、其爲に飯櫃や、膳、椀をかついで山上まで登つたこともある。家の拭き掃除、お客の接待などは勿論、予が最も閉口したのは、先生の晚酌に侍することであつた。先生は何よりも酒が好きであつた。又たその酒が長かつた。別に相手があるでもなく、一人でチビチビやつてをられたが、いつも豫定分量を過すことであつて、その爲には奧さんと屢々交渉が始つた。奧さんは如何なる人であつた乎、尤も予にはわからなかつたが、未だ曾て先生と云ひ爭つた事もなかつた。而して吾等に對しても別にやさしきといふこともなく、當り前であつた。予は遂に奧さんが笑つた顏をみたこともなく、怒つた顏をみた事もなく、唯だ每日稼ぐ事が本職であるかの如く稼いでをられた。固より奧さんらしく身仕舞などをせられたことも遂にみた事がなかつた。奧さんは瘦ぎすではあつたが、千石取りのお孃さん程ありて、上品の方であつた。先生等夫婦には子がなかつた。話元に戾る。

予は特別先生に愛せられたといふことを感じてゐないけれ共、吾家から先生に拂ふ報謝は、少くとも他家から拂ふものゝ五倍乃至十倍であつたと考へらるゝ。吾家からは可成り丁寧に先生の家には附け屆けをしてゐたやうだ。併しそれが爲といふではあるまいが、若干先生も予を眼中に於てくれたであらうと思ふ。晚酌に侍したのも、先生からみれば特別の好意であつたかもしれない。併し予にとつては、これ程閉口したる事はなかつた。たゞこれが爲に覺えた事は酒を吞むことのつまらないといふことゝ、人に酌をする事の熟練とであつた。又た先生はよく熊本に出掛けたが、出掛ける每に予等はその從者となつた。予

等といふが、相手は變るが、一方の相手は概ね予であつた。時としては先生が熊本市中の朝市場まで出掛けて西瓜などを買つて、それを予等にかつがせて歸つたことがある。或は熊本の知人の家に於ける詩會とか、若くは閑談とかには、予等は玄關に冷き火鉢を擁し、十時過ぎまでも先生の歸るのを待ち、それから一里餘の田舍道を提灯をつけて、先生と共に歸ることがあつた。かゝる次第であつて、予も到底辛抱しきれずして家に逃げ歸つたことが、一度ならず數度あつたやうに覺えてゐる。併しその時には病身なる吾母は駕籠にのつて予を連れ、先生の處に送り屆けたとがあり、又た義兄――第三姉の夫河田精一氏――は父母の依賴にて予を伴ひ先生の家に赴きつゝある途中、菜種畑の中に予はかくれ、河田氏をまいて、その儘家に歸り、押込みの中にかくれてゐた事もあつた。又た吾母はわざ〱人をよこして饅頭や副食物などを送つて來たが、予はそれを如何ともする事能はず、そのまゝ竹藪の中に捨てたこともあつた。併し彼是してゐる中に予の讀書の力も可成りついて來たやうであつた。先生の敎育法とて別にこれといふ新奇の事はなかつたが、小學なども摘要してこれを童蒙可讀と名付け、銘々それを寫すこととした。又た銀臺遺事、藩翰譜採要など、熊本藩の事に關するものを講讀することゝなり、從つて四角なる漢字のみでなく、丸き日本文を讀む力も自らつけられたやうであつた。先生は詩が好きであつたが、詩人といふ程の作があつた乎否かはわからない。書もかき、後には繪も描いたが、それも一通りのことであつた。學問も大概その位のものであつたらう。それは八家文會讀の時にも吾等は無點本を讀み、先生は賴山陽增評の有點本を控へてゐた。併し予は今日に至る迄先生の敎育には負ふところ頗る多大であることを感謝せずにはをられない。先生は予等を伴つて山登りには勿論、時としては六、七里を隔てたる山鹿などへも遠足せられた。先生は漢學者であつたが、珍らしく進步主義の人であつた。先生の書齋とも云ふべき所は硝子張りの障子で、又た先生はランプをつけて本を讀んでゐた。予等は固より日本の行燈に、燈心をともして讀み、後には樟腦油をともして讀み、一夜の中に顏が眞黑になる程くすぼつたことがある。斯くて先生は、歸農したばかりでなく、極めて平民主義を實行し、その家の常客として盲目の按摩などが屢々來り、予等はその給仕に頗る閉口したことがあつた。少くとも予は先生によつ

て自治といふこと、平民主義といふことを教へられたやうに、今尚ほ感謝してゐる。

（昭和三年四月四日　大森山王草堂に於て）

第十　熊本洋學校出入前後の事

予は年と共にだん〱ホームシックも減じ、漸くその境遇に吾身もあてはまる樣になつた。遂には先生の宅を去つて一般塾生同樣塾に寄宿することになつた。その時分には塾も漸次整へて折角新築――とは云ふもの丶、古家を何處からか引張つて來たものらしかつた――した塾も、二階などは殆どガラアキであつた。その時分に年長の塾生が强盗の眞似をして、二階から拔刀のま丶下り來り、予等を脅したり、又た時々附近の神風連から石を見舞はれたりした事等があつた。先生の塾の程遠からぬ處に、兼松某、米良某など、いづれも神風連の荒武者がゐた。彼等は明治九年の騒動に何れも切腹して死んだが、予は途中彼等に出會することを頗る危險に感じてゐた。されば成可くそれを避けてゐたが、時たま餘儀なく出會せねばならぬ場合にも遭遇した。彼等は殊更に横へたる刄刀を前に一尺ほども突出して佩し、結髪は勿論、大手を振つて途中を歩き、若し萬一間違つて彼等に觸りたらば、忽ち打つとか毆るとかいふことになるから、さはらぬ神に祟なしで、成可く近付かない事にした。予は仕合せに一度も彼等にいじめられなかつたが、併しその爲には可成り心配をした。予が讀書の力は、漸次について來た。四書、五經は固より左傳、史記、歴史綱鑑、國史略、日本外史、八家文なども讀み、通鑑綱目等も、親類の横井家から借用して讀んだ。當時横井家は古城の堀端にあつたから、其處から通鑑綱目を十卷ばかりづ丶かついで塾へ持參した。實を云へばこの上先生から習はんとするも、習ふべきものは少くなつた。そこで予が父母は予をして熊本洋學校に入らしむる事とした。それが明治六年頃であつたと覺えてゐる。その時には予の從兄徳永規矩も亦た、竹崎先生から洋學校に入る事になつた。そも〱洋學校と云ふは、細川侯が維新の當初に創立したるものにて、それには横井先生の姪、米國から留學の半途、病の爲に歸朝したる横井大平氏が盡力にて創立したるものにて、多分當初は兵學校にても起す積りであつたかフルベッキ氏の世話にて米國ウエスト・ポイント兵學校卒業生砲兵大尉ゼンスを招聘した。ゼンスの妻は

ニューヨークの牧師スコッダーの娘にて可成りの家柄であり、妻君はなか〳〵氣強い女にて、ゼンスもあまり頭が上らなかつた。ゼンスは最初は軍人で、可成り放縱の生活をしたらしかつたが、結婚の爲に乎、若くはそれと同時に乎、或は其後であつた乎。兎に角日本に來た時には彼は熱心なる基督敎信者となつてゐた。

扨當初は兵學校の積りであつたらうが、世の中が一變するにつけて熊本の政府は藩政から明治四年七月——縣政に引續いて、吾等の父の仲間即ち實學黨の手にあつたから、敎育も自然實學黨の主義に傾いて來た。洋學校の日本人の敎師は野々口といふ人にて、これも實學黨の一人であつたから、學校も又た實學黨の支配といつても差支へなかつた。當時の洋學校は一切官費であつた。寄宿舍等は却々進步したるものにて、硝子窓を張りつめ、室の横に棚を架けそれを寢床としてゐた。食事等もパンとか牛肉とかなか〳〵進んだものであつた。門衛を一度出づれば電信柱の下を通る時には、殊更に扇子を開き、それを頭の上にかざして通る如き神風黨が縱橫してゐるに、學校の中は殆どアメリカ風の生活を其まゝ執り行つてゐた。最初は洋學校の生徒となるには、縣下の俊秀を拔擢したものにて、兼坂先生なども其の試驗官の一であつた。併し予等の入校する時には、最早その制限も半はとれたものと見えて、餘程の多數であつた樣に覺えてゐる。予は漸く漢學に趣味を覺え、若干の自信力も出來て、これ



熊本洋學校第二回入學當時の蘇峰氏(向つて左より二人目)

から大いに勉強しようと思つてゐたが、洋學校入りはあまり好まなかつた。何やら當時は洋學校連といつて、殊更賢被つた仲間の後につくことは、自ら面白く思はなかつた。併し父母の希望でもあり、又たその希望が最も合理的であつたから、予も勇み進んでとは云はないが、兎も角も入校した。

併し入校してみると、予は自ら最年少者であるに驚いた。當時浮田和民翁などは先輩の一人で、小崎翁の如きは大先輩であつた。浮田翁などは予が福澤氏の世界國づくしを暗記してゐるのを、面白さうにきいて、頻りにそれを讃美してゐた。予等は最初にウエブスターの綴り書にとりかゝつたが、固より綴り書のことであれば面白き筈もなく、又た予は何事にもあれ新しきものには容易に喰ひ附かない性分であるから、あまり成績もよくなかつた。予等の寄宿舍の舍長ともいふべき一人は、二十七、八年の役に成歡にて最初に打死した陸軍大尉松崎直臣君であつた。先輩の或者は、予に向つて德富先生の子とも云はれる者が、左程覺えが鈍くては怪しからんなどとて、殆ど予の頭を毆らんばかりに叱り附けられた事もあつた。その時分から我々と同時に入校したる新入生は、見込みなしとて退校を命ぜられた者が、殆ど過半であつた。從兄の德永もその一人であつた。

或日野々口先生は一封の手紙を予に渡して、これを家に持参せよとの事であつたから、いよ／＼運命が予にも廻つて來たと感付いた。予はその手紙を親しく讀んではみなかつたが、父の語るところによれば、餘りに年齡が不足するから、今少しく年をとつてから再び來た方がよからうとの意味にて、態よく退校させたのであつた。此事は別に恥辱でもなかつたが、併し予に取つては少からざる不愉快であつた。當時十か十一の予は、年齡相應に子供らしきところもあつたやうだが、又た不相應に可成り老成してゐたやうであつた。されば予は今後如何なる事があつても、再び洋學校には足を向けまいといふ決心をした。而して今更オメ／＼兼坂先生に直に立歸ることも面白くなく、さりとて致方もなかつたから當分しきりに諸所を歩き廻つた。或は八代邊に赴き、或は郡浦に遊び、或は竹崎先生に從つて玉名方面などを歩き、生れて初めて肥後の國境を越えて、筑後に行つた事もある。多分斯くして再び兼坂先生の塾に歸つたであらうと思ふが、今ははつきり覺えてゐない。兎も角も予は堀端の横井家に屢々宿泊することになつた。當時横井先生の姪、洋學校の

獨立者とも云ふべき横井大平の兄横井左平太（伊勢時治）といふ人は、その弟と共に維新前先生の命を奉じて米國に赴き、米國の海軍兵學校に入校する事となつてゐたが、當人等は感ずるところがあつて海軍よりも寧ろ政治法律の學を學び、この人も又た弟同様――當時弟は既に病の爲に逝いた――病の爲に歸朝してゐた。父は予をこの人に紹介し英學とは云はず先づ洋算を學ばすることをした。元來横井兄弟の洋行には、吾家は最も多く犧牲を拂ひ、その洋行の資金なども吾家不相應に提供してゐる關係があつて、新歸朝者たる伊勢氏も厚く予をまつてくれた。予はこの時多分伊勢氏から數學の初歩だけを習うたと覺えてゐる。併しそれよりも予にとつて愉快であつたことは、伊勢氏を訪問する色々の人の座席に予も侍べることが出來、又た横井家にあつた小楠先生手澤の本を引出して、勝手に讀む事が出來た事であつた。その中には星巖詩集を横井先生が、星巖の需めに應じて批評を書き、而して星巖死去の爲にこれを返送するの機會を逸し、そのまゝ殘しおかれたるものなどもあつて、頗る興味を感じた。それから予に直接伊勢氏が語るのではないが、他の來客に向つて語りつゝある西洋の話などをきゝ、又た伊勢氏が携へ歸られたるあらゆる西洋の寫眞等をみて、聊か見聞を留めたるかの如き感がないでもなかつた。

斷つておくが父の熊本に呼出されたのは、明治三年であつたが、三年、四年とかけて、父は殆ど一年に幾度も官を轉じ漸々その位置が進んで來た。祖父は一時水俣の隱宅を引上げて熊本なる大江村に吾等と同居したが、熊本は面白くないとて、又た引上げて水俣の隱宅に歸つた。そこで吾家は二軒となり、水俣には祖父が居り、熊本には父が居た。斯くて廢藩置縣となり、熊本を分けて白川縣、八代縣といふことになつた。時に吾父は白川縣の七等出仕となつた。當時熊本縣には縣令なるものがなく、父の親友山田武甫氏が參事で、林なる人が權參事、吾父が七等出仕で、吾妻の父倉園又三氏がその下の典事といふもので、これが判任官の最上級であつた。而して先づ縣政は父と山田などの間に專ら執り行はれた。明治天皇が明治五年の夏臨幸あらせらるゝや、吾父等は、縣の主なる役人として拜謁仰付けられた。

予は吾父に對して何等申分はないが、只だ何故に吾父は餘りに謙遜である乎と屢々齒がゆく思つたことがある。第一吾父は

官に就くと同時に俸給の外に家祿を貰ふことゝなつた。然るに何故か既に俸給を得ればその上家祿を貰ふ理由がないとて、それを謝絶した。折角祿米を家に分配して來るのに、それを又た返却した。又た父は屢々辭表を出してゐる。その辭表が斷る他と意味が異つてゐる。それは役人をやめようと云ふのではない。自分はどこまでも御奉公するが、七等出仕では少し過分であるから、今少しく等を下つて奉公したいといふ意味である。固より子供の吾等に父が相談する筈もなく、父から又た噂にもかゝる話をきいたのではないが、父が出したる書付けなどを瞥見して、予はよく父の心事丈は了解してゐるが、しかも予は常にそれを齒がゆく思つてゐた。別に他人を押しのける必要はないが、與へられたる位置を殊更に避くるなどゝいふことは、餘計なことであると思つてゐた。しかしそれは兎も角も明治三年から明治七、八年の間は、恐くは德富家に於て、全盛の時であつたかも知れない。當時は何等金錢の不足などゝいふことを噂さに聞いたこともなく、さりとて固より過多といふこともなかつたが、かねて交際を好み、且つ人に物を與ふることを殆ど唯一の樂しみとしたる吾母の如きは、多分にその志を行ひ、且又た母が殆ど主となつて熊本に於ける織物等の業を起し、又た家庭蠶業等を行ひ、或は製絲の業なども盛にし、又た婦人の教育等に就いて、それ〲手をつくることになつた。

（昭和三年四月七日　大森山王草堂に於て）

第十一　花岡山一件

熊本の政治も維新以來、藩政から縣政にかけて、横井小楠一派、所謂實學連の政治であつた。從つて子供乍らも吾等は肩幅廣く暮してゐた。然るに白川縣と八代縣とは合併して熊本縣となり、參事であつた山田武甫氏は他所に移り、八代縣の權參事であつた嘉悦氏房氏が熊本縣權參事となり、父が依然七等出仕で先づ嘉悦德富二人でやつてゐたが、やがて縣令として安岡良亮なる人がやつて來た。當分の間は兎や角やつてゐたが、父も明治六年十一月には辭職した。嘉悦もその前後に辭職した。その他妻の父竹崎等も同樣であつた。謂はゞ從來熊本の縣政を專にした實學黨及びその仲間は、殆ど上から下迄一掃せられた。安岡は恐らくは斯くする積りでやつて來たであらう。而して追々と反對黨であつた所謂學校黨なども縣廳に採用すること

になり、神風黨なども各社の神官に採用せらるゝ事となつた。その間の變遷に付いては、子供乍らも多少氣が付かぬではなかつた。斯くして初めには白川新聞と呼び、後に熊本新聞と改稱した新聞などには、安岡に關する記事が可成り出で來つた。安岡は土佐人で、勤王家の出身であつたが、頗る剛慢の男であつたらしく、且つその品行も餘りよくなかつたとかにて、隨分物議を醸した事もあつた。予は一度洋學校から出されてから以來二度と再び足ぶみせぬ決心で、これから全く漢學でやり通さんと考へてゐたが、堀端の伊勢家――即ち横井家――にて新歸朝者の時治氏等の話をきゝ、今後とても外國語を知らずしては世に立ち難きことも、そろ〳〵自ら感付いてゐたが、遂に父の切なるすゝめにて、再び洋學校に入ることゝなつたのは、多分明治八年の夏、予が十三歳の時であつたと思ふ。その時には前回と違ひ予も既に一人前の了見があり、誰しも予を子供として待遇する者もなく、その時には既に仲間の餓鬼大將となつてゐた。然も仲間と云へば槪ね予よりも二歳、三歳若くは五六歳の長者であつた。洋學校もその傍にある病院及びそれに附屬する醫學校も、いづれも實學黨の施設で安岡縣令には受けがよくなかつた。一時は廢藩後細川家が經費を支辨してゐたが、それも永續するわけにはゆかず、予が入校の頃は、最早洋學校もその運命がきまつてゐた樣だ。

扨ゼンスはアメリカ人丈あつて、實學黨の注文通り、或は米國から種物や、農具を輸入するとか、或は化學工業の初歩とも云ふべきことをはじめ、石鹼をつくる等の事を創むるとか、種種のことにその力を假したが、然も彼の胸中に蓄へたる大なる目的は、キリスト教宣傳にあつたらしい。當時長崎にスタウトといふ宣教師があつて、そこからあらゆる聖書及びトラクト(基督教宣傳の文書)の類を取寄せ、それを生徒に分配した。その中には支那譯もあり、日本譯もあり、英書は固より舊約書の話などには、子供だましと見るべき繪入りの立派な本などもあつた。而して土曜の晩などには、生徒を招んで讃美歌等も歌ひ、且歌はしめてゐた。當時洋學校第一回の入學生は卒業してゐたが、彼等は他にゆくところもなく、尙ほ學校に止つてゐた者があつた。その中でもゼンスの最も氣に入つたる生徒は、予が從兄の横井時雄、又その次の級には、予と縁續きである金森通倫などがあつた。小崎弘道氏は今でこそ牧師であるが、彼はその時

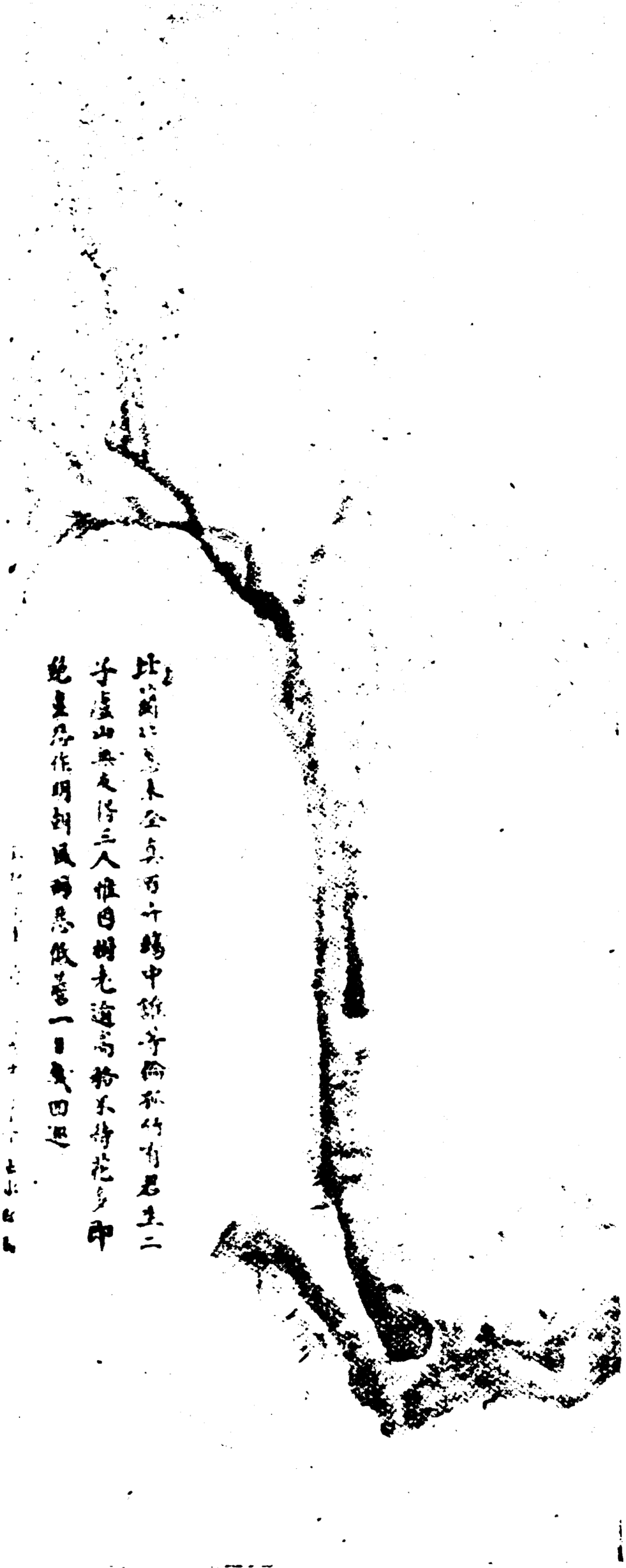
迄は最も熱心なる實學黨の仲間で、寧ろ耶蘇教嫌ひであつたと思はるゝ。初めは上級生のみであつたが、追々下級生より新入生にも及び、集會の時にはゼンスの應接間は人で一杯となつた。而して後には學校以外の人さへも出掛けて來た。予自らはゼンスに對しては、好意も惡意も持たなかつたが、吾姉――湯淺初子は、その從妹横井宮子と共にゼンス夫人の門人であつた。されば彼等と全く沒交渉といふ程でもなかつた。予が洋學校に入る頃は、舍監として境野熊藏氏がゐた。彼は學者の家柄にて詩文なども可成り達者に出來た。而して恐くは熊本新聞の論説なども時々書いてゐたであらう。予等がリーダー等の譯文をつくれば、彼がそれを訂してくれた。予は秀才といはれる程でもなかつたが、又鈍才と云はれる程でもなかつた。併し講堂等に於ける予の振舞は、屢々ゼンスの注意を惹き、叱られた事も數回あつたやに覺えてゐる。課程時間には大講堂に上級から下級まで、悉く出席し、各々そこにて自習し、授業の時間來れば、大講堂から更に各級代る〲授業室に繰込むことになつてゐた。その間は席を離るる事も出來ず、談話をする事も出來ず、ゼンスは常に授業室と講堂の間を往來して監視してゐるから、頗る窮屈なものであつた。予はその窮屈が辛抱しきれん爲、他人の席などに出掛けて、その爲に喧しく叱られたのである。

　予は學生として別に惡しき學生ではなかつたが、予等の同級中に某なる者があつて、如何にも輕薄の男であるから、それに制裁を加へたらよからうといふ事に予が發議し、何れも同意者が多數であつて、遂にそれを實行した。予は自ら手を下さなかつたが予の命令といはんか、予の相談といはんか、それに同意して參加した者は何れも予よりも年長者のみにて、中にもその內の一人の如きは、それ以來十數年相逢はなかつたが、何時しか予を訪ね來り、それ以來今日に至る迄數十年間、時々無心を申込まれてゐる。實に不思議の緣もあればあるものだと思はれる。併し又た制裁を加へた男は、やがて予の親友となつて、予は屢々その者の家にも遊びに赴き、死に至る迄親しく交つてゐた。扨その騷は別に制裁を加へられた人の肉體に何等の損害を與へなかつたけれ共、餘りにその事が大騷となり、今度は公然退校といふ評議となつた。固より年少ではあつたが、予は張本の一人であつたから、退校者としては、イの一番にあつた事と思はれる。併しこの事は穩便に取計ふがよからうといふ事になつて、上級

者の人々が、仲裁に入り愈よ首尾よく手打ちとなつた。
扨予は何事にあれ、新しいことはあまり好まない性質であるが、その時分から本を讀むことは好きであり、しかも漢學には聊か自信があつたから、漢文に飜譯したる舊約書や新約書を貰ひ受け、少しばかり讀んでゐた。なか〳〵面白さうにあつた。
元來予は實學連生抜きの者にて、大學の講義などは父からも聞き、又た大學の講釋にかけては常時第一人者と稱へられたる竹崎先生の講釋もきいてみたが、實のところ予が魂を捉ふる程のものはなかつた。ゼンスは四年以上も日本にゐたが、絶對に日本語を用ひず、彼は生徒に教ふるにも英語のみでやつてゐたから、彼の說教や談話なども、固より予には解らう筈もなかつた。併し上級の横井時雄──當時伊勢──や、金森通倫の、ゼンスの意を受けて話す事はよくわかつた。兎に角實學連の大學の講釋に比ぶれば、聖書の講釋の方が何やら面白くもあり、且その方の仲間が寧ろ學校では賢明にして有力なる分子らしく覺えたから、自然その方に近付くこと〻なつて來た。ゼンスも初めの間は餘程遠慮をしてゐたが、最早彼の任期も滿ち、遠からず引上ぐること〻なつたから、彼も傍若無人にその所信をやつてのけたものと思はる〻。斯くて明治九年の初めであつたと覺ゆるが、世間で名高き花岡山の申合せが出で來つた。
花岡山の申合せなるものに就いては、予は初からその申合せに與つたものでもなく、且つ予の年齡もやうやく十三、四にして、當時予より六七歲以上の幹部など〻は年齡の上にも懸隔があつたので、謂はゞ予は陣笠の一人として參加したに過ぎない。併し世間では殊に予の名なども重なる一人に舉げてあるが、それは難有迷惑にて、實は幹部といふ幹部は上級生の數輩にして、あとは附和雷同したに過ぎなかつた。予は當時固よりキリスト教の事を研究したといふではなく、唯だ黴の生えたる大學や論語の講釋よりも、何やらこの方が面白いやうに心得たる迄にて、謂はゞ實學黨の殼からをどり出す爲に、その仲間に加はつた迄にて、それ以上の意味はなかつた。然るに仲間に加はつた連中はやがて種々の物議が起つて、そろ〳〵それをやめたが、予はかねての氣質にて、一度やりか〻ればゆく所まではゆくといふ決心であつたから、後まで踏止つたのである。それで予も花岡山の連盟者の一人として記憶せらる〻こと〻なつた。併し予の眞意は今申す通り深くキリスト教を研究して、信

じたのではなかつた。固よりキリスト教の爲に一生を捧ぐるといふ了見は露程もなかつた。唯だ他の者がやめるから意地にもやめずにゐたのであつた。

扨實學黨の連中は、畢竟己の後嗣者をつくらんが爲に洋學校の創立に骨折り、維持にも骨折つた。されば洋學校の連中もその系統からすれば、悉くとは云はぬが、大多數は、實學黨の色彩を帶びたる者のみにて、その重なる者共は、日曜や休日には、竹崎先生の會讀とか、その他實學黨の諸先生の宅に教をききにゆく者が少くなかつた。その諸先生中には、云ふまでもなく吾が父もあつた。然るに思ひきや彼等のあとはだん／＼遠くなり、しかもいづれも耶蘇教熱心者となり、中には治國平天下の業を他所にして、傳道でもしかね間敷者共が出で來つた。所謂

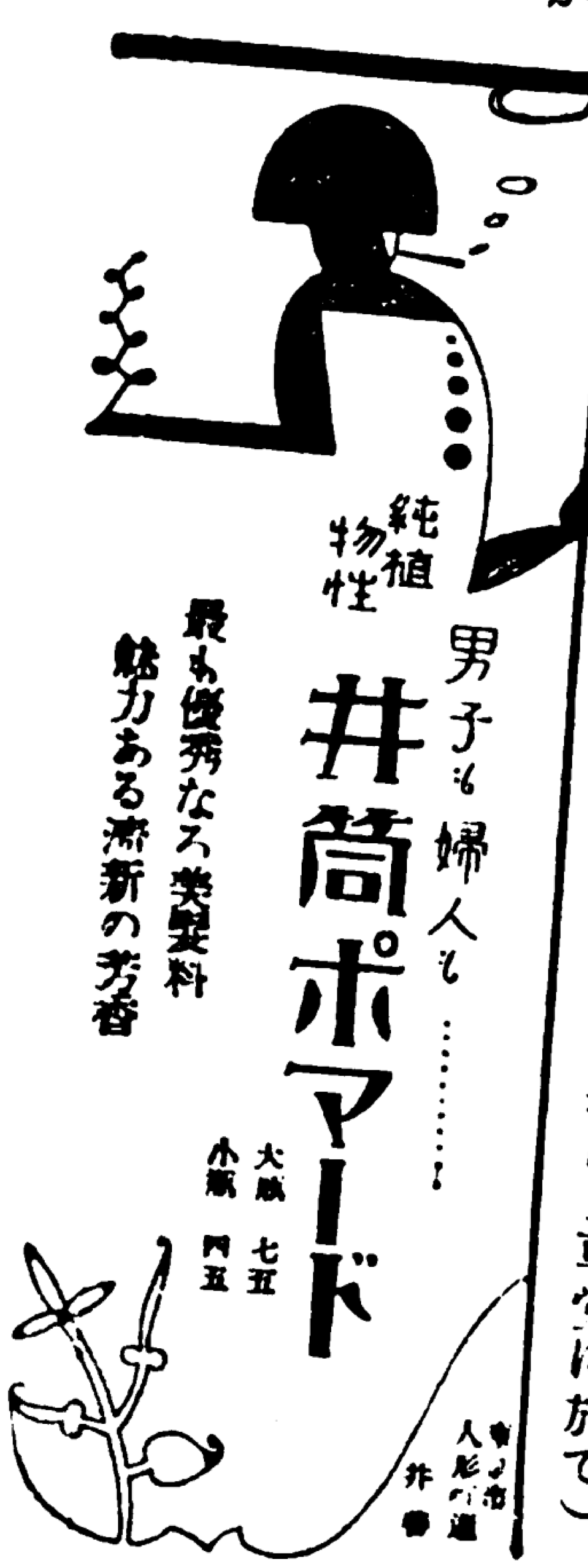


[illegible]坂止水先生自畫贊

實學連の諸先生からすれば佛を賴んで地獄に入るとは、この事であらう。此處に於て學校では、非耶蘇教徒が自然出で來つた。非耶蘇教徒は事實非ゼンス黨である。それは學校のこと丶して、實學黨の諸々の家庭は、社會に對して重大なる責任を感じた。さなきだに實學黨の先輩横井小楠先生の如きは、耶蘇教を信じたといふ理由の下に暗殺された位で、實學連には、耶蘇教といはれることは最も禁物であつた。然るに横井第二世といはれる時雄氏を始め、末輩の予等に至るまで、耶蘇教を信じたといはれては、天下に對しても、家に對しても面目がないといふ事にて、此處に於て所謂迫害なるものが起つた。迫害の最もはげしかつたのは、横井及び金森であつた。金森は予が伯母三村家との親戚關係よりして、專ら三村家に於て迫害せられ、横井は又た堀端の家に於て迫害せられたが、吾家にも竹崎先生などは、駕籠にて夫婦連れでやつて來、隨分物々敷くあつた。後から最も熱心の信者となつた竹崎伯母、横井叔母、及吾母などの耶蘇教反對熱はすさまじきものであつた。いつまでたつてもこの問題は、落着するものでもなく、又學校の運命もすでに明治九年の秋までときまりたれば、長くゐるわけにはゆかず、予は寧ろ東京に遊學せんことを志し、この際父母と妥協するを賢明の方法と考へたから、兎も角も萬事を父母に一任すると云ふとにやうやく話をまとめた。予の仲間の者は、徳富は耶蘇教を捨てたと云うたが、予は其實捨つる程に耶蘇教を深く信じたものでもなく、只だ實學黨の月並的型に入るのがいやであるばかりであるから、か丶る問題にアクセクして一生をあやまらんよりも、寧ろ速かに東京に出で予が志すところを遂するに如かずと考へ、兎も角一應は兩親のいふことをきくといふこと丶なつたのである。

斯くて予はいよ／＼東京に赴くこと丶なつた。それは明治九年八月頃であつたと思ふ。當時横井氏は既に東京に、金森氏は京都に赴いてゐた。

（昭和三年四月十日　大森山王草堂に於て）



新しき村十周年記念祝賀出版

十年

菊判八六〇頁　挿畫十六葉入◆定價八圓（送料卅六錢）

現存作家中巍然たる喬木の觀ある武者小路實篤氏が、其抱懷する人道主義のよき使徒たらんために、天孫降臨の聖地日向に『新しき村』を創始して正に十年！　本書は氏が營々十年の勞を多として贈られたる我文壇、詩歌壇、畫壇、七十氏に餘る大家連の會心の作を網羅したる藝術の一大パノラマである。加之快中の快事たるは此際の購讀者先着一千名を限りて、武者小路實篤、里見弴、佐藤春夫三氏の肉筆サインを得るの特典があることだ。

編輯者　志賀直哉　里見弴　佐藤春夫　梅原龍三郎　岸田劉生

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

マルクス・エンゲルス全集

◇剩餘價値學說史第三卷◇

約五百七十頁

第八回配本

久しく待たれたる剩餘價値學說史第三卷出づ。本學說史は實に『資本論』の第四卷とも見るべきもの。在來の諸經濟學說に對する批判の形式を具備し、經濟學の中心問題たる剩餘價値に關する詳細なる歷史的研究にその重點を置く。謂はばマルキシズムの經濟學史的理論として重要視せらるゝの書である。譯者はそれ〲斯界の俊豪、蓋し本全集中の壓卷である。

（目次一斑）

第一章 トマス・ロバート・マルサス—**第二章** リカード學派の解散—**第三章** 經濟學者に對する反對論—**第四章** ジョージ・ラムゼイ—**第五章** シェルビュリエ—**第六章** リチャード・ジョーンズ—**第七章** 利潤利子および俗流經濟學—**附錄**

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

經濟學全集

慶大教授 高橋誠一郎著

（第七回配本）

經濟學前史

本卷は古代・中世より近世の初期に至る經濟思想史であつて、遠くヘブライの文献に遡つて經濟思想の胚芽を探り、プラトー、アリストテレスの體系を闡明し、降つて中世のタマス・アキナ等の經濟思想の變遷を辿り、近代の黎明期に生じた思想的變化の跡を詳細に論述した高橋氏最近の快著である。

配本濟

第一回配本 經濟學原理 福田德三著

第二回配本 經濟學大綱 河上肇著

第三回配本 日本社會經濟史 本庄榮治郎

第四回配本 唯物史觀經濟史 山川均・河野密 石濱知行

第五回配本 各國經濟史 野村兼太郎・石濱知行 嘉治隆一・丸岡重堯 平貞藏

第六回配本 經營經濟學 增地庸治郎・太田哲三 吉田良三

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

祝創刊十周年

資本金六千五百九拾壹萬六千六百五拾圓

弊社は明治五年の創立（本邦最古）にして總ての洋紙製造に於て最も豐富なる經驗と熟練を有す

本社　東京府北豐島郡王子町

營業所　東京市麴町區永樂町郵船ビルディング內

王子製紙株式會社

工場所在地

■東京府北豐島郡王子町　王子工場
■同町大字下十條　十條工場
■東京府南葛飾郡龜戶町　龜戶工場
■大阪市北區善源寺町　都島工場
■同市東淀川區北長柄町　淀川工場
■靜岡縣庵原郡富士川町　岩淵工場
■富山縣伏木町　伏木工場
■福岡縣小倉市篠崎　小倉工場
■北海道勇拂郡苫小牧　苫小牧工場
■朝鮮新義州　朝鮮工場
■樺太大泊町　大泊工場
■樺太豐原町　豐原工場
■樺太野田　野田工場

主なる製品
◆上等印刷紙◆普通印刷紙◆新聞及び雜誌用紙◆其他諸紙◆諸包紙及び模造紙
◆筆記用紙及び畫學紙◆卷煙草用紙◆製紙原料パルプ

社賓徳富蘇峰翁の
「日本國民史」掲載

明治、大正、昭和を通じて、新聞界、筆政界の第一人者たる徳富蘇峰翁は、四十年經營の「國民新聞」を去り、新たに「大阪毎日」新聞「東京日日」新聞社の社賓として、兩紙にその巨筆を揮ふこととなつた。翁が修史の大事業の眼目であり、今や維新回天の活劇期に入つた「日本國民史」の精彩は敢て云ふを俟たない。煙霞の探勝に、時事の感想に、古今人物の品藻に、突嗟に筆を著けて神采躍動、題材の豐富無限なる、興趣の詩味横溢する。現代史界に獨歩し、新聞界を横絶する大文字は、ひとり「大阪毎日」「東京日日」の兩紙上のみに讀み得られるであらう。

新聞界の絶品　夕刊小品文を讀め

大阪毎日新聞社　東京日日新聞社



これからの輝く空に、ソボ降る雨の日に
埃りと濕氣を完全に防ぐには

セラフイツク
レインコート

を御召しになるのが第一です。英國本場の高級生地で本場ソツクリの新型に、着崩れの無い様に仕立てたのが此のレインコート

二十六圓より

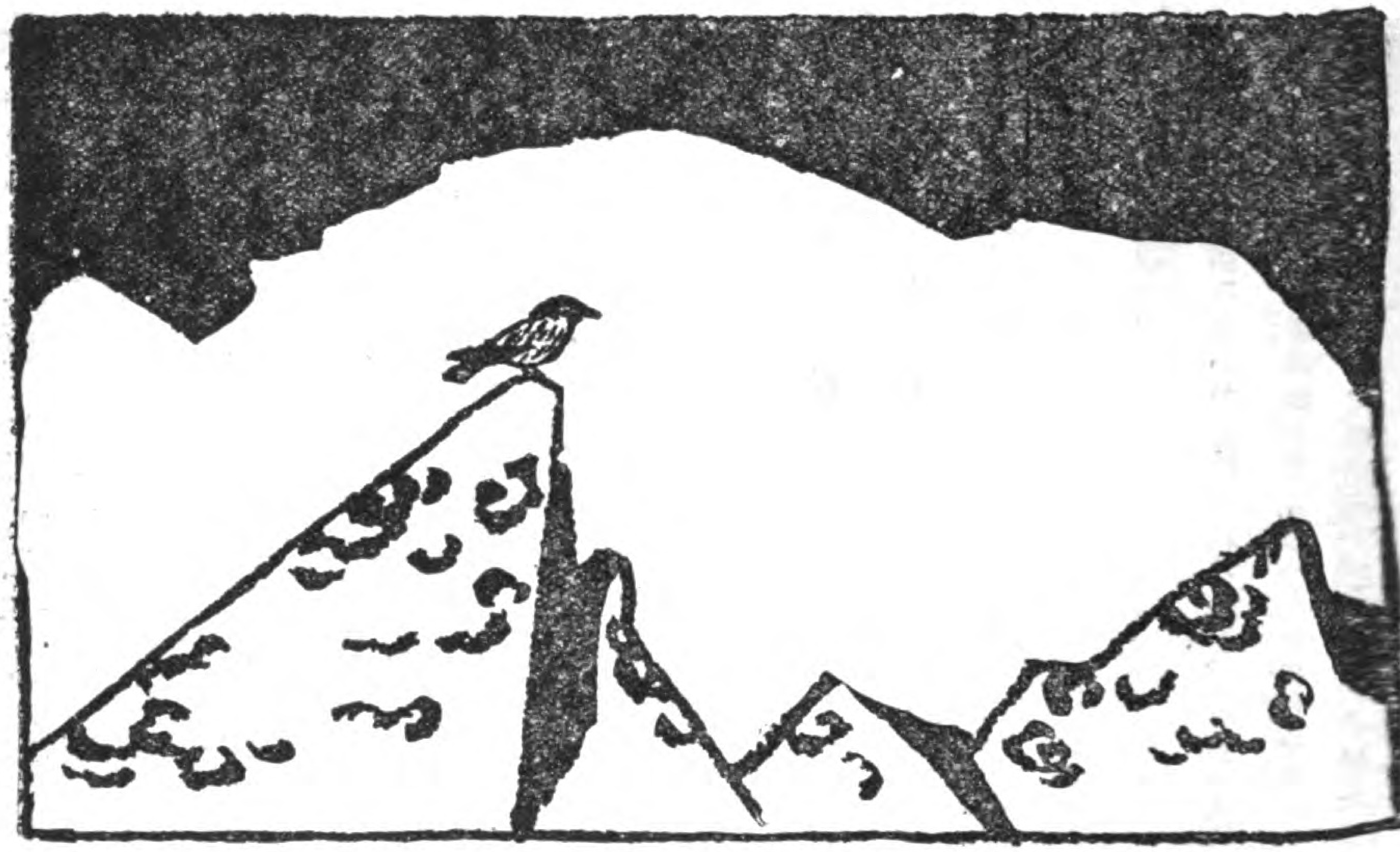
（カタログ進呈）



東京日本橋通

丸善株式會社

東京神田駿河臺下



上海の宿

前田河廣一郎

1

上海では、まる三月とも、同じ宿屋に居つた。――

この宿といふのが、頗る妙な場所にあつて、四方ともに藝者屋に圍まれてゐるといふ、全くの狹斜の巷だつたので、最初、私は、そこへ私を同伴して宿の主婦に紹介した五十嵐君を、一種の憎しみと侮蔑とをもつて考へたのである。

それには、こちらにも幾分落ち度がないとは云はれない。はじめての支那への旅を、全然、無紹介で冒險した上に、着く當時からの秋くちの雨に、支那語のわからぬ支那へ來て磕と當惑したN・Y・K碼頭で、誰一人タキシーの乘りやうひとつ敎へてくれるものがゐないところから、つひそれまでデッキを散歩し合つたり、サロンでいつしよになつたりした五十嵐君に御案内を一任してしまつだのである。

『まあ、わしの宿へいらつしやい。』

氣輕るにから承諾してくれた、その宿が、かういふ場所柄だつたのである。

五十嵐君とは、長崎からずうつと同室で、その職業の造船技師であること、郷が長崎にあつて家族が幾たりゐること、上海にもと或る汽船會社の支店長をしてゐたこと……などを知つた上に、その特徴のある相貌に、性格に、多少行ずりの興味とでも云ふやうなものを感じてゐぬではなかつた。五十嵐棟助、といふ名前からして、どちらかと云へば、記憶に引つかかりやすいところがあつた。その五十嵐棟助君は、私達の眼から見ると、典型的な小ブルジョアであつたのである。大概の小ブルジョアがさうであるやうに、彼は、醜い趣味を持ち、不徹底な女性觀を抱き、あまり健康でない胃腑を所有してゐた。――かういふ抽象性の具體化を、私は、彼れの相貌と、十二三籠の御みやげ物らしい松茸と、莫大な旅行鞄とに發見した。

一見、五十嵐君は、風采の揚らぬ紳士であつた。四十を越した自分などから見ても、もう、、年配の、禿げのきわ立つて來る頃合ひに見えたし、それに、胃腸病患者特有のあさぐろい皮膚と、栗の果のやうな頭に角ばつた顎を併有してゐて、おまけにひどい近眼であつたのである。この近視は、レンズの強度なせいか、ときとすると眼鏡が裂けてゐるのではあるまいかと思はれるほど、彼れの眼球に、異樣なフォーカスの散大した瞳の持主であるやうな外見を與へた。最も彼れの印象的であつたことは、その音聲である。アメリカに永らくゐた自分は、よくアメリカ人らしい日本語を話す高等移民を知つてゐるが、五十嵐君の長崎辯は、それにそつくりだつたのである。むやみに調子高で、これといふ可笑しみのない事柄にまで大聲で笑つたり、演說のやうな口の切りかたをするところなど――どうしても、加州邊のヂャーゴンで話し合ふ邦高さと共通した點を看逃すわけには行かなかつた。職業によつては、內地の、東京あたりでも、かういふものの云ひやうをする人間も見受けないではないが、あつてもごく罕である。

『むやみにしやべくる男だな。』

ふだんはむつつりやなので、私は、必要以上にわかりきつた話に力點を置く人間を嫌ふところから、船の中では、なるべく自分だけの考へに心をまとめる方針でゐた。

それが、碼頭に數百人の苦力の騷々しさの中へ投り出されて見ると、やむを得ず、より騷々しくない五十嵐君を賴るやうにさへなつたのである。

宿屋は、支那家屋を無理に日本造作に起用したところから、よくニユー・ヨーク邊に見受けられる植民地式の日本間で、壁のペンキ塗りに天井のプラスター、それへ疊を敷いて、達磨の掛軸をぶら下げるといふ趣向なのである。雨の中を自動車で來て、何の豫想をめぐらす機會も與へられずに、暗らい階段を案內されたのが、ガラス天井に兩脚

がしきりと囀つてゐる、水族館の底のやうな部屋であつた。

そこへ茶を運んで來て、旅館といふものに殘存する日本の封建主義を、そのまゝ一とわたり踏襲して客に見せないと承知しないのが、お主婦といふ口忠實な女性である。ひどい骨ばつた長崎辯なので、この方は、男の五十嵐君の場合よりももつと困つたのであつた。が、どうせわかつてもわからなくともいいやうな事柄をしか云つてゐないので、私は、匆々に食ふ物を呼んで、そのままぷいと閾一重にまで迫まつてゐる支那の最初の夜を見物に表へ飛び出したものである。

が、雨のさ中である。外套も洋傘も持ち合はさない自分は、昔のアメリカ放浪時代のやうに、サック・コートの襟を立てて、びしやびしや濡れたサイドウオークを歩るいてゐたのであつたが、不圖、古着屋のいつぱいに立ならんだ通りへ出ると、せめて古物のレーン・コートでもひやかして見ようといふ氣になつた。

『ハオ・マッチ・ジスー?』

大型の外套や、馬の毛で織つたやうな洋服などをぶら下げた支那人の店々を、いかにも支那人にわかりのよささうな口調で云つて、値踏みをして歩るいた。こちらで氣を利かして、わざとピッヂヤン・イングリッシュを使つてゐても、一向にそれをわかつてくれずに、何やら大聲の支那語でわめき立てられるには、道がに苦勢がひがなかつた。だんだん考へて、私は手段を使用することゝした。ともかく、同じやうな店を、十三四軒も漁つたのち、一着のレーン・コートを十一弗で[illegible]なつた。それを着込んで、そのまま、途中でちらちらと見た日本料理店の電氣行燈の出てゐる家まで戻つて、頗る熱かつたり、反對にぬるかつたりして出現する銚子を四五本乾すと、大體の道のりを教へて貰つて、上海の銀座である大馬路附近まで黄包夫を頼んだ。

見るもの聽くものが、全然目新しい支那であつたので、私には、特別に一般の風習になつてゐる『支那の淫賣を買ふ』といふやうな、選定された目的はなかつたのであるが、或る狹い露地に立つて、日本などでは縁日でもないと見受けられない賑かな光景を覗いてゐると、不意に横合からあらはれた婆さんと娘とが、私の鳥打を一人が、ステツキを娘がといふ風に、何のことはない強奪して行つて、何やら云ひながらどんどん奥へ逃げて行くので、急にむかつ腹が立つて、二人を追ひ駈けて行くと、それが私のやうな椋鳥を釣る手らしく、娘と婆とは、一軒の怪しげな家の中へ身を跳らして、中からお出で、お出でをして見せてゐるのであつた。

『畜生ッ、なるほど素速いや!』

私は、半ば苦笑しながら、その支那家舍へ飛び込んだ。

『あんたは、實に大膽だね、――無謀ですね。』

あとでよく人からから注意されたのであつたが、考へて見りや、實際、中から何が飛び出すやらわかつた筈のものでなく、殊に多少なりと金を懐中してゐた關係上、現在の上海に於ては、かなり無謀な行爲にはちがひなかつた。全然支那人を惧れないことは、ときに支那人が全然こちらを惧れないことになり得るのである。

私達三人は、唖の親子のやうに、その野鷄の棲家である二階の一室に、わびしい雨の音を聽きながら、窓の下で老酒を酌むだ。料理を注文するにも、何が何やらさつぱりわからない自分は、原始的に筆と紙とを借りて蝦の畫を描いたり、鷄といふ文字を書き込んだりした上に、大きく『老酒、一元』としるして、二枚の銀貨を婆さんへ投り出してやつた。

殘された娘は、しきりに頸に垂れ下がる前の切髪を吹きわけながら、いろいろと支那語で話しかけるのであつたが、言葉こそわからなくとも、その流眄と媚めかしく傾げた首の表情で、何を暗示してゐるかがわかつた私は、ノオ、ノオ、の一點張りで、酒を呑む恰好を示してゐた。

婆さんが、二本の錫の德利と皿に載せた料理を二品ほど運んで來た。先方でもわからぬ支那語を使ふのだからと思つて、こちらもどしどし日本語で物を云つてやつても、やはりそこには無理押から來るぎこちなさがあつて、結局、默つて嚥むものは嚥み、食ふものは食つてゐた方が、双方の得手らしく思はれた。

酒盃の半ばに、婆さんは、しきりに手枕をする恰好をして見せては、彼女として一番優雅な支那語を使用するらしかつたが、私は、箸を持つた片手で小蝦の酸漬を叩いて見せて、

『食べろ！　食べろ！』

と大聲で呶鳴つた。

卓の上の物がすつかり竭きてしまふと、娘はしきりに私の手を引いて、隅の小さなベッドの方へ連れて行きたがるのである。極端に性病を惧れる自分は、娘が上着と下着を外づして、ペテコート一つだけになるのを見て、大股にそこを歩き出した。

皿を掃除してゐた婆さんが、階段の中しきりになつてゐるカーテンから首を出して、ベッドの方へ人さし指を突つけながら、わいわい忠告するのであつたが、やや醉の廻はつた自分は、口を大きく開けて婆さんの無表情な表情を笑つた。

娘はごく簡單な上下の着物を又着なほすと、ぶつくさ云ひながらベッドのカーテンをからりともとのやうに開いて、婆さんの方へ向き直ると高い聲で挑戰的に話しかけた。婆さんも敗けてはゐぬらしく、さかんに音樂的な騒言を飛ばす。かうして、つひ十分前までは、三人が

知つてゐた一室が、妙に氣まづい言語の交戰場になつてしまつた。人間はごく簡單な感動詞を使用してゐる間は、そこに平和があるのかも知れない。

『や、喧嘩をはじめたぞ――こりや下手をすると八百長かも知れん。』

から思つた私は、無言で、女達の手の伸びない前に、ステッキと鳥打を掴むやいなや、段々の兩隅にだけペンキの痕跡の殘つてゐる階段を、遁げるやうに飛び降りて、雨の中を大通りへ駈け込んだ。角に一軒の燒賣屋がある。いきなりそこへ這入つて行つた私は、食べたくもない蟹の燒賣を菜籃の表から拾つて、餘計な酒を一本註文した。間もなく、私の豫想したとほり、婆さんと娘とは、きよろ〳〵通りの邊を捜がし廻はりながら燒賣屋の前を急ぎ足で通つて行つた。……雨の上海の第一夜である。

『結局、安すく濟んだといふものだ！』

自分は、實際のところ、二階から降りる途端に、階下で三人で麻雀をやつてゐたうちの一人が、屈强の若い壯漢であるのに氣がついてゐたのである。

翌る朝、夜前の經驗を話すと、五十嵐君は、瓦を敲き割るやうな聲で、

『あんた、上海がおはじめだなんて、私等を騙ましなはつたな！ えこつちやござんせんぜ、そんげな嘘つきなはつと！』

と云つて一向に取合はなかつた。

長崎辯と云つても、五十嵐君のそれは、多分に大阪調を加味した種類であつた。これは、彼れの複雜な過去の經歷が、數ヶ所の語源を綜合化せしめた餘儀ない事情にもよることであらう。

2

私は、その翌日南京へ出發した。

内山書店の主人がわざわざ訪ねて來てくれて、一と通りの上海學を講義した上に、南京行の希望に對して、北ステーションまで見送るといふ最も具體的な面倒を見てくれたのであつた。

南京へ行くといふことは、私の元來の目的ではなかつたのだが、支那へ來て、ちよつと事情を説明して貰ひたかつた人が、私よりすこし先に着いて、南京へ出發したといふことであつたからである。南京への旅は、まる二日で終つて、會はうとした村松君にも會つたのち、私は、むしろ騒々しい上海に幾分なりと親しみを覺えて、三日目の朝、同伴の人に宿まで送つて貰つた。四十を出た男が、停車場から宿まで獨りで歸れない、といふ愚劣なほどの不便さには、流石に閉口した。

『どうしたら、支那語を習はずに、最も短時間のうちに支那を知るこ

とが出來るか？」

こんな不自然な、矛盾そのものである命題から出發して、私は先づ手あたり次第に、支那に關する日本語や英語の書籍類新聞類を漁りはじめた。見るまに、私の卓の上には、もとは『上海』案内記しかなかつたものが、各種類の著書で山が築かれてしまつた。恐らく最近の私の生活で、上海へ着いた一ケ月間ほど、活字と活字の間から何かを發見しようと思つて努力した時間はなからう。

新聞に名前などが出ると、半ば好奇心から、半ばは親切氣から、毎日のやうに宿へは人が訪ねて來たのであつたが、私は、出來る限りそれらの人達から彼等の經た支那生活を吸收しようと力め、能ふ限りの時間を割いて、いつしよに街へ出たのであつた。

一度などは、長い髯を生やした老人がフロック・コートを着て威かめしい雅號を刷つた名刺を通じて訪ねて來たので、何かの反動團體の來訪かと思つたら、過去四十年間の上海生活を物語りはじめ、支那の電力會社に對して訴訟を起こしてゐるのだが、日本領事館では一向に取合つてくれないから、是非、この由を日本の言論界に訴へてはくれまいか――と云ひ出して、謄寫版刷の訴訟提起の始末書を置いて行つたやうな篤志な客もあつた。この篤志な客人は、本來同情すべき立場にあつた人らしいが、年々訴訟の延期されるにつけて、彼れの損害賠償の要求額が多くなるとかいふので、實は上海での『奇人』の一人に數へられてゐる人物らしかつた。

一體に上海の共同裁判所である會審衙門は、陪審官は各國の副領事が出席し、檢事や判事は支那人がこれにあたり、訴訟を提起するには先拂で訴訟費用として一萬元を供托することが必要とされる。その金額を一應受理すると、法廷では第一審の開廷を通知して、型のやうな姓名年齡の訊問で閉廷する。それから原告も被告も、第二第三審といくら待つてゐても、訴訟に對する結審は更らにない。どうしてないかといふに、これは支那側では治外法權の撤廢を主張してゐるので、その國辱的案件の整理を經ないうちは、本當の裁判は行はれないと云ふ理由からなのである。そのために、會審衙門には、無數の訴訟事件が時代の堆積で黄ろくなつて停滯してゐる始末であるが、それを外國人はどうともすることは出來ない。

私が殊更らに、こんな裁判の事情などを書いたのは、單に書記の長髯の老人を憶ひ出したが爲めではないので、實は、そのことが五十嵐棟助君の生活と、やや深い關係が存在したからである。――

彼は、よく時偶の會話を挑む私を、『裁判、裁判』と云つては、避けるやうにしてタキシイで何處かへ消え失せる習慣を持つてゐた。好奇心に驅られた私は、めしの給仕にやつて來る女中を摑まへて、

『一體、五十嵐君は、毎日何をしてるんだね？』
と訊ねて見るのであつた。
『五十嵐さまでございますか、しよつちう御出かけでいらつしやいます。御出になれば、書き物をなさつてでございます。電報だの、御手紙だの——何でもいつも御忙しくてゐらつしやいます。あの方も、貴方さまがどうしてゐらつしやるかツて、御飯のたんびに御訊ねなさいますが——。』
受持の部屋を共通してゐる女中は、小さな眼をまぶしそうにしばたたいて、膝の上の盆を曲藝のやうに廻轉するのである。
五十嵐君の部屋は、家の東側にある、ほかの室から全く隔離した、うす暗らい箱のやうな一室で、物干臺をへだてて隣家の『梅もと』といふ藝者屋の窓と對してゐた。
ときには、同じ呆けた表情の女中は、
『ただいま、あの別嬪さんが來ていらつしやいます。』などと密告することもあつた。
そのうちに、私も一向に落つきのない自分の部屋を、ほかの靜かな部屋と變へることになつた。
一體、この宿には、支那風な中庭を囲んで、四面に、兩端をぴんと擧つた、細かい魚鱗のやうな甍を載せた二階があつて、かれこれ十四五室の客間を持つてゐるのであるが、あとから建て増した分が、東側の五十嵐君の部屋と、西の隅つこにある私の移つた部屋とであつた。
西の隅つこといふのは、二階へのぼつて階段のわきの、戸棚の蔭になつた入口を持つてゐる、殆ど誰にも氣づかれないやうな小さな部屋で、レベルも普通の廊下から三尺ほど低い、そこだけ支那人の住宅風に突出てゐる一室であつた。
採光の方法などはてんで考慮に取入られぬ支那家屋を、買ひ潰したのへ疊を敷いたものだけに、窓には鐵網が張つてあり、空氣の流通が惡るくて、日中は牢獄のやうに暗かつた。窓の下には長方形な、壁に切られた、塵埃箱のある袋町があつて、そこには終日乞食や物賣りが大聲でわめいたり、子供が蹴鞠をやつたり、ホテルのボーイ達が來て博奕を打つたりするセメントの露路が展けてゐた。窓から見えぬ入口から、いろいろな女達が出て來たり、廣東風な人形芝居を催して客を接待する隣家の響などが聞えた。
『あの下のねえ、支那人がやかましふてな、どうぢやろと思ふてですたい。』
主婦はこんな云ひわけをして氣の毒がつた。しかし、なまじ日本人の言葉などよりも、わからぬ支那語の方が、直接何の聯想も呼びおこさぬところから、それは苦ではなかつた。私は、そこへ古新聞の山を

積み重ねた。一度に七八册の本を開いておいて、革命以來の一人の人間の動きを調べたり、終日電燈の下で毛彫のやうな文字の散らばつた粗惡な地圖を眼が疼むまで瞶めたりした。部屋掃除の權利を主張する女中に、しばしばそこを追ひ出されることもあつた。

近代的な神經や感覺の持主にとつて、日本の舊式の旅館で二日以上を生活するといふことは、きはめて苦痛なこととなつて來た。そこには、封建時代からの追從と敬語とがあり、無意味な器物と眼だけの食料品がならべられ、あらゆる不便と不健康とを忍んで、客は高價な費用を負擔させられるだけなのだ。他人の邪魔をせずに廊下を散歩するわけには行かない。愚劣な會話の相手にならずに風呂を浴びることは出來ない。自分の行動をスパイされずに帳場から靴を取つて貰ふことは出來ない。嫌ひなキントンや蒲鉾を除けば、オムレツにはエキトラがつく。そして、無暗に飲みたくもないお茶を注いで、取かへしのつかぬほど遺憾な口調で、お天氣の變つたことに運命的な弔みを述べる女中が存在するのである。

私の上海の宿は、それに、一言の言語も通ぜぬ空莫とした支那の世界を辿らしたものであつた。その支那の世界から、時折、各自の好奇心を尊重する日本人の客がやつて來た。客の大部分の人は、妙に私が文學と議論とが好きなものだと空想して、部屋中をロシア文學談や支那革命の理論でいつぱいに滿たすか、さもなくば、四等品級の輸出税を拂ふ日本酒を飲んで、その際に、何かしらアルコールの作用で常識から離れた行爲を營むかと思つて自分を觀察する癖を持つてゐた。それらの人達の多くは、何も知らないからこそ支那へ研究しに來た私に、支那に關するあらゆる意見を徵收した。一人の人間が、一日に一回私を訪問することは、その人にとつてはむしろ好意を示してくれることに該當するのであつたが、同じやうな好意の持主が同じ日に五人もあるとなると、好意といふものの限られた人間的表現に對して、それを受ける方がやや倦怠を覺えることは免れ難いのである。それは、人間が活字の上に眼をさらして居られる時間が絕對に無限でないと同じことであつた。又、それは、毎日十二時間づつ、若い議論好きな人と革命理論を議論し合ふことの不可能さとも共通してゐた。

私はそろそろ苛々し出した。

朝、眼がさめると、窓の下では、透き徹るやうな聲をした老人の配達が、新聞を觸れ廻はつた。

『申報！……中民報！』

それが濟むと、燒餠賣が來た。そのあとからは、西瓜子の女が『きやんわーつ！』といふやうな奇聲を張り上げて執念深く角に陣取つた。次には瀬戸物屋が茶碗をかち合はして大聲叱呼して退場すると、

太鼓と鐘を串刺しにして、それに四つの分銅をぶら下げ、その樂器の枠を廻轉するごとに、日本のチンドン屋以上のオーケストラを出す小間物屋が、すこぶる猥褻な感じのする支那語で、總體で五元ともしないほどの荷物をむやみやたらに觸れ廻はつて歩るいた。これらと、ほかに無數の野菜賣り、太刀魚賣り、菓子賣りなどの立てるオペラ的叫喚ののちに一日が暮れると、今度は同じ執着性を持つた雲呑屋と、揚豆腐屋とが、夜の二時頃までは、日本の火の番よりも確實に大聲でその町を見廻はるのである。ことに、雲呑屋のかち合はせる木製の樂器と來たら、雲呑の必要でない人間にとつては、純然たる耳の兇器であつた。

これらの袋町の音樂をも、私の神經はだんだんに憎惡の對照として行つた。

『又、申報から、わんたんみいーンまでの一日か？——』

私は活字に眼暈ひがし、支那の人名に瓦斯のやうな頭痛を感じ、議論の響きが鋸力屑を詰めた籠のやうに頭に充滿すると、怒りつぽく、狂人のやうに部屋の壁を蹴つたり、窓を開けてみたり、閉ぢたりした。

『何のために、あんな大聲でわめきやがるんだ、馬鹿ツ、い、い、ちやんころ！ そんな二束三錢の品物を、誰が買はうつていんだい！』

幽閉された惡魔のやうな私は、鐵網越しにから支那人一般をたけだけしく罵ることもあつた。私は、自分がすこしづつ神經衰弱症に犯されて行くのを知つた。私の思想が、憂鬱な分解作用からニヒリズムに變りつつあるのを知つた。私は、不意に誰かが私の部屋へ這入つて來て、不必要な議論をすることを惧れた。それが女中であつて、無言で火鉢に炭をついで行くのでも、あらゆる場合に關する疑惑を彼女の一擧一動に感じた。

同じ疊がいつまでも足の下にあるといふことに、私は非常な腹立たしさを覺えた。ものを考へようとする私の頭腦が、まるで支那家屋そのもののやうに、單なる壁を持つた空隙であるやうな氣がした。机といふものの持久力、それに終日肘をついて暮らす私が、だんだん、机と同じやうに四脚で自分を支へてゐる、平面な動物かなんぞのやうに想像されて來た。私は一日に幾度か、溺れかかつた嬰ん坊のやうに窓をあけて、新しい空氣を吸ひ込むのであつたが——窓の下を見るとぞつとした。そこには、無表情な支那人が、無表情に激動してゐるのである。その手や足や、汚い馬褂や、騒々しい言語から、私は強い電流のやうなショックを受けた。彼等を心から同情してゐる筈の私が、その癖、彼等とは一番關係の遠い人間のやうに思はれた。

次第に、私は、支那を知らうとしてゐる自分に疑ひを持つた。と同時に、私の心は、

『大衆へ！　大衆へ！』
と不斷の要求を感じてゐた。

むちやくちやに大道へ飛び出す日數がつづいた。じつとして蘇州河の河岸に佇んで、半日も荷役の苦力の犇めき爭ひ、唾を吐き、一輪車を押し、銅貨一つで喧嘩をするのを眺めた。行ずりの黄包夫の肩を敲いて、彼等の好きな居酒屋へ同行して、銅片二三十枚の酒を飲力競であたためて啖み合ふこともあつた。工場に、郊外に、大道に、露地に、商店に――私は、つとめて、それらの底に動いてゐる『勞働』を見ようとした。いつも、大衆を。

しかし、それだけが支那である筈はない。唯物的な賃銀の受渡し、がつがつした動物的な食慾、無慚な非衞生的な節操の切り賣り、最も大膽に、最も商品的に取引される人命、單純な組織から來る雷同性――からいふ民衆の間の通有現象は、上海といふ世界の資本主義が製造した人工都會の、ごく表面の動搖にだけ伴ふ支那大衆の衝動的な動きにしか過ぎない。輕薄なブルジョア文明の皮を剝げば、そこには太古からの『無』があるだけだつた。最も惡るいことは、支那人自身が、この上海の文明を自分達の物と考へてゐないことだつた。

そとの世界に絶望して歸へる私には、より憂欝な自分の部屋が待つてゐた。その部屋には、人間一人を封鎖して置くだけの空間があるきりである。部屋の周圍には、現金を持つた人間だけを尊敬する植民地人が歩るいてゐる。私は、終夜、その部屋の中で、急に白髪の殖えた髮を掻き挘つて、火のついた動物のやうに歩るき廻はつた。ときには、ヒステリー女のやうに涙を流した。又、ときには、自殺といふことの卑怯さを思ひながら、機械の廻轉に惹込まれるやうに、自殺した自分の姿を考へて見てゐた。部屋の隅には、鏡台といふものがある。それに自分の顔を眺めた私は、こんなことを鏡にむかつて語つた。

『お前、こりや、アメリカ時代の植民地生活と同じぢやないか！　お前が、あの時分の氣持に逆戻りしてゐるのか、それとも植民地には人間をかういふ風にする雰圍氣があるのか――そのどつちかだらう。しつかりしろ。眼を開けて、ほんとの支那を見ろ！』

私の小ブルジョア的な苦悶は、こんな風にしてつづいた。時は、指の間を洩れる水のやうに、何物も留めずに空しく過ぎ去りつつあつた。そして、自分の苦悶にだけ沒頭してゐた私は、いつの間にか、同宿者の五十嵐棟助君も、やはり東側の同じやうな部屋で、何かに煩悶してゐるだらうことをすつかり忘れてゐた。

はじめて、それと感づいたのは、玄關の横手に、止宿人の部屋番號と名前を書いてある札が、或る日、『五十嵐棟』と書いてある分だけが裏返へしになつてあつたことからである。

『どうしたんだい、五十嵐君はゐないのかね？』
から訊ねると、デスクの番頭は、變色した金齒を見せて笑つた。
『お出なんですが——ちよつと、その、理由がありまして。』
それから、私は、すぐさま、東側の暗らい階段をのぼつて、彼れの部屋をノックしてゐた。返事があつたので、ドアを開くと、すつかり瘦せ細つた五十嵐君が、丸々と肥つた女と酒を嚥んでゐるのに出遭はした。
『いゝんですか？　御邪魔ぢやありませんか？』
『いゝえ、そげんこたなか——なかですばい。ま、お這入り。』
すつかり醉の廻はつてゐた五十嵐君は、長崎辯と東京語をちやんぽんに使つて、私によりも、氣兼ねをしてゐる女の方へ片手を振つて見せた。二人の間には、花札が散亂してゐた。女は何か口のうちで挨拶をすると、猪口を取つて私にさした。膨むだ指に、深くルビーが食ひ込んでゐた。
『こりや、わしの神經衰弱の看護婦でしてな、よろしく。——どうです、瘦せたでせう？　上海へ來てから、一貫五百目も減らしましたぜ。女子見たかて慾望なんかないんですが、獨りでゐますと堪りませんのでな。』
五十嵐君は笑ひながら、女の肩を敲いた。彈力のなさそうな頬に、女は笑靨を見せた。
『仲々良い看護婦ですね。——そりやさうと、訴訟の方は？』
『いや、この通り。もうわし一人ぢややりきれませんから、本社から誰かに來て貰ふことにしてますが。』
から云つて彼れの指さした机の上には、開いたままになつてゐる切拔帳と、英字新聞や日本語の新聞の切拔がこまごまと載つてゐて、その傍には『肉彈』といふ小說が置いてあつた。
『貴方も切拔をやるんですか？』
『そりや貴方がたのとはちがひましてな、わしのは、裁判事件の方のだけですぜ。』
『ふむ、事件と云へば、その事件は一體どんなことでしたつけね？』
五十嵐君は、ものぐさそうな顏で、机の上の切拔帳を取り上げた。貼つてある記事は、私にも時折眼についた『新明號事件』といふ、支那の汽船と日本の社外船との衝突した事件であつた。
『あ、このことですか、貴方の關係して居られる裁判事件は？』
私の不用意さに對して、彼はすこしむつとしたやうな口調で答へた。

『この前話したやうに覺えてますが――しませんでしたかしら？ともかく訴訟がやゝこしいんです。それに、支那側と英國人の辯護士が共謀になつてるんで――內々二三萬弗は貰つたでせうと思ひますが――わしの上海を留守にしをる間に、すつかり惡化しちまうたんです。』

　私は、切拔帳から、その事件の發端とも思はれる個所を拾ひ讀みした。それによると、揚子江下流の黃浦江と呼ばれる上海に面した河路の上で、支那側の汽船がジグ・ザクの航路を取つたために日本の第二淡路丸と衝突して、乘組人員三十五名は溺死してしまつた、衝突の前に、日本汽船が警笛を鳴らさないのが惡るい、しかし、日本側から云はせると、當夜は濃霧で、迚も新明號の舷燈は見えなかつた、それに、ブイを境界線にした澪の問題があつて普通黃浦江の航路筋にあたつて、どれほどまでの角度で船が迂廻した際にはどういふ規則に觸れる……といふやうな、技術上のデリケートな問題まで書いてあつた。もうすこしめくると、今度は裁判所では、支那側に支拂ふべき日本の汽船會社の損害賠償は三百何十萬弗とかで、それ以外に溺死者の遺族へ、慰弔金を出さなければならぬ、といふ判決が下されたと書いてあつた。

『しかし、この裁判は引繰返へして見せすよ。それでわしわ骨を折つてるわけでしてね。これこの通り、每日內地へ送る電報だつて貴方下手な通信社どころぢやありませんて。いつそのこと、日支外交にでもなるとね――。』

　やや與に乘つてここまで云ひ挿した彼は、このとき、急に氣變りがしたやうに、つまらなさそうに横を向いて、盃の緣を舐めた。そして、女が空らになつたのへ酒を注ぎ足すと、急いで口を持つて行つて、それを呑む代りに、

『――船長の奴は逃げてしまつたんです。』

と云つたあとで、口の中へ液體をあげた。

　私は、直感的に、この五十嵐君の住んでゐる部屋にも、私の部屋と共通した何かがあるやうな氣がしたので、あらためてその邊を見廻はした。窓は二つあつたが、煤ぼけたガラスからは、一定の水準を通過したやうな光線しか射して來なかつた。同じやうなペンキ塗の壁に、鼠色で描いた杭洲あたりの風景畫の軸がかかつて居り、人間と同じに天井によつて壓迫される二三のキャビネットや机や火鉢が、小さく隅々に散らばつてゐるに過ぎなかつた。總じて、この部屋は、私のやうな無一文の人間ではない五十嵐君が這入つてゐるところとしては、いろいろな點で不向であつた。第一に、彼れの所有品である偉大なる寢臺が、このペンキ塗の壁に不調和であつた。安物の宜興燒の火鉢の傍

らには、金時計がころがつてゐた。それに、夏の白布をかぶせたままの座蒲團の上には、膝をくづした藝者が座つてゐた。——私には、彼が、謂はば『大班』級の彼が、何を好んでこんな一室に燻ぼつてゐるのかが疑問となつた。

五十嵐君は、女に命じて、呼鈴を押させた。酒を追加するつもりらしかつた。暫らくして出て來た女中は、私がこの部屋にゐるのをちよつと憚つたやうな顔をしてゐたが、銚子を置くと低聲でかう囁いた。

『——あの、五十嵐さま、又、昨日の支那人が參りましてございますが……。』

それを聞いてゐた彼は、がりがりと爪の音を立てて頭を掻いた。

『ゐないと云へ！　貴樣等、あんなに云ふとるに、わからんのか、馬鹿な奴ちやのウ！　居らん、居りません、そえでいいのぢや！　ほかに、何も云ふことなか！』

恐ろしい權幕で女中は叱り飛ばされた。

『ですけれど……。』

『何がですけれどだ。——そのために名札ア返へしてあるんぢや、わからん奴ちやな！』

女中は泣きそうな顔をして引退がつた。

『みんなでこのわしをいぢめよるんだからな……。』

かう云つた五十嵐君を、傍の女は、

『そんなことないわよ。』

となだめたのであつたが、彼はあはててその言葉を振りきるやうに片手を動かして、立ちあがると、廣ろくもない室内を、檻の中の動物と同じ歩調で歩きはじめた。

私も、氣の毒になつて、部屋を辭した。

玄關へ降りたついでに、訪問して來た支那人といふのを見ようとしたが、入口には風呂番と番頭が三人立ちはだかつてゐて、今しも訪問者を送りかへしたばかりの興奮を見せて聲高に罵つてゐた。

冷めたい雨の降りつゞく日が來た。

日本の都會のやうに、泥濘と紙の屑から來る、限りない寒さと儚さはなかつたが、空虚な騷々しさと、憂鬱な建物や舖石の上に降り濺ぐ雨には、しみじみと人間の窮迫を慘めに思はせる冷酷な無關心があつた。都會の底では、苦力は素足で車を曳いた。笠を着たり、傘をさしたりする勞働者は、殆どまれである。しとしとと降る雨の中に、都會はそろそろ冬に這入つてゐたのだ。濡れたサイドウオークにぼんやり影を映してうろついて歩く失業者の群が多くなつた。牝猿のやうに子供を腹へ縛りつけて、腰の帶をしめた女乞食が、人を見ると二丁も

三丁も濡れながら蹤いて來た。街角といふ街角は、閉絶するやうに突出される佇でいつぱいになつた。茶館や料理屋には、野鶏が客の數よりも夥しかつた。フランス租界のある支那旅館へ、人を訪ねて行くと、廊下にむらがる淫賣婦の數は、混み合つた電車を思ひ出させた。その一人一人が、飯店の扉をノックして、性の取引に從事してゐるのである。曾て、私が第一夜に飛び込んだ大馬路附近の淫賣窟は、市の新しい區劃整理のためにすつかり追拂はれて、女達は夜になると、永安公司の前や天蟾舞臺附近、さては北四川路の方へまで流れ込んで、寒むそうに肩をすくめながら、男を漁つた。雨に搏たれた白蘭花は、通行人の鼻へ突つけられても、それを嗅いでやるほどの嫖客もゐない。どの町へ出ても、あまりに多數の人間が、一度に街へ押寄せて來たやうな氣がした。

私が、五十嵐君によつて、近所の料理屋へ招待されたのは、かういふ一夜であつた。

「こつそりとね――わしは、いつも裏口から行つて、默つてずんずんわしの特別に上ることになつてる裏二階へ這入るんです。それで、入口だつて、わざとこの汚い裏道を行くんですよ。」

彼は、宿の傘に隱くれながら、先に立つて城壁の下のやうな小便臭い細い通りを歩いた。そこから、高い鐵柵のある門口へ來ると、横手には無數の貧民の手で掻き廻はされた塵埃箱があつて、紙屑と藁とがその邊へ氾濫してゐた。水溜りのある丸石の舗いた通路の行詰まつたところに、四角な電燈がついてゐて、その下に支那人の巡警が私達の姿を見て、腰の邊まで低頭した。石段を三つほどあがると、あくどい衝立があつて、その蔭から中年の女があはてたやうに飛び出して來た。五十嵐君は默つて這入つた。彼は何やら澁い色合の和服を着流してゐるのである。

二階――きわめて高い洋館の階段をあがると、倉庫のやうにからんとした家のうちに三味線の音がした。素足に廊下がひたひたと粘ばりついた。二人は廊下の奥の別な階段をもう一つ下つて、逆に五六段のぼつた中二階めいた座敷へ通つた。

中年の女と彼は狎れ狎れしい口を利いたのち、一定の食物と酒とを注文した。あとからあとからと火や座蒲團や餉台を据ゑにやつて來る女達とも、彼は、口を大きく開けて笑つたり、長崎辯で聲高に冗談を云つたりして、よほどその家には舊くから顔が知られてゐることを示した。

酒が出で、河豚料理が運ばれた。そこへ二人の女達が三味線を持つて這入つて來た。河豚ちりを拵へてゐる中年の女と、三人の女性を對手にして五十嵐君は、さかんに上海のゴシップをはじめた。酒が廻る

につれて、彼の聲は益々高くなり、話題はすつかり自己中心主義になつた。

「この男は、何のために俺をここへ引張つて來たのだらう？」

私はかう思ひながら、麥酒を呑んでゐた。

「さあ、何か唄ひませう――お唄ひなさいよ。そちら、いかが？　一とつお惚氣を？」

女達の一人は三味線を取上げると、撥で私の方を指した。これも植民地の脂肪に惡る肥りのした女である。

「冗談、俺は呑む一方さ。」

私は所在なさに五十嵐君の方を向いた。彼は、その晩は、どうして自分の偉大な人物であるかを、あらゆる人間に見せようとする本能に驅られたかのやうに、痩せた體を膨らせていろいろなことを吹聽してゐた。總體に、頗る利己主義な酒らしい。

女の彈いた三味線は、飾つた倉庫のやうな建物に二倍ほどの反響を伴つて鳴つた。ほかの女達も、一刻も早くその冷めたい室内から、醫者屋特有の陰鬱な淋しさを驅逐してしまはうとするやうに、むやみにわからない言葉ではしやぎ立てた。厚い支那家屋の壁は、その騷々しさを、ぐわんぐわん鐵で敲かれるやうに反響した。だが、不思議と、かういふ努力にも拘らず、その場の空氣は一向に賑かにもならず、豫期されたやうな景氣も湧かなかつた。だいぶ醉つて來た五十嵐君は四角な顋を張つて、まだ大聲で自分のことを傍若無人にわめいてゐた。その姿は、私の眼には、一生懸命に息を吸つて自分の體軀を膨らせようと滑稽な仕事に從事してゐる、骨つぽい魚のやうに見えた。

その間、女達は、客には構はずに、自分達の氣分を進行させてゐた。じつと耳をすますと、その一人は、こんな歌を唄つてゐた。

「……川を渡つておそひ來る
　不逞のわからの
　そのために、
　妻も――銃取り、應戰す。」

私はぐつと脣を咬んだ。

「何だ、そりや？」

「これですか、こりや、あんた、いま流行の鴨綠江くづしですたい。」

一方、膨らむだけ自分を膨らませることに飽きたらしい五十嵐君は、今度は、もう忘れられてゐる筈の私の存在を憶ひ出したか、俄かに向きなほつて、かう云つた。

「――へ、へ、どうです、わしも一度は貴方へ上海を御目にかけようとは考へとりますたい！　ま、ま、一杯！　これで、折角、お近づきになりましても、あのな、支那人めがうるさうてな、よう御目に掛れ

まへんのぢや。まことに、誠に失禮の段々……』

盃を受取らうとすると、もう彼はどかんと後ろへ倒れてゐた。

私は、禮を述べて、足に絡まる座蒲團を蹴ると、もう一度金屏風の衝立の前で、支那巡警の最敬禮を浴びながら、そとへ出た。

『妙な男だな！』

4

四五日經つてから、恰ど晩飯を濟ましたあとへ五十嵐君が、突然に、甚だしく當惑したやうな表情でやつて來た。

この人が物を考へるときには、蟀谷の邊が蒼くなるのであつた。

『實はね、是非貴方の智慧を御借りしたいのです。——どんなもんでせう、この事件に下請をさせろと云つて來た支那人があるんですが、それが仲々の强か者でしてね。これから會つて來ることになつてますが、その男は、俠客の親分みたいな人間でしてな、日本の役人連もよく知つてゐますよ。何か支那人と面倒が起つたときには、いつもその男が中へ這入ることになつてるといふ風でね。こりや、ここだけの話ですが、秘密結社の親方なのですよ、凄ごい男です。人を殺ろしてくれと云へば、いつでも殺つてくれる。ストライキを潰してくれと云へば苦もなくストライキのかたをつけてくれます。實に恐ろしい勢力を持つてる奴でしてね、今度の裁判事件も私の方の事情を嗅ぎつけてからに、賠償の半分ぐらゐは敗けるやうに運動してやらうと云ふんですよ。——どうでせうな、こんな男に賴んでみては？』

この唐突な質問に對して、勿論、私に出來合ひの返答のあるべき筈はない。

『——ぢや、これからその男に會ふんですか？』

『會ひます。今、電話で私にこれこれの處で何時まで會はう——と會見を申込んで來てるんです。』

『賴んだとして結果はどうなるか？ 法律上、それから社會問題として？』

『さアそこだが——こりや、やはり、會審衙門の陪審官に出る副領事の意見を聽いた方がいゝかも知れんな。』

『一體その男はどんな人間ですか、風采とか性格などは？ 支那にはそんなのが多いのですかね？——』

『立派な一流の紳士ですよ。ボスですね、つまり、そりや、貴方、支那には秘密結社といふものはいくらもありますよ。まア、この上海で羽振りを利かしてゐるのは靑幇かね。この男は、靑幇ぢやないがね。』

『そんなことまでして、汽船會社の賠償金を減らしてやる必要がどこ

にゐるかしら？』

『――いや、今までにも、この事件を種に、隨分と强請に來る奴が多いのですぜ。だから、わしは隱れて會はんことにしてるんです。日本人方面に殊に多い。二百や三百の端た金をですね。それがどんなことを云つて來るかといふと、みんなやれ支那の輿論を左右してやるとか、大きい方面へ渡りをつけてやるとか、實にいゝ加減な嘘八百なんですがね、出さないと强迫がましいことを云ひやがるんです。それから一番困るのは、遺族の奴等ですよ。』

『溺死した人間の？』

『それですよ。』

『本社では一體何と云ふのですか？』

『その本社といふのが、實に何もわからんのですからね。日本と支那の事情なぞはてんでわかつてゐない癖に、やれ强硬談判をせいとか、、、、、、のことだから値切られるだけ値切れとか、非道い返電をよこすのですぜ。仲に這入つたわしこそ、ほんとこんなになつてるんですからね。』

彼は、頰のこけた顏を、冷めたそうな指で撫でおろした。

『すると、貴方の立場は？』

『いや、これには前後の事情を御話しせんとわからんのですが、わしはもと滿鐵の技師だつたのです。この汽船會社が上海に支店を持ちたいといふので、わしは滿鐵をやめて支店を取締ることに決定しました。その後、間もなくわしはその汽船會社と關係を絕つたのですが――事件といふのは、その後に起つたことなのです。しかし、いざとなると、かういふことに當る人間はないのです。わしも頼まれてみると氣の毒でもあり、多少の責任も感じますので、是非一と肌ぬいで解決させてやらうと思つて來たわけなんです。ところが、實際にあたつて見ると、どうも問題が複雜してゐましてね、外國人が這入る、支那人が騷ぐ、日本人が强請る――みんなで、この新明號事件を食ひ物にしようとしてかかつてるのです。全く以て御話にならない――。』

『ぢや、貴方が手を引いたらどうですか？』

『さあ、それも考へては見たのですが、どうもね、男として、今更投り出すといふことは。』

『だが、一體、この事件は、貴方が見てどちらが惡るいと御考へなのですか？』

『わしの考へでは單なるアクシデントしか思はれないのですが、――』

『では、日本側でそんなに大金の賠償を拂はねばならぬとはどういふ理由からですか？　何かそこに弱點がなくちや？』

まへんのぢや。まことに、誠に失禮の段々……』

盃を受取らうとすると、もう彼はどかんと後ろへ倒れてゐた。

私は、禮を述べて、足に絡まる座蒲團を蹴ると、もう一度金屏風の衝立の前で、支那巡警の最敬禮を浴びながら、そとへ出た。

『妙な男だな！』

4

四五日經つてから、恰ど晩飯を濟ましたあとへ五十嵐君が、突然に、甚だしく當惑したやうな表情でやつて來た。

この人が物を考へるときには、顳顬の邊が蒼くなるのであつた。

『實はね、是非貴方の智慧を御借りしたいのです。——どんなもんでせう、この事件に下請をさせろと云つて來た支那人があるんですが、それが仲々の强か者でしてね。これから會つて來ることになつてますが、その男は、俠客の親分みたいな人間でしてな、日本の役人連もよく知つてゐますよ。何か支那人と面倒が起つたときには、いつもその男が中へ這入ることになつてるといふ風でね。こりや、ここだけの話ですが、秘密結社の親方なのですよ、凄ごい男です。人を殺してくれと云へば、いつでも殺つてくれる、ストライキを潰してくれと云へば苦もなくストライキのかたをつけてくれます。實に恐ろしい勢力を持つてる奴でしてね、今度の裁判事件も私の方の事情を嗅ぎつけてからに、賠償の半分ぐらゐは敗けるやうに運動してやらうと云ふんですよ。——どうでせうな、こんな男に賴んでみては？』

この唐突な質問に對して、勿論、私に出來合ひの返答のあるべき筈はない。

『——ぢや、これからその男に會ふんですか？』

『會ひます。今、電話で私にこれこれの處で何時まで會はう——と會見を申込んで來てるんです。』

『賴んだとして結果はどうなるか？ 法律上、それから社會問題として？』

『さアそこだが——こりや、やはり、會審衙門の陪審官に出る副領事の意見を聽いた方がいゝかも知れんな。』

『一體その男はどんな人間ですか、風采とか性格などは？ 支那にはそんなのが多いのですかね？——』

『立派な一流の紳士ですよ。ボスですね、つまり、そりや、貴方、支那には秘密結社といふものはいくらもありますよ。まア、この上海で羽振りを利かしてゐるのは靑幇かね。この男は、靑幇ぢやないがね。』

『そんなことまでして、汽船會社の賠償金を減らしてやる必要がどこ

にあるかしら？』

『——いや、今までにも、この事件を種に、隨分と强請に來る奴が多いのですぜ。だから、わしは隱れて會はんことにしてるんです。日本人方面に殊に多い。二百や三百の端た金をですね。それがどんなことを云つて來るかといふと、みんなやれ支那の輿論を左右してやるとか、大きい方面へ渡りをつけてやるとか、實にいゝ加減な嘘八百なんですがね、出さないと强迫がましいことを云ひやがるんです。それから一番困るのは、遺族の奴等ですよ。』

『溺死した人間の？』

『それですよ。』

『本社では一體何と云ふのですか？』

『その本社といふのが、實に何もわからんのですからね。日本と支那の事情なぞはてんでわかつてゐない癖に、やれ强硬談判をせいとか、、、、、のことだから値切られるだけ値切れとか、非道い返電をよこすのですぜ。仲に這入つたわしこそ、ほんとこんなになつてるんですからね。』

彼は、頬のこけた顏を、冷めたそうな指で撫でおろした。

『すると、貴方の立場は？』

『いや、これには前後の事情を御話しせんとわからんのですが、わしはもと滿鐵の技師だつたのです。この汽船會社が上海に支店を持ちたいといふので、わしは滿鐵をやめて支店を取締ることに決定しました。その後、間もなくわしはその汽船會社と關係を絶つたのですが——事件といふのは、その後に起つたことなのです。しかし、いざとなると、かういふことに當る人間はないのです。わしも賴まれてみると氣の毒でもあり、多少の責任も感じますので、是非一と肌ぬいで解決させてやらうと思つて來たわけなんです。ところが、實際にあたつて見ると、どうも問題が複雜してゐましてね、外國人が這入る、支那人が騷ぐ、日本人が强請る——みんなで、この新明號事件を食ひ物にしようとしてかかつてるのです。全く以て御話にならない——。』

『ぢや、貴方が手を引いたらどうですか？』

『さあ、それも考へては見たのですが、どうもね、男として、今更投り出すといふことは。』

『だが、一體、この事件は、貴方が見てどちらが惡るいと御考へなのですか？』

『わしの考へでは單なるアクシデントとしか思はれないのですが、——』

『では、日本側でそんなに大金の賠償を拂はねばならぬとはどういふ理由からですか？　何かそこに弱點がなくちや？』

『損害と人命の點ですな、ほかに何もないのです。ですが、現在の支那は金がなくて困つてるでせう――それで、何かしらかういふ口實をもうけては、外國から金を取らうとするんですよ。その遣り口は非常に惡辣です。』

突然憤慨し出した彼は、一紡績會社が職工の過失で死んだのに慰弔金を出そうとすると、その職工の家族なるものが四組も五組もやつて來て、終ひにはどれがほんたうの遺族であるかわからないところから、慰弔金を領事館へ委託して、警官立合の上で、送ることにすると、遺族と稱する者は、今度は大勢の無頼漢を驅り立てて、暴力をもつてその金を警官や役人から強奪して行つた、といふ一例を話した。

そこで、私は、最初は支那の民衆から國家の、、主義で分捕つたものを、支那の民衆が今なしくづしに恢復しつつあるのではないか、それが嫌なら、日本人は全部支那から手を引いたら良からう――とまで註釋した。

彼は、それには答へずに、時間がないからと云つて、そそくさと部屋を出て行つた。

5

その後、私は、五十嵐君の事件がどうなつたか、暫らく様子を聽く機會に接しなかつた。宿を變へようと思つても、前からの宿料を借りてゐるので、つひそれもずるずるになつて、一月もまぢかに迫つて來た。が、私の調らべてゐる事柄にも、二三人の有力な知人があらはれて、こちらの希望どほりの參考書を借り受けることも出來、やや系統立つた支那大衆の動行の方向についての示唆を得たやうな氣持になつた。

私は、それまで氣がつかなかつたが、カール・マルクスにこんな豫言があつたのであつた。――

『ヨーロッパの反動主義者どもが、追ひつめられて、アジアを通じて、逃亡を試みる際、最後に支那の壁に、原始的反動と、原始的保守主義の安全地帶に通ずる門に行きつくとき、誰か知る、その壁に「支那共和國、自由、平等、友愛」なる題字の書かれてあることを！』

マルクスのこの豫言は、レニンによつて忠實に科學的に研究されて、支那に於ける列國資本主義の亂舞に、强硬な無產階級的抗爭が試みられ、その方策は、レニンが死んでからも、スターリン、ブハーリンによつて受繼がれて居るのである。

現在の新興軍閥とブルジョア建設のための南京政府は、さういふ大きい史觀からすれば、或る程度までの過渡的役割を演じてゐるものとして、それにはそれの存在理由があつた。しかし、一面、新しい支那に新しい資本が集中すると同時に、世界の帝國主義戰爭の再勃發の危

懶は、漸々としてその裏に蠢き集まつてゐるのだ。同時に、そのことは、かういふことを意味する。一旦武漢政府の失墜と、廣東三日ソヴイエットの暴動ののちに、俄かに潜行戰術に、農民運動に方向を轉換した支那共産黨は、あらゆる機會に、あらゆる排外運動に、あらゆる勞働爭議に、あらゆるボイコットに、常に勞資間の空隙を求めて、幾萬人の犠牲の血で塗られた戰術的鬪爭もゆるめないものだと。

私は、上海總工會の華々しかつた活動の歷史を辿つた。そして、文字の上でそれを知り、數字で記憶すると共に、暇にまかせて、日本人の自動車屋の大達公司といふギヤラーヂのある横丁を這入つて行つては、その當時、反動白崇禧の軍隊と果敢な市街戰を挑んだ便衣隊のピストルの音を、その狹い小路から聽き取らうとした。閘北の商務所書館の一室には、總工會の前衞が軍隊に包圍されて武裝解除を行はれた本部があつた。私は黃包夫を驅つて、現在の支那に、四十二事件當時の支那を夢みた。滬寧鐵道北ステーションの傍には、いまだに取除かれぬ、枯れた蔓草のやうな一聯の鐵條網がある。黃浦江に面した、大阪商船會社碼頭の前の空地には、退却する北軍の捕虜を、黃國軍が一週間の雨の降る中に立たして置いて、日に一回づつパンを投つてやつたといふ空地がある。一度、足を南市の郊外に向けると、そこには、過去數ヶ年の支那革命に重要な役割をはたした龍華といふ桃の名所がある。そこにある警備司令部は、たしかに上海のバスチールに相違ない。

私は次ぎ次ぎと、かういふ最近の史蹟をあさりはじめた。さうして、歩いてゐるうちに、私の頭の中には、最近の支那革命の生きた地圖が曳かれて行つた。

フランス租界の Route de la Tour に、『觀我廬』といふ屋號を持つた、最近の蔣介石の住宅を發見した私は、どんなに發見の欣びを感じたことか！　そこへ、銃劍をつけた兵卒を、幅の大きい自動車の前後左右へ立たせて、出來るだけクッションにそりかへつて、宋美齡夫人と、英雄のやうに乘りつける新軍閥の面影を思ひ泛べて私はひそかに苦笑を禁じ得なかつた。私の手帳には、その第三百十一號といふ番地と、宏壯な純西洋風な建物のメモとが書き入れられた。

さう云へば、現に、私達の泊つてゐる宿にも、一つの革命ローマンスがあつた筈だ。それは、番頭の一人に聽いた事であるが、李宗仁と關係のあつた一人の日本婦人が遙々李宗仁を訪ねて上海へ來て、彼に約束の履行を迫つたが、いくら書面を出しても李は會見しなかつた。終ひに、番頭同道の上、彼をホテルへ訪ねて行つたが、廣西派の頭目である李宗仁はたうとう彼女に面會をゆるさなかつたといふことである。――こんな事件の根を一つ一つ掘つて行くと、そこにはブルジヨ

アジイが封建支那と代つて行く大きい時代の個々の社會相が、激げしい革命の火に燒かれたまま史筐の金塊のやうにころがり出すのである。

私は本と新聞を離れて、地圖と足とで研究しはじめた。

かうした忙しい或る日、視察するところから歸へつて來た私は、旅館の前に、異樣な人だかりのしてゐるのを見て、最初はいつもの物貰りぐらゐに思つて這入つて行つたのであつたが、旅館の閾をまたぐと、そこに起つてゐる騷動の——しかもその中心に、五十嵐君の居るのを知つて、びつくりしたのであつた。

宿の玄關には、這入る横手に洋館まがひの應接間が設けてあつて、來客はすべてそこで待つことになつてゐた。今その應接間の中央には、まつ蒼になつた五十嵐君が、しきりにもう一人の日本人と口論をしてゐるのである。對手の日本人といふのは、四十からみのでつぷり肥つた、血色のいい男で、日本から來たばかりらしく、しきりに何かを日本語で呶鳴つて、

『君、これを通譯したまへ！』

と、五十嵐君に命令してゐた。

二人の前には、まだ辨髪をぐるぐる巻きにした苦力らしい男や、小さな支那帽を戴いた青服の勞働者や、だぶだぶの綿入れを着た黄包夫らしいのや、十四五人の汚い支那人がゐて、わんわん騷ぎ合ひながら二人の方へ詰め寄せてゐた。それらの男達と、玄關から表の舗道にはみ出てゐる二三十人の支那人とは、日頃は閑散な旅館の入口をまつ黒にして立ちはだかつてゐた。

『そんなことは、このわしには通譯出來けん！——第一わしを通譯だと思つたら間違ひや、あんたは！』

五十嵐君は頑固に頭を振つた。

『しかし、こんなちやんころに敗けてどうするのか、貴方は？——こいつらの云ふことをそのまま聽いてやつたら、日本國民の恥辱だぜ！——叱り飛ばして、さつさと退散するやうに話しなさいッ！』

新しく來た男の地位も漸くそれで讀めたやうに思はれた。彼は汽船會社の代理として、恐らく訴訟事件の事務引繼にやつて來たものであらう。

旅館の階段の前では、しきりに主婦が電話をかけて工部局を呼び出してゐた。

支那語のわからぬ私には、支那人達が何を要求してゐるのか皆目見當がつかなかつたが、それでも、めいめいに何か叫んでは二人の前へ掌を突出すので、大概の推察はついた。彼等は、新明號の溺死者の遺族と稱するものであらう。つひに五十嵐棟助君の惧れ避けてゐた事實

は、勃發したのであつた。
『あんたのやうな、支那の事情もわからん人が來たんぢや問題が紛糾するばかりぢや！　よろしい、それぢや、あんたは自分で通辯でも何でも頼んで、しやべりたいことをしやべるがいい。わしは、この事件から全然手を引くから！　さあ、勝手におやんなさい。』
かう云ひ捨てたと思ふと、五十嵐君は、横のドアから勝手へ拔けて、どこかへ姿を消してしまつた。あとに殘つた肥つた男は、しばらく眼の前の苦力達を睨め廻はして立つてゐたが、急にまつ赤になつて、
『馬鹿野郎！』
と呶鳴ると、これも急いでドアから姿を消そうと、踵をひるがへした。その途端に、相手を失はうとすると見た支那人達は、いきなり手を伸ばして、その男の體軀を八方から押へつけた。
『この俺をどうするんだ！』
押へられた方は、紅い顔に眼も鼻も口もいつしよに大きく開いて、波に揺られでもするやうに上下へ身悶えしながら絶叫した。
『馬鹿野郎――おい！　人殺ろす、金よこす、當り前！　金出せ、金出せ！』
一人の苦力が、脇の方から、かう日本語らしいもので叫んだ。
この混亂を、宿の者達はみなまつ蒼な顔をして、應接間の四方から眺めてゐるだけであつた。私も、むしろ、かういふ暴動が必らずどこかで出現するであらうことを待つてゐた一人のやうに、空しく傍觀してゐるほかはなかつた。戸外の苦力達は、内の騒ぎに氣がつくと蟻のやうに戸外へ群れ聚まつて、見る間にガラス戸を打毀はしてしまつた。土間を踏む、素足と支那靴の音とが、ど、ど、ど――と人間の屍を踏みにじるやうに陰氣に響いた。
新しく日本から來た代理人鳥海吉次君が、この支那群集の數十本の手から救はれたのは、彼が殆ど氣を失ひかけた頃到着した一群のライフルを持つた巡査とピストルを持つた日本人の警官達によつたのである。……
私はこの事件のあつた翌る日廣東へむかつて出發した。
支那の現在の物語のやうに、この話にも別に結論といふものはないのである。



口をあけて　夕方
星をみて居ると
たべたいな　あれが。
——ジユウル・ラフオルグ

ゴム吉
マリコ
斜視のチチコ
その妹の小さな子イボコ
老紳士

○

マカロニ（當選）

中村正常

チチコとイボコは親のない姉妹で、アパートの部屋をかりて二人で住んでゐた。隣りにはもう一つ部屋があつて中には誰だか住んでゐる。

（廊下からは二つの部屋のドアがならんで見へて居るばかしだが、チチコの部屋は淑女の部屋だから中はめつたにみせられないけれど、隣りの方の部屋は——部屋の中で誰が一體何をして居るんだか、ときどき廊下に面した一方の壁をそつと取つて中をみんなにみせることにしよう。——）

I

―（ニ　■　カ　▼）―

チチコの部屋のドアが中からあいた。少女イボコが花束を入れた籠を抱へて廊下に出て來た――目の下に疵がある。と、廊下の向ふの方からタイピストのチチコが會社から歸つて來た。目に手巾をあてゝ居る。

イボコ　今日ね、いつもんところに大きな花環がおいてあつたのよ、誰もそばに番なんかしてないの。さうすると、イボコは喜んぢあふ。なんでも偉い人が死んだらしいのよ、イボコはさう思ふ。――さうすると、お墓に花環がたくさんならぶのよ。（首を傾ける）お悧巧ね、イボコは。かうやるのよ、感心するとき。

チチコ　しつ。云ふんぢあない、そんなこと。そとは寒いわよ――ぶるぶるよ。（自分のかけて居たスカーフをイボコの肩にかけてやる。長すぎて妙な恰好にみへる）

イボコ　――これ秘密なのよ、お墓からとつて來た花だつていふことは誰も知らないのよ。安い安いつていふの。おかしいからイボコはそつと笑ふのよ。おかしいわね――このショール長すぎておかしかないかしら。みんな笑ふのよ、イボコのこと。おかしいんですつて、恰好が。

チチコ　おかしいとも。覺へときなさい。人はおかしいことみれば誰でも笑ふのよ。ね、私の目はあたりまへより横つちよ向いてるでせう、おかしいでせう、だから私のこのおかしな目はしよつちゆう見て知つてるのよ、――おかしいものみると、**入つて我慢しないで無**遠慮に笑ふもんなのよ。

イボコ　いつもさういふ具合にやつてればいゝわ、手巾で。さうすりあ見へないわ。おかしいことなんかないことよ。

チチコ　涙がでることはおんなじよ、私の目だつて。泣いてるのよ、今日も。悲しいことがおきて來ちやつたの。イボコになんぞ話したつて無駄なんだけど。毎日ね、悲しいことを見てるのよ。

イボコ　さうお。ぢあ悲しいことはお姉さんの横の方にあるらしいのね。

チチコ　――私は横つちよ見てるんぢあない、これだつてまつすぐ見てるのよ。たゞ目がそんなふうについてるのよ。それが間違いの起りだつたの。私がね、私の會社で、私の横にすはつてる人ばつかしいつでも見てるんだと、その人は間違つて思つてくれちやつたの。その人だけは私の目みても笑はないの。感激したんですつて、私のこと。それがねえ――

イボコ　イボコの目はまつすぐついてるもんだから反つて困つちやふのよ。話しませうか。私がこの花賣つてるでせう。お客様が私の前に

にくるでせう。そんとき私が「この花、一束五錢です」つて云つてやるの、いゝ顏だすのよ。お客樣は知らないもんだから、安いと思つてすぐ買つてくれるのよ。おかしいわね、一體どんな花なんだかちつともその人知らないのよ。顏みてるとずゐ分おかしいの。大人の顏つて下からまつすぐみてると、ふき出す位ゐよ。大人つて馬鹿つたらないわ、ほんとよ、見てるとそんな顏してるの。私のことといつもにこにこ笑つて、愛嬌があるつて褒めるのよ。

チチコ　でねえ、その人の奧さんが死んぢあつたの。さうしたら、私のことその次の奧さんにしようと前から考へてたんだつて、その人云ふのよ。その前から私、その人ともう……。さ、行つといで、行つといで。――私、お部屋で鏡と續きの話するからいゝわ、泣くのよ、そして、横目つかつてるように鏡にうつるのよ。

イボコの出てゆくあとを見送つて、チチコは自分の部屋に這入らうとする。が、一寸行きかけの駄賃に、となりの部屋のドアの前に來て、鍵穴から中を覗く。

（さて、チチコがいま覗いて居る部屋の中といふのは――。さあみんなにも見へるように、邪魔になる壁をとつてしまはう。）

となりの部屋の中。――

旅行鞄をさげて妙に取り澄したポーズを作つて變んでここに立つて居るゴム吉と、その横にコダックを胸のところに抱へてファインダーを覗いて居るマリコ。この一組の愛人同志は今日が一番おしまいの日なのだ。泪をこぼしたり、長い話をしたり、別れのあれをしたり、そんなことはみんなもうすんでしまつて、別れて歸つて行くことだけが目の前にのこつて居る。さうするとゴム吉は鞄をさげて遠い旅に出ていつてしまふといふ。その姿をマリコはカメラにおさめておかうといふ。二人とも悲しみの標本みたいな表情と動作をして居るので、それがわかる筈なんだが、でも當人たち以外の者にとつては、いまこの部屋を覗いて居るチチコがやつたやうに、思はず自分の口に手をあてゝ笑を押へずには、どうもだまつて見てるわけには人類としていかない程、さういふ云ひ樣もなく滑稽で、それで居て妙に緊張した光景である。

マリコ　さういふ顏つきしてるのね、ゴム吉は。（じつと見る）人間は別れるときそんな顏つきするのね。そんな顏つきするなんて、考へてみたこともなかつた――（目をこする）こするわね、目を。こす

るとはつきりみへるの、ほつておくと、すぐ、暫くするとぼつとして來ちやふのよ、見へなくなるのゴム吉の顔が。

ゴム吉　手でふいちや駄目だ、手巾でふくんだ。僕はさう思ふんだ。

マリコ（シヤツターを押す）ちつと、うごかないで、ながく、光線が暗いから、――（ゴム吉の顔に視線を強く）さようなら、さようなら、さようなら……マリコがさういつたとき、ゴム吉はかういふ顔してました。――あとで、思ひだすのよ、これをみて。（自分の顔を肘で覆ふ）

ドアの外で、覗いて居たチチコが聲を立てゝ、笑ひこける程笑ふ。

マリコ（顔を上げる。泪でめちやめちやにぬれて居る。頭をふる――感情を追ひ出すために）どこか外の方にはおかしなことがあるらしいのね。

ゴム吉　おかしいのはこゝだ。――僕はさう思ふ。

マリコ　誰かゞ笑つてゝよ、あんなに、おかしさうに。

ゴム吉　多分、あれは神樣だ。僕はさう思ふ。雲の上でお笑ひになつたんだ。僕たちのすることをみておかしいとお思ひになつたんだ。

マリコ　おかしいことなんかしてやしない。おかしいときは人間は泣きはしないわよ。

ゴム吉　さうとは限らない、僕はさう思ふんだ。

マリコ　私にわかることを云つてよ。自分ばかしさう思つてないで。

ゴム吉　賛成するだらう、みんなおかしなことだ――二人が別れるのも。そのまぎはに寫眞をとらうつて云ひ出したことも、何にするんだそんな寫眞、僕あおこつてるんだぞ。おこつたつて駄目だつてこと知つてるんだぞ。腹が立つてくるんだ、さういふときこれはおかしいと思ひたいんだ。

マリコ　私は歸らうとしてるのよ。きかしてくれることないの、もうほかに。――もう來ないのよ、行つてしまつたら。

ゴム吉　あるとも、きゝたいんだ。もし誰かゞパイプにはなぜあんな穴があいてるか、つてそんなおかしなこときいたら、答への出來る者は驗しに答へてみろ。

マリコ（歸る支度の、手袋をはめながら）

そんなこと、答へてほしいんなら、答へてあげる、いまぢあなくたつていゝだらうに――煙草の煙を吸ふためによ、あの穴は。

ゴム吉　その通り、それぢあも一つあるんだ、麥藁の穴は、あれは何んのためにあいてるんだ。

マリコ　知らないんでせうゴム吉は、私がゆつくりゆつくりなる可く時間がかゝるよう手袋をはめること。——えゝ、答へてあげるわよ、レモン・スカッシュをコップから吸ふために。それがどうしたつていふの。

ゴム吉　それぢあきく、こんどは——

マリコ　あなたは馬鹿なの、悧巧なの。

ゴム吉　マカロニの穴はあれはなんのためにあいてるんだ。なぜあいてるんだ。あの穴は。云つてみろ。

マリコ　なんていふ人、あんたは。

ゴム吉　僕は、とてもわからないことを考へてるのがすきなんだ。

マリコ　ほかのことお云ひなさい。歸る支度はみんなもうすんだのよ。

ゴム吉　僕にだつてわからないんだ、あの穴は。

マリコ　云つてるぢあないの、ほかのことお話なさいつて。

ゴム吉　わからないことを、一つだけ考へてるんだ。その方がいゝんだ。マカロニには穴がなくたつていゝと思ふんだ、だけれども穴があいてるんだ、なぜなんだありあ。

マリコはドアの方にゆく、もう歸らうとする。

マリコ　勝手なことをきいて人を困らしてもいゝんなら私だつてきかう。——悲しみつていふのはどんなの。をしへてよ私に。

ゴム吉　自分で考へろ。

マリコ　私は考へたの。二度ともうこゝに來やしないのよ。來たくなるだらうと思ふの。——これよ、悲しみつていふのは。(ドアのノップに手をかける)

さようならドアさん、もうあけてしまふわよ。(身體を半分外に出す)——なぜ、自分の愛して居る人をそばにのこしておくことが出來ないでせう、ゴム吉には。

ゴム吉　おかしいことつていふのはどんなんだつてきかれたら、それだつて答へてやる。

マリコ（外に出る）さようならのドアさん、もうしめてしまふわよ。

暫く。——マリコ再び這入つてくる

マリコ　ゴム吉、私さつきさう云つたでせう、また來たくなるだらうつて。ほんとうよそれ、云ひに來たの。

ゴム吉　たのむことを忘れてたんだ僕も。

マリコ　——私に。そ。たのんでよ、さ、なあに。

ゴム吉　あのね。

マリコ　え。——早口で云へばいゝちあないの。

ゴム吉　窓をあけて行つてほしいんだ。

マリコ　窓。え、承知したわ。その先をお云ひなさいよ。なんでもないちあないの、云へば。——きゝたがつてるのよ　私。

ゴム吉　それだけなんだ。

マリコ（窓のところにゆく。あける）さむい。——さむくたつていゝわ　風なんか。

ゴム吉　その風がいり用なんだ。

マリコ　こゝに私もつと居たいと思つてるんだか、それとも私はもう帰つてしまいたいと思つてるんだか、それどつちなんだかゴム吉にはわかんないの、返事してよ。

ゴム吉　風がふいてこないと困るんだ。

マリコ　私が居なくなるでせう、ゴム吉は一人になるでせう——さうなるのよ　私が居なくなると。さうするとどうするの。云つてよ私に。

ゴム吉　風がふいてくるとひとりでに乾くんだ。

マリコ　なにが乾くの。あ、わかつた、目の下が、ね。さうよ、そりあそれでいゝわ。だから、私がきくこと返事してよ。

ゴム吉　乾けばもういゝんだ、窓をしめたつて。

マリコ（手をのばしてゴム吉の頬つぺたを抓る）思ひ出してくれる、私のこと。抓つたのよ、いま。

ゴム吉　僕はゴム吉つていふんだ。

マリコ　——知つてるのよ、私は、ゴム吉のえらいこと。可哀さうよ私は。

ゴム吉　誰かゞひつぱつてゝくれないときはいつでもちゞんでるんだ。

マリコ　私がつけて上げた名前ちあないの、それ。私がいつでもひつぱつてゝあげてたのよ。のびてたのよ　それだから。

ゴム吉　ひつぱつてたのはなすと、とんでつてしまふんだ。どこへとんでくんだかわからない。

マリコ　ぢあ、ゴム吉がちゞんでどつかにとんでつちやつたこと考へてるわ、私は。——丸いものみたら私のこと思ひ出してね。ゴム吉がさういつたのよ、丸いものみると自然にマリコのこと思ふんだつて。丸いからよ　私が。

ゴム吉　丸いものはいつでもふくらんでるとは限らないと思ふんだ。

マリコ　マリコはおこつたとき頬つぺたが尚更ふくらむのよ（ふくら

ませる）だけれども、息を出してしまふと、ぷうつと、かういふ具合にしぼんでしまふわ。――それでもう、しぼんでしまつたマリコは用がないから行くんだけれど、さしあたつて寒い風のはいつてくる窓はしめてしまつて（しめる）その代りにハンカチをおいてつてあげるわね。ふくのよ　これで　ぬれたとき　自分で（目をふく）私なんかは。みてなさいよ、かういふ具合にふくのよ、便利なものよ　ハンカチつていふものは。（手巾をゴム吉の肩の上に丸めてのせる）行くわもう。ひどい人、うらんでるのよ。うらんでなんか居ないわ。丸いものがたくさんあればいゝと思ふわ。思ひ出してくれるから。

ドアを出る。ドアの外がはに暫くもたれて立つて居る。泪を拭かうとする。ハンカチを探がす――ない。ゴム吉の肩の上にのせてしまつたのだ。

マリコ　――さしあたつていり用なものを私だつてなくして來てしまつたのよ、ゴム吉。……

チチコが自分の部屋のドアから顔を出す。マリコの視線と合ふ。マリコは行つてしまふ。あとを見送つてチチコは聲を上げて烈しく笑ふ――笑ひ聲。

ゴム吉（部屋の中で）お笑ひになるんですか、また――（兩方の手を握つて天に擧げる）さうか僕あ名人なんだ、雲の上のあいつを笑はしてやることだつて、すれば出來るんだ。

笑ひ聲――チチコが覗いて居る。

ゴム吉　からかはないで下さい下界の人間を――腹が立つてくるんだ次には。

チチコ這入つてくる。白いジヤケツをきて胸の乳のあたしが四つふくらんで居る。

チチコ　――あら。あたしよ。

ゴム吉（ふり向く。笑ふ）はゝゝゝゝ。きまつてるんだ、次にはおかしくなつてくるんだ。

チチコ　――始めてでせう。こんにちは。

ゴム吉（見る）うん、誰なんだ、お前は。

チチコ　あんたがこゝに引きこして來てから今日でもう二た月位ゐよ。數へてたの。どうしてさうちにばつかし引きこんでるの。

ゴム吉　天國から僕によけいなことをきゝに降りて來たのか、歩いてみろ、歩いてみろ。

チチコ（歩く）かうやつて歩けばいゝの、えゝ、歩くわ、ぢあ私は歡迎されてるのね。おとなりに住んでるのよ、私。來たかつたのよ、この部屋に。まあ、よかつた。——だけど、私どうして歩いてなくちやいけないの。

ゴム吉　ぐるつと廻つてうしろをみろ。這入つて來たドアがあけつぱなしだ、そつから出て行きなさい。ぢあないと誰かゞ覗く、いゝんですか、僕の部屋になんか這入つて來て。

チチコ　ありがとう、親切ね。だけども、大丈夫なの、そりあ。いままで覗いてたのはあれ重に私なのよ。（ゴム吉の肩の上の手巾をとつてゴム吉に渡す）私もさう思ふわ。風で乾かすより、これで拭く方がどうも早さうなのよ。さういふ點で便利なものなのよ、ハンカチつていふもの。

ゴム吉　——ひとの話は立ちぎきしたつてかまはないんだ。ひとの部屋には用もないのに入つて來たつてかまはないんだ。

チチコ（テーブルに腰をかける）ありがと、私のために云つてくれるのね。

ゴム吉　ひとの机にはこしをかけたつてかまはないんだ。

チチコ　うふ。（机の上のゴム吉のパイプをくはへてみる）

ゴム吉　ひとのパイプはだまつてくはへてみてもいゝんだ。

チチコ　あれ、少し變ね。——變人だつて評判よ、あんたは。

ゴム吉　ついでに云つてくれ、誰が云ふんだ。

チチコ　私やなんかゞよ、重に私よ、やつぱし。覗いて來ちやみんなに云つてやるの、折角みて來たんだもの。——あの部屋の中ときたら、いつでも二人で、それに今日なんかと來たら、なんだいありあ、泣いたり笑つたり、くつついたりはなれたり、つて。みんなとても喜んできくのよ、私がきかしてやると、少し餘計にしていふのよ。なぜ、私がそんなことといふんだか知つてゝ。

ゴム吉　まて、少し考へる。

チチコ　ん、考へなくたつて私がいふわ、云はうと思つて來たのよ、ね、私つたら、ね、ずゐ分、その、あれなのよ。

ゴム吉　だまれ。いゝか、かりにだ、君と僕と、こゝで力くらべを一つやつてみるんだ。どうなると思ふそしたら。

チチコ　ぢあやりませう。話はあとにするわ。

ゴム吉　やるには及ばない。よくきくんだ。もし僕の方が强けりあ、君をこの部屋から叩き出してやらうと思つてるんだ。いますぐにだぞ。

チチコ　そんならやるには及ばないわ。（腕をまくる）だけれども腕はまくつてみした方がいゝわ。（椅子をもち上げてみせる）さあ、話の方をしませう。

ゴム吉　とても駄目だつてことが判つた。僕は事の種類によつてはとても判りがいゝんだ。弱い方が早いとこ出て行つてしまへばいゝんだらう。用意は出來てるんだ。この鞄さげて行きさへすりあいゝんだ。

チチコ（ゴム吉をつかまへる）ところがよ。どうもそれも駄目らしいの、强い方がぎゆうと弱い方をつかまへてしまふと。

ゴム吉　――なぜ、笑はないんだ、僕を。おかしくはないのか。

チチコ　いまはやめとくわ。いまは笑はない。そのわけをこれから話さうつてところよ。さ、はなしてあげる、はなすの惜しいのよ、少し。（まだ離さない）

ゴム吉　きゝたいんだ。いまはなすつて云つたのは、話のことか、手のことか。

チチコ　（手をはなす）氣前よく兩方とも。だけども遠くへ行つちやいけない、私の手のとゞくところに置いとくの。（鞄をとり上げる）これこつちにあづかつておく。

ゴム吉　人間なんだぞ。僕あ。――もつともそりあ今の狀態を云つてるんぢやあないんだ。

チチコ　私に大事な妹が一人あるのを知つてゝ、知つてるでせう。

ゴム吉　心配しなくたつていゝんだ。それ云ひに來たんだらう、――僕あ何にもとなりの大事な妹になんかまだ目つけてやしない。

チチコ　云ふけど、妹は今年十二よ、小さいのよまだ、まさかあ。

ゴム吉　そんなら自慢しなくたつていゝ。

チチコ　ところがとても有名なの、イボコつていふのよ、えゝ、目の下に疣があるから。夜店へ出て花を賣つてるの。行つてごらんなさい居るから。でね、その花つていふのは、――ちよいと、ほんとのこと云ふのよ、あんたイボコから花買つたことあるんぢあない、安いのよ、だから、――買はない方がいゝわよ、あんただから云ふけど。

ゴム吉　僕あまだ花を買つたこと一度もないんだ。花をやり度いと思つたことならあるよ。

チチコ　きこへてくるでせう、いつも、イボコが唱歌うたつてるの。

ゴム吉　うん。

チチコ　あれがイボコよ。

ゴム吉　朝、目さますともうすぐなんだ。あれなのかイボコつていふのは。

チチコ　おあ、これからは唱ふときにはドアや窓をみんなあけさしておくわ。そすりあこの部屋のどこに居たつてしよつちゆうよくきこへるわ。好きらしいのね、イボコの唱歌、學校に居た頃にはあれ唱歌丙だつたんだけど。

ゴム吉　丁度、その正反對だ。うるさい餓鬼だと今でも信じてるんだ。ところできくんだけど、僕の顏、いま、うれしさうな顏してゐますか。

チチコ　さうねえ、顏つていふのはなんだかもつとちがふもののような氣がするけど、こんなんでもいゝのかしら。

ゴム吉　さうなんだらうと思つたんだ。鏡の代りにあなたの目をつかつたんだ。どうもありがとう。僕、實あ、もう向ふに行きたいんだけど、それには色々の事情があつてね。同情に訴へるよ、繰返してくれないか。もし僕に親切にしてくれるんなら。

チチコ　さうするとどうなるの。

ゴム吉　いや、別に僕にはして上げられるようなこと、探したつてないな。

チチコ　あるわ、一つ。私云ふけど。

ゴム吉　だけれども、僕あ、その簡單に云ふけど、僕あもう行きたいんだ。

チチコ　だから私考へてるのよ、手と足をつかまへて縛つておかうかつて。

ゴム吉　あの、だれの手と足。

チチコ　いゝえ、まだするつてなんか云ひやしないわ。

ゴム吉　しない方がいゝよね、さういふこと。

チチコ　だけど、しようと思へば出來るのよ、云つておくけど。

ゴム吉　（自分の手と足をうごかしてみる）ぢや、うごく間にうごかしてみておくよ。

チチコ　えゝ、やつときなさい。出來ないことなんかないといままで私信じてたのよ、なんでも。

ゴム吉　信じてない方がいゝよ、そんなこと。

チチコ　だつて私はなりたいと思つてたら、タイピストにだつてなれたし、月給がほしいと思つてたらちやんと雇はれたし。

ゴム吉　その外になにがほしいと思つてたのさ。

チチコ　一つづつあとから出てくるのよ　希望つていふもの。

ゴム吉　こんどのはなんなんだ。どういふ希望なんだ――云つておく

―（マ　カ　ロ　二）―

けど、勿論、僕はきいてみるだけなんだぜ
チチコ　きいてくれるんなら有難いわ。ぢあいふわ。死んでくれると
いゝと思つてるのよ。
ゴム吉　生命に關する問題なのか。考へ直した方がいゝぜ。
チチコ　だから直したのよ。
ゴム吉　ぢあ、直した方を先に云へばいゝぢあないか。
チチコ　だつて、それをいふとおこるでせう、あんた。
ゴム吉　こんどは僕に關係してるのか。
チチコ　（うなづく）　そ。
ゴム吉　ちよいといふけど。
チチコ　云ふのはいゝけど、鞄は駄目よ
ゴム吉　さつき云つておいたらう。僕はたゞ勿論きくだけなんだつ
て。さうなんだぜ。
チチコ　さつきつからあんたは親切かどうかためしてみて居るのよ。
どうもさうらしいのよ。だから私ずゐ分うれしいのよ。
ゴム吉　人つていふものはうはべではわからないよ。
チチコ　だから内つかはがよ。どうもさうらしいの。
ゴム吉　昔の話だ、そりあ。
チチコ　手と足、うごくかどうかやつてごらんなさい。
ゴム吉　ま、いゝ。
チチコ　でね、もしあんたが本當に親切だつたとするでせう。
ゴム吉　ところがちがふんだ、いまは。
チチコ　うれしいの　私。
ゴム吉　わからないよ　僕には。
チチコ　きいてよ、話を。
ゴム吉　よしきく。
チチコ　で、私、こんど結婚することになつたらしいのよ。
ゴム吉　自分だけで勝手にきめてるんぢあないのか。
チチコ　相手がさう云ふのよ、してくれつて。
ゴム吉　さうだつたらいゝと思つてるんぢあないのか。
チチコ　だから私してやるの。
ゴム吉　恩にきせると間違ひだぞ。
チチコ　だつてお爺さんよ、その人もう。
ゴム吉　おい、僕ぢあないのか。――内心がつかりしたよ、僕あ、さ
うだと思つてた。
チチコ　がつかりするには及ばないわ、あんなんだもの。その方が
いゝと思つてるの。
ゴム吉　とにかく安心した。僕ぢあないんで。

チチコ　お爺さんが死げばいゝと思ふの。だけれどもさつき考へ直したつて云つたでせう。——だから我慢するの。

ゴム吉　よし、それで話がすんだ。

チチコ　いゝえ、これから。でね、そのお爺さん、頭が禿げてるうよ、どう思ふ。

ゴム吉　そりあ頭に毛がないからだ。

チチコ　さうらしいのよ。

ゴム吉　僕はよろこぶ——なんだかうれしくなるんだ。君は悲しんだらう、禿頭と一緒になるのは

チチコ　ぢあよろこんでね。うれしいわ、私だつて、さうすりあ、少うしは。

ゴム吉　君のいふことわからない、僕には。

チチコ　わかることから段々云ふわ。ほら、私の目——ちよつとだけみるのよ、ね、少し曲つてるでせう。

ゴム吉　失敬していふよ。少しつていふのか。

チチコ　たくさんよ。

ゴム吉　知つてるんならいはない方がよかつた。

チチコ　でね、横の方に居たのよ、その人。

ゴム吉　さあもうそんへんからわからない。

チチコ　重役なのよ、私の會社の。その人が私の横に居るんぢあないのよ。私がその人の横に居るのよ。

ゴム吉　わかつた。下手の横好き、が始まつたんだらう。

チチコ　私にいふのよ——「わしはこの年になるまで、あんたのようにそんなにわしに想をよせてくれる淑女に會つたことがない」——つて。

ゴム吉　それ、どつちの責任なんだ。

チチコ　私の目が運わるくそつち向いてたのよ。私、なにも横目でみてたんぢあないんだけれど、向ふで勝手にさう思つただけなのよ。

ゴム吉　お爺さんは幸福なんだ、それでいゝ。

チチコ　紙を丸めて私の方にほつてよこすの、それを拾へつて足で床を叩くのよ。ひろつてひろげてみると、それ手紙なの、今晩あんたと洋食たべよう、つてかいてあるの。どうかしてると思はない、その人。

ゴム吉　別に思はない。

チチコ　さうかしら、ぢあ、云ふわ。その人私に感激してるつていふのよ。でもね、私が二十二で、そのお爺さんが五十九で、うちには私と丁度同じ年で二十二の娘があるんですつてよ。そんなこと一々きかしてくれるの、何遍もよ。私のこと娘のような氣がするつてい

ふの、そいで居て手、變んな具合に握るのよ。娘の手つてやつぱし握るかしら。どう思ふ。へんだと思はない。

ゴム吉　思へつていふんなら思ふよ。

チチコ　變んなのよ、そりあ。

ゴム吉　よし變んなんだ。それからどうしたんだ。

チチコ　その人の奥さんがいよいよ死んぢあつたの、五十三になるの。

ゴム吉　どうして死んだんだ。

チチコ　息が止つたんですつて。——私をうらんだんですつて、死ぬとき。

ゴム吉　どうして怨んだんだ。

チチコ　あんたにはわかんないの、それ。かういふわけよ、私がそのお爺さんの愛をうけ入れちやつたでせう、ちやつたのよ、だからよ。それらしいのよ、奥さんが怨んだつていふ理由は。

ゴム吉　面白いな、君の話は。

チチコ　ぢあ、よろこんでね、もつとするから。

ゴム吉　もうやめた方がいゝ。

チチコ　だつてさうすると、あんたはまた鞄返せつていふでせう。——でね、かうなのよ。私ね、いろんなもの貰つたのよ。頂戴な頂戴なつて、私ずゐ分いろんなもの欲しいのよ。——お膝に抱つこしろつていふの、變んな具合よ。——むろん、そりあけちなのよ。だから。——それにね、奥さんに一度めつかつちやつたのよ。頭の毛をね、櫛で一列に並べてあげてたところ、禿の上によ。——私だつていろんなものたくさん貰つた方がいゝのよ。

ゴム吉　何を貰つたんだ、云つてみろ。

チチコ　この指輪。だけど、これ鍍金だつてことあとでわかつたのよ。

ゴム吉　——考へてみると無駄な話だ。こんな話。

チチコ　私だつてさう思ふ。

ゴム吉　どんな顔してるんだ。（チチコの顔をみる）

チチコ　ひとがきいたら、私は泣きたいんだつて云つてやりたい程なの。

ゴム吉　だけど、こつちからみて居ると、おかしい顔に見へてしまふ。

チチコ　おかしいのは目のせいよ。そのお爺さんだけは、私の目がわかつてからだつて笑はないわ。笑はないのよ。だから私、お爺さんと結婚してやるの、私とね、結婚するとね、お爺さんのね、一人娘はね、腹を立てゝね、家をね、出てしまふんですつて。さういつてね、お爺さんをね、困らせるんですつて。（泣きだしてる）可愛さう

なのよ、お爺さん。さう思ふでせう。

ゴム吉　思ふ。――そんな娘は追ひ出してしまへ。きまつてるんだ。眼鏡かけてるんだらう、それから女子大學に通つて、毎月一圓だしてマルクス全集を買つて讀んでる感心な娘に相違ない。ちやんとわかるんだ。

チチコ　後生だからそいつのこともつと惡く云つてやつてよ。

ゴム吉　よしよし、そのうちにどつかであつたらひどい目に會はしてやる。

チチコ　たのんだわよ。(考へる)だけど、だめだわ、あんたぢやあ。お爺さんが云つてたもの、うちの娘は――なんでも、丸くつて、マりみたいで、やつぱし虫がついてゝ、その虫からくる手紙にマリコマリコつてかいてあるつて。強さうよ、あんたなんかより。

ゴム吉　おい、うそのこと云つてるのか、ほんとのことを云つてるのか。

チチコ　そいつつたら人つかまへて意見するのが上手らしいのよ。お爺さんをつかまへても毎晩いふんですつて、五十九になつて二十二の娘と結婚するのは罪惡だつて、――私だつてその點は少し贊成なんだけど、だつて仕方がなければ仕方がないわね。

ゴム吉　そのほかに、そのマリみたいな女は何んて云つたんだ。

チチコ　――お父さん、私も戀愛をすてますから、お父さんも汚れた戀愛をすてゝ下さい、つて。云ふことだけ感心よ。それでなけあ家を出ますつて。さういつたんですつて。

ゴム吉　――なに聞いたつて驚きはしないんだゴム吉は

チチコ　私の口を抓つてみてよ、そすりあわかるわ、ほんとよみんな云つたこと。

ゴム吉　もう少しきかしてくれ、それで、どうなつたんだ、その娘はマリみたいに肥つたそいつは。

チチコ　ね、お爺さんは娘に云つたんですつて。――「わしはな、この年になつて、始めて愛つていふものがわかつたんだ」さういつたんですつて、あてにはならないわね。それからね、「わしの死んだ妻はわしを愛しては居なかつた」つて、さういつたんですつて。こんな話、もう嫌や。

ゴム吉　もう少し、してくれ。もし君がしてくれつていふんなら――君の足が寒いつていふんなら、その足、僕があつためてやる。足を僕の顔につけといてもいゝんだ。

チチコ　だつて、さうすると、口をきくの、とても出來なくなるわ、私には。知つてゝ、私があんたのこと、どう思つてるかつていふこと。

ゴム吉　たいへんすまないんだが、僕のきゝたい話の方をさきにしてくれ。君の話はあとできく、きつと。その娘はどうしたんだ、それで、そのマリみたいに肥つて心のわるい女はさ。

チチコ　その女、その女はね。お爺さんに云はれたんですつて、——「出て行け、お前の戀人のところに行つて食べさせて貰ふがよからう、頼んでこい」つて。

ゴム吉　それで娘は戀人のところに行つたのか。

チチコ　行つたでせうよ。きつと男はさういふとき、いゝ氣になつて女を自分のとこにとめといたでせう。男はみんなさうなんだから。頼もしさうな、力になりさうな、空元氣みせるのね、男は、さういふとき。

ゴム吉　それが女にはうれしいんだらう。二人は戀人同志だつたんだらうからな。

チチコ　云ひさせう、——ところが、さうぢあないらしいのよ。その男つていふのは、とても話にならない意氣地なしなんですつて。

ゴム吉　女はそれを知らなかつたのか。

チチコ　——娘は、さうだつたら自分で働きます、つてお爺さんに云つたんですつて。だから私は笑つてやつたの。働いて私みたいに時々お錢をくれるいゝお爺さんをみつけるがいゝわ、つて。さうしたらね、お爺さんはね、——さうか、わしはいゝお爺さんか、つて。泣いたのよ。手でしつかり私を膝の上に抱いたまゝでよ。

ゴム吉　そのお爺さんは、ほかのお爺さんの膝の上にのつて居る自分の娘のこと考へてたんだ。そのお爺さん一人ぢあない、もう一人の頼りにならなかつた青年も、やつぱしさうなんだ、——おかしいと思はないがいゝ、僕はその青年の代りに、いま泪こぼしてるんだ。その娘は、青年にほんとうのわけを話さなかつたんだ。話したつてどうにもなりはしなかつた。馬鹿な青年に馬鹿な夢をのこして行つてくれたんだ。——おかしいだらう、僕が代りに泪なんかこぼしてもいゝつて娘は青年に云ひのこして行つたんだ。

チチコ　それぢあ、きいてよ、私の番よ。そのお爺さんの膝の上に居た女は、私だつてその娘だつて多分おんなじよ、そのとき何を考へたと思ふ。若い娘は若い青年のお膝の方が矢張しいゝなつてさう思ふのよ。お爺さんのチョッキの金時計の鎖をみるでせう、さうすると、あれもし私のすきな青年がしてたらもつといゝだらうと思ふのよ。それからお爺さんの紙入れにお金がたくさん入つてるでせう、それをみると、やつぱしお爺さんになんか持たしておくより、自分のすきな青年が持つてゝくれた方がいゝと思ふわ。私さつき云つたでせう、お爺さんのものなんでも頂戴な頂戴なつてほしくなるつて

云つたでせう、あれね、お爺さんからとつてそれを誰かに上げたくなるのよ、自分の戀人によ。確かにさうなのよ。でね、私はさういふ氣持もつてるでせう、それから、私にはさういふ戀人ないのよ、それから、あんたは靑年でせう。

ゴム吉　うん、僕、言葉を挾むけど、靑年のうちにもいろんなのがあるんだよ。

チチコ　私はあんたのこときゝたいのよ。

ゴム吉　僕か、僕あ、まあいゝ

チチコ　もう少し、話、兩方で進めない。

ゴム吉　ぢあ、僕のこと說明しようか。

チチコ　さつき私の足、あつためてくれるつて云つたわね、あのときは辭退したんだけれど、いまなら——でも、云ひ出してくれないわね。してくれない。そしたら私、なんか上げるわ。私ね、靑年からそんなふうにされたこと一度もないのよ。私、正直なのよ。云ふことみんなほんとよ。

ゴム吉　そりあ、するのはいゝんだけどね、さつき云つたらう、靑年のうちにもいろんなのがあるつて。(チチコの足を兩手で包んでやる)

チチコ　私、云ふけど、あんたみたいなのすきよ。

ゴム吉　ぢあ、說明するけど、かういふのはね、役に立たないんだよ。何んにもしないんだよ、戀人のために。出來ないんだよ。そのことをいつでも悲しがつて居るんだ。そして出來ない以上そんなことするの嫌なんだ。靑年は娘になんか何んにもして貰つちやいけないんだ。娘が靑年にして貰ふ方がいゝんだ。

チチコ　だけれどもあんたには何んにもないぢあないの、私にはお爺さんから貰つて來たものいろんなのあるぢあないの、それから私はあんたにそれを上げたいと思つてるんぢあないの。それはみんないけないことぢあないの。どう考へたつてたしかに善いことばかしだわ。

ゴム吉　もう話は終いだよ、さあ。足も少しあつたかくなつたらう。してやつたんだ、君が話に夢中になつてるうちにそつと。(チチコの足を包んでやつて居た手をとる)

チチコ　ありがと、私、知つてたのよ、そつとしてたの、——お禮はきつとしてよ。ちやんと考へてるの。

ゴム吉　どうしてそんなこと云ふんだ。

チチコ　いゝのよ、私はなんか上げたいんだから。

ゴム吉　それぢあ、お禮に鞄を返してくれ。

チチコ　どうしてあんたはそんなふうになつたの、いつからなの。

ゴム吉　きゝたいんなら云はう。ある人がひどい目にあつたんだ。ひどい目にあつた揚句、首をくくつて死んだんだ。舌だして死んでたんだ。そのまねなら僕にだつて出來るんだ。(舌をだす)

チチコ　あ、わかつた、それなのね、いつも覗いてると、あんたは舌だしてるわ。

ゴム吉　その人が死ぬとき息子に云つたんだ、人の世話になるな、つて。その息子は舌だしてみるんだ、人の世話になつていゝかどうかそして考へるんだ。

チチコ　かはいさう。

ゴム吉　ありがとう、僕はいつでもいふんだ、ありがとう、ありがとう、つて。そして一緒に云ふんだ、でもいらない、いらない、つて。

チチコ　可哀さうに思ふわ。それに私、どうしてもどうしてもあんたが好きよ。どう、おどろいて。

ゴム吉　おどろいたとも——おどろきあしない。

チチコ　おどろくもんぢあないわ。私ね、だからあんたの部屋をいつでも覗いてたのよ。——さうすると、始めのうち、不思議にあんたのわるくちをみんなに云つてやりたくなつたの、それどうしてなんだかわからないのよ、それで居てかはいさうだつたのよ、なぜなんでせう、不思議なのよ。

ゴム吉　そんなこと不思議なもんか。

チチコ　覗くと、よく泣いてたわね　あんた。

ゴム吉　泣いてたとも、そいつはたしかだ。

チチコ　おんなじよ、そんとき私だつて泣てたのよ。自分の部屋で泣いてゝ、泣いたつてつまらないと思ふとき、あんたの部屋覗きに行つたのよ

ゴム吉　きくけどね、君はなんていつて泣くんだ、ほら、鳥ならチュウチユウつていふだらう。

チチコ　えんえん　つて。でも、どうかしら。

ゴム吉　さうか、變んだな、僕あわんわんつて泣きやしないかと思つてたんだ。

チチコ　わゝゝ、わんわんつて、さう。——うちで可愛がつてやつて居た犬がさういつてないたわ。父さんが私たち置いて居なくなつちやつたとき——私と妹のイボコと二人だけのこつたのよ、母さんはその前から居なかつたわ。仕方がないでせう、だから、その犬すてたのよ。お豆腐屋の前のごみ箱の中に入れてふたしておいたのよ。そしたら、わゝゝ、わんわんつて。

ゴム吉　いくつのときだ。

チチコ　私が十三、イボコが三つ

ゴム吉　それからどうしたんだ、――いや、よさう、きいたつてなんにもならない。

チチコ　苦しんだわ、それから。

ゴム吉　勇敢で悧巧で正しいんだ。

チチコ　私のこと褒めてるんでせう、さうなのよ。

ゴム吉　單にそれだけぢやない、英雄だ。

チチコ　どしてそんなに褒めるの、私のこと。

ゴム吉　人をやたらに褒めてやるとおかしくなつてくる癖があるんだ。さ、その鞄返してくれ、僕あもう行く。

チチコ　おとなりの私のとこにいらつしやいよ。もつと近くで私のすぐそばで、私のこともつとうんと褒めてよ、褒められたことないのよ、あんまり。もつとそばに來てくれない、私のづつとそばに。

ゴム吉　君の名前は何んていふんだ、始めてきくんだ。

チチコ　名前なんかない。

ゴム吉　名前のいらないのは立派な格言を作つてのこしていつた人だけだ。

チチコ　そんなら云ふわ、チチコつていふのよ。お爺さんがつけてくれたの、私のあすこんところが特別にずゐ分可愛いゝんですつて、耳んところで小さな聲でいふのよ。

ゴム吉　いゝ名前だ。

チチコ　(胸の四つふくらんで居るところを手で押へる)一つ　二つ　三つ　四つ。

ゴム吉　さつきから人間と話てるような氣はしないんだ。

チチコ　人間のは二つ。だから二つだけ余計よ。だれかにやつてもいいのよ。私自分のことちよいとことはつておくけど、ずゐ分手軽なのよ、私は。もし欲しいつて思つてくれたら、いつだつて上げてよ――よ、こつちにいらつしやい上げるから。

ゴム吉　頭の中だけ、普通にしておゝきよ。

チチコ　あんたには、こんなに力のある人がいま入り用なんぢあないの(ひつぱる)弱虫(ジャケツの下から林檎を二つだす――ふくらんで居たのは二つは林檎だつたのだ)、うふ、これよ、あげようと思つてたのよ。ほしいつて云つてよ。

ゴム吉　鞄かへしてくれ、鞄かへしてくれ。

チチコ　一口にいへば、私、どうしてもあんたがすきなのよ。どうにかならない。

ゴム吉　僕、行くよ、もう。

チチコ　へゝえんな氣持よ、――駄目なのね、私は。

ゴム吉　さ、鞄。

チチコ　鞄は私がもつて行つてあげる、手助けよ、さしてよ。(鞄を下げる、ひどく重さうに) さつきは輕かつたのよ、こんどは力がぬけちやつたの、人間つてさうなのよ、想ふ通りにいかないと、なんでも重たくなつちやふのよ。

ゴム吉　僕は、肩の上にのつかつてる自分の頭が重くつて仕様がない。

チチコ　(言葉に感じて、ゴム吉の頭に手をかける) さ、輕くなつて、少うし。

ゴム吉　言づけをしてくれないか。もしマリコ、マリのように肥つた女だ、あれがマリコつていふんだ、その女がこの空つぽの部屋を訪ねてくることがあつたら。――

チチコ　なんて云つてやればいゝの。――嫌なのよ、嫌なのよ。

ゴム吉　すまないけれど云つてくれ、「ゴム吉はひとから物を貰はなかつた」つて。

チチコ　――私にもし戀人がみつかつたら、私はその人を親切に、やさしく、なんにもさせないで遊ばせておいて、それからその人に私は愛して貰ふのよ。さう考へてるのよ。さういふ戀人があればいゝと想ふのよ。ないのよ。(林檎をさし出す) この林檎、もらつてくれないの。

ゴム吉　(鞄をうけとる) 僕はひとの手助けもいらないんだ。貰ふのやめるよ、くせになるからね。

チチコ　この林檎ね、今日、お爺さんと洋食たべたのよ、おしまひに果物が出たのよ、だから私、それ二つこゝんところにしまつて來たの、一つはお爺さんのぶんなの、これうちにかへつて一つ誰かにやると喜んでくれる人があればいゝのにつて思つたのよ、二人で窓にならんでこしをかけて食べるとね――もし、ほしいつていつてくれるんなら、明日だつてまた何んかきつと持つてくるわ、きつとよ。――これ、ぢあ一つだけもつてつてよ。重くなんぞ、ないわ。

ゴム吉　(ドアのところで) マカロニにはなぜ穴があいてるんだか、――――わからないことだけ考へてりあいゝんだ。僕はさうするんだ。

ゴム吉、出てゆく。チチコは二つの林檎を兩手にもつて、窓のふちにかける――さも二人でかけて居るやうに。林檎の一つを皮のまゝかぢる。

チチコ　私がかうやつてこつちがはたべると、私とならんでこゝに腰かつてる私のいゝ人が今度はこつちがはたべるのよ。(林檎の向をかへ

る）かはりばんこにたべるのよ……ところが誰もたべてくれないのよ。私一人でたべるのよ。こんどはこつちがは、これ私のぶんぢやあないのよ、あの人のぶんなのよ。（かぢる）やつぱし私がたべるのよ、私一人でたべるのよ………

イボコがかけこんでくる。

イボコ　——大變よ、大變よ。

チチコ　なにきいたつて驚きやしない——さういつたわ、あの人は。

イボコ　それどこぢあないわ。みつかつたのよ、いよいよ、私たちのお父さん。私がみつけたのよ、とうとう。

チチコ　なんだつまらない。

イボコ　それどこぢあないわ、ほんとに。かうなのよ、今日ね、お爺さんが一人私の花買ひに來たのよ。そして私の顔いつまでもみてるのよ。

チチコ　日の下の疣がおかしかつたからさ、そりあ。

イボコ　私に、名前はイボコつていふのかつてきくのよ。

チチコ　有名だからね、お前は、それできいたんだらうよ。

イボコ　あれたしかにお父さんよ。だつてね、ぢあなければ、あんなに長く私の顔なんかみてるわけないわ。

チチコ　ぢあ、きいてみたらいゝぢあないか、あんたは私のお父さんですかつて。

イボコ　だから、きいたのよ。お爺さんには娘があつたんぢあありませんか、つて。そしたら「ありました、いまは居ない」——さう答へるのよ、いよいよ怪しいぢあないの。

チチコ　ぢあ、その娘はいま居ればいくつの筈なんですか、つて聞けばいゝぢあないか。

イボコ　その通り聞いたのよ、私だつて。そしたら、今年二十二になります、つて。ごらんなさい、どう。

チチコ　それからどうしたの

イボコ　うちの姉さんも二十二だつていつたのよ私。

チチコ　それから

イボコ　さうしたら、姉さんの名前はチチコつていふんだらう、つて向ふで知つてるのよちやんと。

チチコ　ふうん。

イボコ　それから、いろんなこときくのよ私に。

チチコ　頭が禿げてたらう、その人。

イボコ　ほうらごらんなさい、いよいよさうぢあないの。禿げてた

わ、禿げてたわ。

チチコ　それから、チチコには男のお友達があるんだらう、つてきいたらう、その人。

イボコ　さうよ。あたしたちのお父さんつてさういふ人なのね、きつと。——お父さんつていふのは厳格の方があたりまへよ、さう思ふのよ、知らない人だけれど。

チチコ　いやな奴だね、あいつは。

イボコ　誰のこと、それ。

チチコ　お前になんかきかなくたつていゝぢあないか。

イボコ　大丈夫よ、私、ちやんとうまく云つといたわ。姉はいつだつて、お父さんの噂ばつかししてきかせてくれます、つて云つてやつたのよ。

チチコ　お父さんの噂なんかしたことないぢあないか。

イボコ　だつて、そいつた方がいゝと思つたのよ。——お父さんはきつといま頃、もう頭がお禿げになつて、それからきつと二十二になる娘のこと思ひ出して悲しくなつてらつしやるに相違ないわ、つていつでも姉は申してます、つてさう云つてやつたの。

チチコ　さうしたら、そいつ涙こぼしたらう。

イボコ　だから、たしかにさうよ。あれ。だつてちがふんなら、泣くことなんかないぢあないの、泣いてるのよ。

チチコ　お前はそれたしかにお父さんだと思ふのかい。

イボコ　さうよ。

チチコ　で、お前には、お父さんがあつた方がいゝのかい。

イボコ　さうよ。

チチコ　ぢあ、それをお父さんにしておゝき。

イボコ　だつて、——それぢあ、私たち、お父さんの家に二人で行きませうか。

チチコ　さういふことになるかもしれないわ、いまからさう思つてたつて間違へないわ。

イボコ　お父さん。（云つてみる）かういふ具合に呼ぶのよ。お姉さんも云つてみなさい、お父さんつて。

チチコ　よしきた、云ふわ、お父さん、お父さん。（笑ふ）

イボコ（笑ふ）お父さん（泣く）

チチコ　だめぢあないか、泣いちや。

イボコ　泣いてろぢあないの、やつぱし

チチコ　ちがふんだわ、泣いてたつて意味が、お前とは。——ふん、お父さんつて云つてやれ。

老紳士、這入つてくる。

チチコ（にらむ）——私になんか呉れるものを持つて來たんぢあないんなら、なぜこんなとこに來たの。

老紳士　紙包みを出す。置くところがないので、もぢもぢしながら床の上におく。

イボコ（小さい聲で）——お父さん。變んだわなんだか。

チチコ（老紳士に）私の前にもつて來て、あけてみせたらいゝぢあないのそれ。

イボコ（老紳士に）ね、これよ、私の姉さん、二十二になるの、チチコつていふの。顏みてごらんなさい、間違へないわれ。——それから、イボコの顏もみてよ。

老紳士、チチコの顏をみて居る。その樣子をイボコは熱心にみて居る。

イボコ　これが二十二になるあんたの娘なのよ——それから、覺へてるでせう、妹が一人あつたの、ほら、イボコつていふのよ、十二になるの、私なのよ、それ。よ、間違へなんかないのよ、たしかよ。

チチコ（イボコに）だまつてらつしやい、イボコ。

老紳士　わしが來て、わるかつたんならかへる。

チチコ　二十二になるあんたの娘を探しに行つたらいゝでせう。もう居ないんでせう。可哀さうで仕樣がないんでせうその子のこと。——用がないんならかへつたらいゝわさつさと。

イボコ　お姉さん、どうしたのよ。

老紳士　わしのしてることが、わしにはわからん。どうなるんだ、これから——

イボコ　いゝことしてらつしやるのよ、大丈夫よ。

チチコ　どうだらわかるもんか、そんなこと。

イボコ　父親と娘と會つたんぢあないの——だけど、どうして私の方みて下さらないの、このかた。

チチコ　お前なんかに用がないからさ、さういふ人なんだよ、この人は。

イボコ　——ぢあ、私はあんたの娘ぢあないつていふの。——（チチコに）だつて、お姉さんの妹ね、さうね。（老紳士に）さうなの

よ。私はチチコの妹よ、イボコつていふのよ、さつきから云つてるぢあないの。(床の上の紙包みをあけてみる) 私だつてこの土産、貰つたつていゝ筈よ。(手袋が出る) 一つきりよ。忘れたのよきつと、二つかつてくるの。

チチコ　いゝぢあないか、それで。

イボコ　いゝわ、そりあ。(老紳士にお辭儀をする) ありがと——だけど、イボコはおこつてるのよ。ずゐ分よ。

チチコ　この人にはわかりはしないよ、そんなこと云つたつて。

イボコ　——イボコは泣かうつと思つてるんだけれど、我慢してるのよ——駄目だわ、泣いちやふわ。

チチコ（老紳士に）この子は何をほしがつてるんだかわかつて。——子供の手袋がほしいんぢあないのよ。——子供だから、ほしいものがあるのよ、それ、父親なのよ、ほしがつてるのよ、父親を。——私なんかはいらない、そんなもの。なくつたつて我慢出來る。だけれど、私にだつてほしいものがあるのよ。——それを云ふと、おこるから云はないの。

老紳士　わしは何にをほしがつて居るのかわかるか。妻に死なれ、娘に反かれ、お前に馬鹿にされとるわしは、このわしは何にをほしがつて居るのか、それがわかるか。

チチコ　——わからない、ひとのことなんかみんなわからない。自分のことだけわかるんだわ。さうぢあなければ人間なんて決して泣かなくたつていゝんだ。自分のこと考へてると人間つてみんなかなしくなるのよ。自分のことはわかるからよ。

イボコ　さうすると、私だつて自分のことはわかつてるのかしら。變んねえ、なんだか。泣いてるんだけれど、自分のことなんてあんまりわかつたようぢあないわ。……

II

廊下にならんだ二つのドアがみへる。マリコが廊下の向ふから歩いてくる。チチコがゴム吉の部屋のドアの前に頑張つて居る。

チチコ　——あんたね、マリみたいに肥つてるマリコつていふのは。さうなんでせう。

マリコ　丸いものはいつでもふくらんでるとはかぎらない——さういふ言葉をきいたことがありましたわ。

チチコ　どこへ行かうつていふのそれで。

マリコ　からつぽの部屋をまた見に來たくなるだらうつて、私は前に云つたことがありますわ。

チチコ　誰れにさういふことお云ひになつたの。

マリコ　ゴム吉つていふ名前の男。いまごろはちよんで、どつかにとんで行つてる筈。

チチコ　そいぢあ、私はあんたに用があるのよ。――私はチチコつていふの、覺へておいてね。あんたのお父さんがつけてくれた名前よ。禿げてるわ。あんたのお父さん。――私は決してすきぢあないのよ、あの人。

マリコ　さつき、私に用があるつておつしやいましたね。

チチコ　たのまれたのよ、ゴム吉に――私だつてゴム吉つていつてやるわ。マリみたいに肥つた女が來たら、そいつと、そいつについて云つたのよ、うそ云ひやしないわよ、そいつにことづけてくれつて。よつぽど大事なことづけらしいのよ。

マリコ　どうぞ　ぢや　それを。

チチコ　私がね、ゴム吉に林檎をやらうつていつたの、さうしたら、いらないつて。だから私は一人でたべたの。――肝心なことなのよこれが。

マリコ　どうぞ、おつしやつて。

チチコ　私はあんたが癪にさはつてるのよ。だけれども、あんたの考へてることには、いつも私は賛成するのよ、知らないんでせうあなたは。

マリコ　私、まだあなたのこと存じて居ないんですわ。

チチコ　チチコつていふのよ、――云つてごらんなさい、私の名。一度云へば覺えてしまふから。

マリコ　あのゴム吉のことづけをどうぞ。

チチコ　もう、とつくの昔しに申上げてしまつたわ。

マリコ　いいゝえ、まだ伺ひませんわ。

チチコ　さうだつたかしら――私が林檎をやらうといつたのに、ゴム吉はいらないつて云つたのよ。この話したぢあないのもう

マリコ　昔からゴム吉は變んなことばかし云ふ人間でしたわ。

チチコ　變んぢあないぢあないの、ちつとも。

マリコ　――だつて、そんなこと言づけて、私にまたなんか考へろつていふんですね。

チチコ　――かういつてたのよ「僕はひとから何にも貰はなかつたぞ」つて、さう云へつて。

マリコ　私、ゴム吉の部屋に入れて頂きますわ。

チチコ　私だつて一緒についてくわ。

マリコ　からぽの部屋をみに來たんですわ。

チチコ　きくけど、あんたの方でも、私のこと、きらいだと思つてる

でせう。

マリコ　いゝえ、ちつとも。

チチコ　さう、――私、いふけど、正直なのよ、私は。美徳だわね、これ。

マリコ　あの、入口のところにあんたは立つていらつしやいますのよ。おどき下さらなければ、私は入れないんですわ。

チチコ　ね、あんたは、はじめにどうしてゴム吉と仲よしになれたの、どういふ具合にしたの始めに。

マリコ　――横目つかつたんですわ、きつと。

チチコ　やつぱしあんたはおこつてるのね。――知らないのよ、あんたは。仕方がないから、をしへるわ、私の目みてよ、横向いてるのよ、始めつから。それを間違へたのよ、あんたのお父さんが。

マリコ　私の父だけぢあないと思ひますわ、人間は間違へるのがすきなんですわ。

チチコ　――感心してよ、その言葉も。あんたは私よりえらいのよ。さうね、ほんとに。間違へだらけね。

マリコ　間違へばかしてた方が人間はいゝんですわ。

チチコ　ぢあ、私も、さうするわ。もつといろんなことききかしてよ、私に。

二人はゴム吉の部屋のドアの中に入る。（ゴム吉の部屋の壁をとる。すると、中にゴム吉が旅行鞄にこしをかけて、ぼんやり考へて居る）

ゴム吉の部屋の中――

チチコ　まあおどろいた。居るのね、あんたは。どしたのよ、一體。いつかへつて來たの。

ゴム吉　昨日の夜からかうやつてるんだ。

チチコ　なにしてるの、さうやつて。

ゴム吉　知つてるもんか、僕だつて。

チチコ（マリコの方を指し）ぢあ、この人にきいてみるわ。この人、ずゐ分えらいのよ。

ゴム吉　その人は昔からえらいんだ。

チチコ（マリコ）この人、いま、なにしてるんだと思ふ――昨日の晩からかうやつてるんですつて。

マリコ　――ひとにきいてもらいたいのよ、きつと。

チチコ　（ゴム吉に）この人、かういふわ。

ゴム吉　きいてくれ、きいてくれ。

チチコ　（マリコに）きいてくれつていつてるわ、なんてきいたらいいんでせう。

マリコ　生きてるか、死んでるか、つてきいてみるといゝわ。

チチコ　生きてるか、死んでるか。

ゴム吉　（舌をだす）

チチコ　返事の代りに舌だしたわよ。

マリコ　人の世話になるのか、ならないのか——その次にさうきいてごらんなさい。

チチコ　んゝ、そりあ、あとできくわ。あんたが居なくなつてから。

マリコ　私はもうどうでもいゝの。

チチコ　ぢあ、私が勝手にしてもいゝの。

マリコ　その前に、ちよいと私の代りにきいてみて頂戴。耳はあたりまへにきこへるかどうかつて。

チチコ　きこへさうよ、さつきからの具合をみると。

マリコ　ぢあ、取次いで——私はもう結婚するんです、つて。

チチコ　——この人もう結婚するんですつて。

マリコ　——愛しては居ないけれど、立派な紳士です、つてさういつて。

チチコ　——愛しては居ないんですつて。でも立派なんですつて。

マリコ　いまに、私もきつと、その人を愛するやうになるでせう、つて。

チチコ　——この人目をつぶつちやつたわ。

マリコ　たゞ、それだけなんだつてさういつて。

チチコ　もう云はないでもいゝと思ふわ。この人、目をつぶつた位ゐだから、あんまりうれしいんぢあなささうよ。

マリコ　いつまでも、目をつぶつてなさい、つてさういつて。

チチコ　つぶつてなさいつて、いつまでも。

マリコ　見ないですんだらさぞいゝだらうつてさういつて。

チチコ　まだ、云ふことあるの。

マリコ　目をふさいで居て、私の顔がどんな顔だかわかりますか、つてさういつて。

チチコ　それ、是非きかなくつちやいけないの。

マリコ　きかなくたつてかまはない。

チチコ　（ゴム吉の耳に）——泣てゝよ、マリコは。目ふいてるわ、手巾で。

マリコ　（そつと、どアの方にゆく）

チチコ　（それをみながら）私、もう、だまつてるわ。

マリコ　（ドアのそとに出る）

チチコ　（ゴム吉に）まだ、目あけちやだめよ。

　　マリコ　廊下を、づつと靜かに歩み去る。

チチコ　こんどは、私の考へを云ふのよ。

ゴム吉　よせ、マリコが笑ふから。

チチコ　笑はないにきまつてるわ。ためしてみませうか。

ゴム吉（居ないマリコに向つて）この人のこと笑つちやいけないよ。

チチコ　チチコ大丈夫、自信があるのよ。あのね、マリコつて奴は、やつぱしあなたを見すてたのよ。――どう、笑はないぢあないの。それがほんとうなんだもの。

ゴム吉　わかつてる、そんなこと。

チチコ　ほかの紳士と結婚するんですつて。立派なんですつて。

ゴム吉　平氣だ。

チチコ　ほんとのことお云ひなさい。大丈夫よ、マリコは笑ふ筈ないのよ。笑はうつたつて笑へる筈ないのよ、もう。

ゴム吉　――笑つて貰ひたいな、マリコ。

チチコ（笑ふ）私が代りに。

ゴム吉　どんな顏をして居るんだ。僕には、マリコ、もうよくわからないんだ。

チチコ　それでいゝぢあないの。

ゴム吉　目をあけてみてもいゝか。

チチコ　ちよいとまちなさいよ、心配だから。

ゴム吉（目をあける）――

チチコ　おちつくのよ。

ゴム吉　あはてゝるようにみへるか。

チチコ　――えらいわ、あんたは。平氣なのね。豫想外だわ。

ゴム吉　だまつてろ。

チチコ　私も、もうぢき行つちやふのよ。――どこへ行くかつていふとお爺さんのところよ。どうする、さうすると。

ゴム吉　どうもしないんだ。

チチコ　どうもしないつてどうするの。

ゴム吉　かうやつて居るんだ。

チチコ　いつまで。

ゴム吉　しらないんだ。

チチコ　もうぢき、おなかゞへつて來やしない。

ゴム吉　いまだつてさうなんだ。

チチコ　ぢあ、私がなんかこゝへもつて來たら。

ゴム吉（舌を出す）たべるには舌を使はなければならないから駄目だ。

　チチコ、自分の部屋に走つて行つて、なんだか食べるものをもつて來てゴム吉の前におく。

チチコ　私が歸つて來てみて、これがなくなつてたら、——どうする、あんたは。なる可くならなくなつて居る方がいゝわ。

　チチコ行く。

暫く。——チチコの部屋からイボコが出てくる。ゴム吉の部屋のドアをあけて、それから自分の部屋にかへつて、ドアのところから首をだして、唱ふ。

イボコ（でたらめのふしで）

　大人つてずゐ分馬鹿なのよう
　背ばつかし高い馬鹿なのよう
　イボコはいつでも笑ふのよう
　イボコはづゐ分お悧巧よう……

　イボコは出てきて、ゴム吉のドアから首をつきこむ。

イボコ　あのね、姉さんがさういつたのよ。唱歌を唱ふときには、お部屋のドアをあけて、おとなりにもきこへるようにして唱ひなさいつて。——それから、あなたの前においてあるでせう、そのパン、それね、私が食べてたのを姉さんがとつてつちやつたのよ。で、もし、返してくれるんなら、私かへして貰ひたいのよ。

　イボコ　部屋の中に入る。パンをとる。

イボコ　私がこれこゝで食べて、それから粉こゝにこぼしておけば、姉さんはあんたがたべたんだと思つて、私のこと叱らないわ。たべるわよ、こゝで。——どうして、あんたはだまつてるの。このパンね、出來たてだと、すてきなのよ、丸くつてふくらんでゝ、おいしいのよ。

ゴム吉　丸くつて。ふくらんでるのか。

イボコ　おゝびつくらした。

ゴム吉　丸くつてふくらんでるのか。そのパン。

イボコ　どして、そんなに私のパンばかしみてるの。あげるなんて云はないわ。いそいでたべちやふわ。

ゴム吉　早くたべろ。

イボコ　——ほうら、もうないわ。きいたらあんたが食べたんだつていふわよ。——用がないから私はもう向ふに行くわよ。あんたんところには、私に食べさしてくれるもの、もうなんにもないでせう。くれなんて云はないけど、きいてみるだけよ。

ゴム吉　窓をあけてみろ、あるかもしれない。

イボコ　そんなとこにかくしておくの。(窓をあける)ないわ　なんにも。空に星がみへるばつかしよ。

ゴム吉　口をあけてゝみろ。

イボコ　(口をあける)あん。

ゴム吉　星をみて居てみろ。

イボコ　あん

ゴム吉　なんにもないところからだつて、なんかはとんでくる。

イボコ　まあだ——あん。

ゴム吉　もう駄目だ、我慢しろ。

イボコ　あん、まあだ。

ゴム吉　もう駄目だ、我慢しろ。いまに僕はなんかを新發明するんだ。



彼の誕生（一幕狂言）

武者小路實篤

登場人物

A。B。C。D。E。F。
A子。
爺。人類。
他、大勢。

（天界呑氣國のノンセンス廣場。AとB話しながら出てくる）

A。君は人間だつたことがあるさうですね。

B。えゝ。人間だつた處ですか、昨日まで人間だつたのです。

A。もう一度人間に生れる勇氣はありませんか。

B。ないこともありませんね。しかし赤坊からやりなほすのは考へものですね。

A。あなたはもう一度人間になつてもいゝと思ふのですか、赤坊の時代さへなければ。

B。いや赤坊や、子供の時も、いゝ親さへゐてくれゝば、いやなものとは思ひませんが

ね。

A。人間て悪いものぢやないのですか。

B。運や、境遇にもよりますが、大體わるいものぢやありませんね。

A。あなたは珍らしい人ですね。私の聞いた範圍でもう一度人間に生れてもいゝなぞと云ふ人には今まで一度も逢つたことがありません。皆、もうこり〳〵だと云つてゐます。

B。さうですかね。それは死ぬ時は隨分苦しかつたものですが、元氣に生てゐる間は中々面白いことがありました。もう一度人間に生れて戀をして見るのも悪いものとは思ひませんね。

A。戀と云ふものはへんなものださうですね。女の人からも隨分戀の話をきゝましたが、私には見當がつきませんでしたよ。

B。それはさうでせう。人間になつて見ないとわからないものが澤山あります。

A。人間てわるいものぢやないのですか。

B。社會さへよくなればね。今ぢや、餘程運のいゝ人か、しつかりした人でないと幸福にはなれません。

A。どうしてゞすかね。

B。人間にはまだ自分の生命を本當に生かすことはむづかしいのです。いろ〳〵のことがあつて、人間は自分の望む通りの生活が出來ないのです。そして自分のしたいことをしてゐては飯が食へないのです。

A。飯が食へないと云ふことが僕にはよくわからないのです。

B。それはさうでせうね。

A。人間は飯さへ食へればいゝらしいですね。

B。それだけでは勿論いゝとはゆきませんが飯が食へなくつては生きてゆけませんからね。しかしこんな話をしてゐては切りがありません。

A。いゝえ、僕は之から人間に生れなければならないのです。だから生れた時の心得を知らしてほしいのです。

B。それは生れて見ないとわからないのです。

A。人間社會には隨分幸福な人と、不幸な人とがあるのださうですね。

B。それはさうです。

A。どう云ふ人が幸福で、どう云ふ人が不幸なのです。

B。一がいには云へませんが、第一に病氣にかゝる人は不幸ですね。

A。どうも私にはわからないことだらけです。

B。それはこゝではわかりませんよ。しかし今にいやと云ふ程いろいろのことがわかるでせう。

A。知りたい氣もしますし、怖い氣もします。

B。別に大したこともありませんよ。特別に不幸に生れつかない限りは。

A。隨分不幸な人もあるさうですね。

B。それはあります。

A。そんなに不幸でも生てはゐたいのですね。

B。生きてゐたくなければ不幸はないわけです。特別な人以外は何處までも生てゆきたいやうにつくられてゐるのです。

A。死ねば樂でせうがね。

B。處がうまく死ねないやうに出來てゐるのです。

A。さうですかね。

B。こゝで考へれば不思議ですが人間になつて見ると、それがあたりまいになるのです。

A。どうもよくのみこめませんね。私は人間だつた人の話を聞くと、いつもいろ〳〵のことが不思議になるのです。人間て利口なのか、馬鹿なのか、少しも見當がつかないのです。

B。人間になつて見たつてわかりませんよ。たしかに人間は利口ぢやありませんよ。だが存外馬鹿でもないのです。

A。人間にあなたはもう一度生れてもいゝのですか。

B。いゝと思ひますね。人間て隨分可愛いゝものです。又中々愉快なこともありますし、それ以上のこともあります。

A。どんなことです。

B。自分の仕事をしてゆくことです。自分の天職を果すことです。又飢餓になつて生てゆく氣持です。こゝで考へると馬鹿氣て見へますが、人間になつて見ると、それが又面白い以上なのです。人間て不思議なものですよ。

(C登場)

C。おゝB君か、いつ君は來たのだ。

B。一寸前に來たのだ。

C。さうか、君もとう〳〵來たのか。僕の子供は元氣にしてゐるかね。

B。大へん元氣だつたよ。大へん立派な方になつたよ。

C。僕の妻も丈夫にしてゐるか。

B。大へん齢はとられたがお丈夫らしかつた。

C。仕合せにしてゐるか。

B。あゝ、一時君がなくなつた時は、隨分お氣の毒だつたが、この頃は大へん仕合せさうに見へた。

C。君の仕事はどうだつた。

B。まあするだけのことはしたつもりだ。

C。君はいくつまで生たのだ。

B。七十八までさ。

C。そんなになつたのか。

B。もつと生てゐたかつたが、こゝに來たらそんな氣はなくなつた。こんな天下太平なおちついた世界に入れるのだと思つたら、なぜあんなに死にたくなかつたのか、わけがわからない。

C。本當だよ。僕なんか三十八で死んだのだから隨分心のこりだつた。しかし死んで見たら、矢張りよかつたと思ふね。少くもわるいことは一つもない。

B。實に靜かに、實に清く、美しいね。僕は地上でこんな世界のくるのを望んでゐたのだ。誰もお互に征服出來ない、お互に傷つける事の出來ない世界をね。他人の野心や、利己的の犠牲にならずにすめる世界をね。

C。こないだDが來たので聞いて見たが、君は實に幸福にしてゐると聞いてよろこんでゐた。

B。ありがたう。Dも立派な一生をすごして實に立派に死んでいつたが、僕はさうはゆかなかつた。死ぬ時は隨分苦しかつたよ。それだけ解放されてゆく時は何とも云へずいゝ氣持だつた。へんに淋しかつたがね。

C。僕は若かつただけ君以上に苦しんだらう。だが、そんなことはどうでもいゝが、君に逢はしたい人が一人ゐるが、君は誰だかわかるかい。

B。誰だらうね。

C。君の二十五の時、何處かへ行つた人だよ。

B。あの人か。

C。さうだよ。君の所謂彼女さ。

B。君は知つてゐるのか。

C。こないだ偶然逢つたのだが、あの人も君のことは覺えてゐた。

B。いつ死んだのかね。

C。二十八の時だつたさうだ。第三番目の子供を生んでまもなく死んだのださうだ。

B。夫の人はまだ生てゐるのかね。

C。後妻をもらつたが、もう二人とも死んでしまつたらしいが、しかしこゝでは嫉妬もなければ、姦通もないから安心だよ。誰と話しをしようと、誰も何とも思ひはしない。他人がよろこんだからと云つて、別に損する人もないからね。

B。あはゝゝゝ。それはさうだね。

C。それならよんで來て上げようか。

B。一寸あつて見てもいゝな。

（C退場）

A。あの人も人間だつたのですね。

B。さうです。あれは僕の一番尊敬してゐた友達だつたのですが、三十八で死んだのです。あれが死んだ時僕は本當にがつかりしました。天を恨んだのはその時許りだと云つてもいゝ程でした。

A。君達の話を默つて聞いてゐると、人間に生れるのも面白いと云ふ氣がして來ます。

B。まあ、生れて見なければわかりません。そして生て、そして死んで見ないとわからないのです。だから人生と云ふものは本當にわかつた時は死んだ時で、もう人生ではなくなつた時ですから、人の一生の幸不幸はつまりわかるものぢやないのです。

A。あなたの云ふことは少しはわかりますが、はつ切りしない處があります。

B。誰にだつて人生のことや、自分の一生のことはわからないのですよ。たゞ死ぬまで無我夢中で生てゐる人が多いのです。

A。無我夢中で生てゐれば樂しいわけですね。

B。處がさうはゆかないのです。まだ〱人間の生活は苦しみが多いのです。いつかはすべての人が幸福にあかるくくらせる時がくるだらうと思ひますがね。

A。僕は不思議に思ふのですよ。人間になつて見れば、それがあたりまいと思ふでせうか。

（C、A子と登場）

A子。Bさん、暫く。

B。A子さんですか。本當に暫くですね。

A子。よくCさんからあなたのお話を伺つてなつかしく思つてゐました。

B。さうですか。それはありがたう。

A子。生てゐる間の御緣はうすかつたのですが、私はあの時分のことを實によく思ひ出してゐました。あの時分が私の生てゐる内で、一番たのしかつた時かと思ひます。

B。今はどうですか。

A子。それは今は特別です。

B。本當に僕はこゝへ來て、始めて幸福と云ふものを知つたのです。こゝでは何一つ不平がなく、不公平がなく、他人によつて不幸にされる心配もなく、他人を不幸にする心配もなく、食ふ心配も、働く心配も、金の心配もなく、たゞ心うれしくしてゐられるのですか

ら。

A子。本當に私も死ぬまでは隨分死にたくなかつたのです。處が死んで見ると、こんなにいゝことはないと思ひました。私は子供のことも心配にはなりますが、しかしそれだつて何かわけのわからない愛につゝまれてゐるやうな氣もちがするだけです。子供達の目さへ開いてくれたら、このよろこびが地上でも味へるのだと思ふと、子供のために祈ることはあつても、心配で心配で仕方がないと云ふことはありません。死んだつて、それが不幸ぢやないのですからね。

B。僕も死ぬのは實にいやでした。しかしこんな心うれしい思ひが出來るのでしたら、人間は皆死ぬ方がいゝのかも知れません。

A。うつかりそんなことを云ふと、爺さんに怒られるよ。

B。これはこゝだけの話さ。人間として地上に生てゐる間、死ぬ方がいゝなぞと考へるものは一萬人に一人もありはしないよ、皆どんなことがあつても死にたくないと思ふ許りさ。爺はぬけめのない奴さ。何のために人間のやうなものをつくつたのか知らないがね。

A。ついつくつてしまつたのだと云ふ話さ。こんなものが出來てしまつたのだ。あはゝゝゝ。之も面白い、爺はそんな風に考へてゐるだらう。あついにあつては叶はないよ。なんでもいゝのだからね。生れた、それもいゝ、死んだそれもいゝ。殺しあつた、それも面白い。ひどい目にあつた。それもいゝ、何んでもいゝ。俺はどつちだつて損はしないのだ。そんな氣でゐるらしい。しかし人間を不幸にしたがつてゐるのでせうと爺に誰かが云つた時、爺は怒つてゐた。馬鹿、あきめくら、大馬鹿のヒョットコの出來損ない阿呆野郎さうと云つて又大きな聲を出して笑つたよ。

C。爺さんは本當に愉快な方だよ。君はまだ逢つたことはないだらう。

B。あはない。

A子。本當にいゝ方ですよ。私はあの人に逢ふとつい涙が出ますのよ。

A。馬鹿ですね。私はあの爺の顏を見ると笑ひたくなりますよ。愉快で愉快でたまらなくなりますよ。君も是非一度逢つて御らんなさい。

B。何處へ行つたら逢へるのですか。

A。いつも方々をうろついてゐますから、何處にゐるかわかりませんよ。

B。それは是非逢ひたいものです。

A。いやでもその內逢ひますよ。さあ、地上の話でもしてゐて下さい。聞くのはたのしみです。

B。この方は今に人間に生れるのださうですよ。

A子。さう、それは大へんですね。

C。一度は人間に生れて見るのもいゝでせう。

A。わるくつても仕方がないのですよ。どうも僕は人間に生れたいとは思つてゐないのですが、どうも生れなければならないらしいのです。それで皆さんの話をきくのがすきなのです。

B。あなたはもう一度生れかへる勇氣はありますか。

A子。ありませんわ、こゝにゐる方がどんなによろしいか。私はすつかり滿足しております。あなたはどう。

B。僕はあなたとならもう一度生きかへつてもいゝやうな氣がしますよ。

A子。本當に生きかへつたら矢張り喧嘩をするのでせう。

B。それはさうかも知れませんね。僕は生れかへると又やきもちやきになるかも知れませんからね。だがあなたと二人で話が出來た時のよろこびは特別でした。

A子。今だつて、そのよろこびなら味はへるでしよ。清いよろこびはこゝでも禁じられてはゐませんからね。平和なよろこびはね。

B。本當にさうですね。僕はへんにうれしくなつて來ました。

A子。あなたはDさんの琴をひくのをおきゝになつて。

B。いや聞いたことはありません。

A子。それはお上手よ。もしおきゝになりたければ、よんで來ますわ。

B。それはきゝたいものですね。そして、あなたに是非おどつてもらいたいものですね、

A子。私は駄目ですよ。

B。そんな謙遜なことを云ふものぢやありません。

A子。こゝにはそれはお上手な方が澤山ゐらつしやるのですよ。

B。それはさうでせうが、僕はあなたのが是非拜見したいのです。

A子。それでは遠慮せずに見て戴きませうかね。それならDさんをおよびして來ますわ。

C。僕がよんで來ますよ。

A子。それではよんで來て戴きますか。

C。えゝよんで來ませう。（退場）

B。僕は本當に愉快になつて來ましたよ。こんな平和なよろこびは生てゐる時に、滅多に味へませんでしたね。

A子。私なんか、一度だつて味へませんでしたわ。子供がゐましたし、夫は道樂者でしたから。

B。あなたの夫は道樂者だつたのですか。

A子。え〻。さうよ。

B。あなたのやうな人と結婚しておきながらね。

A子。仕方がないぢやないの。私もしまいには呑氣になつて、勝手にするがい〻。私は夫の道樂で自分が下等になるわけもないのだから、夫が道樂して、そのためにやきもきするだけ損だ、馬鹿氣てゐる。私は子供さへ立派に育てればい〻のだ。私は心さへ美しくして神樣に愛されるやうにしてゐればい〻と思ひましたが、それでも時々は淋しかつたり、腹が立つたりしました。死んでから始めて平和を得られて、心うれしくなつたのです。

B。さうですかね。

A子。あなたは道樂なんかなさらなかつたでせうね。

B。僕だつて、い〻夫ではありませんでしたよ。あなたとわかれてから僕は、一人の人を完全に愛して、他に少しも氣がちらないと云ふことは出來なくなりましたよ。それは齡のせいだつたからかも知れません。だが、夫婦の愛にしろ、戀愛にしろ、それが最後のものとは僕には思へなくなりましたよ。僕には最後のものは矢張り、自分の一生の仕事だけだと云ふ氣がしました。僕は仕事をするために生れた人間のやうに、毎日自分の仕事につかれてゐました。今思ふとそれも夢のやうですがね。完全な仕事をしたい、神のやうに完全な仕事をしたいそれが僕を支配してゐました。僕はあなたが死んだあと、會社をやめて畫をかき出したのですよ。

A子。まあ、あなたが畫をおやりになつたの。

B。不思議でしよ。僕はそれから完全な畫をかくこと許りに頭を惱はれたのです。もつとも僕はもう一つのことに夢中になり出してはゐましたがね。それは皆が食ふことに困らない國に日本をしやうとする運動だつたのです。皆の人が税で、たゞで米が食へるやうにしやうと思つたのです。

A子。まあ、へんなことをお考へになつたのね。

B。僕は余裕のあるものから税を多くとり、それで米を買い、そして國民全體が、たゞで飯が食へるやうにしたいと考へたのですよ。一家の主人が一家の人の衣食住のために働くやうに、又苦心するやうに、國家と假りにも名がつく以上は國民全體の衣食住の心配をするのが當然だと思つたのです。そして國民全體が食ふことに困らなくして、人間が食ふために働くのではなく、天職を果すために食ぶのだと云ふやうにしたいと思つたのです。さうすればいやな仕事はしないですみますからね。

A子。どうもあなたのお考へになりさうなことですね。

B。僕にはこのことが出來ないことではないと思はれるのです。そし

て食へるやうになると働く人がなくなるやうな場合には、義勇勞働者、名譽勞働者を募集すればいゝと思ふのです。それでだめだつたら、義務勞働をある時期の間、國民全體が實行すればいゝと思つたのです。

A子。それでどうでした。

B。始めは皆、笑ひましたがね。しかし段々えらい學者に同感者が出來て、數學的には實行が出來ることがわかり、賛成者もふへたのですが、結果を見ない内に死ぬ時が來てがつかりしましたよ、しかし今になれば同じことですがね。皆が食へるやうになり自由がたのしめるやうになつたら、國民の才能はあらゆる方面に發揮されると思つたのですよ。

A子。さうなると金はなくなるのですか。

B。いや金はなくす必要はないのです。贅澤もしたい人で出來る人はしてもいゝのです。たゞ食ふために働く人がなくなつて、自分の個人的好みを生かすためにだけ金もうけをするやうになるのです。農民も食ふためには働かなくつていゝのですが、働けば金がとれ、その金で自分の好きなことが出來るので働くことになるわけです。しかしさうなると日本が貧乏するだらうと云ふ人が多いのですが、僕達はさうは思はないのです。さうなつて始めて皆が人間になれるのだと思つたのです。今になればどつちでもいゝと思ひますが、それが實現出來れば日本は隨分面白い國になるのだと今でも思つてゐますよ。Aさんあなたがもし日本人に生れたら、日本人全體が食ふために働かず、天職のために働くと云ふやうに骨折つて下さい。

A。僕にはまだ、食ひものゝことはよくわからないのです。だが不幸や禍ひが人間社會を支配すると云ふことはよく聞いてゐますから、それとは戰ふだけ、戰つて見るつもりです。爺もよくさう云つてゐます。人間に生れた以上は人間のために働けつてね。蚤に生れたら蚤のために働けつてね。

B。蚤のために働かれては困りますね。だがこゝへ來て見れば、蚤も別に惱む必要もありませんがね。

A。蚤つてそんなにいやなものですかね。

B。蚤に食はれると痒くつて困りますよ。

A。痒いつてどんなことでせうね。

A子。それは生れて見なければわかりませんわ。

A。いやなものでせうね。

B。それはいゝものぢやないね。

A。なぜそんなものがゐるのですかね。

B。それはわかりませんよ。たゞ痒いことを痛切に感じるだけです。

それを感じなかつたら蚤にとつてはいゝでせうが、人間にとつてはどうだかわからないのです。

A。どうしてゞす。

B。蚤に平氣に食はれると云ふこと、蚤に血をすわれても平氣だと云ふことは、人間にとつていゝことでないかも知れませんからね。

A。どうも君逹の話はよくわかりません。

B。人間になればわかりますよ。

A子。Dさんが來ました。

（C、Dくる、D琴をもつてくる）

A子。よく來て下さいました。

B。琴をおきゝしたいのでつい御無心しました。

D。ありがたう。僕は光榮に思つてゐますよ。僕の琴をそんなに聞きたがつて下さることを。

B。君逹の話をきいたら、お聞きしたくなつたのです。

D。いや未熟ですが、しかし聞いて下さればうれしく思ひます。（音をあはせひき出す）

（A子立つて舞ふ。大勢出てくる。曲終る、皆拍手する）

A。うまいものでせう。

B。本當に感心しました。

A。あなたも何かをどつたらどうです。

B。僕はとても駄目です。

A子。いやこの方もおどれるのですよ。

A。是非おどつて下さい。

B。僕は駄目ですよ。

A子。こゝでは謙遜は美德ではありませんよ。おどりなさい。

B。それではまづいおどりを見せますかね。

（樂隊にあはせておどる。皆段々陽氣になる、拍手をしたり、歌をうたつたりする。Bおどりおへる）

B。まあこんなものです。

（皆拍手する）

皆。うまい、うまい。アンコール、アンコール、アンコール。

B。こゝにもアンコールなんかあるのですか。

A子。人間だつた人が澤山ゐますからね。

B。それなら恥かきついでにやりますか。

大勢。贊成、々々。（手をたゝく）

（B又おどる。なるべく出鱈目のおどり）

B。愉快、愉快、愉快ぢや、愉快ぢや。

（大勢眞似しておどり出す）

B。(おへて)馬鹿々々しいものです。

A。いや、愉快でした。愉快でした。

B。C君何かやらないか。

C。僕は親指切りやれないね

B。かまはないからやつたらいゝだらう。

C。それならやるかね。

皆。やれ！　やれ！

C。君、詩吟をやれ。

B。閉口だな。

皆。やれ！　やれ！

C。かまわないからやれ。

B。それならやるかな。

(皆拍手。やり出す。皆おどろいて見てゐる。おはる。皆拍手)

A。へんなものですな。

B。へんなものです。今度は皆さんの内で何かやつて下さい。

皆。やれ！　やれ！

C。E君、皆一つ何かやれ。

E。やるかね。

(適當にかはりがはり、いろ〳〵のことをやる。おどりや、輕業式の元氣なもの。爺さん出てくる)

爺。あはゝゝ。愉快々々、皆で一つおどろうぢやないか。皆で。

皆。さうだ、皆でおどろう、皆でおどろう。出鱈目におどろう。

爺。諸君、一寸待つた。今日私達がB君をお迎へ出來たことをよろこびます。B君は昨日まで人間でした。B君は人間としてともかく最後まで元氣に生てくれた男です。B君はある人間からは、馬鹿か氣ちがいのやうに思はれてゐたさうですが、ともかく人間として一生をぶつ通して生ぬき、自己の仕事を完成するために努力されました。B君はあまり利口でなかつたかも知れません。B君の考へたことには子供らしい處があるかも知れない。だが私はB君が好きなのです。今諸君がB君のおどりで見たやうにB君は出鱈目な處のある男ですが、しかし生てゐた男です。この生きた男と云ふものが僕はすきなのです。僕の兄弟の人類も、生た人間が一番好きだと云つてゐます。生々した魂をもち、心をもち、身體をもつて、俯仰天地に恥ぢずに生きぬいた珍らしい男です。B君は、僕達はこの死にたがらなかつた、臆病な、しかし觀念深かく、自己を生かしぬいたB君を歡迎しやうと思ひます。B君がB君ですから、諸君もそのつもりで思ひ切つて出鱈目なおどりをおどつて、B君を歡迎して下さい。僕も皆さんの内に入つて、一おどりしやうと思ひます。ラッパ

をふけ、ラヂオの用意をしろ、之からB君の歡迎會だと云ふこと、そして皆で出鱈目におどろうと云ふことを。B君はおどりがすきなのだ、元氣なことゝ、生てゐることが好きなのだ。僕達もたまには靜かさをやぶつてさわいでもいゝだらう。ラヂオの用意はいゝか。

F。用意は出來ました。

爺。それでは、之から放送をしやう。皆さん、一人の人間が地上からひよこつとやつて來ました。Bと云ふ人です。人類の意志が地上に生ることをのぞんだ一人の男です。我等の小さい兄弟です。いと小さき兄弟にしろ、B君は歡迎されていゝ人間と思ひます。B君の本職は鶩たさうですが、B君の一番得意なものは出鱈目なおどりです。それでB君の歡迎會を之からひらいて一つ出鱈目におどろうと思ひます。贊成な人、暇人、物好きな人は、男女をとはず、すぐとんでいらつしやい。處は地獄でも極樂でもなく、呑氣天國の三丁目のノンセンス廣場です。出來るだけ奇麗な着物でゐらつしやい、裸の自慢の人は自然の大禮服でいらつしやい。我々はたまには出鱈目もいいと思ひます。ふだんは我々は淸淨で、平和で、勤勉ですからね。それなら之からすぐ始めます。之から二十分程おどりますから、すぐこないとすんでしまいますよ。誰でもいらつしやい。赤兒の心になれる人は。(ラヂオをやめて) さあ始めよう。

(大勢やつてくる。音樂始まる。皆おどり出す。高調に達した時、ラッパなる)

群集。人類が來た。人類が來た。

(人類(若者)出てくる)

人類。(爺に) 折角のおたのしみの處を、お邪魔してすみません。私も出來るだけ辛棒したのですが、もう辛棒が出來なくなつたのでお邪魔したのです。さう皆さんの内で、人間に生れなければならない方は、こゝにお集り下さい。

(A始め男女二三十人前へ出る。いくら多くともよし)

人類。番號。

A。1

×。2

×。3

×。4

×。(5、6、7、8、9、………)

人類。一人足りない

(誰も返詞がない)

人類。君たらう。

F。僕ぢやありません。

人類。いくら逃げたつて生れなければならない時がくれば生れなければならない。

F。どうか許して下さい。

人類。なぜだ。

F。私は人間に生れたくないのです。

人類。それなら何に生れたいのだ。

F。一寸考へさして下さい。

人類。猿か。

F。猿は閉口です。

人類。犬か、豚か、羊か、牛か。

F。そんなものもいやです。

人類。馬か。獅子か。狐か。

F。一寸待つて下さい。獅子に生れたらどんなものですか。

人類。そんなことは俺は知らない。この爺さんにお聞きしたらいゝだらう。爺さん、この人は獅子に生れることになさいますか。

爺。こんな臆病なものは獅子にはなれまい、人間が丁度いゝだらう。

A。獅子の方が人間より上等なのですか。

爺。人間には神よりも上等な奴もゐれば、豚よりも下等な奴もゐる。いゝものは人間にする、くずも人間にする。人間にはすたりがない。他の動物以上のものも人間にしてやるが、他の動物になれないものも人間にしてやる。

人類。爺さん。それは困りますね。なるたけ上等なのを人間の方に下さい。

爺。さうもゆかないよ。之でいろ〳〵やりくりがあるからな。

人類。そんなことを云はないで、もう少し上等なものを人間に生れさして下さい。

爺。あんまりいゝ奴許り人間にすると、お前の壽命は短かくなるよ。お前の壽命は、お前の子供達が完全になり切るまでの話だからね、人間に馬鹿がゐる限り、お前の壽命はつゞくのだ。

人類。さうですか。それならなるべく馬鹿を人間に生れさして下さい。私はまだ〳〵死にたくないのですから。

爺。それは俺の方がよく知つてゐる。俺もまだ貴様を亡ぼしたくない。少くも地球が存在する間はお前を生かしておいてやる。

人類。地球はもうぢきつぶれるのぢやありませんか。

爺。お前が利口なら、地球はつぶれないね。中々。そして地球がつぶれたら、又他の世界へ移住するだらう。貴様の仲間が利口ならね。だが貴様の仲間が死にたへたつて、それで宇宙は困りはしないがね。なんだそんな情ない顔をしなくつたつていゝぢやないか。死ねた

らこんないゝことはないぢやないか。はゝゝゝ。矢張り貴樣は人間だな―。はゝゝゝ。

人類。あなたにあつては叶はない。しかし私は生きぬきますよ。無限に生てゆきますよ。宇宙が存在する限り生てゆきます。

爺。その元氣、その元氣、貴樣の元氣こそ、俺達を若がへらしてくれる。

人類。F貴樣も、こゝにこい。

F。どうしても許してくれませんか。

人類。仕方がない。思ひ切つて人間になれ。

F。いやだな―。

（皆笑ふ）

B。それ程いやなものぢやないよ。

F。處が僕は人間て云ふ奴が大嫌ひなのだ。

人類。いくら嫌ひだつて仕方がない。

F。僕のやうなものが人間になると、あなたが損しますよ。

人類。そんなに俺が力のないものだと思つてゐるのか。

A。私達はいつか生れるのですか。下では私達をしきりとよんでゐます。私達はひきづられさうです。

人類。さうだつたな。さあ、F貴樣も、この行列のなかに入れ。

F。仕方がない。

（皆笑ふ）

人類。さあ、之でそろつた。もう一度番號。

（1、2、3、4、………）

人類。一人足りないな。どうしたのだ。

A。まち切れずにさつき一人ひきずられてゆきました。

人類。さうか、性急な奴だな。君達は堂々と生れろ。堂々と産聲をあげて生れろ。そして俺の意志通り、元氣に生てゆけ。永遠に生長する意氣で進め。

F。そんなことは馬鹿々々しい。

人類。馬鹿々々しい奴は、それでも仕方がない。勇氣をもつて、大膽に生きられるものは生てゆけ。さあ、ラツパを聲高くふけ。進め。

皆。（口々に）人類萬歳。萬歳。々々……

人類。行つてしまつた。

爺。なんだか淋しいね。

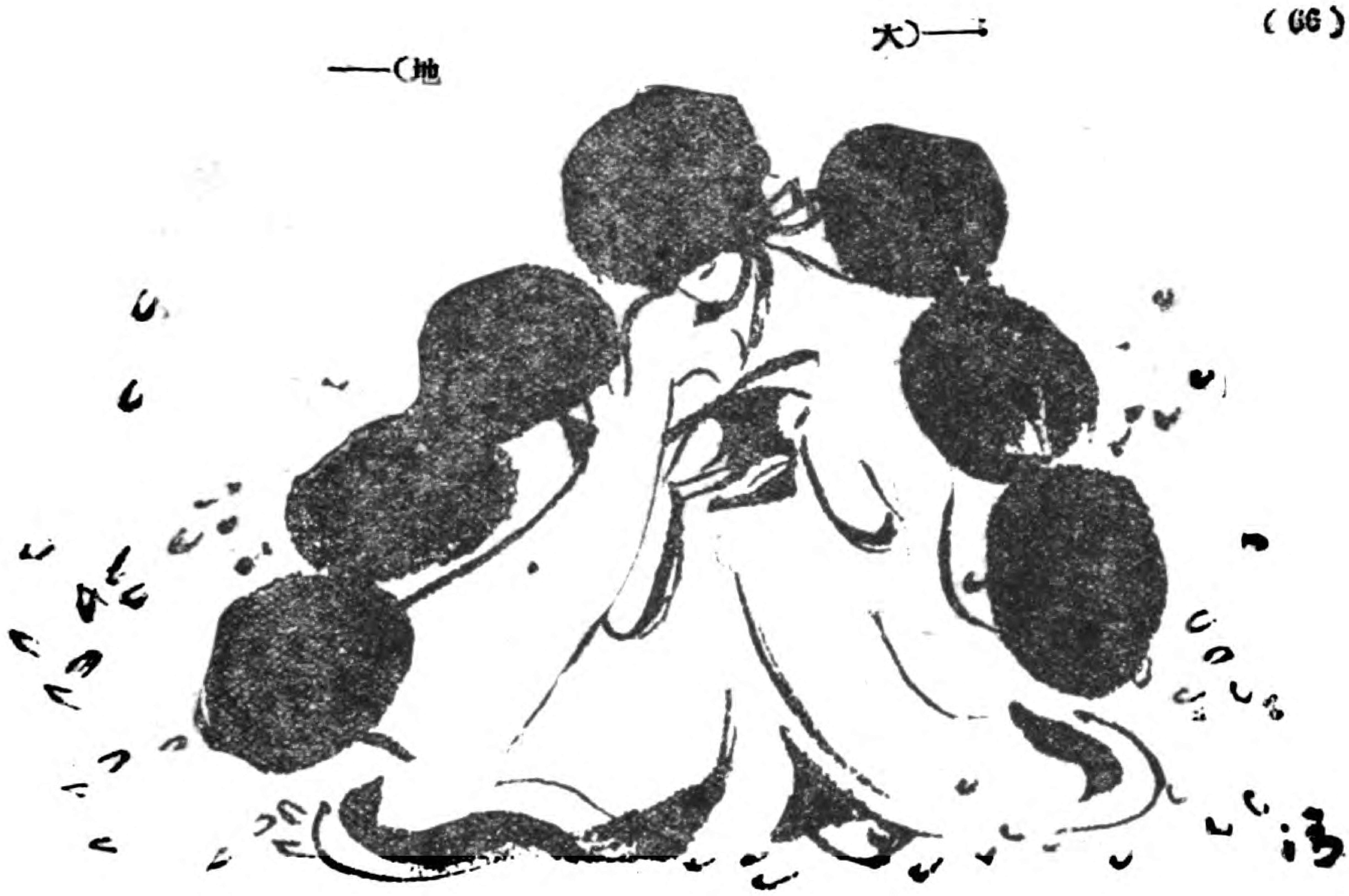
人類。僕は淋しくはありませんよ。僕は大いに戰ふつもりです。日々に決心がつよまりますよ。

爺。君はまだ子供だね。

人類。あなたは爺さんですね。

爺。さうだよ。俺ゝ生れた時から爺だよ。
人類。あなたも生れたことがあるのですか。
爺。あるらしいが、俺はよくは知らないのだ。氣がついた時は、もう生れてゐた時だつたからね。なんだ向ふからくるのは。
人類。人間です。人間です。
爺。大勢くるね。
人類。又戰爭でもやつたのでせう。
爺。利口ぢやないね。
人類。私もまだ若いのですからね。
爺。さあ、一つ歡迎會をしてやるかね。
人類。さう願へれば結構です。
（D、他十五六人登場）
爺。萬歲。
皆。萬歲。
D。こゝは何處ですか。
爺。こゝは呑氣國のノンセンス廣場だよ。
D。私達は同胞のために戰つたものです。呑氣國には別に用はありません。
爺。かたいな、君の頭は。だがこゝに來たら、同胞も、祖國も、階級も、何にもないよ。安心するがいゝ、敵も味方もない。皆一人々々だよ。そして皆友達さ。皆兄弟姉妹だよ。皆平等で、皆自分の値打だけで生てゐるのさ。その値打も皆輝いた空氣のなかで光つてゐるのさ。どうだ、君達の頭のなかのこりもなくなつたらう。
D。不思議です。なくなりました。タンコブがとれました。
爺。さうだらう、さうなくてはならない。
D。皆、すつかり氣がらくになつたね。こんなひろ〲した氣持になれたのは始めてだ。
D一行の人々。さうだ。さうだ。本當にさうだ。
爺。それでこそ、君達は僕等の仲間さ。
（爺、D達とだきあふ）
D。愉快。々々
（D一行浮かれ出し、グロテスクなおどりを始める。皆笑ひながら手をうち拍子をとる。）
D一行。愉快ぢや、愉快ぢや、愉快ぢや、愉快ぢや。
爺。さうぢや愉快ぢや、愉快ぢや、愉快ぢや。さあ音樂を始めろ。皆、見物なんかせずにおどれ、おどれ。出鱈目におどれ、今日はうれしい日だぞ。何かいゝことがあるぞ。
人類。さうです。さうです。今日はうれしい日です。きつと人間世界にいゝ子が生れたのです。
B。さうだ、さうだ。きつとさうだ。
皆。さうだ。さうだ。きつとさうだ。

（二九、四、四）



大地

里見弴

一の三

人聲に目を覺すと、まだ朝靄の霽れきれない、濕つた明るさのなかに、いつ來たのか壬之助が、健吉と立話をしてゐた。別にこの兒を、石部金吉のやうに思つてゐるわけではなかつたけれど、年齡の隔りが多いだけに、すぐの健吉に對するほど無遠慮ではあり得なかつたから、何ひとつ覆ふところのない露宿とは云へ、女と共寝してゐる姿を見られたことで、いくぶん羞しい氣持にはされた。それに瑛龍とは、無論初對面ではありさうかと云つて、改めて紹介せるのもへんな具合のものだつた。

起きて行くと、壬之助も、然し、大人氣なくひとをてれさせるやうな風も見せず、昨日、自分が屬してゐる分科會の展覽會の招待日で、朝のうち上京して來、上野で地震に逢つてからの半日の見聞などを、元氣よく話して聞かせたりした。母親の上を案じて、會場から徒歩で、まつすぐ赤坂のうちへ行き、そこで一夜をあかして來たと云ふ話だつたが、湘南の地に家族を殘してある點では、昌造と同じ心配をもつてゐるわけだつた。

「兎も角、昨夜、――と云つてもうかれこれ三時頃だつたらうけれど、健ちゃんに賴

んで、千葉君を賃りて、自轉車で飛ばして行つて貰つたよ。道順だから、先に極樂寺の方へよつて、それから僕ンとこへ廻つて貰ふやうに云つといたから、今夜か、おそくも明日の朝にやア、彼方の樣子も知れるだらうと思つてるんだがね……」

手柄顔に、昌造はまづこのことから告げ知らせたけれど、壬之助は、別段それを喜ぶ顔つきも見せなかつた。

「さうか。そんな使をやるんだつたら、ちよつと赤坂のうちによらしてくれりやアよかつたのに。さうすれば、いろ／＼言傳だつてあつたんだ」

さう云はれゝば、手ぬかりには違ひなかつたけれど、この騷動のなかで、兄の家族の上まで考慮に入れてゐただけでも、昌造としては十分の好意のつもりだつた。おまけに壬之助が、昨夜赤坂のうちに行つてゐたことも、――考へてみれば、ほかに行きどころもないわけだつたけれど、――たつたいま聞いたばかりの話だつた。が、この、コッンとした、やゝ荒ッぽいあたりも、この兄の癖として、今に始まつたことではなかつたから、昌造は、そのまゝ口を噤んで了つた。

「それに、千葉君一人くらゐ出かけて行つて、一體どうしようつてんだい」

「どうしようからしようぢアないよ。たゞ樣子だけ見て來て貰はふつてんだよ」

「それア大丈夫さ。東京だつて、火を出したからこそこれだけの騷ぎになつたんだけれど、地震そのものとしちやア、さう大したこたアないんだからね」

「うん」

眠不足からか、昨日に引き變へて、昌造はなんとなく元氣がなかつた。さう云はれても、却つて逆に、東京はこのくらゐのことですんだが、といふやうな、不吉な豫感に胸が暗むばかりだつた。

「然しまア、それア有難う」

壬之助も、急に氣がついたやうに禮を云つて、「兎も角、樣子だけでも見て來てくれりやア、こつちもひと安心だからね」

途中からだん／＼に殖えて來た人數のなかには、昌造とさへ初對面の女もあつたくらゐで、それ等にとつては、この家の當主と思はしい、而もしかつめらしい顔つきの壬之助が現はれて來たことは、いかにも居たゝまれない感じでもあつたらうし、親身な者の上を案じ煩ふ氣持も亢じて來てか、同じ方角へ尋ねて行く者同士さそひ合せたりして、そろ／＼出かける支度にかゝつてゐた。生垣の竹を引きぬいて、杖を拵へたり、手拭を裂いて、結ひつけ草履にしたり、肩身せまげに庭の隅に塊つて、こそ／＼やつてゐるのを、氣の毒と見やりながら

（天）——

も、昌造として、これ以上なんとしてやりやうもなかつた。

健吉の細君の、甲斐々々しい働きで、大皿に山盛の握飯が、野天の卓の上に運ばれた。すつかり身支度の出來た女たちも、呼びとめられて、遠慮がちにそのそばへよつて來た。直接には、なんの縁もゆかりもない人間がよつて、湯氣のたつ握飯を、口のなかに轉しころがし、眞面目くさつて食つてゐる有様は、自分をそのなかの一人に置いて眺め廻しながらも、目のなかゞ熱くなるやうな哀憐の情の催されるものだつた。アダム、イヴが、食ふことだけに夢中になつてゐた頃の、神様の寵愛も思ひやられるやうな、甘酸ッぱい、誠にいゝ感じだつた。みんなに遠慮させまいためか、壬之助はそこへはよつて來なかつた。——時々、ばら〳〵ッと、如露で撒くやうな雨を落して行く低い雲があつた。と思ふと、すぐまた研ぎ澄した青空になつた。

呆氣ないくらゐさば〳〵とした挨拶を交して、女達は、三々伍々出かけて行つた。あとには、三平の一家と、瑛龍だけだつた。

「何をしようにも、手のつけやうがないとなると、人間つてものは、急に退屈に感じだすもんだね。そのくせ、普段なら、半日やそこら、知らない間に經つちまふんだけれど」

抽象的なあたまの働きを、すぐ言葉に云ひ現すことの好きな壬之助は、弟たちの前でそんな風に云つてみせて、やがて、風通しのいゝ

——（地）

奥の間に床を延べさせ、病後の疲れ易い體を横たへやうとした。

「驚いたなア。うちのなかでおやすみなさるんですか」

前から顔馴染くらゐある三平は、やゝ阿る氣持にも手傳はれながら、そばからから感嘆した。

「なぜさ」

「だつて、またあなた、いつ何時、ぐら〳〵ッと來るかも知れないのに……」

「來たつて、もう大丈夫だよ。今朝君たちが、おもてでごろ〳〵寝てゐるのを見て、……こつちは、その方がよつぽど吃驚させられたくらゐだ」

「ぢア、昨夜ッからもうちやんとうちンなかでおやすみなすつていらしつたんですか」

「それアさうさ。年寄だけは、用心のために、ベランダでねて貰つたけれど……」

「へーえ。驚いたなア。昨夜あたり、あんなに、しつきりなしに、ぐら〳〵ッ、ぐら〳〵ッと來るなかで、よくまア屋根の下へなんぞはいれたもんですねえ」

「こいつはね」

と、健吉がそばから揶揄顔に、「昨夜、うちの富子が二階にあがつて

御馳走を片づけてるから、手傳ひに行つてやれつて云つても、どうしてもうちンなかへはいりやアがらないんだよ」

「いやですよ、それア誰だつていやですよ。それア、あんた方は、昨日可怕い思ひをしていらつしやらないから、そんな暢氣なことが云へるんだけれど、がら〳〵ピシヤンと來て、いきなり二階の窓から往來へ飛ひ出すやうな目に逢つてごらんなさい……」

「健ちやんだつて、そとから、おーい、富子！　もうよせよウ！　早くおりて來いよウ！　なんて怒鳴つてたぢアないか」

昌造も、ちよつと冷かしてみたくなつて、そんな横槍を入れた。

「だつて、それア……」

「それアさうですとも。それがあたり前ですよ。一體お宅の奥さんは、ちつと氣が強すぎるんですよ」

「さう云ふ御當人は、ちつとまた氣が弱すぎるやうだね」

壬之助は、そのもの云ひを、いつぱし氣が利いたやうに、會心の笑ひ聲をたてながら、縁先に靴をぬいであがつて行つた。

「えらい！　矢つ張り兄さんは兄さんだけのことはある。まつたく膽の据つたもんだ。恐れ入つた」

言葉の調子に釣られてゐるうちに、三平は、いつの間にか、心から恐れ入つた氣持になつて了つたらしかつた。三人はまた、玄關前の廣場の方へ出て來た。

ぽつ〳〵見舞に立寄つてくれる人もあつたりして、けれども、さう退屈といふほどのことはなかつた。殊に昌造は、さう附ッきりに瑛龍のそばにゐるわけにもいかず、さうかと云つて、たゞ一人ほつたらかして置くのも可哀想だし、退屈どころか、へんに落つけない氣持だつた。木影に据ゑたソファに凭れて、ぽかアんとしてゐるやうな時にも、逗子の樣子がいろ〳〵にあたまに映つて來たりした……。

瑛龍と二人きりになつた時、

「あんた、どうする？　こゝにゐて差支ないんなら、健ちやんにでもよく話して、こつちは、いつまでゐて貰つてもいゝんだが、あたしは、どうしたつて、一遍逗子まで行つて來なくつちアならないから、たゞその間が……」

「いゝえ、あたしはどうかします」

きつぱりといふより、その言葉は、やゝ冷たく響いた。

「どうかするつたつて、あんた一人ぢア……」

「先刻、丸二にさう云つてやりましたから、そのうちあの人ンとこの兄さんか誰か迎ひに來てくれる筈です」

「丸二ンとこどこ？」

「代々木たつて云ひますから、大概だいじよぶだらうと思つてるんで

すの」

「そいで、當分そこに落ちつくつもりなのかい？」

「えゝ、まア、都合で……」

「あたしは、千葉君が歸つての樣子次第だけれど、兎に角、出來るだけ早く、うちぢうの者をつれてこつちへ出て來ようよ。こんなことになると、田舍はどうにも方返しがつかなからうと思ふし……」

第一、交通機關の失はれたところを、十里以上も隔てゝ、安閑とはしてゐられない氣持だつたが、そこまでは口へ出しかねた。

「ほんと云ふと、昨夜、千葉つて人と一緒に、あなたもあつちへ歸つてお了ひなすつた方がよかつたんだわね」

「さうもいかないさ」

「ほんとに、大丈夫でせうかねえ」

「何が」

「あちらの皆さん、何事もなければよござんすがねえ」

「大丈夫だよ」

勢よくさうは答へたやうなものゝ、同時に、家族のうち一人でも間違があるくらゐなら、いつそのこと、一人殘らず死んでてくれた方がましだ、といふやうな氣持が、稻妻のやうに閃いて來た。「もし、萬が一の場合には、……俺は、俺はどつかへ飛んでつちまふ。……比叡山にでもはいつちやつて、一生だアれにも逢はない。それくらゐの覺悟はしてゐるよ。だから結局どつちにどう轉んでも大丈夫なんだ」

一時の感傷もあつたには違ひないが、純一無雜の生活を希ふ心が、かういふ大變動によつて、奧底の方から揺りあげられて來てゐたことも否めない。いちどきに妻も子も失ふ、——そんなことでもない限り、一生望んで遂にはいれさうにもない世界が、ちらッとその姿を見せてくれたやうに、きり〳〵と氣持は締つてゐた。なんと思つて比叡山をもちだしたか、そのへんはあやふやだつたけれど、いざとなれば、たゞの一日でも辛抱できさうにない、人一倍淋しがりやの昌造だけに、この突然の、孤獨の翹望には、却つてあそびや嘘がなかつた。出來る出來ないは別として、心の底から、本氣で云つた言葉だつた。

瑛龍は答へなかつた。よしんば、なんとか言葉を返したとしても、その意味が、はつきり昌造の心に映つて來るまでには、よほどの時を要したらうと思はれるくらゐ、たゞ一筋に比叡山ばかりを思ひ續けてゐた。——十四五年前、まだ學生時代の春休に、友達と三人づれで八瀬の方から登つてみたことはあるが、たゞ一日の、謂ふところの「おのぼりさん」の御見物で、そこの僧房生活などについて、特別の有難味を感じて來たわけでもなんでもなかつたけれど、雲ふかく、二三日前に降つたらしい殘雪を蒼白く見せ、ほかに參詣人の影もないやうな

うすら寒い日で、ほんの口元と聞く根本中堂でさへ、嚴なくらゐ蕭條の氣に充ち滿ちてゐた。

「いゝね」

「いゝなア」

白い息を吐きながら、ほかに言葉もなかつた。その時、こんなところに一人で住んだらば、などと思つたわけではないが、「孤獨の翹望」――が、ふと、それに形を藉りて、まざ〱と昌造の胸に甦つて來たのだ。――見上げるやうな杉木立、苔のむした萱葺屋根、その北側だけに殘つてゐる斑雪、さら〱に冷く晒れた階段、――云ふに足らないほど貧弱な記憶だつたけれど、それで十分餘生を托するだけの魅力をもつて、眼前に髣髴として來た。身うちの引き締るやうな寒ささへ胸さきへ迫つて來た……。

午後になつてからだつた、瑛龍のうちの擔の一人、丸二の兄といふのが、話に聞いてゐた大工らしくもない、半洋袴に折襟の縞シャツで、のそりと裏門からはいつて來た。生垣の蔭で、瑛龍は、暫く立話をしてゐたが、急ぎ足に引き返して來るなり、

「ぢア、あたし、行くわ」

「さう」

今さら引き止めやうもなかつたが、何かしら、ぢッと顔が見詰められた。これをはづすやうに、瑛龍はあたりを見廻して、

「あら、あたしの杖どうしたらう」

「杖つて？」

「先刻ちやんと揃へて、こゝんとこイ立てかけといたんだけど」

さう云へば、握りのところを紙で卷き、觀世縒で結つたりした細い竹の杖を、どこかで見かけたやうな氣もした。

「あるだらう、そこらに」

昌造も一緒に探してやつたが、どこにも見當らず、もう少し太い、わるくすると棘でも立てさうな竹ッきれが落ちてゐた。

「誰か、自分のと取り變へて持つてつちまつたのよ」

「さうだらう」

「いやだわ。折角ちやんと揃へといたのになア」

「仕方がない。こいつを、なんとかうまくしてやらう」

殘つてゐた竹ッきれを拾ひあげると、

「だけど、誰だか知らないけど、ひどいなア」

と、まだほんとに口惜しさうに呟いて、そばからひッたくり、「いゝわ。あたしがするから」

握りに紙を捲いてゐる手元を見詰めながら、

「丸二ンとこ、代々木のなんてとこだつて？」

「でも、行つてみないと、そこもゐられるかどうだか」

「居所がきまつたら知らせてくれるだらうね。あたしも、逗子に行くとしても、なるたけ早く歸つて來るつもりだけれど……」

「あたしの方も、きまり次第知らせますわ」

前のほど叮嚀でなく、ほんの手の汚れないだけに紙を捲くと、椅子から立ちあがつて、「そイぢア、いづれまた……」

「さうかい」

「吉井さんや、奥さんどちらでせう」

「さア、細君は臺所だらうと思ふけど、もしなんなら、あたしからよろしく云つといてもいゝよ」

「でも、ちよいと……」

探して、健吉夫婦に、一同になり代つての禮を述べ、三平一家の者にも別れを告げて、待せてあつた丸二の兄のそばへ行つた。

「お待遠樣。ぢア、行きませう」

裾を端折り、姐さん被りに結ひつけ草履も甲斐々々しく、さつさと裏門の方へ出て行つた。昌造も、世間の様子を見がてら、四谷見附あたりまで送つて行つてもいゝと思つて、往來までついて出たが、

「ぢア、さよなら」

と、なんの未練氣もなく、大男の、丸二の兄の先に立つて歩き出した。知らぬ間に、こゝらの裏町まで、避難者で、いつにない人通りだつた。そのせいもあつて、「ちよいと待ちたまひ。そこらまで一緒に行くから」といふやうな言葉が出そびれて了つた。たゞ、「氣をつけて行きなさいよ」と、聲をかけただけで、ぼんやり後姿を見送つてゐた。一度でもふり向きさうな氣振さへ見せずに、人ごみを縫つて、すぐ遠く、小さくなつて行つて了つた。

昨日半日は、時々それを望む氣になつた昌造も、今や、すつかり足手纏ひがなくなつて、どうにでも勝手の利く體だつたけれど、扨さうなつてみて、まるでもぬけの殼のやうにぼかアんとして了つた自分を見出さなければならなかつた。ソフアへ戻つて、ぷかり〱煙草ばかりふかし續けてゐた。

ぢつとしてゐられない性の壬之助が、いつの間に出かけたのか、あてもなく街々の有様を見歩いて歸つて來たのは、赫ちやけた夕日の色に、ものゝ影の延びきつた頃だつた。夜どほし横須賀から歩いて出て來たといふ男の、道ばたでの話だと云つて

「話半分つていふこともあるが、どうもあつちは、なか〱えらいらしいぜ」

と、前置をし、その男の見聞を取り次いで聞かせた。それによると、逗子も鎌倉も、途中の町といふ町は、殆ど火の海で、命から〱

そのなかをくゞりぬけて來たと云ふ。逗子や鎌倉のやうな海邊の町へは、そのうへ、地震後間もなく海嘯が襲つて來て、濱邊に近い家は、綺麗にもつて行かれてゐる。町全體として見ても、どうやら建つてゐるのは二割あるかなし、大抵の家はぐしやッといつてゐる。死傷のところは、ちよつと見當もつかないくらゐだ。——こんな風な話だつた。

「話半分を、四分の一、十分の一に割引いて聞いたとしても、兎も角こつちよりはだいぶひどいらしいんだ。何しろ、東京にはいつてみて、こつちのなんでもないのに吃驚したと云ふんだからね」

「ふーん、さうかねえ」

東京の災害の輕いのに驚いた、といふひと言が、何より彼より、彼方のひどさを信じさせる力をもつて昌造の胸へ響いた。震源地は伊豆沖で、江ノ島など、もの〻見事に陥沒して了つて痕跡もない、そんな話もほかで聞いて來てゐた。

「海嘯の話がほんとだとすれば、うちなんぞ、無論ひとたまりもないなア」

昌造は、自分で、顔色の變つて行くのを、殘念ながら、いかんともこたえやうがなかつた。が、その男の話の大袈裟なことも、一方、餘に信じられた。火の海になつてゐる町々を通りぬけて、今時分無事に東京へたどりつけさうには思はれなかつた。

「それア、多少こつちよりやアひどかつたかも知れないけれど、なに、大丈夫にきまつてるよ。大したこたアないよ」

かういふ王之助の信念に嘘はなささうだつたけれど、然しこれとて、なんら具體的な根據あつての言葉ではなかつた。あてずッぽうと云へば、あてずッぽうに違ひなかつた。

「火の方は、まだどうにでも逃れやうがあるけれど、どうも海嘯つてやつはねえ……」

六つ七つの頃、濃尾の大地震の畫報のやうなものを見た憶えがあつて、そのなかの海嘯の圖に、立木に攀登つてゐる者と、押し流されて行く藁屋根の上の者とが、互に手を振り、喚き合つて、今生の別れを惜んでゐるさへ慘なのに、立木にかじりついてゐる者たちの手足には、蛇がぎり〴〵捲きついたり、そのほか地上の虫類が、高きを覓めて匍ひ登つて來る樣、とても永くは見てゐられない無氣味さで、濁水の渦くなかに描き出されてゐた。いやだ、たまらない、と思ひながらも、可怕いもの見たさで、またしても、そこをあけたくなるやうな少年だつたのが、いま見れば、それこそ繪空事の、愚にもつかない版下畫なのだらうけれど、實地を知らない海嘯のすさまじさは、まざ〳〵とこの挿畫によつて印象ぶかく殘されてゐた。で、年がいつてからでも、「地

殿、雷、火事、親爺」のなかに洩れてゐる海嘯こそ、何より一番恐ろしいものゝやうな氣がしてゐる昌造だつた。それが、湘南一帶の海邊を襲つたと云ふのだし、逗子の住居は、濱から僅か二三町で、おまけに、その間には、砂丘といふほどの高みさへないのだ。——不安は、じりじりと胸先へ堅く張り詰めて來た。

廣場の隅に、雨戸を四五枚敷き並べて、露宿の仕度が出來てゐた。昌造は、そこへ行つて、ぐツたりと力のぬけた體を横たへた。よし! 千葉が齎して來る最も兇い報告に、心の用意をして置かう! なに、おしげを首、四人の子供たちが、一人殘らず死んで了つたものと觀念してゐればいゝんだ!

「パ、パ、パ、ア!」

さかまく怒濤の響のなかに、明かにその聲を聞いたと思つて、昌造は、戸板の上に、ヒヨコンと起き直つた。あたりは、降るやうな青鋼の聲だつた。赫々とした斜陽だつた。……。夢のやうに過ごして了つた三十餘時間、既に自分は、妻もなく、子もない一人ツぼつちの男だつたのかしら……。幼い命の最後に、聲を限りと泣き叫ぶ子供たちの方へ、指一本さし出してやることも出來なかつた父親なのかしら……。

「パ、パ、パ、ア! 助けてエ!」

あの聲も、三十餘時間以前に、泡だつ巨浪のなかに埋もれて了つたものだらうか……。

「パ、パ、パ、ア!」

悲しみといふより、潮にむせる苦しみが、いきなり口いつぱいにひろがつた。せきあげて來る潮のやうな涙とともに、昌造は、ばたりとうしろへ身を投げ倒した。堰が切れると、もう何も彼もなかつた。もみにもんで、一時にどツと押し流して行くやうな涙だつた。みつともない馬鹿らしいは無論のこと、第一悲しいのか、どうなのか、それさへわけが解らなかつた。聲をあげて、子供のやうに、たゞひた泣きに泣いた……。

昌造には、それでも、さういふ順序があつたけれど、はたにとつては、これは全く突然の出來事だつた。

「どうなさいました。え? どうなすつたんです」

有繋におずおずした三平の聲だつた。

「昌ちやん! なんだ、だらしのない! よせよ!」

わざと叱りつけるやうに云ふ健吉。

「御大ですわ! 御大ですわ! でも、まだなんとも、まるツきり御樣子が知れないんですから……」

三平の細君の、涙聲も耳のはたへ來た。

ちやんと聞えてはゐるが、然し何も彼も、昌造にとつては空しかつ

た。神様でも、佛様でも、目の前に姿を現して、大丈夫だ、一人も死んでやしない、と、はつきり請合つてくれでもしたら知らぬこと、理屈も慰めも同情も、人間に出來ることは、一切この場合の役には立たなかつた。

仕舞には、よくも知らない見舞の人の、立ちよつて何か云ふ聲さへ聞えたが、それでも、恥しいとも、餘計なお世話だとも思はなかつた。ちよつとでも、よさうとは思はず、思つたところで止めどのない涙だつた……。諦めて、誰もそばへよりつかなくなつた。……どのくらゐの時をさうして過ごしたか……。

よし！　その代りもう、千葉が、最兒の報知を齎して歸つたとしても、その時には、髪毛一筋動かしはしないぞ！　誰にも知らせずに、すぐ比叡山だ！

それでも、いつか、そんなことを考へるやうになつてゐた。號哭から歔欷へと弱まつて行つた……。

一の四

富士見町、五番町、元園町あたりでは、消えたり起つたり、終日火事の噂は絶えなかつたけれど、その遠卷の火が、夜になつてから、六丁目の角を、善國寺谷へくだり、やがて二三町の間近まで迫り近づいて來た。亡父の、やつといくらか餘裕の出來た晩年に、それでも借金までして建てた思ひ出のふかい邸も、文吉に投げだされ、母親が赤坂へ移つて了つてからは、なんとなく愛着の薄いものになつてゐたから、燒けるなら燒けろで、昌造は、さして驚きもしなかつた。それに健吉夫婦は、晝間のうちあらかた荷を纏め、三平一家の者もつれて、赤坂の方へ避難して了つたから、潰れた石藏のなかに壓されてゐる家財を除けば、空家も同然の感じだつた。それでも、身ひとつの壬之助と昌造は、どこで夜をあかすも同じこと、いよ〱の間際まで見屆けるつもりで、爺やと三人、そこに踏みとゞまつてゐた。

代り代り火先の具合を見に出かけたりしたが、大きな邸の多い街筋の、それも大方は立退いて了つたあとなので、火事場に近くゐながら、一人留守をあづかつたりしてゐると、不思議なくらゐ深閑たるものだつた。彌次馬の、おもてを駈けて行く足音などは一つも聞えず、消火に努めてゐるのも、今は兵隊ばかりで、勞れと、規律の正しさから、大きな聲ひとつ出さないらしかつた。たゞ燒け落ちる材木や、ぼう〱いふ焔の唸りだけで、まづ、ほつたらかしに焚火でもしてある感じだつた。それでも、見あげる空は、一面に、金砂子のちらめく火の粉だつた。

籐の寢椅子を持ち出し、樂々と身を横たへた昌造は、花火見物でも

してゐるやうな、至つて平靜な氣持だつた。きり〳〵舞ひに舞ひあがり、あはや煙の輪廓のそとまで跳ね出しさうな勢で突ッ走るが、然し煙の圓みに治つてくるりと輪を描き、悠々とひと渦まいてから、すぐまた大急ぎで風下へと飛んで行く。非常な迅さだ、と思ふと、今度は散る花のゆるやかさで落ちかゝつて來る。大きいのがある。星屑のやうに小さいのもある。正面に眉間を狙つて、ピューッと隕石のやうな勢で落ちかゝるのに、ついはッとして首をすくめる間に、いくつかの小さな破片になつて、再び限りない高みへ舞ひ戻つて行つたりする。空ぢうが、たゞもの狂ほしい金砂子の亂舞だつた。

ふと、目で捉へた火の粉のひとつを、（あれは昌一！）と心にきめて、無邪に、鼻の前に聳え立つ洋館のうしろまで見送れゝばよし、それまでのうちに、萬一流星のやうに溶れ、消えて了つたらば不吉の兆と、そんなよしない卜占を始めてゐた。紛らはし〳〵、飛び交ひ、入り亂れるなかを、ひたすら見逸さじと追ひ廻す目には、その「昌一」が、逃げまどひ、助を呼び、身を悶掻くやうにも見え、やつといゝ見當へ行くな、と思ふうちに、クルリと舞ひ戻り、狼狽え騷げば騷ぐほど、小さく小さくなつて行く……。とても見詰めてゐられない氣持を、ぢッとこらへてゐると、それでもいゝ按配に、流れ流れて、洋館の屋根の上へ、すなほに、すうッと落ちかゝる……。

（しめた！　無事だな！）

と勇みたつて、すぐまた焔の頂上に目を返し、中で成可く大きさうなやつを、（欽造だぞ！）ときめて目で捉へる。火勢にあふられて、キリ〳〵キリと舞ひ昇るそのすばやさ、あたり一面の火の粉にまぎれ、瞬ひとつすればすぐもう見失つて了ひさうなのを、一生懸命につけ廻す……。見當もつけず、何遍も上つたり下りたり、同じあたりをうろついてゐるのが、氣が氣でない。思はず、「こつちだ、こつちだ」と、怒鳴りつけたくなるのを、やつと我慢してゐるうちに、ばら〳〵ッといくつかの破片を散らして、急に見違へるばかり小さくなつてゐる……。

（駄目かな、駄目かな？）

めまぐるしく飛び廻る光體を、見詰めッきりに見詰めてゐることで、目の底がむづ痒くなるくらゐ視神經が勞れ、氣持としても見てゐられなくなつて來ると、ついうつかり見失つて了つたやうに、自分で自分を胡麻化して、ヒヨイと目を離して了ふが、それでもまだ懲りないで、すぐまた別の「欽造」を捕へてゐる。結局、どうでもかうでも洋館のうしろへ、降るやうに落ちかゝるのを見屆けるまでは氣がすまないのだから、ずゐぶん身勝手な卜占で、馬鹿々々しさはもとより百も承知のくせに、乘りかゝつた船で、裕子、欽三と、四人の子供たち

を片づけ、最後におしげを救ひ出すまで、時間にして二十分あまりも、一心不亂に空を見詰めたきりでゐた。――こんなことでも、とは云へ、いくらか心をまぎらす術にはなつた。
　壬之助が歸つて來て、
「わるくすると、これア燒けるかも知れないぜ」
「どの邊まで來たい？」
「善國寺谷を、そろ〳〵こつちへ燃えあがつて來てゐる。××さんは、とてももう助らない」
「でも、まだ往來の彼方側だけだね？」
「うん。まア行つてみたまい。巡査なんぞ一人もゐやアしないし、彌次馬に揉まれるわけぢアなし、こんなに氣樂に火事が見られることつて、さうめつたにありやアしないよ」
「さうかい。ぢア、ひとつ、後學のためにしみ〴〵見て置くかな」
「實によく燃えてるよ。でも、いゝ按配に風がないから、〇〇さんの邸で、うまく喰ひとめてくれりア助かるがね」
「兵隊が來てゐるんなら、いつそのこと、風下のうちを、五六軒ダイナマイトでぶち毀しちまやアいゝんだのにね」
「ところが、それが使へないんだとさ。どうしても市で許さないんださうだ。馬鹿だよ」
「いつかの、大阪の大火の時なんぞ、あれでやつと消しとめたんだつて話だがね。……ぢア、ちよつと行つて見て來らア」
　鈴のついた耳門に手をかけやうとすると、いきなりそとから押しあけ、自轉車のランプを射つけると同時に、前輪を突ッ込んでよこした者があつた。
「誰だい。千葉君か」
　ちよつと胸を踊らせたが、
「いゝえ、あたしです」
　と、はいつて來たのは、長谷部で、「吃驚しましたよ。四谷見附まで來ると、丁度この邊が燒けてるやうに見えるんですものね。もう駄目かな、と思ひながら來たんです」
　一緒に、壬之助が身を投げかけてゐる籐椅子の方へ引き返して行つた。
「こんばんは」
「や。御苦勞さん。赤坂の方どうだね？」
「えゝ、あちらは、まア今ンところ、いゝ按配に、一ツつも火事騷ぎはありませんけれど、こちらはどうも、だいぶ近くまで來てるやうですね」
「でもまだ、往來のこつち側にやア移つてないんだ」

「あゝ、さうですか。ぢア、今、□□さんあたりですか」
「いや、まだそこまでも來てない」
「さうですかね。ずゐぶん近く見えるもんですね。實は、あたしアもう間に合はないと思ひながら來たんですけど」
「君一人くらゐ、間に合つたところで、どうにも仕樣がないよ」
「ハヽヽヽ」
と、愛想よく、輕くうけて、「それア全くさうですね」

大）—

「千葉君、どうしたらうね」
昌造がそこへ口を入れて、「樣子だけ見て、すぐ引き返して來るとすれば、もう夙に歸つてなきアならない時分なんだがね」
「さうですね。自轉車なら、たつぷり見ても、片道六時間はかゝりますまいから、往復で十二時間として、……さうですね、もう歸つて歸れないことはない筈ですね」
「かれこれもう十二時だらう？　やがてまる一日になるよ」
「それア君、ずゐぶんくたびれたらうから、すぐにやア歸つて來られないよ。今夜は泊つて、きつと明日の朝彼方をたつて來るんだよ。さう君、晝夜兼行つてわけにやアいかないからね」
壬之助は、大して氣にもかけてゐないやうに、落ちつき拂つてから云つた。

—（四

「彼方の樣子も、早く知りたいにやア違ひないけれど、途中萬一のことでもあつたひにやア、それこそ、一生健ちやんに恨まれなけれアならないからな」
「どうしてさ」
「いゝえね、千葉を賴んで行つて貰ふについちア、なか〱健ちやんがむづかしかつたんだよ。何事かあれば、みんな俺の責任なんだからつて、……あすこがまア健ちやんのいゝところぢアあるけれど……」
「なアに、ちつともそんな、御心配なさるほどのこたアないんですけれどね。何しろ××騷ぎの噂がえらいもんだから……」
「それに……」
と、皮肉を云ふことの好きな壬之助が、「君たち二人が、御神酒德利みたいに、ちやアんと自分のそばにくツついてゝくれないと心細いんだよ。健ちやんて、さういふ人だよ」
「さうでもないでせうけど……」
「何しろ、早く歸つて來てくれるといゝな」
木の枝にひツかけた、薄暗い提灯の灯の下に、三人は、それきりふと口を噤んだ。秋らしい虫の音だけでも、一向火事場に近くゐるやうな氣はしなかつた。ひとつ間違つて、風でもひどくなれば、二三時間の後には、綺麗に灰になつて了はないとも限らないこの構內に、自分

自身ぢッと聞き惚れながら、入念に唄つてゐるやうな、虫の聲々も更ふかいものだつた。

瑛龍はどうしたらう。どこかの屋根の下で、安らかな寝息をたてゝゐてくれゝばいゝが……。そんなことを考へながら、昌造はゆつくり煙草をふかした。山王臺で圖らずめぐり逢つたうぢはこが、銀行に預け入れに行く途中で地震にあつたとかで、金は五百圓ばかりも持つてゐたから、當分のことには困るまいけれど、一體この先どうして行く氣だらう。大河内といふ人はついてゐるにしても、この大變動を機會に、成ることならば、……自分本位に考へて、一體どうなつたら一番嬉しいのだらう。體ごと自分のもとに投じて來てくれたら……。然し、さうしたら、比叡山はどうなる？ 比叡山にも行かずにすんで、それで……。昌造は、我ながら虫がよすぎて、その先を考へてみる氣になれなかつた。

別にこつちから追ひたてたわけでもないが、あとを健吉夫婦に頼んで、自分は逗子へ行つて了ふと云ふのでは、いかになんでもゐたゝまれるものではない。もう少しなんとか、親切に考へてやりやうはなかつたらうか……。

夕方、丸二の貸家へと云つて出かけて行つたあとで、健吉が、

「あゝいふやつだから、俺は嫌ひなのさ。自分がしんから惚れてる男なら、こんな場合、假令どんなにゐにくからうと、しがみ附いてもそばを離れずにゐるのが人情ぢアないか。それを、どこイ行くのか知らないけれど、さつさと歸つてちまやアがる。あんな冷たいやつ、どこがよくつて、君もまた惚れたんだらうね。俺にやアさつぱりわけが解らない」

そんな風に云つてゐたが、昌造としては、無論それを不人情とも、冷たいとも感じはしなかつたばかりか、寧ろこつちの都合を察しればこそのことゝ、有難く思つたくらゐだつたけれど、同時にまた健吉が、むきつけにさう言つてくれるのも、いかにも彼らしい本氣さで、ちつとも惡い感じなどはうけなかつたから、たゞ微苦笑で答へて置いた。それが、然し、今になつてみると、健吉の云ふのをあべこべに、假令どれほど足手纏ひにならうと、しがみついても引きとめて置くべきだつた、といふやうな氣もして來た。他人の目に、ひどく冷淡に映つたのは至極尤な話で、昌造でさへ、あの別れ際の素ッ氣なさには、いくらか寂しくさせられたくらゐだつたから、わるくすると、存外こんなことが因で、二人の間に罅がいるのではなからうか。——だんだんそんな氣の弱さにまで陷ちて行つた……。

ついと椅子から立つて、昌造は、あてもなく奥庭の方へはいつて行つた。寛間王之助が凝た布袋の上には、白い花がしつとりと垂れてゐ

た。近い火で、あんぐり口をあけたやうなうちのなかまで、薄桃色に明るんではゐたが、無氣味なくらゐあたりは深閑たるものだつた。あけッ放しの家のなかに、まるで人氣のないといふのはいやなものだ。——すぐまたみんなのゐる玄關前の廣場の方へ引き返さうとしたが、ふと佛間を窺くと、どうして赤坂の方へ移されずにあつたのか、お厨子の、幽な金色が目についた。おまけに、そこから斜に疊まで、細い瀧でもおとしたやうに、ほの白くかゝつてゐるのは、ばらりと擴がつた過去帳らしかつた。宗教心を別問題として、寺とか墓場とか佛がかつたものには、幼時から、不思議な親しみをもつてゐる昌造だつた。普通なら一層いやな氣持になるところを、それを見て、却つて今までの無氣味さが消えて、うちのなかへあがつて行く氣になつた。

近づいてみると、果して過去帳だつた。それを折り疊んで臺の上に載せ、倒れた花筒なども起してから、佛前に跪座合掌した。人前では有繋にてれるが、唱名念佛も、子供からの癖で、少しも氣恥しくなかつたばかりか、時によると、いゝ具合に、無念無想の境地にもはいれた。

「なまんだアぶ。なまんだアぶ」

心がゆつたりと落ちついて來た。別段、家族の危難を救つて貰ひたい、といふやうな野心あつての譯ではないので、長閑にたゞ、ぶつぶつと、半ば口のうちに念佛を稱へ續けた。——いゝ氣持だつた……。

立ちあがつて、珠數を、もとの箱へ納めやうとしたが、なぜか、肌身につけてゐたいやうな氣がしたので、そのまゝ手首にかけたなりおもてに出た。空を焦く火の色が、いつかだいぶ薄れてゐたっ

洋袴の衣嚢に兩手を突ッ込んで、ぶらり〱壬之助が庭にはいつて來た。

「大抵もう大丈夫らしいよ。寢ようぢやないか」

「うん。寢てもいゝけど……」

「君アもう先に寢に行つたのかと思つてた」

「長谷部君は？」

「火事でも見に出かけたんだらう。……床は二つ敷かせてあるんだから、ほんとに、横になつたらどうだい。昨夜もろくに寢てないんだらう？　毒だよ」

「さうだね、ぢア、寢るかね。……どうしたんだらう、まだお佛壇がこつちに置いたるけれど……」

「あれ、大きすぎるから、持つてかないんだとさ。佛樣やなんか、なかのものだけ持つてつて、彼方の、もつとちいさなお厨子に飾つたるよ」

「だつて、過去帳が置いたるぜ」

「さうかね。ぢア、二つあるんだらう」
「もし立退くやうだつたら、あれア忘れずに持つてかなくつちアいけまい？　燒いたりしちアいけないもんなんだらう？」
「それアさうだらうね。然し、兎に角こつちにやア、もうなんにも大切なものなんぞ殘つてない筈なんだよ。お佛壇だつて、中味だけは、そつくりもう彼方へ引越しちやつて、こつちは空ッぽな筈だぜ」
「さうかい。奧の方まではよく見えなかつたけれど、……さうか、空ッぽなのかア」
空ッぽのお廚子の前で、さうとは知らずに、一生懸命念佛を稱えてゐたことが、我ながら可笑しかつたけれど、壬之助にはそれは話さなかつた。
普段の夜更癖で、まだちつとも眠くなかつたので、昌造は、そこで兄と別れて、火事場でも見て來ようと思ひ、表門の方へ出て行つた。どこか遠くの方に、また例の大砲でもうつやうな重々しい響が、續けざまに二つばかり聞えた。

一の四終り。——つゞく——

編輯室より

◇田中内閣の斷末魔も迫まつて來たやうだ。滿身創痍でありながらもう一押しのところでなか〳〵倒れない。あれほどの新聞の一齊射撃を受けても平然自若、野黨の意氣昂らざる甚し。

◇謝花期の政局がどう展開するか、おもしろくもあるが又悲しくもある。どうせ、今のところ新興階級や、既成分子以外に内閣を引受くる實力が養はれておらぬから、又候、どこかのお爺さん連がホク〳〵するのみだ。

◇實力の涵養！われ〳〵は誰も彼も一擧にして堂々と押切る實力を蓄へねばならぬ。いつまでもいつまでもカツフエにさまやう青瓢箪であつてはならぬ。

◇議論だけは一人前たれでもできるやうだが、大膽に默々と自分の力を蓄積するものの少ないことは痛嘆のきわみだ。大局、高處に留意し、既成勢力に蔽ひ微笑みの實力的睨みが利くやうにならねば駄目だ。

◇後藤さんがとうとうなくなつた。年寄では一ばん現代に理解のあつた親みのある人であつたが、全く死ぬまで青年に人氣のあつた人は明治大正を通じて後藤さんと大隈さんだけであつた。我々は深く哀悼の意を表する。

◇紀行文では天下一品の蘇峰氏の『臺灣遊記』が七月號まで三ケ月間登載される。

◇懸賞詩應募は空前の盛況を呈し二千五百に達した。そのうちから三百五十篇を選み、更に再査して十六篇をすぐつた。一等二等の當選者以外に十四篇の傑作もつぎつぎに登載する。この結果は必ずや詩壇に新たなる刺戟を與へることとならふ。

◇日本文學全集の四月配本は「現代日本詩及漢詩集」だ。この集の編輯は今までの全集中我社が尤も苦心したものでその出來榮えは甚誇らしい。五月配本は會員多數の希望を參酌し「吉田絃二郎、藤森成吉集」とする。

◇改造社版『經濟學全集』第七回配本は高橋誠大敎授の快著「經濟學前史」、『マルクス・エンゲルス全集』第八回配本は「剩餘價値學説史」である。

◇『厨川白村全集』の申込はいよ〳〵白熱化し、各卷とも重版又重版の盛況。五月には「文學論」の下卷を配本する。

◇『世界大衆文學全集』第一五回配本は杜翁「カチユウシヤ」とオルツイの「紅はこべ」。

◇それから久しく待たれた大佛氏の「赤穗浪士」下卷も五月四、五日頃に出來のつもりだ

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵税不要
壹ケ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和四年四月十八日 印刷納本
昭和四年五月一日 發行

(特價六拾錢)
(郵税三錢)

東京市芝區愛宕下町四ノ六 編輯兼發行人 山本三生
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一二一二 一二一三 一二一四

高橋龜吉著

明治大正産業發達史

菊判總クロス
脊革天金
七百八十頁

定價六圓
送料卅六錢

最新刊

近來明治大正史の研究が各方面——殊に社會科學の方面に旺んとなり若き學徒は續々此の研究に入り來りつゝある。明治大正時代は日本の資本主義的發展が先達國のそれと著しく異つた諸々の特徴を具へ、我が現在の特殊性を明示し、以て我が國現在及將來の諸政策樹立に貢獻する材料を豐富に含有してゐる。明治大正史の究明により吾々は先達國の經濟事情を基礎材料とする經濟學社會學等の一般的諸學説を日本といふ一個の具體的存在に應用する時如何なる考慮を必要とするかを明らかにするとが出來る。斯の如き研究によつてのみ我學界は外國學説燒直ほしの殻を破る獨創的新學説を生み出すとが出來る。本書は事件と數字を年代順にならべた從來の産業史とは選を異にす。眞の現代日本研究に最も必要な、事象の原因結果を綜合的に研究したもので、高橋氏の學殖と研鑚とによりて、はじめて成し得らるゝ偉著である。

（目次）

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

大正八年二月廿一日第三種郵便物認可

◇新學期◇

帝國六法全書

東京神田 有斐閣發兌
（振替東京三七〇番）

特賣!!

普及版 布裝見出付 定價二・〇〇 特價一・七〇

特製 總革見出付 定價二・五〇 特價二・〇〇

書留 金十 送料 四錢

昭和四年版出づ!!

（特賣期間 自二月十日 至五月二十日）

本書は印刷鮮明・內容豐富・携帶至便の三要素を完備した有名の六法全書である。收むる所、憲法・民法・商法・民事訴訟法・刑法・刑事訴訟法の六大主法竝びに之に關係ある附屬法規百數十件を網羅し、加之全國民の心得置かねばならぬ普選法・陪審法・兵役法等に至る迄採錄され、凡そ世人の必要とする重要法規は殆ど洩れなく蒐錄された無比の寶典である。

◇有名の指定六法!!

各大學・高等學校・中等學校等に於て採用されつゝある……

弊店は今回修正を完了したる本書の發行を機とし、新學期特賣として特に期間を限り生產原價を以て普ねく江湖に頒つ（但期限後は斷然定價に復す）

株式會社秀英舍印刷